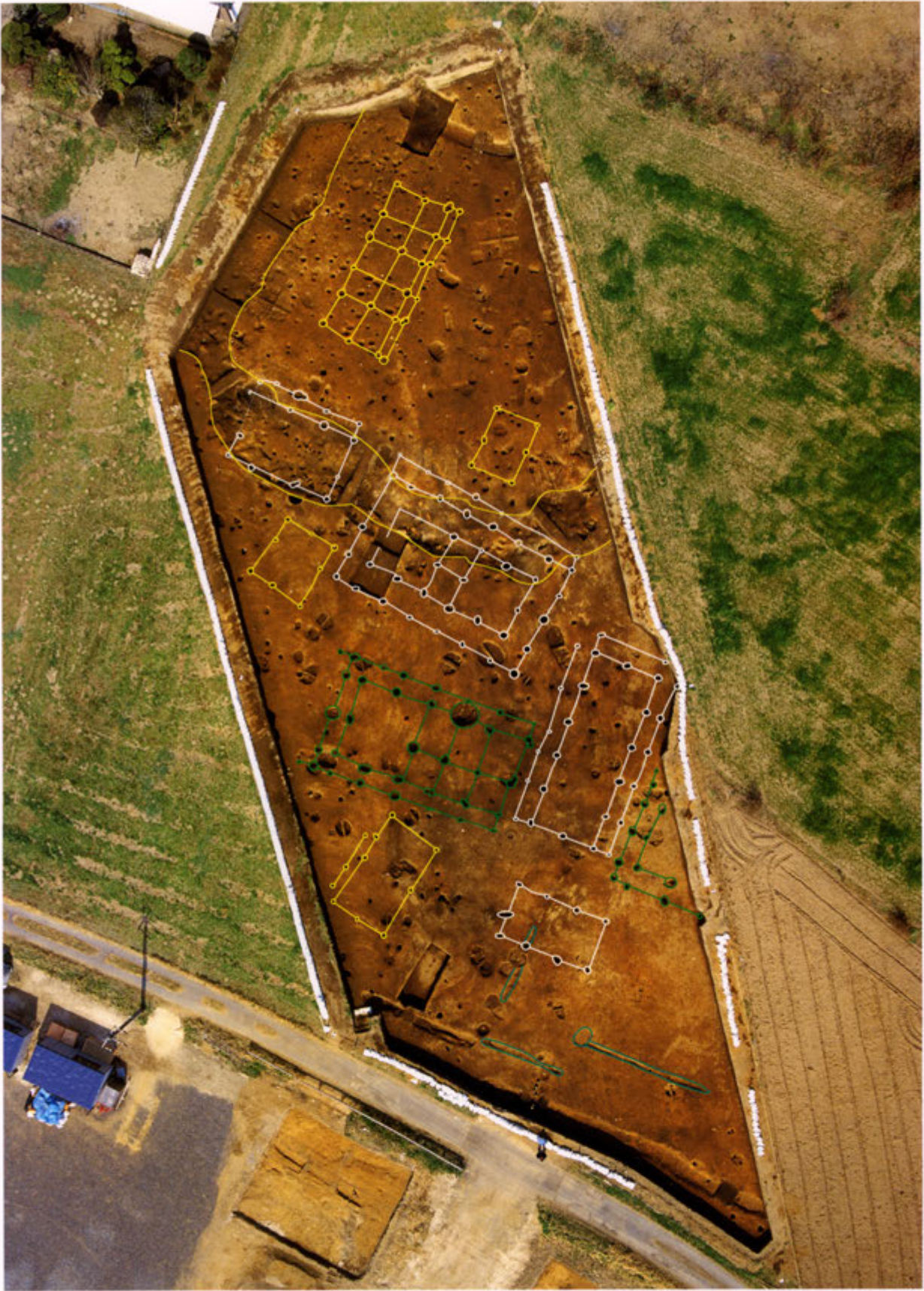


山ノ脇遺跡
石坂遺跡
西原遺跡



2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



山ノ脇遺跡 中世期 遺構配置状況（掘立柱建物跡，溝状遺構）



農具埋納遺構出土遺物

序 文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、平成5年4月より西鹿児島駅緊急整備事業の一環として鹿児島市武遺跡から開始しました。途中、新幹線建設計画の都合により平成6年度から平成7年度までの2年間は発掘調査が中断されましたが、平成11年度からは調査体制規模を拡充し、本格的に緊急発掘調査を実施してきました。そして、平成13年5月末、川内市京田遺跡を最後に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う21か所の発掘調査の全てを終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち、伊集院町に所在する山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

特に、山ノ脇遺跡では中世の時期にこの周辺一帯を治めていた在地豪族が暮らしていた居館群が発見されました。これは当時豪族の権力の一端を示すものとして注目されました。

今回、調査記録第7集として発刊する本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

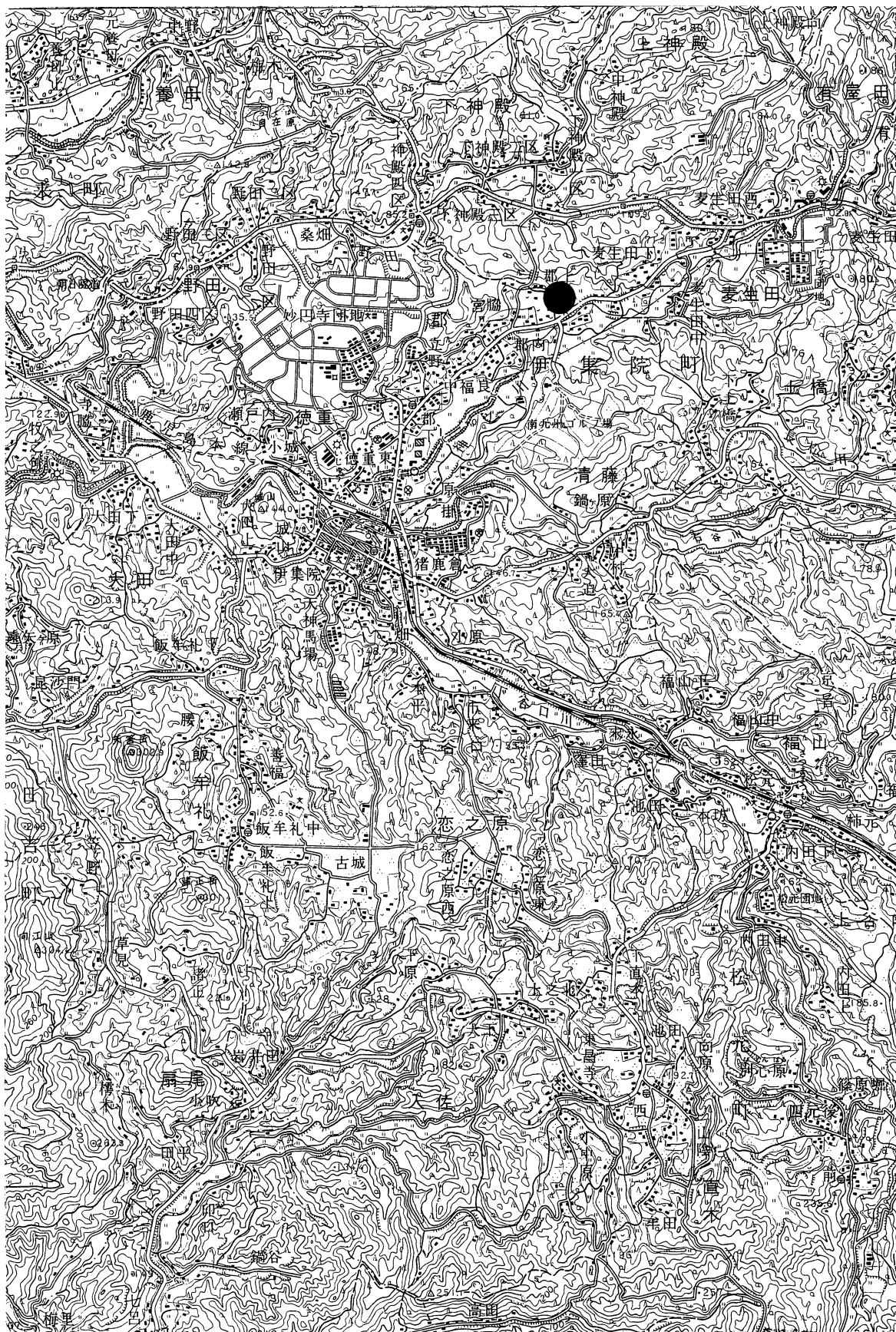
発刊にあたり、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ、ご協力をいただいた伊集院町の関係部局、関係諸機関、そして、調査に参加された方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井上 明文

報告書抄録

書名	やまのわきいせき いしざかいせき にしほらいせき 山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第7集							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	58							
編著者名	八木澤 一郎・松下貴史・東和幸・長崎慎太郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 ☎0995-48-5811							
発行年月日	西暦2003年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		緯度	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
やまのわきいせき 山ノ脇遺跡	ひおきぐん 日置郡 いじゅういんらやう 伊集院町 こおり 郡	463639	1-205	31° 38′ 35″	130° 25′ 02″	1999. 5.6～ 6.30 11.1～	1900㎡	九州新幹線鹿児島 ルート建設
にしほらいせき 西原遺跡		463639	30-58	31° 38′ 37″	130° 24′ 54″	3.28 2000. 5.1～ 11.13		
いしざかいせき 石坂遺跡		463639	30-58	31° 38′ 33″	130° 25′ 12″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山ノ脇遺跡	居館跡	縄文時代 中世	集石遺構・竪穴住居 掘立柱建物跡，竪穴 建物		深浦式土器 土師器，須恵器， 青磁，金属製品		在地豪族居館跡	
西原遺跡	散布地	縄文時代 古代	集石遺構・土坑 焼土土坑		縄文土器，石器 土師器，須恵器			
石坂遺跡	散布地	縄文時代 古代・中世	集石遺構 掘立柱建物跡，焼土		縄文土器，石器 青磁，土師器			



伊集院町石坂・山ノ脇・西原遺跡位置図 (1/50,000)

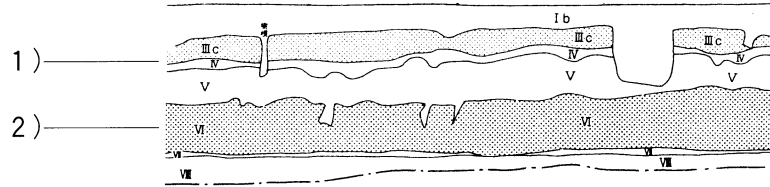
例 言

- 1 本報告書は、平成11年度・平成12年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の受託事業として実施した「九州新幹線鹿児島ルート建設」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のうち、山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
 - 2 調査の組織は、第1章第2節に記した。
 - 3 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。
 - 4 遺物番号は、節ごと（遺跡・時代ごと）の通し番号となっており、本文・挿図・図版での番号は一致する。
 - 5 本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。土器・土製品類・磁器・石器（礫石器）・鉄製品は3分の1縮小を原則とし、石器（剥片石器）はそれぞれの縮尺による。
 - 6 現地での実測は、上之園・八木澤・馬籠・徳田が主に行い、整理作業における実測・製図は、八木澤・東・長崎・松下が主に行った。
ただし、遺構実測の一部は（株）パスコ・（株）埋蔵文化財サポートシステムに、石器実測・製図の一部は（株）国際航業に、遺物分布図の作成は新和技術コンサルタントに委託した。
 - 7 本報告書に使用した写真図版のうち、遺構など現地における撮影を上之園・八木澤・馬籠・徳田が主に行い、遺物撮影については鶴田静彦・横手浩二郎が行った。
 - 8 石坂遺跡における放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析・寄生虫卵分析について
- は（株）古環境研究所に依頼し、その分析結果を第7章に掲載した。
 - 9 磁器については、橋口亘氏（坊津町教育委員会）の御教示を得た。
 - 10 鉄製品については、保存処理を三宅史子・永濱功治が行い、レントゲン撮影を永濱功治が行った。
 - 11 本報告書の執筆・編集は八木澤が行った。
 - 12 各章の執筆は、次のとおり分担して実施した。
第1～3章，第4章第2～4節，第5章第2～4節，第6章第2～4節，第8章第2・3節
八木澤
第8章第1節1 東
第8章第1節2 松下
第4章第1節，第5章第1節，第6章第1節
八木澤（遺構）
東（土器・剥片石器・軽石製品）
松下（礫石器）
遺物観察表作成 長崎・松下
 - 13 出土した遺物は、報告書作成後、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。また、一部は鹿児島県上野原縄文の森展示館で展示中である。

凡 例

1 土層図におけるスクリントーンのパターンは、以下のとおり。

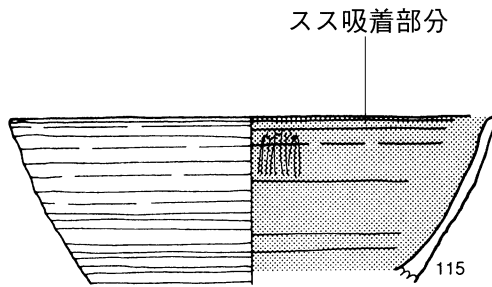
- 1) アカホヤ火山灰堆積土層
- 2) サツマ火山灰堆積土層



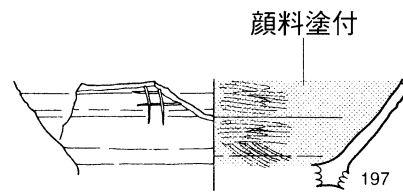
2 古代期土師器におけるスクリントーンのパターンは、以下のとおり。

- 1) 黒色土器スス吸着部分
- 2) 赤色土器顔料塗布部分
- 3) スス付着部分

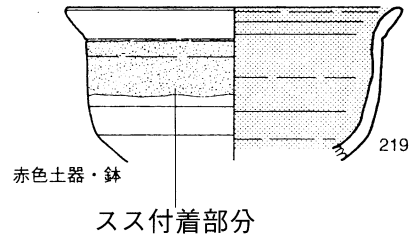
1)



2)

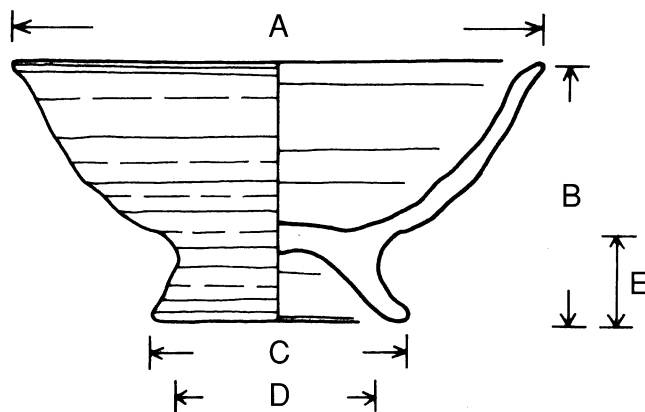


3)



3 古代期土師器の計測か所は、以下の通り。

A 口径, B 器高, C 底径, D 脚基径, E 高台高



目 次

巻頭図版 1, 2	1
序文	5
報告書抄録	6
伊集院町石坂・山ノ脇・西原遺跡位置図 (1/50,000)	7
例言, 凡例, 目次, 挿図目次, 表目次, 図版目次	8~13
第 1 章 調査の経過	
第 1 節 調査に至るまでの経緯	16
第 2 節 調査の組織	16
第 3 節 調査概要	17
第 4 節 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要	21
第 2 章 遺跡の位置と環境	
第 1 節 地理的環境	24
第 2 節 歴史的環境	26
第 3 章 層位	30
第 4 章 石坂遺跡の調査	
第 1 節 縄文時代の調査	38
第 2 節 古代の調査	49
第 3 節 中世の調査	88
第 5 章 山ノ脇遺跡の調査	
第 1 節 縄文時代の調査	94
第 2 節 古墳時代の調査	149
第 3 節 古代の調査	156
第 4 節 中世の調査	165
第 6 章 西原遺跡の調査	
第 1 節 縄文時代の調査	224
第 2 節 古墳時代の調査	247
第 3 節 古代の調査	248
第 4 節 中世の調査	262
第 7 章 石坂遺跡科学的分析の成果	
第 1 節 石坂遺跡における放射性炭素年代測定	275
第 2 節 石坂遺跡における植物珪酸体分析	277
第 3 節 石坂遺跡における花粉分析	285
第 4 節 石坂遺跡における寄生虫卵分析	291
第 8 章 まとめ	292
図版	302

挿 図 目 次

伊集院町石坂・山ノ脇・西原遺跡位置図 (1/50,000)	
第 1 図 石坂・山ノ脇・西原遺跡調査区全体図	18
第 2 図 薩摩半島中部地形図および地形断面図	24
第 3 図 伊集院町および周辺地質図	25
第 4 図 伊集院町内遺跡分布図	29
第 5 図 基本土層図	30
第 6 図 石坂遺跡 土層断面図 (1)	31
第 7 図 山ノ脇遺跡 土層断面図	32
第 8 図 山ノ脇遺跡 土層断面図 (2)	33
第 9 図 西原遺跡 土層断面図 (1)	35
第 10 図 西原遺跡 土層断面図 (2)	36
第 11 図 西原遺跡 土層断面図 (3)	37
第 12 図 石坂遺跡 地形測量図およびグリッド配置図	39
第 13 図 石坂遺跡 縄文時代 検出遺構配置図	40
第 14 図 石坂遺跡 縄文時代 1号集石遺構実測図	40
第 15 図 石坂遺跡 縄文時代 2号集石遺構実測図	41
第 16 図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 1 (土器)	42
第 17 図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物分布図 (石器)	43
第 18 図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 2 (石器 1)	44
第 19 図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 3 (石器 2)	45
第 20 図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 4 (石器 3)	47
第 21 図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 5 (石器 4)	48
第 22 図 石坂遺跡 古代期 検出遺構配置図	49
第 23 図 石坂遺跡 古代期 竪穴状遺構実測図 (1号・2号)	50
第 24 図 石坂遺跡 古代期 掘立柱建物跡実測図	51
第 25 図 石坂遺跡 古代期 ビット列実測図	52
第 26 図 石坂遺跡 古代期 焼土遺構実測図	52
第 27 図 石坂遺跡 古代期 井戸状遺構実測図および出土遺物実測図 1	53
第 28 図 石坂遺跡 古代期 井戸状遺構内出土遺物実測図 2	54
第 29 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 1 (土師器総体)	56
第 30 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 2 (土師器・坏・碗)	57
第 31 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 1 (土師器・坏)	58
第 32 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 2 (土師器・碗 1)	58
第 33 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 3 (土師器・碗 2)	59
第 34 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 4 (土師器・碗 3)	60
第 35 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 5 (土師器・碗 4)	61
第 36 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 6 (土師器・鉢・他)	61
第 37 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 3 (黒色土器)	64
第 38 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 7 (黒色土器 1)	65
第 39 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 8 (黒色土器 2)	66
第 40 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 4 (赤色土器)	69
第 41 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 9 (赤色土器 1)	70
第 42 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 10 (赤色土器 2)	72
第 43 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 5 (土師甕 1)	74
第 44 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 5-1 (土師甕 2)	75
第 45 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 5-2 (土師甕 3)	76
第 46 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 5-3 (土師甕 4)	77
第 47 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 11 (土師甕 1)	78
第 48 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 12 (土師甕 2)	79
第 49 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 6 (須恵器)	81
第 50 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 13 (須恵器・甕 1)	82
第 51 図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図 14 (須恵器・甕 2)	83

第 52 図	石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図15(須恵器・甕 3) ……84	第 106 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図28(石器16) ……146
第 53 図	石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図16(須恵器・甕 4) ……85	第 107 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図29(石器17) ……147
第 54 図	石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図17(須恵器・壺) ……86	第 108 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図30(石器18) ……148
第 55 図	石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図18(越州窯系青磁) ……86	第 109 図	山ノ脇遺跡 古墳時代 検出遺構配置図(溝状遺構) ……149
第 56 図	石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図19(土製品・紡錘車) ……86	第 110 図	山ノ脇遺跡 古墳時代 溝状遺構実測図 ……149
第 57 図	石坂遺跡 中世期 検出遺構実測図(畝間状遺構) ……88	第 111 図	山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図 1 (成川式土器・甕) 151
第 58 図	石坂遺跡 中世期 出土遺物分布図(須恵器・磁器) ……89	第 112 図	山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図 2 (成川式土器・壺 1) 152
第 59 図	石坂遺跡 中世期 出土遺物実測図 1 (土師器・須恵器) ……90	第 113 図	山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図 3 (成川式土器・壺 2) 153
第 60 図	石坂遺跡 中世期 出土遺物実測図 2 (瓦質土器・陶器) ……91	第 114 図	山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図 4 (成川式土器・高坏) 154
第 61 図	山ノ脇遺跡 縄文早期 検出遺構配置図(集石遺構) ……92	第 115 図	山ノ脇遺跡 古代期 出土遺物分布図(土師器・須恵器) ……157
第 62 図	山ノ脇遺跡 地形測量図およびグリッド配置図 ……93	第 116 図	山ノ脇遺跡 古代期 出土遺物実測図 1 (土師器・黒色土器) ……158
第 63 図	山ノ脇遺跡 縄文早期 1号集石遺構および出土遺物実測図 ……94	第 117 図	山ノ脇遺跡 古代期 出土遺物実測図 2 (須恵器) ……159
第 64 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 2号集石遺構内出土遺物実測図…95	第 118 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 1 (全体図) ……161
第 65 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 検出遺構配置図 ……95	第 119 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 2 (20区～18区) ……162
第 66 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 2号集石遺構実測図 ……96	第 120 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 3 (17区～15区) ……163
第 67 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 3号集石遺構実測図 ……97	第 121 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 4 (14区～12区) ……164
第 68 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 4号集石遺構実測図 ……98	第 122 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 5 (第 I 期遺構群) ……165
第 69 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 5号集石遺構実測図 ……99	第 123 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 1 (1号掘立柱建物跡) ……166
第 70 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 竪穴状遺構実測図 ……100	第 124 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 2 (1号掘立柱建物跡柱痕跡実測図) ……167
第 71 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 ブロック検出状況図 ……101	第 125 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 3 (2号掘立柱建物跡柱穴工具痕跡実測図) ……168
第 72 図	山ノ脇遺跡 縄文早期 出土遺物分布図(土器) ……103	第 126 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 4 (2号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図) ……169
第 73 図	山ノ脇遺跡 縄文前期～後期 出土遺物分布図(土器) ……104	第 127 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 5 (3号掘立柱建物跡) ……171
第 74 図	山ノ脇遺跡 縄文後期・晩期 出土遺物分布図(土器) ……105	第 128 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 6 (4号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図) ……172
第 75 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 1 (早期～前期土器) ……106	第 129 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 I 期遺構群遺構実測図 7 (溝状遺構 1・2・3) ……173
第 76 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 2 (深浦式系土器 1) ……107	第 130 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 6 (第 II 期遺構群) ……174
第 77 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 3 (深浦式系土器 2) ……108	第 131 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 II 期遺構群遺構実測図 1 (5号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図) ……175
第 78 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 4 (深浦式系土器 3) ……109	第 132 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 II 期遺構群遺構実測図 2 (6号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図) ……177
第 79 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 5 (深浦式系土器 4) ……110	第 133 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 II 期遺構群遺構実測図 3 (溝状遺構 1・2・4・5) ……178
第 80 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 6 (深浦式系土器 5) ……112	第 134 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 7 (第 III 期遺構群) ……179
第 81 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 7 (深浦式系土器 6) ……113	第 135 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 III 期遺構群遺構実測図 1 (7号掘立柱建物跡) ……179
第 82 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 8 (船元式系土器) ……114	第 136 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 III 期遺構群遺構実測図 2 (8号掘立柱建物跡) ……181
第 83 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 9 (中期～後期土器) ……115	第 137 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 III 期遺構群遺構実測図 3 (9号掘立柱建物跡および10号掘立柱建物跡) ……182
第 84 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図10(晩期土器 1) ……118	第 138 図	山ノ脇遺跡 中世期 第 III 期遺構群遺構実測図 4 (方形区画溝状遺構) ……183
第 85 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図11(晩期土器 2) ……119	第 139 図	山ノ脇遺跡 中世期 集石遺構実測図 ……184
第 86 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図12(晩期土器 3) ……120	第 140 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 8 (竪穴遺構・土坑) ……185
第 87 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物分布図(石器) 1 ……121	第 141 図	山ノ脇遺跡 中世期 竪穴遺構実測図 ……186
第 88 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物分布図(石器) 2 ……122	第 142 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 1 (1～7) ……187
第 89 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物分布図(石器) 3 ……123	第 143 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 2 (8～14) ……188
第 90 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物分布図(石器) 4 ……124	第 144 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 3 (15～22) ……189
第 91 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図13(石器 1) ……126	第 145 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 4 (23～32) ……190
第 92 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図14(石器 2) ……127		
第 93 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図15(石器 3) ……128		
第 94 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図16(石器 4) ……129		
第 95 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図17(石器 5) ……130		
第 96 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図18(石器 6) ……132		
第 97 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図19(石器 7) ……133		
第 98 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図20(石器 8) ……134		
第 99 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図21(石器 9) ……135		
第 100 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図22(石器10) ……140		
第 101 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図23(石器11) ……141		
第 102 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図24(石器12) ……142		
第 103 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図25(石器13) ……143		
第 104 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図26(石器14) ……144		
第 105 図	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図27(石器15) ……145		

第 146 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 5 (33~38) ……191	第 197 図	西原遺跡 古代期 出土遺物実測図 1 (土師器・坏・椀) ……252
第 147 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 6 (39) ……192	第 198 図	西原遺跡 古代期 出土遺物分布図 3 (黒色土器・赤色土器) ……254
第 148 図	山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑39出土遺物実測図 ……193	第 199 図	西原遺跡 古代期 出土遺物実測図 2 (黒色土器・赤色土器) ……255
第 149 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 1 (全遺物) ……195	第 200 図	西原遺跡 古代期 出土遺物分布図 4 (土師甕) ……257
第 150 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 2 (土師器総体) ……196	第 201 図	西原遺跡 古代期 出土遺物実測図 3 (土師甕) ……258
第 151 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 3 (土師器・黒色土器) ……197	第 202 図	西原遺跡 古代期 出土遺物分布図 5 (須恵器) ……260
第 152 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 3 - 1 (土師器・黒色土器) ……198	第 203 図	西原遺跡 古代期 出土遺物実測図 4 (須恵器) ……261
第 153 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 1 (土師器・坏 1) ……199	第 204 図	西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 (全体図) ……263
第 154 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 2 (土師器・坏 2) ……200	第 205 図	西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 (23区~27区) ……264
第 155 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 3 (土師器・坏 3) ……201	第 206 図	西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 (28区~32区) ……265
第 156 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 4 (土師器・坏 4) ……202	第 207 図	西原遺跡 中世期 井戸状遺構および出土遺物実測図 ……266
第 157 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 5 (土師器・小皿) ……203	第 208 図	西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 ……266
第 158 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 6 (黒色土器・坏・小皿) ……204	第 209 図	西原遺跡 中世期 溝状遺構実測図 ……267
第 159 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 7 (繊維土器) ……204	第 210 図	西原遺跡 中世期 出土遺物分布図 (土師器・瓦質土器・須恵器・磁器) ……268
第 160 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 4 (須恵器) ……208	第 211 図	西原遺跡 中世期 出土遺物実測図 1 (土師器・坏・小皿) 270
第 161 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 8 (須恵器) ……209	第 212 図	西原遺跡 中世期 出土遺物実測図 2 (瓦質土器 1) ……272
第 162 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 5 (瓦質土器) ……211	第 213 図	西原遺跡 中世期 出土遺物実測図 3 (瓦質土器 2) ……273
第 163 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 9 (瓦質土器 1・播鉢 1) ……212	第 214 図	西原遺跡 中世期 出土遺物実測図 4 (須恵器) ……273
第 164 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 10 (瓦質土器 2・播鉢 2) ……213	第 215 図	西原遺跡 中世期 出土遺物実測図 5 (磁器) ……273
第 165 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 11 (瓦質土器 3・播鉢 3) ……214	第 216 図	石坂遺跡 古代期 土師器椀 編年案 ……295
第 166 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 12 (瓦質土器 4・鉢) ……215	第 217 図	山ノ脇遺跡 中世期 土師器坏 編年案 ……295
第 167 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 6 (磁器 1) ……217	第 218 図	山ノ脇遺跡 中世期 瓦質土器 編年案 ……298
第 168 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 6 - 1 (磁器 2) ……218		
第 169 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 13 (磁器・青磁 1) ……219		
第 170 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 14 (磁器・青磁 2・白磁) 220		
第 171 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 7 (滑石製品) ……222		
第 172 図	山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 15 (滑石製品・鉢・石鍋) ……223		
第 173 図	西原遺跡 地形測量図およびグリッド配置図 ……225		
第 174 図	西原遺跡 縄文早期 検出遺構配置図 ……226		
第 175 図	西原遺跡 縄文早期 1号集石遺構・2号集石遺構実測図 ……226		
第 176 図	西原遺跡 縄文早期 出土遺物分布図 (土器) ……227		
第 177 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 1 (早期土器) ……228		
第 178 図	西原遺跡 縄文前期~晩期 検出遺構配置図 ……230		
第 179 図	西原遺跡 縄文前期~晩期 検出遺構実測図 (3号集石遺構・1号土坑・2号土坑) ……231		
第 180 図	西原遺跡 縄文前期~晩期 出土遺物分布図 (土器) ……232		
第 181 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 1 (前期~中期土器) ……233		
第 182 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 2 (中期土器) ……234		
第 183 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 3 (後期土器) ……235		
第 184 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 4 (晩期土器) ……236		
第 185 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物分布図 (石器) ……239		
第 186 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 5 (石器 1) ……240		
第 187 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 6 (石器 2) ……241		
第 188 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 7 (石器 3) ……242		
第 189 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 8 (石器 4) ……244		
第 190 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 9 (石器 5) ……245		
第 191 図	西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 10 (石器 6) ……246		
第 192 図	西原遺跡 古墳時代 出土遺物実測図 (成川式土器) ……247		
第 193 図	西原遺跡 古代期 焼土遺構実測図 ……248		
第 194 図	西原遺跡 古代期 検出遺構配置図 ……248		
第 195 図	西原遺跡 古代期 出土遺物分布図 1 (全遺物) ……250		
第 196 図	西原遺跡 古代期 出土遺物分布図 2 (土師器・坏・椀) ……251		

目 次

第 1 表	石坂遺跡縄文土器観察表	42
第 2 表	石坂遺跡石器観察表	45
第 3 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・磨石・磨石類	48
第 4 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・磨石叩石類	48
第 5 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・石皿類	48
第 6 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・砥石類	48
第 7 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期井戸内遺物	54
第 8 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(坏)	58
第 9 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(坏)	59
第 10 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(碗)	62
第 11 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(鉢, その他)	62
第 12 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(黒色坏)	66
第 13 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(黒色碗)	66
第 14 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(黒色碗)	67
第 15 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(赤色坏)	67
第 16 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(赤色碗)	67
第 17 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(赤色碗)	71
第 18 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(赤色)	71
第 19 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器	73
第 20 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期紡錘車	80
第 21 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器(甕)	87
第 22 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器(壺)	87
第 23 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期青磁器(越州窯系青磁)	87
第 24 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器	91
第 25 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・中世期須恵器	91
第 26 表	石坂遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器	91
第 27 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(1)	102
第 28 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(2)	107
第 29 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(3)	111
第 30 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(4)	112
第 31 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(5)	116
第 32 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(6)	117
第 33 表	山ノ脇遺跡縄文土器観察表(7)	120
第 34 表	山ノ脇遺跡石器観察表(1)	131
第 35 表	山ノ脇遺跡石器観察表(2)	136
第 36 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・磨石・磨石類	141
第 37 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・磨石叩石類	144
第 38 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・凹石類	144
第 39 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・台石類	148
第 40 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・石皿類	148
第 41 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・砥石類	148
第 42 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器(甕)	151
第 43 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器(壺)	155
第 44 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器(高坏・その他)	155
第 45 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(坏)	160
第 46 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(皿)	160
第 47 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期(碗)	160
第 48 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期(鉢)	160
第 49 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期(黒色坏)	160
第 50 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(黒色碗)	160
第 51 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器(甕)	160

第 52 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器(坏)	205
第 53 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器(坏)	206
第 54 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器(小皿)	206
第 55 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器(黒色)	206
第 56 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期特殊繊維土器	206
第 57 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期須恵器	207
第 58 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器(播鉢)	214
第 59 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器(播鉢)	215
第 60 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器(鉢)	215
第 61 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期青磁器(碗・浅形碗)	221
第 62 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期磁器(袋物)	221
第 63 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期白磁	221
第 64 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期滑石製品	223
第 65 表	山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期滑石製石錘	223
第 66 表	西原遺跡縄文土器観察表	228
第 67 表	西原遺跡縄文土器観察表	237
第 68 表	西原遺跡石器観察表	238
第 69 表	西原遺跡石器観察表	242
第 70 表	西原遺跡出土遺物一覧表・磨石・磨石類	245
第 71 表	西原遺跡出土遺物一覧表・叩石類	245
第 72 表	西原遺跡出土遺物一覧表・石皿類	246
第 73 表	西原遺跡出土遺物一覧表・砥石類	246
第 74 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器	247
第 75 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器	249
第 76 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器	253
第 77 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(黒色土器・赤色土器)	256
第 78 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(黒色土器・鉢)	256
第 79 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器	256
第 80 表	西原遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器	259
第 81 表	西原遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器(坏)	274
第 82 表	西原遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器(小皿)	274
第 83 表	西原遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器	274
第 84 表	西原遺跡出土遺物一覧表・中世期須恵器	274
第 85 表	西原遺跡出土遺物一覧表・中世期磁器	274

図版目次

図版 1	①遺跡北側風景 ……………303		④山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7) ……………320
	②遺跡北側風景 ……………303		⑤山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 5) ……………320
図版 2	①遺跡東側風景 ……………304	図版 19	①山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 11) ……………321
	②遺跡南側風景 ……………304		②山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 14) ……………321
図版 3	①遺跡南東側風景 ……………305		③山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 15) ……………321
	②調査風景 ③調査風景 ……………305		④山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 19) ……………321
図版 4	①石坂遺跡 B-3 区 1 号集石遺構検出状況 ……………305		⑤山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 25) ……………321
	②石坂遺跡 B-3 区 1 号集石遺構検出状況 ……………306	図版 20	①山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 5) ……………322
	③石坂遺跡 C-2 区土器底部出土状況 ……………306		②山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6) ……………322
	④石坂遺跡 B・C-1・2 区縄文晩期土器出土状況 ……………306		③山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴工具痕検出状況 (P 8) ……………322
	⑤石坂遺跡 B・C-1 区土層断面状況 ……………306	図版 21	①山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7) ……………323
図版 5	①石坂遺跡 C-5 区古代期 2 号竪穴状遺構 1 完掘状況 ……………307		②山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 10) ……………323
	②石坂遺跡 B-4 区古代期 1 号竪穴状遺構 2 完掘状況 ……………307		③山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 26) ……………323
	③石坂遺跡 B-4 区古代期 1 号竪穴状遺構 2 完掘状況 ……………307		④山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 29) ……………323
	④石坂遺跡 B-5 区古代期掘立柱建物跡検出状況 ……………307		⑤山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 31) ……………323
	⑤石坂遺跡 B-3 区Ⅲ a 層 1 号炉跡断面状況 ……………307		⑥山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 30) ……………323
	⑥石坂遺跡 B-3 区Ⅲ a 層 2 号炉跡断面状況 ……………307	図版 22	山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴工具痕半裁状況 (P 30) ……………324
図版 6	①石坂遺跡 B-3 区Ⅲ a 層 1 号・2 号炉跡完掘状況 ……………308	図版 23	①山ノ脇遺跡 2 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 32) ……………325
	②石坂遺跡 C-6 区Ⅱ層井戸状遺構内遺物出土状況 ……………308		②山ノ脇遺跡 4 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 1) ……………325
図版 7	①石坂遺跡 C-6 区Ⅱ層井戸状遺構検出状況 ……………309		③山ノ脇遺跡 4 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 3) ……………325
	②石坂遺跡 C-6 区Ⅱ層井戸状遺構内遺物出土状況 ……………309		④山ノ脇遺跡 4 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4) ……………325
	③石坂遺跡 B・C-4・5 区畝間状遺構検出状況 ……………309		⑤山ノ脇遺跡 4 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6) ……………325
	④石坂遺跡 B・C-4・5 区畝間状遺構断面状況 ……………309	図版 24	①山ノ脇遺跡 4 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7) ……………326
図版 8	石坂遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器) ……………310		②山ノ脇遺跡 4 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 8) ……………326
図版 9	石坂遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器) ……………311		③山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 1) ……………326
図版 10	①石坂遺跡 古代期 出土遺物 (土師器・坏・碗) ……………312		④山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6) ……………326
	②石坂遺跡 古代期 出土遺物 (赤色土器) ……………312		⑤山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴半裁状況 (P 8) ……………326
図版 11	①石坂遺跡 古代期 出土遺物 (黒色土器碗・赤色土器鉢) ……………313		⑥山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 8) ……………326
	②石坂遺跡 中世期 出土遺物 (須恵器) ……………313	図版 25	①山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 9) ……………327
	③石坂遺跡 中世期 出土遺物 (黒色土器) ……………313		②山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 10) ……………327
図版 12	①山ノ脇遺跡北壁土層断面状況 (A-19・20区) ……………314		③山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 17) ……………327
	②山ノ脇遺跡北壁土層断面状況 (A-21区) ……………314		④山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 19) ……………327
図版 13	①山ノ脇遺跡 B-20 区 2 号集石検出状況 ……………315		⑤山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 24) ……………327
	②山ノ脇遺跡 A-21 区 5 号集石検出状況 ……………315		⑥山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 25) ……………327
	③山ノ脇遺跡 A・B-19・20 区 1 号竪穴状遺構検出状況 ……………315	図版 26	①山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 27) ……………328
図版 14	①山ノ脇遺跡Ⅲ a 層石鏃出土状況 (A-21区) ……………316		②山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 29) ……………328
	②山ノ脇遺跡Ⅲ a 層石匙出土状況 (A-21区) ……………316		③山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 31) ……………328
	③山ノ脇遺跡Ⅲ a 層唇式土器出土状況 (A-21区) ……………316		④山ノ脇遺跡 5 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 34) ……………328
	④山ノ脇遺跡Ⅲ a 層深浦式土器出土状況 (A-21区) ……………317	図版 27	①山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4) ……………329
図版 15	①山ノ脇遺跡古墳期溝状遺構完掘状況 (A~C-14区) ……………317		②山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7) ……………329
	②山ノ脇遺跡古墳期溝状遺構完掘状況 (A~C-14区) ……………317		③山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴半裁状況 (P 11) ……………329
	③山ノ脇遺跡Ⅲ層成川式土器出土状況 1 ……………317		④山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 11) ……………329
	④山ノ脇遺跡Ⅲ層成川式土器出土状況 2 ……………317		⑤山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 12) ……………329
図版 16	①山ノ脇遺跡 D-20 区 中世期集石検出状況 ……………318		⑥山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 13) ……………329
	②山ノ脇遺跡 B-14 区 3 号竪穴状遺構検出状況 ……………318		⑦山ノ脇遺跡 6 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 14) ……………329
	③山ノ脇遺跡 B-14 区 3 号竪穴状遺構断面状況 ……………318	図版 28	①山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構完掘状況 ……………330
	④山ノ脇遺跡 B-14 区 3 号竪穴状遺構完掘状況 ……………318		②山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構 1 断面状況 ……………330
図版 17	①山ノ脇遺跡掘立柱建物跡群検出状況 (A~C-12~14区) ……………319		③山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構 2 断面状況 ……………330
	②山ノ脇遺跡掘立柱建物跡群検出状況 (A~C-12~14区) ……………319		④山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構 2 完掘状況 ……………330
図版 18	①山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 2) ……………320	図版 29	①山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構 3 完掘状況 ……………331
	②山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4) ……………320		②山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構 3 断面状況 ……………331
	③山ノ脇遺跡 1 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6) ……………320		③山ノ脇遺跡Ⅲ a 層検出溝状遺構 4 完掘状況 ……………331
		図版 30	①山ノ脇遺跡 8 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 1) ……………332
			②山ノ脇遺跡 8 号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 2) ……………332

	③山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 3)……………	332	図版48	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	350
	④山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7)……………	332	図版49	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	351
	⑤山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4)……………	332	図版50	①山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	352
図版31	①山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 8)……………	333		②山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	352
	②山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 12)……………	333	図版51	①山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物 (土師器・坏・小皿)……………	353
	③山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 5)……………	333		②山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物 (瓦質土器)……………	353
図版32	①山ノ脇遺跡 方形区画溝断面状況……………	334	図版52	①西原遺跡 土層断面状況 (D-31区)……………	353
	②山ノ脇遺跡 方形区画溝断面状況……………	334		②西原遺跡 土層断面状況 (C・D-36区)……………	354
	③山ノ脇遺跡 方形区画溝内遺物出土状況……………	334		③西原遺跡 C・D-26区 4層集石遺構検出状況……………	354
図版33	①山ノ脇遺跡 検出土坑1完掘状況……………	335		④西原遺跡 4層2号集石検出状況……………	354
	②山ノ脇遺跡 検出土坑2完掘状況……………	335	図版53	①西原遺跡 B・C-28・29区Ⅲa層3号集石遺構検出状況……………	355
	③山ノ脇遺跡 検出土坑3完掘状況……………	335		②西原遺跡 B・C-26区 遺物出土状況 (磨製石斧)……………	355
	④山ノ脇遺跡 検出土坑4完掘状況……………	335	図版54	①西原遺跡 C-30区Ⅲb層 検出焼土遺構内遺物出土状況……………	356
	⑤山ノ脇遺跡 検出土坑5完掘状況……………	335		②西原遺跡 C-30区Ⅲb層 焼土遺構検出状況……………	356
	⑥山ノ脇遺跡 検出土坑6完掘状況……………	335		③西原遺跡 C-30区Ⅲb層 検出焼土遺構内土器出土状況……………	356
	⑦山ノ脇遺跡 検出土坑7完掘状況……………	335	図版55	①西原遺跡 検出土坑断面状況……………	357
	⑧山ノ脇遺跡 検出土坑8完掘状況……………	336		②西原遺跡 中世期 井戸状遺構検出状況……………	357
図版34	①山ノ脇遺跡 検出土坑9完掘状況……………	336	図版56	①西原遺跡 白磁碗出土土坑検出状況……………	357
	②山ノ脇遺跡 検出土坑11断面状況……………	336		②西原遺跡 白磁碗出土土坑断面状況……………	358
	③山ノ脇遺跡 検出土坑12断面状況……………	336		③西原遺跡 遺物出土土坑断面状況……………	358
	④山ノ脇遺跡 検出土坑13断面状況……………	336	図版57	西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	359
	⑤山ノ脇遺跡 検出土坑14断面状況……………	336	図版58	西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	360
	⑥山ノ脇遺跡 検出土坑15半裁状況……………	336	図版59	西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	361
	⑦山ノ脇遺跡 検出土坑17完掘状況……………	336	図版60	西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	362
	⑧山ノ脇遺跡 検出土坑20完掘状況……………	336	図版61	西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	365
図版35	①山ノ脇遺跡 検出土坑18断面状況……………	337	図版62	①西原遺跡 古代期 出土遺物 (土師器・黒色土器・赤色土器)……………	364
	②山ノ脇遺跡 検出土坑21断面状況……………	337		②西原遺跡 中世期 出土遺物 (土師器・坏・小皿・瓦質土器)……………	364
	③山ノ脇遺跡 検出土坑23完掘状況……………	337			
	④山ノ脇遺跡 検出土坑27完掘状況……………	337			
	⑤山ノ脇遺跡 検出土坑28完掘状況……………	338			
図版36	①山ノ脇遺跡 検出土坑29完掘状況……………	338			
	②山ノ脇遺跡 検出土坑30完掘状況……………	338			
	③山ノ脇遺跡 検出土坑31完掘状況……………	338			
	④山ノ脇遺跡 検出土坑32完掘状況……………	338			
	⑤山ノ脇遺跡 検出土坑33完掘状況……………	338			
	⑥山ノ脇遺跡 検出土坑34完掘状況……………	338			
	⑦山ノ脇遺跡 検出土坑35完掘状況……………	338			
	⑧山ノ脇遺跡 検出土坑36完掘状況……………	338			
図版37	①山ノ脇遺跡 検出土坑38完掘状況……………	339			
	②山ノ脇遺跡 検出土坑39検出状況……………	339			
	③山ノ脇遺跡 検出土坑39半裁状況……………	339			
	④山ノ脇遺跡 検出土坑39完掘状況……………	339			
	⑤山ノ脇遺跡 検出土坑39完掘状況……………	339			
図版38	山ノ脇遺跡 検出土坑39出土遺物……………	340			
図版39	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	341			
図版40	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	342			
図版41	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	343			
図版42	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	344			
図版43	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	345			
図版44	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)……………	346			
図版45	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	347			
図版46	山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	348			
図版47	①山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	349			
	②山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)……………	349			

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は、九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業予定区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。それを受けて文化課は、平成4年12月に予定地内の分布調査を実施し、21か所の遺跡を確認した。また、西鹿児島駅舎予定地内の武A・B・C遺跡については協議の結果、それぞれ確認調査、緊急発掘調査が進められた。

その後、分布調査に基づいて、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局、県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センターの三者で新幹線ルート内の各遺跡の取り扱いについて協議し、平成8年度から用地取得等条件の整った遺跡から確認調査、緊急発掘調査を実施することとなった。

平成8年度は、出水市鳥越平遺跡の確認調査と川内市大原野遺跡の確認調査を実施し、大原野遺跡では、上下2枚の遺物包含層が確認され、着工前に緊急発掘調査が必要となった。

平成9年度は、川内市大原野遺跡において緊急発掘調査を実施した後、川内市前畑遺跡の確認調査と部分的な緊急発掘調査とを実施した。

平成10年度は、川内市前畑遺跡では前年度未調査部分の緊急発掘調査と、ほか12か所の遺跡について確認調査及び緊急発掘調査を実施した。

伊集院町郡に所在する石坂・山ノ脇・西原遺跡（以後、山ノ脇遺跡ほか、と略す）の発掘調査は、平成11年度当初に確認調査を行った。その結果、古代から中世にかけての時期の遺物包含層が良好に残存することと、一部に縄文時代の層がみられることが確認できた。そこで協議の結果、年度下半期から石坂遺跡、山ノ脇遺跡、西原遺跡と順次、緊急発掘調査を実施した。平成12年度には、前年度未調査であった西原遺跡の一部分と、新たに用地確保がなされた山ノ脇遺跡の一部分とについて緊急発掘調査を実施した。平成14年度は、山ノ脇遺跡ほかの整理・報告書作成作業を県立埋蔵文化財センター内で実施した。

第2節 調査の組織

事業主体者	日本鉄道建設公団九州新幹線建設局				
調査主体者	鹿児島県教育委員会				
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課				
調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所	長	吉永 和人（平成11年度）	
	々	所	長	井上 明文（平成12・14年度）	
調査企画者	々	次	長	黒木 友幸（平成11～12年度）	
	々	次	長	田中 文雄（平成14年度）	
	々	主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋（平成11年度）	
	々	調 査 課 長		新東 晃一（平成14年度）	
	々	主任文化財主事兼調査課長		新東 晃一（平成12年度）	
	々	課長補佐兼第一調査係長		新東 晃一（平成11年度）	

	々	主任文化財主事兼課長補佐	立神 次郎 (平成12・14年度)
	々	主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎 (平成11年度)
	々	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮 久志 (平成12・14年度)
	々	主任文化財主事	彌榮 久志 (平成11年度)
調査担当者	々	文化財主事	上之園建二 (平成11～12年度)
	々	文化財主事	八木澤一郎 (平成11・14年度)
	々	文化財研究員	馬籠 亮道 (平成12年度)
	々	文化財調査員	徳田有希乃 (平成12年度)
	々	文化財調査員	松下 貴史 (平成14年度)
調査事務担当	々	総務係長	有村 貢 (平成11～12年度)
	々	総務係長	前田 昭信 (平成14年度)
	々	主査	今村孝一郎 (平成11～12年度)
	々	主査	脇田 清幸 (平成14年度)
	々	主事	溜池 佳子 (平成11～12年度)
	々	主事	池 珠美 (平成14年度)
現地指導者	奈良国立文化財研究所	集落遺跡研究室長	山中 敏史 (平成11年度)
	鹿児島大学理学部助教授		小林 哲夫 (平成12年度)

なお、平成11年度の緊急発掘調査にあたっては、第2調査係長 彌榮 久志を始め、繁昌正幸、中村和美、黒川忠広、桑波田武志の応援を得て行われた。

第3節 調査概要

1 調査の概要

平成11年度における山ノ脇遺跡ほかの調査はまず、用地買収が成立した場所から順次、22本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。その結果、1,900㎡の範囲において縄文時代早期から古代および中・近世の時期に至る、3枚の包含層が良好に存在することを確認した。また、確認調査において地域ごとに主体となる時期が若干異なる傾向が把握できたため、小字名をとって、神之川側から丘陵地へ向けて、石坂遺跡、山ノ脇遺跡、西原遺跡と名付けた。

年度後半から開始した緊急発掘調査ではまず、建設設計図センター杭112K200m地点を基準に、3遺跡全体に一連の10m四方のグリッドを設定し、石坂遺跡調査区の最も南東側を1区とし、順次丘陵側に向けて2区、3区…と名称を付け、最も丘陵地側にある西原遺跡調査区の最も北西側を37区とした。その結果、1区から7区までの範囲を石坂遺跡、12区から23区までの範囲を山ノ脇遺跡、23区から37区までの範囲を西原遺跡と名付けた。また、建設設計図センターラインから北東側にむけてB区、A区、A'区、A"区(本報告ではB'区とした)とし、センターラインから南西側にむけてC区、D区とし、石坂遺跡から調査を開始した。

調査の成果としては、まず最初に調査を開始した石坂遺跡では、縄文期の集石遺構、古代期の竪穴状遺構や掘立柱建物跡、柱列、炉跡、中世期の畝間状遺構などの遺構が検出された。遺物では古代期に属する越州窯青磁碗や、土師器・黒色土器・赤色土器が多数出土した。石坂遺跡の調査は平成11年



第1図 石坂・山ノ脇・西原遺跡調査区全体図

度に全て終了した。次に調査を開始した山ノ脇遺跡では、中世期の遺構・遺物が多数発見された。遺構では掘立柱建物跡や溝状遺構のほか多数のピットや土坑が検出された。遺物では、土師器や瓦質土器・中国産磁器など多数出土した。さらに西原遺跡では平成11年度に28区から33区にかけての調査を行った。その結果、縄文晩期の集石遺構、古代期の焼土、中世期の井戸状遺構や溝状遺構などの遺構や、古代期の土師器・墨書土器を中心に、縄文時代から中世期までの遺物が発見された。

平成12年度の調査では、前年度に調査ができなかった部分の調査を進めつつ、遺物等の出土状況に応じて、範囲を拡張して、緊急発掘調査を実施した。調査の結果、山ノ脇遺跡では新たに、縄文期の集石遺構や、中世期の掘立柱建物跡や農具埋納遺構などの遺構が検出された。農具埋納遺構は、直径約70cmの土坑中に、鋏先と考えられる鉄製農具や刀子、古銭、陶磁器、挿鉢が一括して出土したものである。また、滑石製石鍋などの出土が見られた。西原遺跡では23区から28区にかけての調査を行い、多数のピットなどの遺構を検出した。

平成14年度は、県立埋蔵文化財センター内において整理・報告書作成作業を実施し、3月末埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行した。

2 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄より略述する。

(1) 平成11年度の調査

- 5月6日 調査開始。備品納入、敷設工事が行われる。調査用具搬入。
- 7日～21日 石坂遺跡・山ノ脇遺跡での範囲確認調査。古代・中世の包含層を確認。
(この間、伊集院町梅落遺跡・鹿児島市武遺跡の範囲確認調査を並行して行う。)
- 6月16日～30日 西原遺跡での範囲確認調査。縄文・古代・中世の包含層を確認。
(この間、鹿児島市武遺跡・伊集院町上ノ平遺跡の範囲確認調査を行う。)
(7月1日～9月28日 この間、鹿児島市武遺跡の緊急発掘調査を行う。)
- 10月1日～15日 石坂遺跡表土剥ぎ開始。(この間、伊集院町上ノ平遺跡の確認調査を行う。)
- 18日～25日 石坂遺跡緊急発掘調査開始。A～C-1～5, D-2～4区調査。越州窯青磁碗出土。
- 11月1日～19日 石坂遺跡調査続行。畝間状遺構・井戸跡検出。土師器・須恵器・磁器出土。
山ノ脇遺跡緊急発掘調査開始。表土剥ぎ・Ⅱ～Ⅲ層調査を行う。
- 22日～26日 山ノ脇遺跡溝状遺構・ピット・土坑検出。土師器・須恵器・磁器出土。
西原遺跡緊急発掘調査開始。表土剥ぎ。
- 12月1日～24日 石坂遺跡検出遺構実測。山ノ脇遺跡 溝状遺構など調査。Ⅲ層調査。成川式土器・縄文晩期土器出土。西原遺跡Ⅱ～Ⅲ層調査。須恵器・磁器・石鏃出土。
- 1月6日～28日 石坂遺跡検出井戸、溝状遺構、掘立柱建物跡実測。Ⅲ層調査。縄文晩期土器出土。
山ノ脇遺跡掘立柱建物跡検出・調査。ピット・溝状遺構調査。
西原遺跡検出ピット・焼土跡および溝状遺構調査。Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層調査。
- 2月1日～28日 石坂遺跡縄文期集石遺構・古代期炉跡・井戸跡調査。土層断面図作成。
山ノ脇遺跡掘立柱建物跡検出・調査。西原遺跡Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層調査。

8～9日 現地指導：

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長 山中敏史
来跡：伊集院町文化財審議員，ラ・サール学園 永山修一氏

3月2日～24日 石坂遺跡縄文層掘り下げ。山ノ脇遺跡掘立柱建物跡調査。Ⅲb層遺物取上。
西原遺跡中世期検出溝状遺構・ピット調査。

10日：航空撮影 ・来跡：佐多町文化財審議員

(2) 平成12年度の調査

5月1日 調査開始。

2日～26日 西原遺跡Ⅲ層調査。縄文期集石遺構，中世期土坑・ピット・井戸状遺構，近
世期溝状遺構調査。(この間，鹿児島市武遺跡緊急発掘調査を平行して行う。)

6月1日～28日 山ノ脇遺跡ピット配置図・土層断面図作成。Ⅲ層調査。

西原遺跡Ⅲ層～Ⅴ層調査。ピット・溝状遺構調査。西原遺跡調査中断。

(この間，鹿児島市武遺跡および伊集院町梅落遺跡の緊急発掘調査を平行して行う。)

7月3日～14日 山ノ脇遺跡ピット・土坑調査。拡張区部分Ⅲ層調査開始。土層断面図作成。

(この間，伊集院町梅落遺跡の緊急発掘調査を平行して行う。)

17日～28日 山ノ脇遺跡拡張区Ⅲ層調査。検出ピット調査。西原遺跡Ⅱ～Ⅲ層調査。

8月1日～28日 山ノ脇遺跡拡張区Ⅰb・Ⅱ層調査。検出中世期ピット，近世期溝状遺構調査。
掘立柱建物跡柱穴工具痕検出，型取りを行う。

西原遺跡拡張区Ⅱ層調査。近世期溝状遺構調査。遺構配置図・土層断面図作成。

9月1日～28日 山ノ脇遺跡拡張区Ⅲ層調査。縄文期集石遺構，中世期ピット・竪穴建物調査。
遺構配置図作成。近世期溝状遺構調査。西原遺跡拡張区Ⅲ層・Ⅳ層調査。検
出ピット調査。(これ以降，伊集院町上ノ平遺跡の緊急発掘調査を平行して行う。)

11日：航空撮影。

10月3日～27日 山ノ脇遺跡 縄文期集石遺構調査。深浦式土器出土。土層断面図作成。拡張区
部分Ⅲ層調査。中世期ピット，農具埋納土坑調査。西原遺跡土層断面図作成。

16日：現地指導：鹿児島大学理学部助教授 小林哲夫。 6日：西原遺跡調査終了。

11月1日～14日 山ノ脇遺跡拡張区部分Ⅱ層・Ⅲ層調査。近世期溝状遺構・井戸状遺構調査。

14日：山ノ脇遺跡調査終了。これ以降，伊集院町上ノ平遺跡の緊急発掘調査へ1本化。

3 発掘調査及び報告書作成作業従事者

(1) 発掘調査作業従事者(平成11年度，平成12年度)

有村 克己	有村ひろみ	池田伊智子	今村 良子	川路 秋江	楠原 操	佐伯イツ子
坂田 重盛	坂元みどり	芝原ハルエ	末吉 裕子	瀬戸 正文	武田 末武	西 ノブ子
田中真由美	永野里枝子	橋口 晶子	花山 尚子	原之園笑子	東 絹子	東 鶴子
平岡 栄子	外園三千代	外園ミネ子	前村 昭己	屋地 暁子	山内 正子	山口 ふみ
増満みき子	益山ヨリ子	松岡 三郎	弓削 一枝	天野 豊子	有馬 幸子	今村 妙子
吉富みどり	吉村より子	宇都 妙子	仮屋 郁夫	川路 秋江	岸上 正子	久保 紀子

園田 辰夫 尾堂佳代美 大内山秋子 高倉 孝子 堀内 朗子 松尾スミエ 南 ノブ子
 宮下 巧 宮下ミキ子 森田 辰夫 山口 節子 茶屋道良子 松山 敬子 脇 マス子
 馬場園七百子

(2) 報告書作成作業従事者 (平成14年度)

鬼塚千代美 川畑 明子 古賀野美智子 坂口千保子 新田 洋美 末原 涼子 西村 順子
 野入 和子 林 由美子 福永 広美 小倉 洋子 川畑裕美子 長井真理子 前原 康子
 松下奈津美 吉留ゆかり 大保 裕子 細田 保子 瀬戸山三重子

第4節 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は、平成5年5月12日より鹿児島市武遺跡から開始し、平成13年5月30日川内市京田遺跡で全てを終了した。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、一覧表のとおりである。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

番	遺跡名	所在地	調査機関	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2～3 H11.3.2～4 計5日間	240㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期 縄文前期	塞ノ神式、轟式、磨製石斧、黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H 8.8.5 計1日間	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鏡・安原	出水市安原町	H11.2.17,18 H11.2.24,25 H11.3.9 計5日間	60㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器、黒曜石、土師器
4	榎木田 見入来 大 坪	出水市美原町	H11.1.5～3.9 H11.5.6 ～12.3.31 H12.5.1 ～13.3.27 計420日間	27,247㎡	彌榮久志 前田 誠 濱崎一富 東 和幸 高岡和也 上床 真 森田裕之	縄文晩期 平安時代 鎌倉時代	縄文晩期埋設土器38基、平安期竈付竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡9棟、焼土遺構3基、溝状遺構30条、波板状遺構27条、上加世田式、入佐式、黒川式、土師器、須恵器、玉縁白磁、滑石製石鍋、鉄製品刻書土器、石鏃、磨製石斧、打製土掘り具、石匙、石皿、磨石、凹石、異形石器玉類(勾玉6、管玉25、丸玉5、平玉3、垂飾品1、剥片46、未製品30)
5	宮野脇	出水市上鱈淵	H11.2.19 H12.2.20 計2日間	48㎡	彌榮久志 前田 誠 東 和幸	時代不明	包含層確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H 8.8.6 計1日間	12.5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計3日間	108㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期	土器、黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H 9.11.1～ H10.3.31 H10.5.6～ H12.12.24 H11.12.13～ H12.2.24 計195日間	11,800㎡	長野真一 上床 真 彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀男	旧石器時代 縄文早期 縄文前期 縄文後期 中世 近世	土坑25(陥し穴含)基、集石4基、竪穴状遺構1基、五輪塔、大型掘立柱建物跡7軒、ナイフ形石器、細石刃核、吉田式、石坂式、轟式、石鏃、石斧、石皿、磨石、敲石、土師器、青磁、白磁、染付薩摩焼。

番	遺跡名	所在地	調査機関	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1～8.27 H12.5.23 ～H13.3.26 計218日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡5棟，土壙墓3基，円形周溝状遺構1基，土坑5基，中世掘立柱建物跡2棟，古道，溝状遺構，早期押型文土器，後期の土器，磨製石鏃，打製石斧，錐，ピエス，スクレイパー，磨石，石皿，石匙，石鏃，砥石，土師器，須恵器，瓦，青磁，白磁，滑石製品，刀子，青銅製品，紡錘車。
10	京田 (薩摩国分寺下)	川内市中郷町	H11.6.1～20 H12.5.8～6.6 H12.9.4 ～H13.3.24 H13.4.9～5.31 計191日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期 平安時代 中世 近世	弥生期水田跡，土留め状遺構，杭列，ウケ跡，ドングリピット，古代水田跡，弥生土器，三又鍬，二又鍬，瓦大足，一本梯子，横架材，網杵，曲物，土師器，須恵器。
11	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6 ～H12.3.24 H12.5.7 ～H13.3.19 計275日間	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡4軒，土坑1基，古墳期竪穴住居跡1軒，平安期竪穴住居跡31軒（竈付2軒），掘立柱建物跡2棟，土壙墓1墓，中世竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡1棟，畠跡，弥生期甕・壺，石包丁，磨製石鏃，古墳期成川式，須恵器，太刀，剣，鉄鏃，平安期土師器，須恵器，瓦，越州窯青磁，緑釉，陶器，転用硯，帯金具，石製丸鞆，玉類，土錘，金環，青銅製鈴，鉄製品。
12	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1～9.27 H12.5.9～6.15 H12.9.1 ～12.27 計103日間	2,850㎡	彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基，土坑2基，竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡4棟，畠跡，炉跡7基，越州窯系青磁，陶器壺，土師器，鉄滓，古銭，中世青磁，鉄製品（鎌鋤先，紡錘車，鉄鏃），近世薩摩焼，平佐焼，伊万里焼，土師器，羽口，鉄滓。
13	楠元 城下	川内市百次町	H10.9.17～30 H10.11.4～24 H11.9.2～12.6 H11.5.6～11.8 計209日間	1,800㎡	彌榮久志 前田 誠 川口雅之	縄文後期 弥生 古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡2軒，炉跡2基，土坑12基，溝7条（杭列を伴う溝1条）縄文期押型文・市来式・西平式・北久根山式，弥生～古墳期土器，木製平鍬，又鍬，横鍬，鍬の柄，掘り棒，丸木弓，容器（未製品），櫛状木製品。
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1～3.24 H12.5.1 ～H13.3.29 計316日間	19,400㎡	前田 誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡30棟，土壙墓3基，方形竪穴建物跡5軒，溝4条，古道1条，畠跡，剥片尖頭器，ナイフ形石器，押型文，石坂式，阿高式，土師器，石皿，敲石，凹石，石鏃，土師器，須恵器，白磁，青磁，短刀，古銭，滑石製石鍋，中世陶器，鉄鏃。

番	遺跡名	所在地	調査機関	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
15	大原野	川内市百次町浦田	H 8.10.1～29 H 9.11.1 ～H10.3.31 計171日間	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生 誠 上床 真	旧石器 縄文早期 縄文前期	ナイフ形石器, 細石器, 吉田式, 石坂式, 条痕土器, 轟式, 石鏃, 石皿, 磨石, 敲石, 石斧。
16	東下原	日置郡東市来町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日間	248㎡	彌榮久志 前田 誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑, 細石刃核, 成川 式, 土師器。
17	上ノ平	日置郡伊集院町 下神殿四区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14 ～H13.3.29 計92日間	2,328㎡	彌榮久志 前田 誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒, 集石4基, 中世溝1条, 細石刃核, 指宿式, 磨製石斧, 石鏃。
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1 ～H12.3.24 H12.5.1～11.13 計184日間	1,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創期 縄文早期 縄文中期 古墳 中世	集石: 草創期1基, 早期3基, 中 期3基中世溝, 農具埋納土坑, 掘 立柱建物跡12棟, 縄文早期土器, 船元式, 成川式, 土師器, 陶磁器(中 国南部), 滑石製石鍋。
19	梅落	日置郡伊集院町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19～7.14 計24日間	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石, 塞ノ神式, スクレイパー。
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
21	武ABC 寿国寺跡	鹿児島市武一丁目 鹿児島市武二丁目	H 5.4.12～5.25 H 5.5.21～7.2 H 5.12.6 ～H 6.2.21 H 6.3.9～30 H11.5.24～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日間	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文前期 縄文中期 弥生中期 近世	古墳住居跡27軒, 土坑18基, 溝2条, ピット30, 近世溝9条, 轟式, 深浦 式, 春日式, 船元式, 山之口式, 成川式, 陶器, 磁器, 瓦, 木製品, 金属製 品, 寿国寺跡のはん池(門前池) 跡, 土塙。
22	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日間	22㎡	彌榮久志 前田 誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

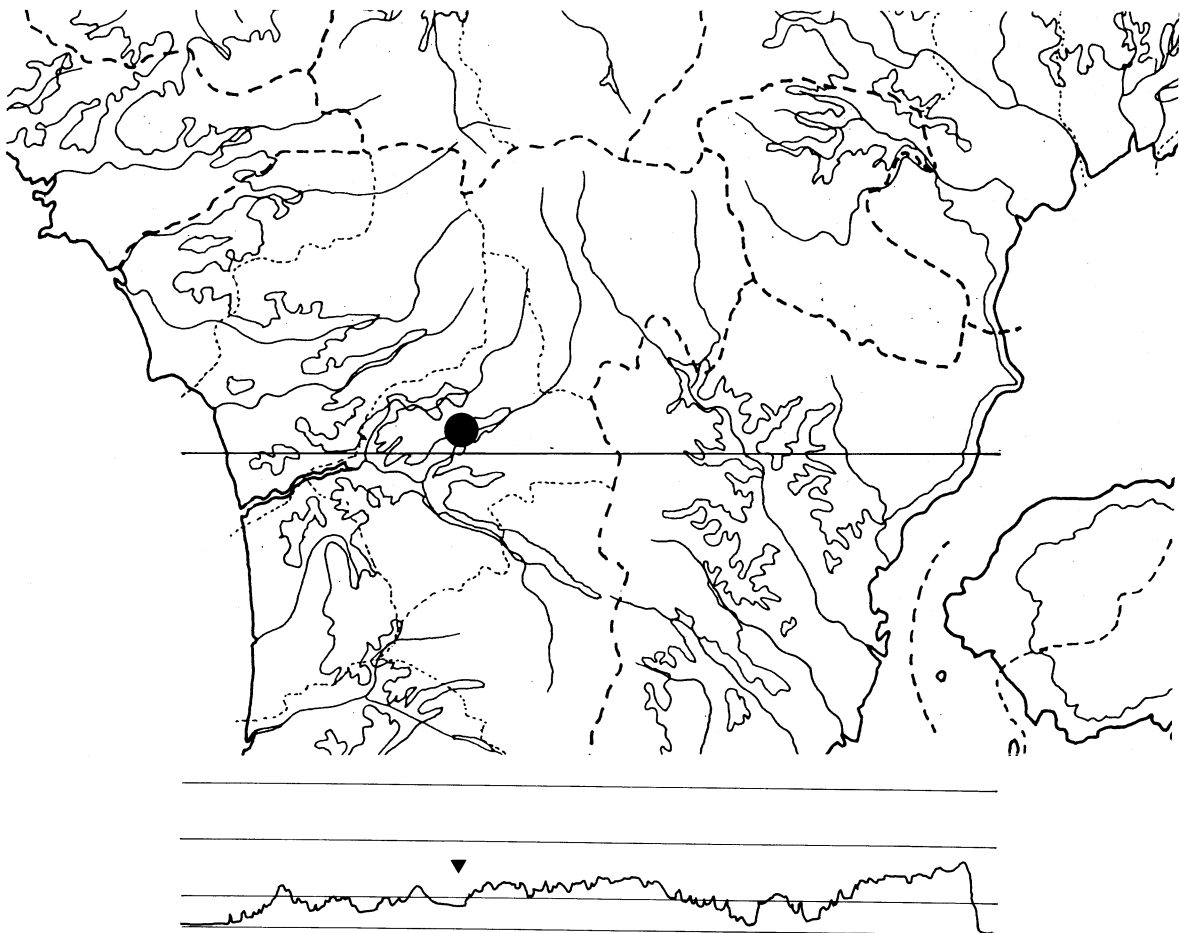
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石坂・山ノ脇・西原遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町大字郡に所在する。遺跡が所在する伊集院町は、薩摩半島のほぼ中央に位置し、標高の低い地峡部を占める。東は鹿児島市、南は松元町、西は日吉町、北は東市来町・郡山町と接し、その地理的位置から日置郡の中心地として発達してきた。

また町内を、熊本・福岡とを結ぶ鹿児島本線、国道3号線などの交通の大動脈が通るうえ、全線が開通したおりに鹿児島市と熊本県八代市を結ぶことになる南九州西回り自動車道には町中心地に伊集院インターチェンジが設置され、近年さらに交通の要衝としてその重要性を増している。また、九州新幹線鹿児島ルートが町内を通過することは、鹿児島市と薩摩半島東海岸とを結ぶ際の地理的要地としての証である。

また伊集院町の地形は、北部には重平山(523.1m)が、西南部には矢筈岳(302.9m)や諸正岳(301.4m)などがあり、周囲を山地に囲まれる。これらの山地を除くと大部分は、海拔標高150m前後の丘陵地帯と、これらの丘陵に囲まれた標高70~80mの盆地帯(谷底平地)と、丘陵地と盆地の境に多くみられる崖地とで構成されている。これらの丘陵地は、始良カルデラの噴火により噴出したシラスが堆積してできた台地が、町内を北側から南西側へ流れる神之川本流やその支流の野田川・下谷



第2図 薩摩半島中部地形図および地形断面図

口川・長松川などによって、開析され形成された地形である。この地形のため、丘陵地と盆地の境で見られる崖地は、湧水地点であることが多くなっている。現在、伊集院町の市街地は、流域に形成された河岸段丘により開けた盆地帯（谷底平地）部に広がっている（第2図）。

ところで伊集院町の地質的特徴としては、北部の重平山と町中心部の徳重地区南西部が輝石安山岩からなるのに対して、南西部の矢筈岳や諸正岳などの山地は中生代の四万十層に属する砂岩と頁岩の互層からなること、さらに町の大部分を占める、それ以外の台地はシラスで構成されることが挙げられる。これまで示した、海に面せず盆地状地形であるという地形的特徴から、伊集院町はやや内陸的気候で、冬季の冷え込みの厳しさが特徴として挙げられる（第3図）。

石坂・山ノ脇・西原遺跡は、この神之川本流により形成された河岸段丘で開けた標高約80～90mの平地部にあり（第2図）、神之川沿いに河口部まで約8.5 km、甲突川を經由して鹿児島市（鹿児島湾）まで18.5 kmを測る。神之川の川沿いから丘陵部側に向けて、河川際の低地部に広がる石坂遺跡、平地部に広がる山ノ脇遺跡、丘陵部下に広がる西原遺跡があり、遺跡が連綿と続いている状況が見られる。石坂遺跡に隣接する地には諏訪免遺跡が広がることが知られ、また神之川対岸の河岸段丘上には梅落遺跡が立地しており、神之川の川沿いから丘陵部にかけての地は、占居するうえで良好な地であったことが窺える。

第2節 歴史的環境

伊集院町で最も古い時期の遺跡には、ナイフ形石器や三稜尖頭器などナイフ形石器文化期の遺物が出土した永迫平遺跡（下谷口）や大田城遺跡（大田）、瀬戸頭A～C遺跡（竹之山）等がある。旧石器時代の終わり頃になる細石器文化期には隣接する松元町仁田尾に広い範囲で遺物が分布する九州最大級の遺跡が存在するが、伊集院町でも瀬戸頭A・B遺跡や竹之山B遺跡・松ヶ迫遺跡（竹之山）などの遺跡で同時期の石器が出土し、竹之山B遺跡ではおとし穴も発見されている。

縄文時代草創期にも瀬戸頭遺跡や隣接する鹿児島市竹之山、松元町仁田尾などの遺跡で、土器や石器が出土している。早期では永迫平遺跡で竪穴住居跡9軒、連穴土坑3基、集石遺構12基、道跡などが発見され、初期の定住集落の存在が確認された。これと同じ時期の集落は大田に所在する上山路山遺跡では、道跡や集石遺構などが発見されている。また大田城遺跡でも土坑・集石遺構が発見されている。これらの集落より一段階古い時期に赤色顔料が塗られた全国でも珍しい土器が県内数か所で発見されているが、伊集院町でも稲荷原遺跡（恋之原）や上山路山遺跡で発見されている。早期後半になると遺跡数は少なくなり、この傾向は弥生時代・古墳時代まで続くが、遺跡では稲作伝来初期の土器である縄文時代晩期後半の時期の夜臼式土器が低地で出土している。

古代になると伊集院町は薩摩国日置郡に属すると考えられている。なかでも郡家所在地によく見られる「郡」の字がある伊集院町郡は日置郡家所在地の可能性も考えられている。郡地内では今回の山ノ脇や梅落遺跡の他に西原遺跡などで古代の遺物が発見されており、今後の調査が注目される。このような遺跡の他にも、柳原遺跡（下谷口）では土坑・溝などに伴って多くの土師器・須恵器が出土しており、その中には内面や外面に丹が塗られた内赤土器や赤色土器も多く、墨書土器も含まれている。

中世になるとこの地域は、大隅正八幡領と大前氏（12世紀初頭～後半）、紀姓伊集院氏（12世紀後半～14世紀半ば）、島津荘島津氏、地頭（伊集院）島津氏、などが各々の土地を所有し、また、その

所有をめぐって、幾たびかの抗争を繰り返していたようである。この時期に作成された「建久凶田帳」には、伊集院町内の地名が多く記されている。その中で山ノ脇遺跡などが所在する大字郡は紀姓伊集院氏が治める国衙領に属する「末永」に比定する説がある。

14世紀以降15世紀にかけて、南北朝時代には南朝方についた、地頭職伊集院島津氏が、守護職島津氏と対立しながら、伊集院での支配を強化したといわれる。また『李朝実録』によると、伊集院島津氏は李氏朝鮮との交易を積極的に行い、経済力を背景とした強大な勢力を誇ったようである。

ところが15世紀半ばに、伊集院島津氏が滅亡すると、以後伊集院は守護職島津氏が支配することとなった。15世紀代の守護職島津氏は、対外交易を重視したようである。

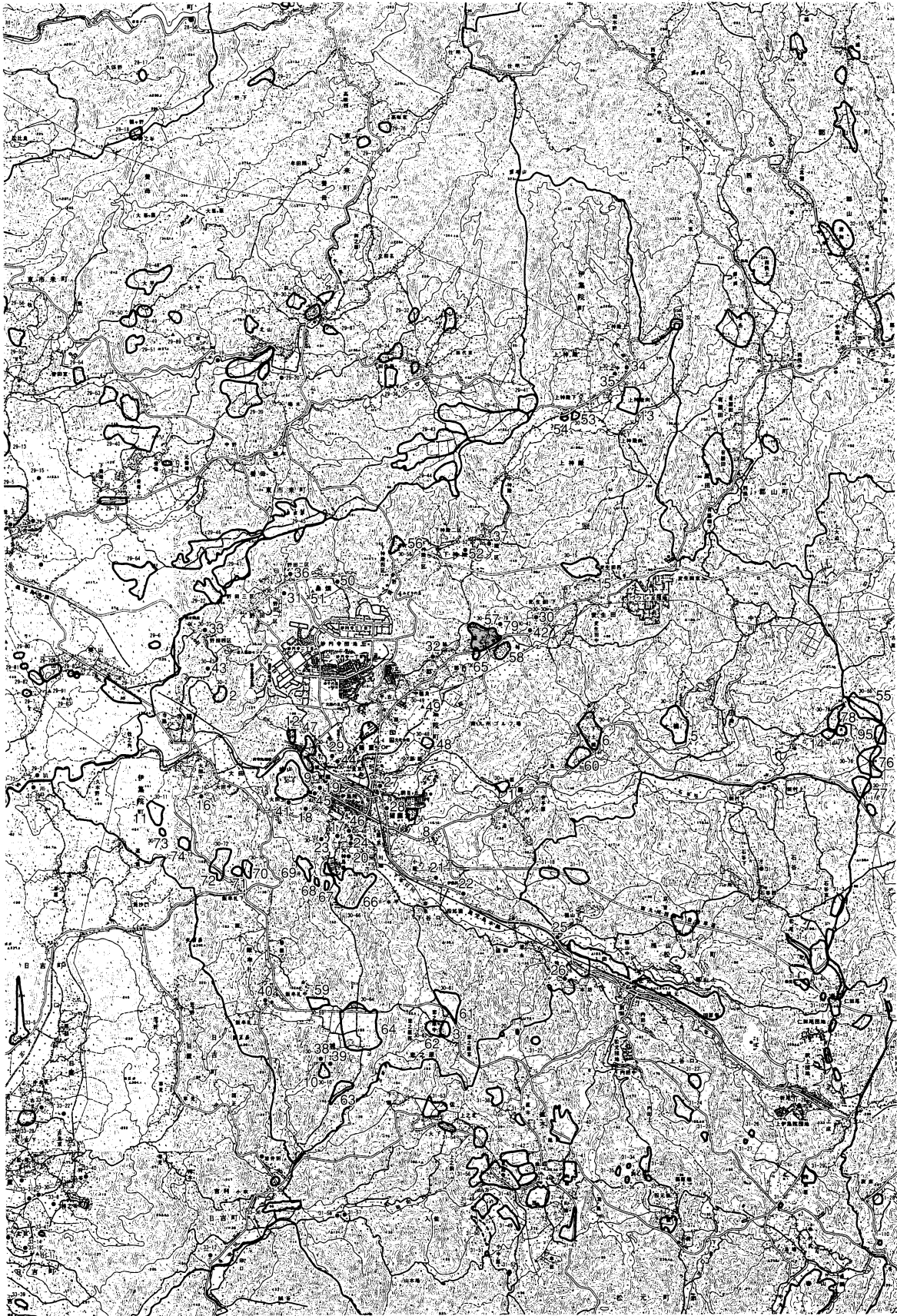
15世紀末になると、守護職島津氏の分家などが各地で所領の拡大に努め始め、16世紀における戦国時代の幕開けとなる様相を示し始め、伊集院はその歴史において表舞台に立つこととなる。

こうした時期の山城のひとつに一字治城がある。この山城は大きく4つの郭郡からなり、その基に多くの郭が造られており、郭間には数多の空堀が掘られていた。また郭の隅に土累が構築され、井戸が掘られる例が多数発見されている。調査によって発見されている。この城は後に島津貴久の居城となり、ザビエルと会談した地としても知られている。他にも内城・大内山城・神殿城などの山城がある。

伊集院町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
30-1-0	鍋倉	鹿児島県日置郡伊集院町清藤鍋倉	台地	縄文	角形土器（前平式？）	畑に土器片散布
30-2-0	寺脇	鹿児島県日置郡伊集院町寺脇楠牟礼	台地 <small>（海畔段丘）</small>	貝殻条痕文	弥生土器	
30-3-0	恋之原	鹿児島県日置郡伊集院町恋之原	台地	縄文		
30-4-0	郡	鹿児島県日置郡伊集院町郡	低地	石器	壺形土器・坏	
30-5-0	土橋クイノハイ	鹿児島県日置郡伊集院町土橋クイノハイ（尾堂部落南側台地）	台地		磨製石斧	
30-6-0	下土橋	鹿児島県日置郡伊集院町下土橋	台地		磨製石斧	
30-7-0	前迫	鹿児島県日置郡伊集院町土橋竹山部落前迫熊野神社	台地		磨製石斧	
30-8-0	猪鹿倉	鹿児島県日置郡伊集院町猪鹿倉141-1	低地		磨製石斧（大・小石斧）	昭和58年5月発掘調査
30-9-0	一字治城跡	鹿児島県日置郡伊集院町大田	丘陵	中世（鎌倉初）		伊集院郡可紀四部時清がここに館を構えたのが本城の起り
30-10-0	内城跡	鹿児島県日置郡伊集院町古城	山地	弘安年間		別称「平城」、島津忠経の8男従房俊忠が城を築く
30-11-0	大田城跡	鹿児島県日置郡伊集院町大田下城山迫	丘陵	中世	別称「時吉城」	
30-12-0	大内山城跡	鹿児島県日置郡伊集院町小城	山地	中世	別称「小城」	
30-13-0	神殿城跡	鹿児島県日置郡伊集院町上神殿段	山地	中世	城	壕等今も残している
30-14-0	長崎城跡	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山	山地	中世		
30-15-0	麦生田城跡	鹿児島県日置郡伊集院町麦生田	山地			
30-16-0	報恩寺跡	鹿児島県日置郡伊集院町大田中	低地		五輪塔・宝塔外	
30-17-0	竜泉寺跡	鹿児島県日置郡伊集院町天神馬場	低地		五輪塔・宝塔外	
30-18-0	雪窓院跡	鹿児島県日置郡伊集院町城山	山腹		五輪塔・無縫塔	
30-19-0	円通墓地	鹿児島県日置郡伊集院町城山	低地		五輪塔・宝塔外	
30-20-0	長寺庵跡	鹿児島県日置郡伊集院町天神馬場	低地		五輪塔外	
30-21-0	破鞋墓地	鹿児島県日置郡伊集院町向江	低地		五輪塔・宝塔外	
30-22-0	梅岳寺墓地	鹿児島県日置郡伊集院町四郎園	台地		五輪塔・宝塔外	日新妻女の墓
30-23-0	未穩寺境内	鹿児島県日置郡伊集院町天神馬場	山腹		無縫塔	
30-24-0	下谷口	鹿児島県日置郡伊集院町下谷口松田宅	低地		五輪塔	
30-25-0	末永	鹿児島県日置郡伊集院町窪田郵便局前	低地		五輪塔・相輪	
30-26-0	末永	鹿児島県日置郡伊集院町末永八幡神社横	山地		五輪塔・宝塔外	税所義祐の墓とその一族？
30-27-0	莊厳寺墓地	鹿児島県日置郡伊集院町猪鹿倉	低地		五輪塔・外石地藏	
30-28-0	葉師堂跡	鹿児島県日置郡伊集院町猪鹿倉	低地		五輪塔・宝塔	
30-29-0	妙円寺墓地	鹿児島県日置郡伊集院町徳重	山地		五輪塔・宝塔外	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
30-30-0	宮下墓地	鹿児島県日置郡伊集院町麦生田宮下墓地	山地		宝塔・相輪	
30-31-0	殿ん墓	鹿児島県日置郡伊集院町野田	低地		五輪塔	
30-32-0	九玉神社	鹿児島県日置郡伊集院町郡	低地		五輪塔	
30-33-0	法泉寺跡	鹿児島県日置郡伊集院町野田	低地		五輪塔・無縫塔	
30-34-0	じょがんどん境内	鹿児島県日置郡伊集院町上神殿上	山地		五輪塔	
30-35-0	金吾神社裏	鹿児島県日置郡伊集院町上神殿中	山地		宝塔	
30-36-0	桑畑	鹿児島県日置郡伊集院町桑畑	山地		五輪塔・相輪	
30-37-0	ゴアン寺跡	鹿児島県日置郡伊集院町下神殿鶴丸	低地		五輪塔	
30-38-0	大山神社境内	鹿児島県日置郡伊集院町古城	台地		五輪塔	
30-39-0	松尾城の麓	鹿児島県日置郡伊集院町古城	台地		五輪塔・相輪	
30-40-0	熊野神社境内	鹿児島県日置郡伊集院町飯牟礼	低地		五輪塔・宝塔	
30-41-0	大知跡	鹿児島県日置郡伊集院町大田上	台地		五輪塔・無縫塔	
30-42-0	平等寺跡	鹿児島県日置郡伊集院町麦生田山下42	小丘	中世	入定窟・石塔	(町) 昭和50.7.21
30-43-0	円福寺墓地群	鹿児島県日置郡伊集院町寺脇浦ノ内663	小丘	中世	伊集院忠国夫婦の墓	(町) 昭和40.10.12
30-44-0	石谷高久の墓	鹿児島県日置郡伊集院町徳重	低地	中世		(町) 昭和46.7.21
30-45-0	本田兄弟の墓	鹿児島県日置郡伊集院町荒瀬	低地	近世		(町) 昭和46.7.21
30-46-0	有馬新七の墓	鹿児島県日置郡伊集院町天神馬場	低地	近世		(町) 昭和40.10.1
30-47-0	小城跡	鹿児島県日置郡伊集院町徳重字小城	台地	中世	中世城館跡	
30-48-0	黒木田	鹿児島県日置郡伊集院町郡字黒木田	台地	奈良～平安	土師器	昭和62年分布調査
30-49-0	後宮田	鹿児島県日置郡伊集院町麦生田字後宮田	台地	奈良～平安	土師器	昭和63年分布調査
30-50-0	小竹下	鹿児島県日置郡伊集院町桑畑字小竹下	低地	古墳	土器片	昭和63年分布調査
30-51-0	塔ノ原	鹿児島県日置郡伊集院町野田字塔ノ原		歴史	五輪塔	昭和63年分布調査
30-52-0	宮田	鹿児島県日置郡伊集院町下神殿字宮田	低地	古墳	土器片	昭和63年分布調査
30-53-0	六反田	鹿児島県日置郡伊集院町上神殿	台地	古墳～中世	土器片	平成2年分布調査
30-54-0	寺前	鹿児島県日置郡伊集院町上神殿	台地	古墳～中世	土器片	平成2年分布調査
30-55-0	瀬戸頭	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山	台地	旧石器、縄文、中世	土器片	平成2年分布調査
30-56-0	上ノ平	鹿児島県日置郡伊集院町下神殿	丘陵			平成4年新幹線分布調査
30-57-0	山ノ脇	鹿児島県日置郡伊集院町郡山ノ脇・西原・石坂	台地	奈良、平安、中世	須恵器・青磁・土師器	平成4年新幹線分布調査
30-58-0	梅落	鹿児島県日置郡伊集院町郡	台地	奈良、平安、中世	須恵器・青磁・土師器	平成4年新幹線分布調査
30-59-0	中島堀	鹿児島県日置郡伊集院町飯牟礼	台地	縄文(早)、中世	土器片・土師器	
30-60-0	錠ノ谷	鹿児島県日置郡伊集院町下土橋		古代		平成7年農政分布調査
30-61-0	上稲荷原	鹿児島県日置郡伊集院町恋之原		古墳、古代		平成7年農政分布調査
30-62-0	稲荷原	鹿児島県日置郡伊集院町恋之原	台地	縄文(早・晩)、古墳、古代		平成7年農政分布調査
30-63-0	堂ノ迫	鹿児島県日置郡伊集院町古城		中世		平成10年農政分布調査
30-64-0	七反畠	鹿児島県日置郡伊集院町古城		古墳		平成10年農政分布調査
30-65-0	諏訪免	鹿児島県日置郡伊集院町麦生田		縄文		平成11年発掘調査
30-66-0	永迫平	鹿児島県日置郡伊集院町		縄文		西回り自動車道分布調査
30-67-0	下永迫A	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-68-0	下永迫B	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-69-0	柳原	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-70-0	道祖瀬戸	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-71-0	狩待迫	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-72-0	上山路山	鹿児島県日置郡伊集院町		縄文、古墳		西回り自動車道分布調査
30-73-0	木場田	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-74-0	敷田尾	鹿児島県日置郡伊集院町				西回り自動車道分布調査
30-75-0	瀬戸頭A	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山		旧石器、縄文		平成8年県道分布調査
30-76-0	瀬戸頭B	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山		旧石器、縄文		平成8年県道分布調査
30-77-0	瀬戸頭C	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山		旧石器、縄文		平成8年県道分布調査
30-78-0	竹之山	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山		縄文		分布調査
30-79-0	石坂	鹿児島県日置郡伊集院町郡字石坂	低地	縄文、古墳		平成10年発掘調査



第 4 図 伊集院町内遺跡分布図

第3章 層位

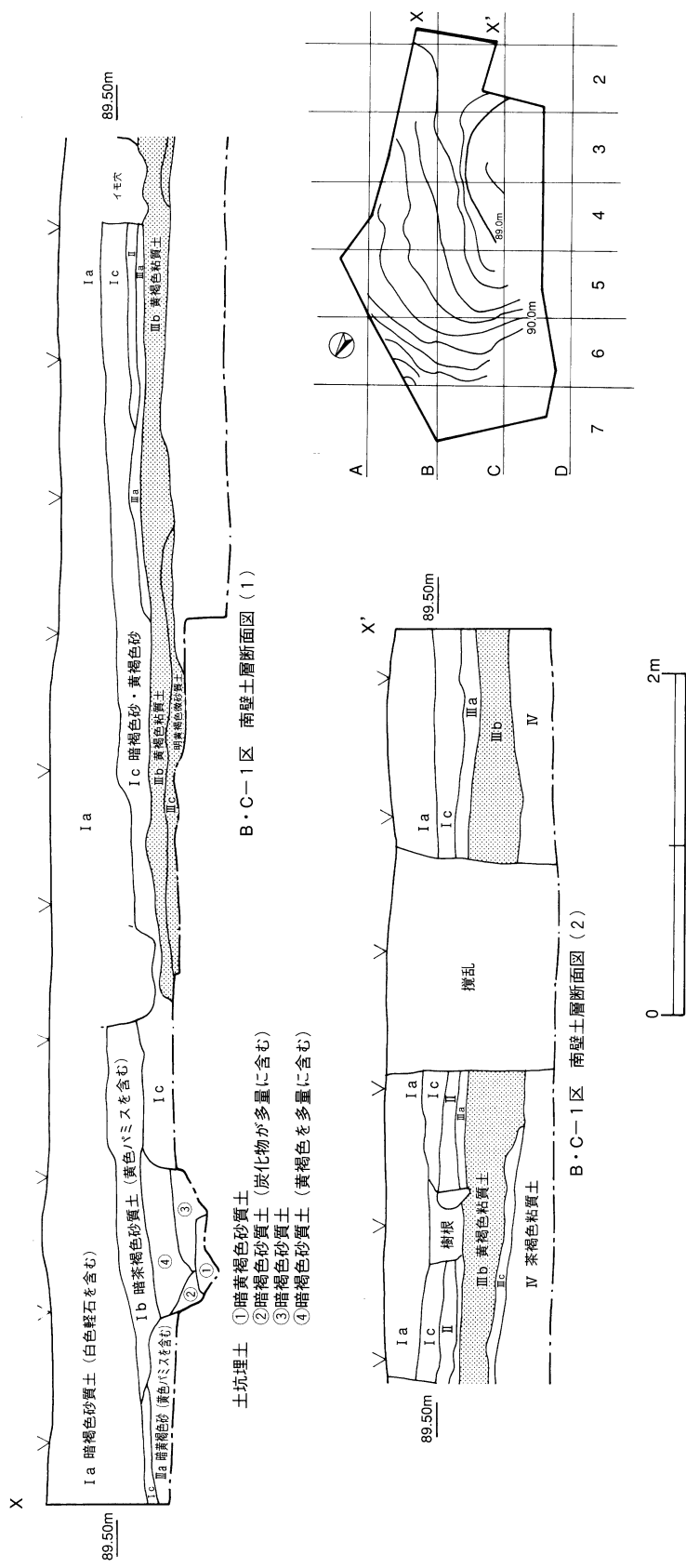
石坂遺跡・山ノ脇遺跡・西原遺跡における基本層序は、下記の通りである。

I 層	I 層	表土。暗茶褐色の耕作土や造成土。
	I a	暗褐色砂質土（白色軽石を含む）
	I b	暗茶褐色砂質土（黄色パミスを含む）
	I c	暗褐色砂・黄褐色砂
II 層	II 層	黒色腐植土（中世包含層）。石坂遺跡・山ノ脇遺跡にて部分的に約20cmほど堆積。
III a 層	III 層	暗黄白色砂質土。鬼界カルデラ火山噴出物（アカホヤ火山灰）。
	III a	暗黄褐色砂（主に古代～中世包含層）
III b 層	III b	黄褐色粘質土（主に縄文～古代包含層）
	III c	明黄褐色微砂質土（アカホヤ火山灰軽石層）
III c 層	IV 層	暗黄褐色粘質土。やや灰色を帯びた硬質で比較的細粒な土。 山ノ脇遺跡ではより黒みを帯びる。（縄文早期包含層）
IV 層	V 層	黒褐色粘質土。黒色で粘質が強く、径5mm前後の軽石が混じる。 西原遺跡ではやや茶色味を帯びる。（縄文早期包含層）
V 層	VI 層	暗黄橙色火山灰土（サツマ火山灰）。 山ノ脇遺跡22区付近でベースサージと考えられる堆積がみられた。
VI 層	VII 層	暗茶褐色粘質火山灰土。極めて微粒で粘質が強い。 西原遺跡で約20cmの薄い堆積が確認できる。
VII 層	VIII 層	黄白色砂質土（シラス）。西原遺跡で軽石を含む場合がみられた。
VIII 層		

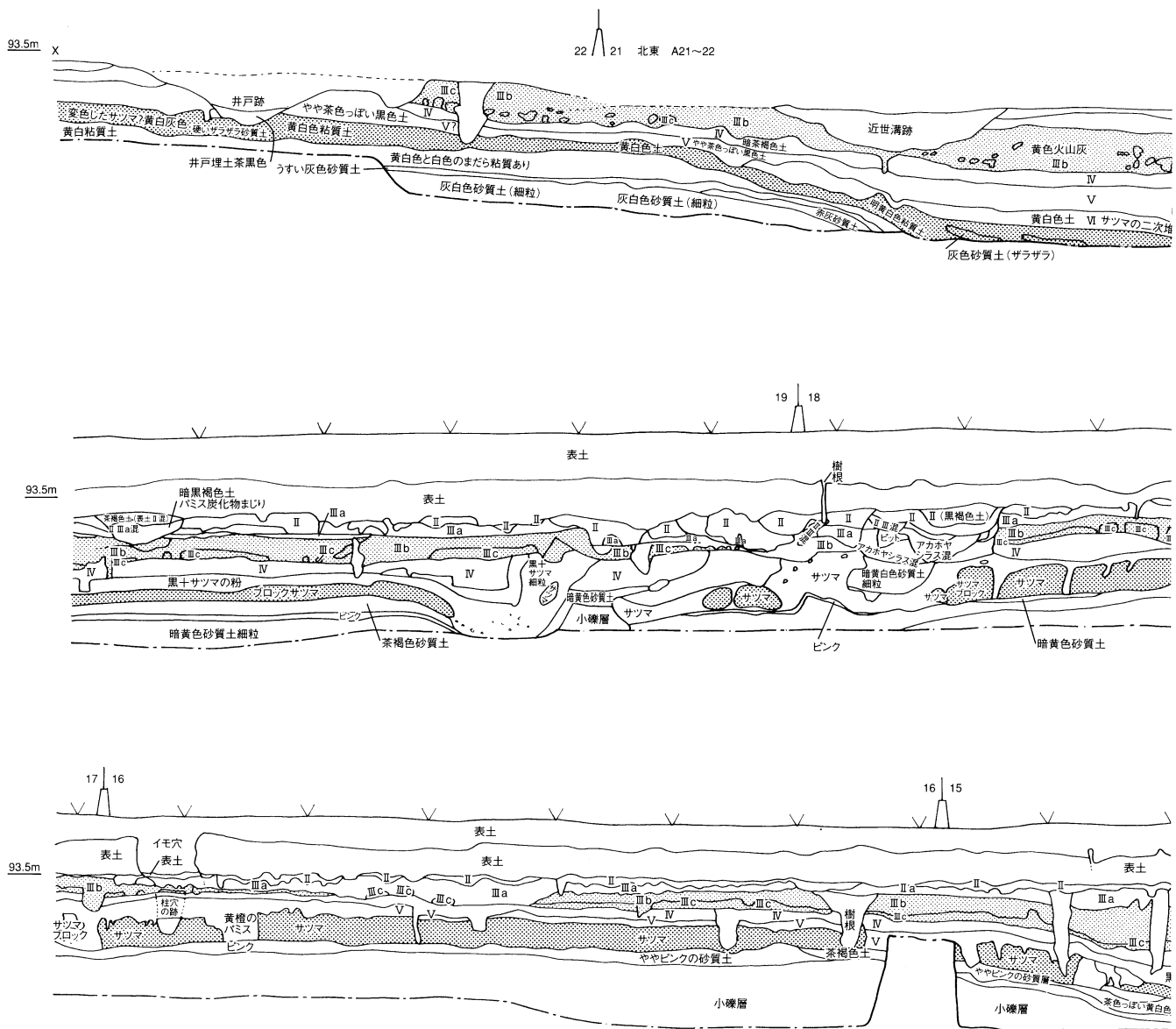
第5図 基本土層図

3遺跡を通観すると、土壌が流失している場所や削平を受けている場所が多かった。西原遺跡では表土直下にIII c層が堆積していたほか、石坂遺跡・山ノ脇遺跡ではII層やIII a層が喪失していた場所が多く、したがって遺物包含層の堆積が不良な場所はかなりの箇所にもぼった。

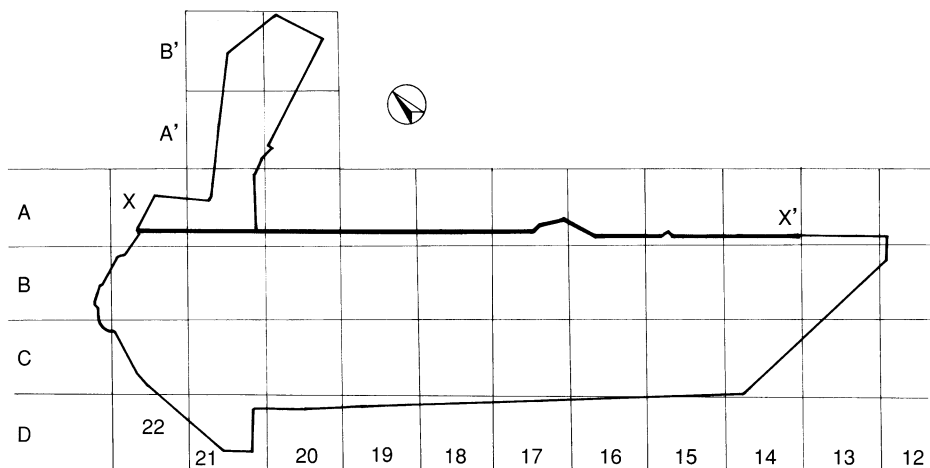
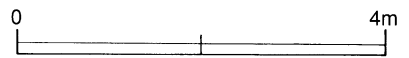
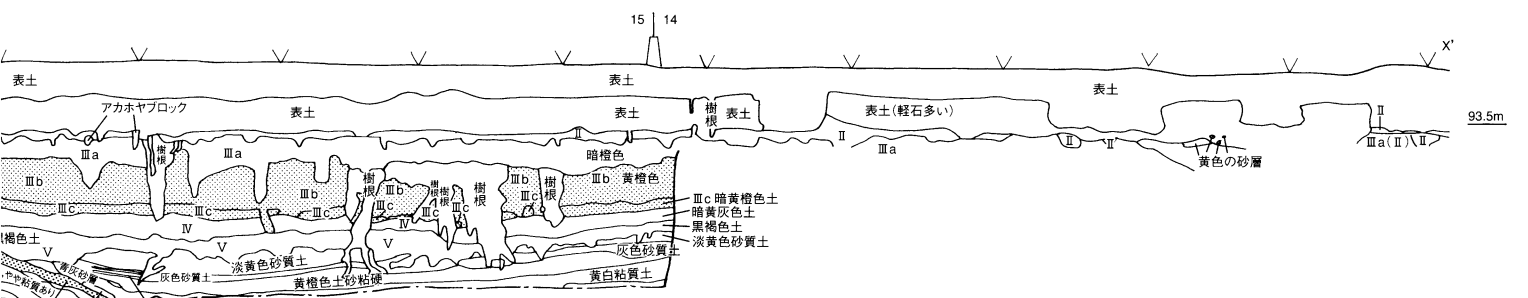
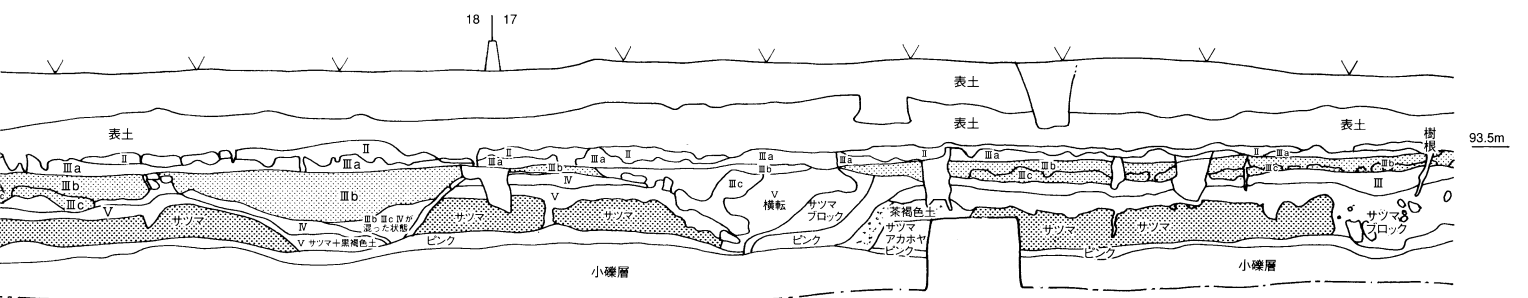
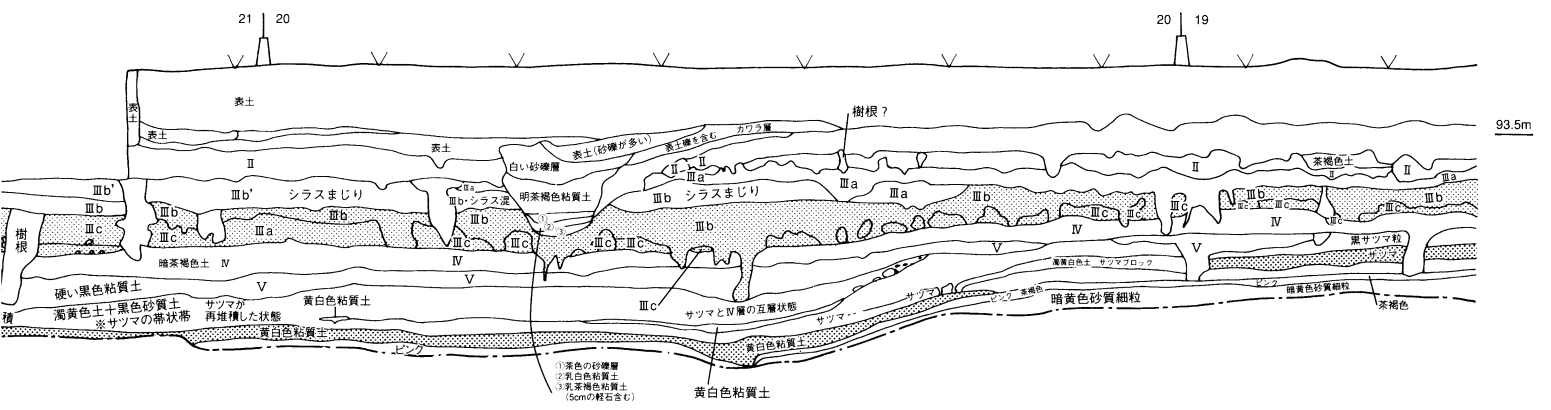
また、山ノ脇遺跡や石坂遺跡では、地下水などによる水成作用の影響を受けたことが原因と考えられる、土壌の変質は各所でみられた。さらに褶曲作用などと思われる土層の不整合がみられる場所など、区域によって土壌堆積が大きく異なることが明らかとなった（第6図～第11図）。

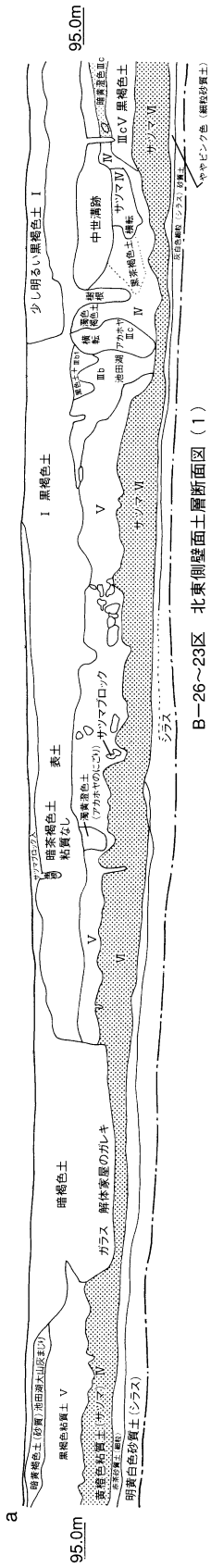


第6図 石坂遺跡土層断面図

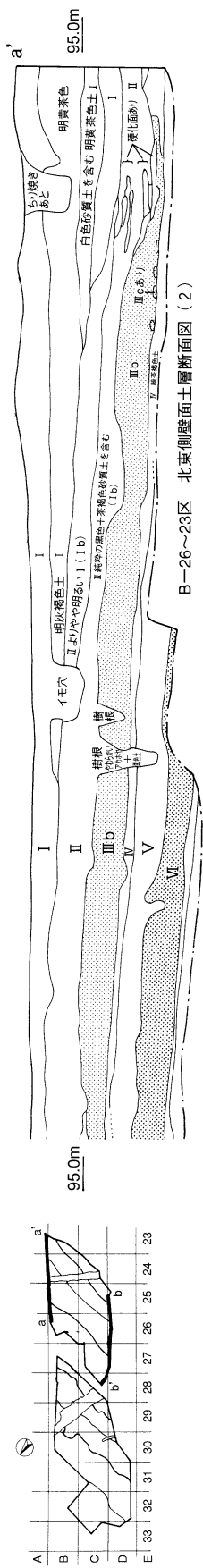


山ノ脇遺跡 土層断面図 (1)

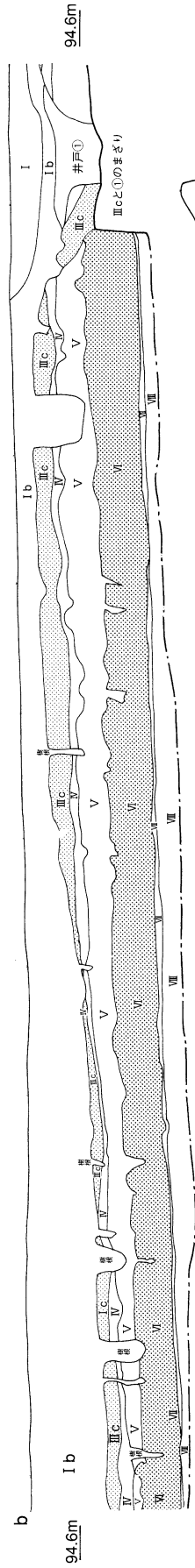




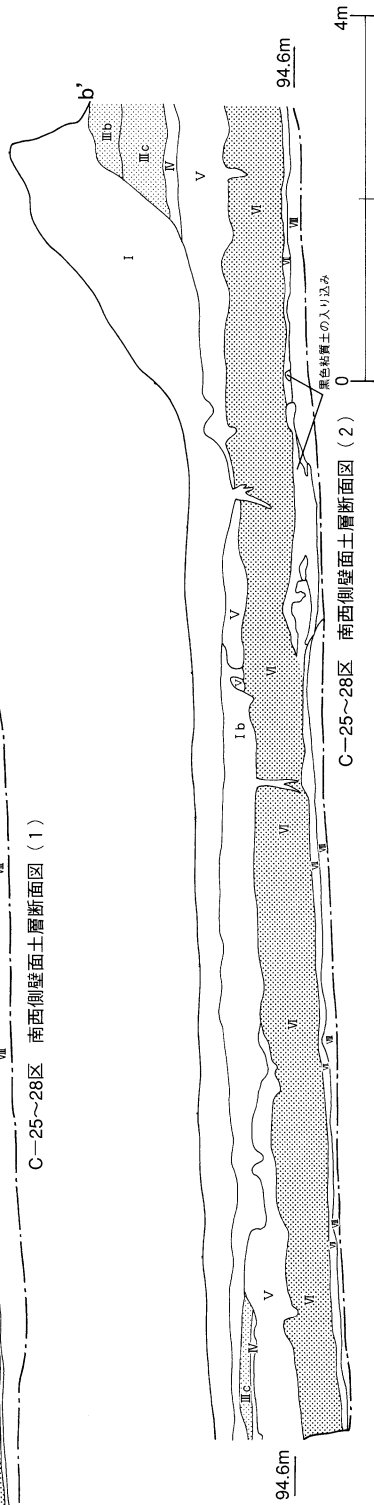
B-26~23区 北東側壁面土層断面図 (1)



B-26~23区 北東側壁面土層断面図 (2)

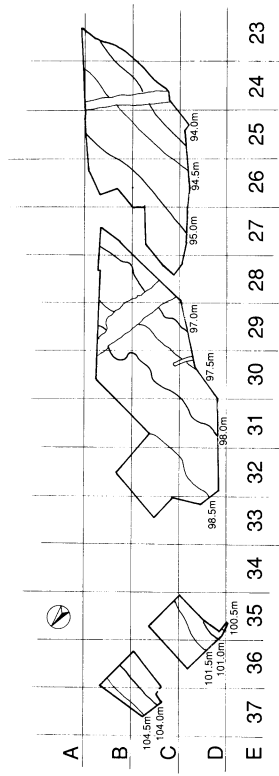


C-25~28区 南西側壁面土層断面図 (1)

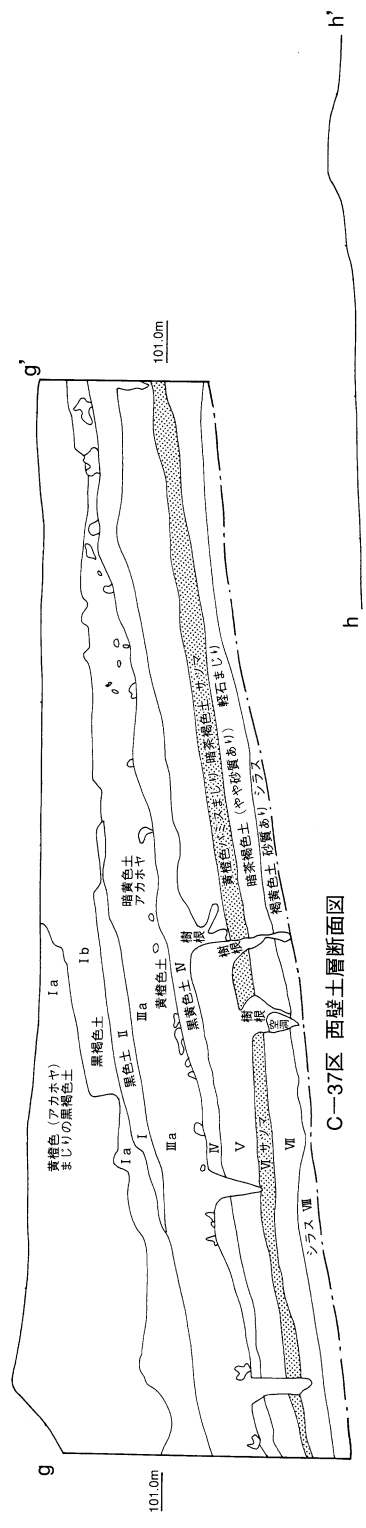


C-25~28区 南西側壁面土層断面図 (2)

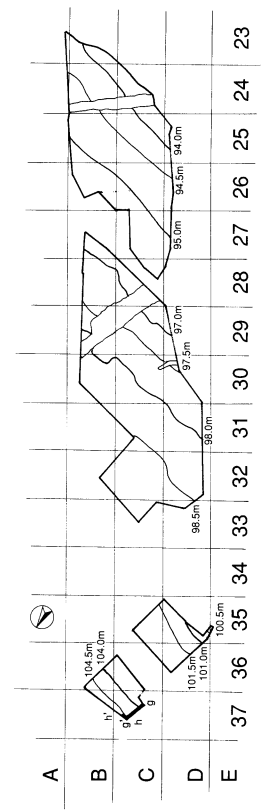
第9図 西原遺跡土層断面図 (1)



B-36区 西壁土層断面図



C-37区 西壁土層断面図



B-37区 北壁土層断面図

第11図 西原遺跡土層断面図(3)

第4章 石坂遺跡の調査

石坂遺跡では、調査の結果、縄文時代、古代および中世の時期に属する遺構・遺物がみつかった。そのうち縄文時代の調査では集石遺構などが、古代の調査では竪穴状遺構・掘立柱建物跡・井戸状遺構などが、中世の調査では畝間状遺構などが検出された。

第1節 縄文時代の調査

石坂遺跡では土壌の流失が盛んであったためか、土層の堆積が少なく、縄文時代の層を明瞭に把握することは出来なかった。そのため縄文時代に属する遺構・遺物は、古代・中世の包含層の直下で一括して発見された。したがって、縄文時代の各時期を分層することはできず、遺物が属する時期も把握できなかった。

そのなかで縄文時代の調査では、遺構では集石遺構3基が検出され、遺物では石器が出土した。

1 検出遺構

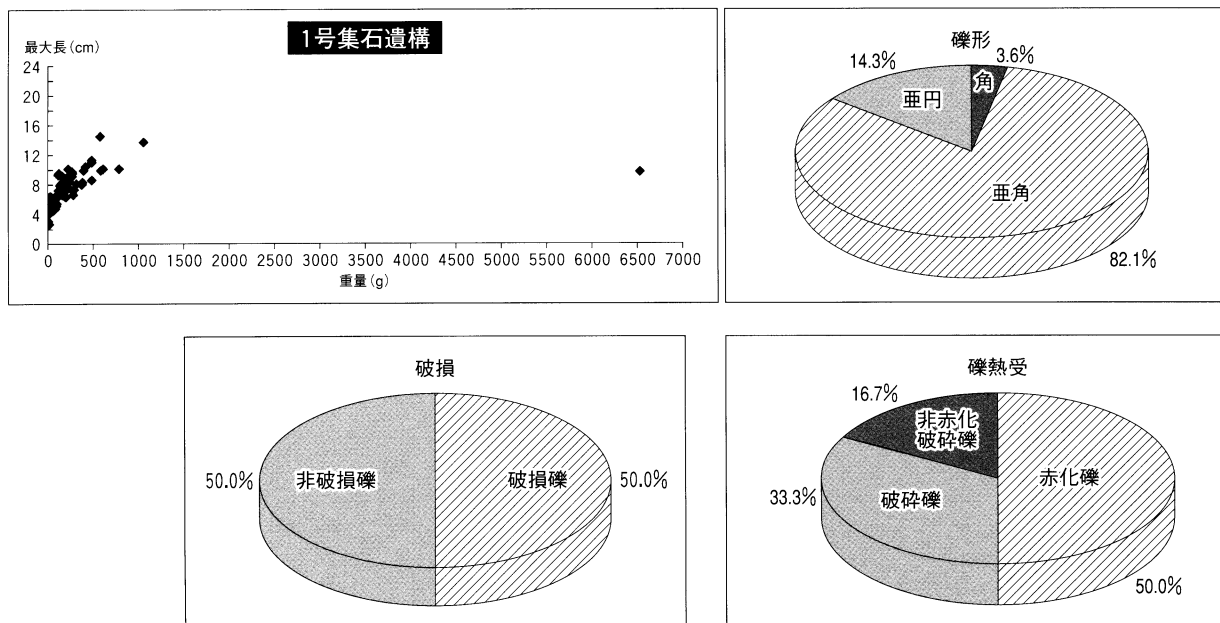
石坂遺跡で検出された縄文時代に属する遺構は、集石遺構が2基であった。いずれもB-3区から近接して検出された。

(1) 集石遺構

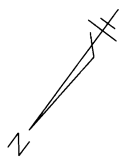
石坂遺跡では3基の集石遺構が、全てB-3区から検出された。

1号集石遺構

B-3区から検出された集石遺構である。72cm×40cmの範囲に構成礫密集度の高い部分がみられながら、262cm×200cmの範囲に散乱した状態で、60個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大から人頭大、石材の多くが凝灰岩および安山岩で構成されている。8割の礫の形状はほとんどが垂角礫であった。半数の礫は赤化し、さらに3分の1の礫に破碎がみられ、全体の8割の礫は熱を受けた様相を示していた。縄文時代に属する遺構と考えられる。



1 2 3 4 5 6 7

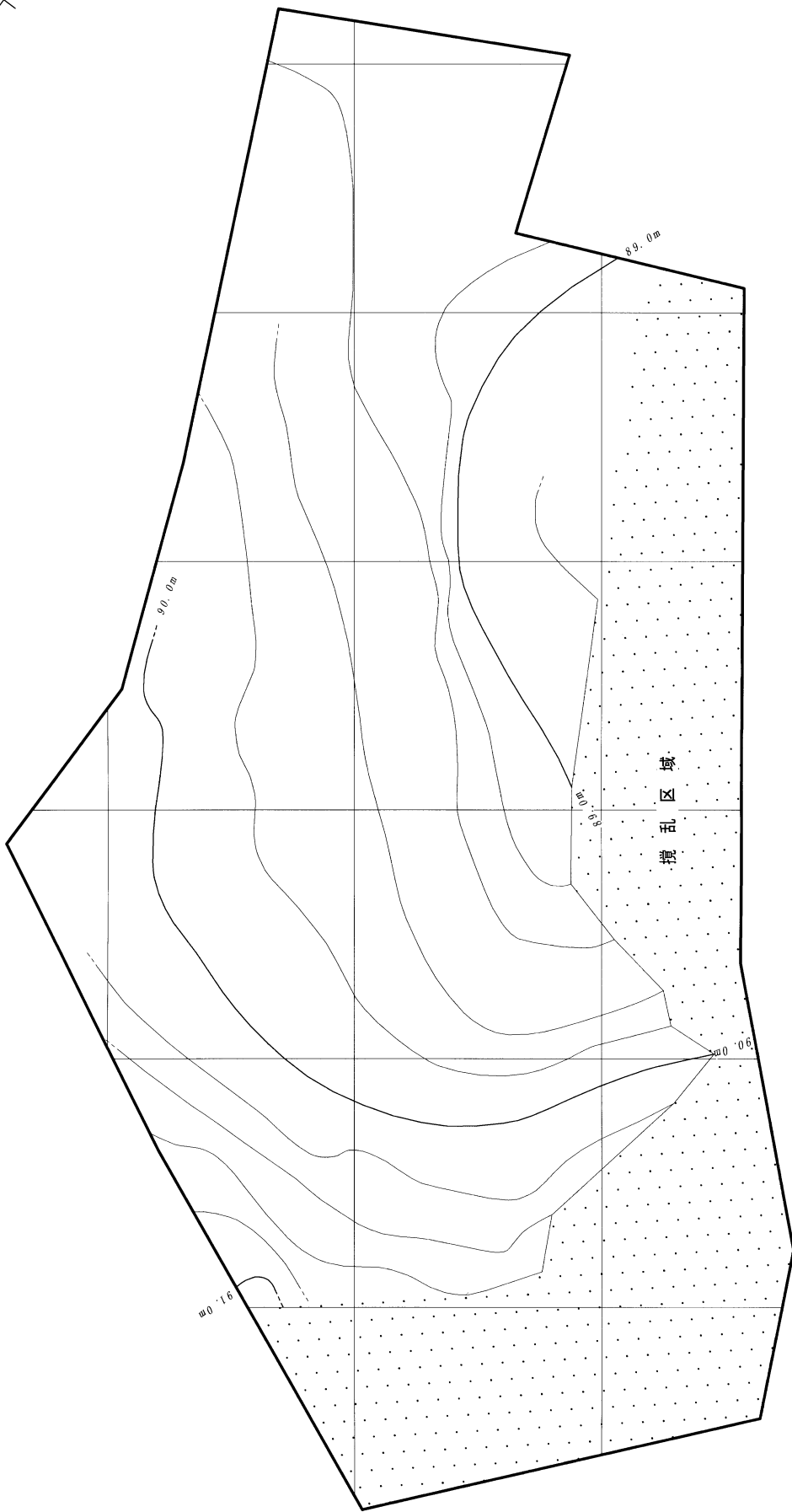


A

B

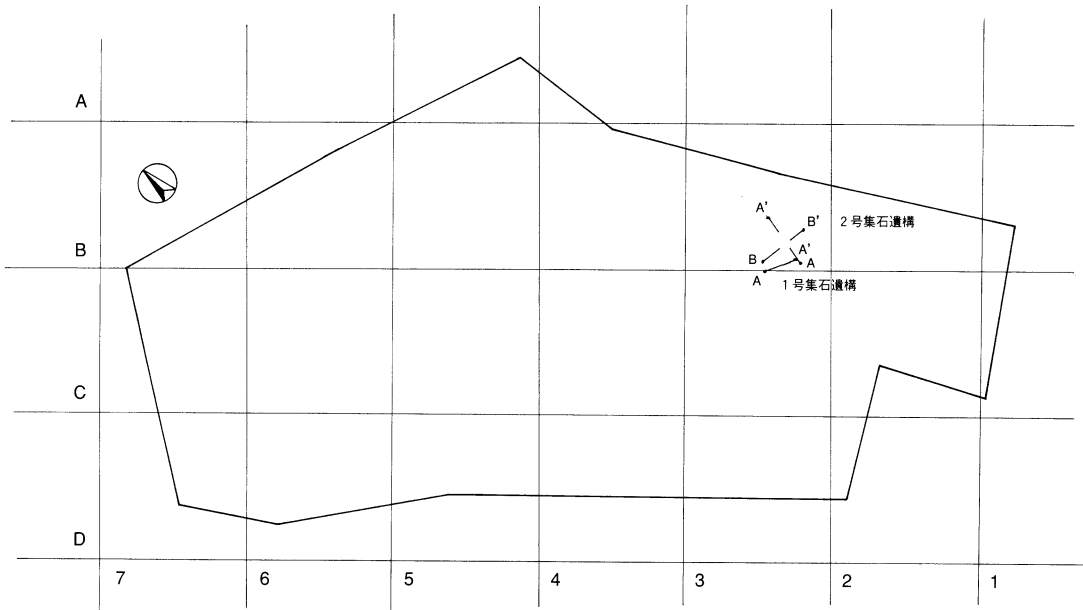
C

D

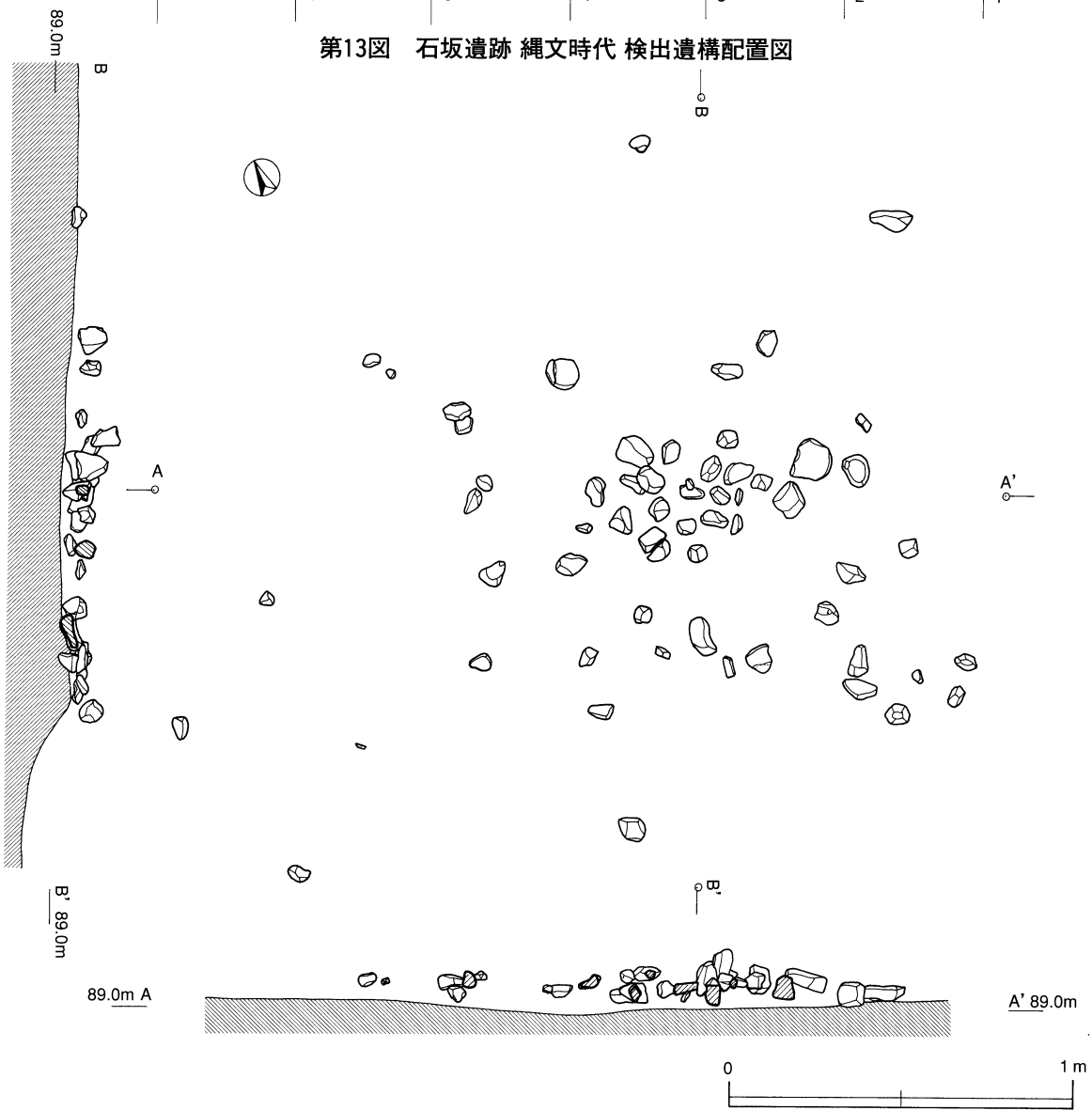


第12図 石坂遺跡 地形測量図およびグリッド配置図

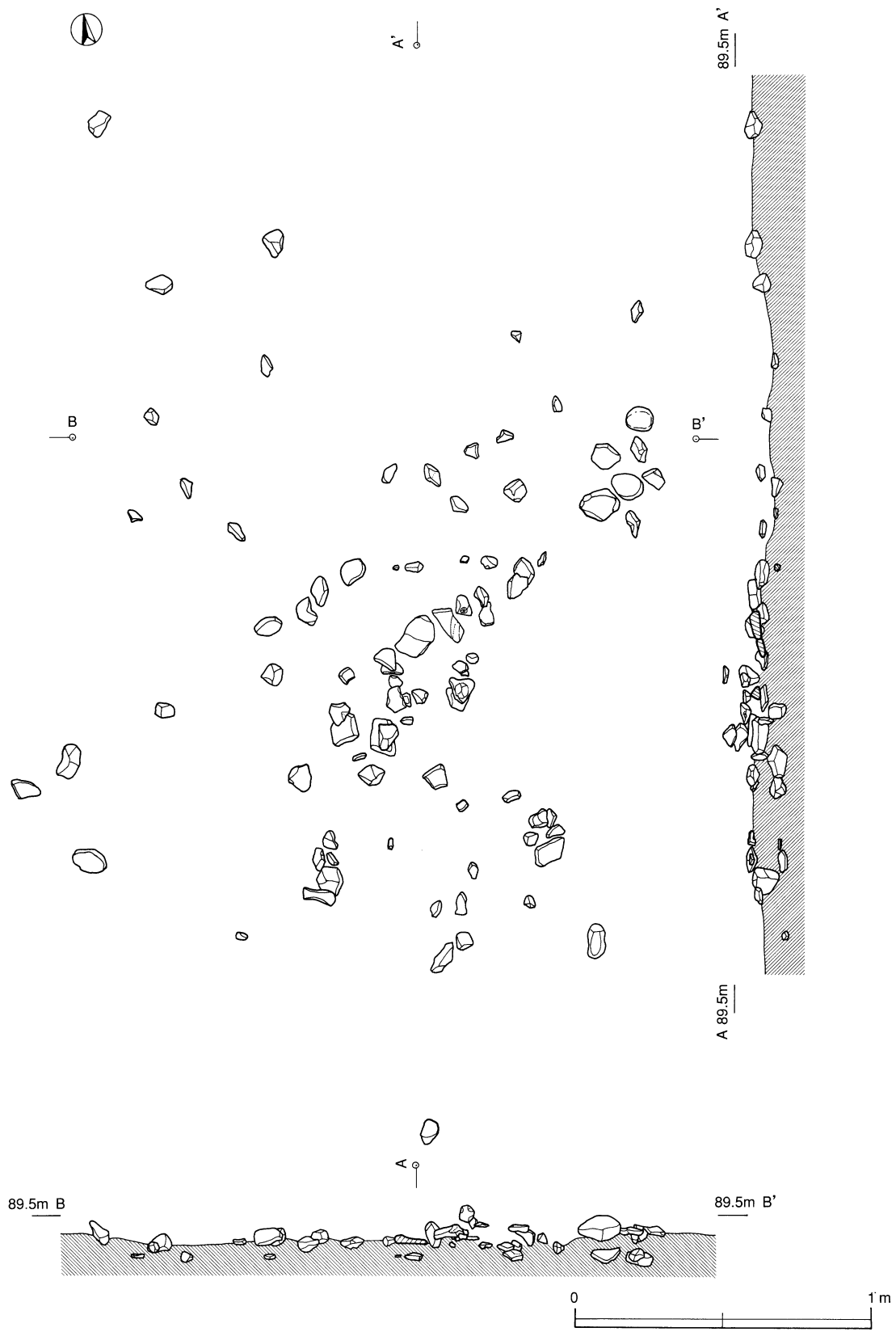




第13図 石坂遺跡 縄文時代 検出遺構配置図



第14図 石坂遺跡 縄文時代 1号集石遺構実測図

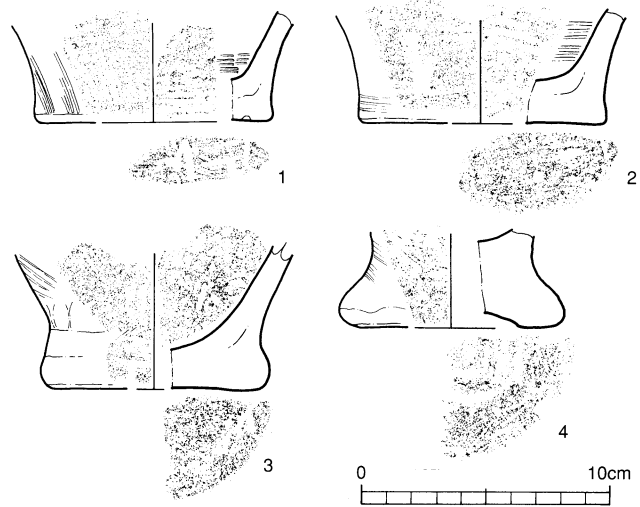


第15図 石坂遺跡 縄文時代 2号集石遺構実測図

2 出土遺物

(1) 土器

石坂遺跡の縄文土器は底部のみ4点である。1・2は直径10cmの底部で、張り出すことなくほぼストレートに立ち上がる。底面には圧痕が認められ、もじり編みによるスタレ状の敷物ではないかと考えられる。これらの特徴は後期前半の土器にみられるものである。3・4は厚い底で張り出しをもつ。晩期の深鉢形土器ではないかと考えられる。



第16図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図1 (土器)

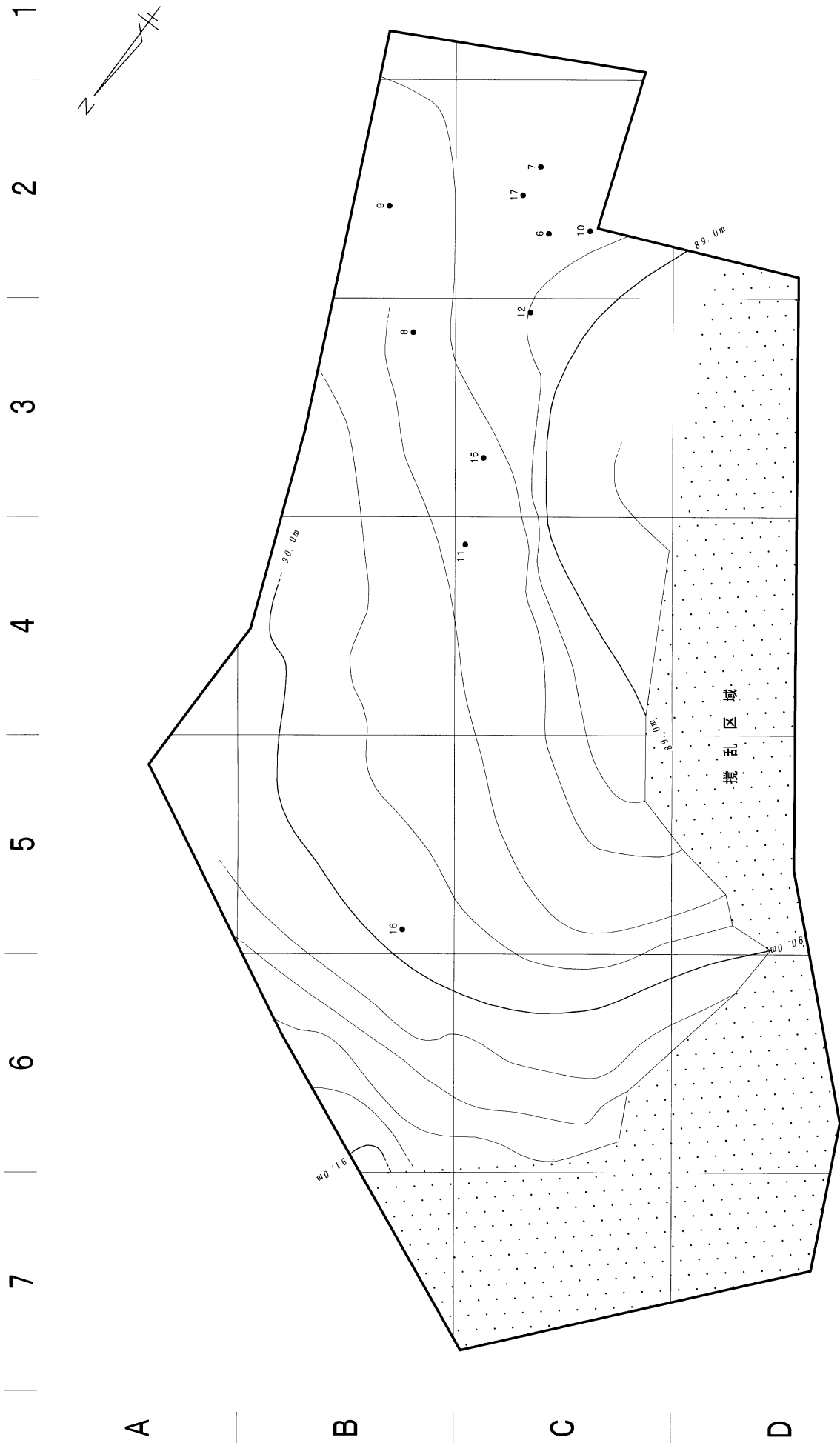
(2) 石器

5～8は石鏃である。5は基部に抉りを深く入れた長脚鏃で、脚部先端部は尖っている。6・7は脚部を両側に膨らませる様な形に作り、下面では再び絞めてある。基部の抉りはやや深く、脚部先端部は丸くおさめている。これらは晩期にみられる形状に近い。8は二等辺三角形をし、基部はわずかに窪んでいる。9は石匙である。刃部は欠損しているが、縦長の剥片を利用している。打点付近をツマミ部分として、両側に丁寧な剥離を行って抉りを作り出している。10はスクレイパーである。剥片を利用したもので、肉厚な部分には両面から丁寧な剥離を加えることによって、下面全体を鋭利な刃部としている。11・12は礫器である。11は扁平な礫の一部を打撃して刃部を作り出している。12は厚さ3.5cmの石材を取り出した後、側面に打撃を加えて台石状としている。上面は焼けたため赤黒く変色している。磨滅痕が認められ、石皿として使用している。13は敲打具である。棒状の石の一端を中心から放射状に剥離している。ただし、面が潰れる様な真上からの細かな敲き方ではなく、やや斜め方向から入る強い打撃を行った道具と考え

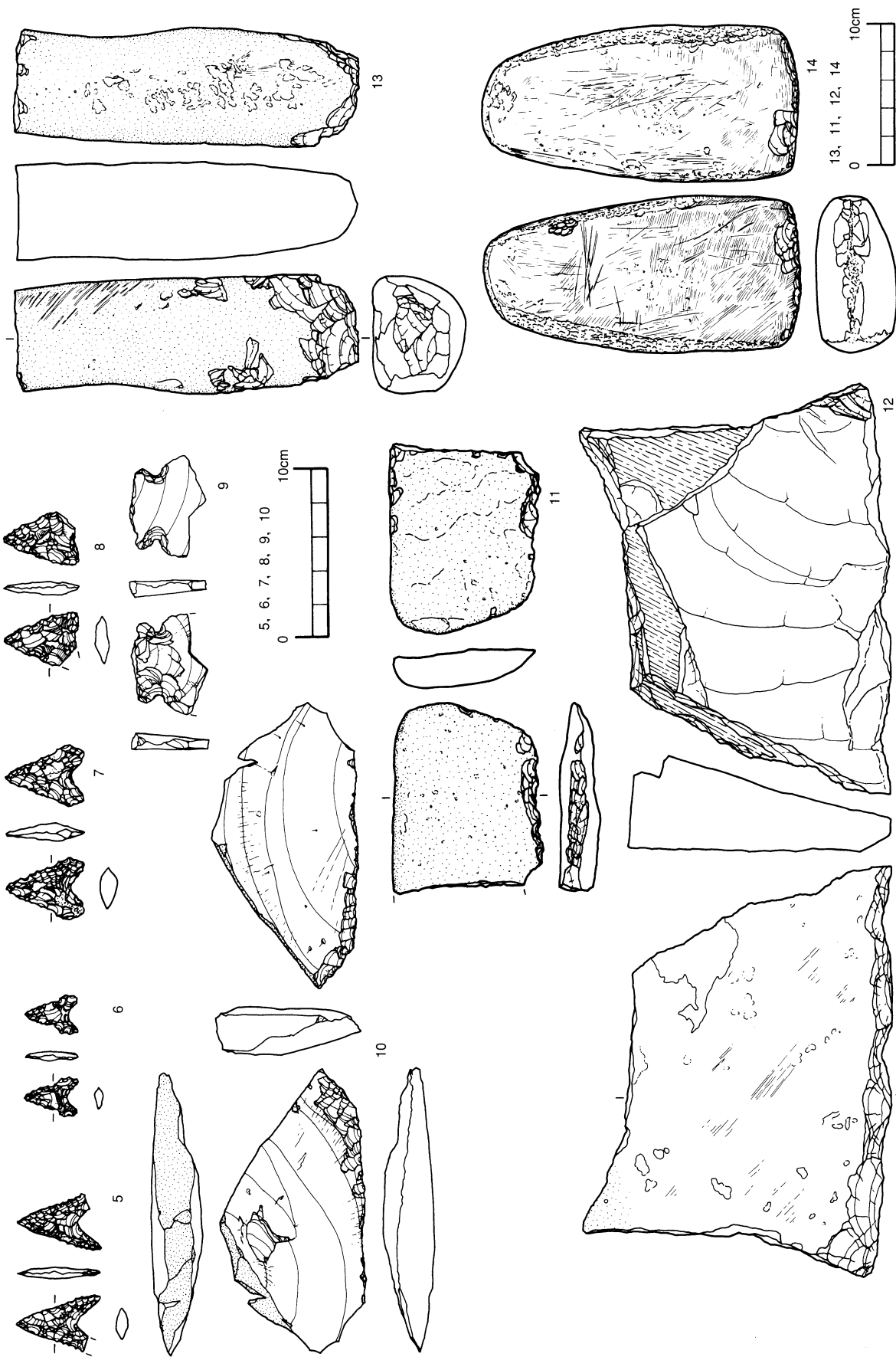
る。14は磨製石斧である。入念な敲打によって整形した後、研磨して刃部を作り出している。ただし、敲打した時期と研磨した時期には、下記のような理由から、時間的な隔たりが大きいことが窺える。まず、敲打面が白っぽくなりかなり風化しているのに対し、研磨面は黒光りするほど風化がみられない点である。次に、敲打した部分の横断面の推定延長線が円形を成していることに対して、極端な研磨がなされて扁平になっている点である。これらのことから、同一人物あるいは同一家族が永年使ったのか、それとも他人あるいは他の時期の人が使っていた石斧を再利用したのかは明らかでないが、いずれにしても同じ道具が再生されながら長期間使われていたことは想定できる。刃部は次第に肉厚になって、研磨による刃砥ぎが厳しくなった後、両面から剥離を行って刃部の再生を図っている。さらに、その再生も効かなくなった後、敲打具として利用している様子が窺える。

第1表 石坂遺跡縄文土器観察表

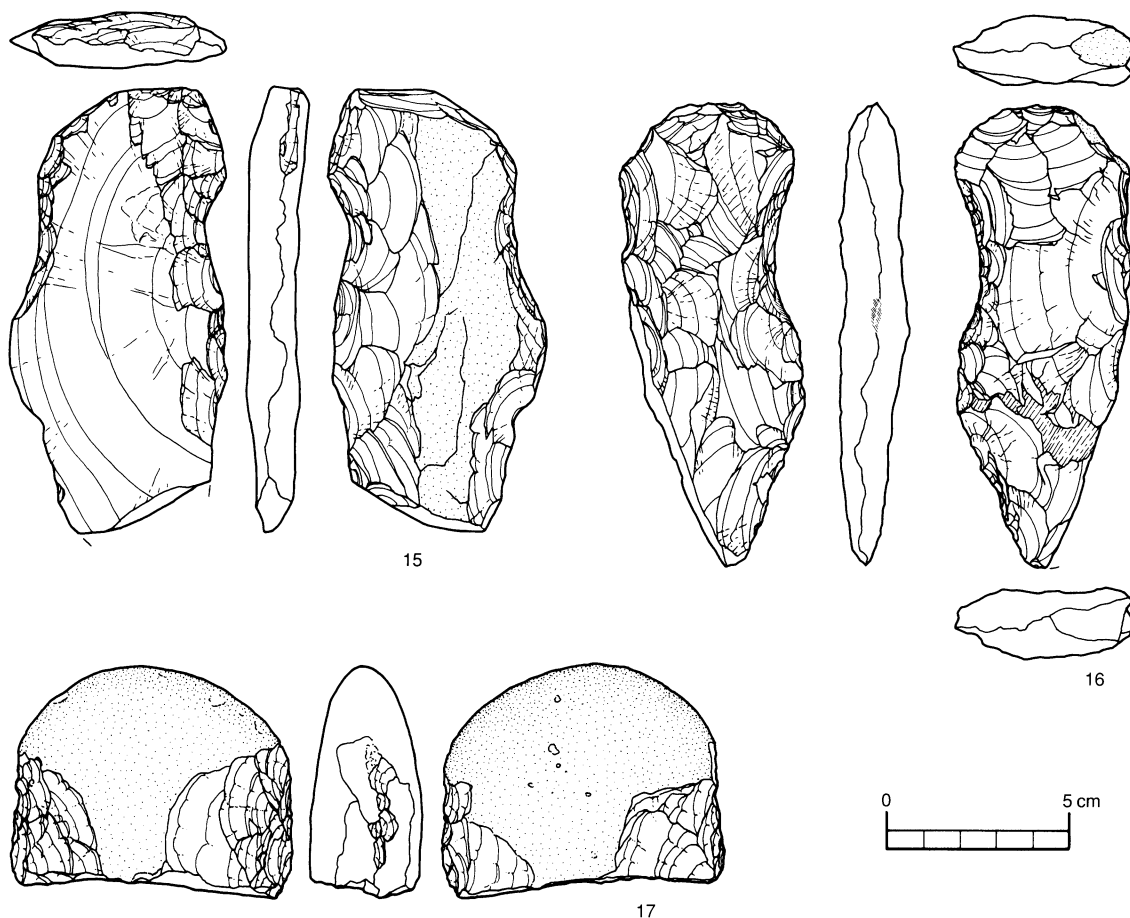
図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
16	1	C 2	Ⅲ b	後期土器	底部～胴部下半	にぶい褐色	明赤褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	1583	底部圧痕
	2	C 2	Ⅲ b	後期土器	底部～胴部下半	にぶい褐色	明赤褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	1627	底部圧痕 スタレ状
	3	B 2	Ⅲ a	晩期土器	底部～胴部下半	にぶい褐色	橙色		ナデ	ナデ	6	
	4	C 2	Ⅱ	晩期土器	底部～胴部下半	黒褐色	明赤褐色		ナデ	条痕	63	



第17図 石板遺跡 縄文時代 出土遺物分布図 (石器)



第18図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図2 (石器1)



第19図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図3 (石器2)

15～17は石製土掘具である。15・16は刃部先端は欠けているものの、身部から柄部にかけては良く残っている。両方とも身部上部に最大幅があり、両側から浅い抉りを入れて柄部を作り出している。これらはその形状から縄文時代晩期に該当するものと考えられる。この時期の遺物は、西原遺跡及び山ノ脇遺跡で土器が出土しており、日常生活はそちらでなされていたと考えられる。なお、石製土掘具の刃部が欠けたものが廃棄されていることから、石坂遺跡では生産活動が行われていたのではないかと考えられる。17も柄部を作り出すための抉りではないかと考えたが、石錘の可能性も否めない。

第2表 石坂遺跡石器観察表

図番号	番号	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	取上番号	備考
18	5	石鎌	C 2 III b	黒曜石	(2.50)	(1.20)	0.39	0.74		
	6	石鎌	C 2 溝	黒曜石	1.59	1.20	0.30	0.26	1144	
	7	石鎌	C 2 VII		3.36	2.80	0.60	1.34	1674	
	8	石鎌	B 3 III上	黒曜石	(2.28)	(1.55)	0.40	1.04	1416	
	9	石匙	B 2 II	サヌカイト	(2.35)	(2.90)	0.49	3.16	601	
	10	スクレイパー	C 2 II	サヌカイト	(4.40)	(8.34)	1.42	40.84	160	
	11	磔器	C 4 II	安山岩	(5.10)	(6.80)	1.40	55.83	567	
	12	石皿	C 3 II	安山岩	(11.10)	(14.60)	4.40	589.00	191	
	13	棒状叩き石	C 6 表	安山岩	(12.40)	4.10	3.41	241.50		
	14	磨製石斧	II	頁岩?玄武岩?	(11.40)	5.60	2.87	319.00		敲打具として再利用
19	15	石製土掘具	C 3 III a	頁岩	(12.10)	(6.00)	1.53	140.22	1660	
	16	石製土掘具	B 5 II	頁岩	12.60	4.80	1.83	136.38	701	
	17	石製土掘具	C 2 II 下	安山岩	(6.35)	(7.75)	3.10	107.38	1167	石錘の可能性もある

磨石・敲石類

石坂遺跡においては磨石・敲石類は合計9点出土している。本報告では礫に磨石としての使用が見られるもの、或いは側縁部に敲打痕がみられるものを磨石・敲石類と分類した。本類に帰属する石器についてはその形態により以下のように分類した。

I類 平面形が楕円形を呈し、磨面のみを形成しているもの

I-a 平面形が楕円形を呈し、球状の礫を使用したもの(18, 19, 22)

19は表裏に磨面がみられる。22は凸面状の磨面を形成しており、粗い擦痕がみられる。

I-b 平面形が楕円形を呈し、扁平な礫を使用しているもの(20, 21)

いずれの磨面も平らに近く稜を生じている。

II類 平面形が円形や楕円形を呈し、磨面と側縁部に敲打痕がみられるもの

II-a 平面形が円形を呈し、球状の礫を使用したもの(23)

平らな磨面と側縁部全周にわたる敲打により、きれいに整形されている。

II-b 平面形が楕円形を呈し、扁平な礫を使用しているもの(24, 25)

いずれも磨面と側縁部の一部分に敲打痕がみられるものである。

II-c 平面形が楕円形を呈し、球体の礫を使用したもの(27)

礫の周縁部を主体として敲打痕がみられる。一般的にこのタイプの石器には磨面が形成されているが、これには磨面が形成されておらず珍しいものである。

磨石・叩石類

石坂遺跡においては磨石・叩石類は合計2点出土している。本報告では磨面や敲打痕といった使用面が端部にみられるものを磨石・叩石類と分類した。本類に帰属する石器については使用面や形態により以下のように分類した。

I類 平面形が楕円形を呈し、球状の礫に磨面と敲打痕がみられるもの(26)

端部の敲打痕は弱く不明瞭なものである。

II類 平面形が楕円形を呈し、敲打痕のみがみられるもの(28)

棒状の叩石であり端部には強く粗い敲打痕がみられる。

石皿類

石坂遺跡においては石皿類は合計4点出土している。本報告では凹みや擦痕がみられるものを石皿類と分類した。本類に帰属する石器については形態により以下のように分類した。

I類 自然礫を整形して使用しているもの(29)

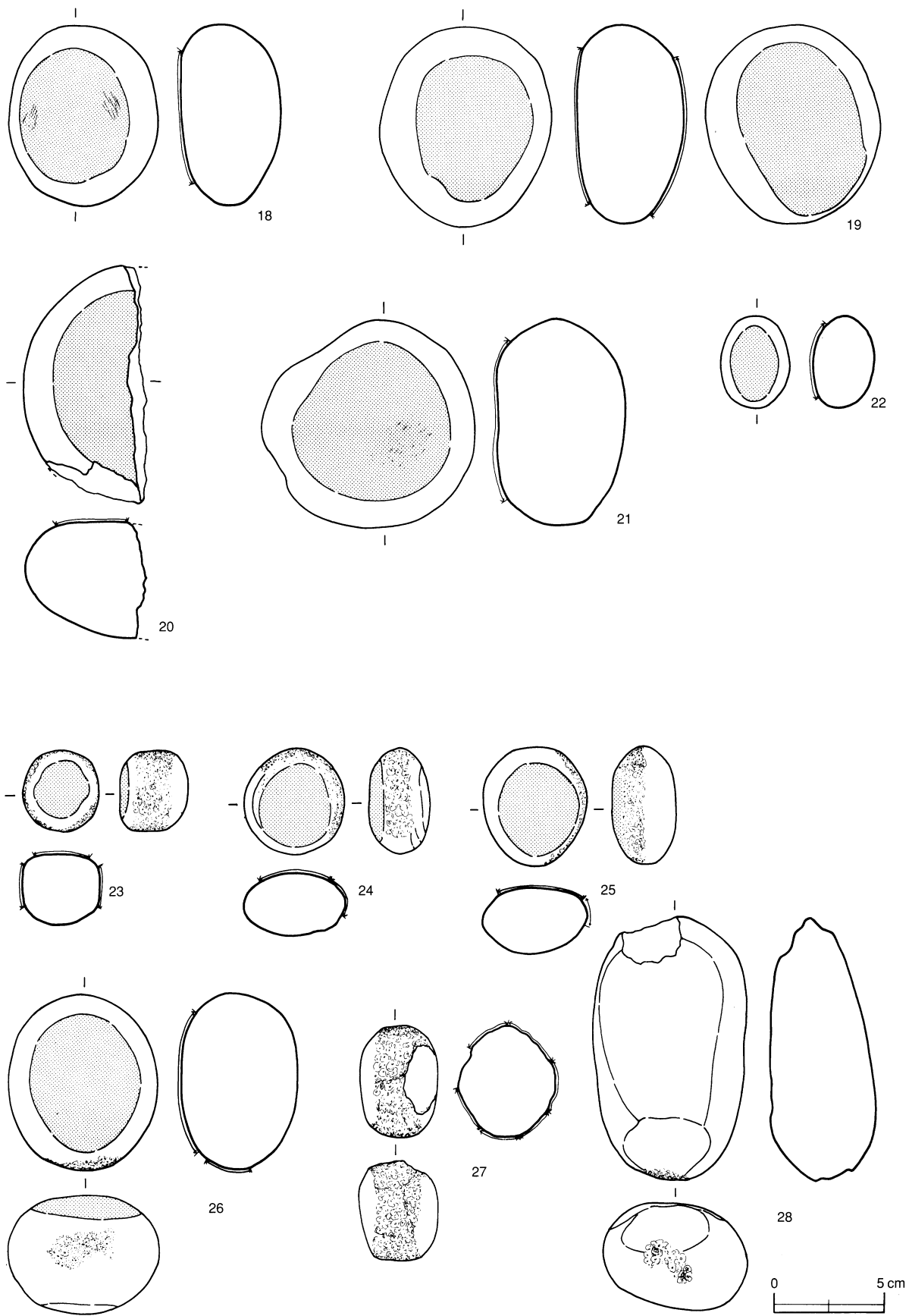
凹みはないが使用面全体に擦痕がみられる。

II類 自然礫をそのまま使用しているもの(30)

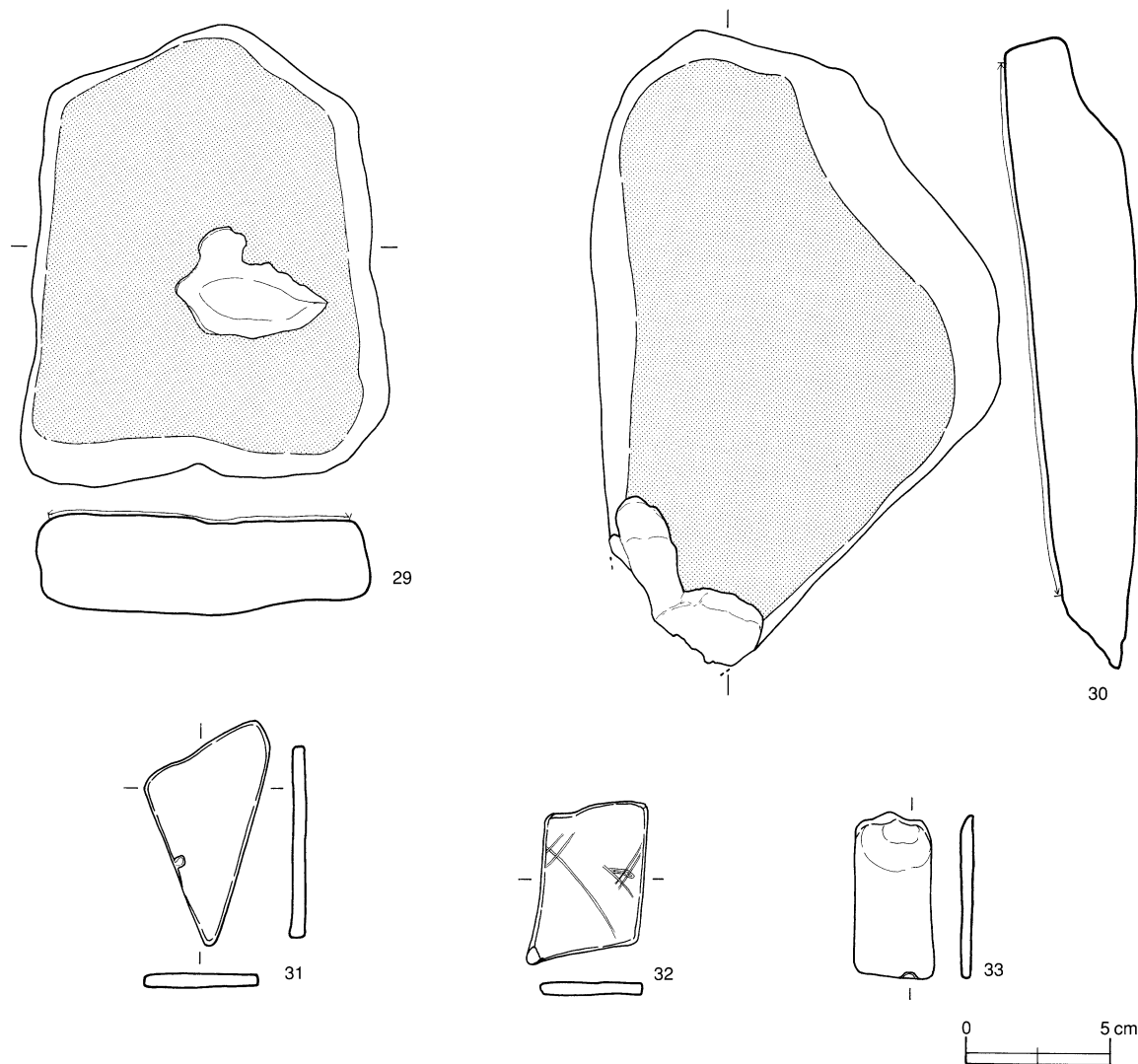
使用面全体に緩やかな凹みがみられる。

砥石類(31~33)

石坂遺跡において砥石は3点出土した。いずれも小型で薄いことから携帯用のものと考えられる。側面は平らに整形されている。32は使用面上に引掻き傷がみられる。



第20図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図4 (石器3)



第21図 石坂遺跡 縄文時代 出土遺物実測図5 (石器4)

第3表 石坂遺跡出土遺物一覧表・磨石・敲石類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
20	18	磨石	一括	B4	Ⅲ a	安山岩	7.6	8.2	4.6	298.9	半分ほどを欠損	1類	45
	19	磨石	一括	B4	Ⅲ a	安山岩	8.95	7.85	4.9	512			
	20	磨石	1512	C2	Ⅲ a	安山岩	10.65	5.7	5.2	460			
	21	磨石	一括	B3	Ⅲ b	安山岩	9.65	9.3	5.9	784			
	22	磨石	907	C5	Ⅱ	安山岩	4.2	3.2	2.9	49.3		2類	39
	23	磨石, 敲石	1534	C2	Ⅲ a	安山岩	3.65	3.6	3.2	62.7			
	24	磨石, 敲石	1625	C2	Ⅲ b	安山岩	4.8	4.7	2.9	77.8			
	25	磨石, 敲石	144	C2	Ⅱ	安山岩	6	5.8	3	103.5			
27	敲石	147	C2	Ⅱ	安山岩	5.05	3.7	4.5	106.6				

第4表 石坂遺跡出土遺物一覧表・磨石・叩石類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
20	26	磨石, 叩石	927	C6	Ⅱ	砂岩	7.9	6.8	5.4	398		1類	33
	28	叩石	1616	B3	Ⅲ b	安山岩	11.75	7.1	4.9	519		2類	51

第5表 石坂遺跡出土遺物一覧表・石皿類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
21	29	石皿	1317	C2	Ⅲ a	安山岩	16	12.8	3.6	1298	一部分を欠損	1類	68
	30	石皿	1638	C2	Ⅲ b	安山岩	21.85	14.1	4.6	1351		2類	67

第6表 石坂遺跡出土遺物一覧表・砥石類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
21	31	砥石	1649	B4	Ⅲ a	凝灰岩質頁岩	7.15	4.2	0.5	20.7			91
	32	砥石	表採	B2		凝灰岩質頁岩	5.1	3.15	0.5	16.2			
	33	砥石	表採	B4		凝灰岩質頁岩	5.7	2.85	0.5	12.1			

第2節 古代の調査

石坂遺跡では古代の時期に属する遺構・遺物は、中世と同一の包含層で一括して発見された。したがって、遺構についてはその形態的特徴などから時期の判別を行った。

その成果として、遺構では竪穴状遺構2基・掘立柱建物跡1基・柱穴列1基・炉跡2基・井戸状遺構1基・集石遺構3基の検出が、遺物では土師器・須恵器・磁器などの出土が挙げられる。

1 検出遺構

石坂遺跡で検出された古代に属する遺構は、竪穴状遺構2基・掘立柱建物跡1基・柱穴列1基・炉跡2基・井戸状遺構1基であった。

(1) 竪穴状遺構

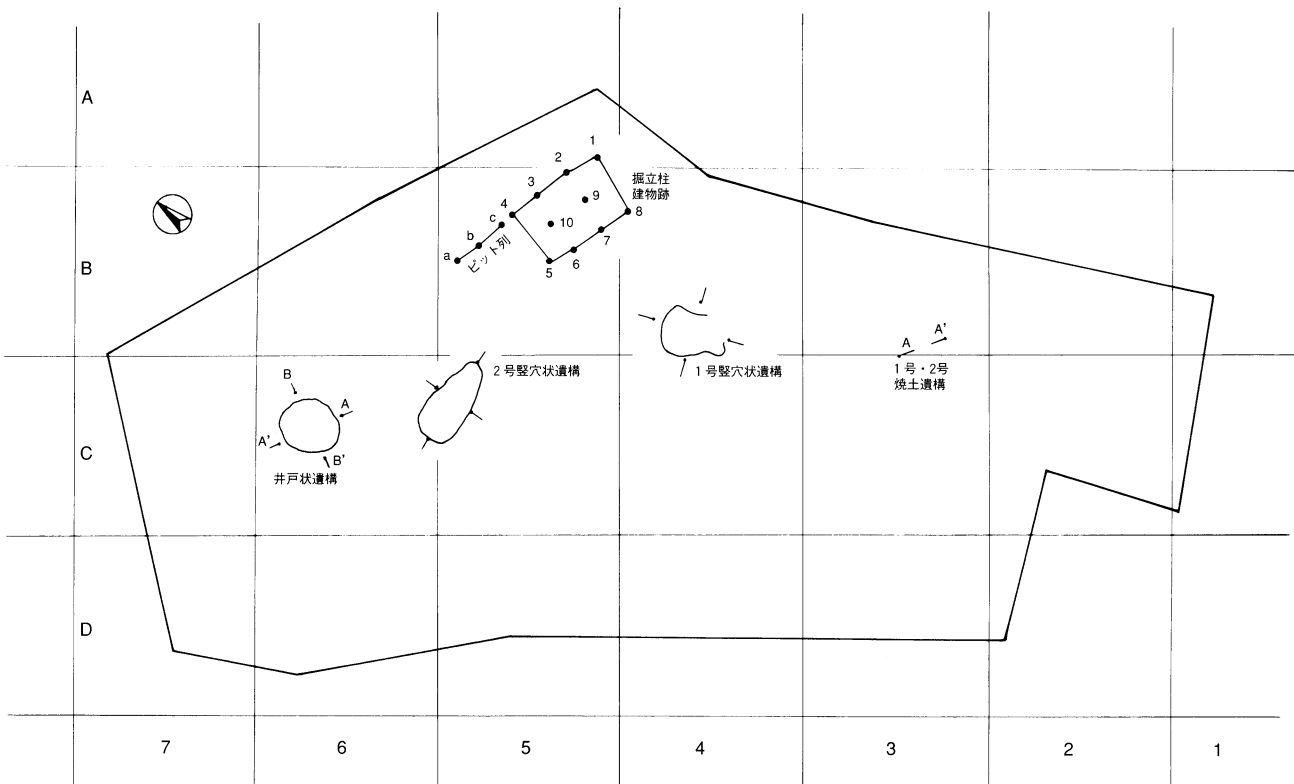
石坂遺跡では2基の竪穴状遺構が検出された。

1号竪穴状遺構

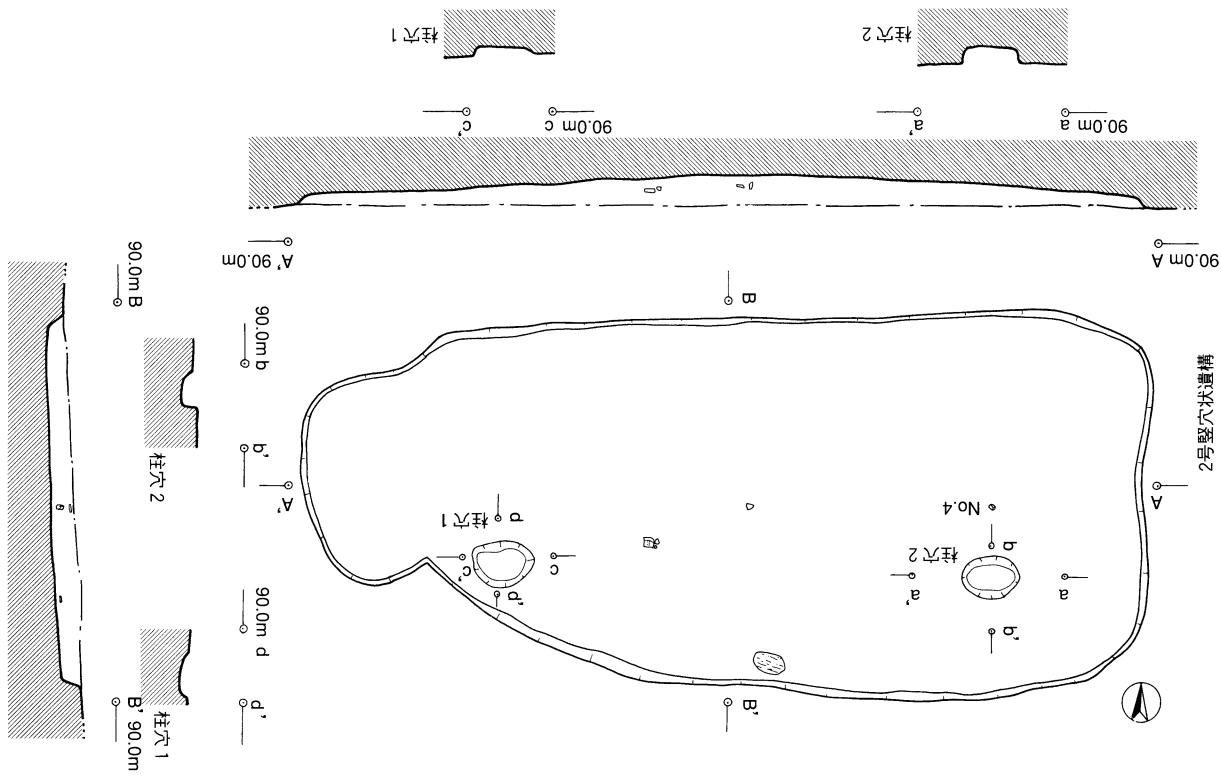
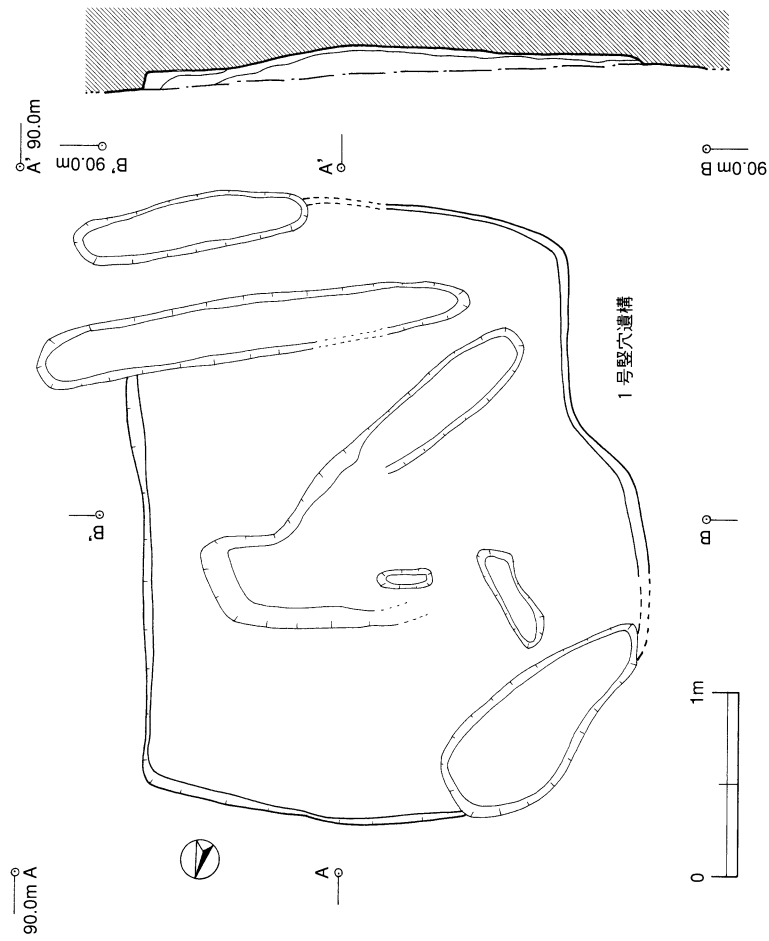
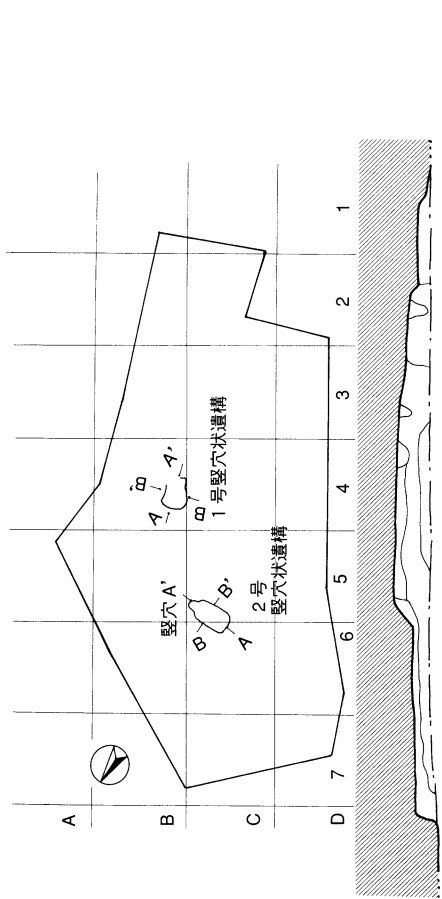
B-4区、Ⅲb層で検出された竪穴状遺構である。形状は、平面形が340cm×286cmを測る略方形を呈し、深さは検出面から約25cmあった。埋土は暗茶褐色粘質土を主体としており、レンズ状に堆積していたこと、さらに中世期の畝間状遺構に切られていることから、古代期の遺構と判断した。

2号竪穴状遺構

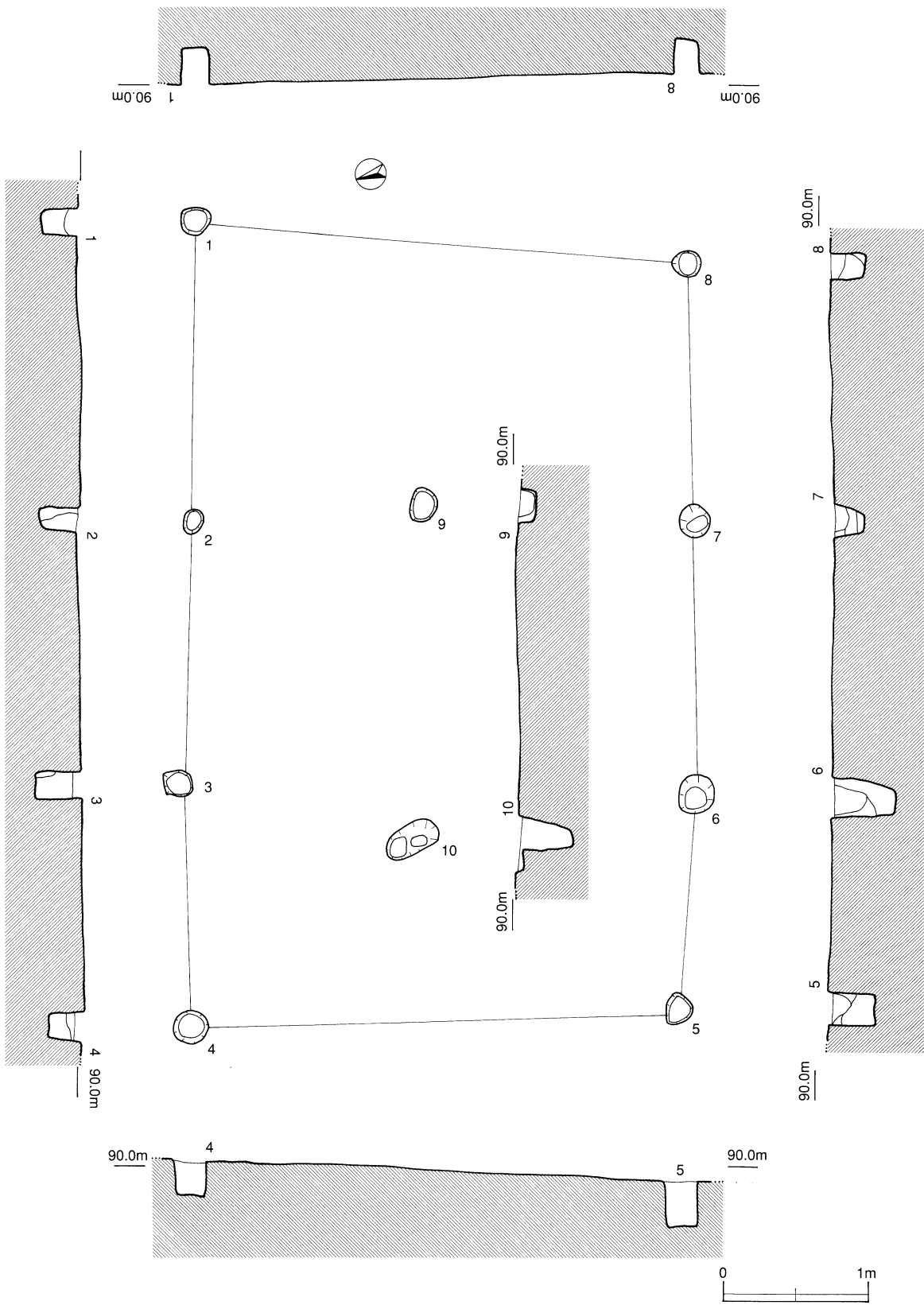
C-5区、Ⅲb層で検出された竪穴状遺構である。形状は、平面形が466cm×214cmを測る略隅丸長方形を呈し、深さが検出面から約15cmあった。埋土は鉄分を若干含む暗褐色を呈する粘質土であった。遺構床面では、径が約5cmを測る円形を呈した、鉄分を多く含む暗褐色粘質土を埋土とする、ピットが2基みつかった。これらのピットは、竪穴状遺構の長軸から25cm北側にずれ、長軸方向で壁面から約40~50cm離れた位置で検出された。



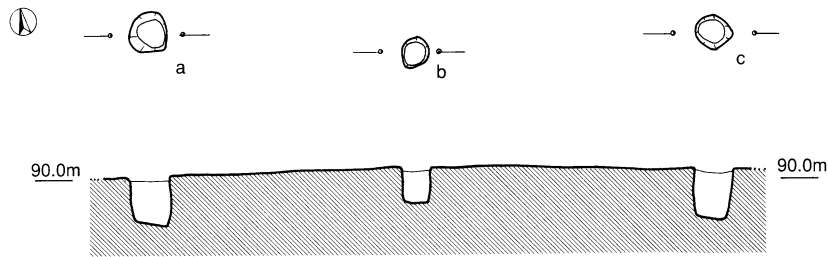
第22図 石坂遺跡 古代期 検出遺構配置図



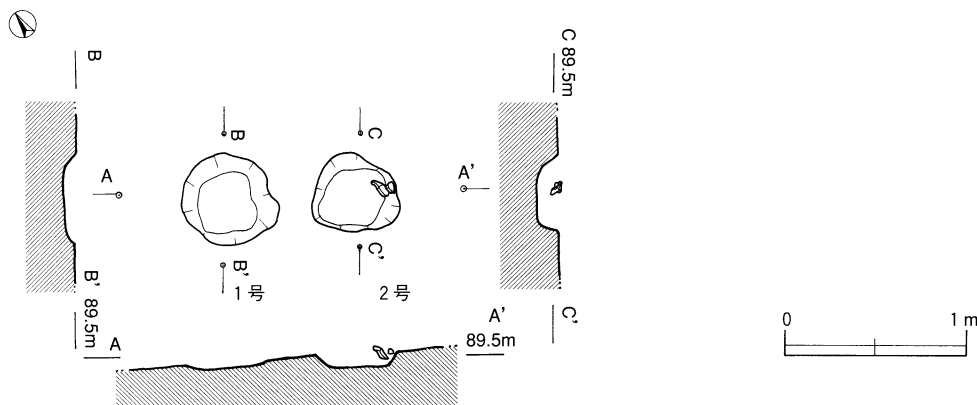
第23图 石坂遺跡 古代期 竖穴状遺構実測図 (1号・2号)



第24図 石坂遺跡 古代期 掘立柱建物跡実測図



第25図 石坂遺跡 古代期 ピット列実測図



第26図 石坂遺跡 古代期 焼土遺構実測図

(2) 掘立柱建物跡

1 基の掘立柱建物跡がB-5区Ⅲb層で検出された。桁行方向は3間、梁間方向は2間で構成される。ただし、梁間側では両方とも中央の柱穴を確認できなかった。また、柱穴規模は、上面長径が約20cm~25cm、深さが約20cm~45cmを測る。

(3) ピット列

B-5区で検出された掘立柱建物跡に隣接して、3個のピットが約150cm間隔で約330cmにわたり、東西方向に並んだ状態で検出された。東西両端のピットは、上面での長径が約20cm、深さ約25cmを測る。中央のピットは、上面での長径が約15cm、深さ約15cmを測る。

(4) 炉跡

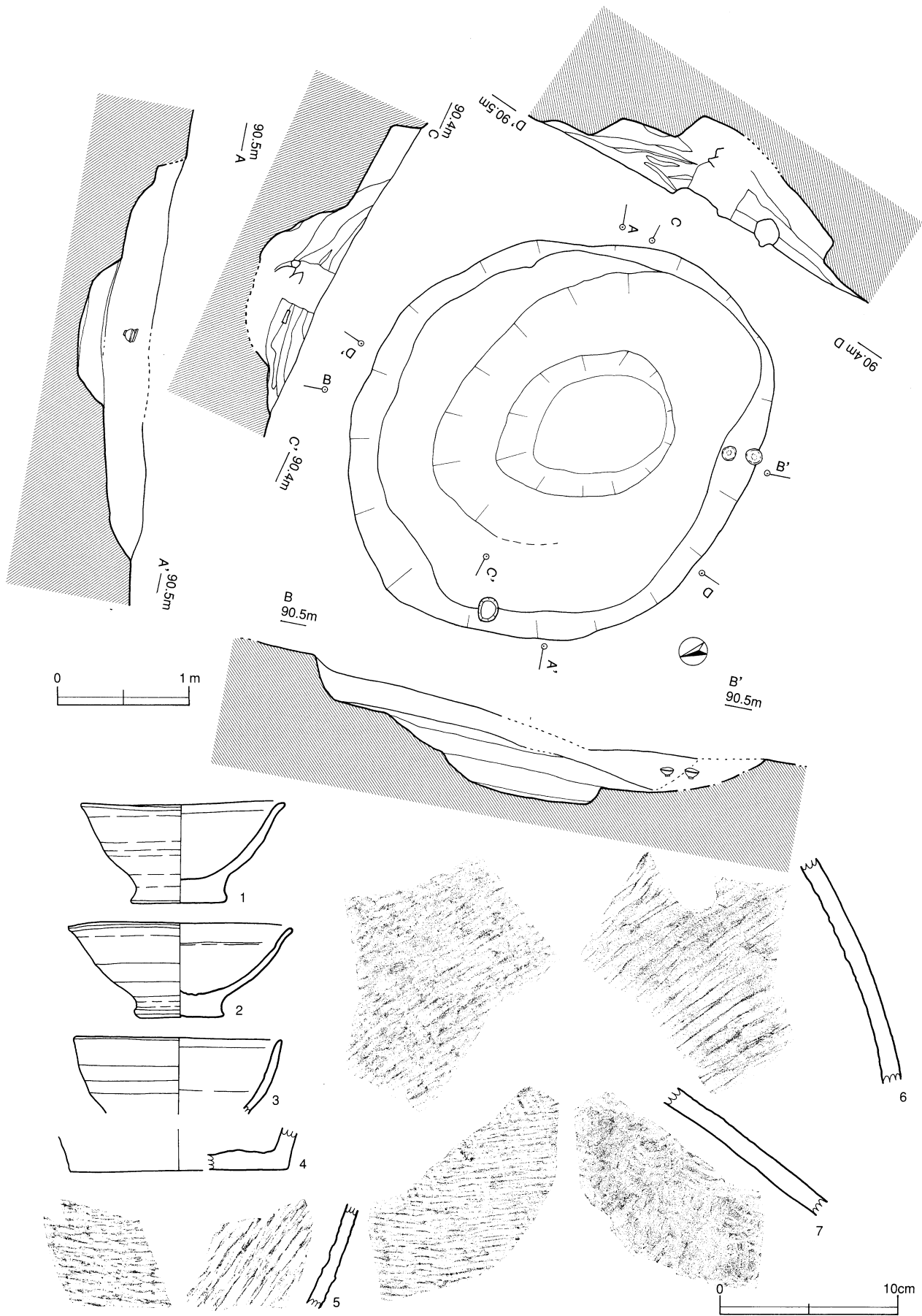
2 基の炉跡が、全てB-3区から検出された。

1号炉跡

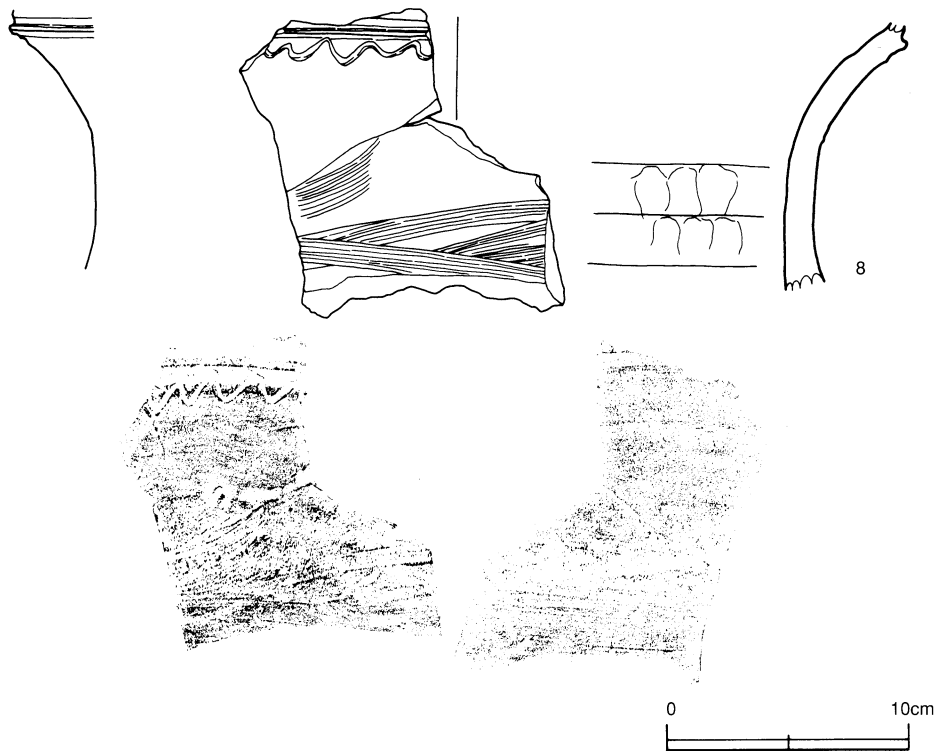
B-3区、Ⅲb層で2基隣接して検出されたうちの西側にある炉跡である。形状は、上面平面形が55cm×50cm、下面平面形が35cm×33cmを測る略円形を呈し、深さは検出面から約10cmあった。埋土が暗黄褐色を呈する粘質土が部分的に赤化し、炭化粒も観察できたことから、炉跡であると判断した。

2号炉跡

B-3区、Ⅲb層で2基隣接して検出されたうちの東側にある炉跡である。形状は、上面平面形が50cm×42cm、下面平面形が40cm×32cmを測る略円形を呈し、深さは検出面から約5cmあった。埋土が1号炉跡と同様な状況を呈していることから、炉跡であると判断した。



第27図 石坂遺跡 古代期 井戸状遺構実測図および出土遺物実測図1



第28図 石坂遺跡 古代期 井戸状遺構内出土遺物実測図 2

(5) 井戸状遺構

井戸状遺構がC-6区で1基検出された。遺構の調査は水が湧きだしたため途中で放棄せざるを得なかったものの、2段掘りの行われていることが確認された。検出面での平面形は330cm×288cmを測る略楕円形を、1段目での平面形は長軸が240cmを測る略楕円形を、2段目での平面形は140cm×110cmを測る略楕円形を呈し、検出面から掘り上げ面までの深さは74cmあった。

遺構内から出土した遺物は、古代期の遺物が中心であったが、中世期の遺物が混在することから、遺構としては中世期まで使用されていたと判断できる。また、古代期の土師器椀が正位置の状態ですべて2個並んで出土したことは、注目される。

出土遺物

井戸状遺構から出土した遺物の内8点を資料化した。1・2は古代土師器椀4類に分類した充実高台付土師器椀。体部が直線的に開き、口縁部が外反する。3は古代土師器椀1類に分類した、体部が内湾し、口縁部は直行する土師器椀。5～7は古代須恵器甕。6は表面に自然釉がかかる。4は中世瓦質土器甕底部。8は中世須恵器甕。口縁部直下に貼付突帯が1条、その直下に波状文が1条巡る。

第7表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期井戸内遺物

挿図番号	番号	区	分類	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基部径 cm	器高 cm	胎土	調整			文様	色調		実測図 No	
												外面	内面	その他		外面	内面		
27	1	井戸内	土師器	椀	4類	完形	11.3	5	4.9	5.6		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ			暗橙褐色～明橙褐色	明黄褐色～黄白色	843	
	2	井戸内	土師器	椀		完形	12.5	4.5	4.6	5.5		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	見込み部：左側の 図にハナナデあり		明橙褐色～黄白色	黄白色～橙褐色	844	
	3	井戸内	土師器	椀	1類	口縁部～体部	(11.4)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ			茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～黄白色	513	
	4	井戸内	瓦質土器	甕		底部～胴部下端		(11.9)				土粒はまばらし、 石化している	ナデ	ナデ			灰白色	暗紫褐色～暗黄褐色	511
	5	井戸内	須恵器	甕		体部						白色粒が若干 混じる	平行タタキ オサエ	格子目タタキ			灰色	灰色	512
	6	井戸内	須恵器	甕		胴部						礫が若干 混じる	斜位～縦位方向 の格子目タタキ	斜位方向の平行 タタキオサエ			暗紫褐色～暗茶褐色	暗灰褐色～暗黄褐色	509
	7	井戸内	須恵器			肩部							平行タタキ→ 格子目タタキ	青海波タタキ オサエ			暗紫褐色	灰褐色	516
28	8	井戸内	須恵器	甕		頸部～胴部						指頭圧痕→ ハケナデ	ハケ→ナデ		波状沈線文	灰褐色	黒褐色～灰褐色	510	

2 出土遺物（第29図～第56図）

石坂遺跡で出土した古代期の遺物は、土師器・黒色土器・赤色土器などの供膳具や、土師甕などの煮沸具の他に、須恵器・越州窯系青磁などが出土した。また、土製品では紡錘車が出土したほか、墨書土器や刻書土器がみつかった。

（1）土師器（第29図～第36図）

石坂遺跡で出土した土師器では、器種は坏や椀が主体となるが、他に鉢なども出土した。出土分布図（第29図）をみると、土師器は遺跡全体から出土しており、遺跡全体が当該期の生活の場であったと指摘できる。また、特にB・C-2・3区とC-5・6区とに土師器が集中して出土する傾向が認められそうである。

坏（第31図9～28）

石坂遺跡で出土した土師器坏のうち、20点を資料化した。

1類（第31図9～15）

底部と体部との境が不明瞭で、丸味を呈しながら体部へ移行する坏で、体部は主に直線的に立ち上がる。底部は若干上げ底となるものが多いが、平底となるもの（12・13）もみられる。9～11,13は底部の厚さが厚く成形されている。

2類（第31図16～20・22・23）

底部と体部との境が明瞭となり、体部が直線的に立ち上がる坏である。底部は平底となるものが多いが、若干上げ底となる（16）のもみられる。23は他と比べて特に底径が大きいのが特徴である。

3類（第31図21・24・25・28）

底部の腰が成形され、体部への立ち上がり際に段差がある坏で、体部は若干外反し立ち上がる。底部は平底となる。

4類（第31図26・27）

底部から体部への立ち上がり際にある段差の幅が厚くなる坏で、体部は外反しながら立ち上がる。

椀（第32図～第35図29～102）

石坂遺跡で出土した椀のうち、73点を資料化した。

1類（第32図29～41）

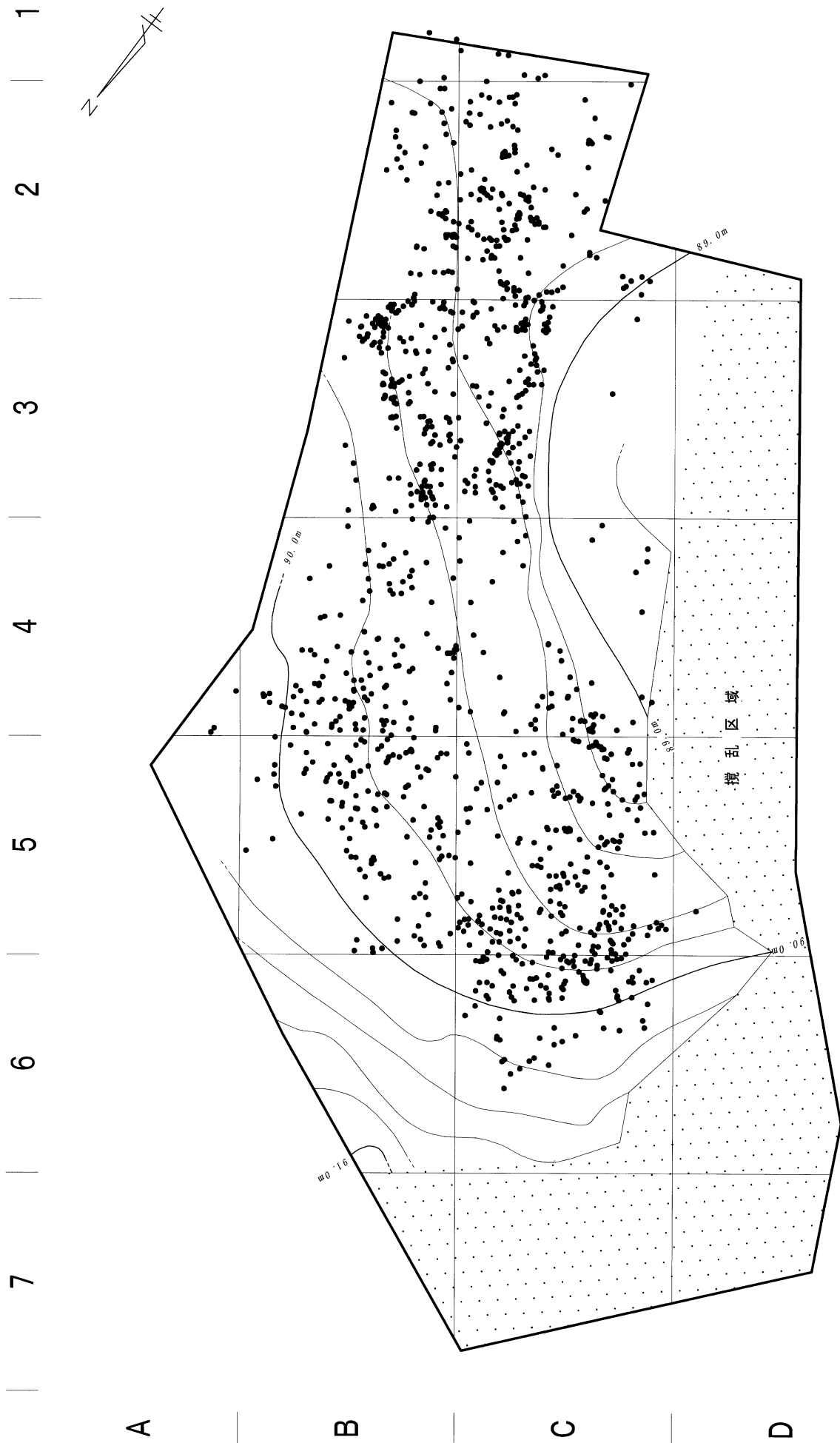
高台脚は器厚が細く、脚基部の径と脚端部の径との差がほとんどなく、開かない（34・35・38）か、開いても僅かである（39～41）土師器椀である。体部は内湾しながら立ち上がり（31・34）、口縁部は直行する（29・30）のが特徴である。高台内部は脚部付近が削られている（32・35～40）ため、中心部より窪んでいるのが多くみられる。

2類（第33図50～59）

高台脚は1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が少々開く（51～53）土師器椀である。体部下半は内湾しながら立ち上がる（50・56）のが特徴である。高台内部は脚部付近が削られている（54・55・57）のは1類と同様であるが、中心部との比高差は少ないが多い。

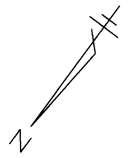
3類（第33図60～71）

高台脚は1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が開く（52～59）土師器椀である。2類と比べて3類は体部下半は直線的に立ち上がり（64・65）、高台内部は脚部まで丁

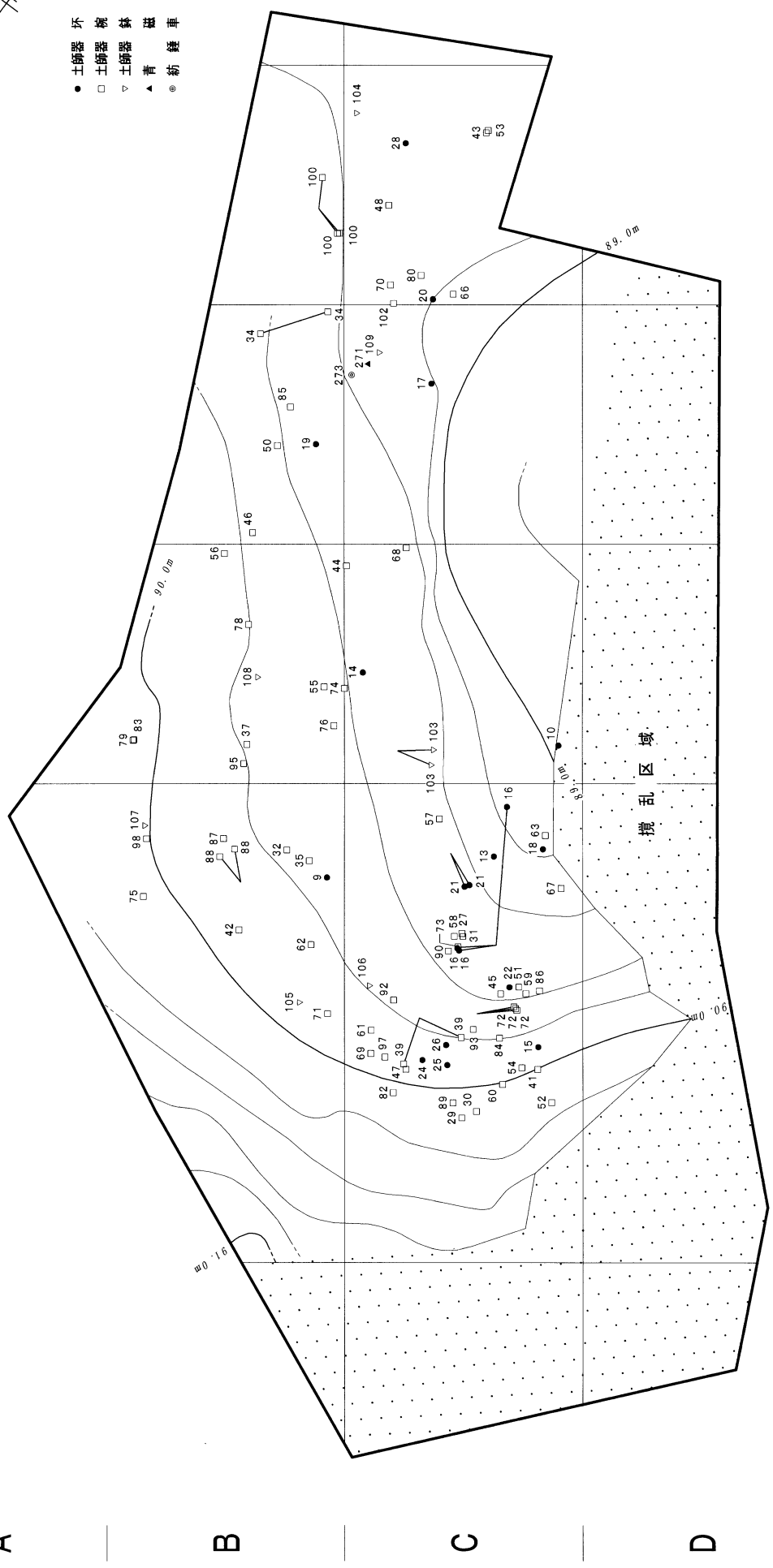


第29図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図1 (土師器総体)

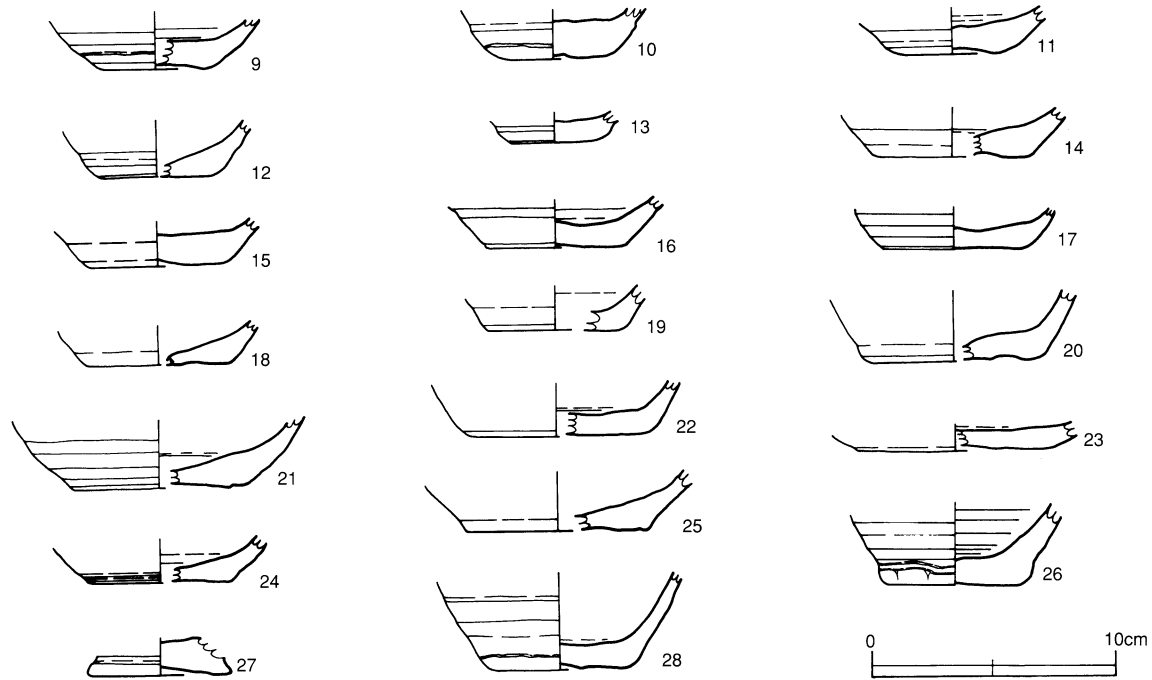
1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7



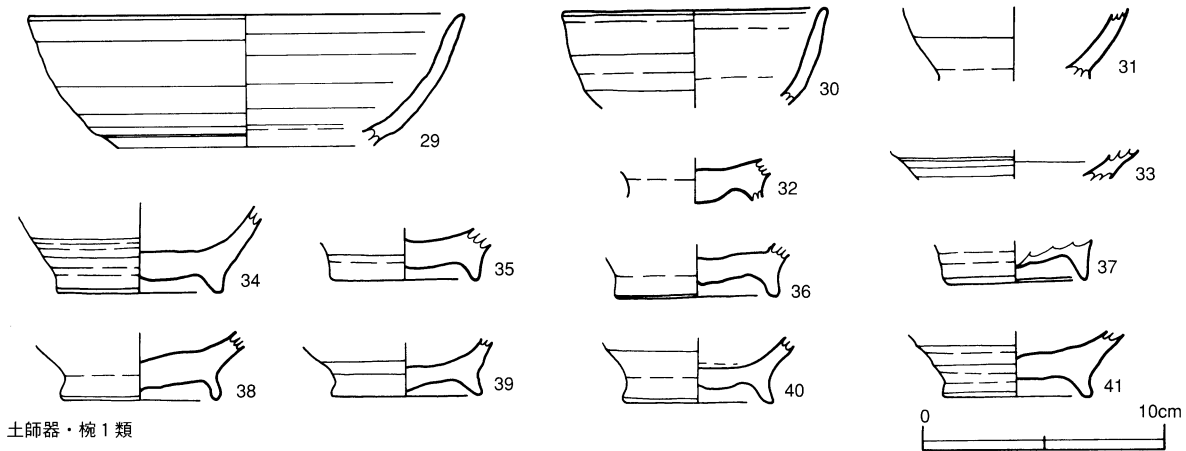
- 土師器 坏
- 土師器 碗
- ▽ 土師器 鉢
- ▲ 青 磁
- ◎ 紡 錘 車



第30图 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布图2(土師器・坏・碗)



第31図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図1 (土師器・坏)

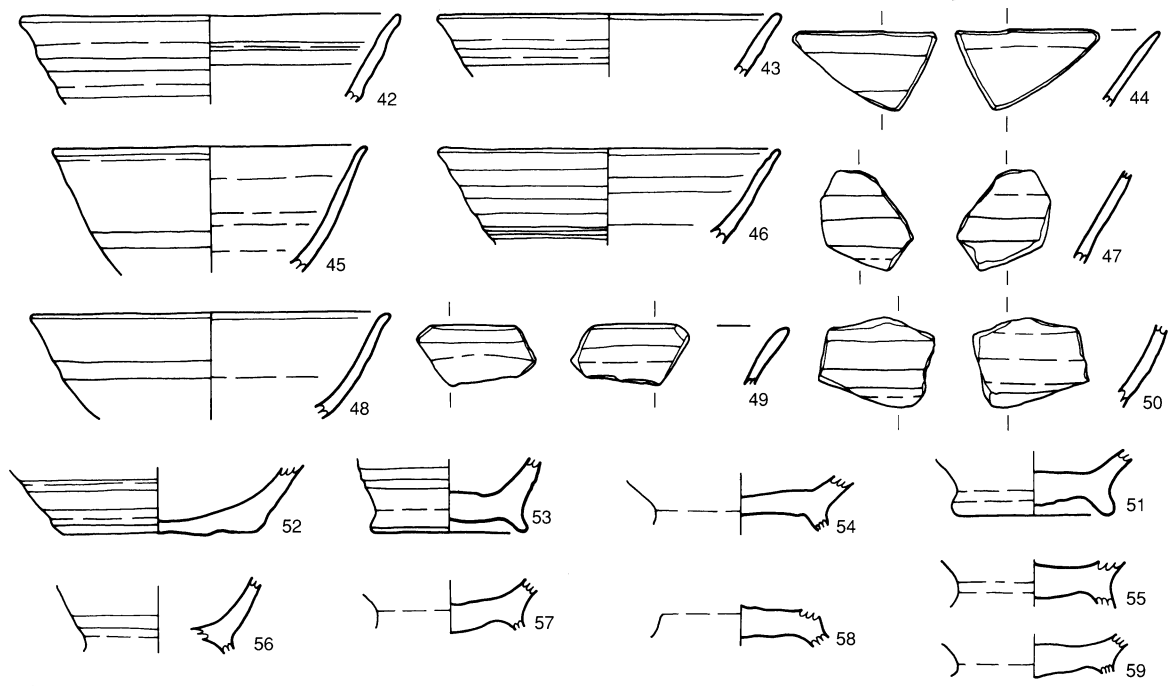


土師器・椀1類

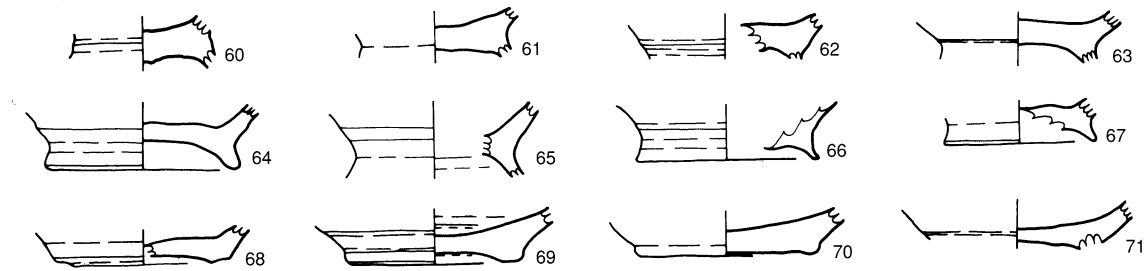
第32図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図2 (土師器・椀1)

第8表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器 (坏)

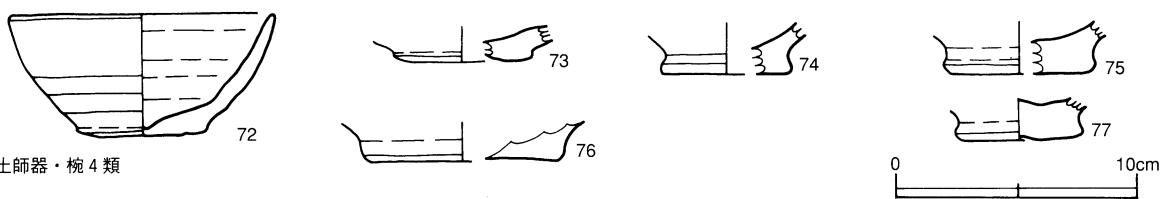
挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基部径 cm	胎土	調整			色調		備考	実測図 No		
											外面	内面	その他	外面	内面				
31	9	B5	II	1181	1類	体部~底部	(8.6)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色	暗黄褐色		183		
	10	C4	II	1229		底部~体部下半		(3.6)				ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色		193	
	11	B5	II			底部		3.6				ハケ→ナデ	ナデ		暗褐色	暗黄白色~灰褐色		196	
	12	C4	表			底部		(4.65)				ナデ	ナデ		暗黄褐色	暗褐色		185	
	13	C5	II	795		底部		(3)				ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色	暗黄褐色		184	
	14	C4	II	575		底部		(6.2)				ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~橙褐色	暗褐色~橙褐色		179	
	15	C6	II	992		底部~体部下半		(5.4)				ハケ→ナデ	ナデ	底：右回り回転ヘラ切り→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色		195	
		C5	II	713		2類	底部~体部下半		5.3		微砂粒		ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	橙褐色	暗黄褐色		169
		C5	II	886															
		C5	II	887															
		17	C3	II		228	底部		5.6		微砂粒		ハケ→ナデ	ナデ		明黄褐色	橙褐色~明黄褐色		192
		18	C5	II		824	底部~体部下端		5.8		石英 多く含む		ナデ	ナデ		暗黄褐色	暗黄褐色		181
		19	B3	II		289	底部		(5.4)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		明黄白色	明黄白色		187



土師器・椀2類



土師器・椀3類

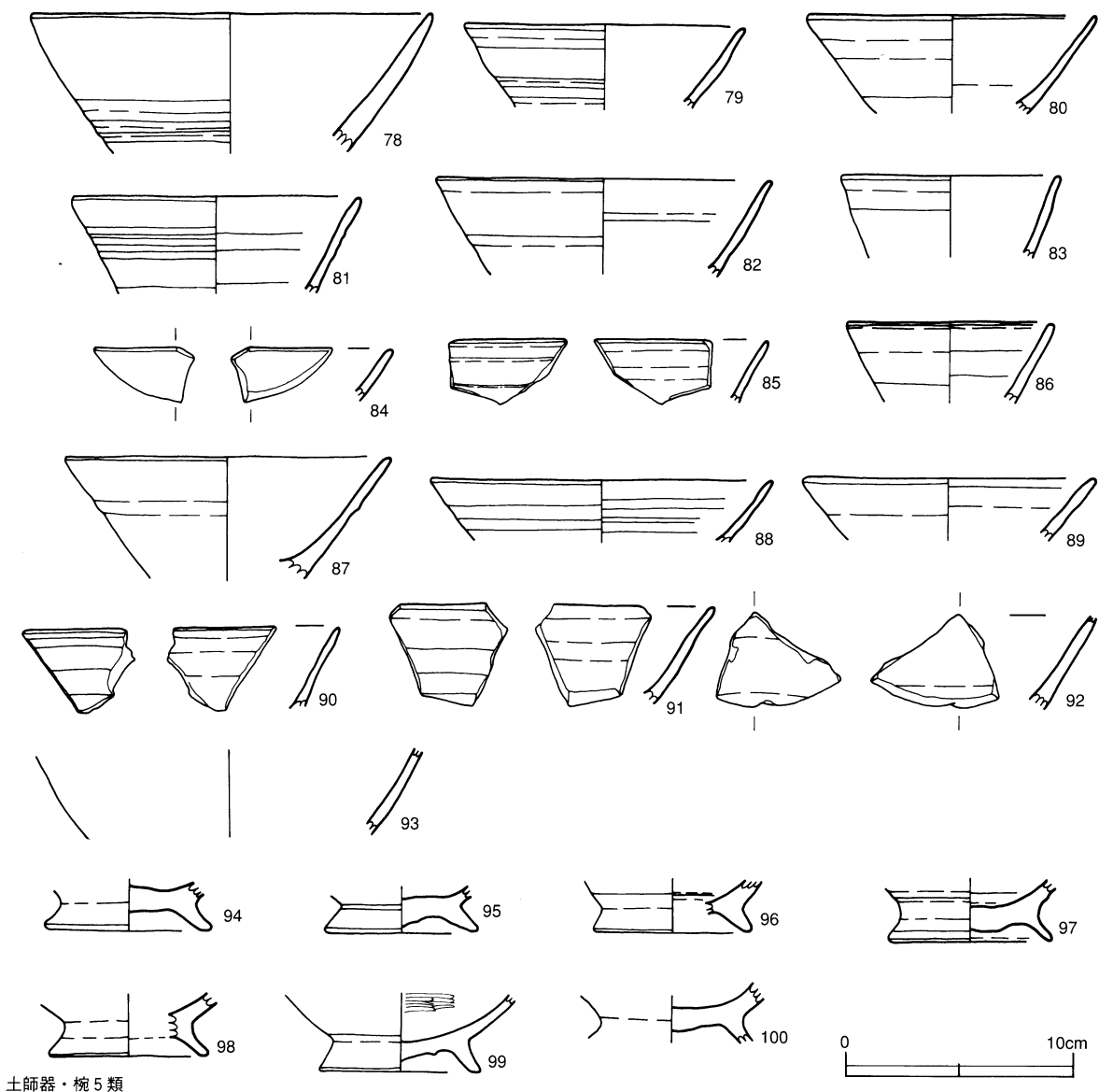


土師器・椀4類

第33図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図3 (土師器・椀2)

第9表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器(坏)

挿図番号	番号	Ⅹ	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基部径 cm	胎土	調整			色調		備考	実測図 No	
											外面	内面	その他	外面	内面			
31	20	C2	Ⅱ	79	2類	底部～体部下半		6.2			ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色	暗黄褐色		190	
	21	C5	Ⅱ	1279	3類	底部～体部下半		(6)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色～黒褐色	暗褐色～暗黄褐色		176	
		C5	Ⅱ	1283														
	22	C5	Ⅱ	875	2類	底部		6.5			ナデ	ナデ		明黄白色	明黄白色		189	
	23	B5	Ⅱ			底部		(7.4)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色～橙褐色	暗黄褐色		174	
	24	C6	Ⅱ	1063	3類	底部～体部下半		(5.8)			ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄白色	暗黄白色～橙褐色		186	
	25	C6	Ⅱ	949		底部～体部下半		(7.4)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色		191	
	26	C6	Ⅱ	1059	3類	底部～体部下半		5.2		微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色	暗黄褐色		194	
	27	C5	Ⅱ	958	4類	底部		(5)	(5.2)		ハケ→ナデ	ナデ		暗黄白色	暗褐色	充実高台	258	
	28	C2	Ⅱ	110	3類	体部～底部		(5.4)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転ヘラ切離し	橙褐色～黄褐色	黄褐色		173	



第34図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図4 (土師器・椀3)

寧になでられ窪みがみられないのが特徴である (63~67)。高台脚の高さは、1類や2類とほぼ同様の高さ (64) のもあるが、低い (66・67) のや、中心部を僅かに窪ませ、脚部が極端に低く、脚基部外面をわずかに窪ますことで見かけ上の脚部を作り出している (68~70) のもみられる。

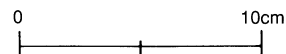
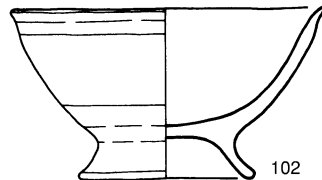
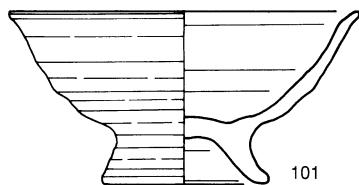
2類・3類に属する土師器椀口縁部 (第33図42~49)

口縁部から体部上半部かけての土師器椀片については、その形態が多様であったために、2類に属するのと3類に属するのを明瞭に分類し得なかったので、ここでまとめて記載する。

体部上半部は、直線的に開くのと外反して開く (44・47) のとがある。直線的に開くには、口縁部が直行する (42・43・46) のと、外反する (45・48) のとがみられた。

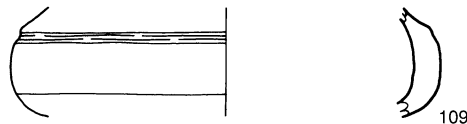
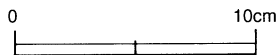
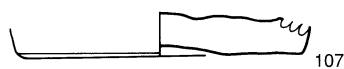
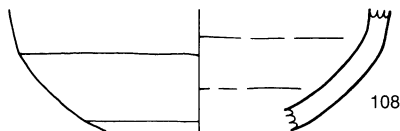
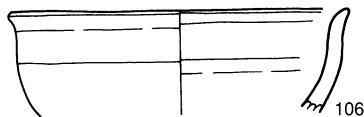
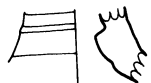
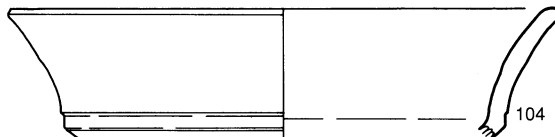
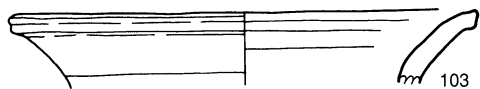
4類 (第33図72~77)

底面は平底 (72・74・76) か、あるいは僅かに上げ底 (73) となり、脚基部外面をしっかり意識的に段差をつけるのが特徴である。68~70は高台脚を貼付するのではなく、底面を若干上げ底にすること



土師器・椀6類

第35図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図5 (土師器・椀4)



第36図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図6 (土師器・鉢・他)

で「見かけの高台」を作り出している。72では体部下半は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直行している。75・77は「充実高台付土師器椀」「円柱状底部椀」と呼ばれる範疇に入る底部である。

5類 (第34図78~100)

高台脚は3類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、強く開く(94~100)土師器椀である。脚部形態には直線的に開く(95~97)のと外反しながら開く(94・98・99)のとがある。体部下半から体部上半・口縁部にかけて直線的に立ち上がるのが特徴であるが、口縁部が若干内湾する(78)のや、若干外反する(91)のがある。

6類 (第35図101・102)

高台脚は5類と比べ器厚が厚く、脚部形態は外反しながらしっかり強く開く土師器椀である。高台脚の高さが、1類や2類よりも高くなる。体部下半は内湾しながら立ち上がり、体部上半は直線的に口縁部へ移行し、口縁部は外反するのが特徴である。

鉢・その他 (第36図103~109)

103・104は大型の鉢,106・108は小型の鉢である。

第10表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（椀）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	胴基部径 cm	器高 cm	胎土	調整			色調		高台 高さ	備考	実測図 No		
												外面	内面	その他	外面	内面					
																				外面	内面
32	29	C6	II	984	1類	口縁部~体部	(18.8)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗茶褐色	暗黄褐色			199		
	30	C6	II	986		口縁部~体部	10.7					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄白色	暗黄白色			93		
	31	C5	II	889		体部下半			(6.2)				ハケ→ナデ	丁寧なナデ	底：ナデ	明黄白色	暗褐色~暗黄褐色			36	
	32	B5	II	688		底部			5.4				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			63	
	33	B2	表			底部			7.8				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	橙褐色	明黄褐色			46	
	34	B3	II	606		底部~体部下半		(6.7)	(6.8)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗黄褐色			53	
	35	B5	II	689		底部		(6)	(6.2)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~橙褐色	暗褐色			51	
	36	B5	II	689		底部		(6.4)	(6.6)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	明黄褐色	明黄白色			67	
	37	B4	II	484		底部		(5.6)	(6)				ハケ→ナデ	欠損	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			52	
	38	C5	II	927		底部~体部下半		(6.3)	(6.2)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗茶褐色	暗黄白色~暗褐色			59	
	39	C6	II	942		底部~体部下半		6	5.8			微砂粒	ハケ→ナデ	ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色	黄白色			213	
	40	表				底部~体部下半		(6)	(5.85)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	橙褐色	暗黄褐色~橙褐色			62	
	41	C6	III a	1021		底部~体部下半		(5.7)	(6)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	茶褐色~明黄白色			60	
	42	B5	II	382		口縁部~体部下半	15.3						同軸ヘラナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗黄褐色			82	
	43	C2	II	620		口縁部~体部上半	14						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	黒褐色~茶褐色	暗茶褐色~暗黄褐色			180	
	44	C4	III a	566		口縁部~体部							ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗褐色~暗黄白色	暗黄褐色			134	
	45	C5	II	1198		口縁部~体部下半	(12.8)						同軸ヘラナデ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗褐色~明黄褐色	暗褐色~明黄褐色			153	
	46	B3	II	660		口縁部~体部	14					微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			54	
	47	C6	II	943		体部							ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗褐色~暗褐色			158	
	48	C2	溝上	1118		口縁部~体部	14.4						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ハケ→ナデ	橙褐色	明黄褐色			263	
	49	C5	II	858		口縁部~体部							ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			153	
	50	B3	III a	1654		体部下半							ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	明黄白色	明黄白色			154	
	51	C5	II	873		底部~体部下半		6	6.2				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄白色			58	
	52	C6	II	997		底部~体部下半			(7.8)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色			42	
	53	C2	II	135		底部~体部下半		(6.2)	(6)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色~暗褐色			65	
	54	C6	II	1048		底部~体部下半		(6.9)	(6)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~黄白色	黄白色			55	
	55	B4	II	522		底部		6.2					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色~暗褐色			35	
	56	B4	II	560		底部~体部下半		(6)	(6)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗褐色	明黄褐色~暗褐色			47	
	57	C5	II	715		底部		5.9					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄褐色~暗褐色	明黄褐色~暗褐色			40	
	58	C5	II	765		底部		(6.6)					ハケ→ナデ	ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	橙褐色			43	
	59	C5	II	872		底部		(6.3)					ハケ→ナデ	ナデ	底：ハケ→ナデ	暗黄褐色	橙褐色			45	
	60	C6	II	987		底部		(5.7)					微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ハケ→ナデ	暗褐色	暗褐色	2.4	2.8	250
	61	C6	II	933		底部		6					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗褐色	暗褐色			249	
	62	B5	II	375		底部		(6.2)					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗褐色	暗褐色			34	
	63	C5	II	822		底部		(6.5)					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	暗茶褐色			41	
	64	B5	II	822		底部~体部下半		7.9	7.5				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色~暗褐色	暗黄褐色~暗褐色			56	
	65	C3	II	83		底部~体部下半		(6.4)					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色~暗褐色	暗黄白色			50	
	66	C5	II	83		底部~体部下半		(3.7)	(7)				ハケ→ナデ	観察不能	底：ナデ	明黄褐色	明黄褐色			262	
	67	C5	II	954		底部		(6.1)	(5.8)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗褐色~暗黄褐色	暗黄褐色			66	
	68	C4	II F	1402		底部		(5.6)	(5)				ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	黄白色			48	
69	C6	II	935	底部		(6.8)	(7.4)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	明黄褐色			254			
70	C2	II	659	底部		7	7.5				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			251			
71	B5	II	1176	底部		(7)					ハケ→ナデ	タテミガキ	底：ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色~茶褐色			37			
72	C5	II	878	底部							微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗黄白色	暗黄白色~暗褐色			260		
73	C5	II	998	底部		(10.6)	(3.4)	(5.4)	(5)		微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗黄白色	暗黄白色~暗褐色			260		
74	B3	II	543	底部~体部下半		(4.7)					ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			177			
75	B5	II	580	底部		5.4	5				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄褐色	暗黄褐色			252			
76	B5	II	367	底部		5.6	6				微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	明黄白色	明黄白色			253		
77	B4	II	1382	底部~体部下半		7.6	8.4				ハケ→ナデ	観察不能	底：ナデ	明黄褐色	明黄褐色			255			
78	表			底部		5	5				ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	橙褐色			248			
79	B4	II	543	口縁部~底部下半	(17.4)						微砂粒	ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~明黄白色	暗黄褐色~暗黄褐色			149		
80	C2	II	663	口縁部~体部	(12.3)						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	明黄褐色~暗黄褐色	明黄褐色			164			
81	B5	II	73	口縁部~体部	12.5						ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	明黄白色			264			
82	C6	II	972	口縁部~体部下半	12.6						微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	黄褐色			162		
83	B4	II	453	口縁部~体部	17.5						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	黄白色	黄白色			266			
84	C6	II	1050	口縁部~体部	9.3						ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄褐色	明黄褐色			267			
85	B3	III a	321	口縁部~体部上半							ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄褐色~暗褐色	暗褐色			161			
86	C5	II	870	口縁部							ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄褐色	明黄褐色			152			
87	B5	II	428	口縁部~体部	(9)						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			160			
88	B5	II	422	口縁部~体部	14.2						ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	明黄褐色			151			
89	B5	II	424	口縁部~体部	15						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗茶褐色	暗黄褐色			167			
90	C6	II	1031	口縁部~体部	(13)						ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗茶褐色	明黄褐色			268			
91	C5	II	1200	口縁部							ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	黄白色			156			
92	C3	II	910	口縁部							ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~黄白色	暗黄褐色~暗黄褐色			165			
93	C5	II	910	体部							ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗褐色~暗黄褐色			157			
94	C6	表	1055	体部							ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	明黄褐色	明黄褐色			265			
95	C6	表	474	底部		(7.1)	(5.8)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗褐色~暗黄褐色	暗黄白色			61			
96	B4	II	474	底部		6.6	5.2				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			33			
97	B4	III a	474	底部		(6.7)	(6.2)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色			39			
98	C6	II	939	底部~体部下半		(7)	(6)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色~暗黄褐色	明黄白色~暗黄褐色			57			
99	B5	II	448	底部		(6.9)	(5.6)				ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	明黄褐色			212			
100	C6	表		底部~体部下半		6.9	6				ハケ→ナデ	ミガキ	底：ナデ	暗黄白色	暗黄褐色~暗褐色			64			
101	B2	II	25	底部~体部下半				6.4			ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色~明黄白色	明黄白色			214			
102	C2	III a	171	底部~体部下半							ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色			68			
103	C2	III a	171	定形	(12.6)	(7)	(5.5)	(6.8)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	明黄白色	暗黄白色			211			

第11表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（鉢，その他）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整			色調		高台	備考	実測図 No
												外面	内面	その他	外面	内面			
36	103	C4	II	587	鉢	鉢	口縁部~頸部	(18.8)				ハケ→ナデ							

(2) 黒色土器 (第38図～第39図143～160)

石坂遺跡で出土した黒色土器は、154を除き、内面を丁寧に磨いた上でススを吸着させる黒色土器Aである。154は外面だけにススを吸着させる特異的なタイプである。黒色土器の器種は椀が主体となるが、坏や鉢なども出土した。出土分布図(第37図)をみると、土師器同様に遺跡全体から出土しており、特にC-5・6区に集中して出土する傾向が認められそうである。また、黒色土器では30mほど離れた地点で出土した遺物が接合関係にある例があった。

なお、本報告での分類は土師器に準じた。

坏 (第38図110～114)

石坂遺跡で出土した土師器坏のうち、5点を資料化した。

1類 (第38図110～112)

底部と体部との境が不明瞭で、丸味を呈しながら体部へ移行する坏である。底部厚が厚く成形されるタイプのものである。

2類 (第38図113)

底部と体部との境が明瞭となり、体部が直線的に立ち上がる坏である。底部残存部は平底である。

3類 (第38図114)

底部の腰が成形され、体部への立ち上がり際に段差がある坏である。底部残存部は平底である。

椀 (第38図～第39図115～159)

石坂遺跡で出土した椀のうち、45点を資料化した。

1類 (第38図115～126)

高台脚は器厚が細く、脚基部の径と脚端部の径との差がほとんどなく、開かない(118・119・123～125)か、開いても僅かである(120・121)土師器椀である。体部は内湾しながら立ち上がり(116・122)、口縁部は直行する(115・117)のが特徴である。

2類 土師器椀2類に準ずる資料はみられなかった。

3類 (第38図127～144)

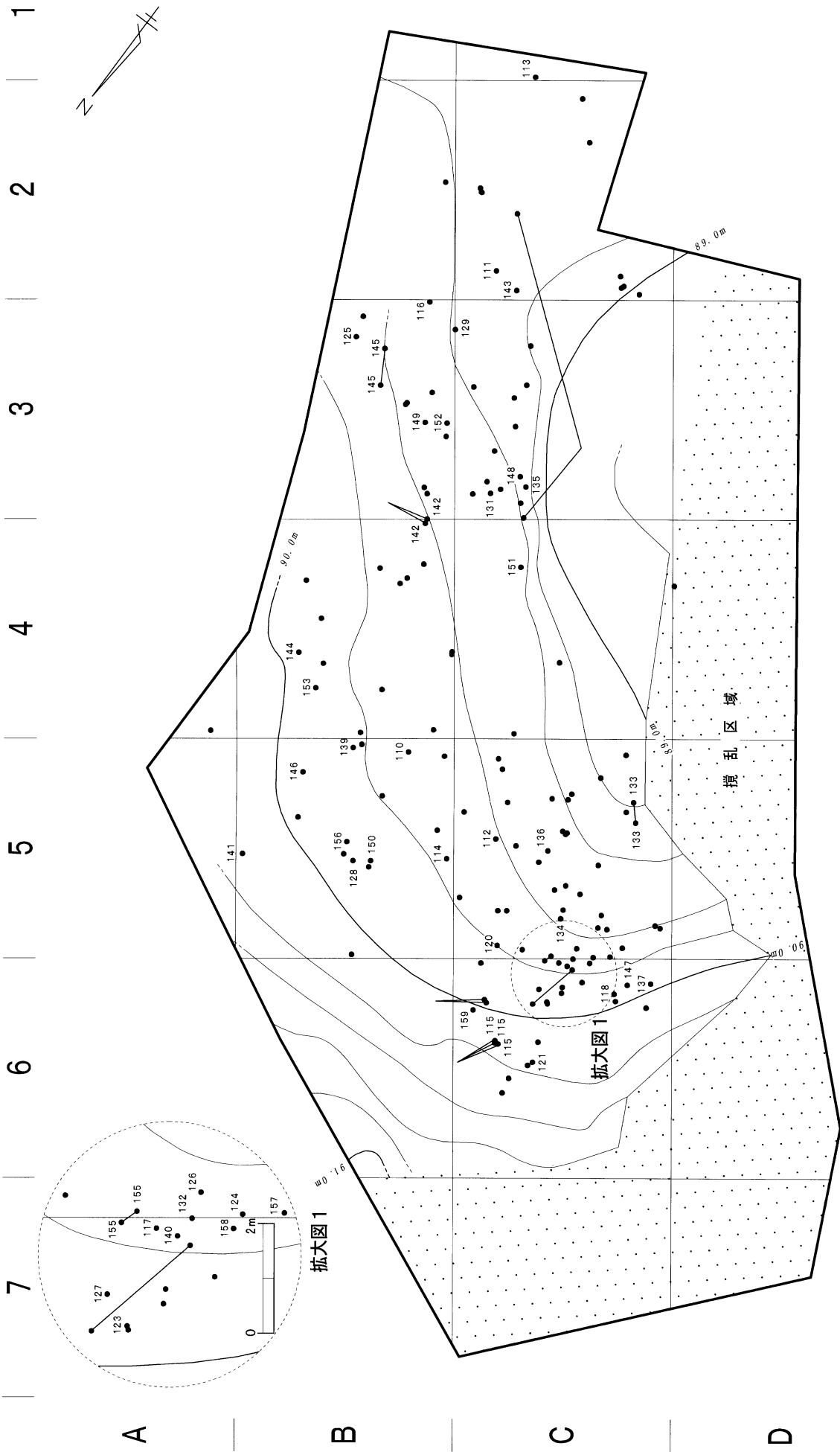
高台脚は、1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が開く土師器椀である。高台内部は脚部まで丁寧に磨かれて、脚基部の窪みが見られないのが特徴である。高台脚の高さは1類や2類とほぼ同様の高さである。土師器椀で見られた脚部が低いのはみられなかった。体部下半は直線的に立ち上がるのが多いが、内湾する(137・138)のものもある。

体部上半部は、直線的に開くのと若干内湾しながら口縁部が外反する(127～129)のことがある。直線的に開くには、口縁部が直行する(130・132)のと、外反する(131)のものがみられた。

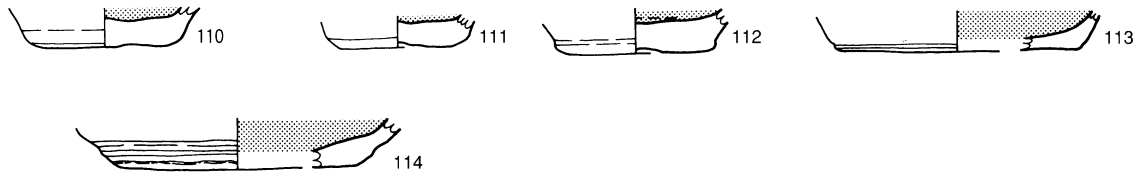
4類 土師器椀4類に準ずる資料はみられなかった。

5類 (第39図145～156)

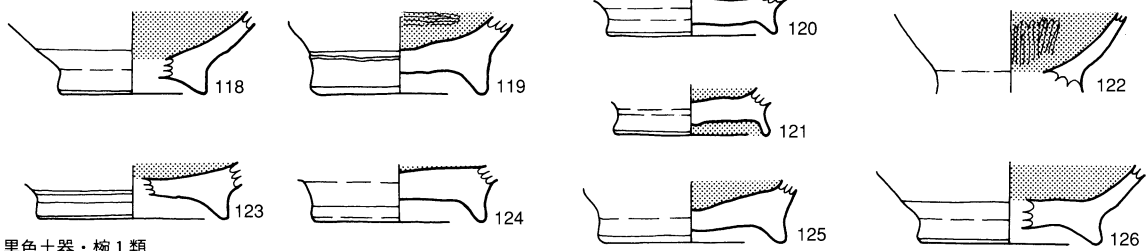
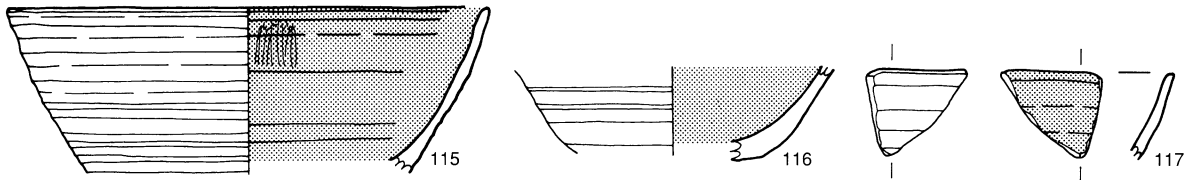
高台脚は3類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、強く開く(149～156)土師器椀である。脚部形態には直線的に開く(149・151・153)のと外反して開く(146・150・155・156)のことがある。土師器椀5類にはみられなかった内湾しながら開く(152)のが特異的である。体部下半から体部上半・口縁部にかけて直線的に立ち上がる(145・147・148)のが本類の特徴であるが、体部下半から体部上半にかけて内湾する(146)のことがみられることが特に指摘できる。



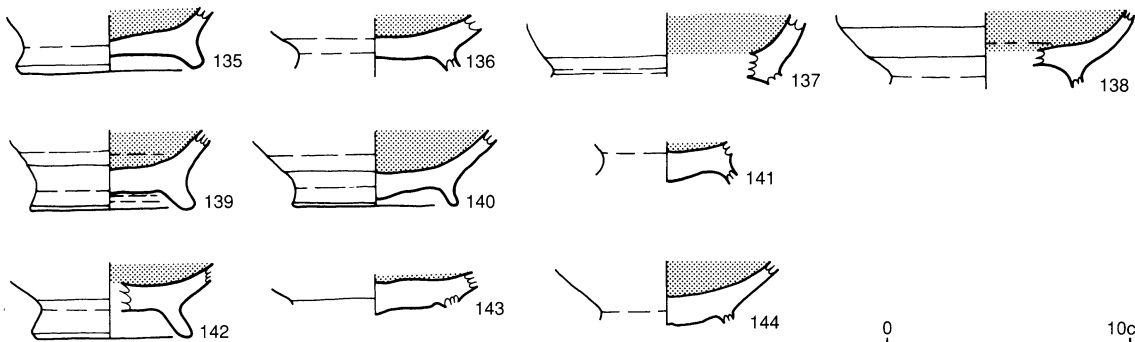
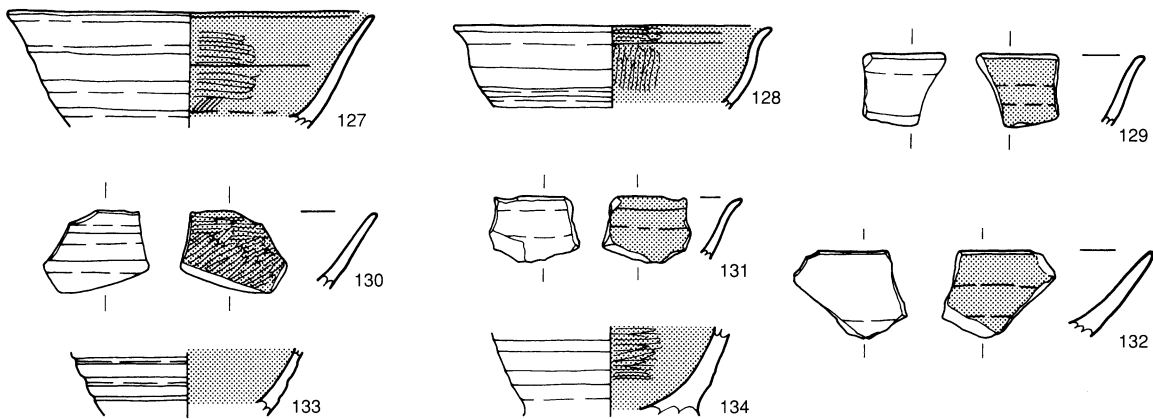
第37図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図3 (黑色土器)



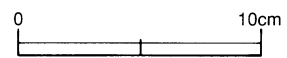
黑色土器・坏



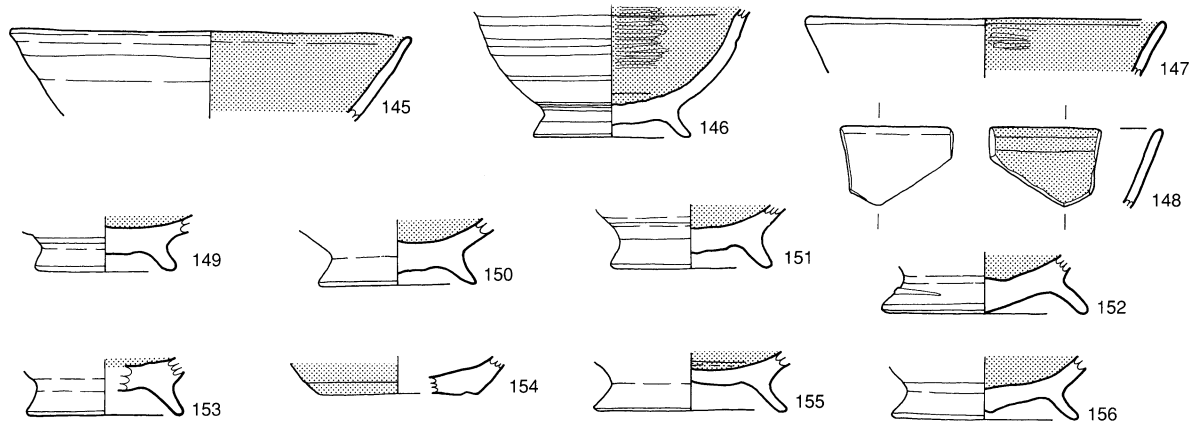
黑色土器・碗1類



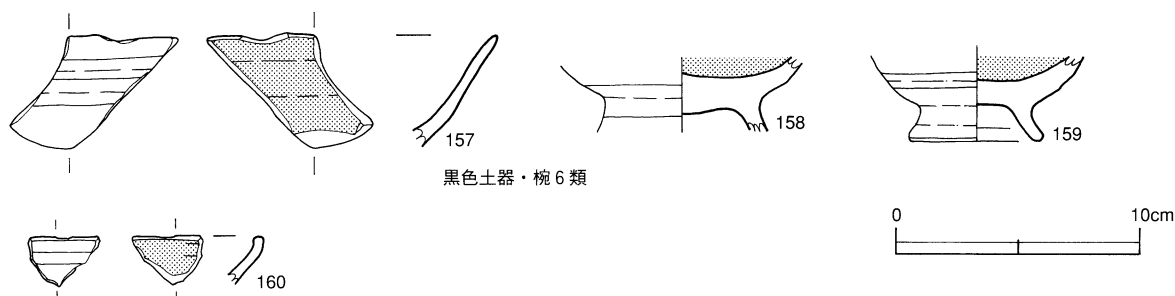
黑色土器・碗3類



第38図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図7 (黑色土器1)



黒色土器・椀5類



黒色土器・椀6類

黒色土器・鉢

第39図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図8 (黒色土器2)

6類 (第39図157~159)

高台脚は5類と比べ器厚が厚く、脚部形態は外反しながらしっかり強く開く土師器椀である。高台脚の高さが、1類や2類よりも高くなる。体部下半は内湾しながら立ち上がり、体部上半は直線的に口縁部へ移行し、口縁部は外反するのが特徴である。

鉢・その他 (第39図160)

160は鉢の口縁部である。

第12表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器 (黒色杯)

挿図番号	番号	Ⅰ区	層	遺物番号	細別	部 位	底径 cm	調 整		色 調		備考	実測図 No
								外面	内面	外面	内面		
38	110	B5	Ⅱ	673	1類	底部	(5)	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~灰褐色	暗黄褐色~灰褐色		143
	111	C2	Ⅱ	96		底部~体部下端	4.5	ナデ	ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗褐色~黒褐色		27
	112	C5	Ⅱ	1189	2類	底部	(5.3)	ヨコハケ→ナデ	観察不能	黒褐色~暗茶褐色	暗茶褐色		142
	113	C1	Ⅲ a	1319		底部	(9.2)	ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色	黒褐色		144
	114	C5	Ⅱ	796		3類	底部	(9.6)	ヨコナデ	ヨコ方向の丁寧なナデ	黄褐色	暗褐色~黄褐色	口縁端部内湾

第13表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器 (黒色椀)

挿図 番号	番号	Ⅰ区	層	遺物番号	細別	部 位	口径 cm	底径 cm	脚部径 cm	胎土	調 整		色 調		高台		備考	実測図 No			
											外面	内面	外面	内面	高さ	幅					
38	115	C6	Ⅱ	1037	1類	口縁部~体部下半	19.4				ハラケズリ	タテミガキ	暗黄褐色~灰褐色	黒褐色				139			
		C6	Ⅱ	1038																	
		C6	Ⅱ	973																	
	116	B3	Ⅱ	309		体部下半		7.2	微砂粒	ハケ→ナデ	タテミガキ		暗黄褐色	黒褐色					28		
	117	C6	Ⅱ	1058		口縁部~体部						ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色~暗黄褐色	黒褐色					131	
	118	C6	Ⅱ	1049		底部~体部下半	(6)	(6.1)				ハケ→ナデ	タテミガキ	暗黄褐色~茶褐色	黒褐色	1.3	1.4			22	
	119	B5	Ⅱ	371		底部~体部下半	(6.8)	(7.1)				ハケ→ナデ	ヨコミガキ	暗茶褐色~暗黄褐色	黒褐色	2.1	1.5			8	
	120	C5	Ⅱ	917		底部	6.8	6.8				ハケ→ナデ	ミガキ	底:右回り回転ハラケ削りナデ	橙褐色	暗褐色					3
	121	C6	Ⅱ	978		底部	6.15	5.95				ハケ→ナデ	ナデ	底:右回り回転ハラケ削り	橙褐色	黒褐色	1.5	0.7			5
	122	C6	表			体部下半		(5.9)				ハケ→ナデ	タテミガキ	暗黄褐色	黒褐色					26	
	123	C6	Ⅱ	974		底部~体部下端	(7.7)	(7.8)		微砂粒		ハケ→ナデ	タテミガキ	橙褐色	黒褐色	1.5	1.4			29	
	124	C5	Ⅱ	1033		底部	7.1	7				ハケ→ナデ	ナデ	底:ナデ	暗黄褐色	黒褐色					15
	125	B3	Ⅱ	335		底部	(7.4)	(7.5)				ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色~暗黄褐色	暗褐色~黒褐色					20	
	126	C5	Ⅱ	1040		底部~体部下半	(7)	(7.4)				ハケ→ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色	暗茶褐色~黒褐色	1.8	1.8			23	
	127	C6	Ⅱ	945		3類	口縁部~体部下半	15.1			微砂粒	ナデ	体部:ヨコミガキ	体部下端:タテミガキ	暗黄褐色	暗褐色~灰褐色					130

第14表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（黒色椀）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	胴部径 cm	胎土	調整		色調		高台		備考	実測図 No		
											外面	内面	外面	内面	高さ	幅				
																			塗布部位	
38	128	B5	II	387	3類	口縁部~体部下	13			微砂粒	ナデ	体部:タテミガキ 口縁:ヨコミガキ	暗黄褐色	暗褐色				135		
	129	B3	II	305		口縁部~体部					ハケ→ナデ	ナデ		暗褐色~黒褐色	黒褐色				120	
	130	C6	表			口縁部~体部					ナデ	ミガキ		黒褐色~暗褐色	黒褐色				140	
	131	C3	II	268		口縁部~体部					ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄褐色~暗褐色	黒褐色				123	
	132	C6	II	1054		口縁部~体部					ハケ→ナデ	ミガキ		暗褐色~暗黄褐色	黒褐色				129	
	133	C5	II	1206		体部下					ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄白色	黒褐色				137	
	134	C5	II	882		体部					ハケ→ナデ	ヨコミガキ		暗黄白色	暗褐色~暗黄白色				21	
	135	C3	II	647		底部~体部下	6.8	6.8			ハケ→ナデ	ナデ	底:右回り回転ヘラ切り磨し	暗黄褐色	暗褐色				2	
	136	C5	II	895		底部		(6.3)			ハケ→ナデ	タテミガキ		暗黄褐色~暗褐色	暗褐色~暗黄白色				9	
	137	C6	II	994		底部~体部下		(9.4)			ハケ→ナデ	ミガキ		暗褐色~暗黄褐色	黒褐色				24	
	138	C6	表			底部~体部下		(7.1)			ハケ→ナデ	タテミガキ		暗褐色~暗黄褐色	黒褐色				30	
	139	B5	II	409		底部	(6.3)	(6.2)			ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄白色	黒褐色	1.8	1.4		13	
	140	C6	II	1056		底部~体部下	(6.6)	(6.4)			ハケ→ナデ	タテミガキ	底:右回り回転ヘラ切り磨し	暗黄褐色	暗褐色~暗黄褐色	1.4	1		17	
	141	B5	II	366		底部		(5.2)			ハケ→ナデ	同心円ミガキ		暗黄褐色	暗褐色				10	
142	B4	II	563	底部~体部下	(6)	(5.6)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色	暗褐色~暗黄褐色	2.2	1.5		31			
143	C2	II	68	底部		(6.7)			ハケ→ナデ	ナデ		暗褐色~暗黄褐色	暗褐色~暗黄褐色				4			
144	B4	II	505	底部~体部下		(5.3)			ハケ→ナデ	タテミガキ	底:ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗褐色				19			
39	145	B3	III a	331	5類	口縁部~体部上	16.4				ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗黄褐色			口縁部外反	132		
	146	B5	II	439		底部~体部上		6.2	5.4		ハケ→ナデ	ヨコミガキ		暗黄白色	暗褐色	1.4	1.2		14	
	147	C6	II	1019		口縁部~体部上	(6.4)				ハケ→ナデ	ミガキ		暗褐色	暗褐色				125	
	148	C3	II	1335		口縁部~体部					ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色~暗褐色	暗褐色				136	
	149	B3	II	290		底部~体部下	(5.5)	(5.1)			ハケ→ナデ	ヨコミガキ		暗褐色~暗黄褐色	暗褐色				18	
	150	B5	II	385		底部~体部下	(6.4)	(5.3)			ハケ→ナデ	ミガキ	底:右回り回転ヘラ切り磨し	暗褐色~暗黄褐色	暗褐色				11	
	151	C4	II	572		底部~体部下	(6.35)	(5.8)			ハケ→ナデ	ミガキ	底:右回り回転ヘラ切り磨し	暗褐色~暗黄褐色	暗褐色	1.7	1.6	底部:暗褐色	12	
	152	B3	II	297		底部	(7.9)	(6.5)			ハケ→ナデ	ミガキ		暗褐色~暗黄褐色	暗褐色				7	
	153	B4	II	512		底部	(6)	(5.5)			ハケ→ナデ	ナデ		茶褐色	暗褐色	2	1.6		25	
	154	C6	II	996		底部		6.3			ハケ→ナデ	ナデ	底:ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗黄褐色				49	
	155	C5	II	1036		底部~体部下	(7.4)	(6.4)			ハケ→ナデ	ナデ	底:ナデ	暗黄褐色~暗黄白色	暗褐色~暗黄褐色	1.8	2		32	
	156	B5	II	390		底部~体部下	7.3	6.3			微砂粒	ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄白色	暗褐色				6
	157	C6	II	1018		口縁部~体部					ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色				163	
	158	C6	II	922		底部		(5.55)			赤色粒	ハケ→ナデ	ナデ	底:ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗褐色				1
	159	C6	II	937		底部~体部下	(5.2)	(4.6)			ハケ→ナデ	ナデ	底:ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗黄褐色	2.5	1.7		16	
	160	B3	II			口縁部~体部					ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄褐色~暗黄褐色	暗褐色				119	

第15表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（赤色杯）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚部径 cm	胎土	調整		色調		備考	実測図 No
											外面	内面	外面	内面		
41	161	C5	II	597	1類	底部	(4.6)				ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	底:赤褐色~暗黄褐色	175
	162	C6	II	1053	2類	底部~体部	5				ハケ→ナデ	丁寧なナデ	茶褐色~黄褐色	茶褐色~黄褐色		202
	163	C3	II	165		底部	(6.25)				ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色	赤褐色~暗黄褐色		203
	164	B5	II	693	3類	底部	8.6	8.4		微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	黄白色	黄白色~赤褐色		205

第16表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（赤色椀）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	胴部径 cm	胎土	調整		色調		器形	高台		備考	実測図 No		
											外面	内面	外面	内面		高さ	幅				
																				塗布部位	
41	165	C3	II		1類	口縁部~体部	8.8				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗黄褐色					166		
	166	B5	II	395		底部	(7.1)	(7)			ナデ	ハケ→ナデ		黄褐色	黄褐色				108		
	167	C4	I b	1254		底部	(6.95)	(7)			ハケ→ナデ	ミガキ		赤褐色~暗黄褐色	赤褐色~暗黄褐色	1.7	1.1	残存内面全体 ~体部下	105		
	168	C4	II	578		底部	(7)	(6.6)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色	赤褐色	1.7	1.3	残存内面全体	113		
	169	C5	II	1214		底部	(6.9)	(6.4)			ハケ→ナデ	ナデ		黄褐色	明赤褐色	1.9	1	残存内面全体	100		
	170	C6	II	1060		底部~体部下	(5.8)	(6)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		茶褐色~黄白色	茶褐色~黄白色				201		
	171	B3	II	632		底部	(7.95)	(7.9)			微砂粒	横ハケ→ナデ	横ハケ→ナデ		赤褐色	暗黄褐色~暗黄褐色				208	
	172	B5	II	786		底部	(6.4)	(5.85)			ハケ→ナデ	ナデ		明茶褐色	明茶褐色	1.8	1.3		110		
	2・3類	173	C5	II		755	2・3類	口縁部~体部	(16.4)				ハケ→ナデ	ナデ		明茶褐色~暗黄褐色	暗黄褐色	口縁部外反		化粧土	71
		174	C5	II		743		口縁部~体部	(11.6)				ナデ	ナデ		赤褐色	赤褐色				168
		175	B4	III a		537		口縁部~体部上					ハケ→ナデ	ミガキ		暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗黄褐色				92
		176	B5	II		418		体部下					ナデ	タテミガキ		暗黄褐色~暗黄褐色	赤褐色			残存内面全体	79
		177	D5	III a		1227		体部下	(6.4)	(6.4)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		明黄褐色	暗褐色~赤褐色			内面スリ着	87
		178	C6	II		1089		体部下					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色	暗黄褐色			残存内面全体	95
		179	C5	II		867		底部~体部下	(6.6)	(6.4)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄白色~赤褐色	暗黄褐色				247
		180	B4	II		475		底部	(5.8)	(5.6)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗黄褐色				215
		181	B4	III a		540		底部	(7.25)	(7)			ハケ→ナデ	ナデ	底:右回り回転ヘラ切り磨し	暗黄褐色	暗黄褐色				198
		182	B5	II		392		底部	(6.8)	(6.3)			ハケ→ナデ	ナデ	見込み部:回転ヘラナデ	暗黄褐色	明黄褐色				200
	183	B3	II	348		底部~体部	(7)	(7)			ハケ→ナデ	丁寧なナデ	底:ナデ	赤褐色	赤褐色~暗黄褐色				115		
	184	C5	II	1194		体部~底部	(6.8)	(6.3)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		茶褐色~黄白色	茶褐色~黄白色	1.8	1.4		114		
	185	C3	II	219		体部~高台	(8.9)	(8.6)			ハケ→ナデ	タテミガキ		暗黄褐色	赤褐色	1.8	1.3	残存内面全体	103		
	186	B2	表			底部		6.4			ハケ→ナデ	ナデ	底:ナデ	赤褐色	暗黄褐色				44		
	187	B4	II	509		3類	底部	(6.3)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		黄褐色	暗黄褐色~赤褐色			残存内面全体	99	
	188	D6	溝内			底部		(7)				ナデ	ミガキ		明黄褐色	赤褐色				197	

(3) 赤色土器 (第41図～第42図161～219)

通常、内赤土器・内朱土師器に分類される1群である。石坂遺跡で出土した赤色土器には、内面だけでなく、外面にも赤色顔料を塗布した(183,184ほか)のがみられることから、黒色土器にならない「赤色土器」とした。赤色土器の器種は黒色土器と同様に、椀が主体となるが坏や鉢なども出土した。出土分布図(第40図)をみると、土師器同様に遺跡全体から出土しており、特にB・C-5区に集中して出土する傾向が認められそうである。

なお、本報告での分類は土師器に準じた。

坏 (第41図161～164)

石坂遺跡で出土した土師器坏のうち、4点を資料化した。

1類 (第41図161)

底部と体部との境が不明瞭で、丸味を呈しながら体部へ移行する坏である。底部厚が厚く成形されるタイプのものである。

2類 (第41図162～163)

底部と体部との境が明瞭となり、体部が直線的に立ち上がる坏である。底部残存部は平底となる(162)のと若干上げ底となる(163)のがある。

3類 (第41図164)

底部の腰が成形され、体部への立ち上がり際に段差がある坏である。底部残存部は平底である。

椀 (第41図～第42図165～218)

石坂遺跡で出土した椀のうち、54点を資料化した。

1類 (第41図165～172)

高台脚は器厚が細く、脚基部の径と脚端部の径との差がほとんどなく、開かない(170・171)か、開いても僅かである(168・169)土師器椀である。脚部形態に内湾する(172)のがみられることは特異的である。体部は内湾しながら立ち上がり(167)、口縁部は直行する(165)のが特徴である。高台内部は脚部付近が削られている(166・167)ため、中心部より窪んでいるのが多くみられる。

2類 (第41図176～185)

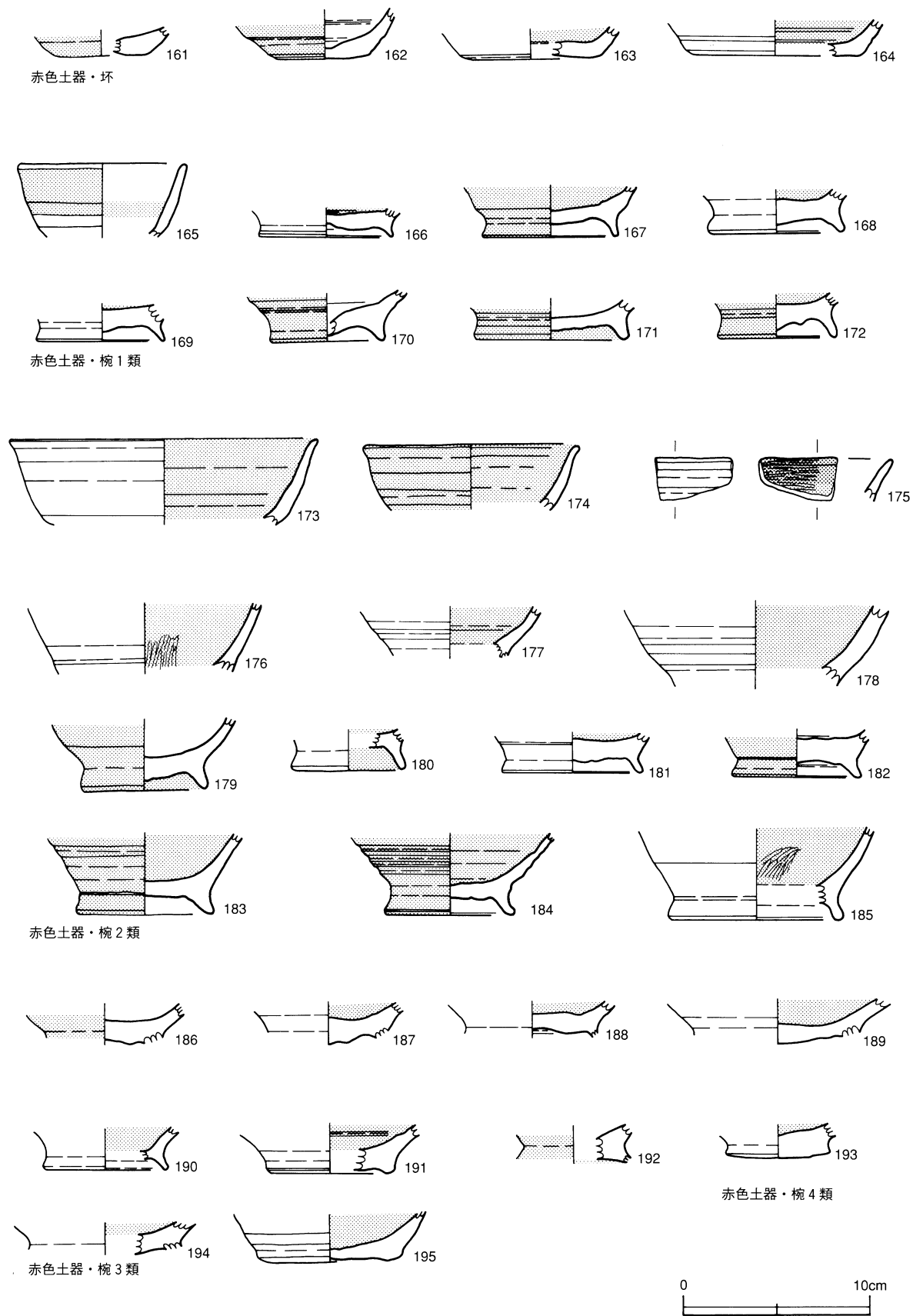
高台脚は1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が少々開く(179～185)土師器椀である。脚部形態に内湾する(185)のがみられる。体部下半は内湾しながら立ち上がる(176～178)のが特徴である。高台内部は脚部付近が削られている(181～184)のは1類と同様であるが、中心部との比高差は少ないが多い。

3類 (第41図186～192・194・195)

高台脚は、1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が開く土師器椀である。2類と比べて3類は体部下半は直線的に立ち上がり(186～189)、高台内部は脚部まで丁寧になでられ窪みがみられないのが特徴である(190～192)。高台脚の高さは、1類や2類とほぼ同様の高さ(190)のものもあるが、低い(191)のや、中心部を僅かに窪ませ、脚部が極端に低く、脚基部外面をわずかに窪ますことで見かけ上の脚部を作り出している(195)のもみられる。

2類・3類に属する土師器椀口縁部 (第41図173～175)

口縁部から体部上半部かけての土師器椀片については、体部上半部が直線的に開くタイプのうち、口縁部が外反する(173・174)のがみられた。



第41图 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図9 (赤色土器1)

4類 (第41図193)

脚基部外面をしっかりと意識的に段差をつけるのが特徴である。191は「充実高台付土師器椀」「円柱状底部椀」と呼ばれる範疇に入る底部である。

5類 (第42図196~214, 216~218)

高台脚は3類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、強く開く(149~156)土師器椀である。脚部形態には直線的に開く(213・214)。黒色土器椀5類にみられた内湾しながら開く(215・217・218)タイプが赤色土器でもみられた。体部下半から体部上半・口縁部にかけて直線的に立ち上がる(196~208・210~212)のが本類の特徴であるが、体部下半から体部上半にかけて若干内湾する(208)のがみられることが特に指摘できる。

6類 (第42図215)

高台脚は5類と同様に器厚が厚く、脚部形態は外反しながらしっかりと強く開く土師器椀である。高台脚の高さは脚基部が欠損しているため確実ではないものの、1類や2類よりも高くなると判断できる。

鉢 (第42図219)

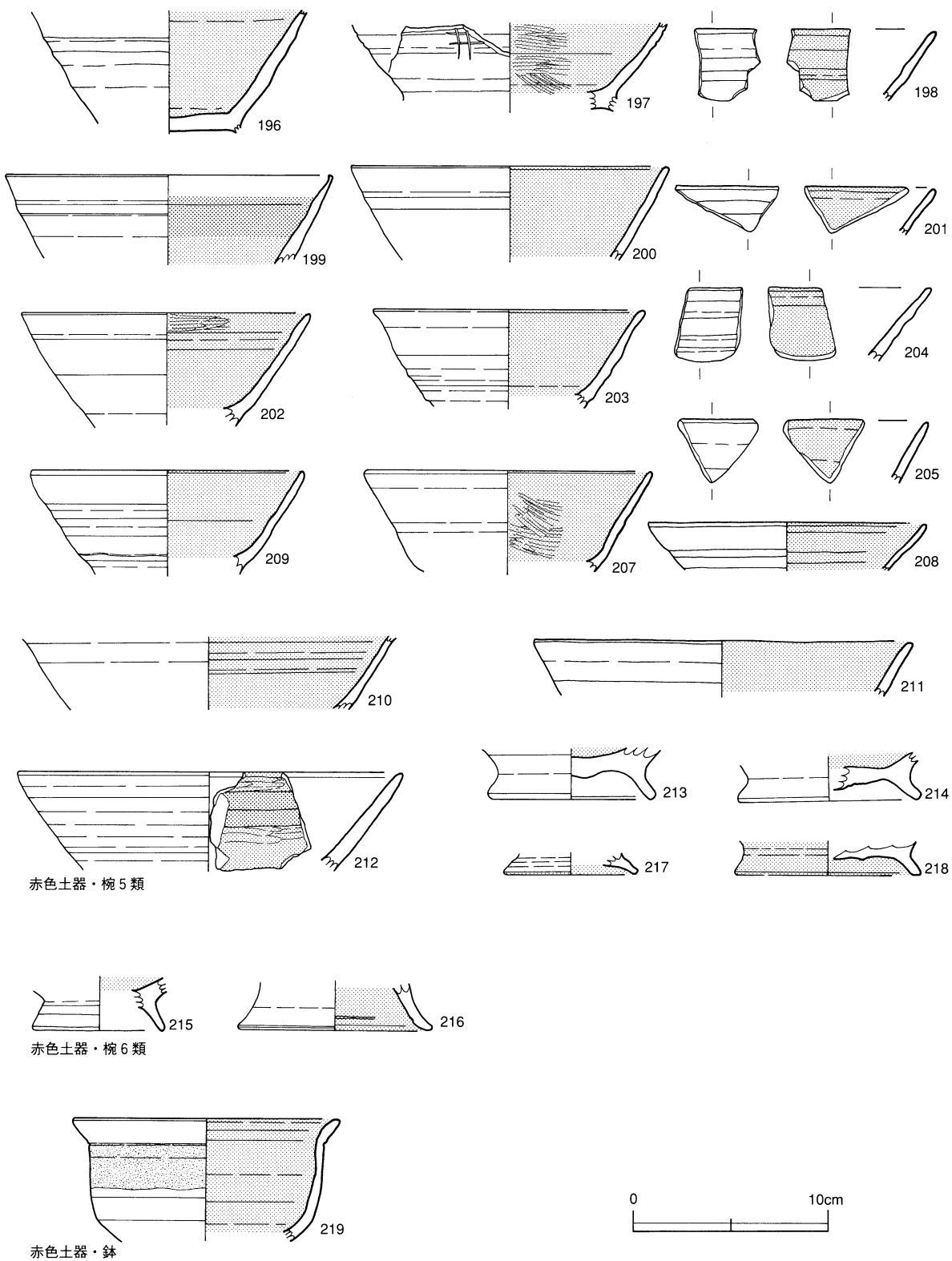
219は鉢の口縁部から体部にかけての資料である。

第17表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器 (赤色椀)

挿図番号	番号	Ⅹ	層	遺物番号	細別	部 位	口径 cm	底径 cm	脚部径 cm	胎土	調 整		色 調		器 形	高台		備考	実測図 No		
											外面	内面	外面	内面		高さ	幅				
41	189	C5	Ⅱ	899	3類	底部			(9)		ハケ→ナデ	ナデ	橙褐色	赤褐色				高台部欠損	残存内面全体	101	
						底部			(9)	ハケ→ナデ	ナデ	橙褐色	赤褐色								
	190	D5	Ⅲ a	1196	3類	体部下半~脚	6.3	6.2			ハケ→ナデ	ナデ	明黄褐色	赤褐色		1	0.8		残存内面全体	106	
						底部	(6)	(6.9)		ハケ→ナデ	ナデ	明黄褐色	赤褐色								
	191	B4	Ⅱ	501	3類	底部					ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色	茶褐色							256
						底部			5.3		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	茶褐色							
	193	C5	Ⅱ	745	4類	底部	3.8	5.3			ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色~暗黄白色	暗赤褐色					充実高台		261
						底部			(8.1)		ナデ	タテミガキ	暗褐色~暗黄褐色	赤褐色							
	194	B3	Ⅱ	285	3類	底部					ハケ→ナデ	ナデ	赤褐色	明黄褐色						残存内面全体	246
						底部~体部下	(6.2)	(7.8)		ハケ→ナデ	ナデ	赤褐色	明黄褐色								
	196	C4	Ⅱ	1250	3類	底部~体部	(3.4)	(7.2)			回転ハケ→ナデ	ミガキ	暗褐色~暗黄褐色	赤褐色~暗黄褐色							69
						体部~底部			(10.9)		ハケ→ナデ	ヨコミガキ	暗黄褐色	赤褐色					刻書土器	残存内面全体	104
	197	B3	Ⅱ	301	3類	口縁部~体部					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色~暗茶褐色	赤褐色							85
						口縁部~体部	(16.6)			ハケ→ナデ	ナデ	明黄褐色	赤褐色								
199	C6	Ⅱ	1088	3類	口縁部~体部	16.2				ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色	茶褐色	口縁端部直					残存内面全体	102	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ナデ	黒褐色~暗褐色	赤褐色									
200	B3	Ⅱ	316	3類	口縁部~体部	(14.8)				ハケ→ナデ	ヨコミガキ	暗褐色	赤褐色	口縁端部直					残存内面全体	81	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗茶褐色	口縁端部外反								残存内面全体~外周縁部上半
201	C3	Ⅱ	251	3類	口縁部~体部					ハケ→ナデ	ナデ	黒褐色~暗褐色	赤褐色	口縁端部直					残存内面全体	117	
					口縁部~体部				ナデ	ナデ	黒褐色~暗褐色	赤褐色~暗黄褐色	口縁端部直					外面ス入付着	残存内面全体	96	
202	B3	Ⅱ	344	3類	口縁部~体部					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色							96	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色									
203	B4	Ⅱ	520	3類	口縁部~体部	(13.6)				ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗茶褐色	口縁端部外反					残存内面全体~外周縁部上半	90	
					口縁部~体部				ナデ	ナデ	黒褐色~暗褐色	赤褐色~暗黄褐色	口縁端部直								
204	B3	Ⅱ	334	3類	口縁部~体部					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色							96	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色									
205	C3	Ⅱ	224	3類	口縁部~体部					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色							96	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色									
42	207	B3	Ⅱ	330	5類	口縁部~体部	(14.6)				ハケ→ナデ	顕著なタテミガキ	赤褐色~黄褐色	赤褐色	口縁端部直				残存内面全体~外面口縁部上半	73	
						口縁部~体部				ハケ→ナデ	顕著なタテミガキ	赤褐色~黄褐色	赤褐色	口縁端部直							
208	B3	Ⅱ	329	3類	口縁部~体部	14			微砂粒	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	赤褐色							216	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	赤褐色									
209	B3	Ⅱ	344	3類	口縁部~体部	13.8		8		ハケ→ナデ	ヨコミガキ	明黄褐色	赤褐色	口縁端部内湾				刻書土器	残存内面全体	70	
					口縁部~体部				ナデ	ナデ	暗黄褐色~明黄褐色	茶褐色~黄褐色									
210	B5	Ⅱ	391	3類	口縁部~体部					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色~暗褐色							74	
					口縁部~体部	(18.8)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色~暗褐色									
211	B2	Ⅱ下	1154	3類	口縁部~体部	(19.5)				ハケ→ナデ	ヨコミガキ	暗茶褐色	赤褐色~暗茶褐色	口縁端部直				内面ス入付着	残存内面全体	89	
					口縁部~体部				ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色~暗褐色	赤褐色									
212	C6	Ⅱ	1070	3類	底部			(8)	(7.5)			暗黄褐色~赤褐色	赤褐色		2.4	1.8			残存内面全体	109	
					底部			(9)	(8.15)		ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色	茶褐色		1.7	2				97
213	C5	Ⅱ	900	3類	底部~体部下	6.6	5.7		微砂粒	ハケ→ナデ	ナデ	暗黄白色~暗茶褐色	暗黄白色~暗褐色							38	
					底部~体部下				ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色									
214	C6	Ⅱ	940	3類	高台脚	(6.5)	(5.1)			ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色					化粧土		94	
					脚				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色								残存内面全体~脚部下半	207
215	C5	Ⅱ	969	3類	底部	9.25	8.4			ナデ	(高台内部)	赤褐色	赤褐色							209	
					底部(高台)				ナデ	(高台内部)	赤褐色	赤褐色									
216	C6	Ⅱ	940	3類	高台脚					ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色					化粧土		94	
					脚				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色								残存内面全体~脚部下半	207
217	C6	Ⅱ	940	3類	高台脚					ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色					化粧土		94	
					脚				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色								残存内面全体~脚部下半	207
218	B4	Ⅱ	533	3類	底部(高台)					ナデ	(高台内部)	赤褐色	赤褐色							209	
					底部(高台)				ナデ	(高台内部)	赤褐色	赤褐色									

第18表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器 (赤色鉢)

挿図番号	番号	Ⅹ	層	遺物番号	細別	部 位	口径 cm	調 整		色 調		実測図 No
								外面	内面	外面	内面	
42	219	C5	Ⅱ	915		口縁部~体部	(13.6)	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	茶褐色~暗黄褐色	78



第42図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図10(赤色土器2)

(4) 土師甕 (第47図～第48図220～238)

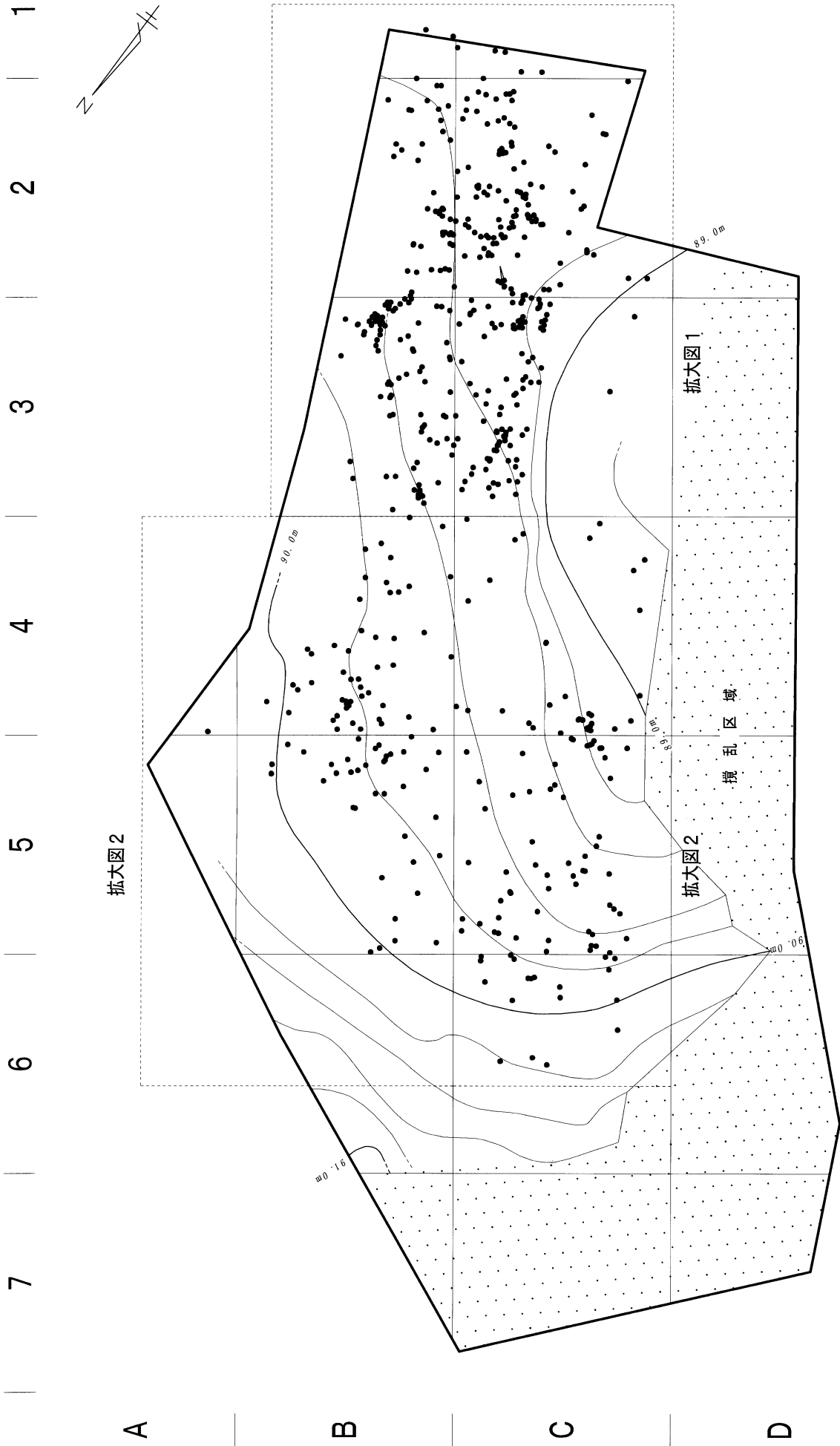
石坂遺跡では、古代期の煮沸具として土師甕が多数出土した。出土分布図 (第44図) をみると、土師器同様に遺跡全体から出土しているものの、特にB・C-2・3区に集中して出土する傾向が認められそうである。石坂遺跡で出土した土師甕のうち、19点を資料化した。

土師甕の調整法は共通しており、底部から胴部の内面は縦方向および斜方向のヘラケズリ、口縁部内面は横方向のハケナデ調整、胴部外面が横方向および縦方向のハケナデ調整、胴部上端から口縁部では横方向のハケナデ調整が行われている。

器形では口縁部から胴部上半にかけて形態差があった。すなわち、口縁部内面と胴部内面との境に明瞭な稜線を作り出すタイプA (第47図220～229) と、明瞭な稜線は作り出さないタイプB (第47図～第48図230～238) とである。さらに口縁部形態からタイプAは3種類に、タイプBは2種類に分けることができた。第47図220～224はタイプA第1種に属する。口縁部が「く」の字に外反し、口縁部の長さがある程度の長さがある形態である。第47図225・226はタイプA第2種に属する。口縁部が「く」の字に外反し、口縁部の長さが短い形態である。第47図227～229はタイプA第3種に属する。口縁部が「く」の字に外反し、口縁部の長さが長い形態である。第47図～第48図230～234はタイプB第4種に属する。口縁部が丸く外反し、口縁部の長さがある程度の長さがある形態である。第48図236～238はタイプB第5種に属する。口縁部が僅かに丸く外反し、口縁部の長さが極端に短い形態である。第48図235は底部である。

第19表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期土師甕

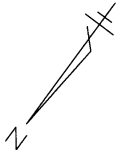
挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	胎土	調整		色調		備考	実測図 No
										外面	内面	外面	内面		
47	220	B4	II	488	A1	口縁部～胴部上端	(26.1)		石英・長石・雲母・輝石・砂粒を多く含む	ヨコハケナデ→ナデ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～茶褐色	黒褐色～暗黄褐色		715
	221	C5	II	897		口縁部～胴部上端	(32.2)		石英・長石・角閃石・輝石・砂粒を多く含む	ヨコハケナデ→ナデ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色		725
	222	C2	III a	一括		口縁部～胴部上端	(30.8)		石英・長石・輝石・砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ナデ	黒褐色～赤褐色	暗黄褐色～暗茶褐色		710
	223	C5	II	753		口縁部～胴部上端	(24.9)		石英・長石・雲母・角閃石・輝石・砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗褐色		721
	224	C2	II	61	A2	口縁部～胴部下半	(22.2)		石英・長石・雲母・角閃石・輝石・砂粒を多く含む	ヨコハケナデ→ナデ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～赤褐色	暗褐色～暗茶褐色		742
	225	C2	II	658		口縁部～胴部上端	(21)		石英・長石・雲母・輝石・砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色	暗褐色～茶褐色		740
	226	C6	II	1023	A3	口縁部～胴部上半	(26.8)		石英・長石・雲母・砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～茶褐色	暗茶褐色～茶褐色		711
	227	B3	III a	1543		口縁部～胴部上端	(31.9)		石英・長石・雲母・輝石・砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	黒褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～茶褐色		723
	228	B3	III a	1529	B4	口縁部～胴部上端				ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗黄褐色～茶褐色	暗黄褐色～茶褐色		712
	229	C2	II	1304		口縁部～胴部上端	(27.4)		石英・長石・雲母・輝石・砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色		722
	230	B3	II	633		口縁部～胴部上半	(20.3)		砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～黒褐色	茶褐色		713
	231	C2	II	65		口縁部～胴部上半	(17.6)		石英・長石・雲母・輝石・砂粒を含む	ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	茶褐色	暗褐色～茶褐色		724
	232	B5	II	787	B5	口縁部～胴部上端	(14.6)		石英・長石・雲母	ハケナデ→ナデ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	内面スス付着	729
233	B3	III a	1544	口縁部～胴部上半		(27)		石英・長石・角閃石・輝石・砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗黄褐色		730	
234	B3	III a	1543-1610	B5	口縁部～胴部	(25.1)		石英・長石・雲母・角閃石・輝石・砂粒を多く含む	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	口縁：ヨコハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	暗茶褐色～茶褐色	暗褐色～茶褐色		743	
235		井戸内			底部	(6)		細砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ナデ	暗茶褐色～茶褐色	灰褐色～灰白色		515	
236	C3	II	174	B5	口縁部～胴部上半			砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	茶褐色	茶褐色～暗黄褐色		714	
237	C3	II	189		口縁部～胴部上半				ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	黒褐色～茶褐色	黒褐色～暗黄褐色		719	
238	C3	II	187		口縁部～胴部上半	(18.8)		砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	口縁：ハケナデ→ナデ、胴部：ケズリ	黒褐色～茶褐色	黒褐色～暗黄褐色		720	



第43图 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布图5 (土師甕1)



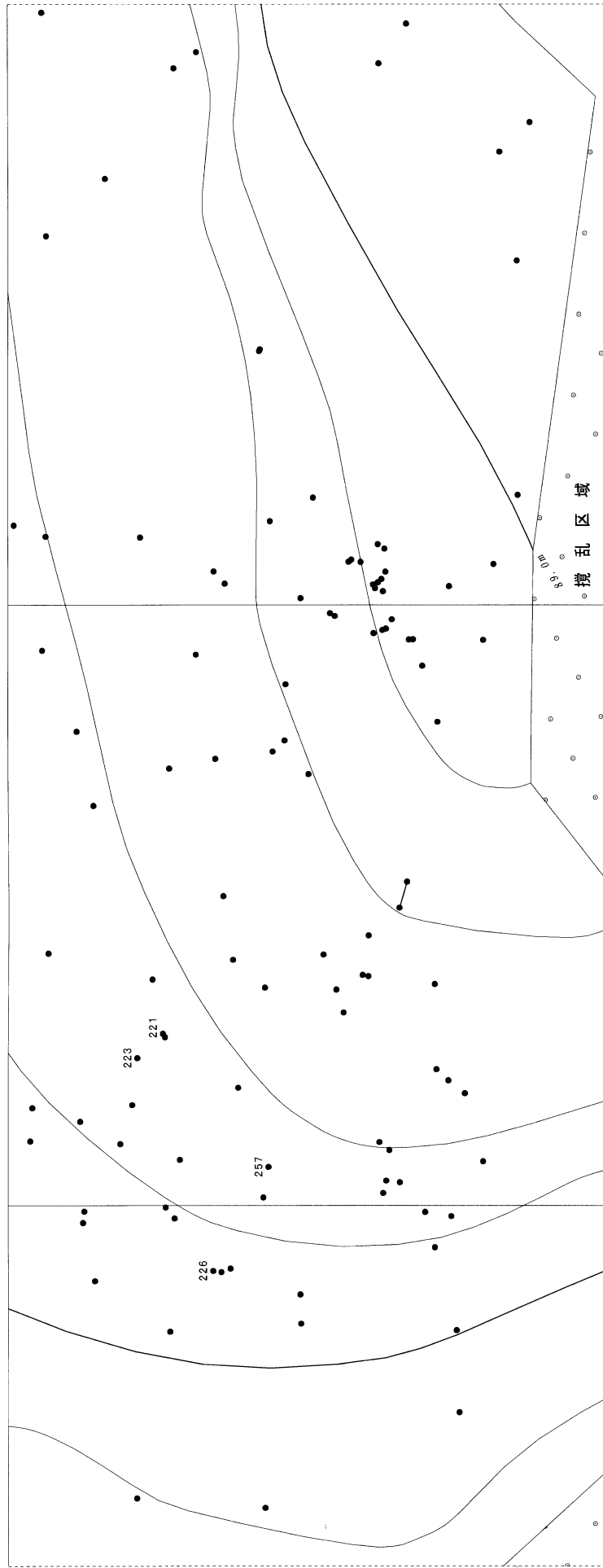
第44図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 5-1 (土師甕 2)



4

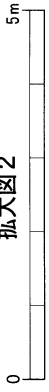
5

6

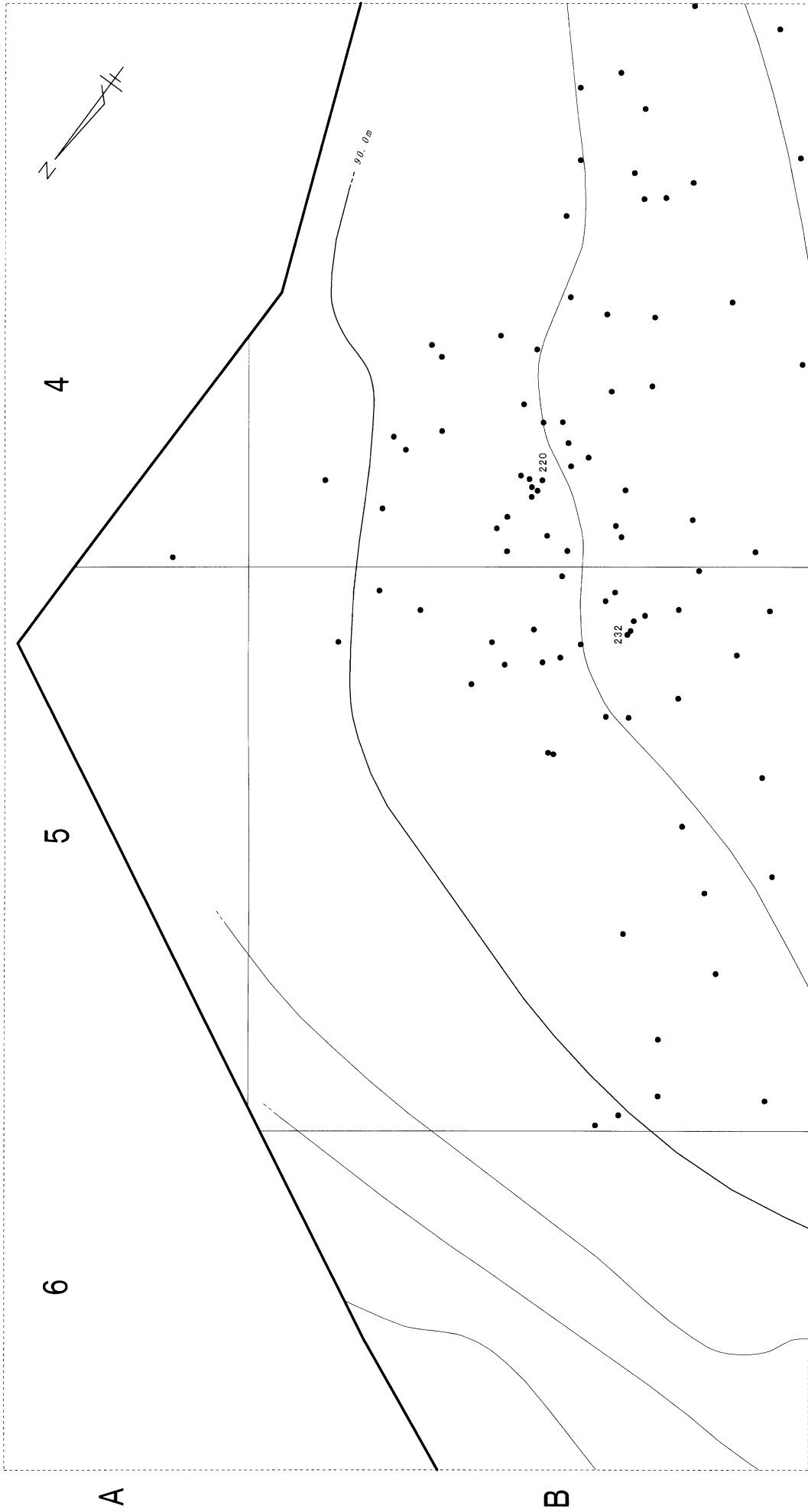


C

拡大図 2

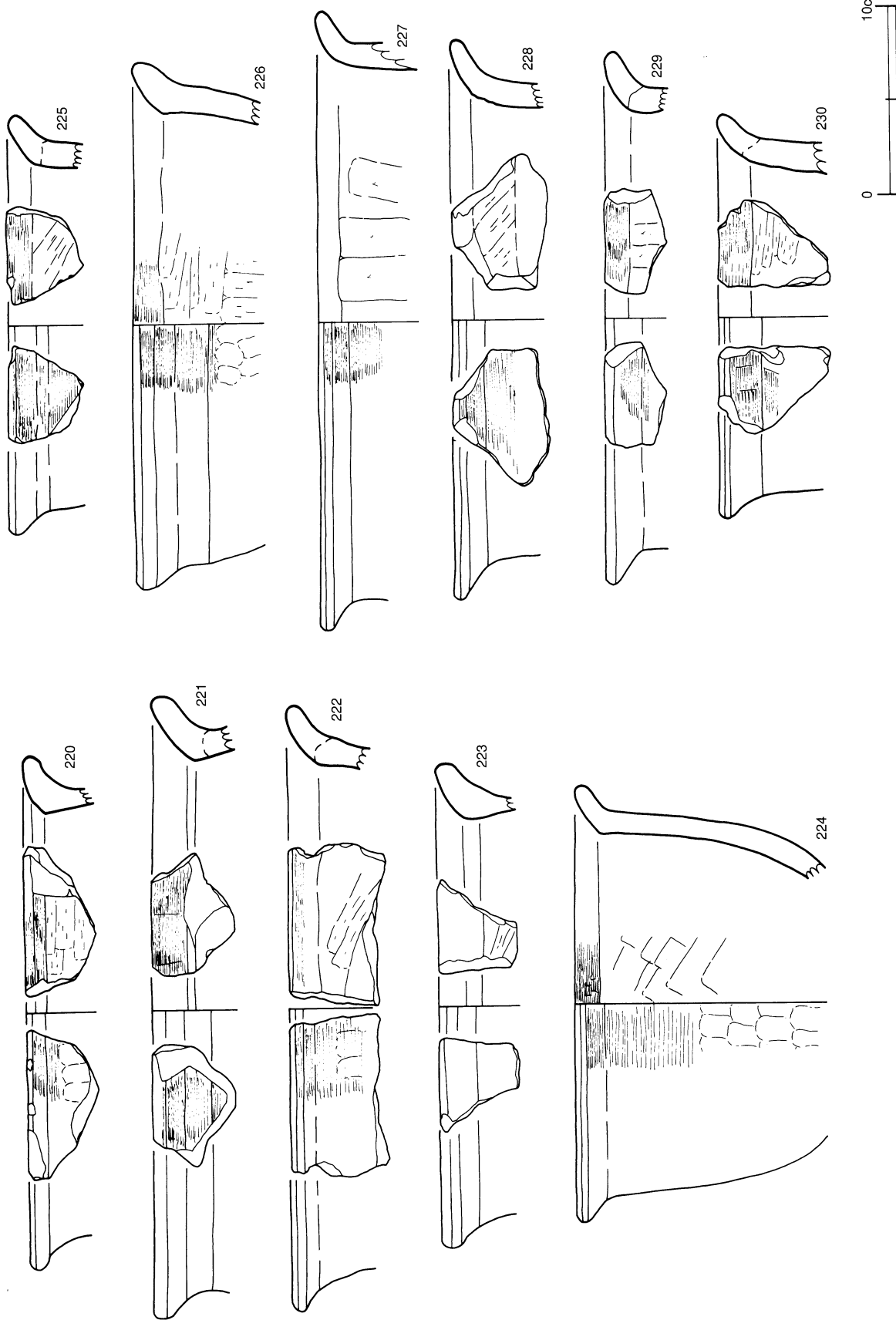


第45図 石坂遺跡 古代期出土遺物分布図 5-2 (土師甕 3)

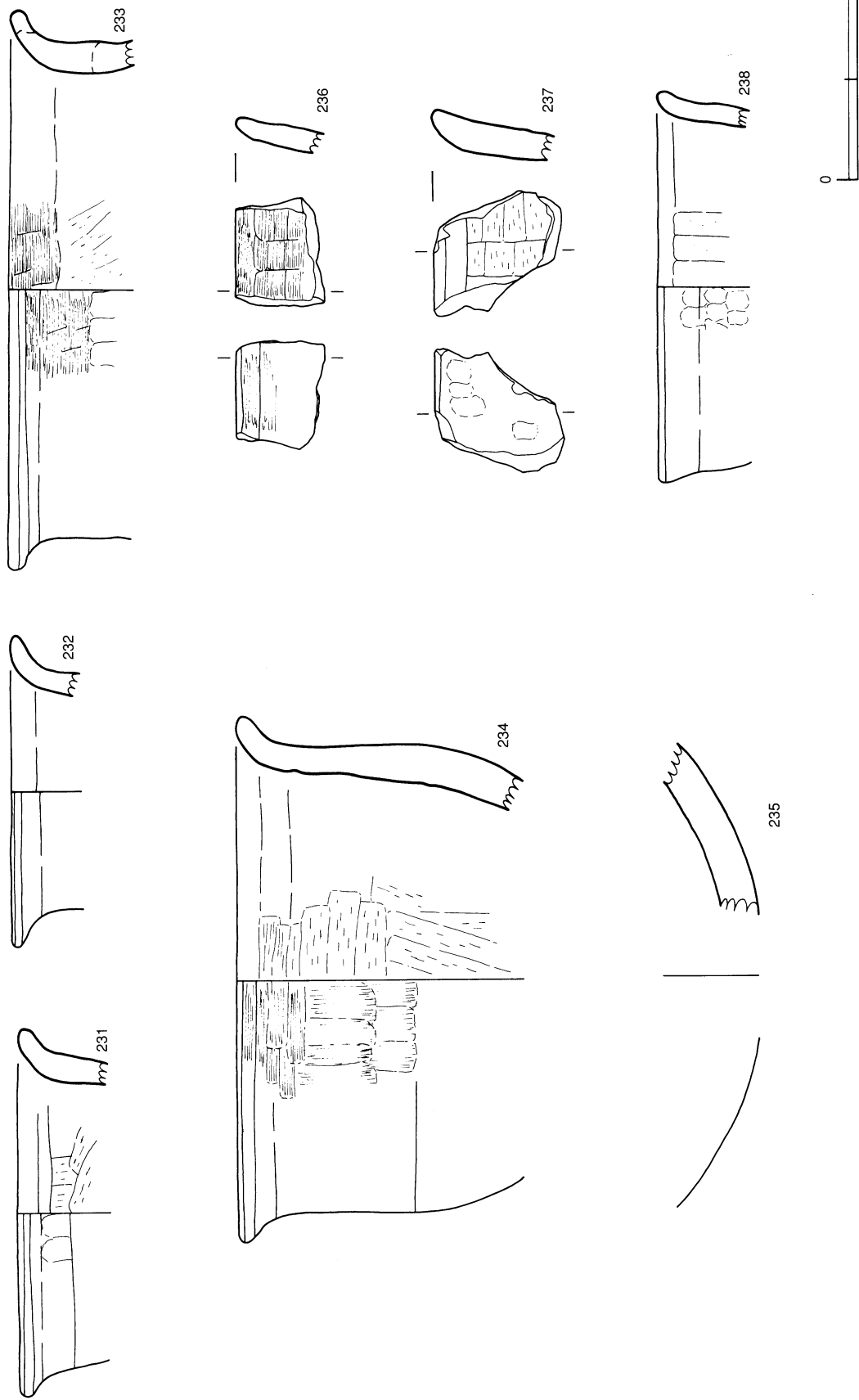


拡大図3
0 5m

第46図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図5—3 (土師甕4)



第47図 石坂遺跡 古代期出土遺物実測図11(土師甕1)



第48図 石板遺跡 古代期 出土遺物実測図12(土師甕2)

(5) 須恵器 (第50図～第54図239～269)

石坂遺跡では、古代期の須恵器が多数出土した。出土分布図(第49図)をみると、土師器同様に遺跡全体から出土している。特にB・C-2・3区とC-5・6区とを中心に出土しているが、両区域で出土した須恵器が接合関係にある例もいくつかみられる。石坂遺跡で出土した須恵器のうち、31点を資料化した。

甕 (第50図～第53図239～266)

石坂遺跡で出土した須恵器甕のうち、28点を資料化した。

ここではまず調整工具に注目する。まず口縁部から肩部では調整工具が共通している特徴がある。口縁部は内外面共にナデ調整が、肩部外面では平行タタキが、肩部内面では同心円(青海波)タタキオサエが行われる。肩部外面に施される平行タタキの方向は横方向(240・244・247)もしくは縦方向(241)である。ところが、胴部では調整工具に違いがみられる。まず外面では平行タタキが行われるのと、格子目タタキ(253・255・257・260・261・264～266)が行われるのことがある。また内面上半部では同心円(青海波)タタキオサエ(243・246・248・249・251)が行われるのと、平行タタキオサエが行われるのと、内面下半部では平行タタキオサエが行われるのことがある。

つぎに調整方向に注目してみる。胴部上半部外面に行われる平行タタキでは横方向(243・246・249・256・258)、縦方向(245・248・252・254)もしくは斜方向(250・251・259・263)のがみられる。胴部上半部内面に行われる平行タタキでは縦方向(245・252・254・255・257)、横方向(259)、異方向(253・256・258・260・261・263)のがみられる。さらに胴部下半部外面に行われる平行タタキでは斜方向(262)のがみられる。また胴部下半部内面に行われる平行タタキオサエでは異方向(257・262・264・266)のがみられる。

壺 (第54図267～270)

石坂遺跡で出土した須恵器壺のうち、4点を資料化した。

268は外面では平行タタキ後に斜方向のハケナデ調整が、内面では指頭押圧調整の後に横方向のハケナデ調整が行われる。269は外面では平行タタキオサエが行われる。肩部～胴部上半では横方向、胴部下半では縦方向である。内面では一部に指頭押圧調整が残るが、多くは横方向のハケナデ調整が行われる。内面は器壁がめくれており、不良品と考えられる。

(6) 越州窯系青磁 (第55図271・272)

石坂遺跡では越州窯系青磁2点が出土した。

271は大宰府編年椀I-1a類に属する精製品蛇の目高台椀である。大宰府史跡SD1800出土に類似する。高台豊付け部分に目跡がある。272は大宰府編年椀II-2類に属する、幾分上げ底風の円盤状高台である。外周付近に段状の線が入ることから、2a類に属することも考えられるが全体形が不明なため判断を留保する。

271は9世紀中頃以前、272は9世紀後半代に位置付けられている。

(7) 土製品・紡錘車 (第56図273)

石坂遺跡では紡錘車が1点出土した。272は、長径6.6cm、厚さ0.95cmを測る円盤状を呈す。外周部は丁寧な面取りを行う。中心部には径0.8cmの孔を穿つ。片面には螺旋状に中心部から外周にかけて、篋状工具による凹線が認められる。

第20表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期紡錘車

挿図 番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	長径 cm	短径 cm	調整		色調		実測図 No
									外面	内面	外面	内面	
56	273	C3	II	213		完形	6.6	6.5	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	明黄褐色	明黄褐色	212

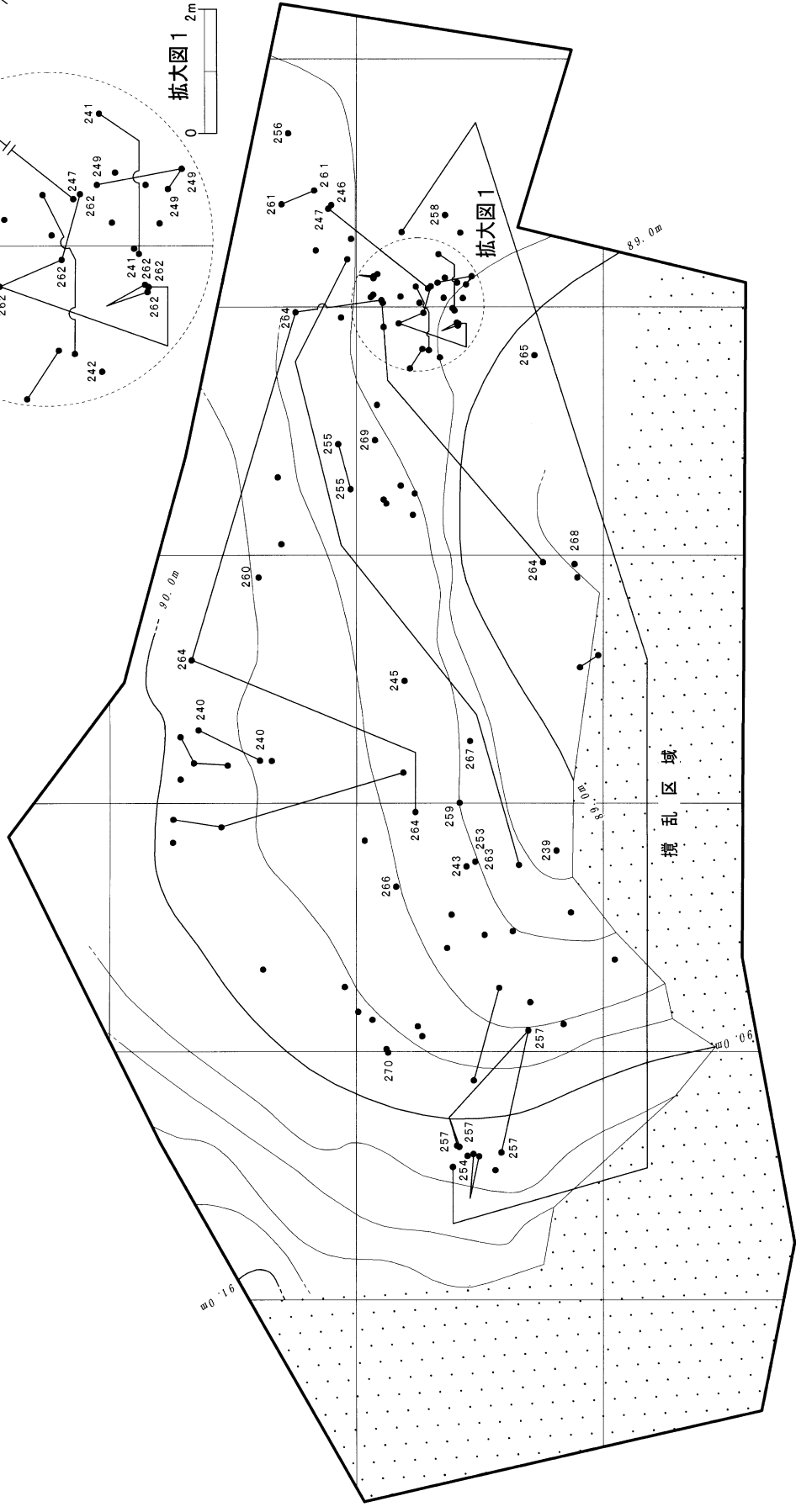
1
2
3
4
5
6
7

A

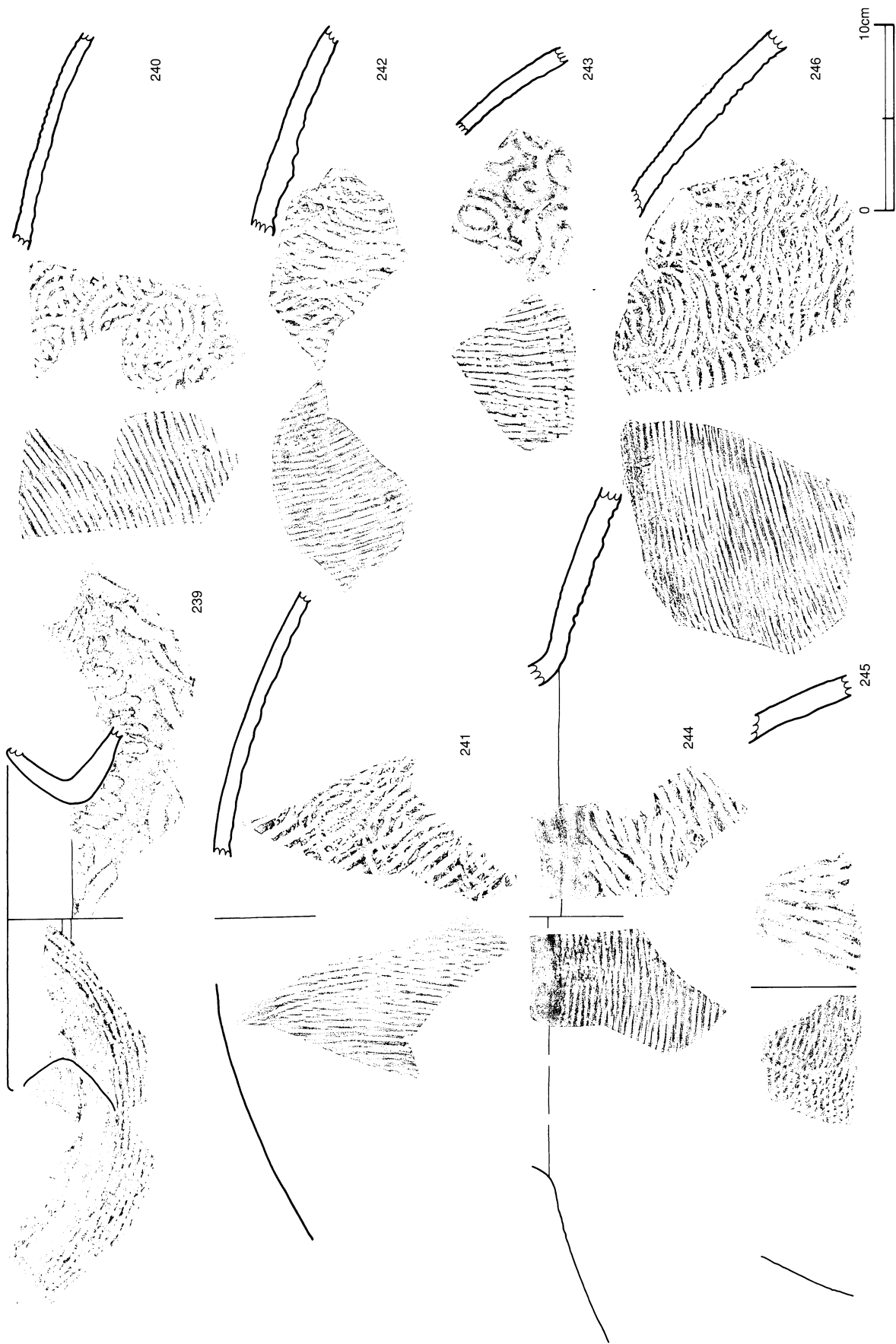
B

C

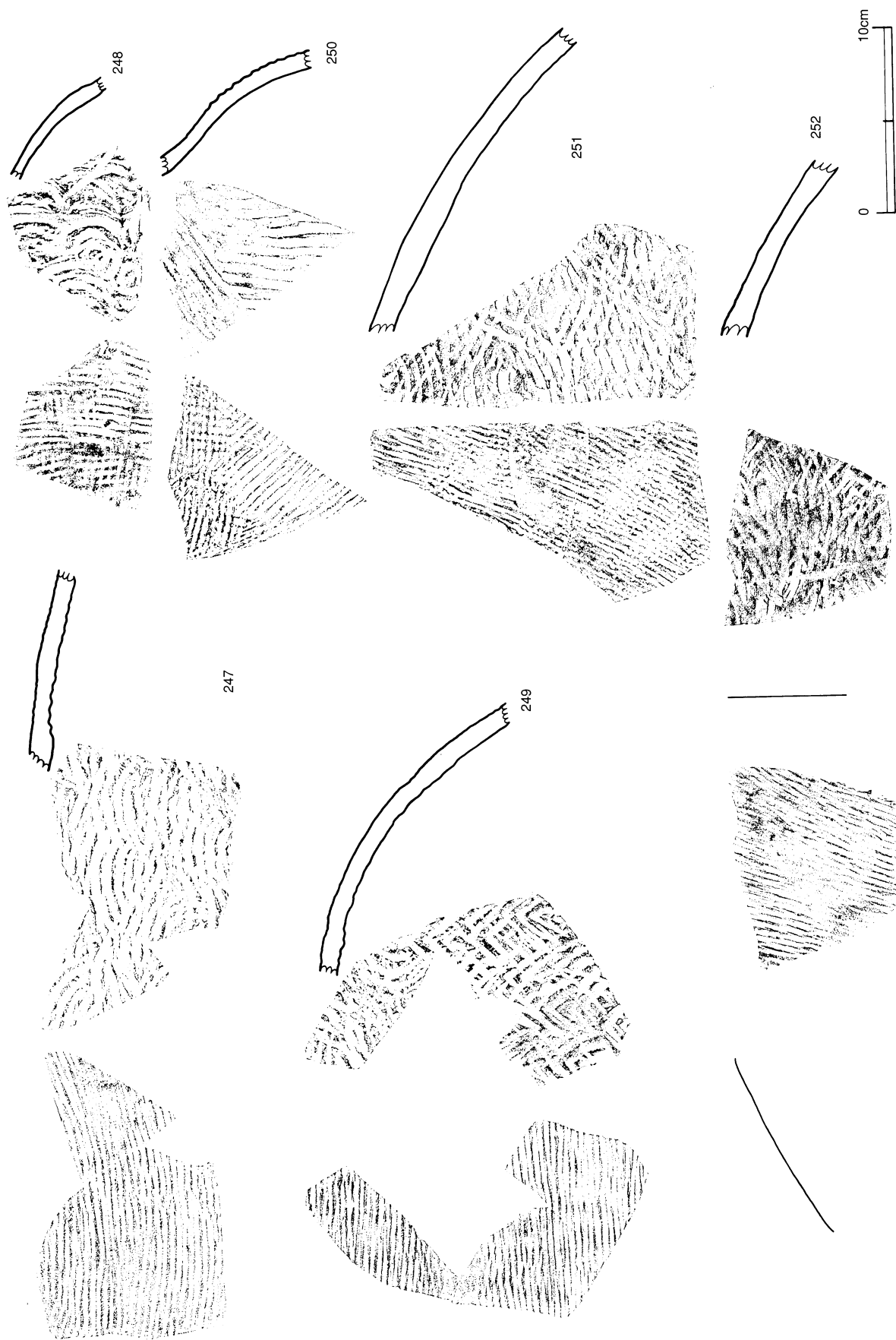
D



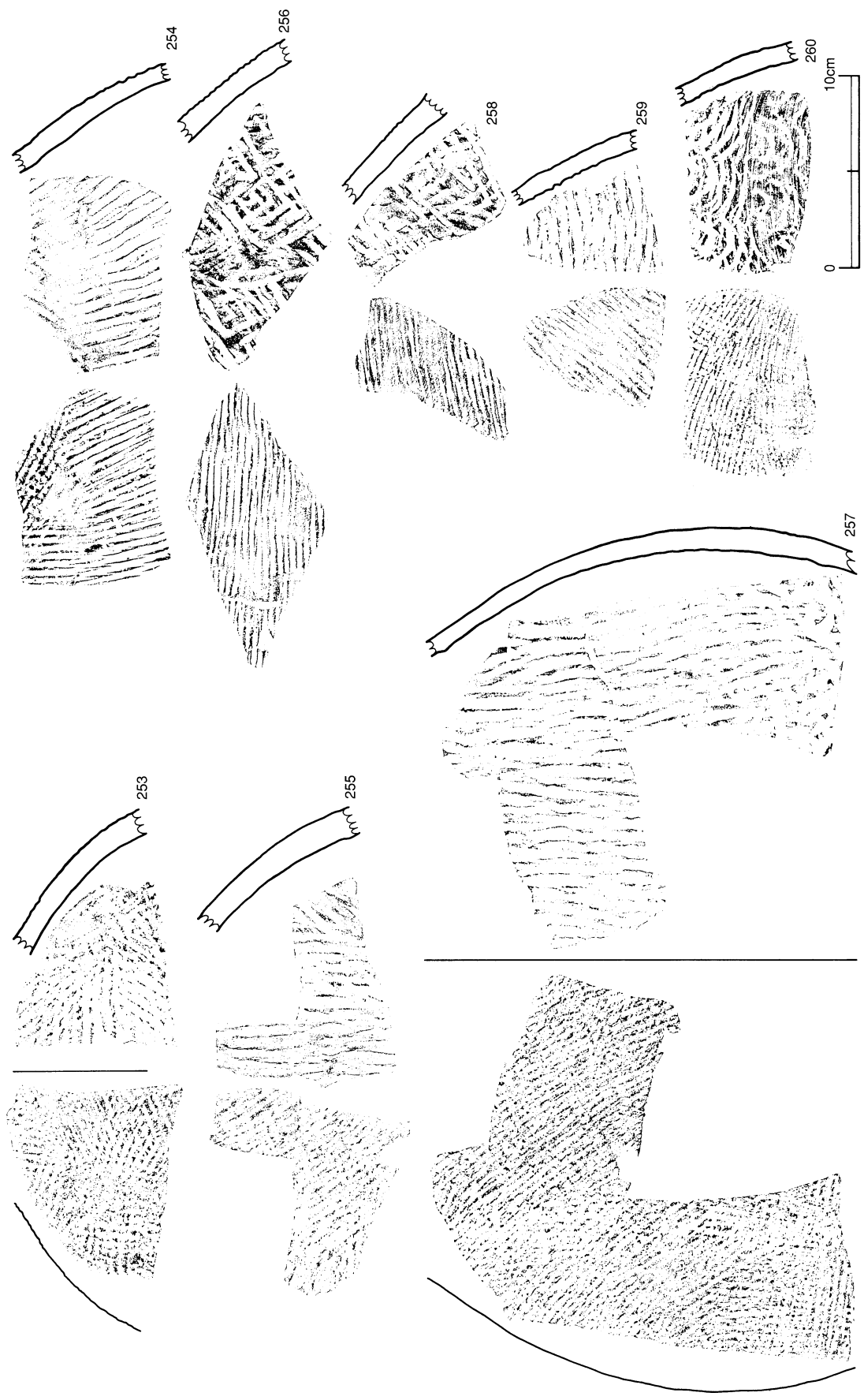
第49図 石坂遺跡 古代期 出土遺物分布図 6 (須恵器)



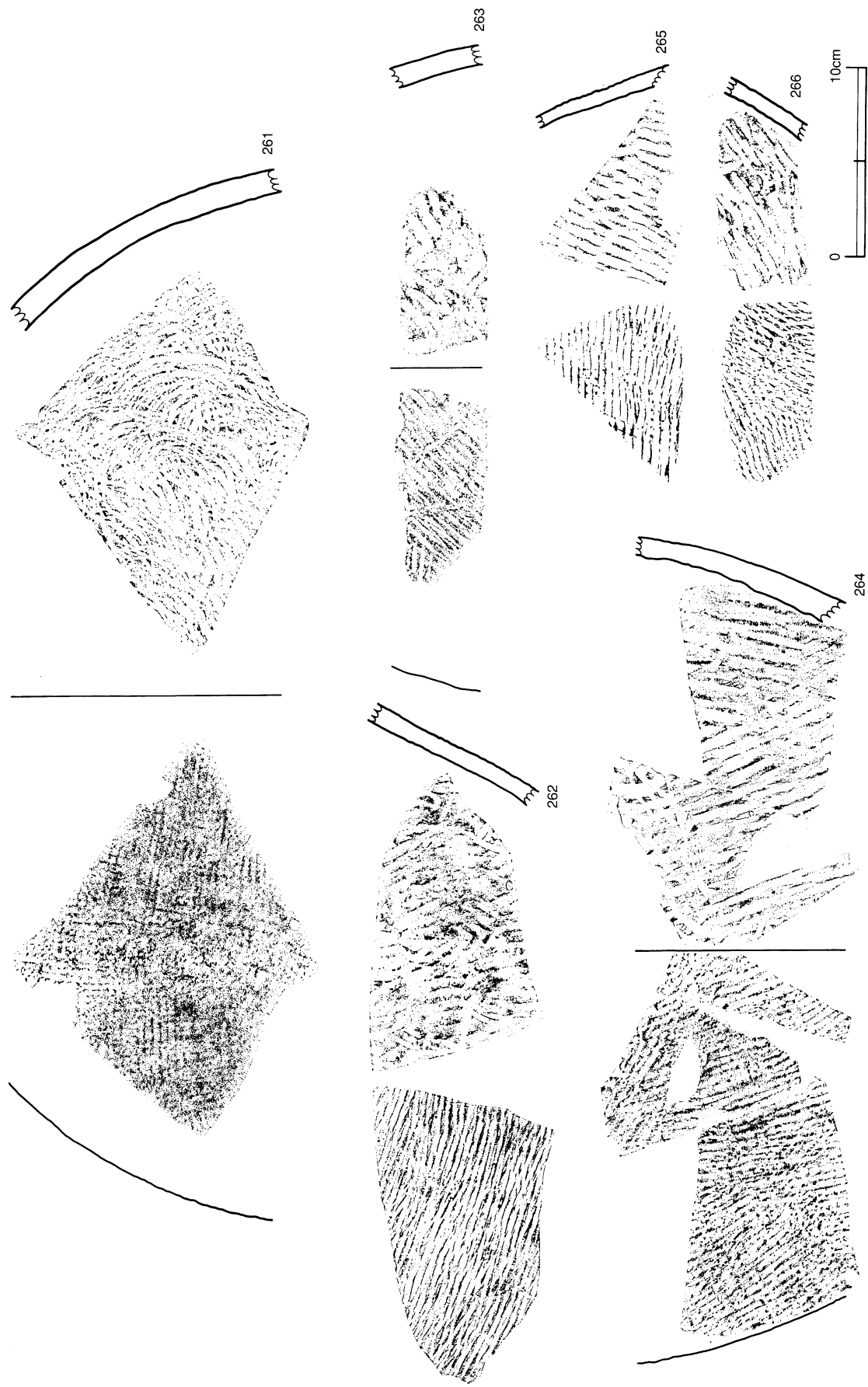
第50図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図13(須恵器・甕1)



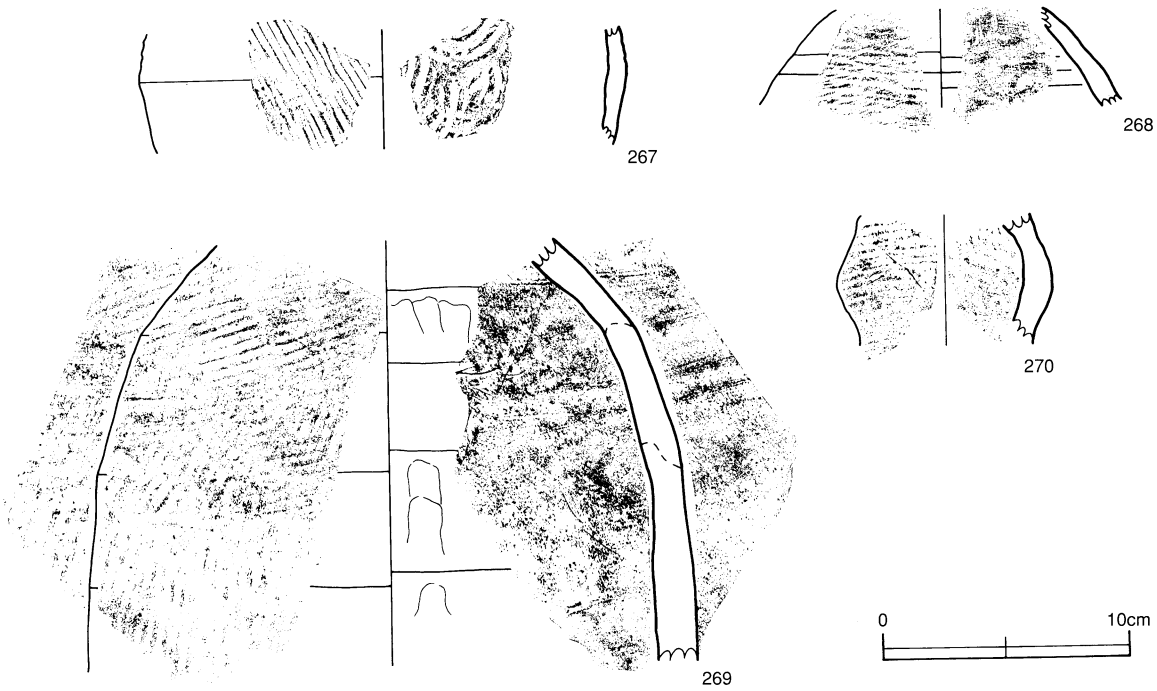
第51图 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図14(須惠器・甕2)



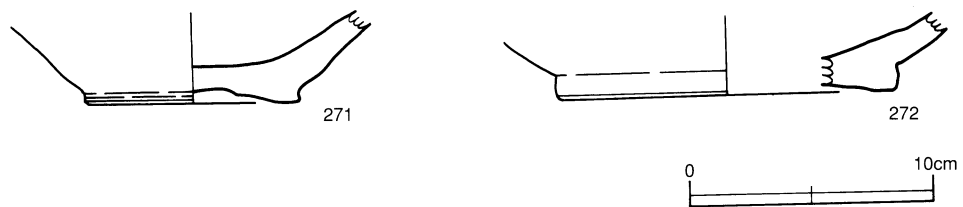
第52図 石板遺跡 古代期出土遺物実測図15(須恵器・甕3)



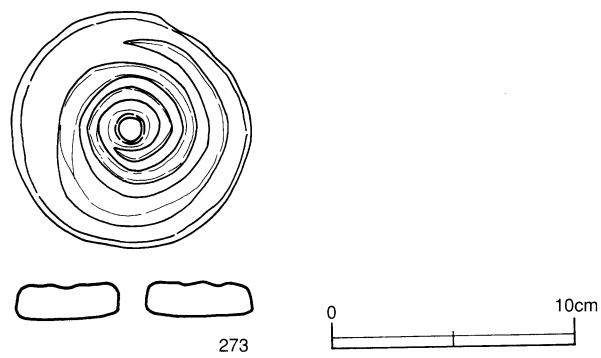
第53图 石板遺跡 古代期 出土遺物実測図16(須惠器・甕4)



第54図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図17(須恵器・壺)



第55図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図18(越州窯系青磁)



第56図 石坂遺跡 古代期 出土遺物実測図19(土製品・紡錘車)

第21表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器（甕）

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	最大径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No	
									外面	内面	外面	内面		
50	239	C6	表			口縁部～肩部			格子目タタキオサエ	同心円タタキオサエ/ナデ	灰白色～暗黄褐色	暗紫褐色～暗黄褐色	689	
		C5	Ⅱ	1208										
	240	B4	Ⅱ	508			肩部			平行タタキ（ヨコ）	同心円タタキオサエ	暗緑褐色～暗黄褐色	灰褐色～暗茶褐色	696
		B4	Ⅱ	482										
	241	C2	Ⅱ	89			肩部			縦方向平行タタキ	同心円タタキ+縦方向平行タタキオサエ	暗紫褐色～暗黄褐色	灰白色～暗黄褐色	693
		C3	Ⅱ	181										
	242	C3	Ⅲ	221			肩部			平行タタキ（ヨコ）	同心円タタキオサエ	灰白色～暗黄褐色	灰褐色～暗黄褐色	699
	243	C5	Ⅱ	790			肩部			巾：14mm前後の工具による縦表方向中心の格子目タタキ	径：27mm前後の青海波タタキオサエ	暗紫褐色	灰褐色	484
	244	C2	Ⅱ	52			肩部	細砂粒を多く含む	平行タタキ（一部格子目タタキがみられる）	同心円タタキオサエ	茶褐色	暗茶褐色	698	
245	C4	Ⅱ	576			体部上半	33	格子目タタキ（縦方向、平行タタキ（横方向）	平行タタキオサエ（タテ方向）	橙褐色～暗黄白色	暗黄褐色	658		
246	B2	Ⅱ	17			肩部		塵を含む	平行タタキ文	青海波状文	暗紫褐色～暗黄褐色	灰黄褐色	507	
51	247	C2	Ⅱ	70		肩部			微砂粒を含む	平行タタキ（ヨコ）	同心円タタキオサエ	灰白色～暗黄褐色	灰褐色	692
		B2	Ⅱ	16										
	248	B4	Ⅲ a	一括		肩部			白色粒	縦方向中心の格子目タタキ	青海波タタキオサエ	茶褐色	灰褐色	481
	249	C2	Ⅱ	72			肩部			平行タタキ（横方向）	同心円タタキ	暗黄褐色～暗褐色	灰白色～暗黄褐色	697
		C2	Ⅱ	85										
		C2	Ⅱ	86										
	250	B5	Ⅱ	一括		肩部～胴部			白色粒が極めて多く含む	横方向格子目タタキ、斜方向平行タタキ	斜方向～縦方向、平行タタキ	暗黄褐色～暗紫褐色	暗黄褐色	486
251	C2	Ⅱ	99			肩部			平行タタキ（縦方向）	同心円タタキ	暗紫褐色	灰白色～暗黄褐色	695	
	C2	Ⅱ	100											
252	C2	Ⅱ	98			肩部		細砂粒を含む	平行タタキ	同心円タタキオサエ	暗紫褐色	暗黄褐色～灰白色	700	
52	253	C5	Ⅱ	791		肩部			方向に斉一性がない、格子目タタキ	方向に斉一性がない、平行タタキオサエ	暗黄褐色～茶褐色	灰褐色	478	
	254	C b	Ⅱ	1079		肩部～胴部		白色粒が極めて多く含む	横方向格子目タタキ、斜方向平行タタキ	斜方向の平行タタキオサエ	暗黄褐色～灰褐色	暗黄褐色	485	
	255	B3	Ⅱ	277		胴部				格子目タタキ	平行タタキオサエ（タテ）	暗紫褐色	灰白色～暗黄褐色	690
		B3	Ⅱ	294										
	256	B2	溝下	1092		肩部			平行タタキ	同心円タタキオサエ	灰褐色	暗黄褐色～灰褐色	504	
	257	C6	Ⅱ	921		胴部下半				格子目タタキ（異方向）	平行タタキ（斜方向）	暗紫褐色～暗黄褐色	暗紫褐色	694
		C6	Ⅱ	1030										
		C5	Ⅱ	773										
		C6	Ⅱ	985										
		B3	表											
258	C2	溝上	1132		肩部				平行タタキ	青海波文	灰褐色	橙褐色	506	
259	C5	Ⅱ	807		肩部				格子目タタキ	平行タタキオサエ	灰褐色	灰褐色	503	
260	B4	Ⅱ	559		胴部上半			茶褐色	格子目タタキ（下→上）	下から上への青海波タタキオサエ	灰褐色	暗紫褐色	480	
53	261	B2	Ⅱ	10		肩部～胴部	54.6	細砂粒を多く含む	格子目タタキ	同心円タタキ	黒褐色～灰褐色	灰白色～暗黄褐色	477	
		B2	Ⅱ	12										
	262	C3	Ⅱ	1324		胴部				平行タタキ	同心円タタキ	暗紫褐色～灰褐色	灰褐色～暗黄褐色	505
		C3	Ⅱ	1827										
	263	C5	Ⅱ	791		体部	33	細砂粒を多く含む	平行タタキ（斜方向）	同心円タタキオサエ	暗赤褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	659	
	264	B3	Ⅱ	311		胴部下半				格子目タタキ	平行タタキ（縦方向→斜方向）	暗紫褐色	暗紫褐色～暗黄褐色	691
		C4	I	1263										
		B4	Ⅱ	536										
265	C2	溝Ⅱ	1451		肩部～胴部			白色粒を多く含む	格子目タタキ	平行タタキオサエ	黒褐色	灰褐色～暗茶褐色	483	
266	C5	Ⅱ	600		胴部下半			白色粒を多く含む	異方向の格子目タタキ	斜方向の平行タタキオサエ	茶褐色	灰褐色	482	

第22表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代器須恵器（壺）

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	最大径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No
									外面	内面	外面	内面	
54	267	C4	Ⅱ	702		胴部			斜方向平行タタキ	同心円タタキオサエ	茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	656
	268	C4	I	1274		肩部		細砂粒を多く含む	平行タタキ	指頭圧痕→ハケナデ	灰白色	灰白色	701
	269	C3	Ⅲ a	1658		肩部～胴部			肩部：平行タタキ（横方向）、胴部：平行タタキ（斜方向）	指頭圧痕	灰褐色	灰褐色	479
	270	C6	Ⅱ	1028		肩部～体部	8.8	細砂粒を含む	平行タタキ	指頭圧痕→ナデ	暗紫褐色	灰褐色	661

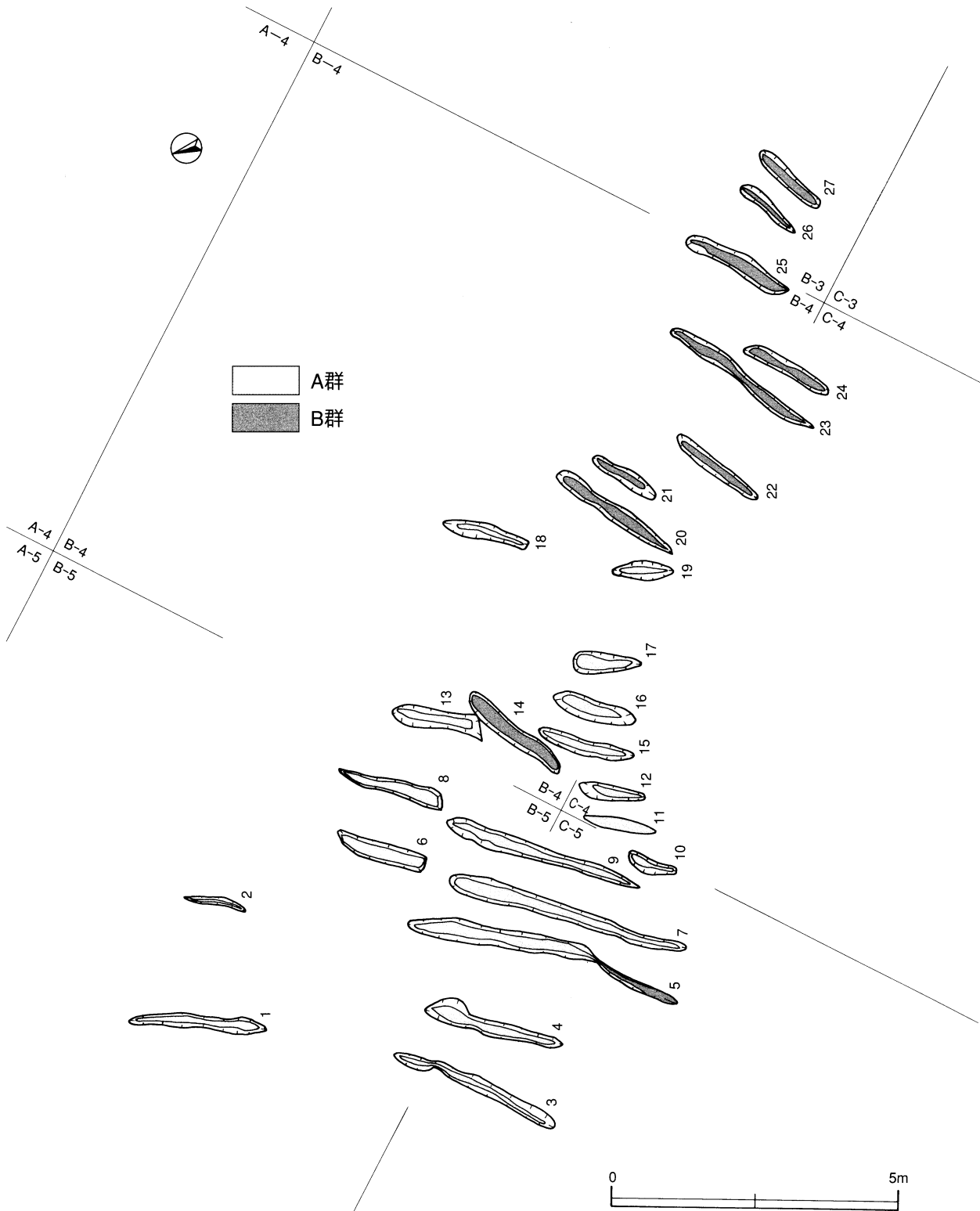
第23表 石坂遺跡出土遺物一覧表・古代期青磁（越州窯系青磁）

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	底径 cm	色調			実測図 No
								外面	内面	磁胎	
55	271	C3	Ⅱ	210		底部～体部下端	(5.6)	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	836
	272	C4	表			底部～体部下半	(9)	オリーブ黄色	灰黄色	灰黄色	835

第3節 中世の調査

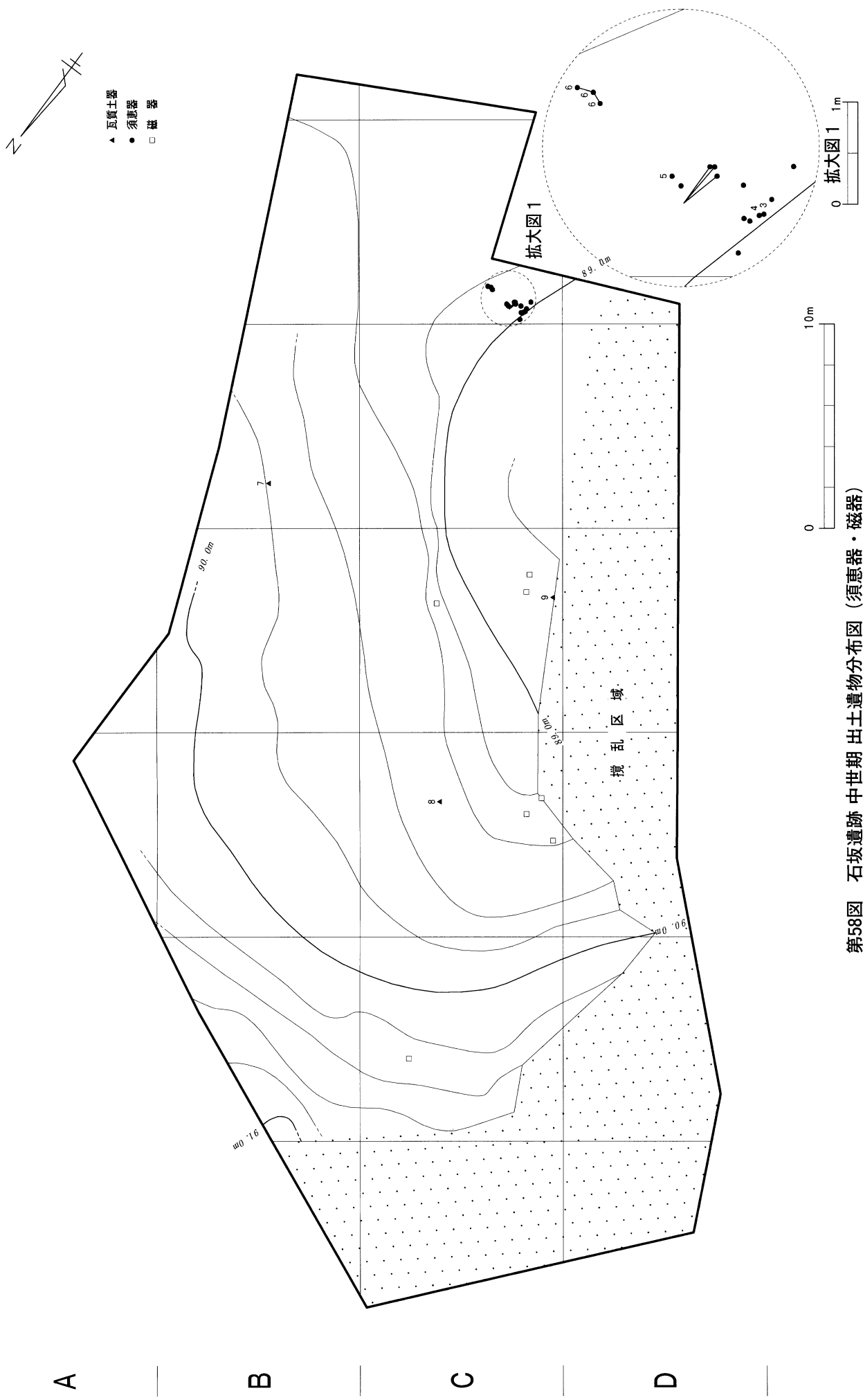
石坂遺跡では中世期に属する遺構・遺物は、古代期の遺構・遺物と同一の包含層で一括して発見された。したがって、遺構については遺構内遺物の出土状況などから時期の判別を行った。

その成果として、遺構では畝間状遺構の検出が、遺物では須恵器や磁器の出土が挙げられる。

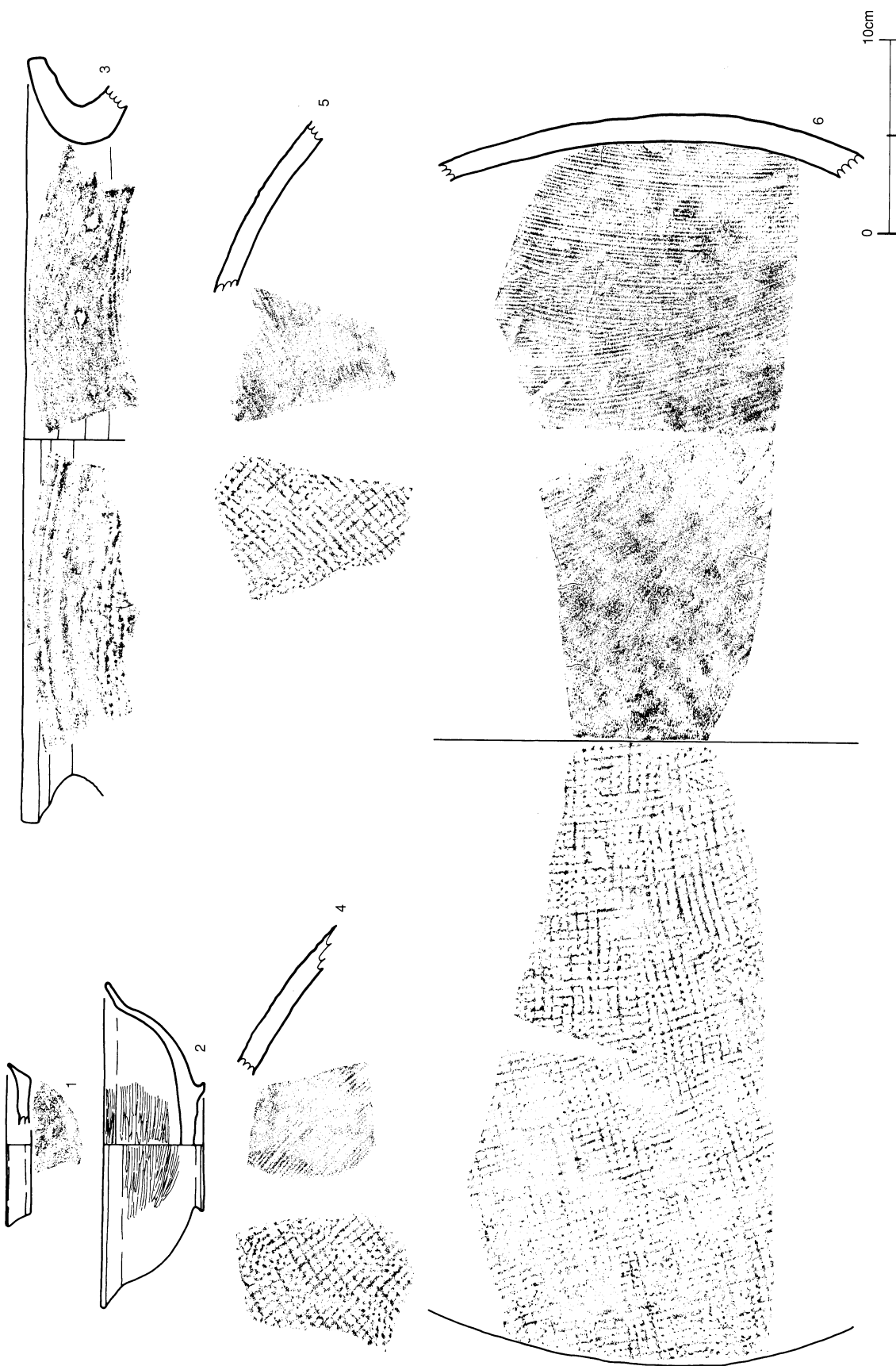


第57図 石坂遺跡 中世期 検出遺構実測図 (畝間状遺構)

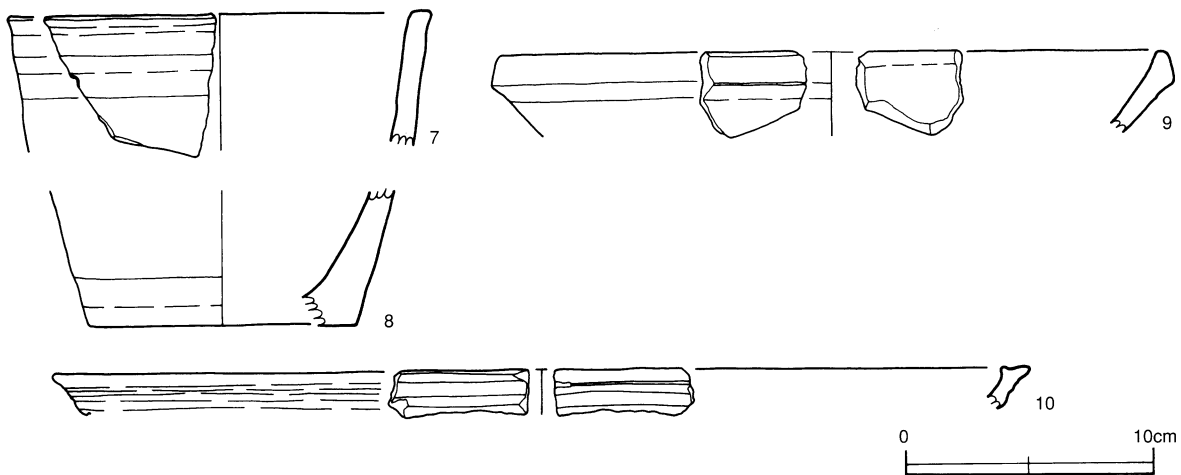
1 2 3 4 5 6 7



第58图 石坂遗迹 中世期 出土遗物分布图 (须惠器・磁器)



第59図 石坂遺跡 中世期出土遺物実測図1 (土師器・須恵器)



第60図 石坂遺跡 中世期 出土遺物実測図 2 (瓦質土器・陶器)

1 検出遺構

石坂遺跡で検出された中世に属する遺構は、畝間状遺構 1 基であった。

B・C-3区~B・C-5区Ⅲb層で、長さ1mから4m、幅約40cmの溝状に掘られた窪みが、約40cmから80cmの間隔で27条みつかった。これらの窪みは、長軸の方向性からA群とB群との2群に分けられよう。A群は長軸方向が概ねN-46°-Eを指し、17条からなる。対してB群は長軸方向が概ねN-60°-Eを指し、10条からなる。A群に属する溝がB群に属する溝に切られており、A群はB群より古い時期の遺構と判断できる。これらはその形状から畝間状遺構と考えられる。

2 出土遺物 (第59図~第60図 1~10)

1は土師器小皿。体部は下端部~口縁部が直線的に外反し、口縁先端が尖る。山ノ脇遺跡中世土師器小皿4類に属する。2は黒色土器B類碗である。低い輪状高台が「ハ」字状に付く。体部は丸味を持ち、口縁部は強く長く端反る。白磁皿を模したか。3~6は須恵器甕で同一個体か。口縁部は大きく外反し、肩部にかけて「く」字状に屈曲する。口縁部断面形は方形。調整は、口縁部外面・端部が横方向のハケメ調整、肩部~胴部外面が格子目タタキ。内面は口縁部がナデ調整、頸部~胴部がハケメ調整。口縁復元径が約35cm、胴部復元最大径が約65cmを測る。主観的雰囲気では樺万丈窯系須恵器か。7・8は須恵器浅鉢。外面には回転ヘラ調整痕を残す。器形は平底底部から直線的に立ち上がり、体部上半~口縁部は直立する。9は須恵器(片口)鉢の口縁部。体部から直線的に開き、口縁部は外反せず、口縁端部は僅かに内傾する。口縁外面の釉は光沢がない灰色。主観的雰囲気では東播磨系須恵器か。10は中世陶器。折縁深皿か。口縁上端は平坦面を形成。口縁直下で屈曲する。

第24表 石坂遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器

挿図番号	番号	区	層	分類	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	調整			色調		実測図 No
										外面	内面	その他	外面	内面	
59	1	D3~5	表	土師	坏		口縁部~底部	(7)	(5.4)				黒褐色~黄褐色	黒褐色~黄褐色	257
	2		井戸内	黒色土器	碗		口縁部~底部	(16.7)	(5.4)	ミガキ	ミガキ		黒褐色~明黄白色	黒褐色~明黄白色	514

第25表 石坂遺跡出土遺物一覧表・中世期須恵器

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	最大径 cm	胎土	調整			色調		実測図 No
										外面	内面	その他	外面	内面	
59	3	C2	溝Ⅱ	1437	甕		口縁部~頸部	64	精選されている	格子目タタキ	平行タタキ		灰褐色~暗黄褐色	灰褐色~暗黄褐色	744
	4	C2	溝Ⅱ	1436	甕		肩部			格子目タタキ	平行タタキオサエ		黒褐色~灰白色		763
	5	C2	溝	1429	甕		肩部			格子目タタキ	平行タタキオサエ		黒褐色~灰白色	灰白色	762
	6	C2	溝Ⅱ	1426	甕		胴部			格子目タタキ	タテ方向の細かいハケ目		灰褐色~灰白色	灰白色	747

第26表 石坂遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器

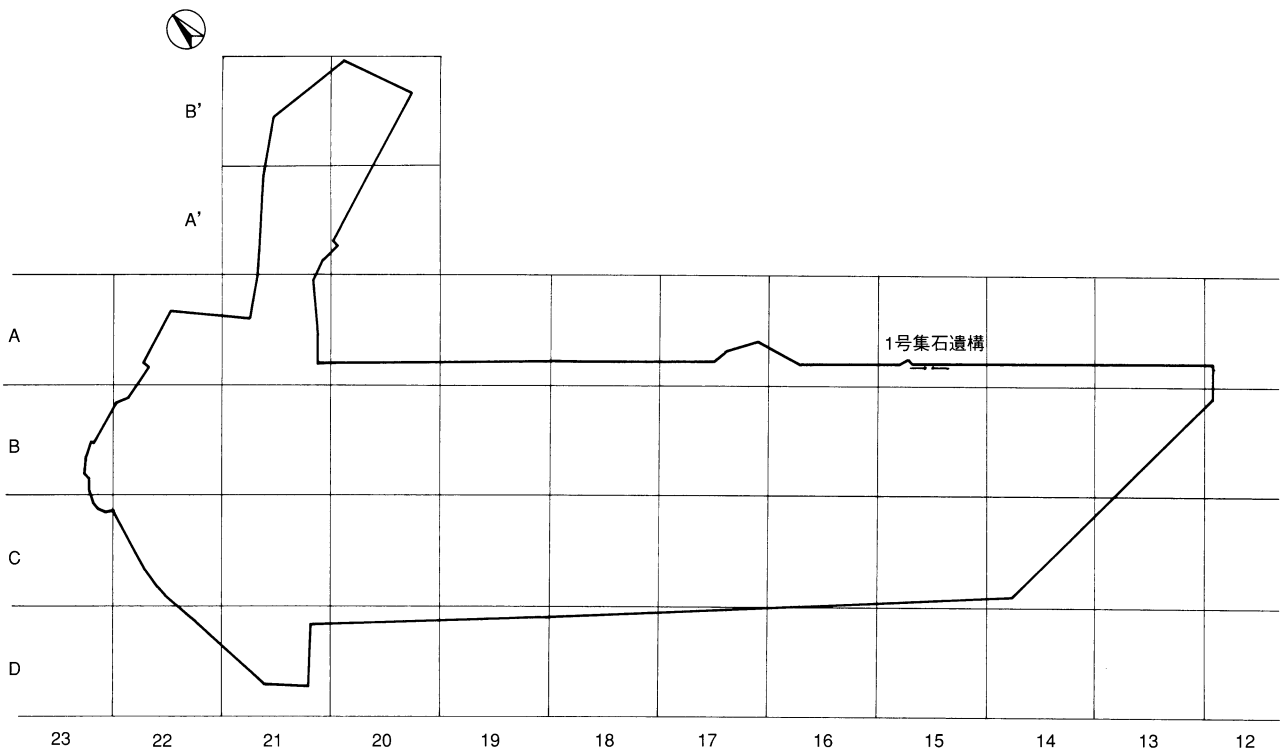
挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	胎土	調整			色調		実測図 No
											外面	内面	その他	外面	内面	
60	7	B3	Ⅱ	349	浅鉢		口縁部~体部上半	(17.2)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗茶褐色	暗茶褐色~暗黄褐色	660
	8	C5	Ⅱ	726	浅鉢		底部~体部下半		11		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗紫褐色~暗茶褐色	灰白色~暗黄褐色	662
	9	C4	I	1276	鉢		口縁部~体部上端	(29.1)		細砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ		灰褐色~灰白色	灰白色	746
	10	C5	表		折縁深皿?		口縁部	(37.7)				ハケ→ナデ	ミガキ		暗紫褐色	黒褐色~暗黄褐色

第5章 山ノ脇遺跡の調査

山ノ脇遺跡では、調査の結果、縄文時代、古墳時代、古代および中世の時期に属する遺構・遺物が見つかった。特にアカホヤ火山灰の軽石層であるⅢc層より上層から出土する遺物に関しては、中世に属する遺物がⅡ層を中心に、古代に属する遺物がⅢa層を中心に、縄文時代前期から晩期に属する遺物がⅢb層を中心に出土する傾向が把握できた。しかし、縄文時代早期に属する遺物がⅢ層から出土することが多くみられることは、古代・中世などに掘られた開発行為によりかなりの攪乱が及んでいることを示すもので、検出された約2,000個のピットがこのことを示している。

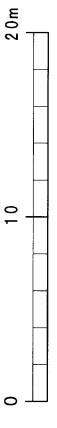
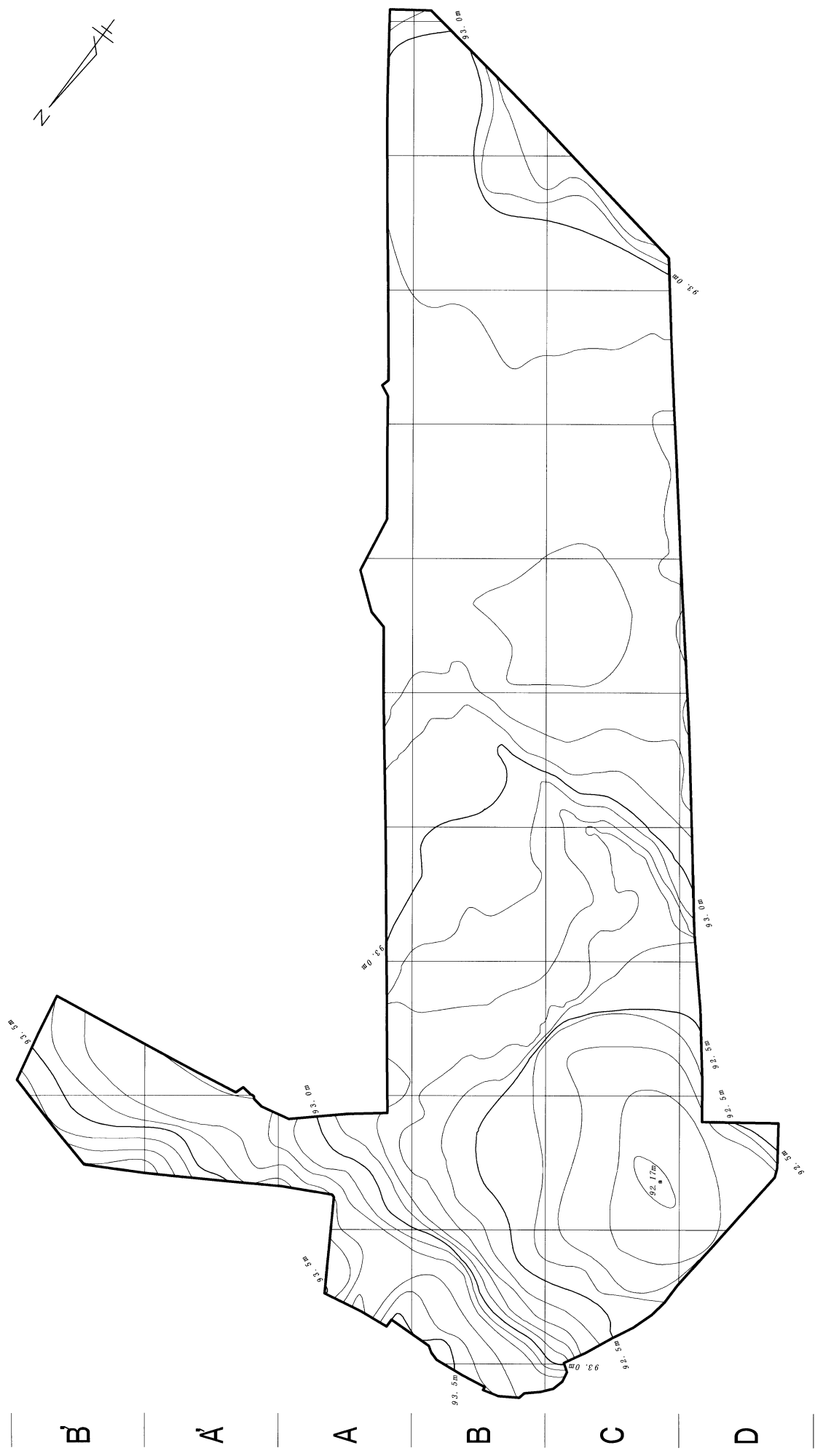
一方、遺構では検出を行えた層が低くなってしまい、その結果、多くの遺構はⅢb層での検出であった。また、遺構埋土の状態は良好であるとは言えなかったのが現状である。たとえば、明らかに同一の掘立柱建物跡を構成する柱穴の埋土状態には、かなりの相違が観察できた。さらに埋土中から様々な時代に属する遺物の出土した遺構が、多くみられた。

そのため遺構の所属時期は、形態などの特徴から判断を行わざるを得なかった。そのようななかで、縄文時代の調査では、早期に属する集石遺構や、前期～晩期に属する竪穴状遺構などが検出された。また、古墳時代の調査では溝状遺構が、古代の時代の調査では土師器や須恵器などがみつかった。中世の時代の調査では掘立柱建物跡や溝状遺構のほか数多くのピットや土坑が検出された。

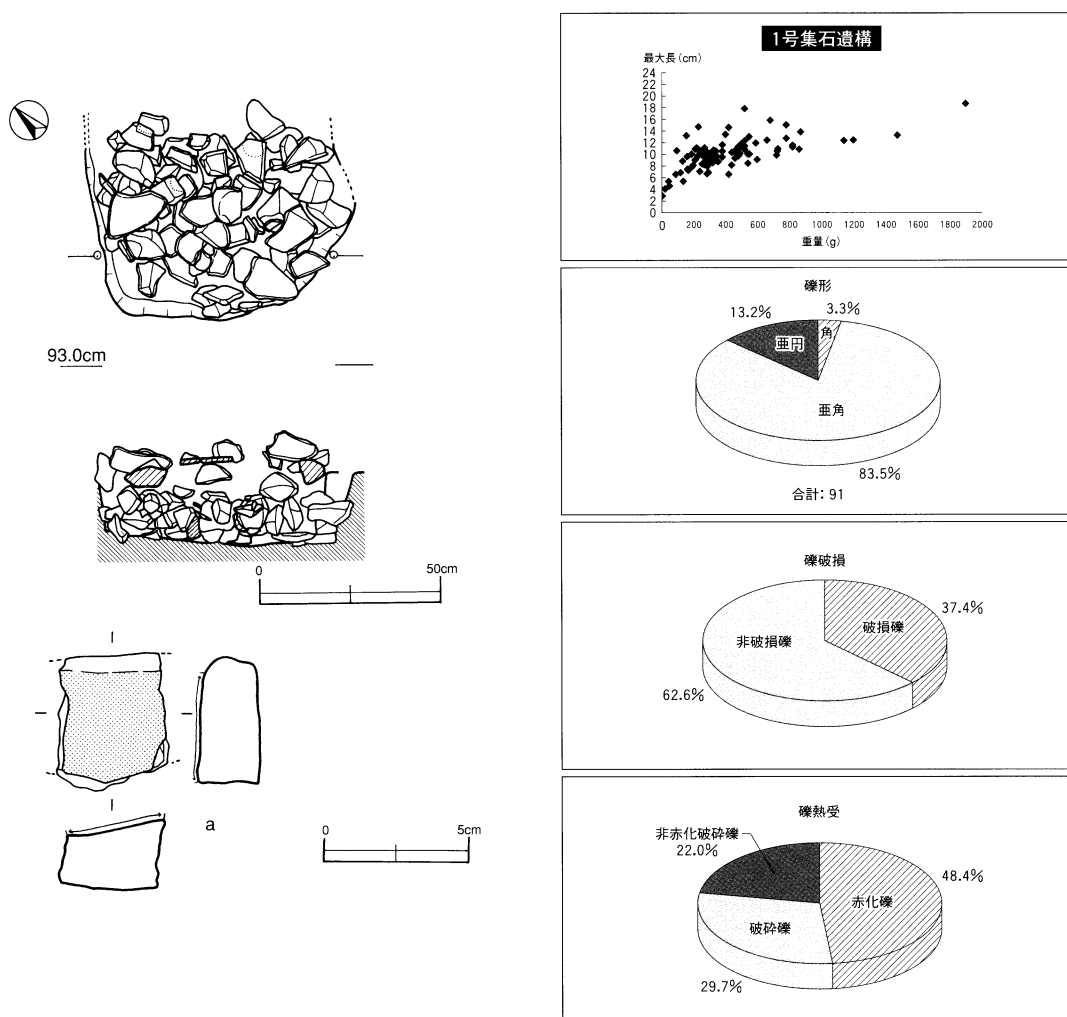


第61図 山ノ脇遺跡 縄文早期 検出遺構配置図（集石遺構）

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



第62図 山ノ脇遺跡 地形測量図およびグリッド配置図



第63図 山ノ脇遺跡 縄文早期 1号集石遺構および出土遺物実測図

第1節 縄文時代の調査

山ノ脇遺跡における縄文時代の調査では、縄文時代早期から晩期にかけての遺構・遺物が、アカホヤ火山灰の軽石層より上層の主にⅢb層・Ⅲa層から、一部はⅡ層からみつかった。後述するように山ノ脇遺跡では、Ⅲb層・Ⅲa層・Ⅱ層において古墳時代から古代期・中世期の遺物が混在して出土した。特に、古代期から中世期にかけての時期にピットなどサツマ火山灰層にまで達する掘削が数多く行われていたことが明らかとなった。このような状況から、縄文期に属する遺物が上層から多数出土することになったと考えられる。そこで、遺物については一括して報告する。

1 縄文時代早期の遺構

アカホヤ火山灰軽石層より下層に位置する縄文時代早期に属する遺構は、集石遺構1基であった。

1号集石遺構

A-15区V層で検出された集石遺構である。68cm×65cmの範囲内に密集した状態で、91個の礫が検出された。検出面から深さ約20cmの掘り込みが確認できた。構成礫は、大きさが拳大から人頭大、礫形の多くが垂角礫で構成されている。破損している礫は40%未満であるが、礫の半数は赤化し、さらに破砕礫が30%見られ、熱を受けた様相を示す礫は78%にのぼっている。

2 縄文時代前期～晩期の遺構

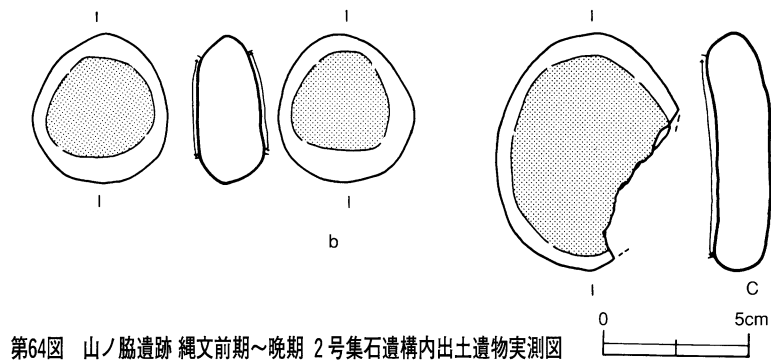
Ⅲ a 層およびⅢ b 層において遺物が混在して出土した山ノ脇遺跡では、遺構床着で出土した遺物がほとんどなく、縄文時代前期から晩期の各時期に属する遺構を明らかにすることは出来なかった。そのため遺構の形態から所属時期の判断を行った。その結果、集石遺構 5 基と竪穴状遺構 1 基が当該期に属する遺構と判断した。

集石遺構

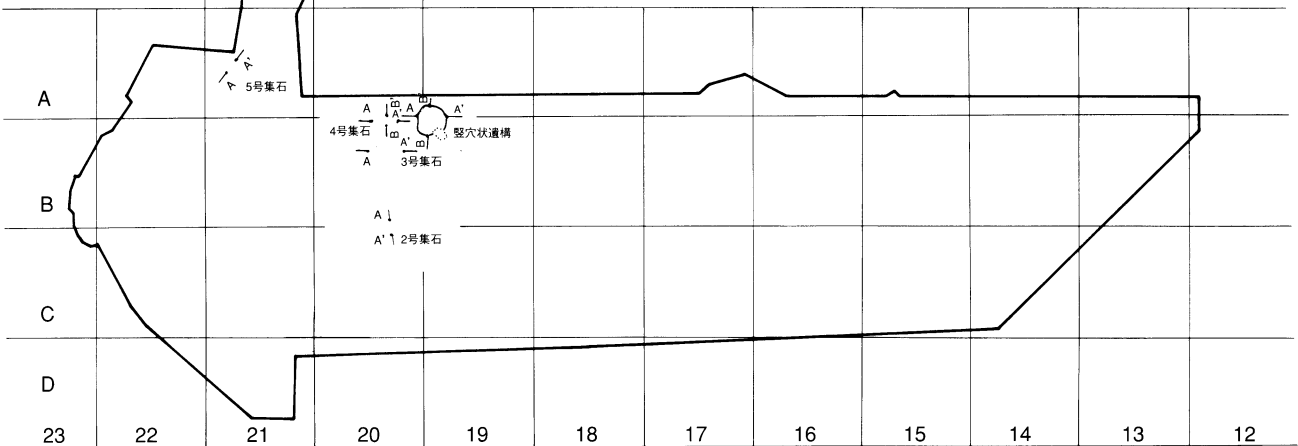
縄文時代前期から晩期にかけての集石遺構は、A～D-20・21区で検出された。

2号集石遺構

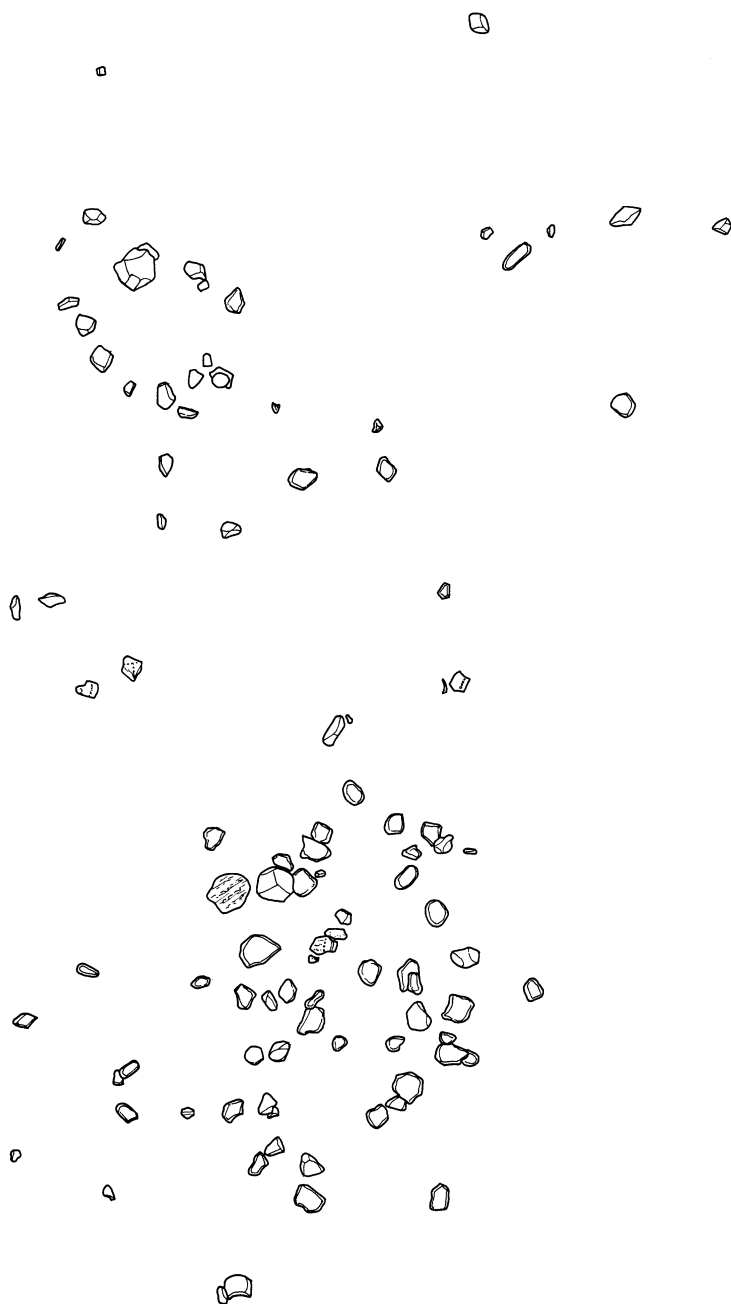
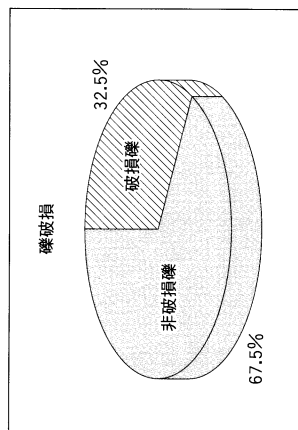
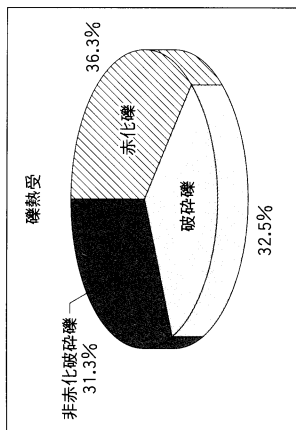
B・C-20区Ⅲ b 層で検出された集石遺構である。285cm×265cmの範囲内に散乱した状態で、80個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大、礫形の多くが亜角礫および亜円礫で構成されている。礫の多くは赤化あるいは破碎しており熱を受けた様相を示すものの、破損した礫はあまりみられなかった。



第64図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 2号集石遺構内出土遺物実測図

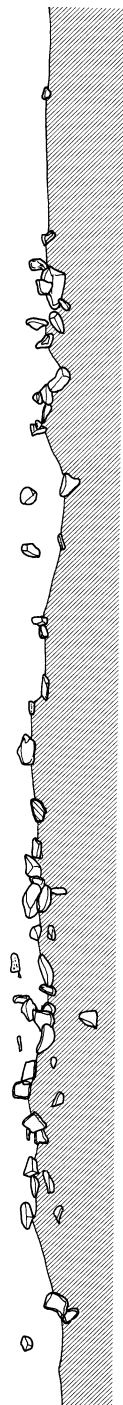


第65図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 検出遺構配置図



92.8m A

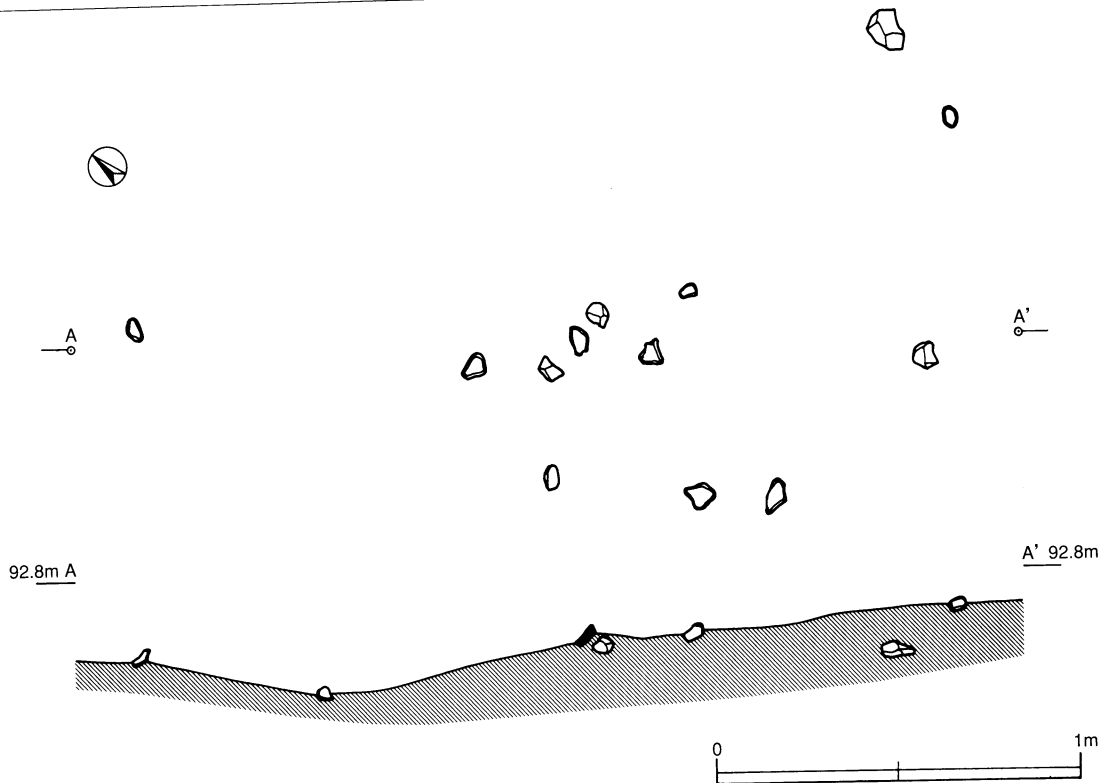
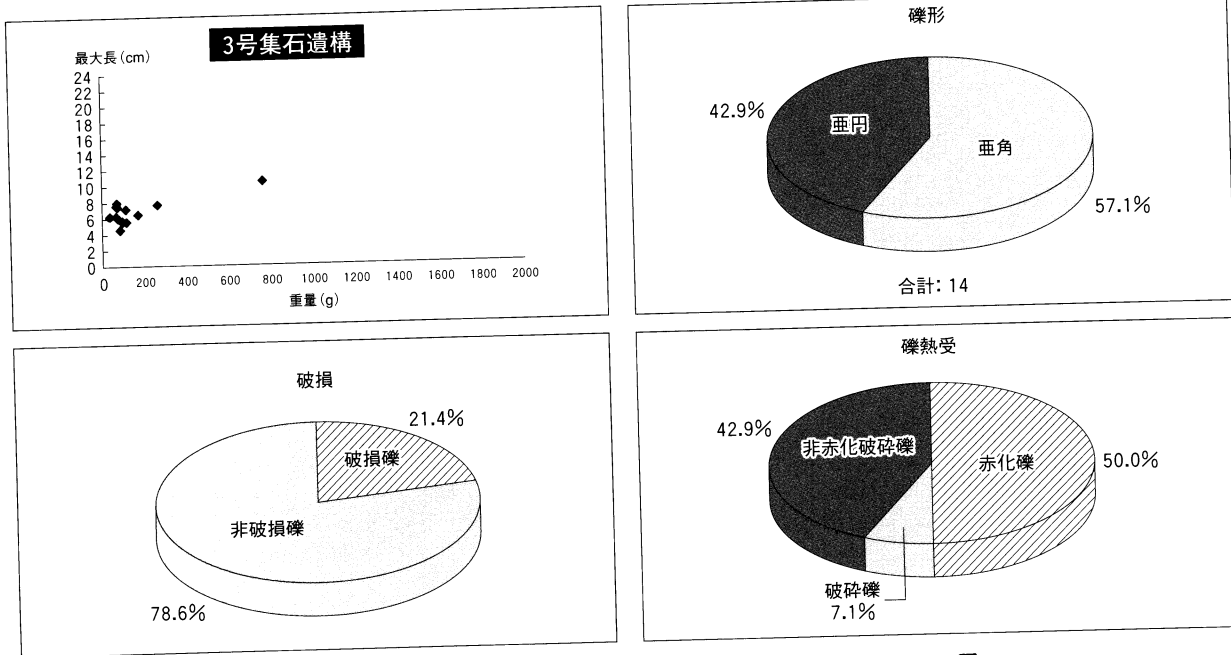
A' 92.8m



第66図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 2号集石遺構実測図

3号集石遺構

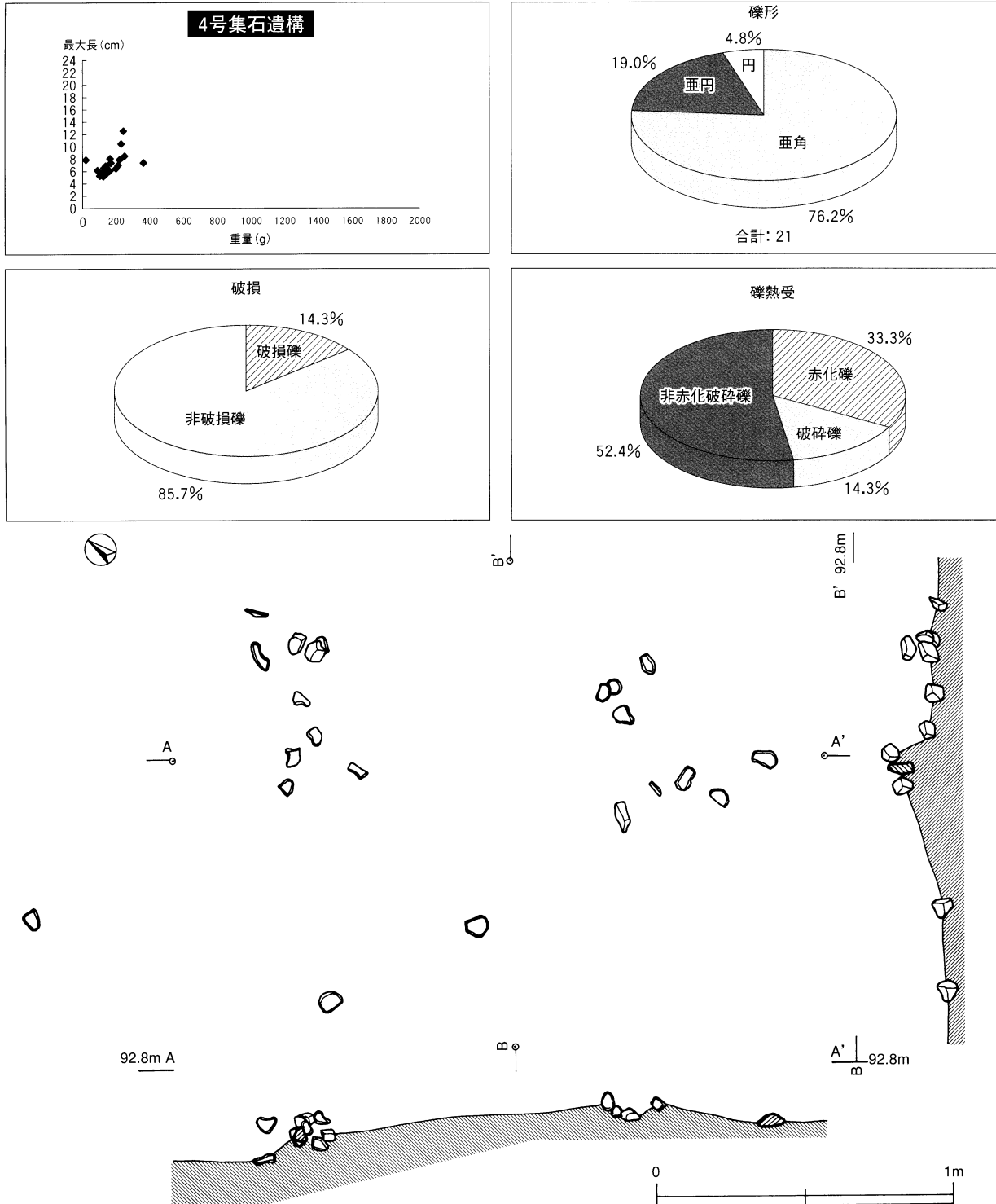
B-20区Ⅲb層で検出された集石遺構である。225cm×136cmの範囲内に散乱した状態で、14個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大、礫形の多くが歪角礫で構成されている。礫の多くは破損がみられなかったものの、赤化など熱を受けた様相を示す礫は半数を数えた。しかし、破碎した礫はあまりみられなかった。



第67図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 3号集石遺構実測図

4号集石遺構

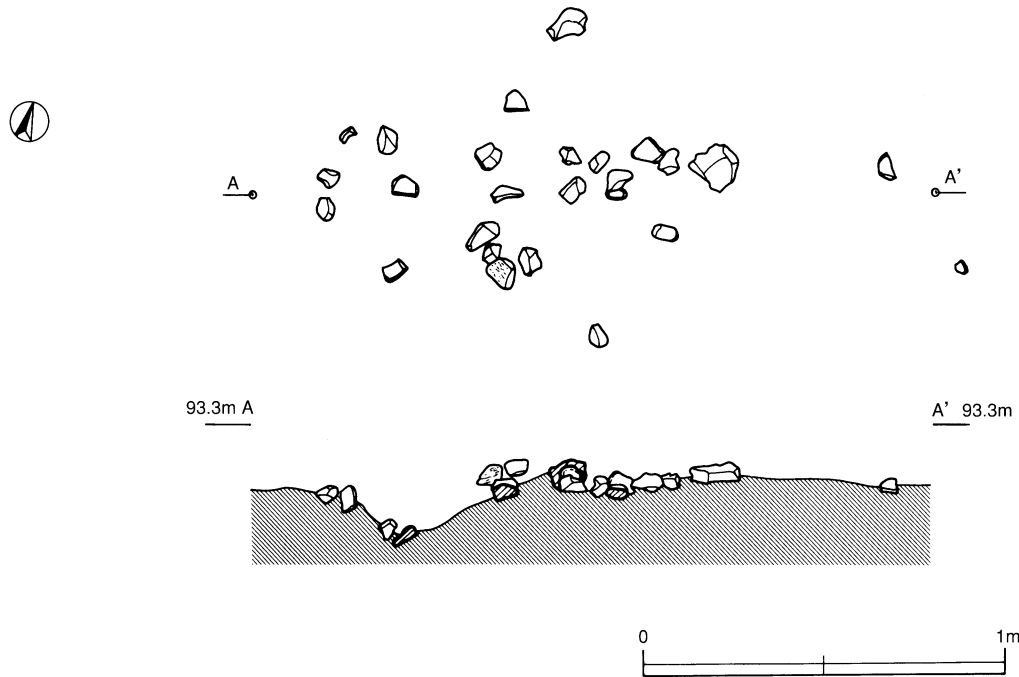
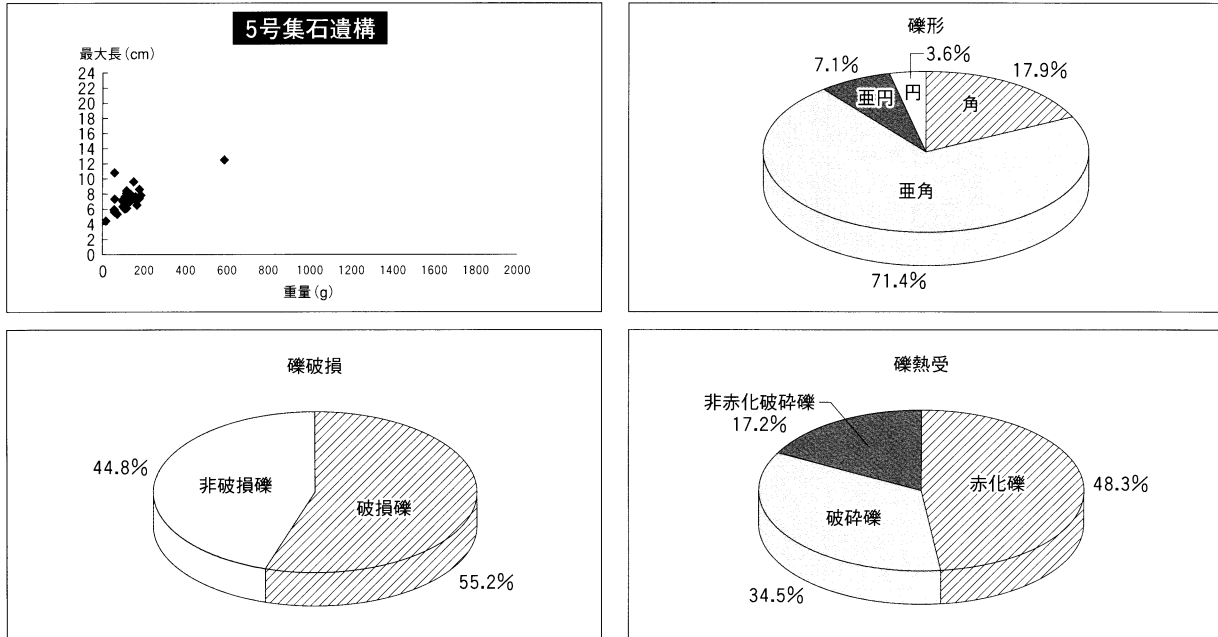
A-20区Ⅲb層で検出された集石遺構である。175cm×136cmの範囲内に散乱した状態で、21個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大、礫形の多くが亜角礫で構成されている。構成礫の約半数が赤化あるいは破碎して、熱を受けた様相を示していた。



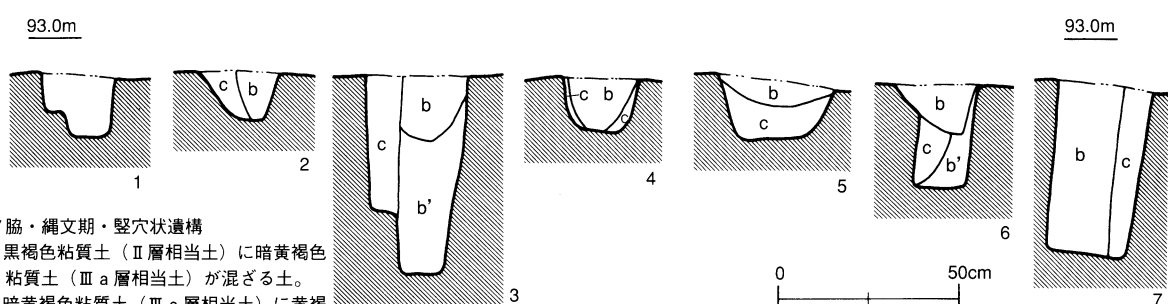
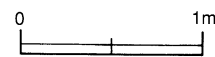
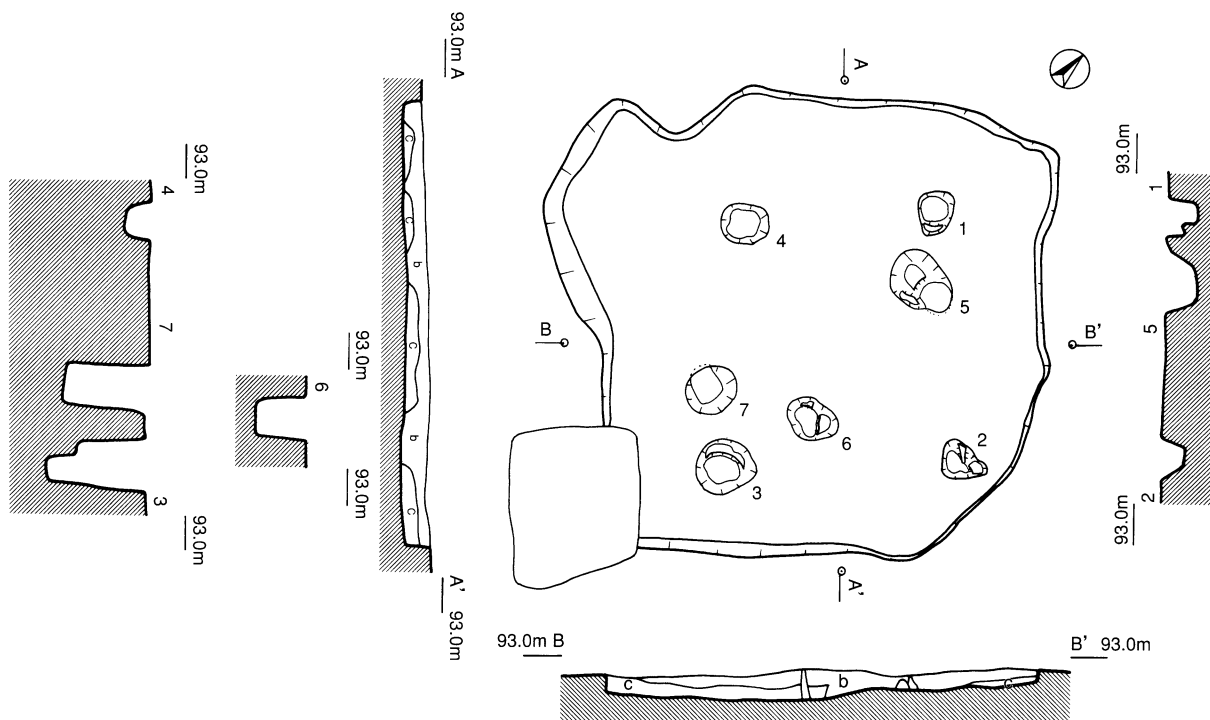
第68図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 4号集石遺構実測図

5号集石遺構

A-21区Ⅲb層で検出された集石遺構である。160cm×92cmの範囲内に散乱した状態で、29個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大、礫形の多くが亜角礫であったが、角礫や円礫も一部みられた。礫は半数以上が破損し、その残りの多くも赤化あるいは破碎して熱を受けた様相を示す礫であった。



第69図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 5号集石遺構実測図



山ノ脇・縄文期・竪穴状遺構
 b: 黒褐色粘質土(Ⅱ層相当土)に暗黄褐色粘質土(Ⅲa層相当土)が混じる土。
 c: 暗黄褐色粘質土(Ⅲa層相当土)に黄褐色砂質土(Ⅲb層相当土)が混じる土。

第70図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 竪穴状遺構実測図

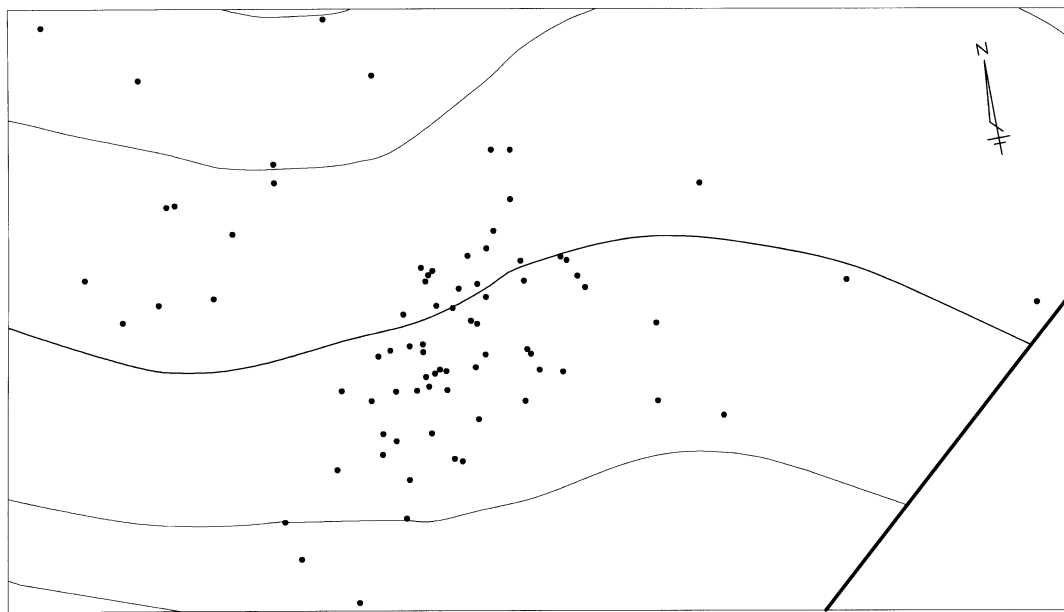
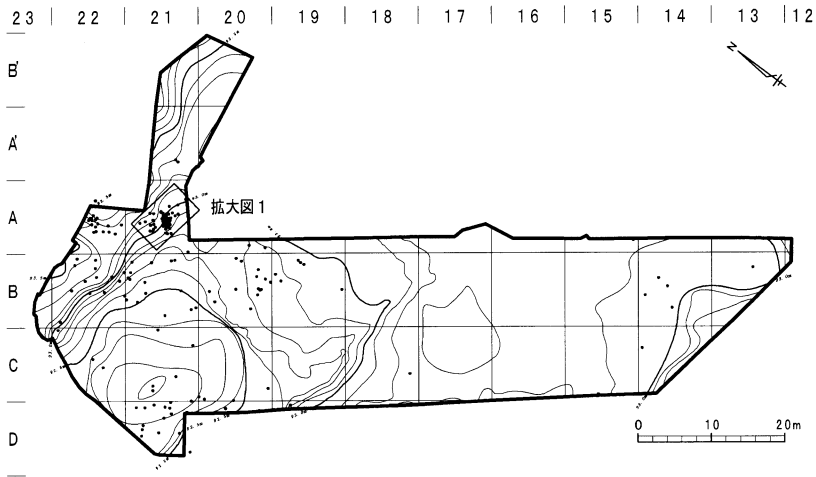
竪穴状遺構

山ノ脇遺跡では中世期に属する竪穴遺構が、A・B-19・20区Ⅲa層で1基検出された。形状は、平面形が250cm×240cmを測る略隅丸方形を基本形に、西側に約80cm×40cm、検出面から深さが約20cmを測る、略長方形の張り出し部が検出された。

また遺構床面ではピットが7基見つかった。特に壁面から約50cm離れた位置で検出された、1～4の4基のピットは、心心距離で約110cm～140cmを測る。3と7のピットは、長径30cm前後、深さ50cm前後あり、群を抜く大きさである。また、近接して検出された1と5のピットは、深さにほとんど違いがない。このことから、3と7、1と5は建て替えによる掘り直しが行われたと判断できる。

ところで遺構本体およびピットの埋土堆積状況は、Ⅲa層相当土にⅢb層相当土が混じる土の上に、Ⅱ層相当土にⅢa層相当土が混じる土が検出された。

遺構形態および埋土堆積状況から、縄文前期～晩期に属する遺構と判断した。



93.0
92.8
92.6

93.0
92.8
92.6

93.0
92.8
92.6

93.0
92.8
92.6

拡大図1



第71図 山ノ脇遺跡 縄文前期～晩期 ブロック検出状況図

3 縄文時代の遺物

(1) 土器

早期土器

1は直口する口縁部で、口唇部は外側へ張り出し気味に面取りする。外面には無節の縄文を施す。器壁は5mmと薄い。2は、屈曲する肩部から外反しながら口縁部へ至る頸部である。縦方向に一部間隔を置いて無節の縄文を施し、1と同一個体と考えられる。興味深いのは、内外面に色の異なる付け足した粘土が観察される点である。内外面とも縦横に赤燈色をした粘土が器表面に塗られている。恐らく焼成前にひび割れをみつけて、応急措置した痕跡であると考えられる。3は5mm～10mmの間隔で縦位に微隆突帯を貼り付ける。5は菱形の押型文で23mm×15mmが一つの単位となる。原体の確実な復元はできない。以上の土器は文様手法や構成はそれぞれ異なるが、外反しながら内傾する頸部であり、早期後半に位置付けられている手向山式土器であると考えられる。

7は大きく外側へ開く口縁部であり、平らに面取りした口唇部分と頸部屈曲部に貝殻腹縁状の工具での押し文が巡っている。塞ノ神B式土器と考えられる。

前期土器

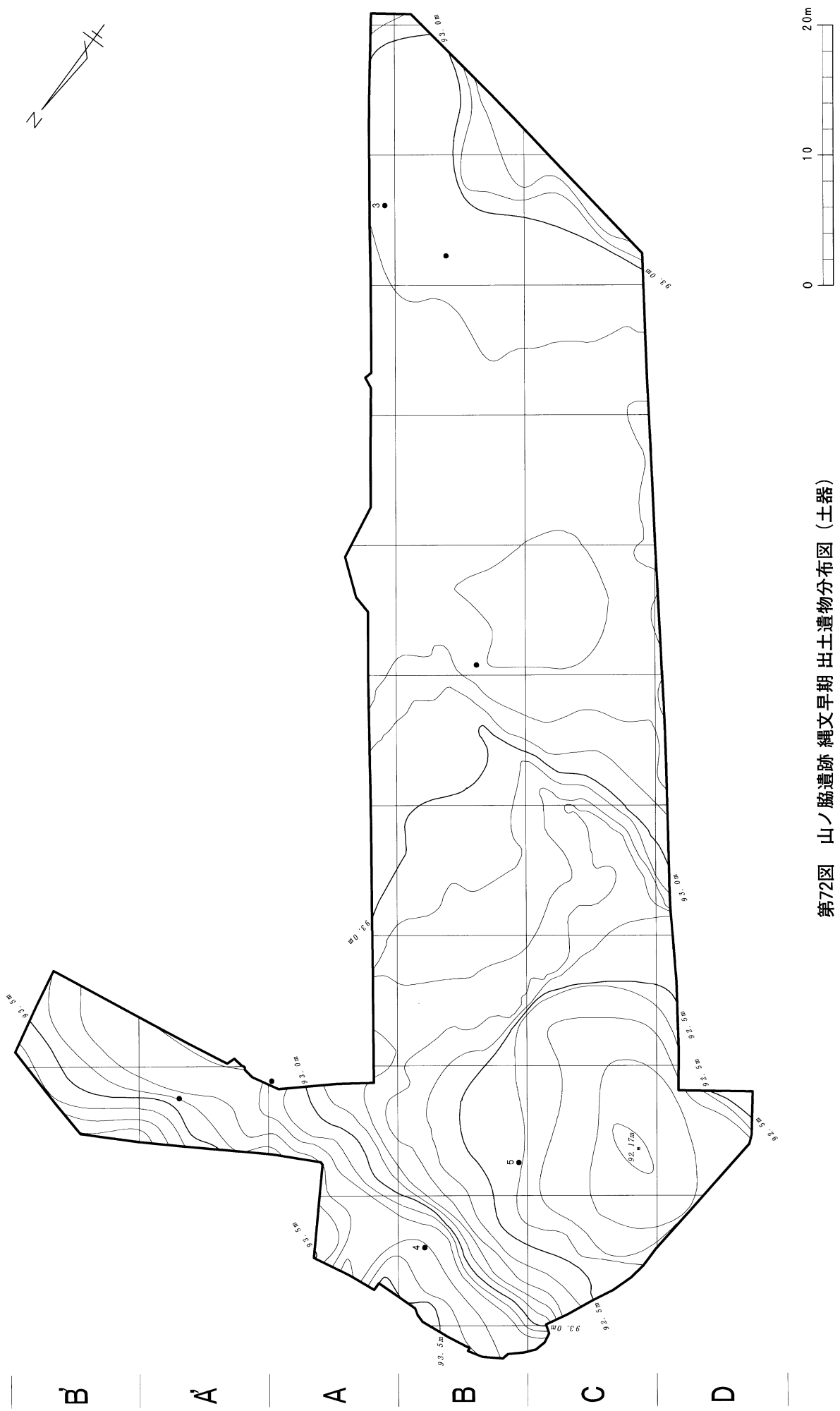
8は、内外面とも貝殻条痕による器面調整で、外面にはミミズ腫れ状の微隆突帯が巡る。155は列点が巡る。前期前半に位置付けられる轟B式土器の中でも、荘タイプと呼ばれる土器に該当する。9～32は凹線あるいは沈線で文様を描く土器である。11は条痕状に綿密な凹線を縦方向へ描き、口縁部付近は口縁に沿って大きな弧を描く。口縁部内面にも横位の凹線が施される。13～32は短沈線で描くものである。こちらも確実に曾畑式土器と呼べるものではないが、その近さが想定される。33～38も縦位の凹線が胴部に施されている。

これらの土器については、該当する型式名はないが、口縁部内面に文様を描く点と凹線を用いることから、前期後半の曾畑式土器に近いと考えられる。典型的な曾畑式土器とは異なり、曾畑式土器の初源あるいは終焉を窺い知ることができそうな資料であり、今後の資料の増加を待ちたい。

第27表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表(1)

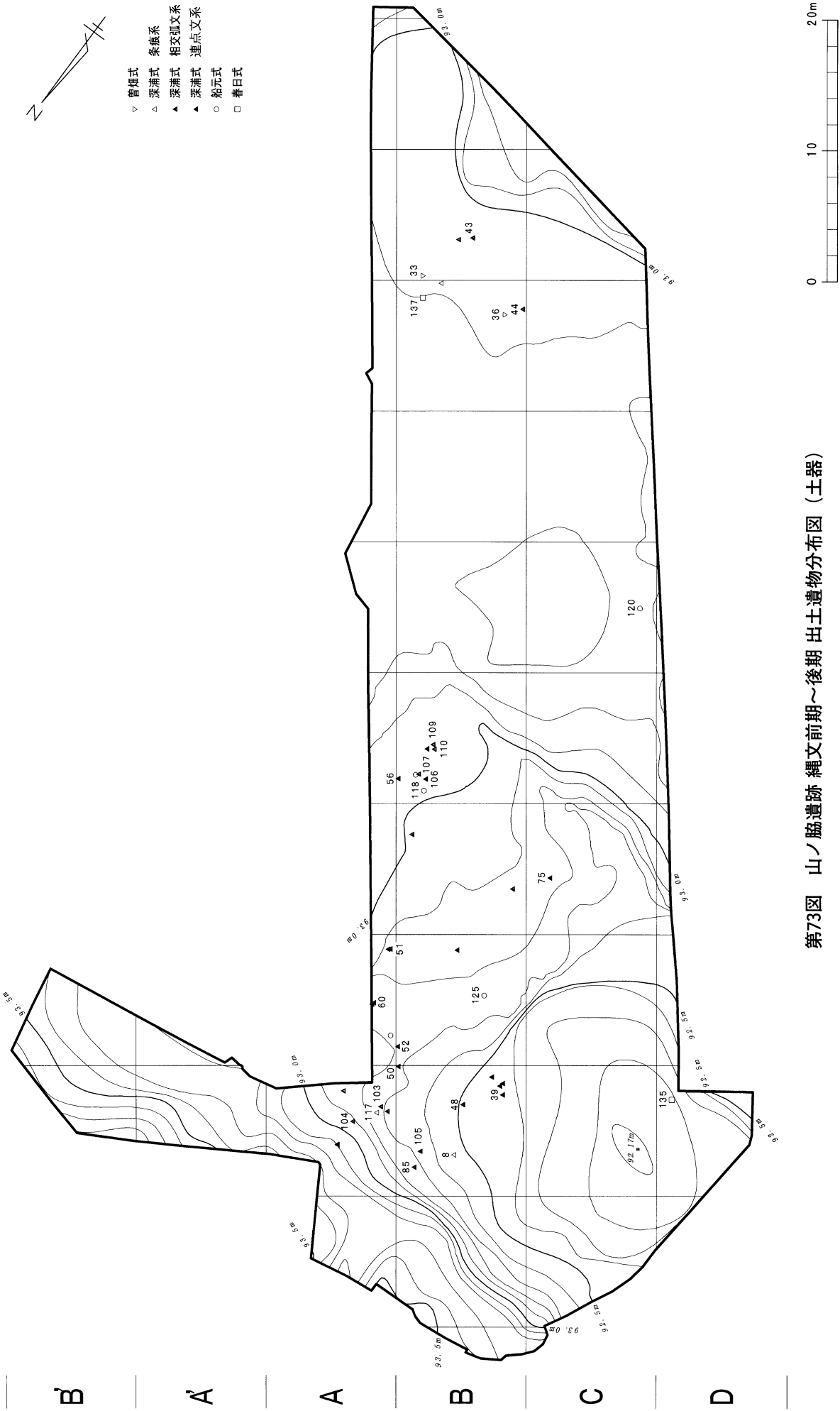
図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
75	1	C17	P1	手向山式土器	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		ナデ	縄文	-	
	2	B17	Ⅲ a	手向山式土器	胴部	にぶい黄色	にぶい黄褐色		ナデ	縄文	2601	2604、焼成前補修痕
	3	A14	V	手向山式土器	胴部	にぶい黄色	にぶい黄褐色	微隆起線	ナデ	ナデ	5697	5698
	4	B22	Ⅲ b	手向山式土器	口縁部	灰黄褐色	にぶい橙色		ナデ	押型文	4697	
	5	B21	Ⅲ a	手向山式土器	胴部	灰黄色	橙色		ナデ	押型文	3902	
	6	A22	Ⅲ a	手向山式土器	胴部	灰黄色	橙色		ナデ	押型文	3851	
	7	C22	I b	塞ノ神B式土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻刺突	ナデ	ナデ	2249	
	8	B21	Ⅲ b	轟B式土器	胴部	褐灰色	褐灰色	突帯	貝殻条痕	貝殻条痕	5419	
	9	A14	Ⅲ a	曾畑式系土器	口縁部	にぶい橙色	にぶい橙色	凹線	ナデ	ナデ	3937	
	10	A14	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	褐灰色	凹線	ナデ	ナデ	1860	
	11	B15	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	にぶい黄褐色	凹線	ナデ	ナデ	5702	B14Ⅲ a 3942・3943
	12	B14	Ⅲ a	曾畑式系土器	口縁部	にぶい橙色	褐色	凹線	ナデ	ナデ	1082	
	13	A19	Ⅲ a	曾畑式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	4402	
	14	B21	Ⅲ a	曾畑式系土器	口縁部	褐灰色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	3491	B20Ⅲ b 5263
	15	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	口縁部	褐灰色	灰黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	5098	
	16	C20	Ⅲ b	曾畑式系土器	口縁部	暗灰黄色	褐灰色	沈線	ナデ	ナデ	4575	
	17	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	4057	B21Ⅲ b 5155・5372
	18	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	褐灰色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	4953	4471・4475
	19	B20	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	褐灰色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	3728	4952
	20	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	にぶい橙色	灰黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	4498	

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



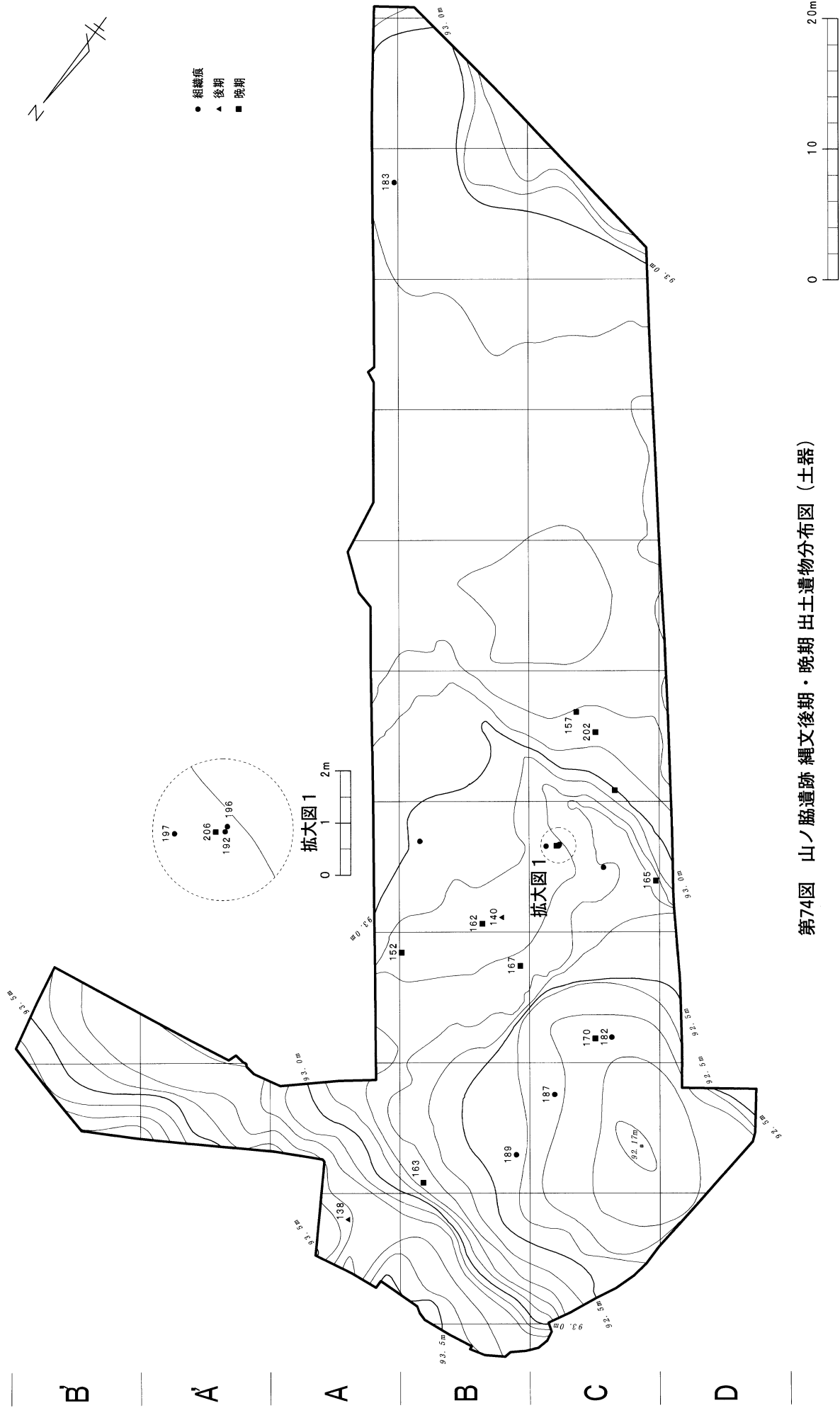
第72図 山ノ脇遺跡 縄文早期 出土遺物分布図 (土器)

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12

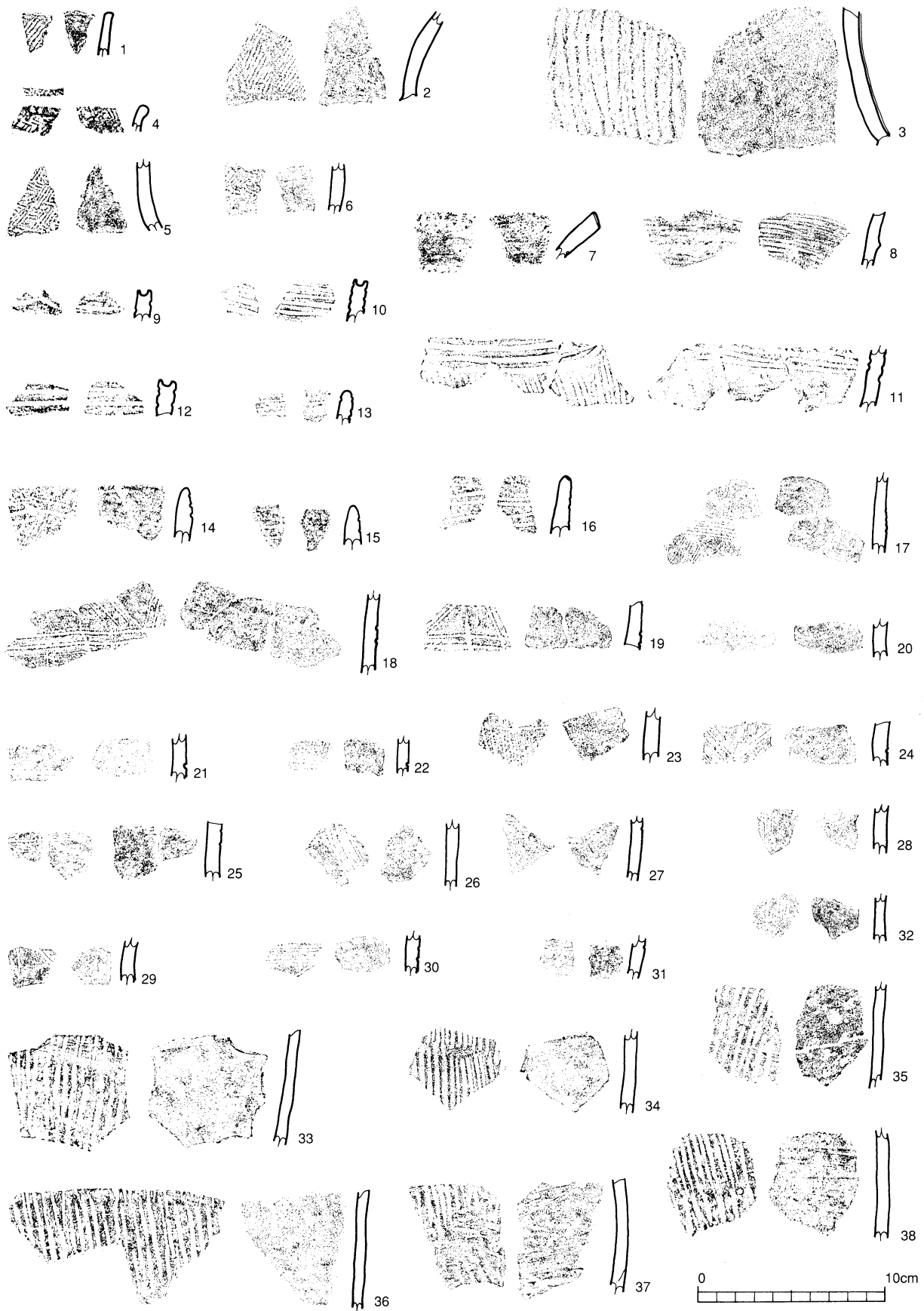


第73図 山ノ脇遺跡 縄文前期～後期 出土遺物分布図 (土器)

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



第74図 山ノ脇遺跡 縄文後期・晩期 出土遺物分布図 (土器)



第75図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図1 (早期~前期土器)

第28表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表（2）

図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
75	21	B20	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	暗灰黄色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	3816	
	22	T12	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	灰褐色	沈線	ナデ	ナデ	99	
	23	C21	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	にぶい黄色	暗灰黄色	沈線	ナデ	ナデ	3670	
	24	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	褐灰色	黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	5650	
	25	B21	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	3555	5262
	26	B20	溝	曾畑式系土器	胴部	暗灰黄色	にぶい黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	680	
	27	B21	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	暗灰黄色	暗灰黄色	沈線	ナデ	ナデ	5646	
	28	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	褐灰色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	5100	
	29	B21	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	にぶい褐色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	5160	
	30	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	4951	
	31	B20	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	4956	
	32	B21	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	にぶい褐色	黒褐色	沈線	ナデ	ナデ	4158	
	33	B14	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	黒褐色	凹線	ナデ	ナデ	3940	
	34	B15	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	灰黄褐色	黒褐色	凹線	ナデ	ナデ	1839	
	35	T18	Ⅱ	曾畑式系土器	胴部	にぶい黄色	黒褐色	凹線	ナデ	ナデ	271	B14Ⅲ b 4255
	36	B15	Ⅲ b	曾畑式系土器	口縁部	褐灰色	浅黄色	凹線	ナデ	ナデ	1272	B15Ⅲ a 3970
	37	B15	Ⅲ a	曾畑式系土器	胴部	にぶい黄色	黒褐色	凹線	条痕	ナデ	3975	
	38	C15	Ⅲ b	曾畑式系土器	胴部	黒褐色	浅黄色	凹線	ナデ	ナデ	4860	

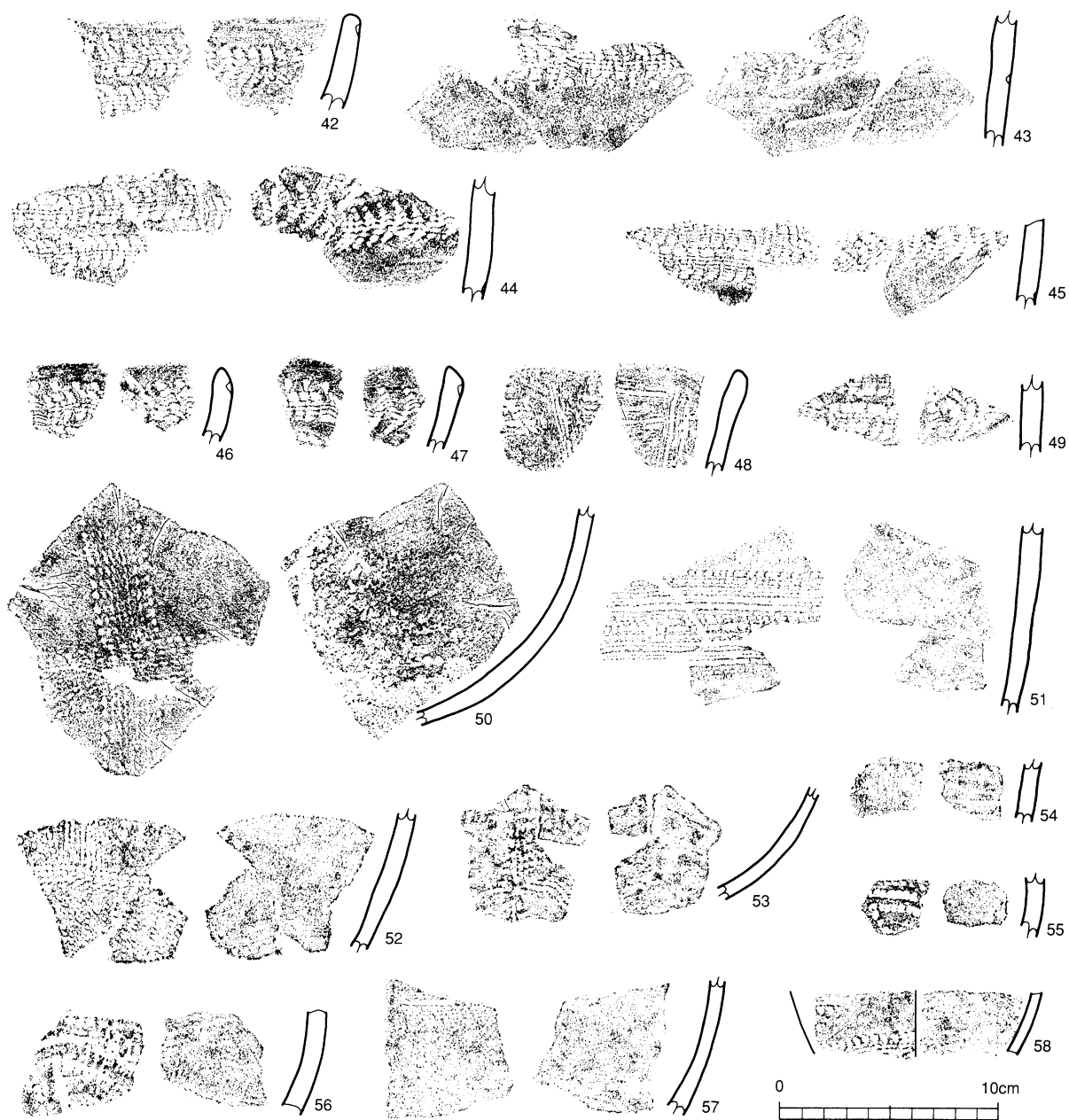
39～41は、口縁部直径28.9 cmに復元される深鉢形土器である。4ヶ所に低い頂部をもち、口唇部は丸みを帯びた平坦面をもつ。器形はくびれをもたずに全体的に外傾し、底部は丸底に近いと考えられる。外面の文様は波頂部に縦の無文帯を残し、二又を単位とする施文具で横方向に少なくとも13条の押し連点文を施す。押し連点文の始まりと終わりには、間隔をおいた連点が施される。また、同様の施文具で口唇部に縦長の連点を巡らす。内面は二又を単位とする施文具の押し連点文を4条巡らせ、その上下に連点を施す。一番下には、左手親指と考えられる爪痕が認められる。



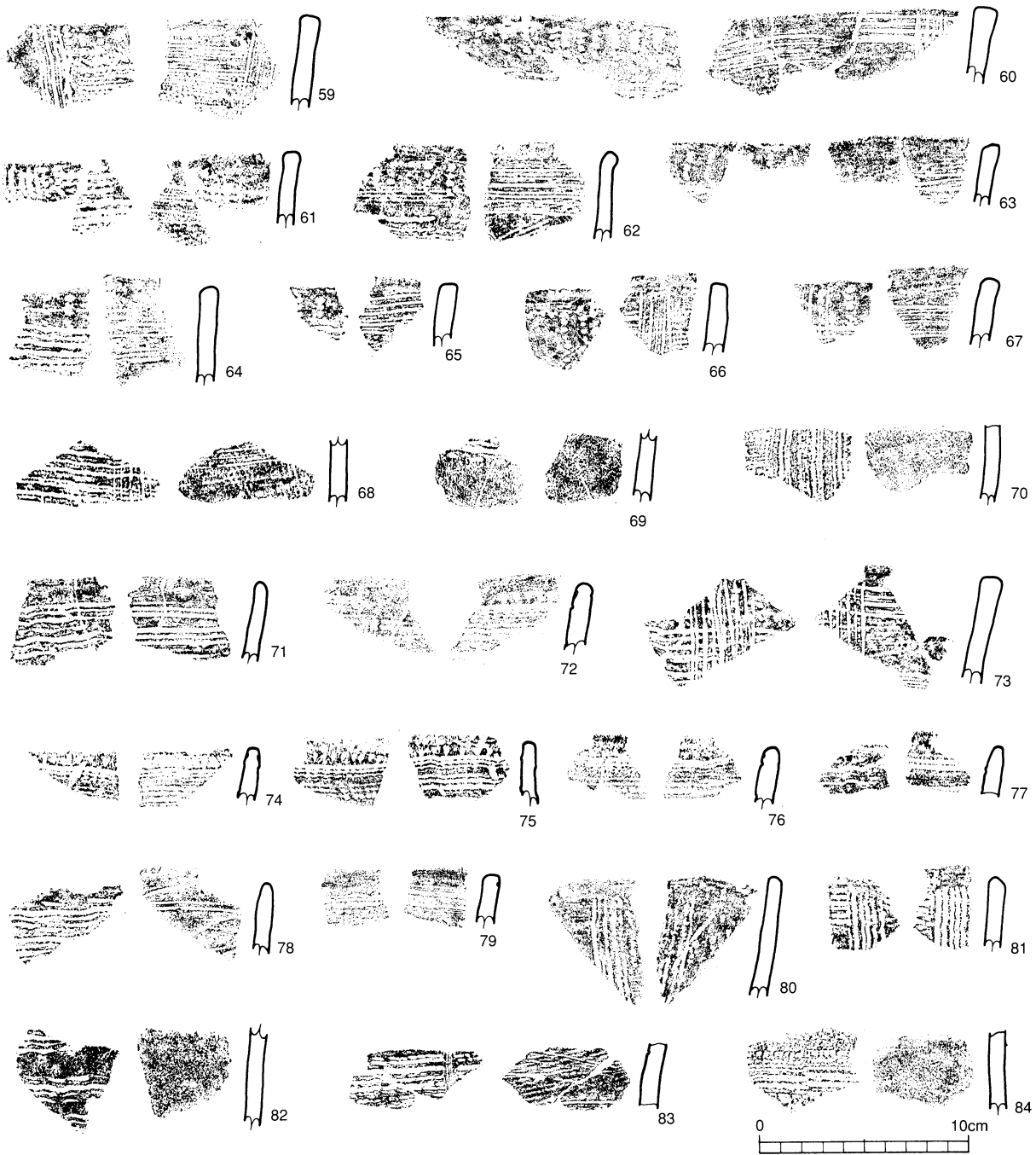
第76図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 2（深浦式系土器 1）

42～49は幅の狭い貝殻腹縁による相交弧文を密に施すタイプである。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は丸く収める。内外面とも丁寧なナデで器面を調整した後、文様を施す。相交弧文は上から下へ、また左から右へと施されている。流れるように施文するためか、一部分櫛描波状文に見える部分もある。相交弧文の上下にはヘラ状工具による深い刺突が1条ずつ巡っている。また、部分的に縦位にも同様の刺突が施される。口縁部内面にも少なくとも2段の相交弧文が施されるが、刺突文はみられない。

50～58は数条の連点によって文様を描くものである。50のように連点の間隔がやや開くものと、51のように連点の間隔が詰まって押引状になるものがある。

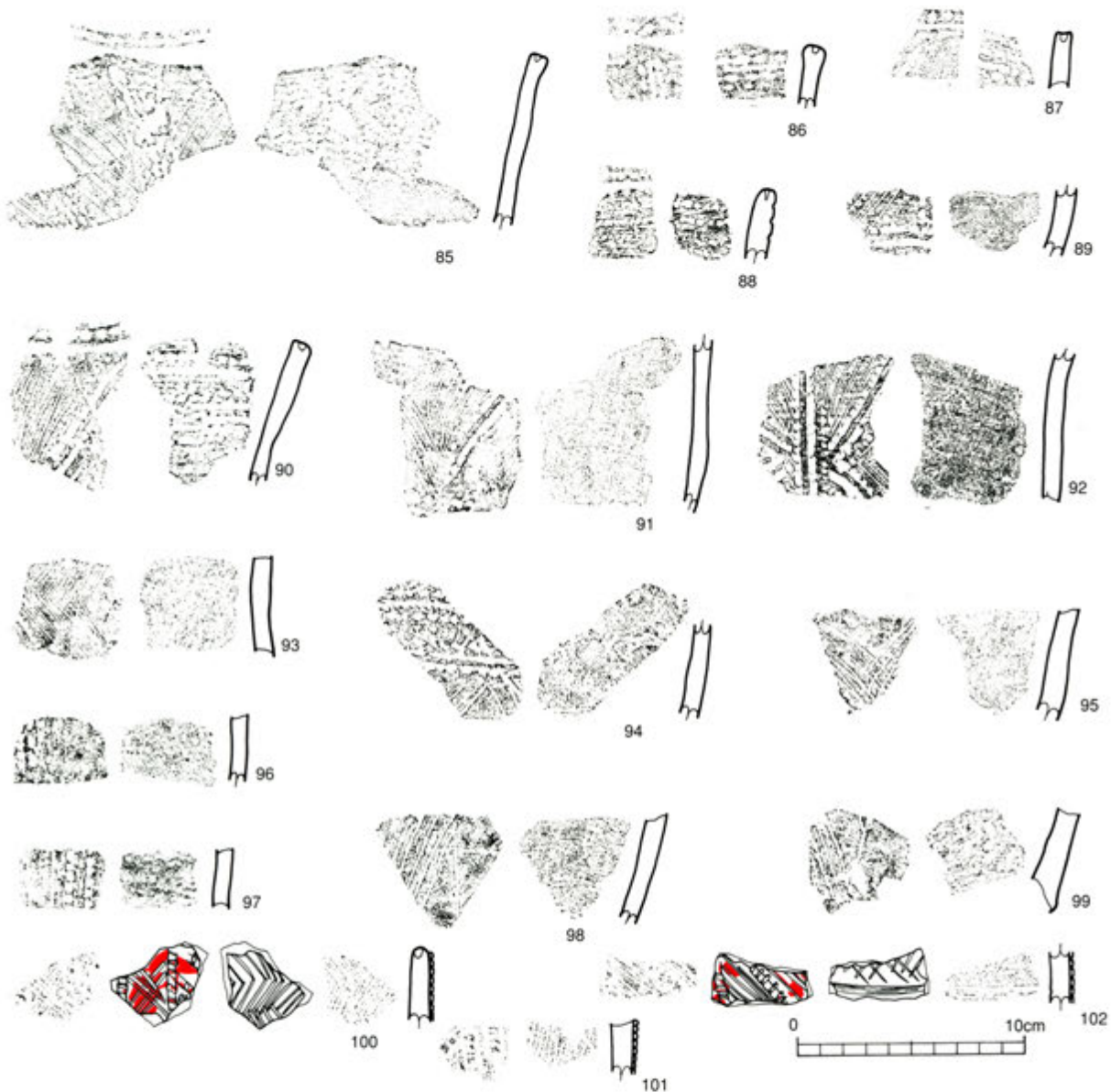


第77図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図3 (深浦式系土器2)



第78図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図4 (深浦式系土器3)

59～84は押引状の連点文が流れるような感じとなり、櫛描波状文のようなタイプである。64はほぼ直口する口縁部で、口唇部はやや内傾させながら丸く収めるものである。口縁部外面には、1cm幅に3点を単位とする工具と、それから2mm下位にある重なり合う2点を基準とした刺突が1cm間隔で巡っている。その下に3条を単位とする工具を押引しながら、あるいは波状を作りながら横位に施文する。口縁部内面には、12mm幅の板状工具を浅く横位にナデて文様としている。同一個体とは断定できないものの、73も工具は64と同じ物を使用していると考えられる。基本的な施文は64と同じであり、その一部に内外面とも同じ工具で縦位に沈線を施す。口縁内面の横位の施文は、26mmの間隔をおいてもう1段下にもみられる。



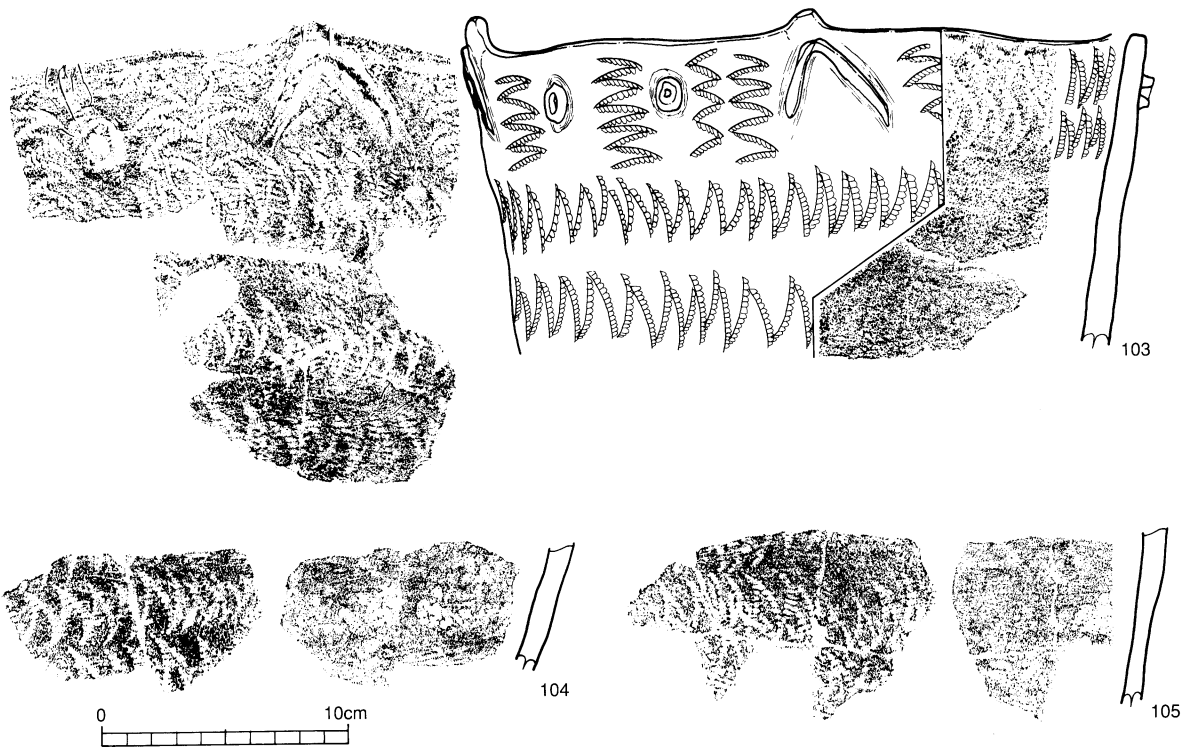
第79図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図5 (深浦式系土器4)

85~102は、押引連点文と沈線文を併用するタイプである。3~4条の押引連点文を「米」の字状に施した後、斜線を主に空白を埋めている。85はほぼ外傾する口縁部で、口唇部は平に面取りし、刺突文を施す。口縁部の低い頂部から縦方向に押引連点を施し、口唇部に沿っても同様の施文を巡らす。口縁部内面も約4cm幅で押引連点文を巡らす。沈線は斜位を施した後、縦位の沈線を引いている。

100~102は、細い粘土紐を「米」の字状に貼り付け、その上をヘラ状の工具で刻む。そして突帯間を斜位の沈線で埋めてある。100は口唇部に棒状の工具で刺突を加える。内面は斜位の短沈線を羽状に巡らす。100と102は外面に赤色顔料が塗られている。パイプ状ベンガラである。

第29表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表（3）

図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
76	39	B21	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	押し連点文	ナデ	ナデ	3683	3684・3918・4094・4097～4102・5302, BC21溝
	40	B20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	灰黄色	暗灰黄色	押し連点文	ナデ	ナデ	4946	B21Ⅲ b 5134
	41	B21	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	灰黄色	にぶい黄橙色	押し連点文	ナデ	ナデ	5147	5428
77	42	B14	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部～胴部	にぶい橙色	灰褐色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4304	
	43	B14	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4279	5554
	44	B15	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4856	B14Ⅲ a 1191・1196
	45	B14	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	灰褐色	灰黄褐色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4278	5557
	46	B14	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	明黄褐色	にぶい橙色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4081	
	47	C15	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	褐灰色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4265	
	48	B21	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部～胴部	にぶい橙色	黒褐色	連続相交弧文	ナデ	ナデ	4090	
	49	C15	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	褐灰色	灰褐色	押し連点文	ナデ	ナデ	4859	
	50	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	橙色	明黄褐色	押し連点文	ナデ	ナデ	5109	
	51	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい橙色	押し連点文	ナデ	ナデ	4547	4549・4551
	52	B20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい赤褐色	橙色	押し連点文	ナデ	ナデ	4505	B21Ⅲ b 4070
	53	C21	Ⅲ a	深浦式系土器	胴部	橙色	褐色	押し連点文	ナデ	ナデ	4123	C21Ⅲ b 4127
	54	B20	I b	深浦式系土器	胴部	橙色	褐色	押し連点文	ナデ	ナデ	3486	
	55	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	褐色	褐色	連点文	ナデ	ナデ	5108	
	56	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	連点文	ナデ	ナデ	1888	
	57	C19	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4557	
	58	B19	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	連点文	ナデ	ナデ	4345	4906
	59	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	暗灰黄色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	4001	
	60	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	黒褐色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4002	4005
	61	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	3999	4010
	62	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	暗灰黄色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4067	条痕
	63	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	暗灰黄色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	1236	4065
	64	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	灰黄褐色	褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4000	
	65	C20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	4971	
	66	?	?	深浦式系土器	口縁部	褐灰色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	3990	?
	67	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	褐灰色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	4068	
	68	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	褐灰色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4003	
	69	B20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	1909	
	70	A19	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	4201	
	71	B20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	灰褐色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4447	4448
	72	B19	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4360	4541
	73	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4156	
	74	B19	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4366	
	75	C19	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい黄褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	5239	
	76	B19	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4367	
77	B20	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	灰褐色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	3859		
78	B20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	灰褐色	灰褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4458		
79	B21	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	5311		
80	C20	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	1239		
81	B20	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	715		
82	B20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい褐色	灰褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4919	B21Ⅲ b 5311	
83	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい褐色	褐灰色	押し波状文	ナデ	ナデ	4004		
84	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい褐色	黒褐色	押し波状文	ナデ	ナデ	4548		
85	B21	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	褐色	黒褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	4627	465, B22Ⅲ b 4715・4724, 内面相交弧文	
86	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	灰黄褐色	黒褐色	連点文	ナデ	ナデ	4086	?	
87	A20	Ⅱ	深浦式系土器	口縁部	灰黄褐色	褐灰色	連点+沈線	ナデ	ナデ	3450	内面相交弧文	
88	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい褐色	褐灰色	連点文	ナデ	ナデ	4185		
89	A20	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	4504		
90	B19	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	褐灰色	黒褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	1223	A20Ⅲ b 3986, 内面押し連点文	
91	A22	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	灰黄褐色	にぶい黄褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	5095	5110	
92	B19	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	褐灰色	連点+沈線	ナデ	ナデ	1224		
93	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	黄灰色	にぶい黄褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	5105		
94	C14	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	黄褐色	明褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	5531		
95	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	褐灰色	にぶい黄褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	5623		

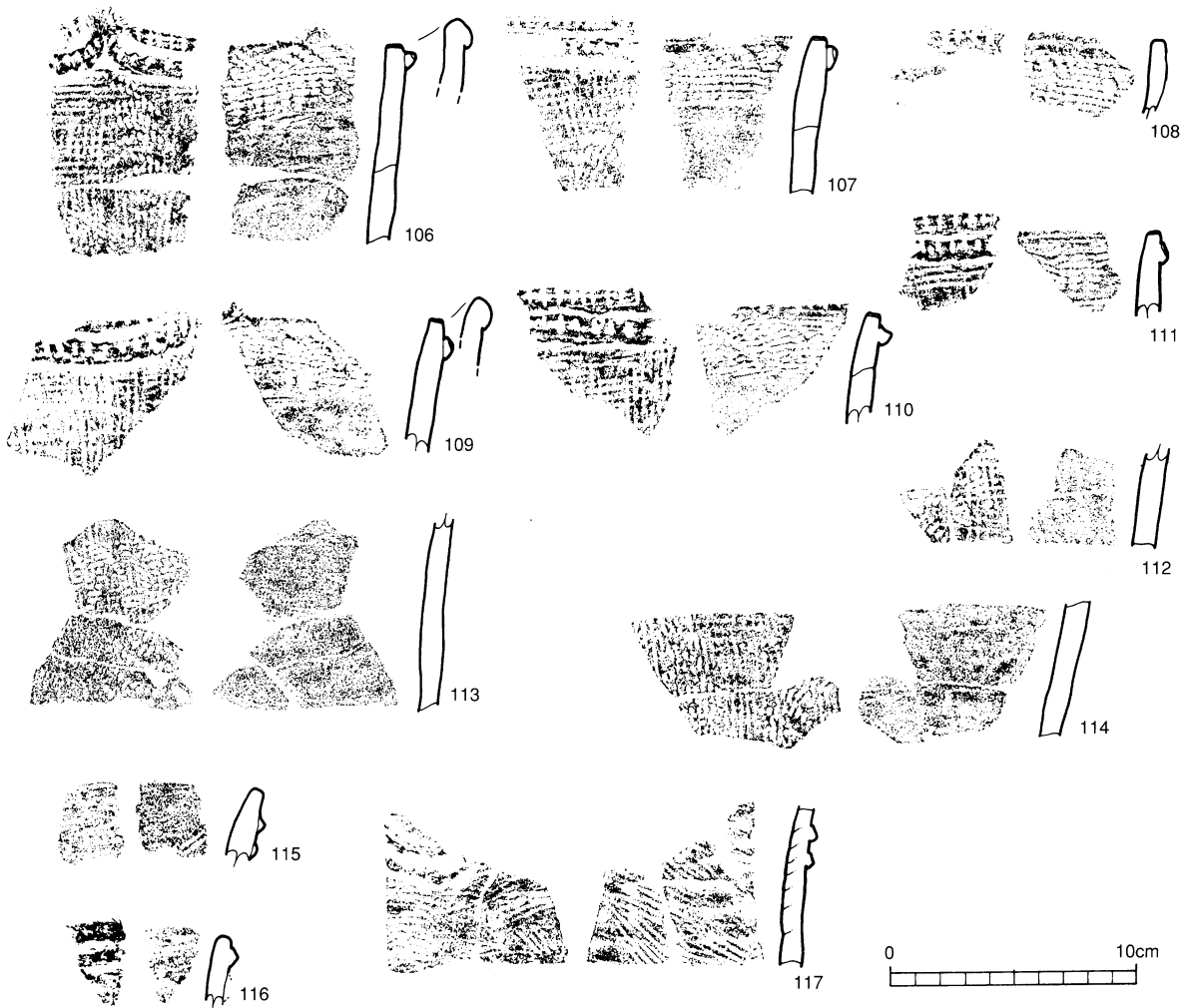


第80図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図6 (深浦式系土器5)

103はやや内湾気味に直口する口縁をもち、わずかにくびれる頸部から、やや膨らみをもつ胴部へ至る。口縁には4ヶ所に突起状の頂部をもつ。頂部は台形状をなし、上面から窪ませている。口唇部はやや丸みをもたせながらも、平らに面取りしてある。頂部下には逆V字状の粘土紐を貼り付け、頂部間に2個の円形浮文を貼り付けている。円形浮文と呼んでいるが直径15mmしかなく、船元式土器に見られるものとは異なる。浮文間には、貝殻腹縁による相交弧文を縦位に、頸部以下には横位に施してある。また口縁内面にも横位の相交弧文を2段施してある。器面調整は内外面とも丁寧なナデであり、外面頸部には貝殻条痕も一部残っている。

第30表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表(4)

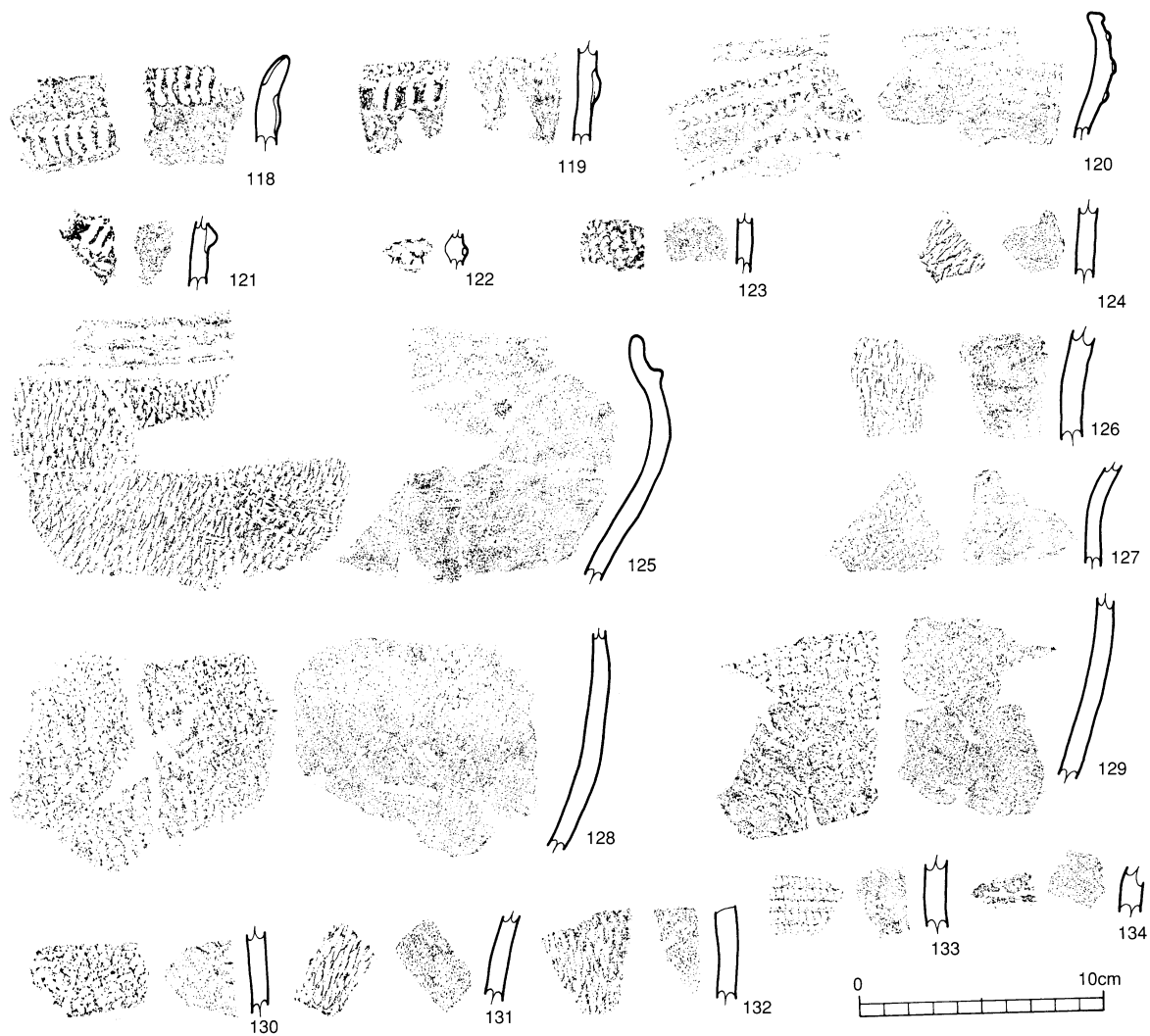
図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
79	96	A22	Ⅲ a	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	4736	
	97	C22	I b	深浦式系土器	胴部	暗灰黄色	黒褐色	連点文	条痕	ナデ	3634	
	98	C23	溝内	深浦式系土器	胴部	にぶい橙色	にぶい黄褐色	沈線	ケズリ	ナデ	5632	
	99	C22	Ⅲ b	深浦式系土器	底部付近か?	にぶい橙色	にぶい黄褐色	沈線	ケズリ	ナデ	4583	
	100	A18	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	褐灰色	にぶい黄褐色	突帯+沈線	ナデ	ナデ	780	赤色顔料(パイプ状ベンガラ)
	101	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部付近	褐灰色	にぶい褐色	突帯+沈線	ナデ	ナデ	1452	
102	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部付近	褐灰色	にぶい黄褐色	突帯+沈線	ナデ	ナデ	1250	赤色顔料(パイプ状ベンガラ)	
80	103	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部~胴部	黄褐色	暗褐色	相交弧文	ナデ	ナデ	4189	3826・4762・4764・4770・4776・4788 4831・5320・5485・4171・4608・4614 5327・5379、内面相交弧文
	104	A21	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	明褐色	黄褐色	相交弧文	ナデ	ナデ	5334	4829
	105	A21	Ⅱ	深浦式系土器	胴部	黄褐色	明褐色	相交弧文	ナデ	ナデ	2414	A21Ⅲ b 4170・4611・4613・5445
81	106	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	褐灰色	刻目突帯	ナデ	ナデ	1254	4881、内面相交弧文
	107	B18	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	黒褐色	刻目突帯	ナデ	ナデ	782	4874、内面相交弧文
	108	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	褐灰色	刻目突帯	ナデ	ナデ	4884	内面相交弧文
	109	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	口縁部	灰黄褐色	褐灰色	刻目突帯	ナデ	縦条痕	4867	内面相交弧文
	110	B18	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	灰黄褐色	褐灰色	刻目突帯	ナデ	条痕	299	内面相交弧文
	111	B18	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刻目突帯	ナデ	条痕	301	内面相交弧文
	112	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	褐灰色	相交弧文	ナデ	条痕	1448	1449、内面相交弧文
	113	B18	Ⅱ	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	相交弧文	ナデ	条痕	256	258・259
	114	B18	Ⅲ b	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	相交弧文	ナデ	条痕	1885	5031
	115	C18	Ⅲ b	条痕土器	口縁部	にぶい褐色	褐色	突帯	ナデ	ナデ	5234	



第81図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図7 (深浦式系土器6)

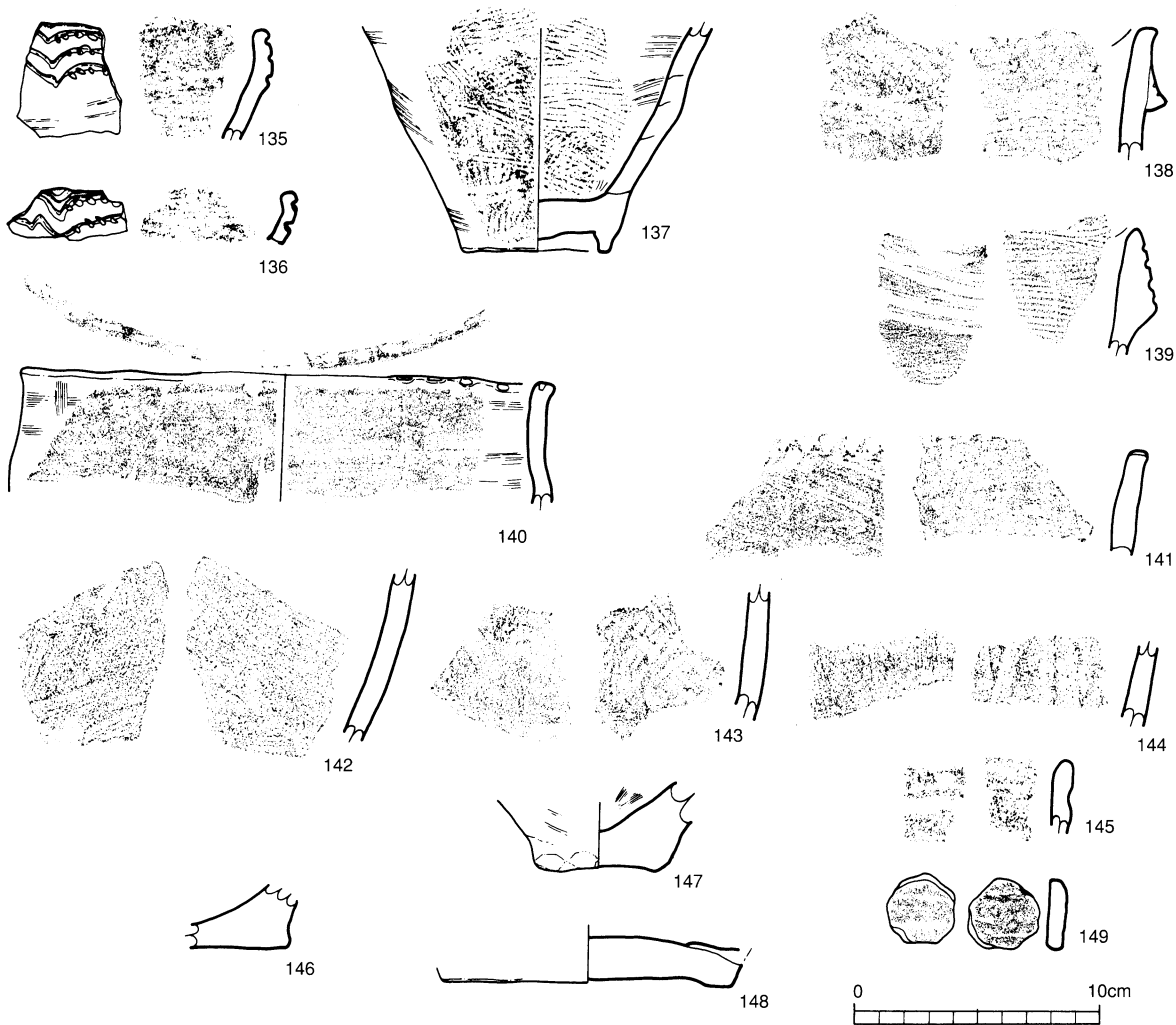
106は、直口した口縁部から端部のみをわずかに内湾させるもので、口唇部に沿って粘土紐を貼り付ける。粘土紐は、口唇部の突起部を中心にして両側に浅い弧を描くように貼り付けてある。上下に接合痕を残しているが、突起部上面のみは丁寧にナデていて接合痕はみられない。粘土紐及び平らに面取りする口唇部にはヘラ状工具による刻目が施される。器面調整は外面に浅い条痕が縦あるいは横方向に残り、内面は丁寧なナデである。外面の突起部下には、縦位に貝殻腹縁による相交弧文が施され、それ以下には横位の相交弧文が施される。口縁部内面にも1段の相交弧文が横位に巡る。

117は内外面貝殻条痕による器面調整で、口縁部に粘土紐が断面三角形状に貼り付けられるものである。内面には輪積みによる接合痕が残っている。また、外面は煤が付着しており煮炊きに使用されたことが解る。このタイプの土器は、これまで轟式系土器と呼ばれていて、尖底をもつことから前期でも古く位置付けられてきた。志布志町野久尾遺跡でまとまって出土して以来、他の遺跡でも散見されることが解ってきた。特に船元式土器を追求する中で、必ずこのタイプの土器が見え隠れすることから、両者の時期の近さが想定される。型式学的に中期前半に位置付けることを主張することは困難であるため、今後放射性炭素14年代測定や層位あるいは一括遺物による時間的位置付けを期待したい。



第82図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図8 (船元式土器)

118～133は縄文が地文に施されるタイプであり、瀬戸内地方に中心をもつ船元式土器あるいはその系統上にある土器である。125は、いわゆるキャリパー形に大きく内湾する口縁部をもち、口縁端部のみ外反気味に立ち上げている。この立ち上がり部分を区画するように外面には突帯が巡らされ、この部分のみ無文帯としている。口唇部は丸くおさめる。突帯以下にはL Rの細長い単節の縄文を施文する。突帯下には大振りな弧が弦を上にして描かれている。この破片には2つの弧がみられるが、手法が若干異なる。左側が不明施文具によって2条の連点で描かれるのに対し、右側は2点を単位とする不明施文具によって4条の連点で弧が描かれている。矢野健一氏によると、形態及び文様構成ともに船元Ⅲ式土器に対応できるという。118・119・121の3点は、口縁部内外面に連続した爪形文を施すものである。118は口縁部をやや外反させ、そのくびれ部に1条の突帯を巡らし連続爪形文を施す。口唇部はやや尖り気味におさめ、内面の連続爪形文は口唇部にかかっている。縄文はR Lの単節と考えられる。矢野氏によると船元Ⅱ式土器と文様モチーフが共通するという。120は確実な縄文地はみられないものの、器形がキャリパー形であることと器面調整が丁寧なナデであることから、この類に含めた。低い突帯で文様を構成し、その突帯上には連点状の刻目を施す。



第83図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図9 (中期～後期土器)

135～137は春日式土器である。口縁上部のみを浅く内湾させ、口唇部は面取りしている。3条の平行する沈線を連弧状に描き、沈線内下側に刺突を施す。内外面とも貝殻条痕による器面調整である。137は直径6.3cmで、上げ底となる底部である。これらの特徴は春日式土器の中でも前谷段階に該当するものと考えられる。

140は張りのある胴部から、わずかにくびれる頸部に至り、やや外反する口縁部をもつものである。口唇部は平らに面取りし、この部分にヘラ状工具で刺突を加える。口唇部の一部には剥落した痕跡があるので、粘土紐を突起状に貼り付けていたと考えられる。器面調整は内外面とも削り様のナデであり、西海岸側の後期前半の土器と共通点がある。141～144・146・148を含めてこの時期に位置付けたい。

145は太めの凹線を巡らすもので、後期前半に位置付けられる。147の底部は直径5.3cmでやや不安定なものである。内面に平坦部はみられない。縄文時代かどうかも含めて、年代については明らかでない。138は口縁部を断面三角形に肥厚させ、ここを文様帯とするもので、後期中半の市来式土器である。波頂部に沿って貝殻腹縁による刺突文が羽状に施文されている。139も口縁部を断面三角形に肥厚させ、平行沈線を描く市来式土器である。149は円盤形土製品である。

第31表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表(5)

図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
81	116	A21	Ⅲ	条痕土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい橙色	突帯	ナデ	ナデ	4734	
	117	A21	Ⅲ b	条痕土器	口縁部～胴部	灰黄褐色	黒褐色	突帯	貝殻条痕	貝殻条痕	4714	1714
82	118	B18	Ⅱ	船元式系土器	口縁部	にぶい褐色	褐色	連続爪形文	ナデ	縄文	236	
	119	A20	Ⅲ b I	船元式系土器	胴部	にぶい赤褐色	にぶい橙色	連続爪形文	ナデ	縄文	3988	
	120	C17	Ⅱ	船元式系土器	口縁部～胴部	黄灰色	褐色	突帯上刺突	ナデ	ナデ	343	
	121	B20	P1	船元式系土器	胴部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	連続爪形文	ナデ	縄文	-	
	122	-	-	船元式系土器	胴部	灰褐色	にぶい橙色	突帯上刺突	-	-	-	
	123	B19	Ⅲ b	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	灰黄褐色		ナデ	縄文	1893	
	124	B21	Ⅲ b	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	灰黄褐色		ナデ	縄文	4643	
	125	B20	Ⅲ b	船元式系土器	口縁部～胴部	黄褐色	褐色	連弧文	ナデ	縄文	4430	B20Ⅲ a 714・3864・4051
	126	A'21	Ⅲ a	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	灰黄褐色		ナデ	縄文	1485	
	127	B21	Ⅲ b I a	船元式系土器	頸部	灰褐色	黒褐色		ナデ	縄文	4598	
	128	B18	Ⅲ a	船元式系土器	胴部	にぶい赤褐色	灰黄褐色		ナデ	縄文	303	B18Ⅱ 252・253
	129	B18	Ⅱ	船元式系土器	胴部	灰褐色	灰黄色		ナデ	縄文	260	304
	130	B18	Ⅲ b	船元式系土器	胴部	にぶい褐色	にぶい赤褐色		ナデ	縄文	1442	1443
	131	B22	Ⅲ a	船元式系土器	胴部	にぶい黄色	にぶい黄褐色		ナデ	縄文	3776	
132	A21	Ⅲ a	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	灰褐色		ナデ	縄文	1477		
133	C21	I b	船元式系土器	胴部	灰黄褐色	褐色		ナデ	縄文	2924		
134	C15	Ⅲ a	深浦式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	刺突文	ナデ	ナデ	4260		
83	135	D21	Ⅲ a	春日式土器	口縁部	灰黄褐色	にぶい褐色	沈線内刺突	ナデ	ナデ	3889	
	136	D21	Ⅲ a	春日式土器	口縁部	灰黄褐色	にぶい褐色	沈線内刺突	ナデ	ナデ	3882	
	137	B15	Ⅲ a	春日式土器	底部	黒褐色	明黄褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	3965	1841・3966～3969・3977
	138	A22	Ⅲ a	市来式土器	口縁部	褐色	暗灰黄色	貝殻刺突	貝殻条痕	ナデ	4669	
	139	B19	Ⅳ	市来式土器	口縁部	暗灰黄色	暗灰黄色	凹線	貝殻条痕	ナデ	5683	
	140	B19	Ⅱ	後期土器	口縁部	明赤褐色	褐色	口唇刺突	ナデ	ナデ	142	B19Ⅱ a 292・P4・P5
	141	B19	Ⅲ b	後期土器	口縁部	黄褐色	明黄褐色	口唇刻目	ナデ	ナデ	1901	
	142	B19	Ⅲ b	後期土器	胴部	褐色	明赤褐色		ナデ	ナデ	1458	
	143	C14	Ⅲ a	後期土器	胴部	黒灰色	明茶褐色		条痕	ナデ	1576	
	144	b19	Ⅱ	後期土器	胴部	明赤褐色	黄褐色		ケズリ	ケズリ	104?	
	145	B18	溝	後期土器	口縁部	黄褐色	黄褐色	凹線	条痕	ナデ	519	後期前半の土器か?
	146	C18	Ⅲ b	後期土器	底部	赤褐色	明赤褐色		ナデ	条痕	5231	
	147	A15	Ⅲ a	後期土器?	底部	にぶい黄褐色	黄灰色		ナデ	ナデ	957	
	148	A'21	Ⅱ	後期土器	底部	にぶい黄褐色	明褐色		ナデ	ナデ	1461	
149	D21	Ⅲ b	円盤形土製品	口縁部	にぶい黄褐色	明褐色		条痕	条痕	4224		
84	150	C19	P5	晩期深鉢形土器	口縁部	褐色	褐色	低い突帯	ナデ	粗いナデ	-	無刻目突帯状
	151	C19	Ⅱ	晩期深鉢形土器	口縁部	黄灰色	黄灰色		条痕	条痕	186	736
	152	B20	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ミガキ	条痕	4018	B20Ⅱ 5・6
	153	C14	Ⅲ	晩期深鉢形土器	口縁部	黒褐色	にぶい黄褐色		ナデ	条痕	3982	
	154	B18	溝	晩期深鉢形土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい褐色		ナデ	粗いナデ	797	
	155	C22	Ⅲ b	前期轟B式土器	口縁部	灰黄色	にぶい黄褐色	刺突連点	条痕	条痕	4578	補修孔
	156	B19	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	口縁部	暗灰黄色	にぶい黄褐色		粗いナデ	粗いナデ	1904	C17P2. B20Ⅱ一括
	157	C18	Ⅱ	晩期深鉢形土器	口縁部～胴部	にぶい黄褐色	黒褐色		粗いナデ	粗いナデ	221	224、ヒレ状突起
	158	B20	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	口縁部	褐色	灰黄褐色		粗いナデ	粗いナデ	4043	リボン状突起
	159	C16	Ⅱ	晩期深鉢形土器	胴部	灰黄色	浅黄色		条痕	条痕	410	
	160	B19	Ⅲ b	晩期深鉢形土器	肩部	にぶい黄褐色	にぶい褐色		ナデ	条痕	1455	
	161	B19	Ⅲ b	晩期深鉢形土器	肩部	灰白色	にぶい黄褐色		ナデ	粗いナデ	1232	
	162	B19	Ⅲ b	晩期深鉢形土器	肩部	暗灰黄色	黒褐色		ナデ	粗いナデ	4386	4906
	163	B21	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	肩部	にぶい黄褐色	褐色		ナデ	条痕	2706	
164	B20	Ⅲ b	晩期浅鉢形土器	口縁部	黒褐色	黒褐色	削出口縁	ミガキ	ミガキ	4921	赤色顔料(ベンガラ)	
165	C19	Ⅱ	晩期浅鉢形土器	口縁部	黒褐色	褐色		ミガキ	ミガキ	199	リボン状突起	
166	B20	Ⅲ b	晩期浅鉢形土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	凹線	ミガキ	ミガキ	509	4923	
167	B20	Ⅱ	晩期深鉢形土器	底部	黄灰色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	28	底部圧痕原体不明	
168	C18	溝	晩期浅鉢形土器	口縁部	黒褐色	褐色	凹線	ミガキ	ミガキ	574	リボン状突起	
169	C20	Ⅲ b	晩期浅鉢形土器	底部	暗灰黄色	黒褐色	凹線二条	ミガキ	ミガキ	1913	赤色顔料(ベンガラ)	
170	C20	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	底部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	2032		
85	171	C20	Ⅲ b	組織痕土器	胴部～底部	褐色	褐色	編布	-	圧痕	4967	縦糸20mm以上・横糸1cmあたり6本
	172	C19	Ⅱ	組織痕土器	胴部～底部	褐色	黒褐色	編布	ミガキ	ナデ	183	縦糸21mm以上・横糸1cmあたり7本
	173	B19	Ⅱ	組織痕土器	胴部～底部	にぶい黄褐色	黒褐色	編布	ミガキ	ナデ	118	縦糸12mm以上・横糸1cmあたり7本
	174	B20	Ⅲ a	組織痕土器	胴部～底部	褐色	褐色	編布	ミガキ	ナデ	703	縦糸18mm以上・横糸1cmあたり6本

縄文時代晩期土器

深鉢形土器（150～163・167・170）

152は肩部を境に内傾し、口縁部で外反しながら立ち上がる。口唇部は肥厚気味に丸くおさめるが、突帯状にはならない。150はやや張りのある肩部から垂直に立ち上がる口縁部に至る。口唇部下に低い粘土を貼り付けて肥厚させ、無刻目突帯状に仕上げている。157・158はりボン状もしくは鱗状突起を有するものである。167は直径10cmの円盤状の底部である。底面中央には圧痕状の凸凹がみられるが、何によるものであるか明らかでない。

浅鉢形土器（164～166・168・169）

165・168はりボン状突起を有する。168は大きく外傾する口縁部の内外面に1条ずつの凹線が巡る。169は丸平底気味の底部から外反しながら大きく開く胴部へ至る。底部には2条の沈線が巡り、赤色顔料が塗られている。164とともに、分析の結果ベンガラであることが解った。

組織痕土器（171～200）

口縁部以下の外面に組織の圧痕が残り、内面はミガキによる仕上げである。171～191は編布の圧痕が残るものである。177は縦糸間が少なくとも29mmはあり、横糸は1cmあたり6本の粗い編布である。173も同様の粗い編布であるが、外面を調整する以前に編布が敷かれていた様子が窺える良好な資料である。編布をナデ消した例であり、剥げ落ちた面にも煤が付着していることから、3mmという非常に薄い器壁でも煮沸に耐えられたことも示している。188は縦糸間が7mm・横糸が1cmあたり6本の例である。187は縦糸間4mm・横糸が1cmあたり7本の例である。189はさらに細かな目で、縦糸間2.5mm・横糸が1cmあたり6本である。本例も組織痕部分の粘土が剥落し、その部分に全く煤が付着していないことから、型作りの際組織を剥がした後、組織痕部分に粘土を重ねて整形したことが窺える。したがって組織がみられない同様の半粗半精製土器（201～207）でも組織痕が器壁内に残る可能性を示す好例である。192～199は網代による組織痕である。1本送り1本通しの網代と考えられるが、確実な復元はできない。200は2.5mm×1.5mmの節を単位とするもじり編みの組織痕と考えられるが、確実な復元はできない。鹿児島県内では100遺跡を越える組織痕土器の出土例があるが、192や200の事例は初めてである。

第32表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表（6）

図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
85	175	C19	溝	組織痕土器	胴部～底部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	編布	ミガキ	ナデ	626	縦糸20mm以上・横糸1cmあたり6本
	176	D21	I b	組織痕土器	胴部～底部	黒褐色	にぶい黄橙色	編布	ナデ	ナデ	2541	縦糸28mm以上・横糸1cmあたり7本
	177	C19	II	組織痕土器	胴部～底部	褐灰色	黒褐色	編布	ミガキ	圧痕	484	縦糸29mm以上・横糸1cmあたり6本
	178	C19	溝	組織痕土器	胴部～底部	褐灰色	橙色	編布	ミガキ	圧痕	752	縦糸21mm以上・横糸1cmあたり6本
	179	C19	溝	組織痕土器	胴部～底部	橙色	暗灰褐色	編布	ミガキ	圧痕	675	縦糸19mm・横糸1cmあたり6本
	180	C20	II	組織痕土器	胴部～底部	黄褐色	にぶい黄橙色	編布	ミガキ	ナデ	1994	縦糸26mm以上・横糸1cmあたり5本
	181	B20	II a	組織痕土器	胴部～底部	褐灰色	橙色	編布	ナデ	圧痕	3681	縦糸12mm・横糸1cmあたり7本
	182	C21	III a	組織痕土器	胴部～底部	褐色	にぶい赤褐色	編布	ナデ	圧痕	3703	縦糸10mm・横糸1cmあたり5本
	183	A14	III a	組織痕土器	胴部～底部	にぶい黄橙色	灰黄褐色	編布	ミガキ	ナデ	1205	縦糸4mm・横糸1cmあたり6本
	184	C22	I b	組織痕土器	胴部～底部	にぶい黄橙色	黒褐色	編布	ナデ	圧痕	2587	縦糸5mm・横糸1cmあたり7本
	185	C19	III b	組織痕土器	胴部～底部	明褐色	黄灰色	編布	ミガキ	圧痕	5024	縦糸不明・横糸1cmあたり5本
	186	C19	III b	組織痕土器	胴部～底部	橙色	にぶい黄橙色	編布	ミガキ	圧痕	1921	縦糸19mm・横糸1cmあたり7本
	187	C21	III a	組織痕土器	胴部～底部	にぶい黄橙色	黒褐色	編布	ミガキ	圧痕	3678	縦糸4mm・横糸1cmあたり7本



第84図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図10(晩期土器1)



第85図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図11(晩期土器2)

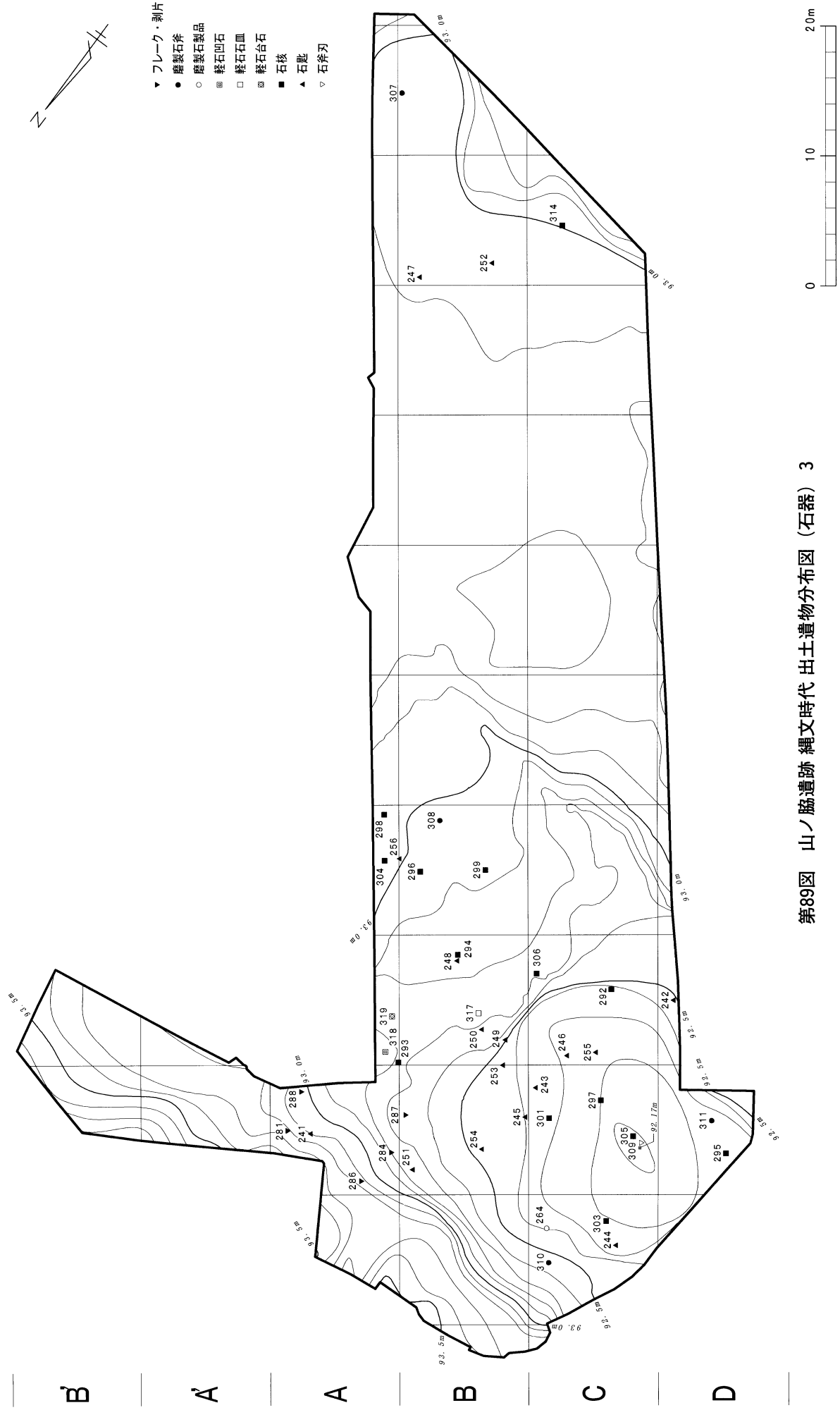


第86図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図12(晩期土器 3)

第33表 山ノ脇遺跡縄文土器観察表(7)

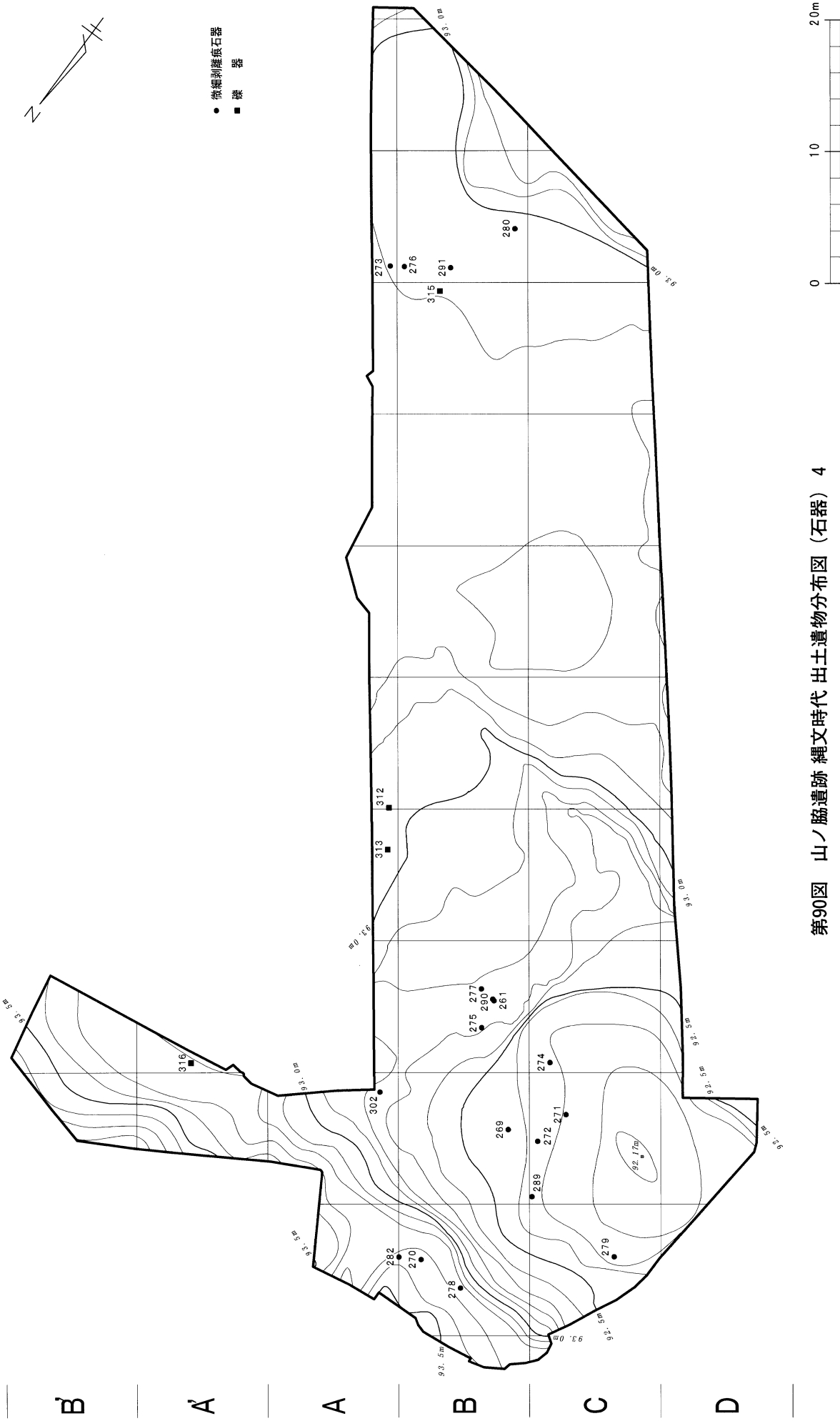
図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色調		文様	調整		取上番号	備考
						内	外		内	外		
85	188	C20	Ⅲ b	組織痕土器	胴部～底部	にぶい黄褐色	黄橙色	編布	ミガキ	圧痕	5012	縦糸7mm・横糸1cmあたり6本
	189	B21	Ⅲ b	組織痕土器	胴部～底部	褐灰色	にぶい黄橙色	編布	ミガキ	ナデ	5417	縦糸2.5mm・横糸1cmあたり6本
	190	C21	I b	組織痕土器	口縁部～胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	編布	ナデ	ナデ	3653	C21Ⅲ a 3679、縦糸4mm・横糸不明
	191	B20	Ⅱ	組織痕土器	胴部～底部	黒褐色	橙色	編布	ナデ	ナデ	711	縦糸5mm以上・横糸不明
	192	C19	Ⅲ a 下	組織痕土器	口縁部～胴部	にぶい橙色	にぶい褐色	網代	ミガキ	ナデ	690	
	193	C19	Ⅲ b	組織痕土器	胴部～底部	黒褐色	橙色	網代	ミガキ	ナデ	4491	
	194	C21	Ⅲ b	組織痕土器	胴部～底部	黒褐色	橙色	網代	-	圧痕	5385	
	195	C19	Ⅲ b	組織痕土器	口縁部～胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	網代	-	ナデ	483	C19 P 5483
	196	C19	Ⅲ b	組織痕土器	口縁部～胴部	橙色	黒褐色	網代	-	ナデ	1249	
	197	C19	Ⅲ 上	組織痕土器		橙色	にぶい褐色	網代	-	ナデ	488	489
	198	C20	Ⅱ	組織痕土器	胴部	にぶい黄褐色	灰黄褐色	網代	-	ナデ	1980	
	199	C20	Ⅱ b	組織痕土器	胴部	明褐色	灰黄褐色	網代	条痕	圧痕	5017	
200	T11	P1	組織痕土器	口縁部～胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	不明	ナデ	ナデ	104 ?	組織原体不明	
86	201	C19	溝	半粗半製土器	口縁部～胴部	にぶい褐色	にぶい橙色		ミガキ	ナデ	750	
	202	C18	Ⅱ	半粗半製土器	口縁部～胴部	にぶい黄褐色	黄灰色		条痕	ナデ	225	煤付着
	203	C19	溝	半粗半製土器	口縁部～胴部	黄灰色	黄灰色		ミガキ	ケズリ	461	
	204	C22	I b	半粗半製土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい橙色		ミガキ	ナデ	2256	2970
	205	A20	Ⅲ b	半粗半製土器	口縁部	にぶい赤褐色	にぶい橙色		ミガキ	ナデ	4554	網代目の上をナデたものか?
	206	C19	Ⅲ a	半粗半製土器	胴部	橙色	褐灰色		ミガキ	ミガキ	5522	C19Ⅲ b 4932、網代目の上をナデたものか?
	207	C20	Ⅱ	半粗半製土器	胴部	にぶい橙色	黒褐色		ミガキ	ナデ	2009	

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



第89図 山ノ脇遺跡 縄文時代出土遺物分布図 (石器) 3

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



第90図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物分布図 (石器) 4

(2) 石器

石鏃 (208～240)

208～211は基部の抉りが深いもので、全体の長さの3分の1程度を占める。また、両側の両面剥離による抉りも深く、いわゆる鋸歯状を呈する。松山町前谷遺跡でもこの様な形状をもつ石鏃が多く出土しており、縄文時代中期における特徴と考えられる。212～223は基部の抉りがやや深いタイプである。212・213は正三角形に近い形状で、脚部先端が尖っている。脚部先端のみみると、214及び223も212・213と共通する。216・217は脚部外側が内湾するタイプである。219～221は脚部幅を広く取り、端部を丸く、もしくは平らにおさめるタイプである。224～229は基部を浅く窪めるタイプである。230～232は基部を平坦に作るもので、各辺とも直線的である。233～235は基部が凸レンズ状に膨らむタイプである。全体的には正三角形を呈するが、各辺とも内湾する。

石匙 (241～255)

241～244は直線的な刃部をもつものであり、刃部の中央で直交する位置にツマミが付くタイプである。241～243の端部は鋭利に尖っている。245はやや膨らみをもつ刃部である。ツマミは刃部と直交するが、やや片寄った位置に付いている。246と247は直線的な刃部と幅広のツマミをもつタイプである。247は刃部と直交する位置にツマミが付くが、246は刃部に対してツマミの方向が約30度の角度をもっている。248・249は刃部にほぼ平行する位置にツマミが付く縦長のタイプである。254・255はツマミ部の片方の抉りははっきりするが、もう一方の抉りが明確でない。これらも縦型のタイプと考えられるが、直線状の刃部の一端にノッチ状の抉りが入ると見れば、別の用途の可能性も否めない。

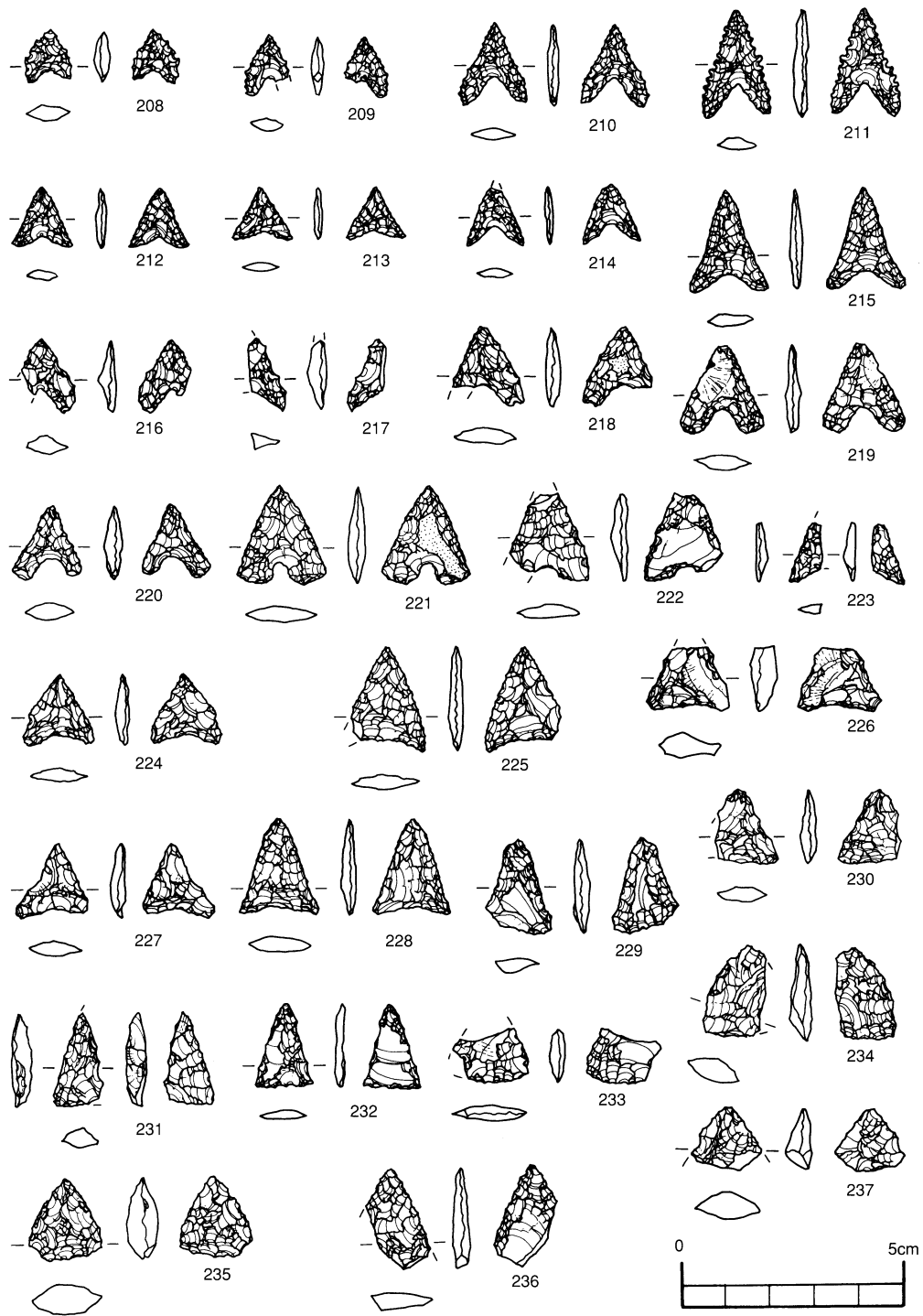
石匙の機能については、携帯用の万能ナイフに相当するものであり、様々な材質のものを切るために使われたと考えられている。特に動物の解体には不可欠であり、「皮はぎ」と限定された使い方以前は呼ばれたりもした。しかし、一昔前の生活における物を切る行為というのは多岐にわたっており、それぞれの場面で切るための道具が必要であることが想定される。切る物の材質も動物あるいは植物質など多彩であり、万能ナイフとしての石匙が必要であっただろう。ところで、刃部の形態には2通りあり、それぞれはどの様な使われ方をしたのだろうか。一つは直線的な刃部で鋭利な端部をもつものであり、もう一つは膨らみをもつ刃部でこのタイプの端部はそれほど鋭利ではない。現在の剥製を作る時の道具をみると、動物の皮の下が厚い肉である時は鋭利な刃を使い、皮の下が頭骨や他の骨に近い部分では湾曲した刃を使って作業している。これは、骨の部分に鋭利な刃が当たるとすぐに刃こぼれするからであるという。金属と石の違いはあるが、骨に対する刃こぼれの差はそれほどないものと考えられる。したがって、石匙の刃部の形態差は、切る部分や切ろうとする対象物の差であると考えられる。

スクレイパー (256～263)

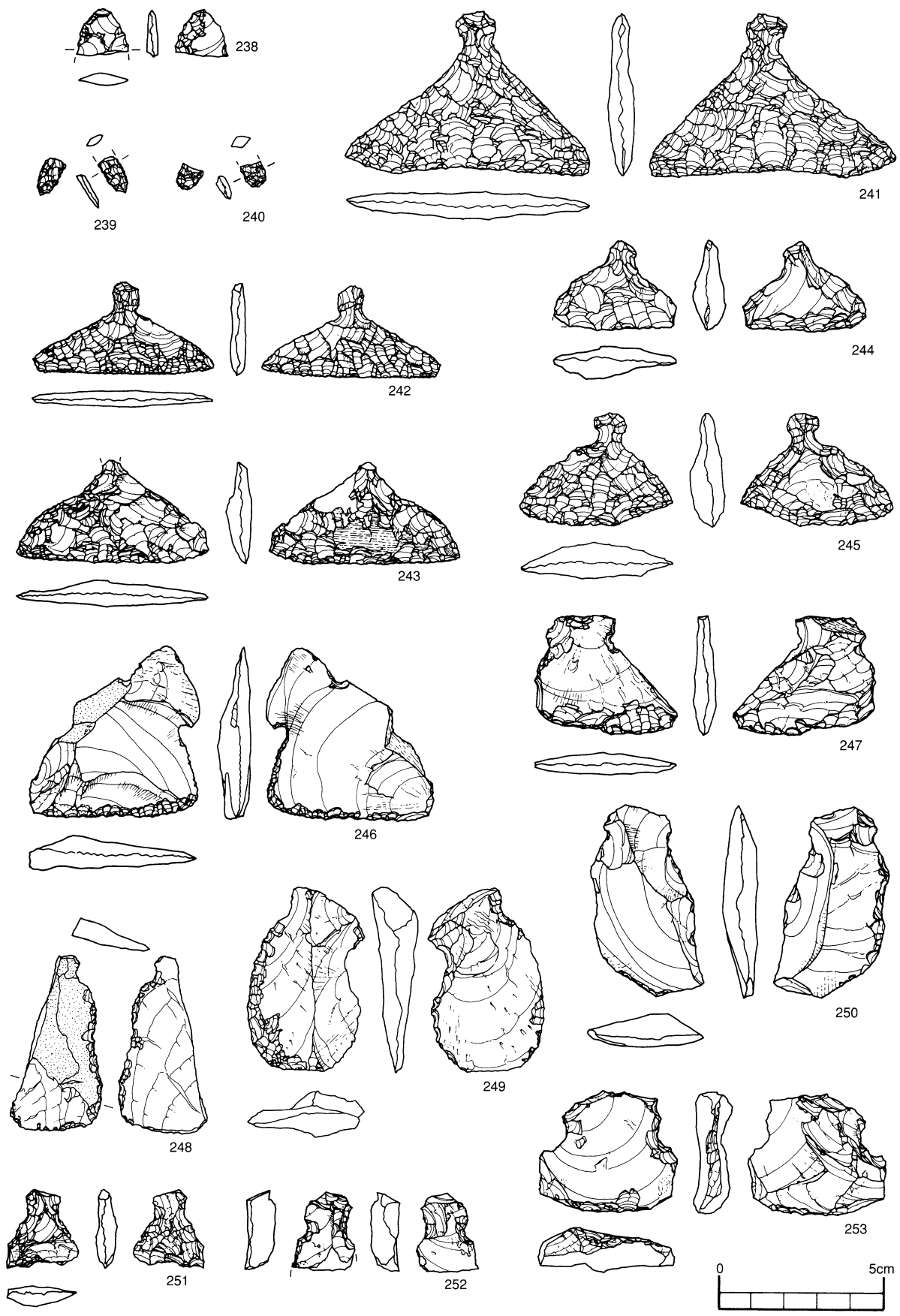
256～263は石匙の様に両面剥離による入念な刃部形成はなされていないものの、一部を刃部として使用した痕跡がある石器である。259は両側縁に剥離がみられる。263は剥片の一側縁を肉厚な部分には両面から押圧剥離を加えて鋭い刃部としている。

不明石器 (264)

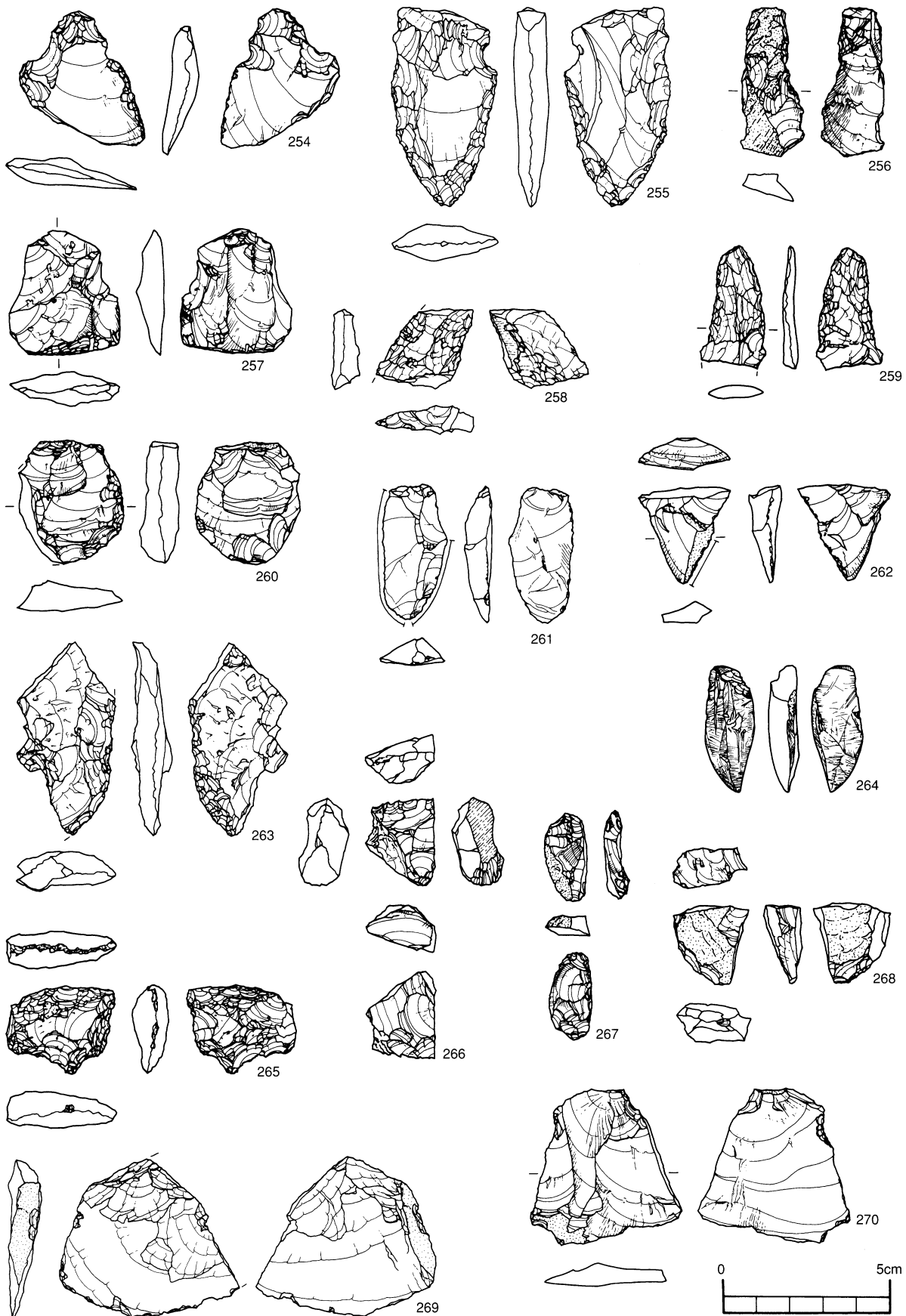
長さ5.5 cmの小型の石器であり、全体的に研磨による擦痕がみられ、先端は尖っている。研磨された面は一様でなく、不規則に何面かに分かれている。また、全体の形も対称的でなく、何か目的を



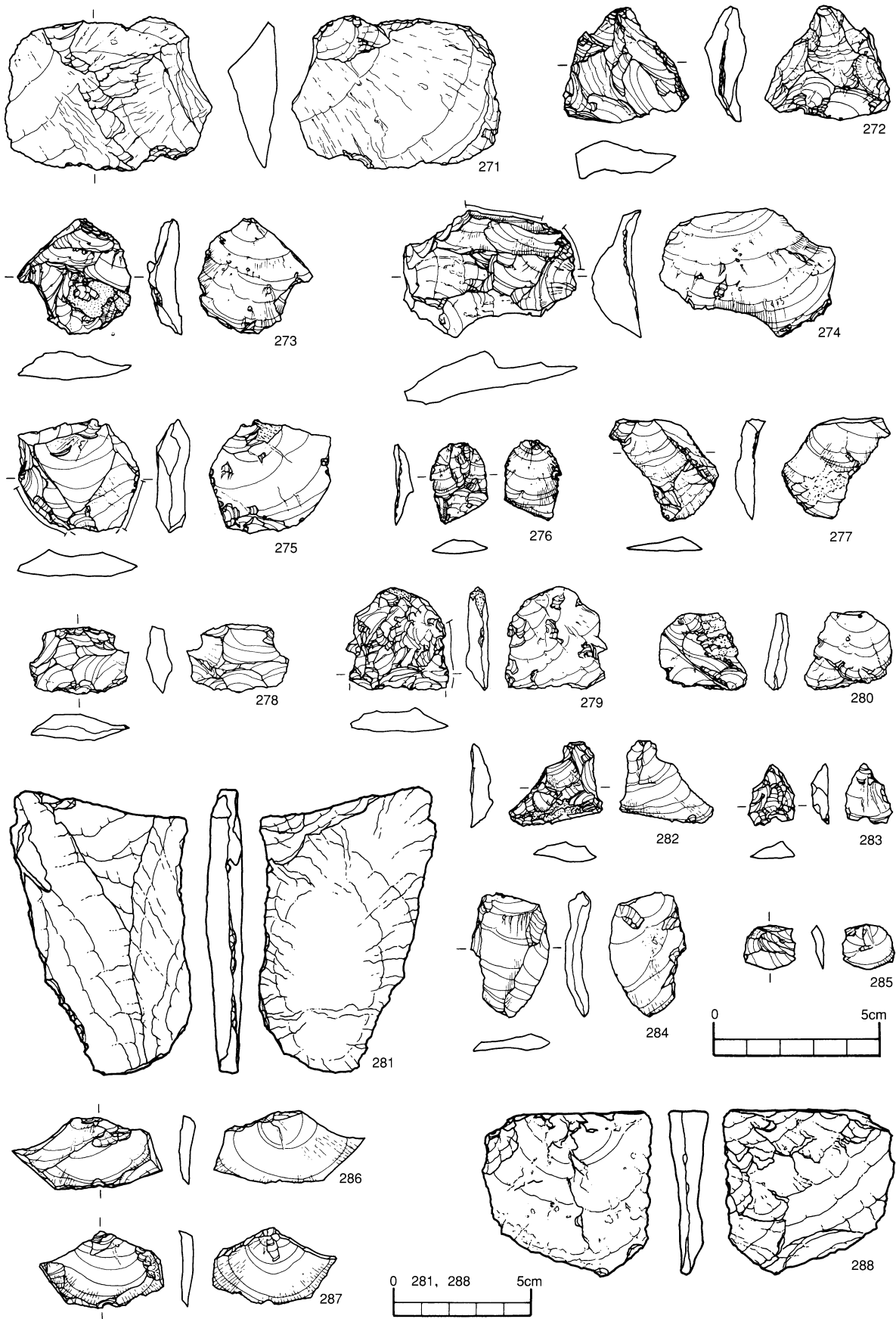
第91図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図13(石器1)



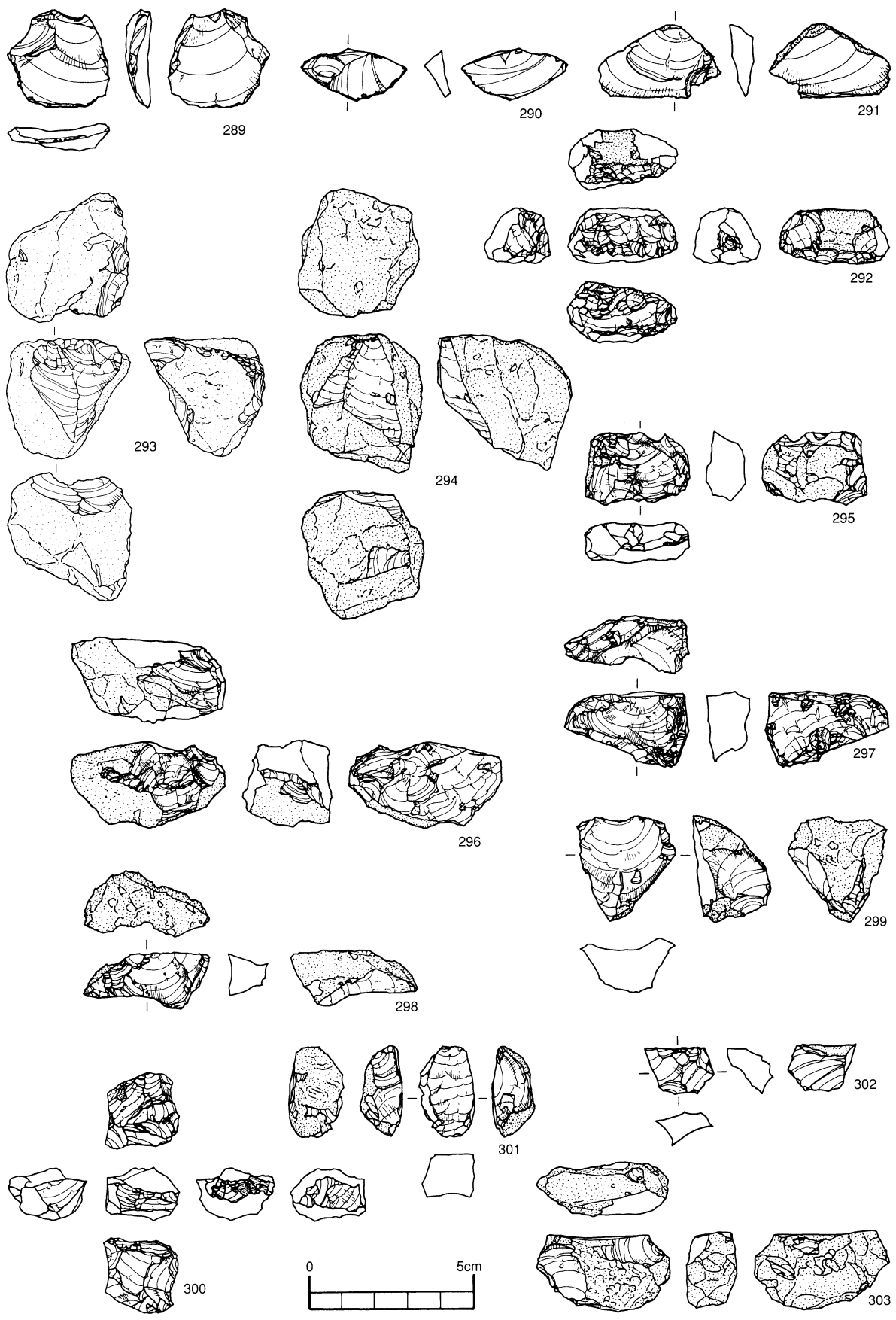
第92図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図14(石器2)



第93図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図15(石器 3)



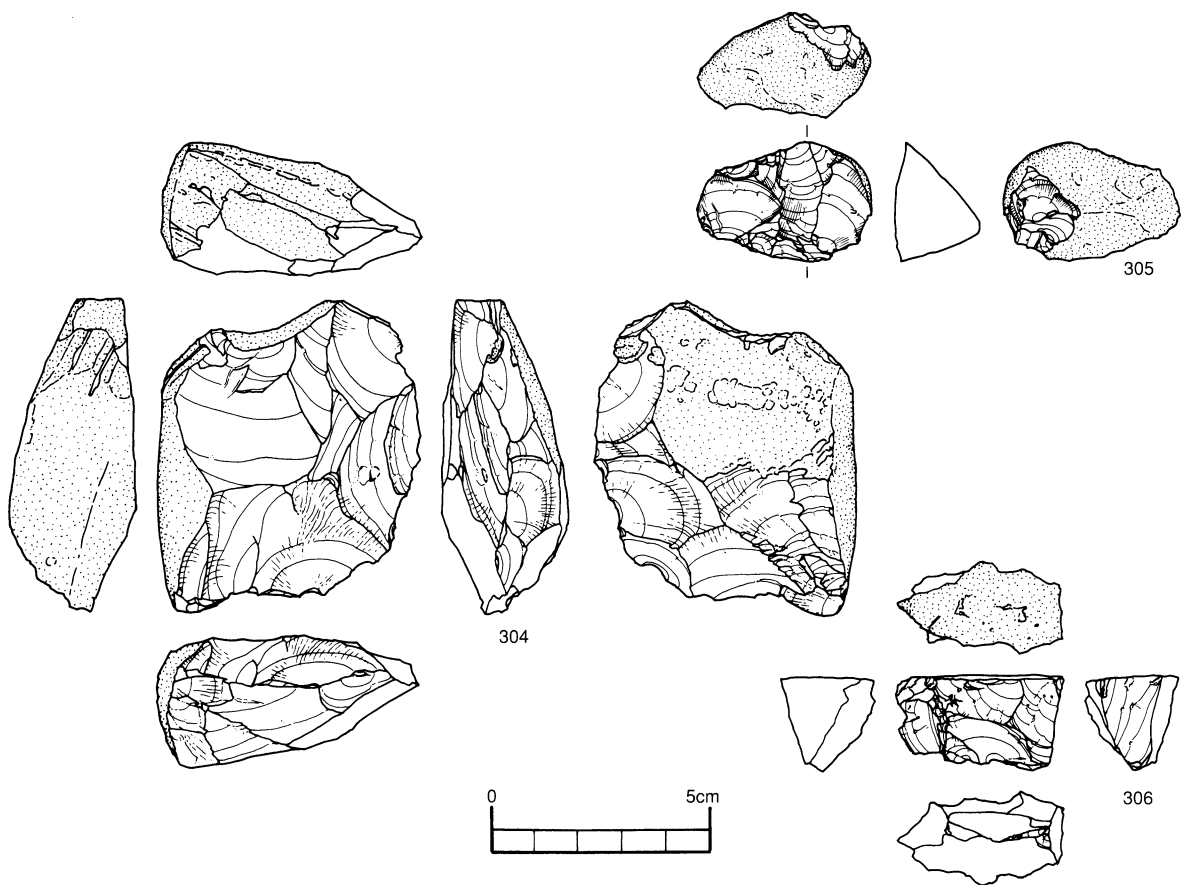
第94図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図16(石器4)



第95図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図17(石器5)

第34表 山ノ脇遺跡石器観察表(1)

図番号	番号	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	取上番号	備考
91	208	石鏃	B21Ⅲ b	黒曜石	1.195	1.06	0.35	0.29	5317	
	209	石鏃	A21Ⅲ b	黒曜石	1.35	(0.94)	0.27	0.23	5602	
	210	石鏃	B22Ⅲ b	?	1.855	1.52	0.27	0.40	4318	
	211	石鏃	C21Ⅲ a	黒曜石	2.50	1.53	0.30	0.66	3739	
	212	石鏃	A18Ⅲ b	黒曜石	1.35	1.40	0.27	0.26	1433	
	213	石鏃	B16Ⅲ a	黒曜石	1.17	1.33	0.21	0.18	4306	
	214	石鏃	A21Ⅲ b	黒曜石	(1.275)	1.275	0.215	0.21	5355	
	215	石鏃	A21Ⅱ	鉄石英	2.25	1.83	0.30	0.61	1482	
	216	石鏃	A21Ⅲ b	黒曜石	1.625	(1.17)	0.38	0.36	5603	
	217	石鏃	B13Ⅳ	黒曜石	1.51	(0.85)	0.415	0.32	5695	
	218	石鏃	A21Ⅳ	黒曜石	1.82	(1.535)	0.365	0.69	4622	
	219	石鏃	B15Ⅴ	?	1.965	1.855	0.315	0.70	5546	
	220	石鏃	B18Ⅲ a	黒曜石	1.68	1.53	0.385	0.56	1879	
	221	石鏃	B22Ⅰ b	黒曜石	2.205	1.99	0.38	1.14	2280	
	222	石鏃	B14Ⅲ b	チャート	(1.99)	(1.72)	0.39	0.97	1831	
	223	石鏃	B21Ⅲ a	黒曜石	(1.38)	(0.84)	0.255	0.17	3801	
	224	石鏃	C20Ⅳ a	?	1.565	1.59	0.32	0.60		
	225	石鏃	B14Ⅲ a	?	2.34	(1.645)	0.35	0.98	1201	
	226	石鏃	B21Ⅲ b	鉄石英	(1.415)	(1.84)	0.62	1.35	5308	
	227	石鏃	C21Ⅰ b	?	1.725	(1.585)	0.345	0.55	3447	
	228	石鏃	C22Ⅰ b	?	2.15	1.735	0.365	0.90	3201	
	229	石鏃	D21Ⅲ b1	鉄石英	2.125	(1.475)	0.365	0.89	4226	
	230	石鏃	A21Ⅲ b	?	1.70	(1.56)	0.345	0.64	5359	
	231	石鏃	C18Ⅱ	黒曜石	2.035	(1.12)	0.49	0.90	5236	
	232	石鏃	C20Ⅱ	黒曜石	1.87	1.265	0.23	0.40	4150	
	233	石鏃	A22Ⅲ b	チャート	1.20	1.70	0.32	0.63	4668	
	234	石鏃	D21Ⅰ b		(2.19)	1.40	0.50	1.34	3368	
	235	石鏃	B19Ⅳ	黒曜石	1.855	1.625	0.705	1.74		
	236	石鏃	A14Ⅲ a	黒曜石	(2.265)	(1.45)	0.395	0.98	1859	
	237	石鏃	B14Ⅲ b	黒曜石	(1.375)	(1.565)	0.64	0.91	4294	
	238	石鏃	B21Ⅲ b	黒曜石	(1.385)	(1.605)	0.36	0.70	4642	
	239	石鏃	A21Ⅰ b	黒曜石	(1.15)	(0.51)	0.22	0.17	2738	
	240	石鏃?	A'21Ⅲ b	黒曜石	0.80	(0.70)	0.30	0.17	5612	
241	石匙	A'21Ⅲ a	チャート	4.90	7.98	0.80	20.20	1480		
242	石匙	D20Ⅱ	チャート	2.81	5.48	0.50	5.20	2214		
243	石匙	C21Ⅰ b	黒曜石	3.12	5.85	0.80	9.34	2928		
244	石匙	C21Ⅰ b	サヌカイト	2.70	3.70	0.95	6.29	2951		
245	石匙	C21Ⅰ b	チャート	3.43	4.60	1.00	11.05	2111		
246	石匙	C21Ⅲ a	鉄石英	5.20	5.15	1.00	20.31	3561		
247	石匙	B14Ⅲ a	玻璃質安山岩?	3.10	4.35	0.70	8.61	3939		
248	石匙	B20Ⅲ b	チャート	5.45	2.60	0.57	7.99	1217		
249	石匙	B20Ⅲ a	チャート	5.50	3.46	1.30	18.42	3866		
250	石匙	B20Ⅲ b	頁岩	5.70	3.50	1.00	17.26	4961		
251	石匙	B21Ⅲ b1	チャート	2.42	2.20	0.60	2.04	4336		
252	石匙	B14Ⅲ b	鉄石英	2.40	1.85	0.90	3.54	4275		
253	石匙?	B21Ⅰ b	鉄石英	3.70	4.20	1.00	16.54	3727		
254	石匙	B21Ⅰ b	チャート	3.90	4.00	0.80	8.74	2721		
255	石匙	C20Ⅲ a	サヌカイト?	6.00	3.20	1.00	21.35	2000		
256	スクレイパー	B19Ⅲ b	黒曜石	4.43	1.84	0.65	6.15	4897		
257	スクレイパー	B21Ⅲ b	黒曜石?	5.20	3.35	0.82	10.39	4737		
258	スクレイパー	C20Ⅲ a	チャート	2.40	2.91	0.85	5.54	1961		
259	スクレイパー	B20Ⅲ b	チャート	3.72	2.00	0.48	2.46	4421		
260	スクレイパー	C21Ⅰ b	黒曜石	3.70	3.19	1.20	14.12	2081		
261	スクレイパー	B20Ⅲ b	鉄石英	4.03	1.90	6.82	5.26	1911		
262	スクレイパー	C19Ⅲ a	鉄石英	2.90	2.20	1.00	4.35	3855		
263	スクレイパー	A21Ⅲ b	黒曜石?	5.80	3.00	1.15	15.09	4184		
264	不明石器	C22Ⅰ b	?	4.55	1.80	1.10	8.55	3024		
265	石錐	C22Ⅰ b	黒曜石	2.60	3.30	1.10	8.93	2616		
266	楔形石器	C23溝	チャート	2.10	2.60	1.25	7.22	5636		
267	楔形石器	A13Ⅳ	黒曜石	2.15	1.30	0.60	2.45	5689		



第96図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図18(石器6)

持って作られた道具であるとは考えにくい。恐らくこの石器は、最初から出来上がりの形を意識して作った道具ではなく、何らかの対象物を磨くあるいは砥ぐことによって無意識のうちにこの様な形になったものと考えられる。どのような対象物であったかについては、今後の事例を待ちたい。

石錐 (265)

錐部が短いものの、そのつくりから石錐と考えられる。黒曜石を素材とし、ツマミ部分は粗めの両面剥離を行い、錐部は細かな剥離を行っている。

楔形石器 (266・267)

上下からの両極打法が認められる石器である。

剥片 (268～291)

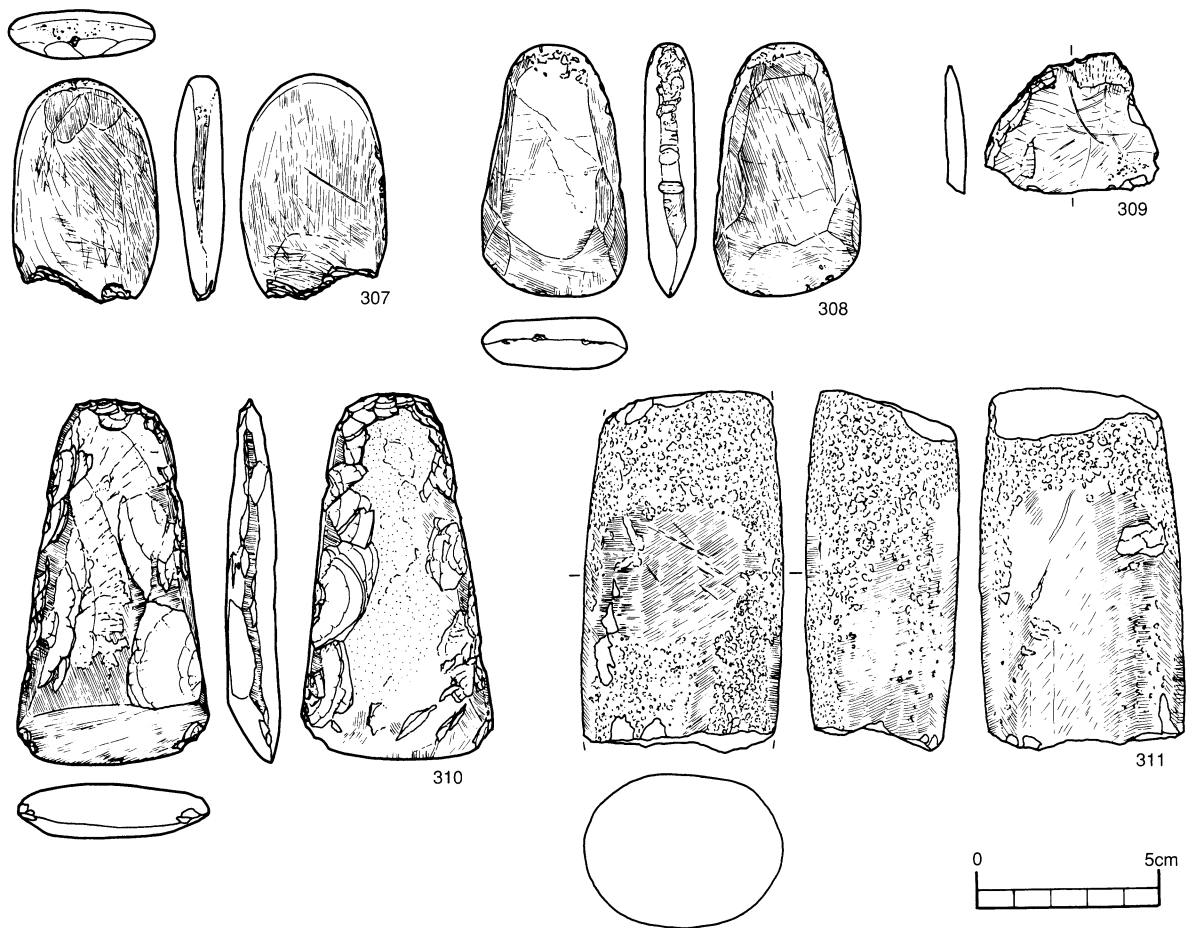
主要剥離面を残したまま使用しているものが多く、シャープな縁辺に微細な剥離痕が認められる。286・287のサヌカイトの剥片は、286の主要剥離面に287の剥離面が接合した。

石核 (292～306)

石材の表皮を残すものがほとんどであり、比較的小さな素材を使用していることが解る。

磨製石斧 (307～311)

307は小型のものであり、刃部に相当する部分が欠けているので石斧であるかどうかの確証はないが、先端に向かって直線状に薄くしていることと308に類似することからこの類に含めた。308は完全な形で残っており、長さ7 cm・幅4 cmを測る。両面とも敲打の後丁寧に研磨され、刃部も鋭く砥ぎ出さ



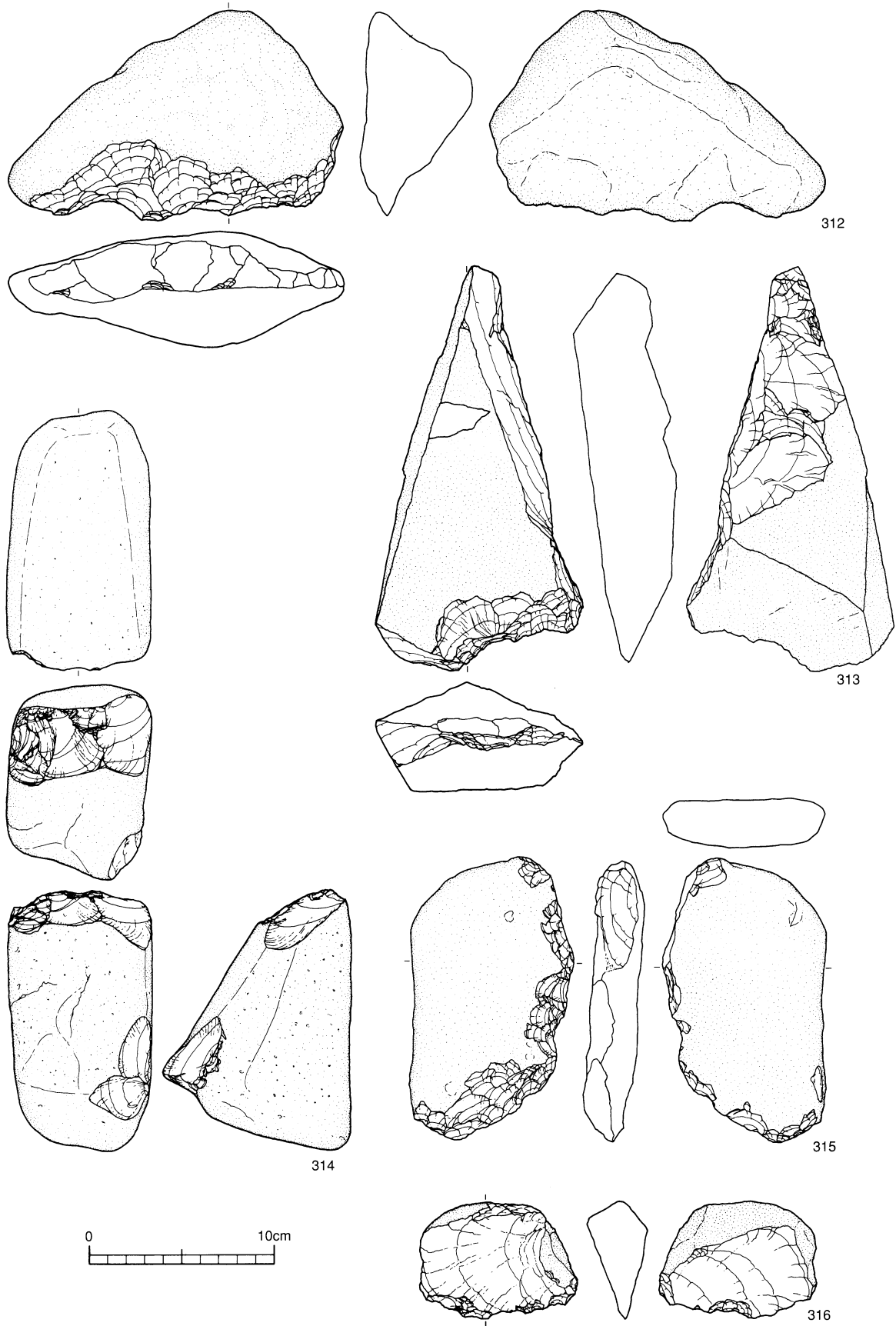
第97図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図19(石器7)

れている。刃部の形態は直線的であり、縦斧として使用されたと考えられる。310は横長の剥片を利用したもので、両面から剥離を加えて整形した後研磨している。刃部は片刃であり、横斧として使われたと考えられる。刃部の角度から実測図の左面が上の方に来て、右面が対象物に接したものと思われる。311は入念な敲打によって整形した後研磨を行っている。横断面の形は円に近く、刃部は欠損しているけれども縦斧と考えられる。

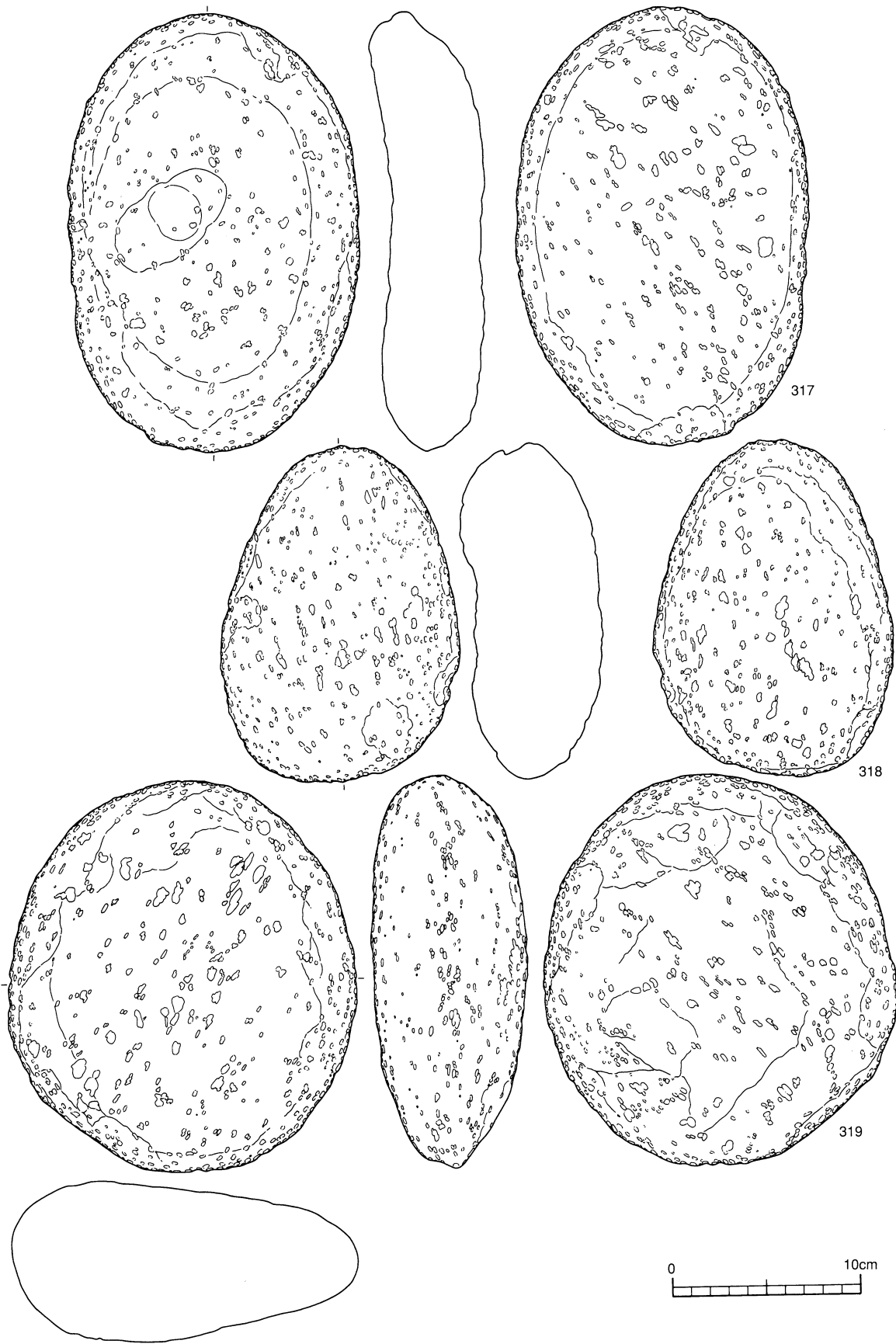
縦斧と横斧の違いは、刃部が両刃かあるいは片刃によるものであるかで区別できることが、佐原真氏によって指摘されている。一昔前の民具を参考に、右利きの人を前提として縦斧と横斧の刃部の磨り減り具合を見ると、それぞれの違いが解る。すなわち縦斧の場合は立ち木を切り倒すか薪割りのような使い方が想定され、人より遠い側の面が対象物に接触する機会が多い。このため、石斧の人物側よりも遠い側の面の磨り減り方が速い。一方横斧は、手斧の様に板材を削るために使用され、右利きの方は刃部の向かって右側の方が磨り減り方が速い。片刃の石斧は柄の装着が特定されるので、刃部の磨り減り具合から、縄文時代人の利き腕の比率を求められる可能性がある。

礫器 (312~316)

312は礫の長辺を片方向から打撃し、粗い刃部を作り出している。313は二等辺三角形をした角礫の底辺部分を剥離して刃部を形成している。314は礫の一部に打撃を加えており、剥片を取り出すことを目的としたのか何らかの石器を作ろうとしたのかは不明である。315は側面から下面にかけて剥離を行い、刃部を作り出している。316は礫の両側から打撃を加えて薄くした後、側縁を刃部としている。



第98図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図20(石器 8)



第99図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図21(石器9)

軽石 (317~319)

3点の丸みをもった軽石が出土した。加工した痕跡は明確でないが、当時の人たちによって持ち込まれたのは確かである。持ち込まれた時からこのままの形状だったのか、それとも使用した結果この様な形になったのかは、他の例も含めて検討していく必要がある。いずれにしても、軽石を道具として使用する場合、シラス堆積場から直接取り出したものは崩れ易くて使い物にならず、河川や海に転がる軽石が適していると民俗事例で言われている。

第35表 山ノ脇遺跡石器観察表(2)

図番号	番号	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	取上番号	備考	
93	268	剥片	B15Ⅲ a	黒曜石?	2.35	2.25	1.10	5.78	3954		
	269	剥片	B21Ⅰ b		4.70	5.45	1.00	16.79	2170		
	270	剥片	B22Ⅲ b	?	4.65	4.60	0.70	12.48	4738		
94	271	剥片	D21Ⅰ b	玻璃質安山岩	4.60	6.30	1.44	40.89	2783		
	272	剥片	B21Ⅰ b	チャート	3.50	3.80	1.20	10.72	3049		
	273	剥片	A14Ⅲ a	黒曜石	3.50	3.45	0.80	7.74	1853		
	274	剥片	C21Ⅲ a	黒曜石	3.80	5.20	1.30	17.78	3693		
	275	剥片	B20Ⅲ b	鉄石英	3.35	3.20	1.00	12.50	5641		
	276	剥片	B14Ⅲ b	黒曜石	2.40	1.80	0.50	1.53	4284		
	277	剥片	B20Ⅲ b	鉄石英	(3.00)	(3.30)	0.60	4.27	4433		
	278	剥片	B22Ⅲ b	サヌカイト	2.00	3.00	0.70	3.89	4677		
	279	剥片	C22Ⅰ b	黒曜石	3.10	3.10	0.65	7.25	3068		
	280	剥片	B14Ⅲ b	チャート	2.33	2.65	0.62	3.24	4291		
	281	剥片	A21Ⅲ b	安山岩	10.20	6.40	1.30	80.88	5073		
	282	剥片	B22Ⅲ b	チャート	3.50	2.83	0.65	2.67	4659		
	283	剥片	C21Ⅲ a	黒曜石	1.845	(1.405)	0.52	1.10	3908		
	284	剥片	A21Ⅲ a	チャート	3.65	2.40	0.70	3.30	4624		
	285	剥片	B24Ⅲ a	黒曜石姫島類似	1.50	1.60	0.30	0.52	1126		
	286	剥片	A21Ⅲ a	サヌカイト	2.20	4.50	0.40	3.86	4735	接合	
	287	剥片	B21Ⅲ b	サヌカイト	2.30	3.70	0.40	3.49	5424	接合	
	288	剥片	A21Ⅲ b	安山岩	6.00	6.20	1.40	35.54	5078		
	95	289	剥片	D21Ⅰ b	鉄石英	2.93	3.10	0.80	4.99	2869	
		290	剥片	B20Ⅲ b	鉄石英	1.60	3.25	0.60	2.16	4465	
291		剥片	B14Ⅲ a	サヌカイト	3.20	3.75	0.70	5.17	3946		
292		石核	C20Ⅱ	黒曜石	1.65	3.30	2.00	9.30	1959		
293		石核	A20Ⅲ b	黒曜石	3.60	3.80	2.80	47.60	4508		
294		石核	B20Ⅲ b	黒曜石	4.15	3.20	3.80	60.74	4444		
295		石核	D21Ⅰ b	黒曜石	2.20	3.20	1.20	9.89	2485		
296		石核	T13Ⅱ	黒曜石	2.50	4.70	2.75	30.48	95		
297		石核	C21Ⅲ b	黒曜石	2.30	3.75	1.27	13.99	4110		
298		石核	A19Ⅲ b	黒曜石	1.70	3.83	1.09	8.76	4203		
299		石核	B19Ⅲ b	黒曜石	3.15	3.00	2.15	14.87	4373		
300		石核	D21Ⅰ b	黒曜石	2.25	2.20	1.55	7.80	3398		
301		石核	C21Ⅰ b	黒曜石	2.70	1.70	1.30	6.90	2102		
302		石核	A21Ⅲ b	黒曜石?チャート?	1.40	2.08	1.17	2.81	4234		
303		石核	C22Ⅰ b	黒曜石	2.35	4.10	2.30	16.90	2271		
96	304	石核	A19Ⅲ b	サヌカイト	7.07	6.00	2.90	129.96	1427		
	305	石核	C21Ⅰ b	黒曜石	2.70	4.00	2.22	16.12	2885		
	306	石核	C20Ⅲ b	黒曜石	2.10	3.80	1.85	15.15	1935		
97	307	磨製石斧	B13Ⅲ a	頁岩?	(6.10)	4.05	1.30	47.54	1736		
	308	磨製石斧	B19Ⅲ b	砂岩	7.00	4.00	1.35	57.42	1453		
	309	磨製石斧	C21Ⅰ b	頁岩	3.80	4.80	0.50	13.89	3352		
	310	磨製石斧	C22Ⅰ b	頁岩	10.00	5.30	1.40	96.11	3899		
	311	磨製石斧	D21Ⅰ b	砂岩	9.80	5.50	4.20	379.20	3406		
98	312	礫器	A18Ⅲ a	安山岩	(11.30)	(18.19)	5.75	1015.00	1887		
	313	礫器	A19Ⅲ b	砂岩?	21.50	11.25	5.70	1097.00	4199		
	314	石核	C14Ⅲ a		13.90	10.20	9.30	1188.00	1835		
	315	礫器	B15Ⅲ a	安山岩	15.15	(8.79)	2.55	389.00	3971		
	316	礫器	A`20Ⅱ	玻璃質安山岩	6.30	8.45	3.10	181.78	1498		
99	317	軽石	D51	軽石	23.20	15.65	5.35	698.00	14		
	318	軽石	D51	軽石	17.80	12.85	7.10	465.00	2		
	319	軽石	D51	軽石	20.60	18.85	8.49	883.00	3		

本文中において磨面がみられる石器を説明する際に表裏といった表現を使用しているが、それは図中における向かって左側の見通し図を表面、向かって右側の見通し図を裏面とした上での表現である。

磨石・敲石類

山ノ脇遺跡では磨石・敲石類は合計28点出土している。本報告では礫に磨石としての使用がみられるもの、或いはその側縁部に敲打痕がみられるものを磨石・敲石類と分類した。本類に帰属する石器はその形態によりさらに以下のように分類した。

I類 平面形が楕円形を呈し、磨面のみを形成しているもの

I-a 平面形が楕円形を呈し、球状の礫を使用したもの（320～325, 327, 330～332, 335, 336）。

320～323, 327はいずれも4 cm以下の小型の磨石であり、その磨面は平らで稜を生じている。324, 325, 330～332, 335は4～7 cmの磨石である。いずれもその磨面は平らであるが、9にみられる磨面は明瞭ではあるが平らではなく凸面状である。336は9 cm台の磨石であり、表面と側縁部に磨面が見られる。

I-b 平面形が楕円形を呈し、扁平な礫を使用したもの（326, 328, 329, 333, 334, 337～341）。

326, 328, 339は4～7 cmの磨石である。6は合計6つの磨面が見られ遺物の一部分のみでなく全体的に使用されていたといえる。329, 334, 338, 340, 341は8 cm以上の磨石である。334の使用面以外の平らに整形されている箇所については使用した際の手擦れによるものである。338, 340は表裏に磨面がみられる。340は表面にも強い擦痕がみられるが、裏面は特に平らに整形されており、単に磨石としての使用の結果によるものとは考えにくい。具体的な用途は不明であるが意識的に平らに整形したものと考えられる。333, 337は4 cm以下の磨石である。両方とも表裏に磨面がみられる。333は平らな磨面と凸面状の磨面を持っており、337は表裏ともに平らな磨面が形成されている。341は緩やかな凹みがみられることから石皿とも考えられるが、その大きさや厚みから磨石であると判断した。

II類 平面形において楕円形を呈し、磨面と側縁部に敲打痕がみられるもの。

II-a 平面形が楕円形を呈し、扁平な礫を使用したもの（342～344）。

342は表裏に磨面がみられ、側縁部の一部分には弱い敲打痕がみられる。343, 344は表裏に磨面がみられ、側縁部には全周に渡って敲打痕がみられる。343は表裏の平らな磨面と強い敲打により遺物が円盤状に整形されている。344の側縁部の敲打は弱いものであり、礫の形が変わるほどには至っていない。

II-b 平面形が楕円形を呈し、球状の礫を使用したもの（345～347）。

345, 347は側縁部の一部分に強く荒い敲打痕がみられるものである。347の磨面は擦痕の向きが不明瞭であり敲打痕が強いものであることから磨石よりも敲石としての役割の比重が高かったと考えられる。346は表裏に磨面がみられ、側縁部は全周に渡って敲打痕がみられる。磨面、敲打面共に非常に粗く全体的にゴツゴツとしている。

磨石・叩石類

山ノ脇遺跡においては磨石・叩石類は合計14点出土している。本報告においては磨面や敲打痕といった使用面が端部にみられるものを磨石・叩石類と分類した。本類に帰属する石器はその形態によりさらに以下のように分類した。

I類 平面形において楕円形や棒状を呈し、磨面及び磨面と敲打面がみられるもの。

I-a 平面形が楕円形を呈し、球状の礫を使用したもの（348～351）。

348, 349は2面の磨面がみられ、いずれも端部にみられる磨面については敲打面と重なっている。敲打痕が磨滅していることから敲打面としての使用の後に磨面として使用したものと考えられる。350, 351は磨面がみられるのと別に端部に敲打痕がみられる。351の敲打痕は両端にみられる。いずれも強い敲打であり下端部は敲打により稜を生じている。

I - b 平面形が棒状を呈し、球状の礫を使用したもの (352)。

棒状の磨石であり、端部に使用痕を確認できることから本分類に入れた。手擦れにより稜を生じている。

II類 平面形において楕円形や棒状を呈し、端部に敲打痕がみられるもの

II - a 平面形が楕円形を呈している礫を使用したもの (353~356)。

353は端部を中心とした広い範囲で敲打面が形成されている。354は両端に敲打痕がみられる。355は広い範囲に渡ってアバタ状の敲打痕がみられる。いずれも使用の際の手擦れにより稜を生じている。356は小型の叩石であり非常に強い敲打痕がみられる。半分ほどを欠損しており、元来は球状であったと考えられる。

II - b 平面形が棒状を呈している礫を使用したもの (358~362)。

358は端部の狭い範囲に敲打痕がみられる。使用の際の手擦れ痕がより発達している。359, 361は端部の広い範囲にアバタ状の敲打痕がみられる。362も同様に端部の広い範囲に敲打痕がみられるが、使用面の一部が剥離している。これは敲打の際に剥落したものであると考えられる。360は端部の狭い範囲と側縁部に敲打痕がみられ、その敲打により側縁部は平らに整形されている。

凹石 (357)

山ノ脇遺跡では凹石が一点だけ確認できた。表裏両面に強い敲打が集中している凹みがみられる。

台石類

台石類は6点出土した。本報告においては凹痕や線状の傷がみられるものを台石類とした。本類に帰属する石器はその形状によりさらに以下のように分類した。

I類 自然礫を整形して台石として使用しているもの (364, 366, 367)。

364は2面に作業痕がみられる。366は硯状に整形されており、使用面の半分ほどが剥離している。端部が刃のようになっているが、礫器としての使用痕はみられない。367は断面図にみられるように三角形に近い形に整形されており、その中で最も平らになっている面に凹痕がみられることから、この面が作業面であると判断した。

II類 自然礫を整形せずに台石として使用しているもの (363, 365, 368)。

363は全体的に緩やかに凹んでいることから一見すると石皿のようだが、擦痕がみられないことや小さな凹痕が多くみられることから台石に分類した。365は最大長が10cm代と小型なものである。368は山ノ脇遺跡で出土した中では最大の台石である。全体の半分ほどを欠損していると考えられ、作業面も一部分を欠損している。

石皿類

石皿類は合計5点出土した。本報告においては凹みや擦痕がみられるものを石皿類とした。本類に帰属する石器はその形状により以下のように分類した。

I類 自然礫を整形して石皿として使用しているもの (370, 371)。

370は作業面全体に細かい擦痕が無数にみられる。図における作業面の右下部が沈んでいることから、そこが掃き出し口の役割をしていたと考えられる。371は扁平で小型の石皿である。中央の平らになっている箇所には擦痕がみられることから、そこを作業面であると判断した。

Ⅱ類 自然礫を整形せずに石皿として使用しているもの（369, 372, 373）。

369は作業面全体に多数の溝状の粗い擦痕がみられる。372は作業面の中央に分断するような形で緩やかな溝状の凹みがみられる。主にその箇所を中心に作業した為であると思われる。図中における凹みの下端と左側が掃き出し口であると考えられる。373は石皿であるが、磨面の中心部の表面が剥がれた箇所にはわずかではあるが敲打痕もみられる。その為に様々な作業が行われていた作業台のようなものであるといえよう。4分の1程を欠損しており、磨面は欠損した部分にもつながっていたと考えられる。使用面上に見られる段差や擦痕の向きから判断すると、まず図中の右下部が石皿として使用されていたと考えられる。遺物上部の破損の状況や遺物が全体的に赤くなっていることから火による何らかの影響を受けたものと考えられる。先述した中心部にみられる敲打痕は火の影響により剥がれた表皮上で敲打使用したのものと考えられる。

砥石類

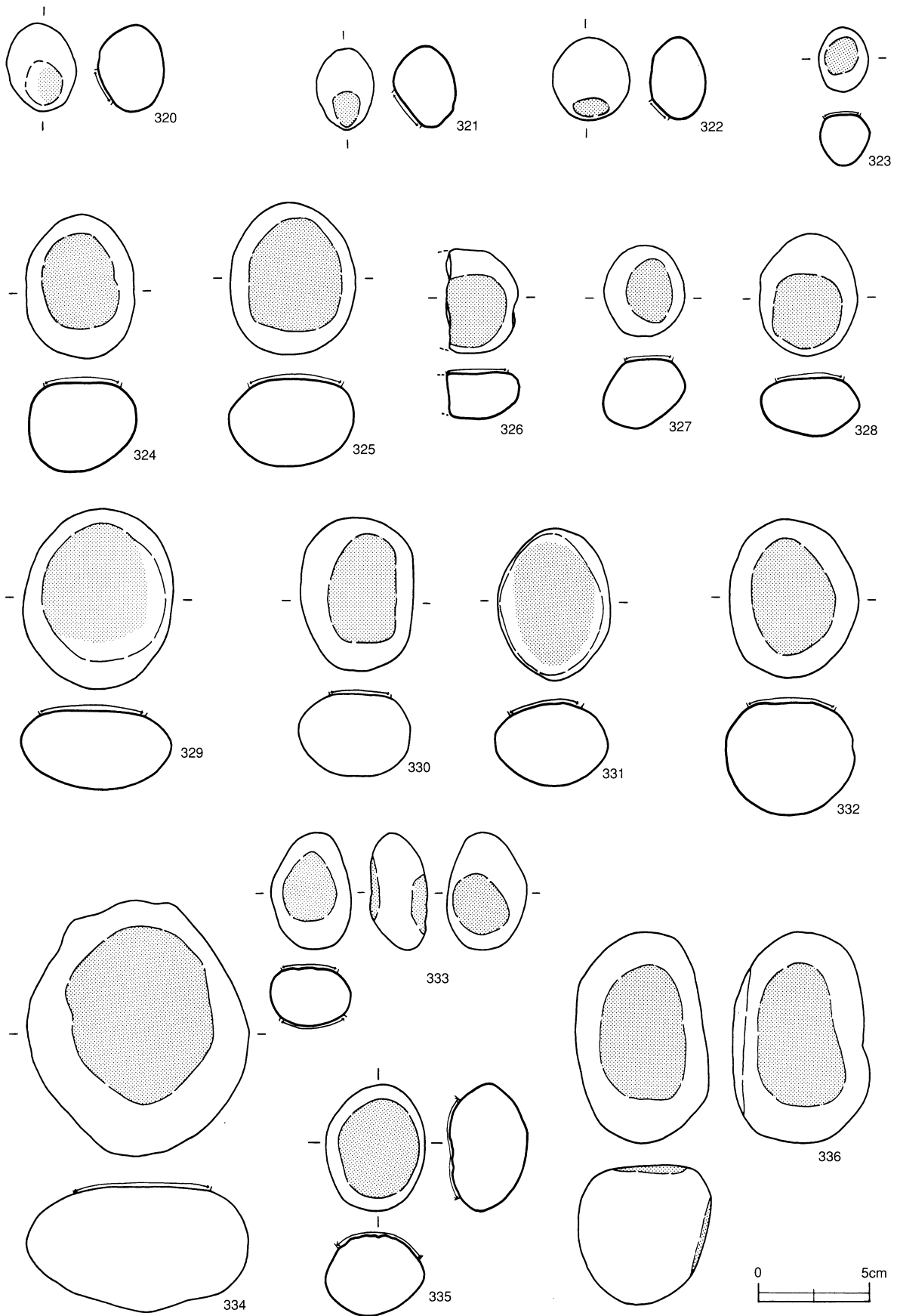
砥石類は合計6点出土した。本報告においては平らに整形された面に研磨痕がみられるものを砥石類であるとした。本類に帰属する石器についてはその形状から以下のように分類した。

I類 自然礫を整形して使用しているもの（374～377）。

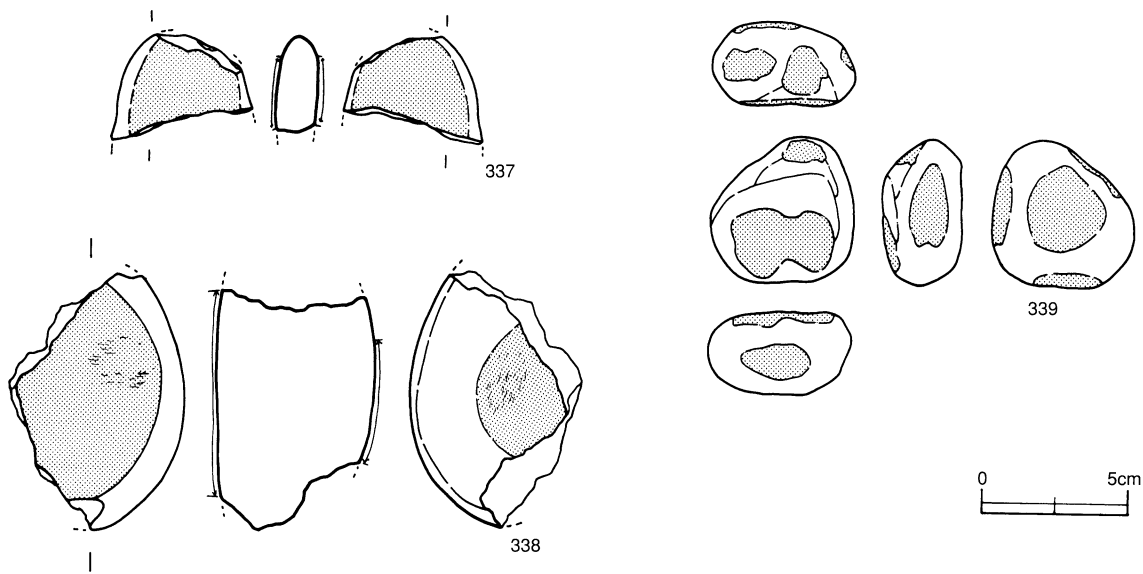
いずれも小型で薄いことから携帯用の砥石であると考えられる。側面は平らに整形されている。374は使用面の中心部が緩やかに凹んでいる。375は表裏ともに平らであり、そこには研磨の痕がみられることから両面とも使用していたと判断した。377は遺物の全面を砥石として使用することにより整形されたと考えられる。深い溝となっている箇所は金属器等を砥いだものであると考えられ、縦方向の研磨の痕がみられる。

Ⅱ類 自然礫を整形せずに使用しているもの（378, 379）。

378は図中において使用面の下部に向かって凹んでおり、379は使用面の右側に向かって凹んでおり、研磨痕は凹みの方向に向かって走っている。このことから凹んでいる方向に向かって研磨をしたと考えられる。



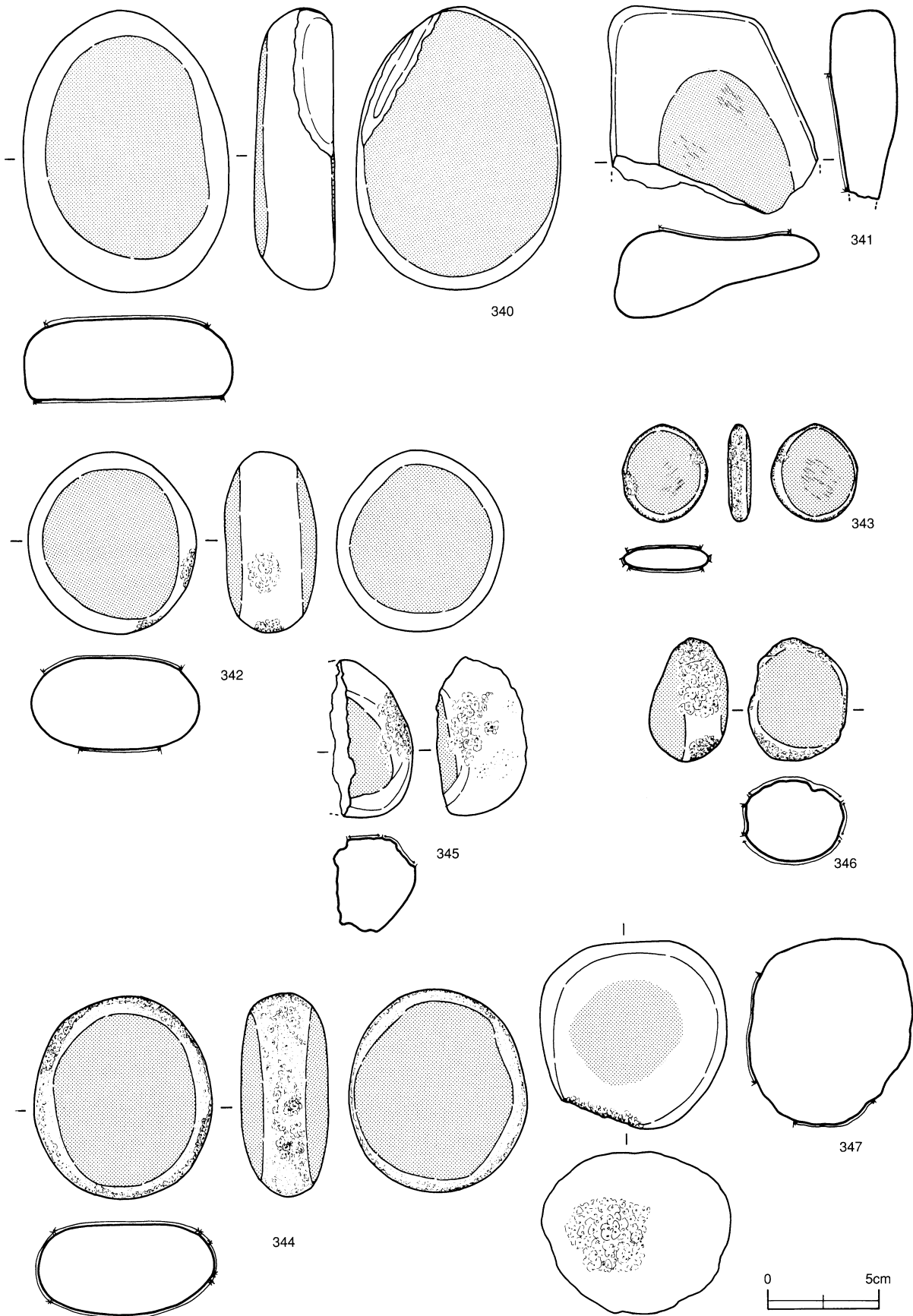
第100図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図22(石器10)



第101図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図23(石器11)

第36表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・磨石敲石類

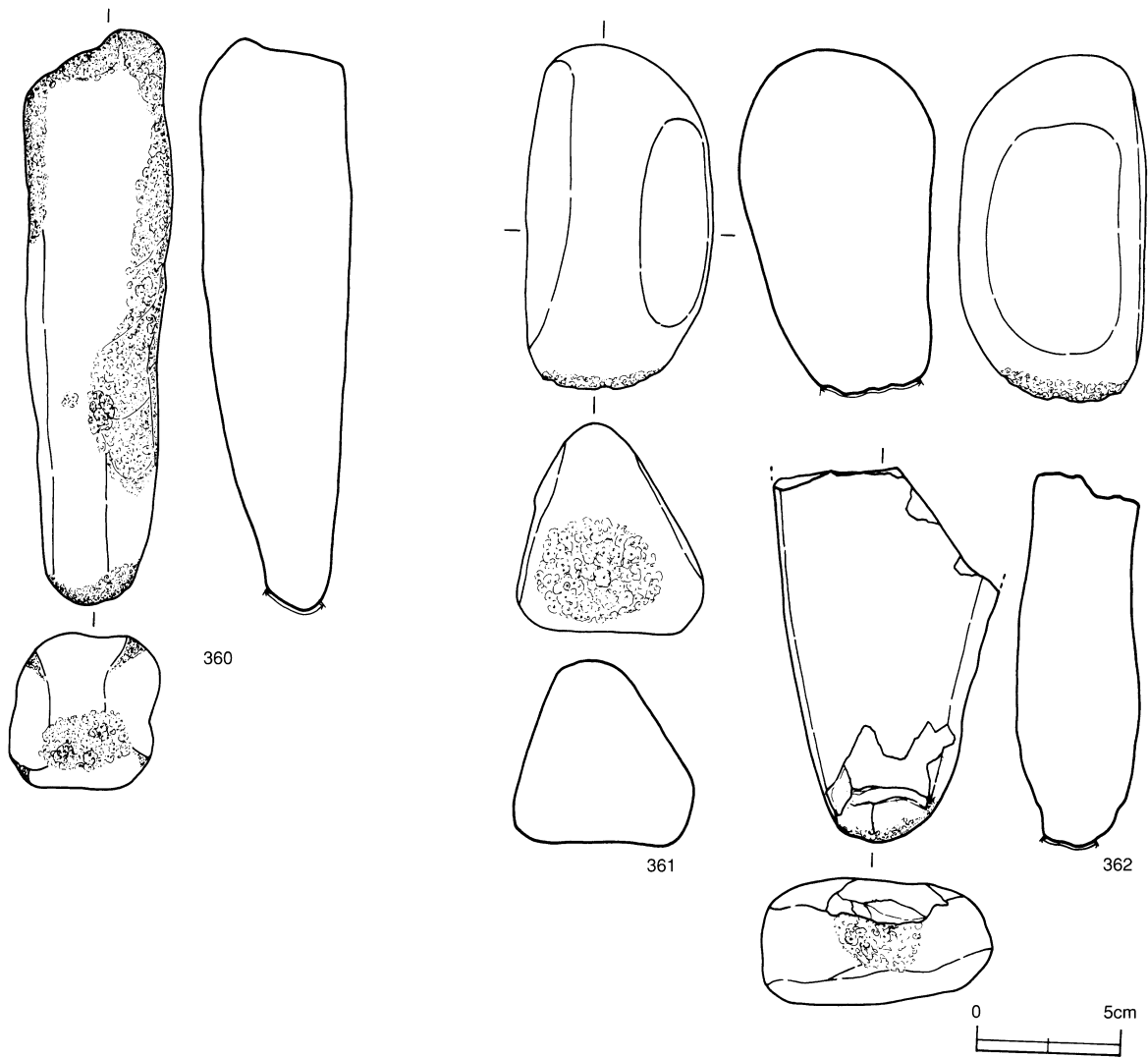
挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
100	320	磨石	3872	C20	Ⅲ a	安山岩	3.95	3.2	3	42.5		I類	22
	321	磨石	3543	C21	I b	安山岩	3.6	2.6	2.8	31			20
	322	磨石	2781	D21	I b	安山岩	3.63	3.5	2.5	40.1	磨面に注記		15
	323	磨石	3542	C21	I b	安山岩	2.9	2.3	2.5	21.8			72
	324	磨石	3714	C21	Ⅲ a	安山岩	6.45	4.95	3.9	186.4			50
	325	磨石	454	B20	Ⅲ b	安山岩	6.9	5.8	4	218.3			47
	326	磨石	3496	C20	Ⅱ	安山岩	5.6	4	2.5	77.96			74
	327	磨石	2374	B21	I b	安山岩	4.05	3.7	3.15	62.7			73
	328	磨石	4178	D21	ピット内	安山岩	5.5	4.5	2.8	90.4			71
	329	磨石	108	T15	Ⅱ	砂岩	7.95	6.9	3.5	282.9			52
	330	磨石	647	C19	溝	安山岩	5.8	4.75	3.7	188			75
	331	磨石	5169	C20	Ⅲ b	安山岩	6.78	5.13	3.7	169.6			2
	332	磨石	4266	C15	Ⅲ b	安山岩	7.1	5.85	5.15	273.8			56
	333	磨石	3985	A20	Ⅲ b	安山岩	5.2	3.67	2.6	70.6			19
	334	磨石	5513	D19	Ⅲ b	安山岩	11.4	10.1	5.5	819			53
335	磨石	1925	C19	Ⅲ a	安山岩	5.75	4.6	3.65	126.6		9		
336	磨石	1462	A21	Ⅱ	安山岩	9.5	6	6.2	448		49		
337	磨石	5131	B21	Ⅲ b	安山岩	4.3	5.8	1.7	38.8	半分ほどを欠損	77		
101	338	磨石	4247	C14	Ⅲ b	安山岩	8.75	6	5.5	326.2	半分ほどを欠損	57	
339	磨石	3646	D21	I b	安山岩	4.95	5	2.8	100		6		
102	340	磨石	1931	C18	溝内	安山岩	12.7	9.4	3.6	767		II類	55
	341	磨石	4344	B19	Ⅲ b	安山岩	9.4	9.4	4.3	489	3分の1を欠損		80
	342	磨石、敲石	2603	B16	Ⅲ a	安山岩	8.2	7.7	4.1	395			54
	343	磨石、敲石	2097	C21	I b	砂岩	5.25	4.7	1.3	46.7			76
	344	磨石、敲石	3978	C15	V	安山岩	9.25	8.2	4.6	470			58
	345	磨石、敲石	1632	B14	Ⅲ a	安山岩	7.05	3.8	4.2	123.3	半分ほどを欠損		17
	346	磨石、敲石	3989	A20	Ⅲ b	安山岩	5.5	3.7	4.6	105.8			18
	347	磨石、敲石	4902	B19	Ⅲ b	安山岩	8.4	8.5	7.4	695			48



第102図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図24(石器12)



第103図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図25(石器13)



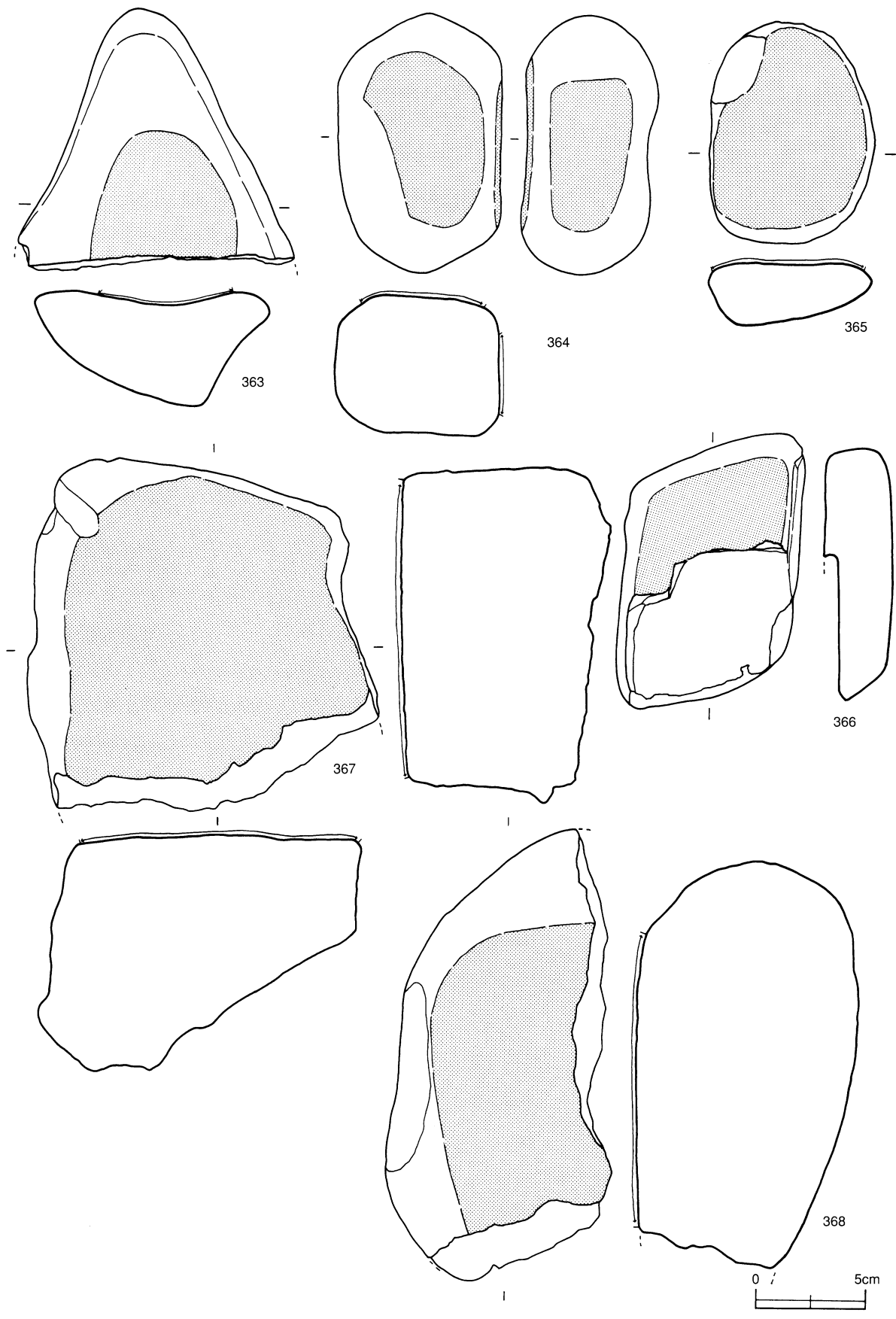
第104図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図26(石器14)

第37表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・磨石叩石類

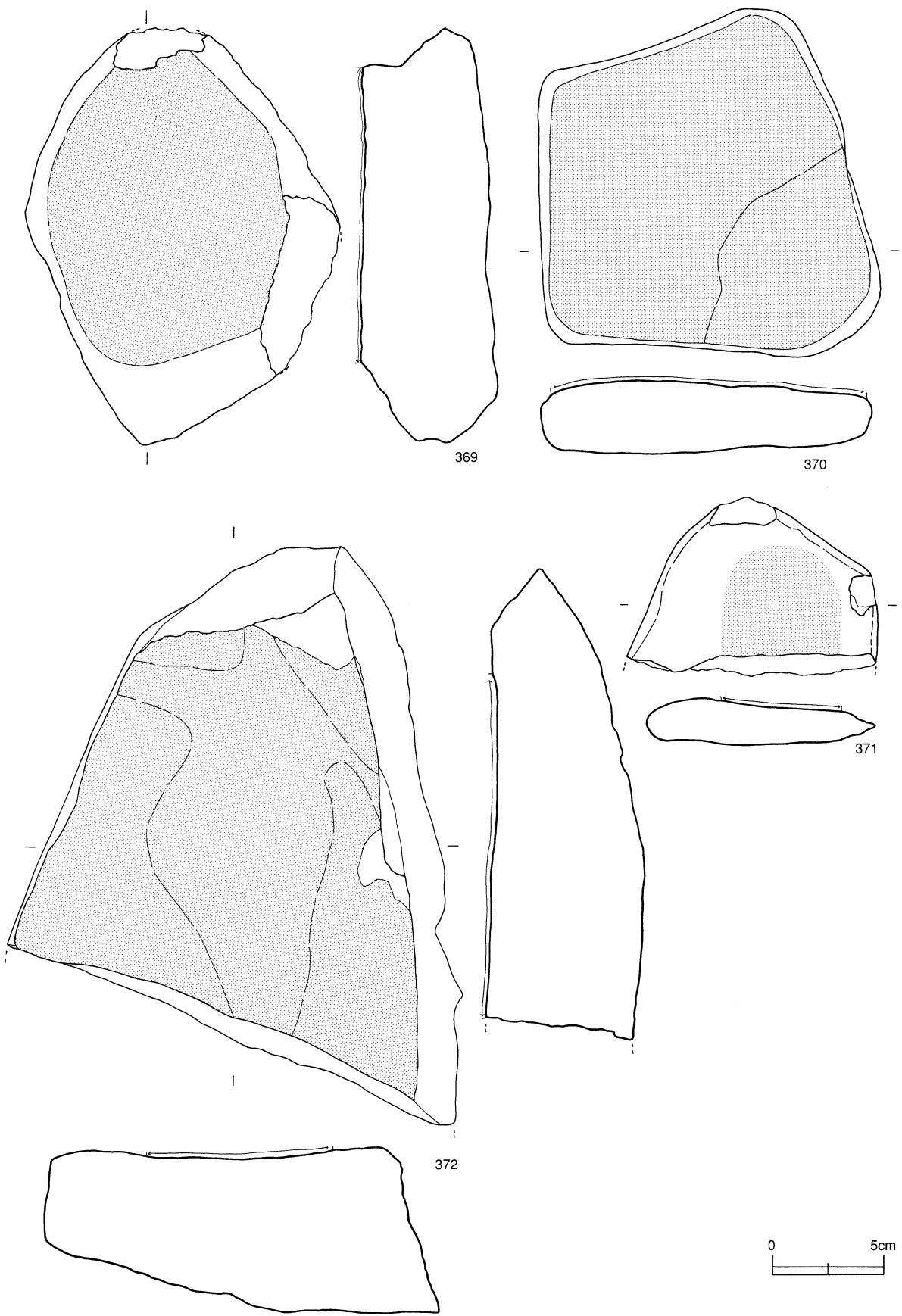
挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
103	348	磨石、叩石	3955	B15	Ⅲ a	安山岩	9.95	7.8	6	615		I類	60
	349	磨石、叩石	3723	B20	I b	安山岩	5.45	3.43	2.98	67.7			3
	350	磨石、叩石	1596	D14	Ⅱ	安山岩	6.05	4.3	3.6	123.1			8
	351	磨石、叩石	5051	A21	溝内	安山岩	4.4	3.5	2.9	59.8			11
	352	棒状磨石	3667	C21	Ⅲ a	安山岩	9.05	3.6	3.5	75.5	3分の1を欠損		99
	353	叩石	477	A18	溝内	凝灰岩	6.5	3.4	5.1	127.9		10	
	354	叩石	3888	D21	Ⅲ a	安山岩	6.6	3.5	4.3	130.5		14	
	355	叩石	676	C19	溝	安山岩	6.6	6.2	4.8	237.7		5	
	356	叩石	5153	B21	Ⅲ b	安山岩	2.1	3.6	3.13	21.9	半分ほどを欠損	7	
	358	叩石	3619	B22	I b溝内	安山岩	12.2	3.7	3.5	195.6		93	
359	叩石	4245	C15	Ⅲ b	安山岩	13.2	6.45	5.1	554		98		
104	360	叩石	表探			砂岩	20.05	5.3	5.3	763			96
	361	叩石	3692	C21	Ⅲ a	安山岩	12	6.6	7.2	738			97
	362	叩石	5569	C23	溝内	安山岩	12.95	8	4.5	359			94

第38表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・凹石類

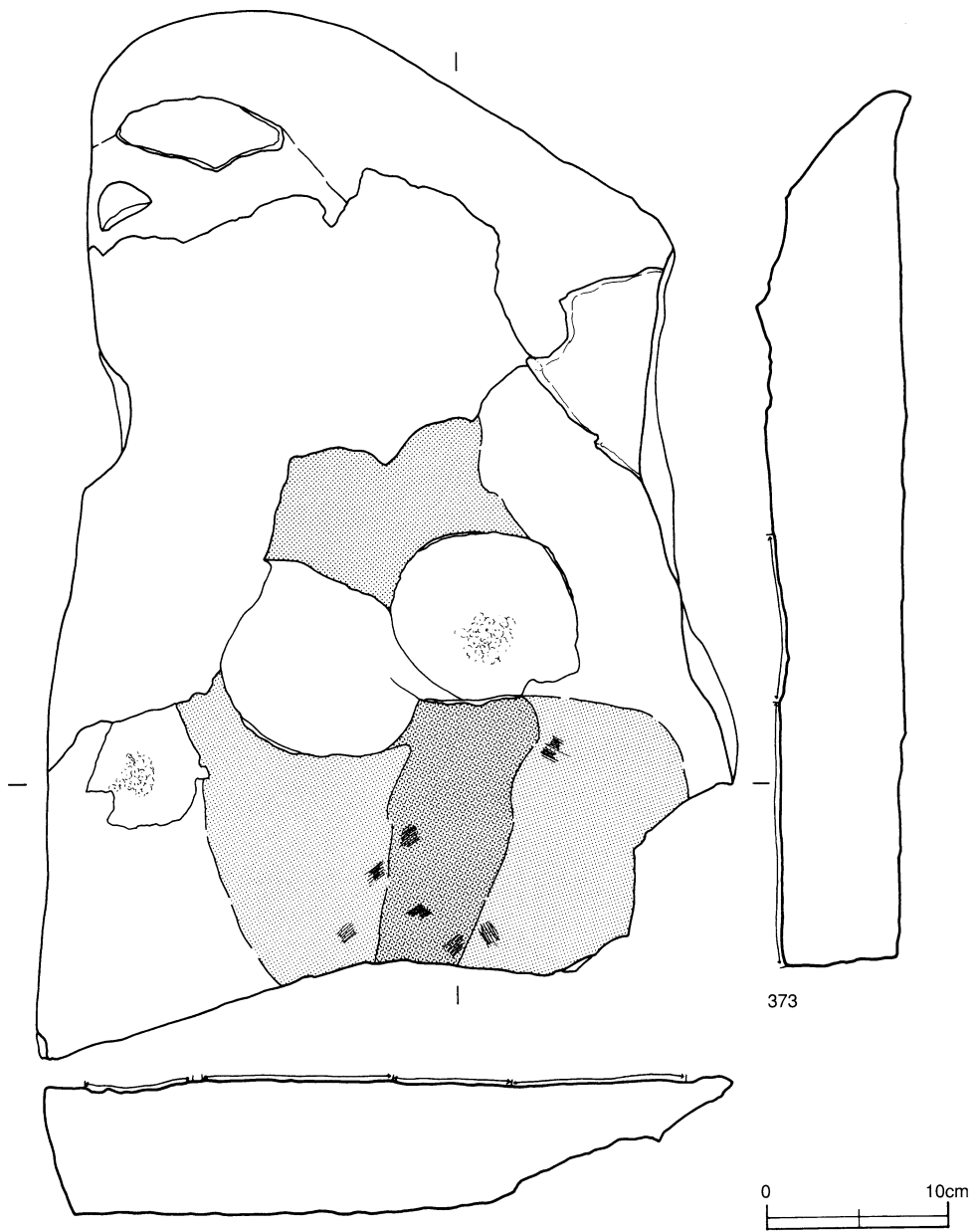
挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
103	357	凹石	1233	B19	Ⅲ b	安山岩	7.6	5.65	2.9	171			1



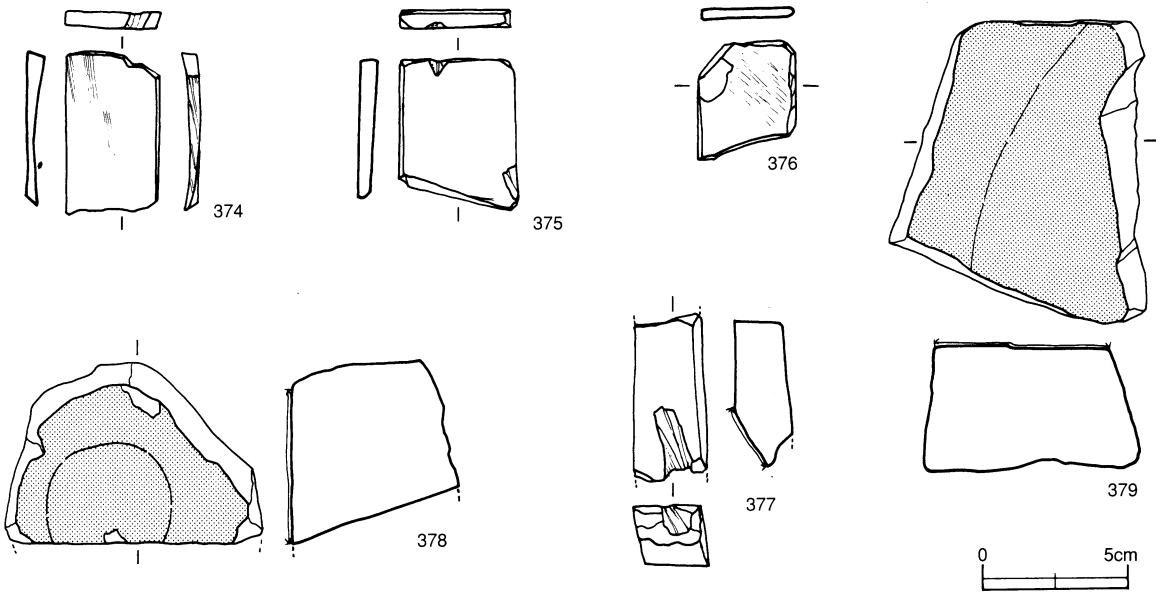
第105図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図27(石器15)



第106図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図28(石器16)



第107図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図29(石器17)



第108図 山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物実測図30(石器18)

第39表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・台石類

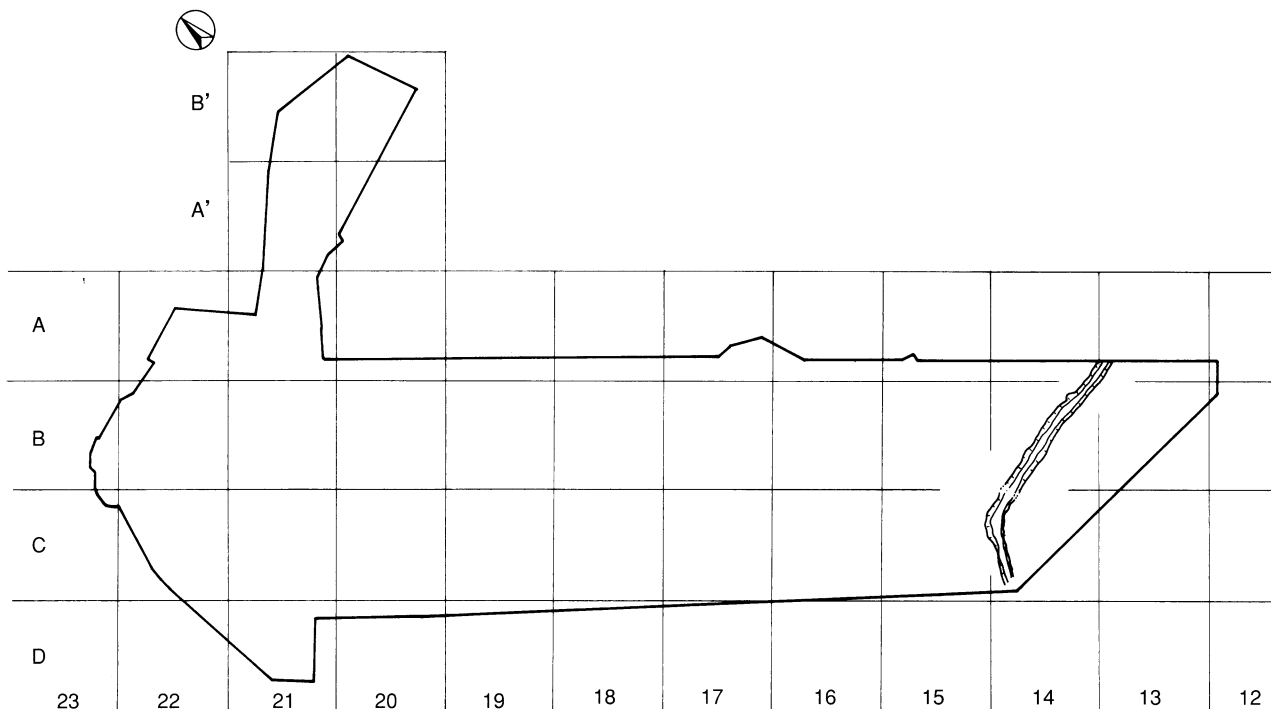
挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
105	363	台石	4006	A 20	Ⅲ b	安山岩	11.9	12.7	5.2	593	3分の1程を欠損	Ⅱ類	82
	364	台石	4652	B 22	Ⅲ b	安山岩	11.7	7.5	6.3	908		Ⅰ類	59
	365	台石	1597	C 14	Ⅱ	安山岩	10.05	7.5	3.1	281		Ⅱ類	62
	366	台石	1275	B 14	Ⅲ b	黑色安山岩	12.5	8.55	4	512	使用面の半分を欠損	Ⅰ類	61
	367	台石	1234	B 19	Ⅲ b	安山岩	16.1	16.05	11.05	3500			104
	368	台石	615	C 19	溝内	安山岩	20.6	10.35	11	2700	半分ほどを欠損	Ⅱ類	102

第40表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・石皿類

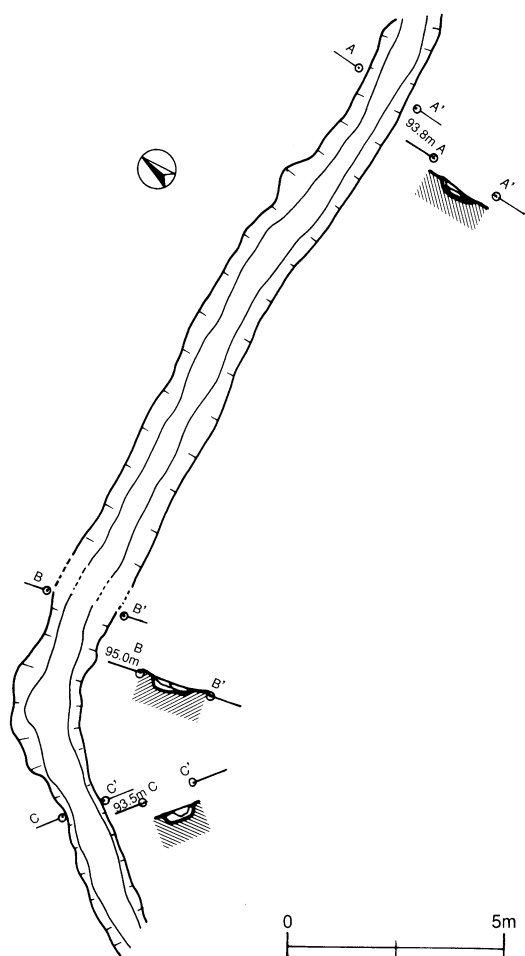
挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
106	369	石皿	1849	A 14	Ⅲ a	安山岩	18.7	14.35	6.5	1913	一部分を欠損	Ⅱ類	38
	370	石皿	4137	C 21	Ⅲ a	安山岩	15.35	15.7	3.3	922			Ⅰ類
	371	石皿	1213	B 20	Ⅲ b	安山岩	8	11.4	2.1	145.5	半分ほどを欠損	63	
	372	石皿	4138	C 21	Ⅲ a	砂岩	26.2	20.7	7.9	4400	一部分を欠損	Ⅱ類	103
107	373	石皿				安山岩	57.3	35.7	8.5	26900	4分の1ほどを欠損		12

第41表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・砥石類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測番号
108	374	砥石	2736	A 21	Ⅰ b	凝灰岩質頁岩	6.4	3.3	0.6	14.7		Ⅰ類	85
	375	砥石	3658	C 21	Ⅰ b	凝灰岩質頁岩	5.1	4	0.7	24			83
	376	砥石	2447	B 22	Ⅱ	凝灰岩質頁岩	3.7	3.3	0.4	8.5	半分ほどを欠損		84
	377	砥石	5670	C 23	溝内	安山岩	5.65	2.6	2.1	42.4			81
	378	砥石	4997	C 20	Ⅱ	硅質凝灰岩	8.8	6.25	5.85	326.9	欠損	Ⅱ類	78
	379	砥石	296	A 18	Ⅱ	砂岩	10.3	8.8	4.7	657	欠損		79



第109図 山ノ脇遺跡 古墳時代 検出遺構配置図（溝状遺構）



第110図 山ノ脇遺跡 古墳時代 溝状遺構実測図

第2節 古墳時代の調査

山ノ脇遺跡における古墳時代の調査は、Ⅱ層およびⅢa層を中心に行われた。

1 検出遺構

山ノ脇遺跡では、古墳時代に該当する遺構としては、溝状遺構が一条検出された。

(1) 溝状遺構

山ノ脇遺跡A～C-14区Ⅲb層上面で検出され、A・B区では東西方向に走り、C区で南北方向に向きを変える遺構である。東側も南側も共に発掘調査区外に延びており、全容は不明である。遺構規模は、検出長2340cm、最大幅160cm、検出面からの深さ29cmを測る。埋土は2層に分かれ、下層にはⅢa層に相当する暗黄褐色粘質土が、上層にはⅡ層に相当する黒褐色粘質土が堆積していた。埋土中から出土した遺物の多くが、成川式土器であったことから、この溝状遺構の所属時期は、古墳時代であると判断した。

2 出土遺物（第111図～第114図）

山ノ脇遺跡出土の古墳時代遺物には、成川式土器の甕形土器、壺形土器、高坏形土器などがある。

甕形土器（第111図1～11）

1は胴部上半部片。外面に断面が「M」字状の貼付突帯が1条巡る。突起上に細かい刻みを施す。外面には1cm幅に4本のハケメがある工具で調整を施す。2・5は胴部下半部片。外面では1cm幅に7本の条線がある工具で調整を施す。3・4は底部から脚台部分。外面は指頭圧痕で屈曲部を作り出す。6は胴部下半部片。外面は丁寧なナデ調整を施す。7は脚が直線的に伸びる脚台部分。底部は高い。8・10は脚がやや内湾する脚台部分。9・11は裾部が外反する脚台部分。他に比べ器壁が薄い。

壺形土器（第112図～第113図12～28）

1類（第112図12～21） 胴部の張りが弱く頸部から底部へなだらかに移行する形態。

12～16は頸部～肩部片。12・16は部位の境が内外面共になだらかに移行する。13の外面は頸部から肩部への屈曲が明瞭だが、内面はなだらかに移行する。14は内外面共に頸部から肩部への屈曲が明瞭である。また外面ではケズリ痕が、内面では指頭押圧痕がみられる。15は外面では頸部から肩部への屈曲は不明瞭だが、内面ではやや明瞭となる。外面では1cm幅に3本のハケメがみられる。17は胴部上半部片。ヘラ状工具による刻目が施される貼付突帯が巡る。上部が欠損しており何条あったかは不明。内外面共に丁寧なナデ調整を施す。18～21は胴部下半～底部片。18の底面は上げ底気味の狭い平坦面を形成する。外面では1cm幅に5本の条線のある工具で調整を行う。19の底面はごく狭い平坦面を形成する丸底を呈す。20の外面は縦方向のハケナデ調整後ナデ調整が行われる。21の底面は狭い平坦面を形成する。外面では縦方向のハケナデ調整後ナデ調整を施す。

2類（第112図22） 胴部は張りがあるが、胴部最大径より口径の方が大きい形態。

22の内面は口縁部から胴部への屈曲が明瞭である。口縁部は内外面共にハケナデ調整を施す。

3類（第112図23～28） 胴部は張りが強く、断面が球形を呈す形態。

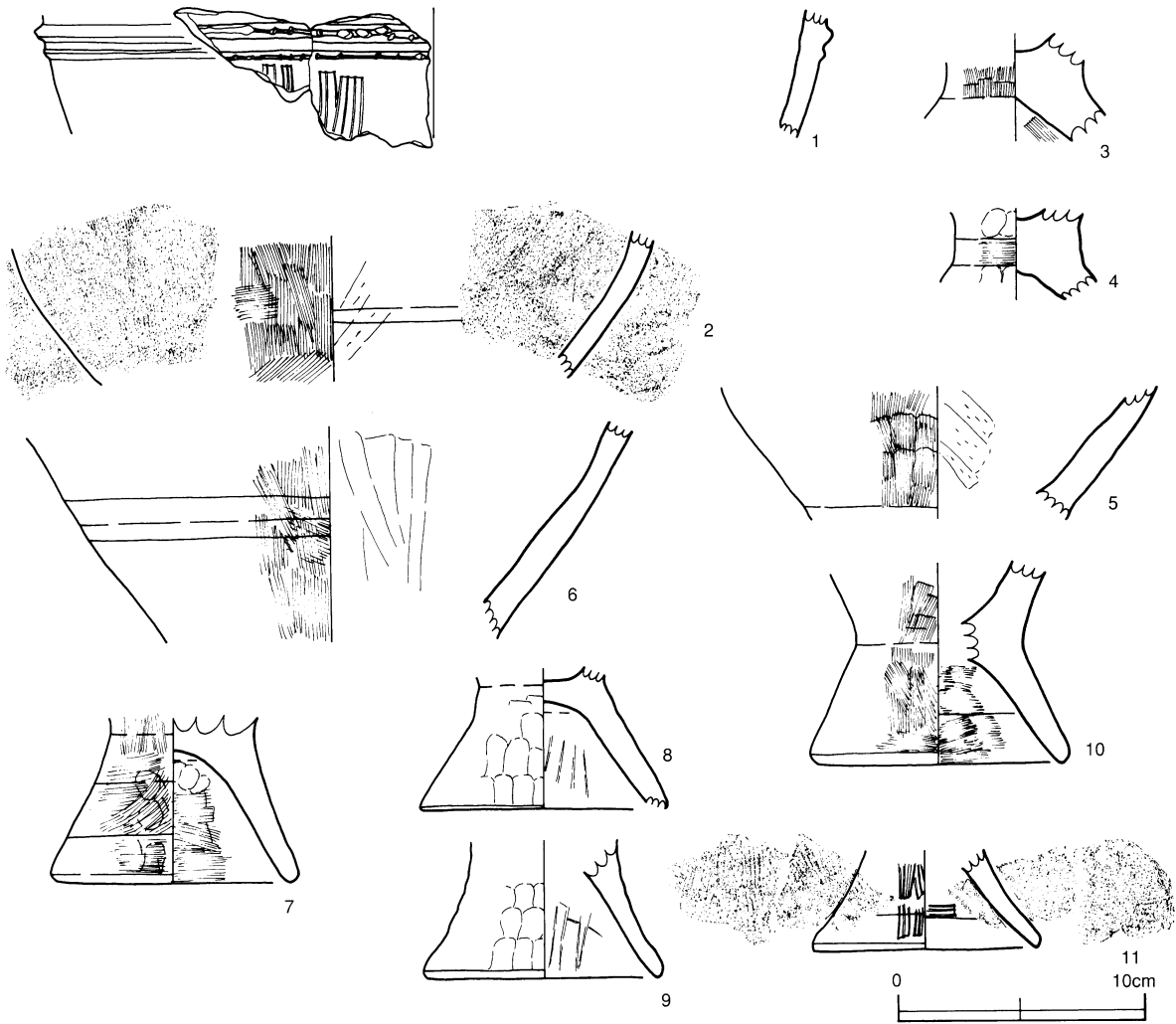
23は内面に指頭押圧痕が残る頸部下端～肩部片。24は外面が丁寧なナデ調整を施す胴部上半部片。25～27は横方向の貼付突帯上にヘラ状工具で刻みを施す土器。25は「M」字状の突帯が1条巡る。26はらせん状に突帯を2周圍繞する。27は突帯を2条巡らし刻みは左側から差込む。この刻みの間隔や深さが上下の突帯で同じなので同時に刻んだと考えられる。28は大きく開く胴部下半部片。

高坏形土器（第114図29～35）

29は坏部。内面は丁寧なナデ調整を施す。30～35は脚部。30～32はさほど開かない脚。共に外面はミガキ調整を行う。33は直線的に外反する脚。外面では1cm幅に6本のハケメがある工具で調整を行う。内面は幅約7mmのヘラ状のケズリ痕が残る。34は大きく直線的に外反する脚。外面では縦方向のミガキ調整を行い、内面では1cm幅に4本の条線がある工具で調整を行う。35は大きく外に開く脚裾部。脚外面では1cm幅に6本のハケメがある工具で調整を行う。

鉢形土器（第114図36・37・39・40）

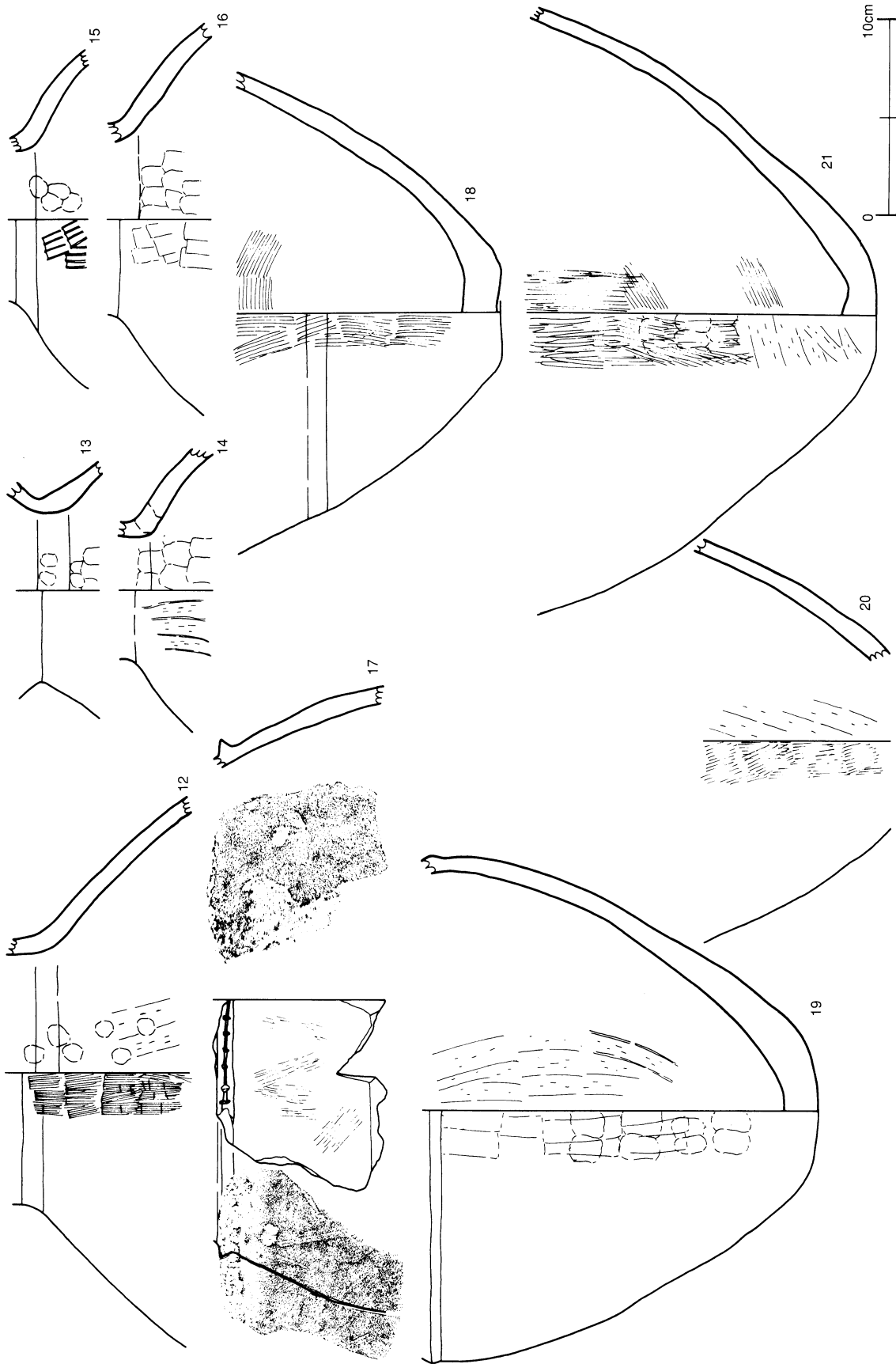
胴部が緩やかに張り、口縁部へは屈曲部を設けずになだらかに移行する。底部には脚台が付く。36は外面最大径部分にスガが付着する。内面では1cm幅に4本の条線がある工具で調整を行う。37は外面では1cm幅に9本のハケメがある工具で調整を行う。39は外面ではミガキに近い丁寧なナデ調整を施す。40は内外面に縦方向の丁寧なナデ調整を施す。内面に化粧土が塗られている可能性がある。



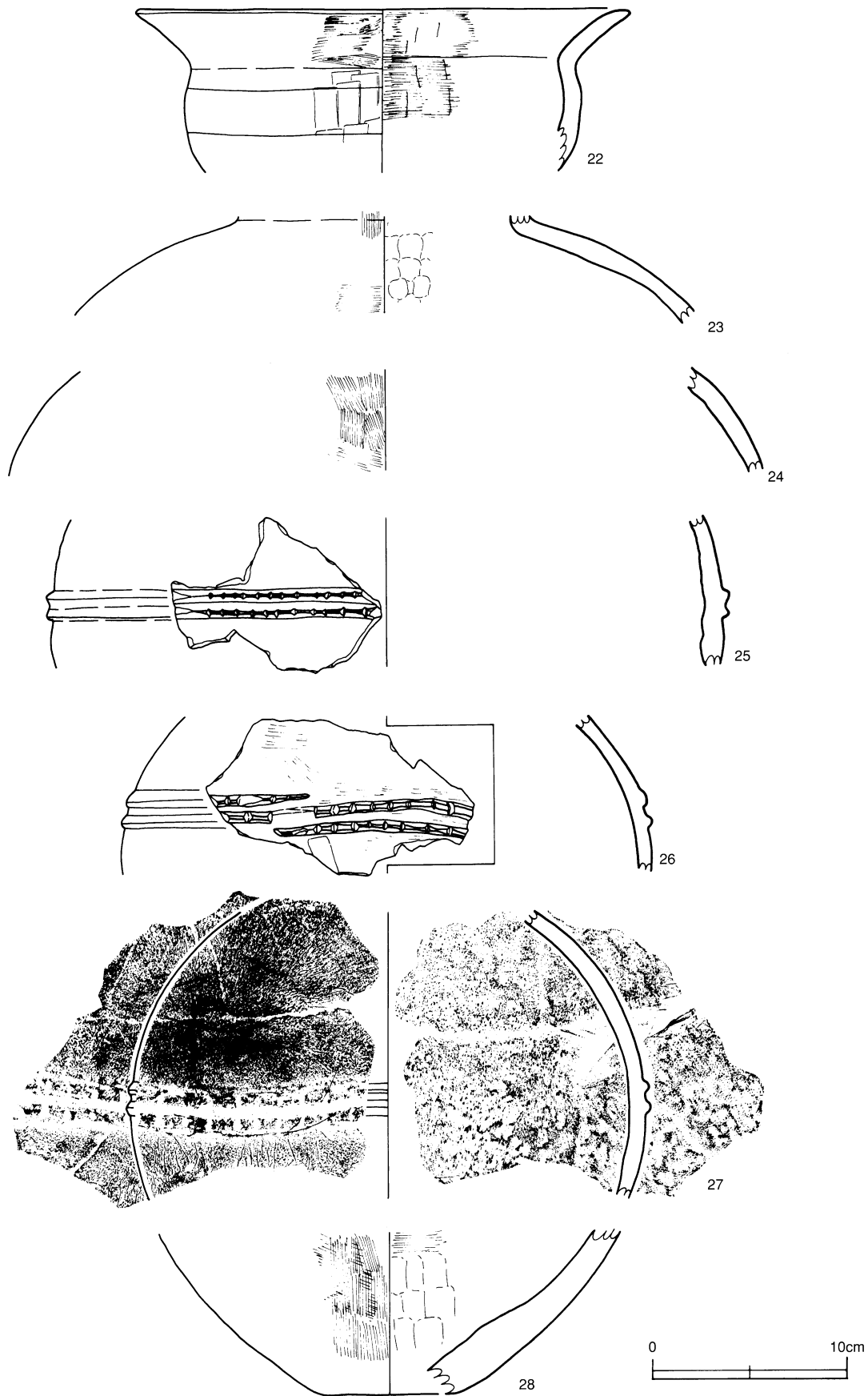
第111図 山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図1 (成川式土器・甕)

第42表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器 (甕)

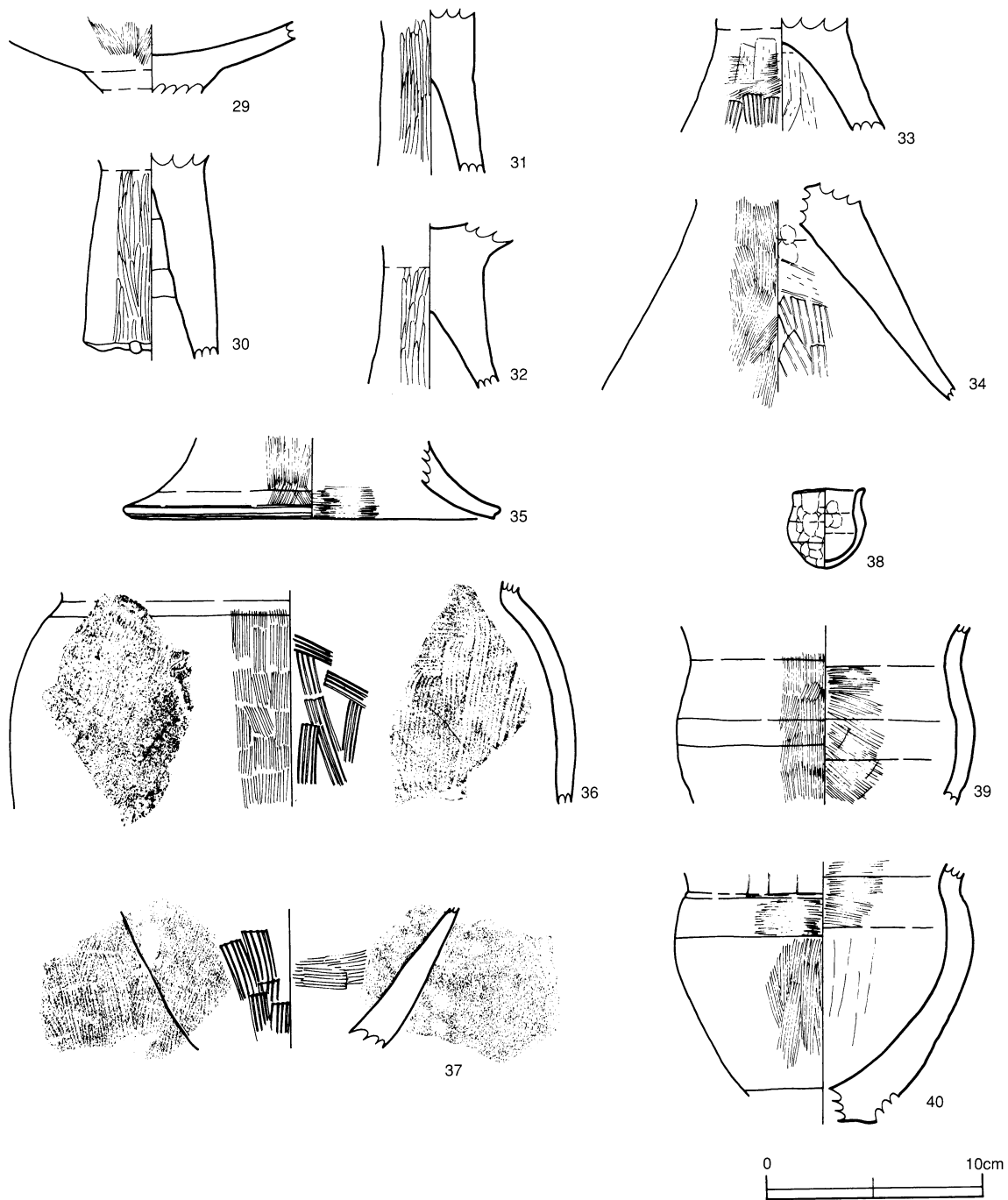
挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	細別	部位	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整		色調		備考	実測図 No
										外面	内面	外面	内面		
111	1	A15	II	925		胴部上半			石英・長石・輝石	ハケ目調整		黒褐色～明茶褐色	明黄褐色		790
				936											
	2	A15	II	795		胴部下半		26.4	石英・長石・角閃石・雲母	ハケ目調整	ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色	スス付着	808
	3	A18	溝	495		底部～脚台		6.1		ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色		780
	4	A14	III a	1206		底部～脚台			石英・長石・雲母、砂粒を多く含む	ナデ	ナデ	赤褐色	暗黄褐色		778
	5	B13	II	1750		胴部下半			石英・長石・雲母・輝石、細砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	暗黄褐色～黄褐色	暗褐色～暗黄褐色		816
	6	A14	II	805		胴部下半			石英・長石・輝石	ハケナデ→ ていねいなナデ	ヘラナデ→ナデ	茶褐色～赤褐色	茶褐色		817
				806											
	7	B13	III b	1826		脚台	(9.4)		石英・長石・輝石・雲母、砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	黄褐色～暗黄褐色	黄褐色～暗黄褐色		779
	8	B19	P11			脚台	(10)		石英・長石・角閃石・雲母、細砂粒を多く含む	ユビナデ	ケズリ→ナデ	暗黄褐色～茶褐色	暗黄褐色		776
	9	B15	II	929		脚台	(9.2)		石英・長石・角閃石、細砂粒を多く含む	ヘラナデ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	暗黄褐色～茶褐色	暗黄褐色～黒褐色		782
10	A14	III a	T18	II		脚台	(9.3)		石英・長石・雲母・輝石・角閃石	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗黄褐色～茶褐色	茶褐色		781
			1003												
			1049												
11	B19	II	82		脚台	(9)		石英・長石・角閃石・輝石・雲母、砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～赤褐色		807	
			90												



第112図 山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図 2 (成川式土器・壺 1)



第113図 山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図3(成川式土器・壺2)



第114図 山ノ脇遺跡 古墳時代 出土遺物実測図4 (成川式土器・高坏)

小型丸底壺 (第114図38)

山ノ脇遺跡から1点出土。短い直立する口縁に球形の胴部を呈する。

以上の様相から、山ノ脇遺跡で出土した土器は、甕形土器の脚が高いこと、壺形土器1類がみられること、壺形土器の底部形態、小型丸底壺の形態などから、成川式土器の中の「中津野タイプ」を主体として、一部「東原タイプ」がみられるようである。

第43表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器（壺）

挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No
											外面	内面	外面	内面	
112	12	C15	II	1100	頸部～肩部			28.1	石英・長石・輝石・雲母・ 角閃石、砂粒を含む	ハケ→ていねいなナデ	指頭押圧→ナデ	明黄白色～橙褐色	暗褐色～黒褐色	831	
				1515											
				1172											
	13	A15	III a	964	頸部～肩部				石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	暗黄褐色～黄褐色	黄褐色	820	
				982											
				1043											
				1838											
	14	B15	II	889	頸部～胴部上半				石英・長石・角閃石・雲母	ケズリ→ナデ	指頭押圧→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～暗褐色	815	
	15	B15	II	887	頸部～肩部				石英・長石・雲母・輝石、 細砂粒を多く含む	ハケ目調整→ナデ	指頭押圧→ナデ	橙褐色	暗褐色～黒褐色	833	
				908											
	16	A15	III a	977	頸部～肩部					ナデ	指頭押圧→ナデ	茶褐色	茶褐色	818	
	17	C15	III a	1173	胴部上半			31.8	石英・長石・角閃石・雲母	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	黄褐色～紅褐色	黒褐色	832	
				1098											
				1178											
				1179											
	18	B15	II	916	底部～ 胴部下半			(4.6)	石英・長石・角閃石・雲母	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	829	
				906											
	19	B14	III a	1073	胴部～底部			(2)	石英・長石・雲母・輝石・ 角閃石、細砂粒を多く含む	下半：タテハケナデ→ナデ、 上半：タテハラナデ→ナデ	タテハラナデ→ナデ	暗黄褐色～黄褐色	暗黄褐色～黄褐色	830	
1094															
20	B18	P1		胴部下半				石英・長石・雲母・輝石・ 角閃石、細砂粒を多く含む	タテハケナデ→ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色	暗黄褐色	810		
21	C15	III a	1532	胴部～底部				石英・長石・雲母・角閃石・ 輝石、砂粒を若干含む	ハケ目→ナデ	タテハケ→ナデ	黒褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗褐色	849		
			1158												
			1109												
113	22	B18	P-1	305	1 1 縁部～胴部上半		24.8	石英・長石・雲母・角閃石、 砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	茶褐色	暗黄褐色～茶褐色	795		
				888											
	23	B15	II	888	肩部				石英・長石・雲母・輝石・ 角閃石、微砂粒を多く含む	ハケナデ→ていねいなナデ	指頭押圧→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色	800	
				999											
				1873											
	24	A14	II	945	胴部上半			35.4	石英・長石・雲母	タテハケナデ→ていねいなナデ		茶褐色～暗黄褐色	紅褐色	796	
				955											
	25	B15	II	886	胴部			34.8	石英・長石・雲母・角閃石、 砂粒を多く含む	ハケ→ナデ		暗黄褐色～茶褐色	茶褐色	794	
				1033											
	26	B15	II	876	胴部			27	石英・長石・雲母・角閃石	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色	789	
				883											
	27	B15	II	258	胴部				石英・長石・黒雲母・輝石・ 角閃石、微砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	ナデ	暗黄褐色 ～暗茶褐色	暗黄褐色	811	
903															
966															
28	B14	III a	1140	底部～胴部			(6.6)	石英・長石・雲母・輝石・ 角閃石、砂粒を特に多く含む	ヨコハケナデ→ていねいなナデ	ヨコハケナデ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	813		
			1194												

第44表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器（高坏・その他）

挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	器種	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	調整		色調		実測図 No
											外面	内面	外面	内面	
114	29	B14	II	858	高坏	坏部				石英・長石・輝石・雲母	ハケナデ→ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	783
				1046											
	30	A18	II	1886	高坏	脚台				石英・長石・輝石・角閃石、 細砂粒を多く含む	ミガキ	ナデ	黒褐色～茶褐色	暗茶褐色	784
	31	B21	III a	4591	高坏	脚台				石英・長石・角閃石・雲母、 細砂粒を非常に多く含む	ミガキ	ナデ	黒褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	786
	32	B15	III b	1874	高坏	脚台				石英・長石・輝石・雲母・ 角閃石、細砂粒を多く含む	タテミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	785
	33	B19	III a	1897	高坏	脚台				石英・長石・角閃石、砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ハラケズリ	黒褐色～暗褐色	茶褐色	777
	34	B14	II	1086	高坏	脚				石英・長石・雲母・角閃石、 砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	802
				1197											
	35	B15	II	997	高坏	脚					タテハケナデ→ナデ	ヨコハケナデ→ナデ	紅褐色～茶褐色	暗黄褐色	819
	36	B19	II	88	特殊					石英・長石・角閃石・雲母、砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	ケズリ→ナデ	暗茶褐色～黒褐色	暗黄褐色 ～暗赤褐色	821
				287											
	37	B13	II	1747	特殊	胴部下半				石英・長石・角閃石	ハケ目調整	ケズリ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗褐色	801
	38	A15	III a	956	小型丸底壺		3.4	0.5	3.6	石英・長石・雲母、細砂粒を多く含む	指頭押圧→ナデ	ナデ	暗黄褐色～茶褐色	暗黄褐色	822
	39	C15	III a	1185	特殊	胴部				石英・長石・雲母・輝石、 砂粒を多く含む	ハケナデ→ ていねいなナデ	ハケナデ→ナデ	黒褐色～茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	812
				1187											
	40	B18	P1		特殊	胴部					タテハケナデ→ナデ	上半：ヨコハケナデ→ナデ、 下半：ケズリ→ナデ	暗黄褐色～茶褐色	茶褐色	787

第3節 古代の調査

山ノ脇遺跡における古代期の調査は、当該期の遺物が出土したⅡ層およびⅢa層を中心に行われた。これらの層は次に述べる中世期の遺物が主に出土する層と重なっており、両時期の遺物は混在して出土した。古代期に属する明瞭に判断できる遺構は無かった。

出土遺物（第116図～第117図）

山ノ脇遺跡で出土した古代期の遺物は、主に供膳具などとして使われる土師器・黒色土器や、主に貯蔵具・調理具などとして使われる須恵器であった。遺物の出土分布図（第115図）をみると、B・C-21・22区を中心とした山ノ脇遺跡の中では少々標高が低くなった区域と、A・B-14区を中心とした区域とに、出土していると判断できる。

（1）土師器（第116図1～22）

山ノ脇遺跡で出土した古代土師器のうち22点を資料化した。分類は石坂遺跡での分類に準じる。

坏（第116図1～10）

1～5は底部と体部との境が不明瞭で、丸味を呈しながら体部へ移行し、底部は若干上げ底となる。1類に属する。6・8は底部と体部との境が明瞭で、体部が直線的に立ち上がり、底部は平底となる。2類に属する。7は底部の腰が成形され、体部への立ち上がり際に段差がある。体部は若干外反し立ち上がり、底部は平底となる。3類に属する。9・10は体部への立ち上がり際にある段差の幅が厚くなる形態である。また体部は外反しながら立ち上がる。4類に属する。

小皿（第116図11）

11は赤色土器の小皿。焼成・胎土は古代土師に属するので古代期の所産と判断した。体部は直線的に開き、底部の厚さは厚く、底部から口縁部へ直線的に移行する。

椀（第116図12～21）

12～14は体部～口縁部片である。12は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は直行する。1類に属する。13は、体部上半部が直線的に開き、口縁部が直行する。14は体部上半部が外反して開く。これらの特徴から14は2類もしくは3類に属する椀である。

15～21は底部片である。15～18・20は高台脚部が開き、体部下半は直線的に立ち上がる。3類に属する。19・21は脚部が強く直線的に開く。5類に属する。

鉢（第116図22）

22は底部付近から丸味をもって立ち上がり、体部は直立し、口縁部は外反する。体部下端に沈線が2条横位方向に巡る。

（2）黒色土器（第116図23～35）

山ノ脇遺跡で出土した黒色土器は、25を除き、内面を丁寧に磨き、ススを沈着させる黒色土器Aである。25は外面だけにススを吸着させ特異的である。器種の主体は椀であるが、坏も出土した。出土分布図（第115図）をみると、土師器同様の傾向はあるが、18・19区での出土も多く注目できる。

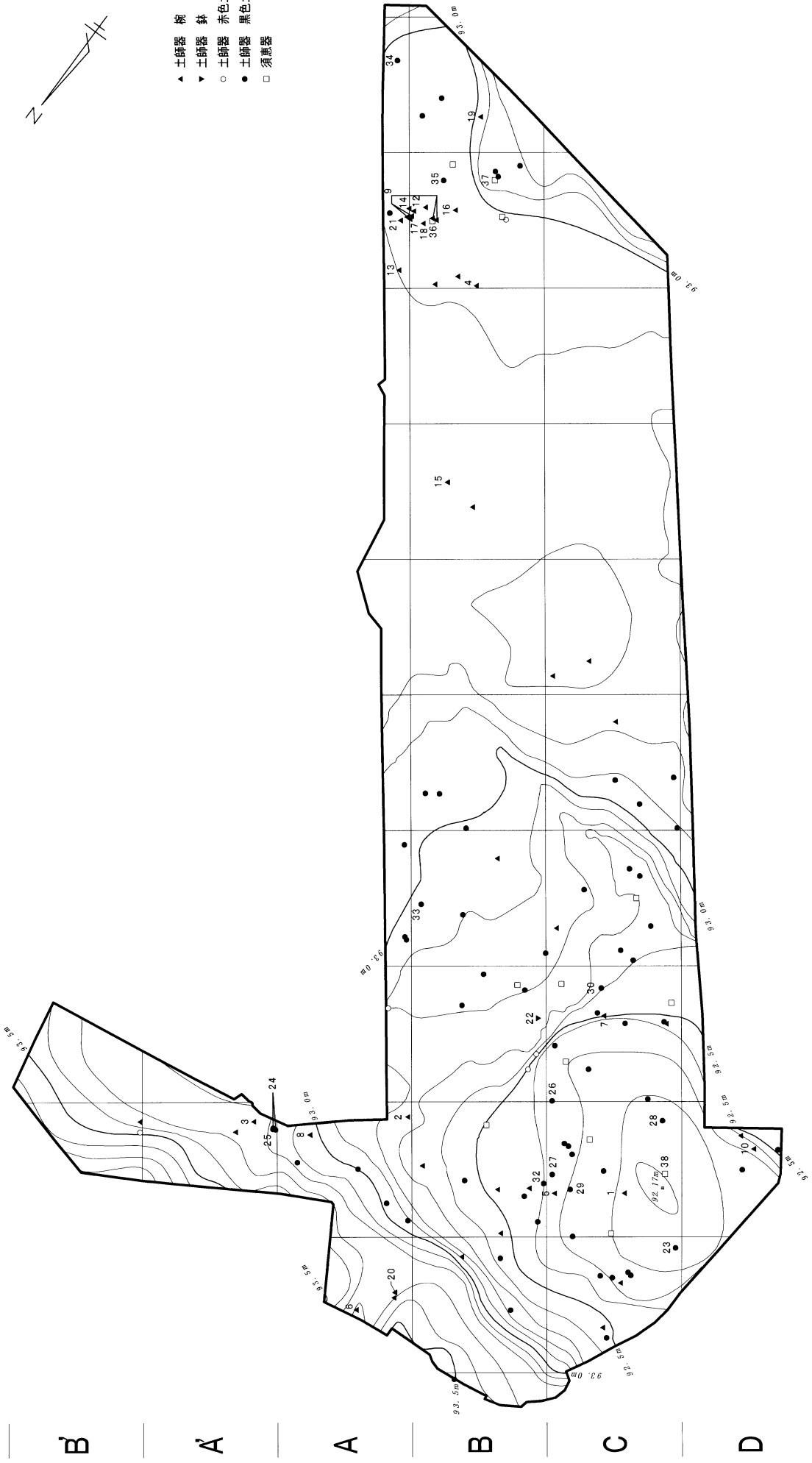
坏（第116図23）

23は底部と体部との境が明瞭で体部が直線的に立ち上がり、底部は若干上げ底。2類に属する。

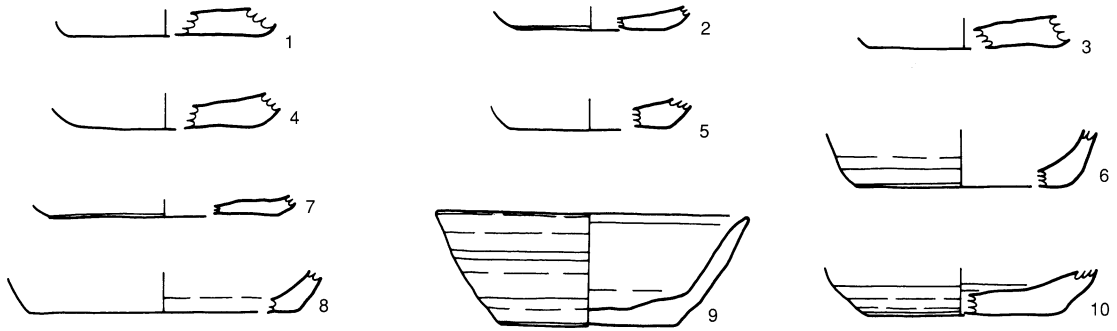
椀（第116図24～35）

山ノ脇遺跡で出土した椀のうち、12点を資料化した。

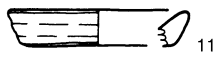
23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



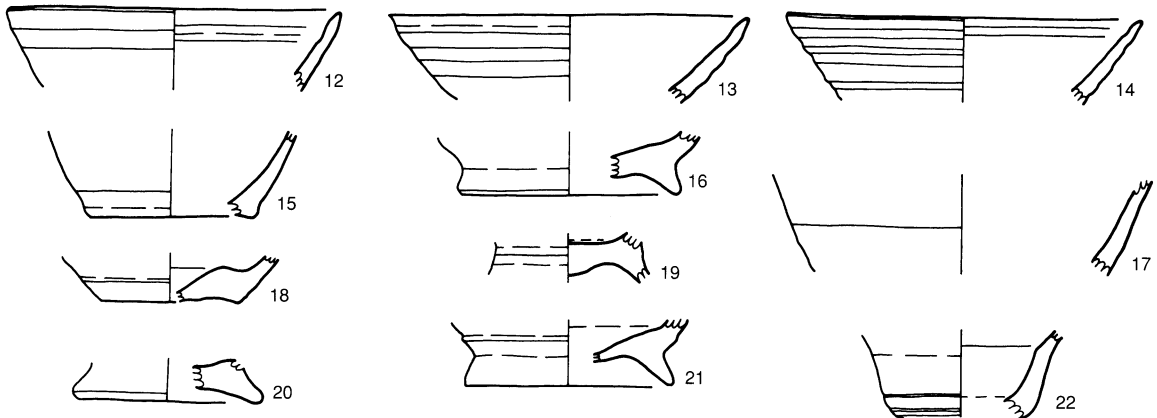
第115図 山ノ脇遺跡 古代期 出土遺物分布図 (土師器・須恵器)



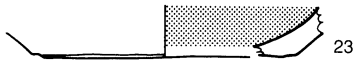
土師器・坏



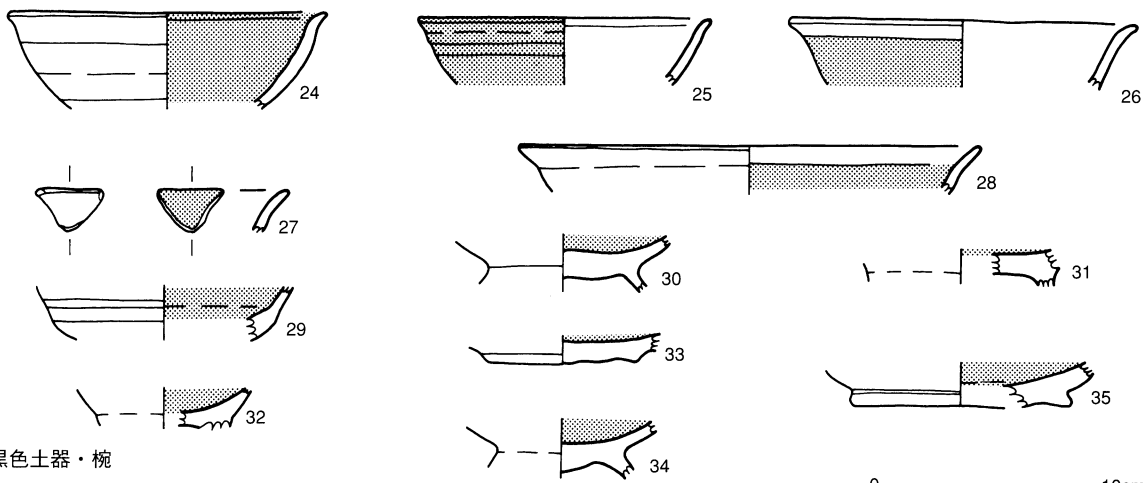
土師器・小皿



土師器・椀



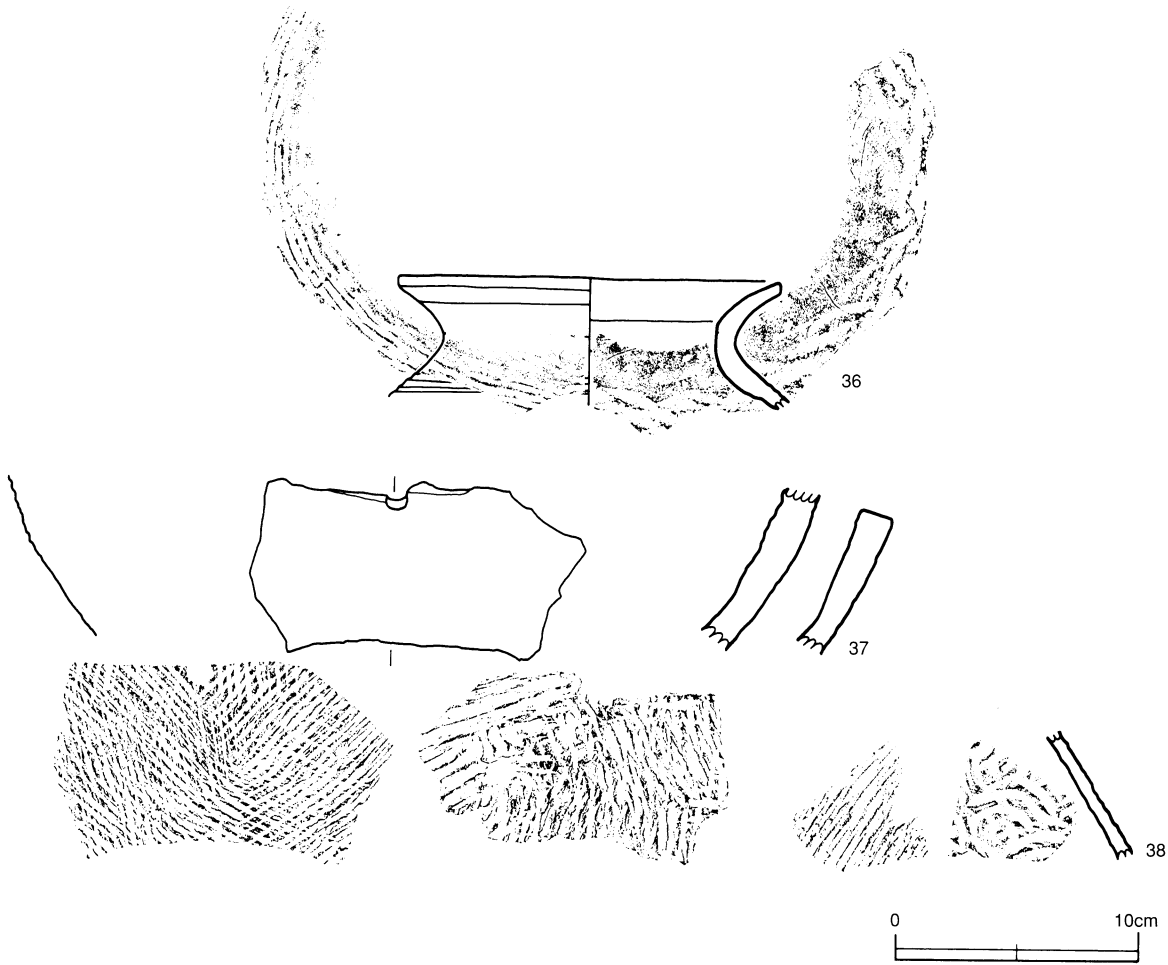
黒色土器・坏



黒色土器・椀



第116図 山ノ脇遺跡 古代期 出土遺物実測図1 (土師器・黒色土器)



第117図 山ノ脇遺跡 古代期 出土遺物実測図2 (須恵器)

24は体部上半部が内湾しながら、25～28は体部上半部が直線的に開きながら、口縁部が外反する。これらの特徴から2類もしくは3類に属する椀である。

30～35は底部片である。31は脚基部の径との差がほとんどなく、開かない。1類に属する。30・33は高台内部は脚部付近が削られ、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が少々開く。2類に属する。32・35は高台内部は脚部まで丁寧になでられ窪みがみられず、体部下半は直線的に立ち上がる。3類に属する。34は脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部は強く直線的に開く。5類に属する。

(3) 須恵器 (第117図36～38)

山ノ脇遺跡で出土した古代須恵器の器種は、全て甕である。出土分布図(第115図)をみると、土師器同様、B・C-21・22区と、A・B-14区とで出土する傾向にあり、特に20・21区に集中している。

36は口縁部から肩部の資料である。器形は「く」字状に屈曲し、口唇部は面取りされる。肩部は若干湾曲する。調整は、口縁部から肩部上半部分は内外面共に、ナデ調整が行われる。また肩部下半部は、外面が格子目タタキ、内面が同心円タタキである。器壁は薄く、堅緻である。38は肩部片で、調整は、外面が平行タタキ、内面が同心円タタキである。37は胴部下半部片。調整は内外面共に複数の斜方向平行タタキである。胴部中央に径10mmの焼成前穿孔がある。最大径約35cmを測る。

第45表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（坏）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	調整			色調		実測図 No	
											外面	内面	その他	外面	内面		
116	1	C21	I b	3230	1類	底部		(7.8)			ナデ	ナデ	底：板状切離→ナデ	暗橙褐色	暗橙褐色	340	
	2	A21	I b	3463		底部～体部下		(6.2)			ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	明黄褐色	345	
	3	A21	II	1387		I口縁部～体部		(7.6)			ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	暗褐色	336	
	4	B14	II	873		底部～体部下端		(7.2)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄白色	明橙褐色	339	
	5	C21	I b	3172	2類	底部～体部下端		(6.4)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄白色	暗黄褐色	344	
	6	A22	井内	4322		底部～体部下		8.2			ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	明黄白色	342	
	7	C20	溝	638	3類	底部～体部下端		(9.4)			ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	暗褐色	346	
	8	A21	溝込み	5077		底部～体部下		(11)			ナデ	ハケ→ナデ		黄白色	黄白色	341	
	9	B14	III a	1066	4類	完形		(12.6)	(7)	(4.5)	雲母・輝石を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転ヘラ切り産し→ナデ	明黄褐色～橙褐色	暗黄褐色～黄褐色	634
		B14	III a	1068													
B14		III a	1071														
A14		III a	1200														
10	D21	I b	3394		底部～体部下		(7.4)			ナデ	ナデ	見込み：回転ヘラナデ→ナデ	明黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～明黄褐色	347		

第46表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（皿）

挿入番号	番号	区	層	細別	部位	底径 cm	器高 cm	調整		色調		実測図 No
								外面	内面	外面	内面	
116	11	B16	P1		I口縁部～底部	(6.25)	(1.4)	ナデ	ハケ→ナデ	赤褐色	明黄褐色	352

第47表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期（椀）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	調整			色調		実測図 No
										外面	内面	その他	外面	内面	
116	12	B14	II	1008	1類	I口縁部～体部	(13.7)				ナデ	ナデ	明黄白色	暗褐色～暗黄白色	338
	13	A14	III a	1004	2・3類	I口縁部～体部	(14.8)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	明黄白色	明黄褐色	329
	14	B14	II	1007		I口縁部～体部	14.6				回転ヘラナデ	ナデ	明黄白色～橙褐色	明黄白色	337
	15	T18	II	379	3類	底部～体部下	(6.7)				ハケ→ナデ	ナデ	明黄褐色～橙褐色	暗茶褐色～暗褐色	333
	16	B14	II	1014		底部～体部下端	(8.8)				ナデ	ナデ	暗黄褐色	明黄褐色	334
	17	B14	III a	1065		体部		15.5			ナデ	ナデ	明橙褐色	明橙褐色	331
	18	B14	II	853		底部～体部下	(5.6)				ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色～暗褐色	332
	19	B13	II	1689	5類	底部					ハケ→ナデ	ミガキ	暗黄褐色	赤褐色	335
	20	A22	井内	3846	3類	高台脚部		7.4			ナデ	ナデ	暗橙褐色～暗茶褐色	暗茶褐色	534
	21	A14	II	832	5類	底部～体部下端	(7.8)				ナデ	ナデ	暗橙褐色	暗橙褐色～明橙褐色	330

第48表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期（鉢）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	部位	調整			色調		実測図 No
						外面	内面	その他	外面	内面	
116	22	B20	III a	4058	体部	ていねいなナデ		ミガキ	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色	641

第49表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期（黒色坏）

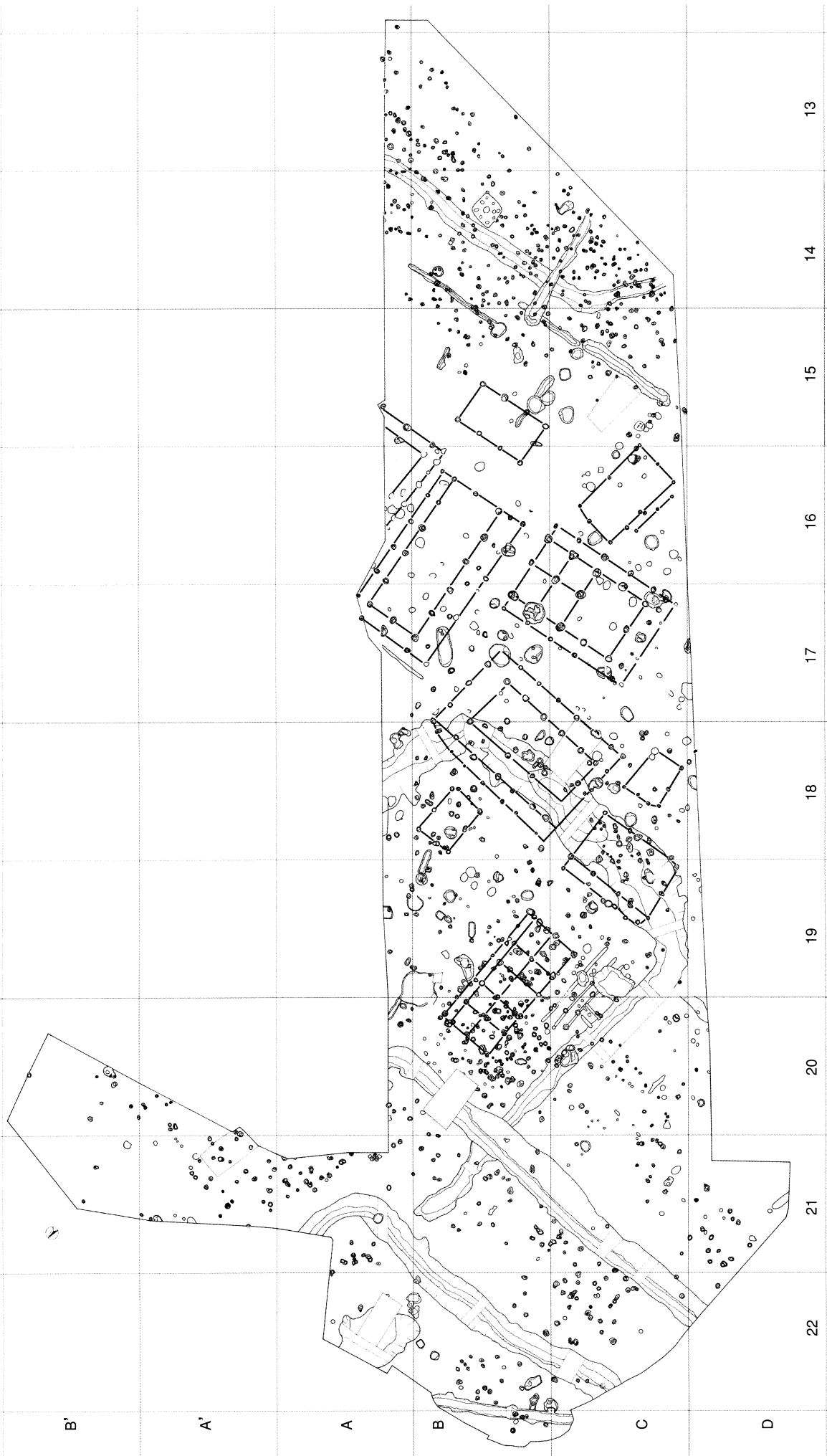
挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	底径 cm	調整		色調		実測図 No
								外面	内面	外面	内面	
116	23	C22	I b	3264	2類	底部～体部下	9.8	ナデ	ケズリ→ハケ	暗褐色	黒褐色～灰褐色	432

第50表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（黒色椀）

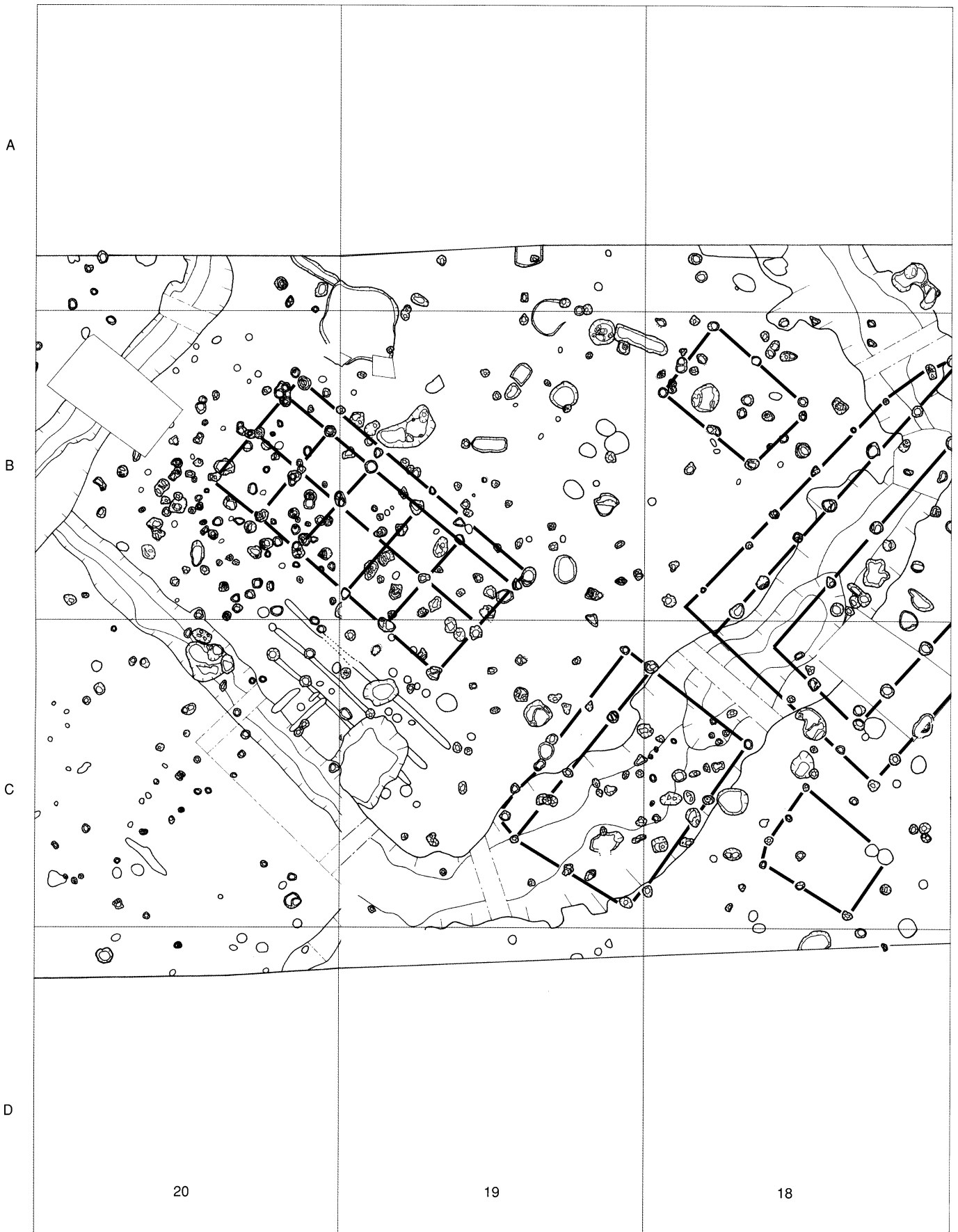
挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基部径 cm	調整			色調		実測図 No
										外面	内面	その他	外面	内面	
116	A21	II	1392	2・3類	I口縁部～体部下	(12.8)				ハケ→ナデ	ミガキ	暗茶褐色～暗黄褐色	黒褐色	453	
	A21	II	1394												
	A21	II	1393												
	C20	II	3606	I口縁部～底部	(11.8)					ハケ→ナデ	ミガキ	明黄褐色～暗茶褐色	黒褐色	450	
	C20	II	3606	I口縁部～体部下	14					ミガキ	ミガキ	赤褐色～暗褐色	明黄褐色～黒褐色	443	
	C21	I b	2118	I口縁部～体部						ていねいなナデ	ていねいなナデ	明黄白色	黒褐色～暗黄白色	447	
	C21	I b	3577	I口縁部～体部上端	(18.8)					ミガキ	ミガキ	暗褐色	暗褐色～黒褐色	446	
	D21	I b	2829	体部						回転ヘラナデ→ナデ	ナデ	茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	440	
	C20	II	49	2類	脚～体部下		(6.1)			ナデ	ナデ	明橙褐色	黒褐色～明黄褐色	430	
	A14	II	-	1類	底部		(7.6)			ナデ	ナデ	明黄白色	黒褐色	438	
	B21	I b	3175	3類	底部～体部下		(5.6)			ハケ→ナデ	ミガキ	黄白色	黒褐色	433	
	T13	II	93	2類	底部～体部下端		(6)			ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	434	
	A13	II	1780	5類	底部～体部下		(5.2)			ハケ→ナデ	ミガキ	明黄褐色	黒褐色	435	
	B14	II	844	3類	底部～体部下端		(8.8)			ハケ→ナデ	ナデ	明黄褐色	黒褐色～明黄褐色	431	

第51表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器（甕）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	調整			色調		実測図 No	
								外面	内面	その他	外面	内面		
117	36	B14	III a	1069		I口縁部～肩部	(15.1)	I口縁部：ハケ→ナデ	肩部：格子目タタキ	I口縁部：ハケ→ナデ	肩部：同心円タタキオサエ			828
	37	B14	III a	1650		胴部下半		平行タタキ（異方向）		平行タタキオサエ（異方向）		暗橙褐色	灰褐色	502
	38	C21	I b	3058		肩部		平行タタキ（横方向）		同心円タタキ		茶褐色～暗黄褐色	暗紫褐色	487



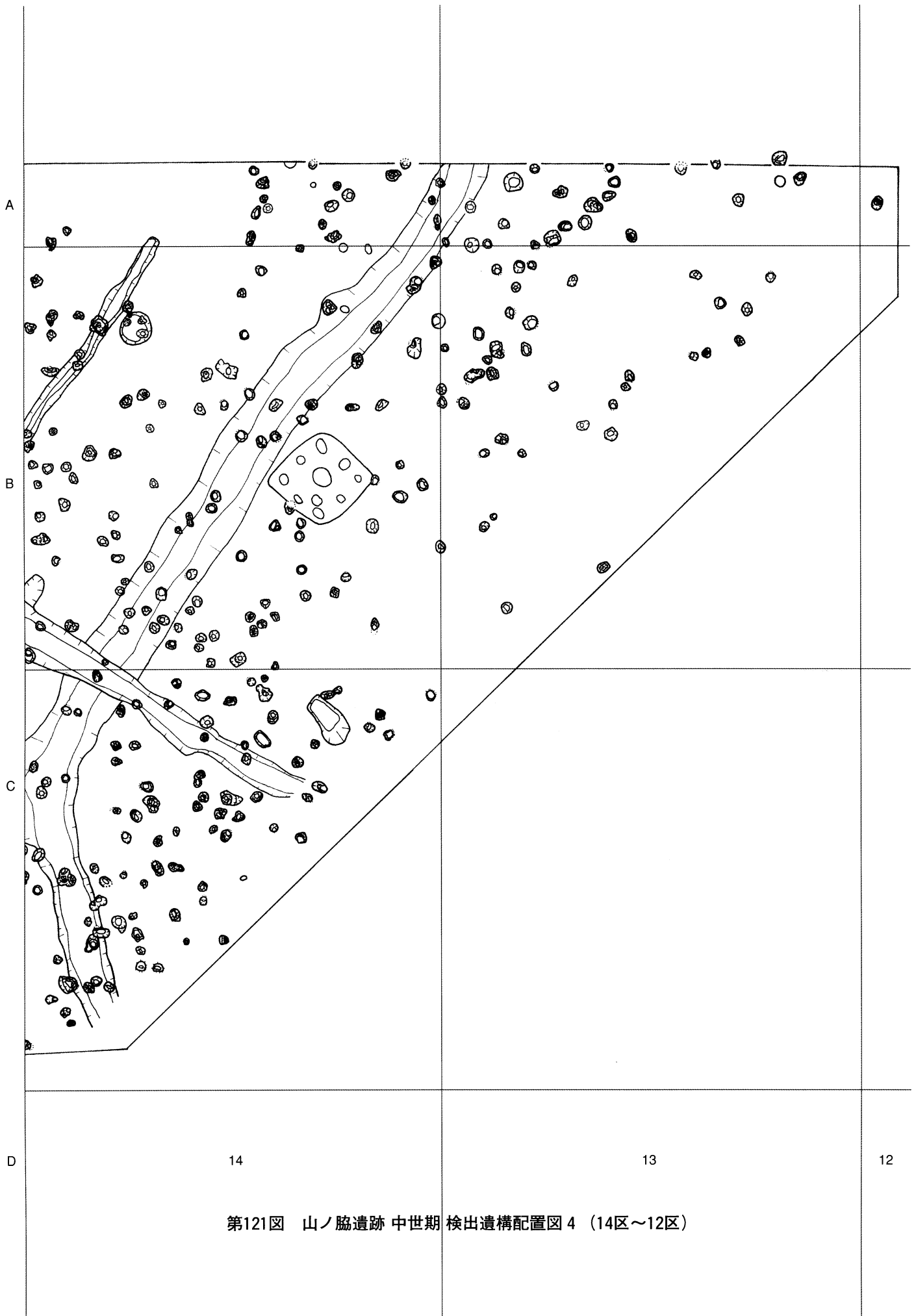
第118図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 1 (全体図)



第119図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図2 (20区~18区)



第120図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図3 (17区~15区)



第121図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図 4 (14区~12区)

第4節 中世の調査

山ノ脇遺跡における中世の時期における調査は、当該期の遺物がⅡ層およびⅢ a層を中心にⅢ b層でも出土していることから、これらの層でみつかった遺構・遺物を対象に行われた。特に遺構の検出面は、Ⅲ b層上面であることが多かった。また遺構床着で出土した遺物はほとんどなく、埋土中から出土した遺物の所属時期は多岐にわたる状況であった。そのため遺構の形態から所属時期の判断を行った。

1 検出遺構

中世期の遺構では、10棟の掘立柱建物跡と5条の溝状遺構と1条の方形区画溝のほか、数多くのピットや土坑などが検出された。

(1) 掘立柱建物跡および溝状遺構

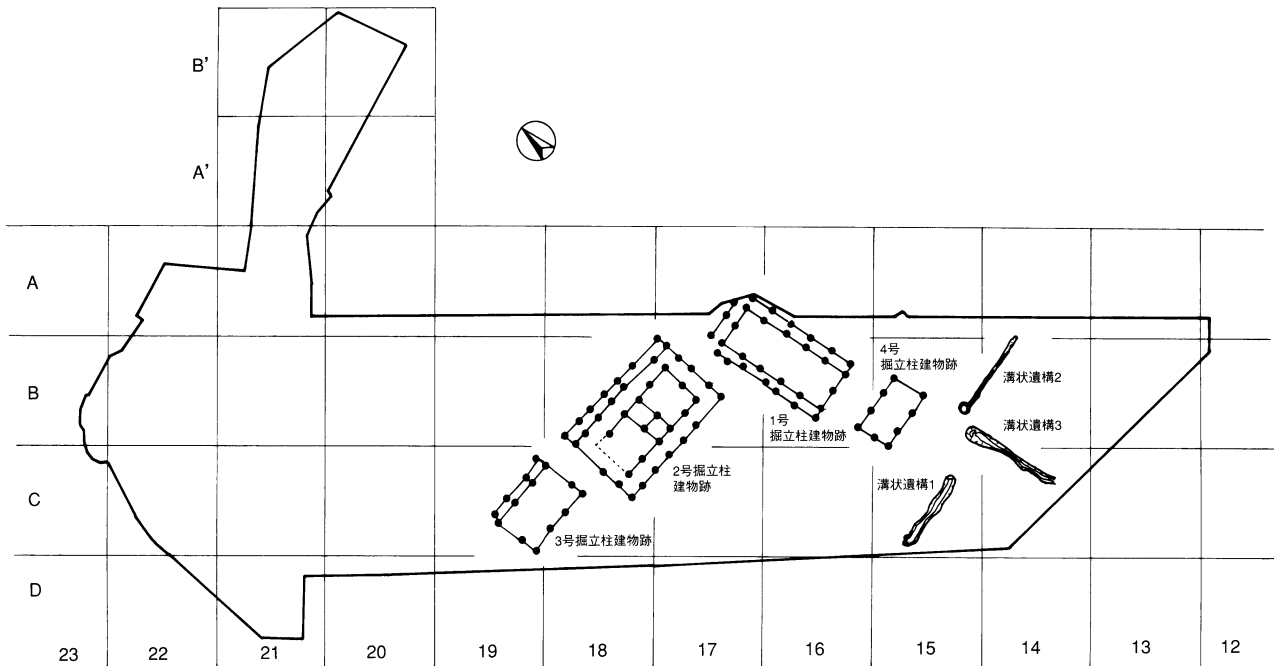
これらの掘立柱建物跡および溝状遺構は、その方向性から3時期に分かれると判断した。

ア 第I期(第122回)

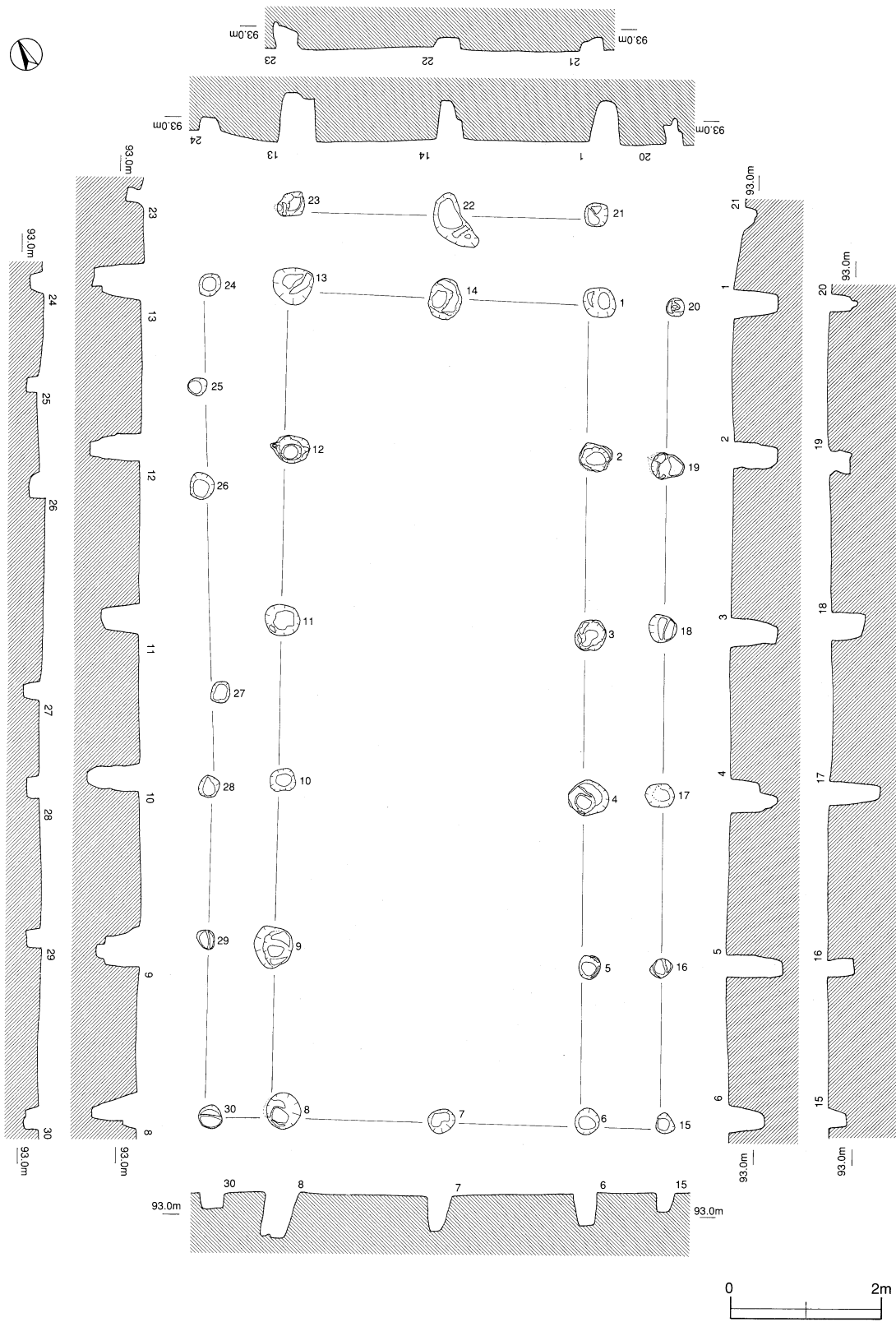
この時期の遺構は、4棟の掘立柱建物跡と3条の溝状遺構とから構成される。掘立柱建物跡は、上屋に下屋と庇が付く建物が1棟と、上屋に下屋が巡る建物が1棟と、上屋に庇が付く建物が1棟と、上屋だけの建物が1棟とからなる。溝状遺構は、東西方向に走る遺構が2条と、南北方向に走る遺構が1条とからなる。

1号掘立柱建物跡(第123・124回)

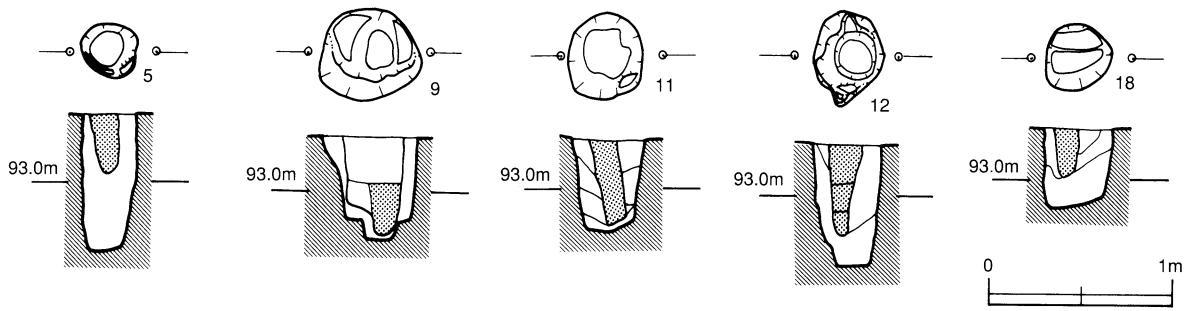
A・B-16・17区で検出された掘立柱建物跡で、長軸はN-20°-Eである。建物規模は2間×5間の上屋に、南側を除く3方向で幅約1mの下屋が巡り、上屋面積が43.39㎡を、全面積が146.9㎡を測る。1間間尺の平均値は桁行方向で2.18m、梁間方向で2.05mを測る。また柱穴規模の平均値は、上屋では上面での長径が46cm、深さが58cm、下屋では上面での長径が35cm、深さが28cmを測る。柱穴は東西対称に整然と並ぶが、下屋西側の26と27との間隔だけが広くになっているのが注目できる。



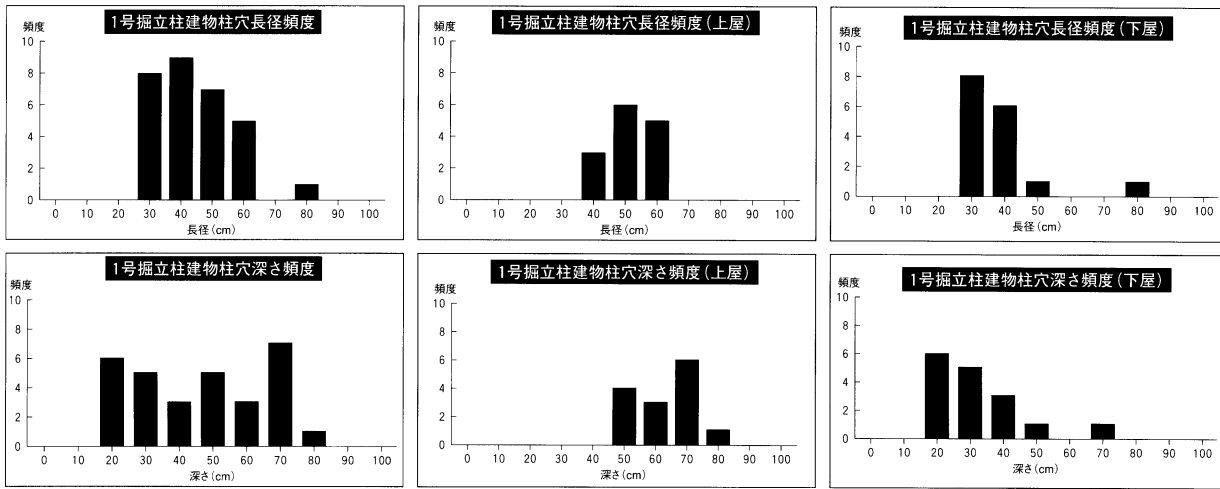
第122図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図5 (第I期遺構群)



第123図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図1 (1号掘立柱建物跡)



第124図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図2 (1号掘立柱建物跡柱痕跡実測図)



柱穴計測表

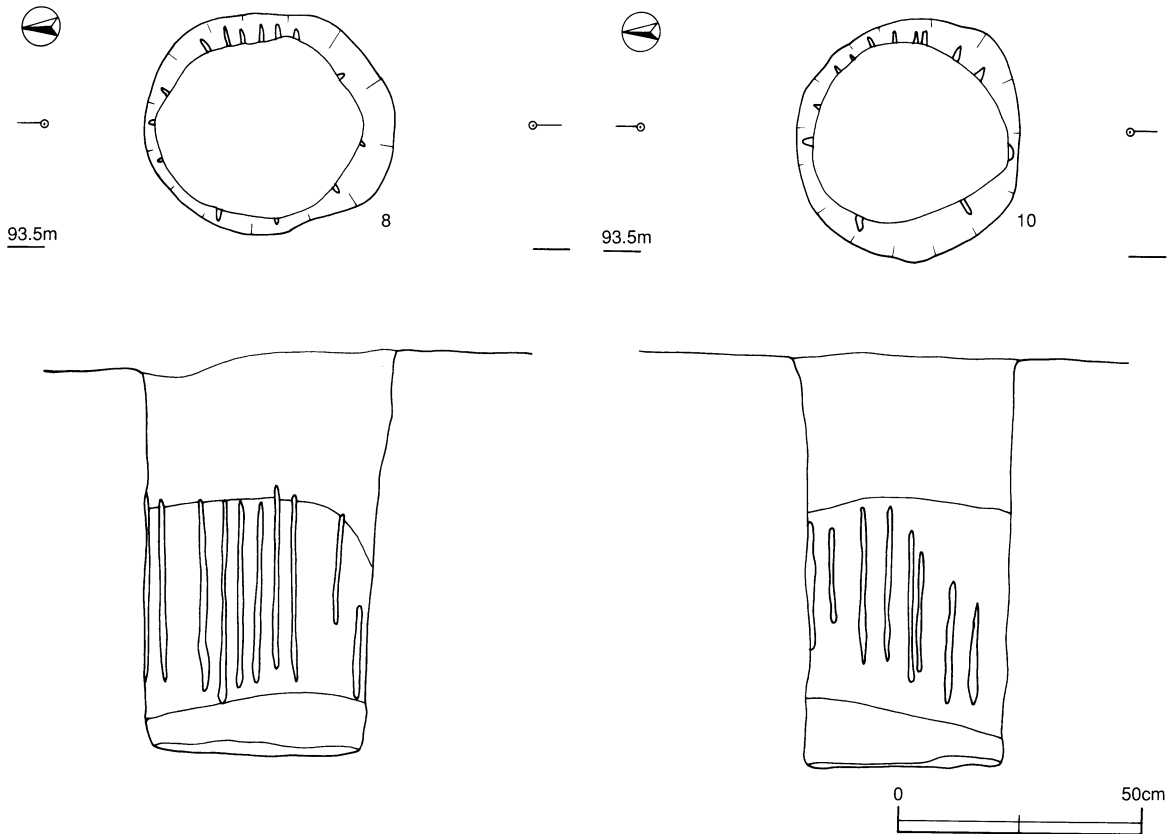
(単位：cm)

	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時pit番号
		長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
上屋	1	45	40	48				P6
	2	43	36	57				P5
	3	45	39	62				P4
	4	54	48	61				P3
	5	31	30	74	14		32	P2
	6	36	32	46				P1
	7	36	31	46				P83
	8	47	45	62				P84
	9	56	50	56	16		53	P85
	10	44	38	68				P86
	11	47	42	51	15		47	P87
	12	52	36	68	9		49	P88
	13	53	49	66				P89
	14	54	44	50				P90
下屋	15	28	25	26				P91
	16	29	22	36				P92
	17	38	32	67				P93
	18	36	36	44	12		26	P94
	19	44	35	28				P95
	20	24	23	37				P96
	21	32	30	17				P97
	22	80	46	16				P98
	23	38	31	34				P99
	24	30	30	18				P153
	25	26	24	16				P154
	26	36	32	22				P155
	27	28	26	21				P156
	28	30	28	16				P157
	29	26	24	20				P158
	30	32	32	22				P159

柱間心心距離計測表

(柱間単位：cm)

	柱穴番号	柱間		柱穴番号	柱間	
						上屋
2~3	226	16~17	224			
3~4	216	17~18	220			
4~5	220	18~19	212			
5~6	204	19~20	212			
1~6	1074	15~20	1076			
8~9	22	24~25	136			
梁間方向	9~10	224	25~26	132		
	10~11	212	26~27	272		
	11~12	22	27~28	124		
	12~13	228	28~29	200		
	8~13	1104	29~30	240		
	6~7	192	24~30	1104		
	7~8	212	21~22	188		
下屋	6~8	404	梁間方向	22~23	204	
	13~14	200		21~23	392	
	14~1	216				
	13~1	416				



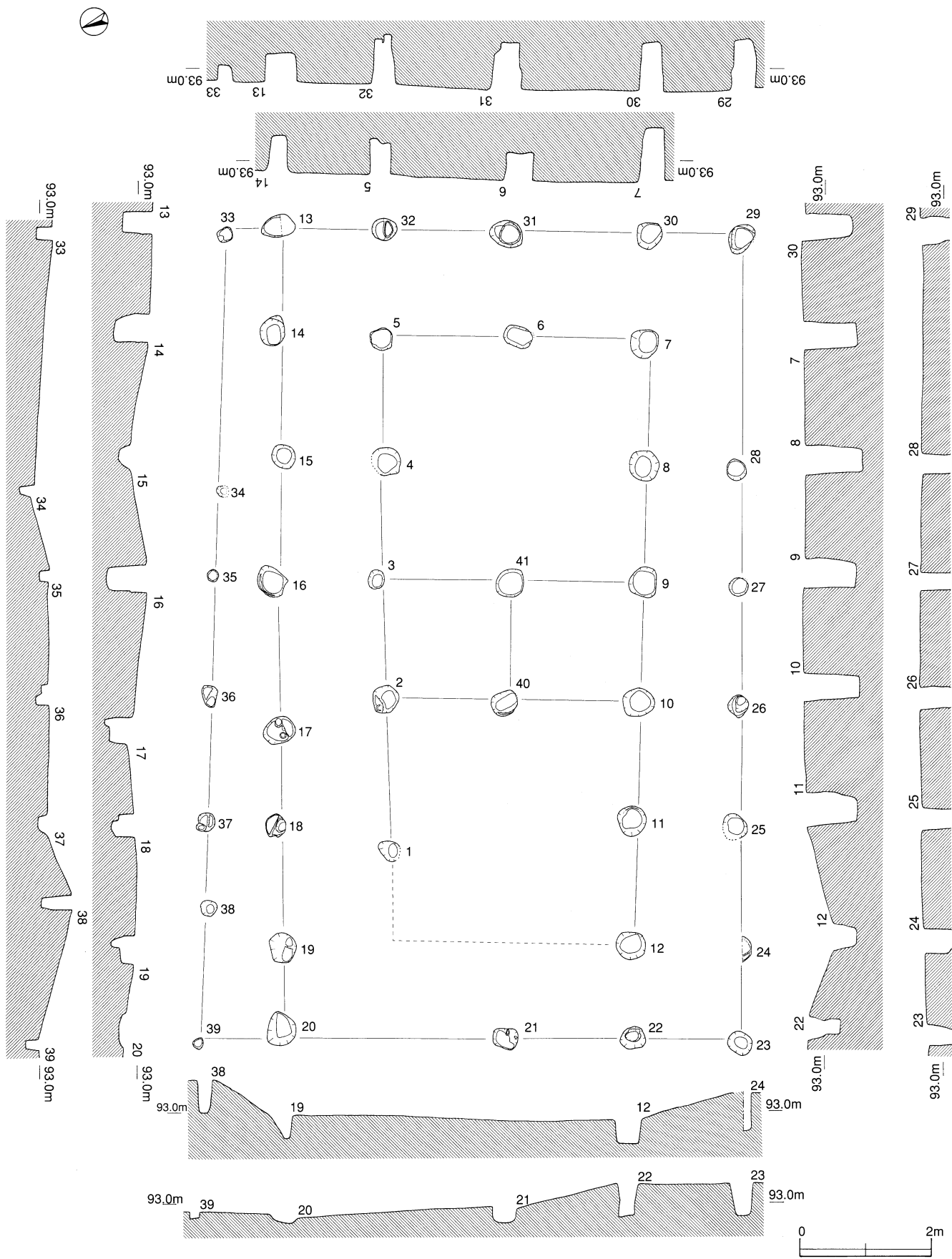
第125図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図3 (2号掘立柱建物跡柱穴工具痕跡実測図)

2号掘立柱建物跡 (第125・126図)

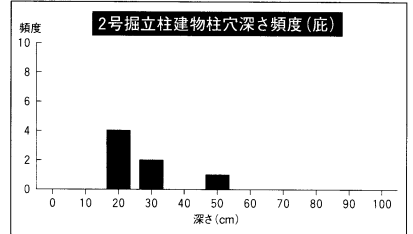
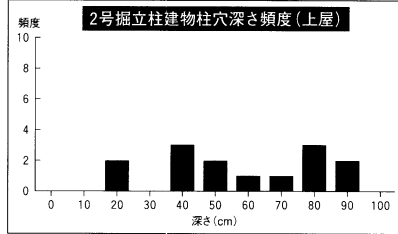
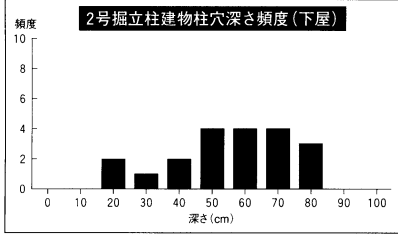
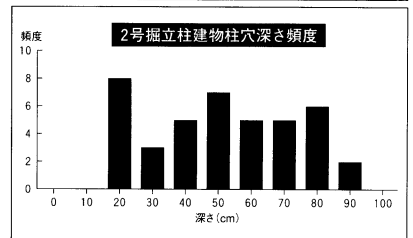
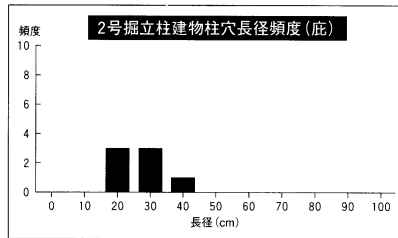
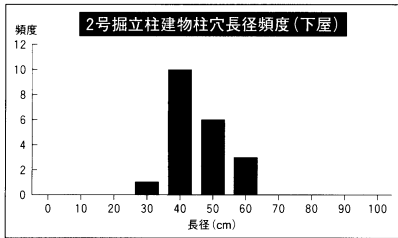
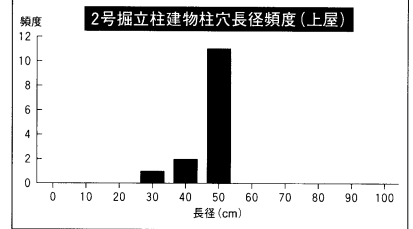
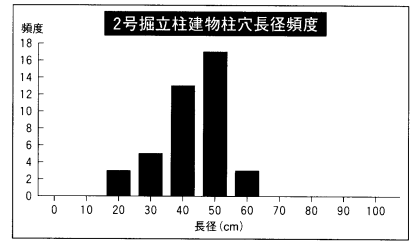
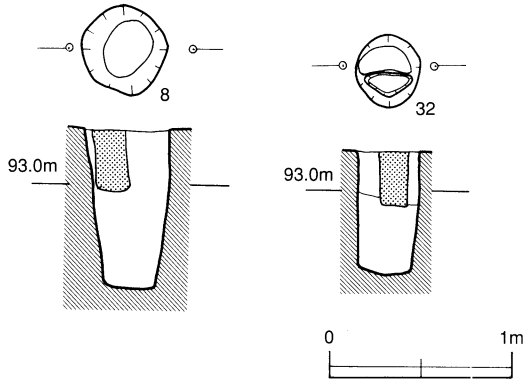
B・C-17・18区で検出された掘立柱建物跡で、長軸はN-77°-Eである。建物規模は2間×5間の上屋に、4方向で幅約1.5m～1.7mの下屋が巡り、上屋面積が37.01㎡を、上屋と下屋とを合わせた面積が84.08㎡を測る。上屋および下屋における1間間尺の平均値は桁行方向で1.88m、梁間方向で2.02mを測る。下屋の幅は、東・西・南側では約1.5mとなるが、北側では約1.7mあり、僅かに下屋の幅が北側で広がっている。さらに北側には約1mの幅で庇が付いている。柱穴規模の平均値は、上屋では上面での長径が42cm、深さが54cm、下屋では上面での長径が42cm、深さが52cmを測る。庇では上面での長径が24cm、深さが23cmを測る。

上屋の建物規模が2間×5間と同じ規模の1号掘立柱建物跡と比べると2号掘立柱建物跡では次の諸特徴を指摘することができる。まず、1間間尺の平均値が梁間方向ではほぼ同じであるのに対して、桁行方向では約30cm短いこと。その結果、上屋面積が6㎡ほど狭い建物であること。次に、上屋中央に2本柱を備えること。さらに、上屋と下屋とでの柱穴規模が1号掘立柱建物跡では大きく異なったのに対して、2号掘立柱建物跡ではほぼ同じであること。これら3点はいずれも、建物の強度を増す要因となっている。また、柱穴は東西対称にほぼ整然と並ぶが、16と17との間隔が広がる。下屋西側に柱穴心距離が異なる部分があることは、1号掘立柱建物跡と共通である。

また、2号掘立柱建物跡では柱穴壁面に穴を掘る際の工具痕跡を検出した。ほぼ4cm前後の間隔で長さ約40cmにわたり、先端部が鋭角になる横断面三角形の切り込みが多数みつかった。



第126図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図4 (2号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図)



柱穴計測表

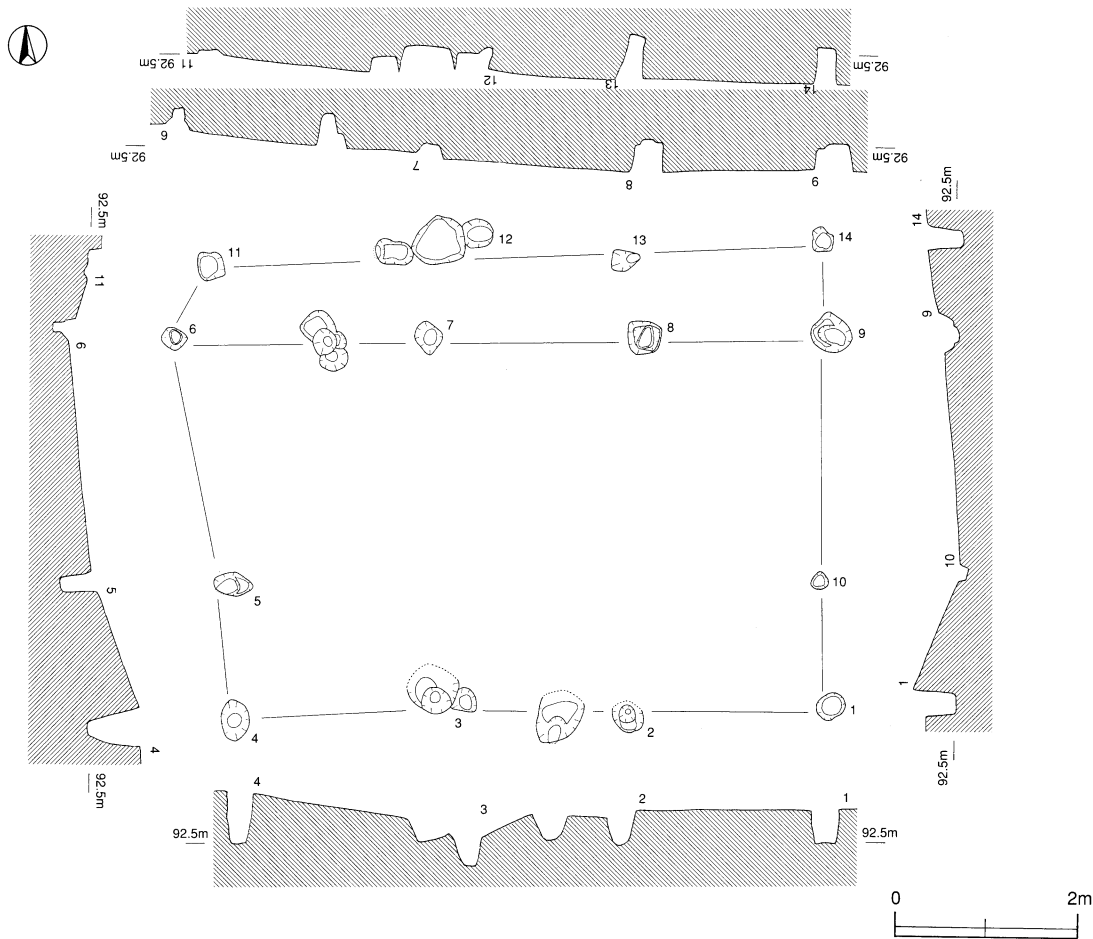
(単位：cm)

	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時 pit番号
		長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
上屋	1	35	29	20				P 68
	2	42	40	36				P 67
	3	24	23	20				P 249
	4	46	42	64				P 66
	5	34	34	54				P 65
	6	45	33	42				P 62
	7	44	42	80				P 57
	8	47	46	86	18		33	P 56
	9	48	44	80				P 55
	10	48	44	86				P 54
	11	46	44	76				P 53
	12	44	42	36				P 52
下屋	13	52	34	44				P 63
	14	48	38	52				P 61
	15	37	36	17				P 69
	16	48	46	62				P 515
	17	50	40	41				P 70
	18	36	32	36				P 71
	19	45	42	36				P 72
	20	54	46	12				P 73
	21	38	33	25				P 74
	22	38	33	50				P 82
	23	39	33	50				P 51
	24	38		57				P 44
	25	40	37	57				P 45
	26	32	30	60				P 46
	27	30	28	64				P 47
	28	33	29	70				P 48
	29	48	37	76				P 49
30	42	38	75	16		30	P 50	
31	52	42	70				P 58	
32	40	35	76				P 59	
33	25	22	24				P 60	
34	20	18	22				P 75	
35	18	17	15				P 76	
庇	36	34	24	20				P 77
	37	29	28	14				P 78
	38	24	24	48				P 79
	39	17	16	20				P 80
								P 81

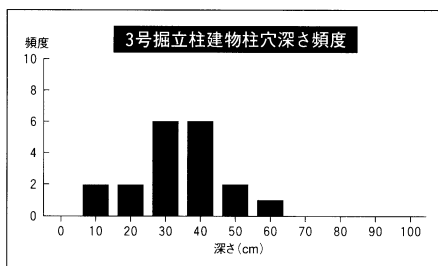
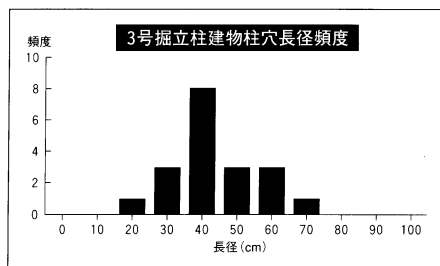
柱間心心距離計測表

(柱間単位：cm)

	柱穴番号	柱間	柱穴番号	柱間	
					柱穴番号
上屋	桁行方向	1~2	232	13~14	164
		2~3	180	14~15	184
		3~4	176	15~16	188
		4~5	188	16~17	228
		1~5	776	17~18	144
		7~8	192	18~19	192
		8~9	172	19~20	108
		9~10	180	13~20	1208
		10~11	180	23~24	144
		11~12	192	24~25	180
		7~12	916	25~26	192
		下屋	梁間方向	5~6	208
6~7	196			27~28	180
5~7	404			28~29	352
33~34	392			23~29	1220
34~35	128			20~21	336
桁行方向	35~36		192	21~22	196
	36~37		180	22~23	164
	37~38		132	20~23	696
	38~39		204	29~30	140
	33~39		1228	30~31	212
			31~32	184	
			32~13	176	
			29~13	712	



第127図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図5 (3号掘立柱建物跡)



柱穴計測表

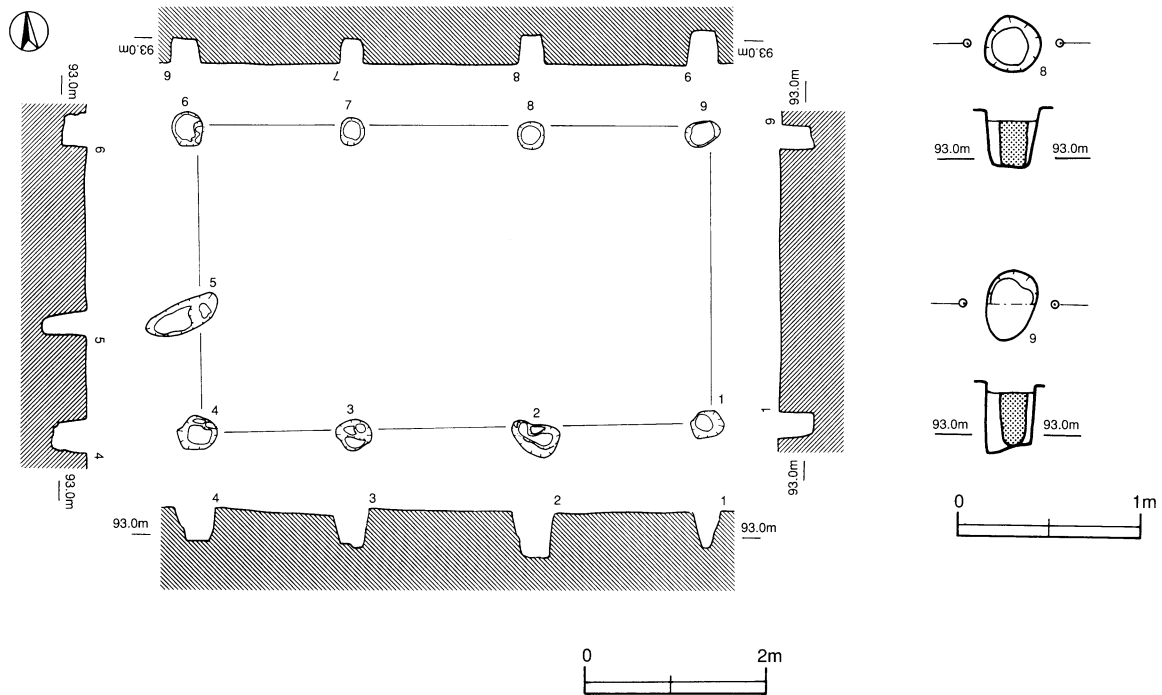
(単位：cm)

	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時pit番号
		長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
上屋	1	33	26	38				P43
	2	36	31	37				P42
	3	54	49	26				P39
	3.1	30	26	32				P40
	4	44	32	58				P38
	4.1	40	28	18				P287
	4.2	34	32	23				P285
	5	42	26	42				P172
	6	28	24	25				P164
	7	36	29	18				P162
庇	8	38	36	37				P161
	9	48	40	22				P160
	10	20	18	10				P165
	11	31	29	6				P289
	12	58	52	30				P286
	13	32	24	49				P284
	14	28	25	40				P283

柱間心距離計測表

(柱間単位：cm)

	柱穴番号	柱間		柱穴番号	柱間
上屋	3~4	256	庇	13~14	208
	1~4	654		11~14	672
	6~7	282			
	7~8	236			
	8~9	204			
	6~9	722			
	4~5	144			
	5~6	272			
	4~6	416			
	9~10	264			
上屋	10~1	136			
	9~1	400			



第128図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図6 (4号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図)

柱穴計測表

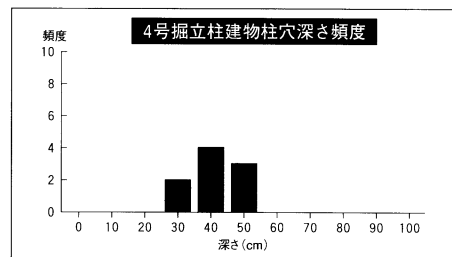
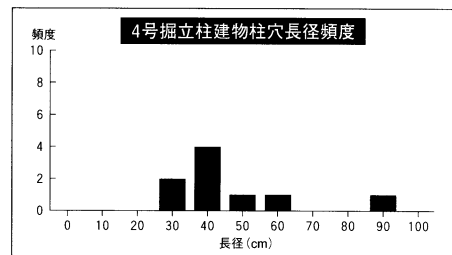
(単位: cm)

柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時pit番号
	長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
1	36	29	39				P10
2	54	36	50				P14
3	40	34	43				P15
4	44	37	38				P7
5	84	33	50				P8
6	37	34	28				P9
7	30	26	26				P13
8	30	30	32	15		25	P12
9	40	27	38	15		29	P11

柱間心距離計測表

(柱間単位: cm)

	柱穴番号	柱間
桁行方向	1-2	184
	2-3	196
	3-4	180
	1-4	560
	6-7	180
	7-8	196
	8-9	188
梁間方向	6-9	564
	4-5	124
	5-6	208
	4-6	332
	9-1	292

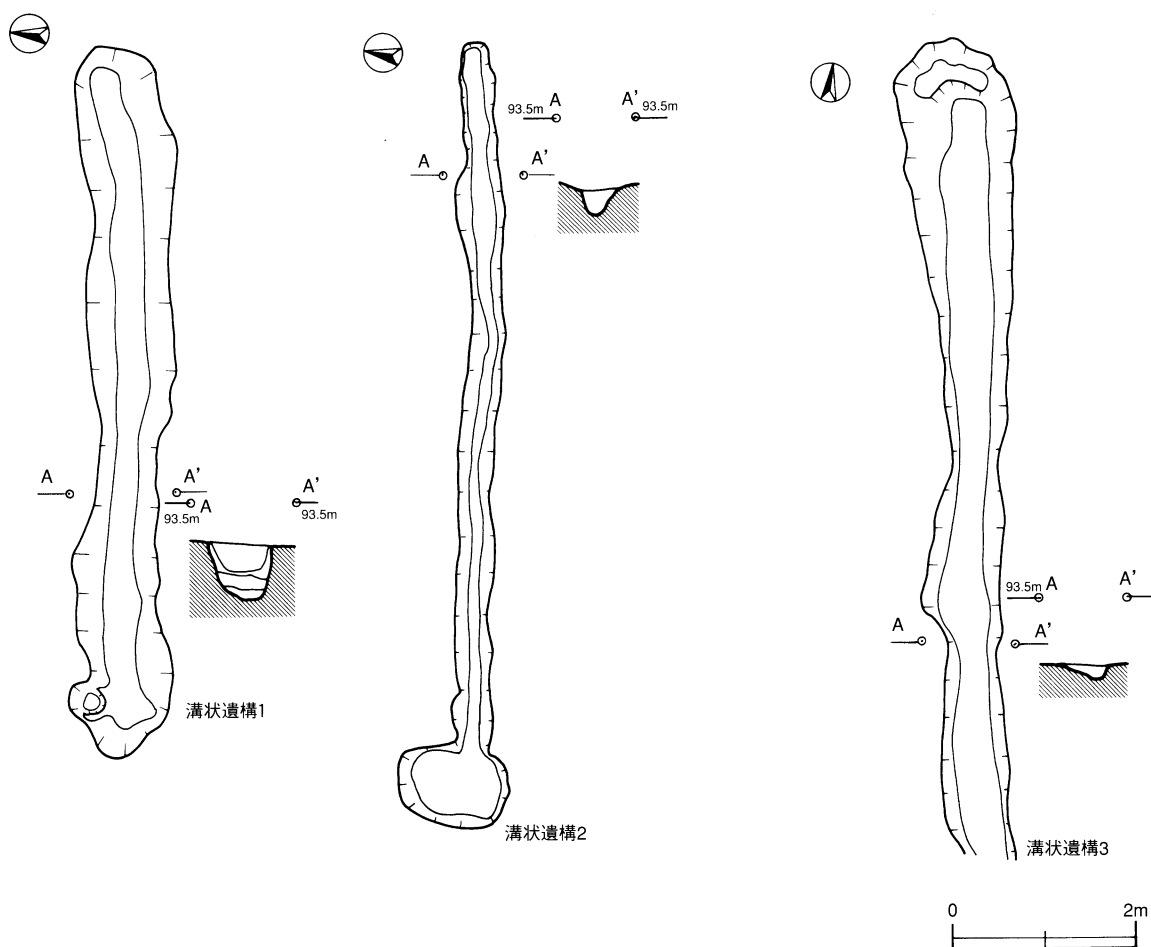


3号掘立柱建物跡 (第127図)

C-18・19区で検出された掘立柱建物跡で、長軸はN-84°-Eである。建物規模は2間×3間の上屋に北側で庇が付く。上屋面積が26.2㎡を測る。1間間尺の平均値は桁行方向で2.29m、梁間方向で2.04mを測る。また柱穴規模の平均値は、上屋では上面長径が37cm、深さが30cm、庇では上面長径が37cm、深さが32cmを測る。

4号掘立柱建物跡 (第128図)

B-15・16区で検出された掘立柱建物跡で、長軸はN-85°-E。建物規模は2間×3間の上屋だけで、上屋面積は18.6㎡を測る。また柱穴規模の平均値は、上面長径が44cm、深さが38cmである。



第129図 山ノ脇遺跡 中世期 第I期遺構群遺構実測図7 (溝状遺構1・2・3)

溝状遺構 (第129図)

溝状遺構は、東西方向に走る遺構が2条 (溝状遺構1, 2) と南北方向に走る遺構が1条 (溝状遺構3) からなる。溝状遺構2と溝状遺構3とは、交わらないものの、ほぼ直角に設置されている。溝状遺構3と溝状遺構1とは、約7.5m離れた位置でほぼ直角に設置されている。これらの溝状遺構の所属時期は、埋土状況と諸遺構配置とから、いずれも中世の時期と判断した。

溝状遺構1

山ノ脇遺跡C-15区Ⅲb層面で検出され、東西方向に走る、区域内で完結する遺構である。遺構規模は、検出長780cm, 最大幅100cm, 検出面からの深さ64cmを測る。埋土は、Ⅲa層に相当する土の上に、Ⅲb層に相当する土を多く含む土が堆積するという複雑なレンズ状堆積を呈している。この堆積状況は、この溝状遺構が埋まる過程において、作り直しが行われて使用され続けていたことを示している。

溝状遺構2

山ノ脇遺跡B・A-15・14区Ⅲb層上面で検出され、東西方向に走る、区域内で完結する遺構である。遺構規模は、検出長856cm, 最大幅40cm, 検出面からの深さ36cmを測る。埋土はⅢa層相当土。遺構床面には数多くの小ピットが検出された。

溝状遺構 3

山ノ脇遺跡 B・C-15・14区Ⅲ b層上面で検出され、南北方向に走る、区域内で完結する遺構である。遺構規模は、検出長896cm、最大幅120cm、検出面からの深さ20cmを測る。埋土は下層にⅢ a層相当土の堆積が、上層にⅡ層相当土の堆積がみられる。

イ 第Ⅱ期 (第130図)

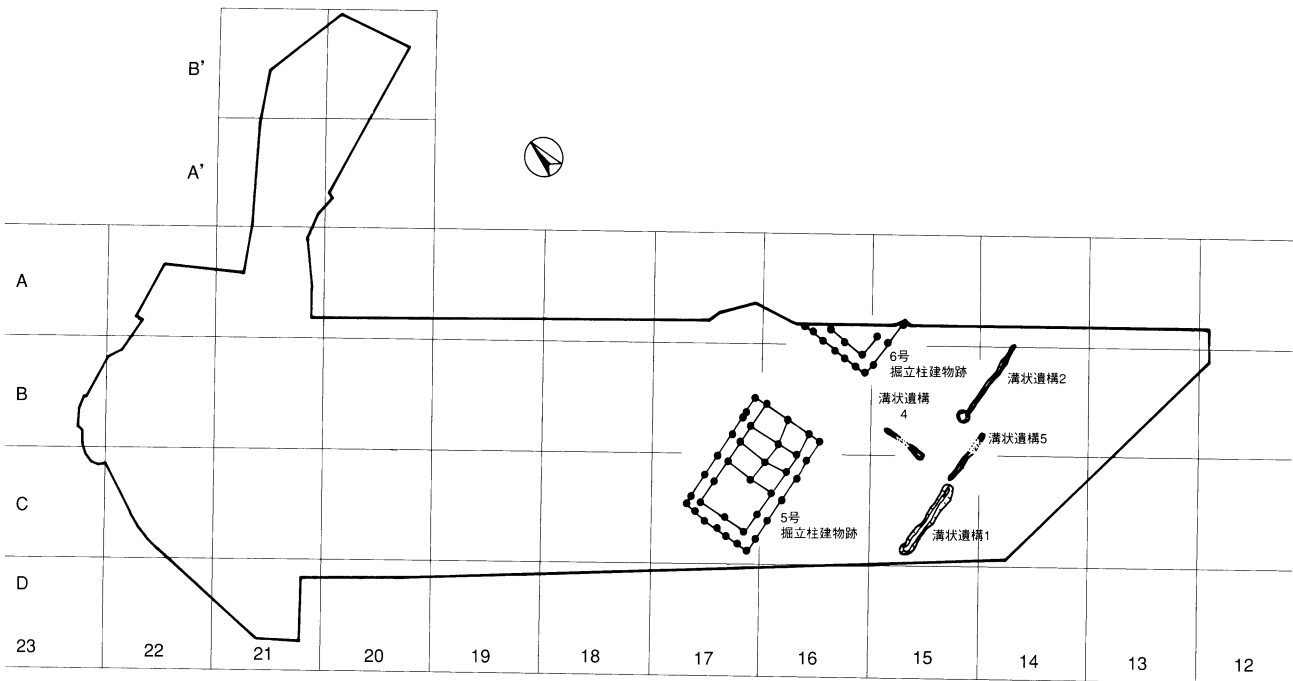
この時期の遺構は、2棟の掘立柱建物跡と4条の溝状遺構とから構成される。掘立柱建物跡は、上屋に下屋が巡る建物が1棟と、半ば以上が発掘区画範囲外に延びてしまい全体像が不明である建物とからなる。溝状遺構は、東西方向に走る遺構が3条と、南北方向に走る遺構が1条とからなる。そのうち、溝状遺構1と溝状遺構2とは第1期と兼ねると考える遺構である。

5号掘立柱建物跡 (第131図)

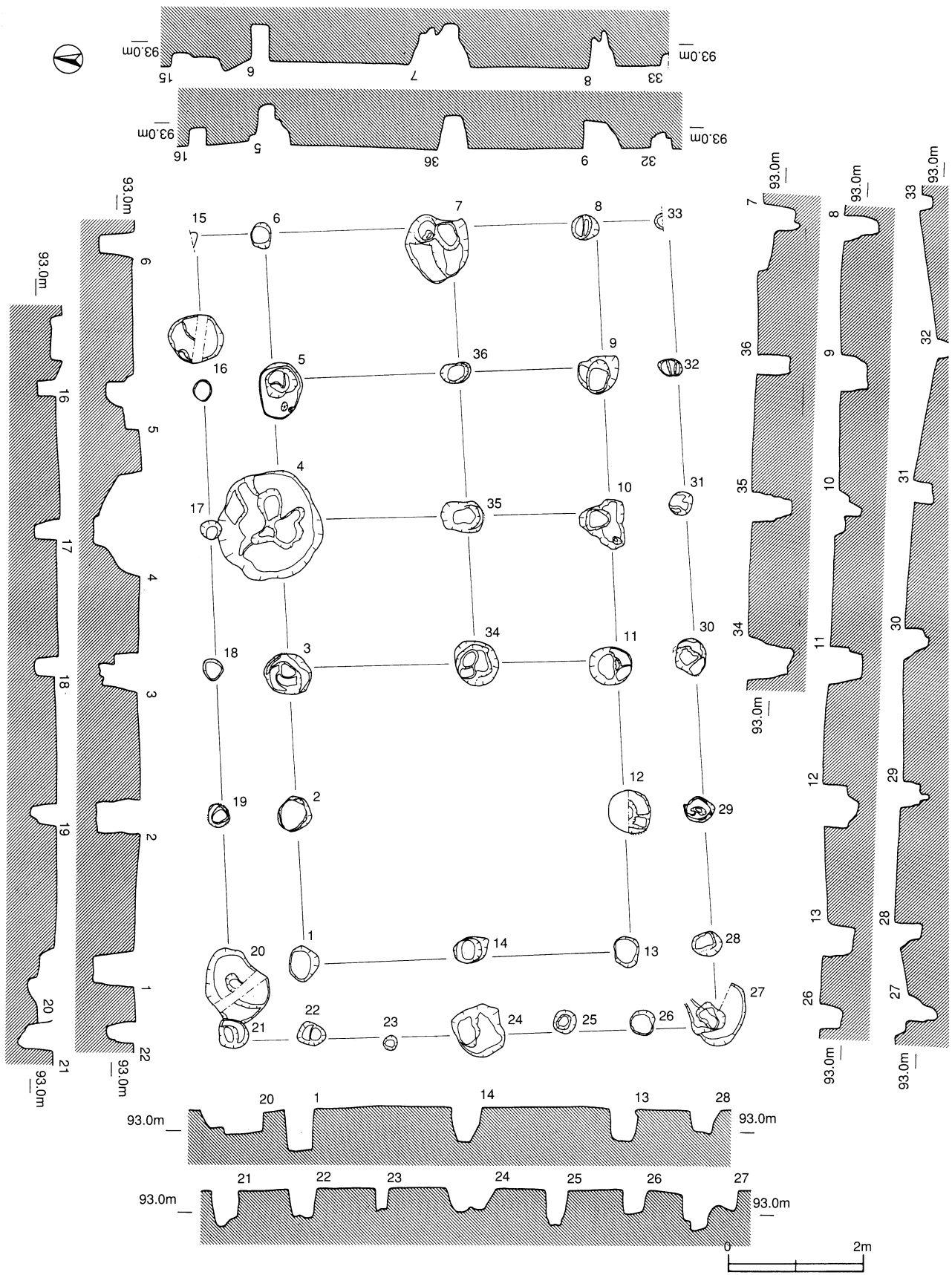
A・B-15・16区で検出され、長軸はN-84°-Eである。建物規模は2間×5間の上屋に、東側を除く3方向で幅約1.2mの下屋が巡り、上屋面積が50.64㎡を、全面積が81.8㎡を測る。1間間尺の平均値は桁行方向で2.13m、梁間方向で2.39m。また柱穴規模の平均値は、上屋では上面長径が66cm、深さが55cm、下屋では上面長径が47cm、深さが37cmを測る。柱穴は東西対称に整然と並ぶ。

6号掘立柱建物跡 (第132図)

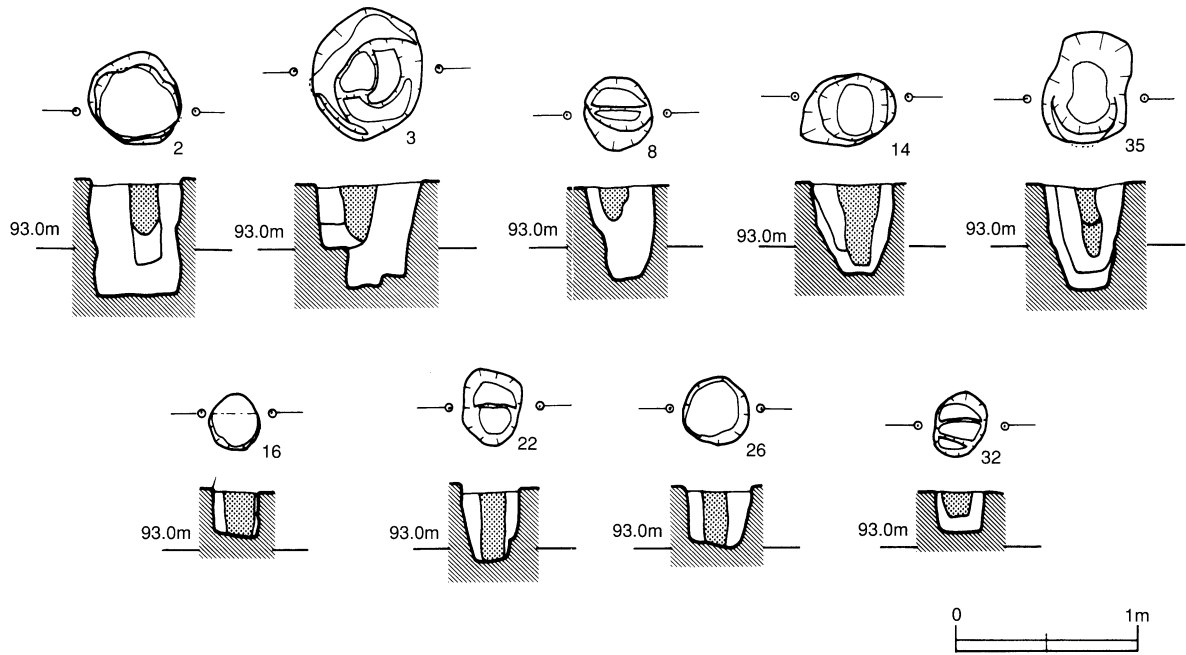
A・B-15・16区で検出された掘立柱建物跡で、長軸はN-13°-Eである。建物の北側半分以上が発掘調査区域外に延びるため、上屋面積などの全体像は不明である。1間間尺の平均値は桁行方向で2.2m、梁間方向で1.9mを測る。また柱穴規模の平均値は、上屋では上面での長径が56cm、深さが40cm、下屋では上面での長径が46cm、深さが49cmを測る。



第130図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図6 (第Ⅱ期遺構群)



第131図 山ノ脇遺跡 中世期 第Ⅱ期遺構群遺構実測図1 (5号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図)



柱穴計測表

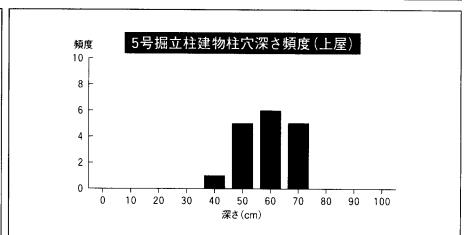
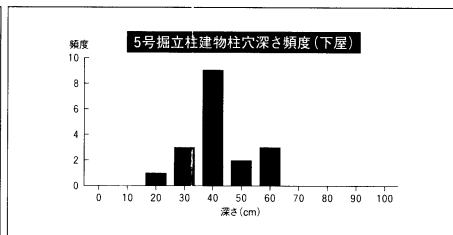
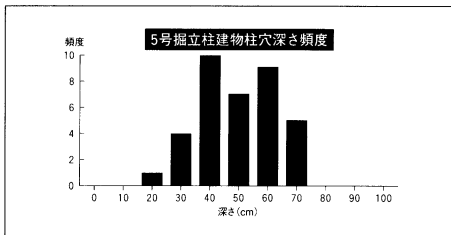
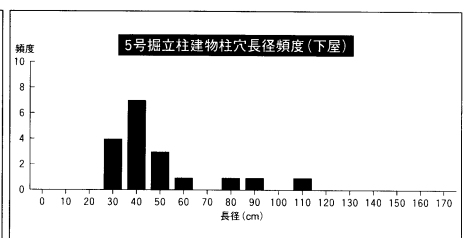
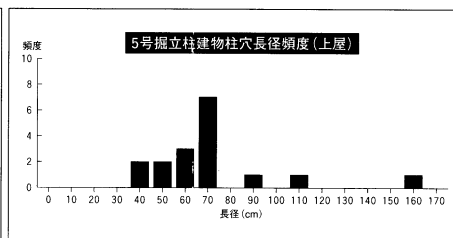
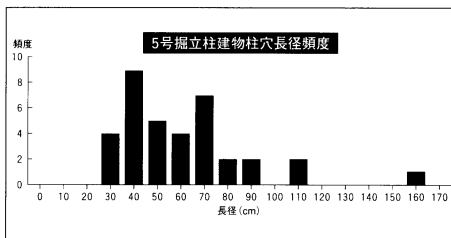
(単位：cm)

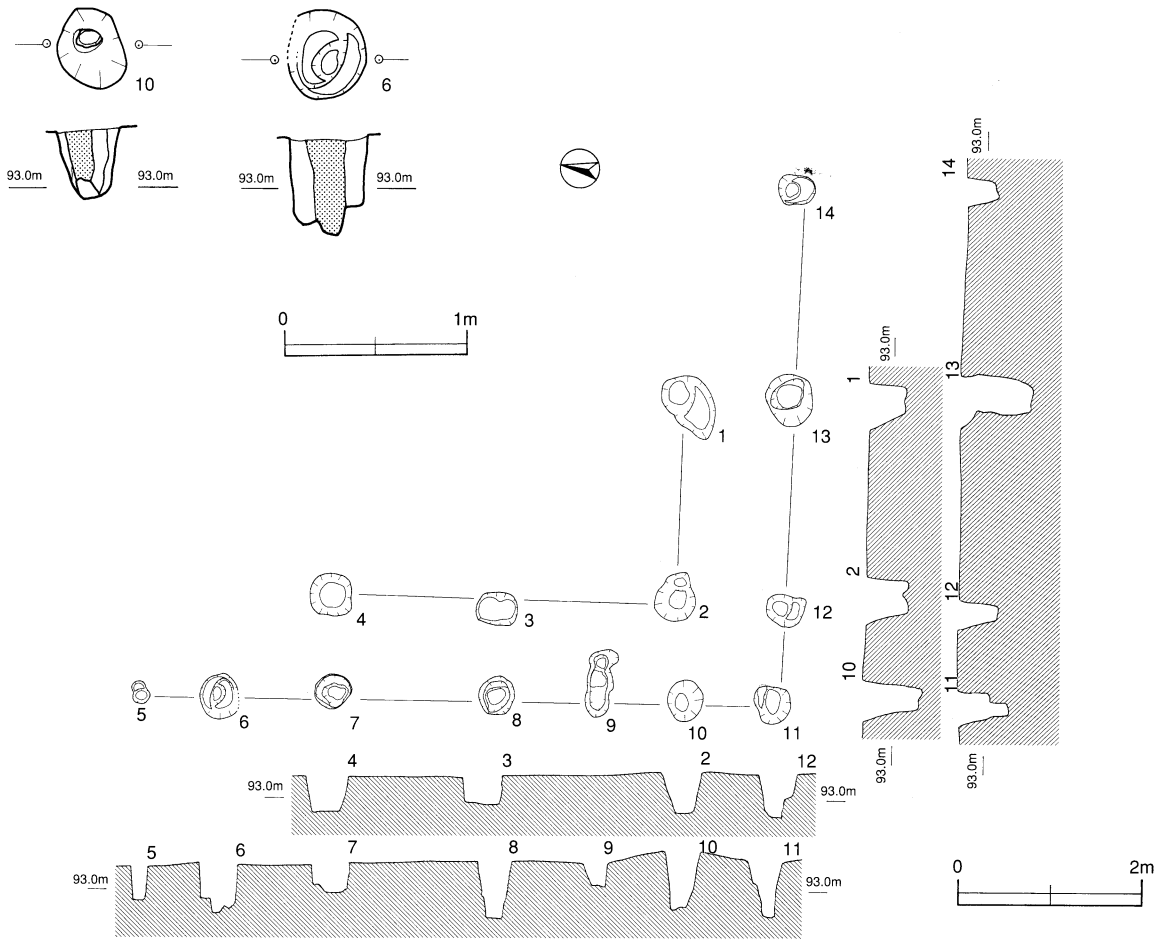
	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡		調査時pit番号
		長径	短径	深さ	長径	短径	
上屋	1	52	45	62			P120
	2	52	51	64			P119
	3	70	59	58			P118
	4	160	156	70			P117
	5	81	64	59			P116
	6	39	29	52			P115
	7	102	94	62			P111
	8	39	36	54			P110
	9	63	53	41			P109
	10	70	70	36			P108
	11	63	56	48			P107
	12	64	62	54			P106
	13	45	37	46			P105
	14	54	38	50	15	44	P136
下屋	33	68	62	66	16	25	P114
	34	62	46	58			P113
	35	46	30	50			P112
	15	32	28	28			P127
	16	30	27	38			P126
	17	32	30	36			P125
	18	34	32	40	13	37	P124
	19	102	98	40			P123
	20	44	42	52			P122
	21	40	32	44			P129
	22	23	20	32	14	30	P130
	23	78	78	34			P131
	24	24	24	51			P132
	25	38	37	36			P133
	26	90	78	58			P134
	27	44	36	40			P135
	28	46	38	41			P104
	29	54	46	36			P103
30	38	32	30			P137	
31	35	26	24			P102	
32	23		18			P101	
	80	70	24			P128	

柱間心距離計測表

(柱間単位：cm)

	柱穴番号	柱間		柱穴番号	柱間
2~3	212	16~17	200		
3~4	208	17~18	212		
4~5	216	18~19	246		
5~6	212	19~20	76		
1~6	1064	15~20	942		
8~9	224	26~27	112		
9~10	204	27~28	192		
10~11	216	28~29	224		
11~12	216	29~30	228		
12~13	204	30~31	196		
8~13	1064	31~32	212		
33~34	208	26~32	1164		
34~35	208	20~21	128		
梁間方向	33~35	416	梁間方向	21~22	112
	6~7	248		22~23	140
	7~8	228		23~24	112
	6~8	476		24~25	112
	13~14	232		25~26	100
	14~1	248		20~26	704
	13~1	480			





第132図 山ノ脇遺跡 中期第Ⅱ期遺構群遺構実測図2 (6号掘立柱建物跡および柱痕跡実測図)

柱穴計測表

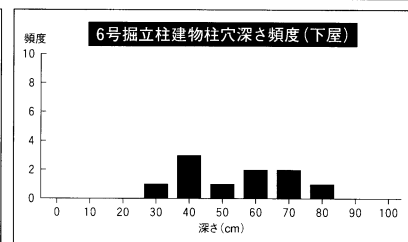
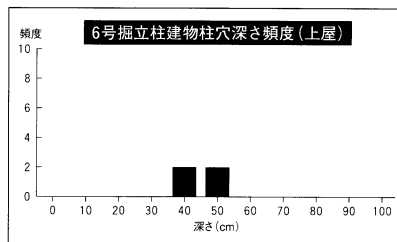
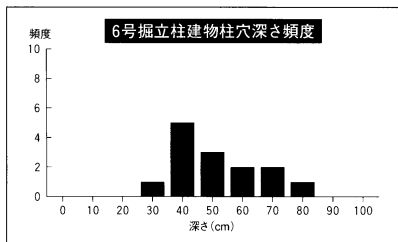
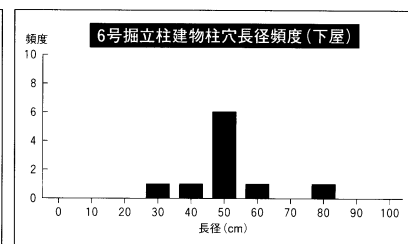
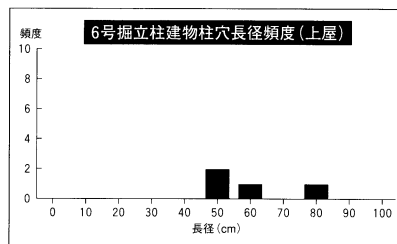
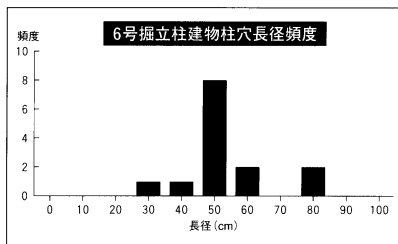
(単位: cm)

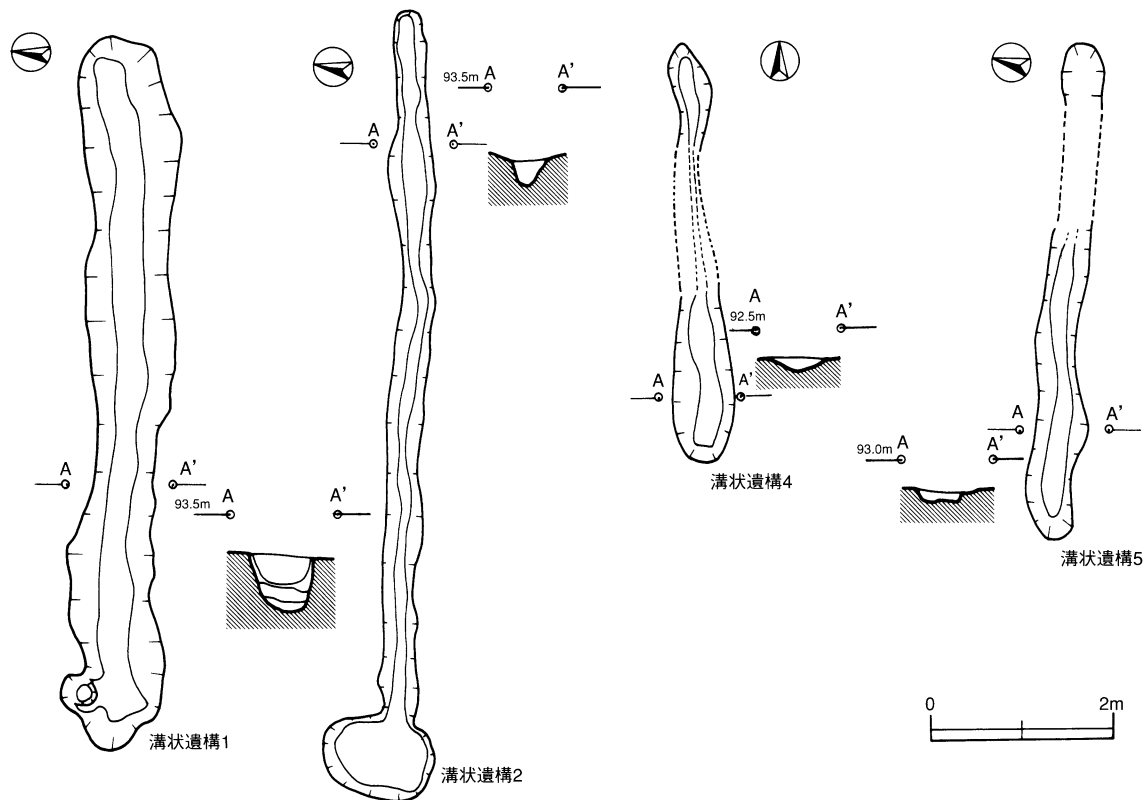
	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時pit番号
		長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
上屋	1	76	49	41				P152
	2	54	45	46				P148
	3	46	36	32				P149
	4	47	46	39				P150
下屋	5	25	18	37				P144
	6	48	43	54	17		51	P143
	7	40	38	32				P142
	8	43	40	62				P141
	9	75	31	25				P140
	10	45	39	65				P139
	11	45	40	55	13		25	P138
	12	41	36	44				P145
	13	57	50	77				P146
	14	41	34	34				P147

柱間心距離計測表

(柱間単位: cm)

	桁行方向	柱穴番号	柱間		桁行方向	柱穴番号	柱間
2~3	200	12~13	228				
3~4	180	13~14	220				
2~4	380	11~14	548				
下屋	梁間方向	5~6	84	6~7	132		
		7~8	176	8~9	112		
		9~10	92	10~11	100		
		5~11	696				





第133図 山ノ脇遺跡 中世期 第Ⅱ期遺構群遺構実測図3 (溝状遺構1・2・4・5)

溝状遺構 (第133図)

溝状遺構は、東西方向に走る遺構が3条（溝状遺構1, 2, 5）と南北方向に走る遺構が1条（溝状遺構4）からなる。溝状遺構2と溝状遺構3とは、交わらないものの、ほぼ直角に設置されている。溝状遺構3と溝状遺構1とは、約7.5m離れた位置でほぼ直角に設置されている。

溝状遺構1

山ノ脇遺跡C-15区Ⅲb層面で検出された遺構で、その埋土状況から作り直しが考えられ、第1期から続けて使用されていたと判断した。

溝状遺構2

山ノ脇遺跡B・A-15・14区Ⅲb層上面で検出された遺構で、溝状遺構1と同様に、第1期から続けて使用されていたと判断した。遺構床面には数多くの小ピットが検出された。

溝状遺構4

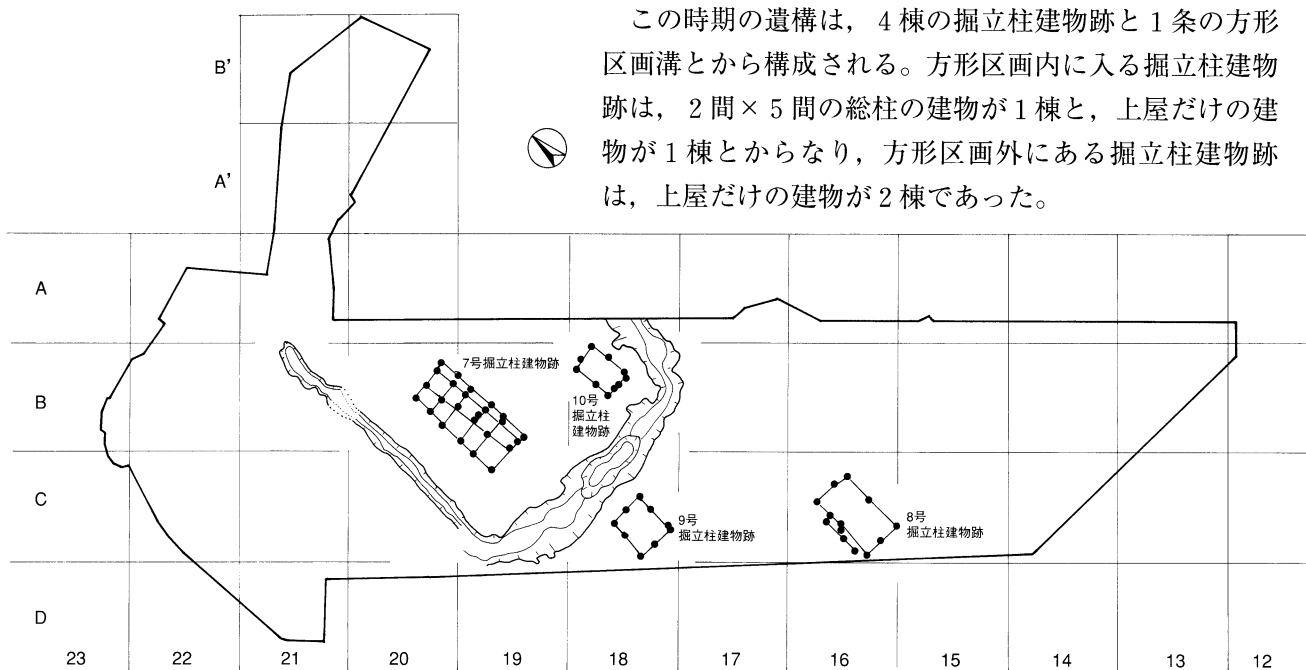
山ノ脇遺跡B・C-15区Ⅲb層面で検出された遺構で、南北方向に走る、区域内で完結する遺構である。遺構規模は、検出長450cm、最大幅68cm、検出面からの深さ16cmを測る。埋土は下層にⅢa層相当土の堆積が、上層にⅡ層相当土の堆積がみられる。

溝状遺構5

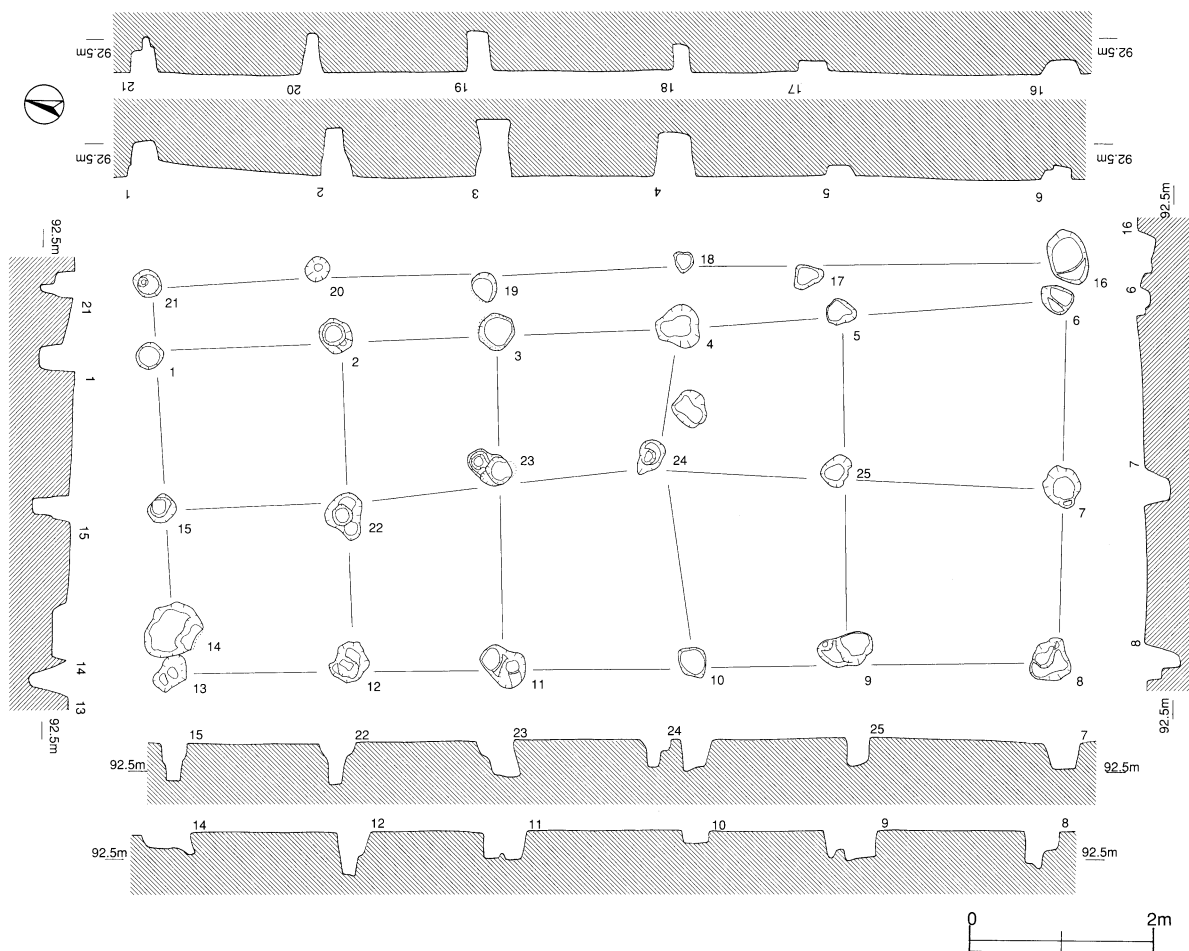
山ノ脇遺跡B・C-14・15区Ⅲb層面で検出された遺構で、東西方向に走る、区域内で完結する遺構である。溝状遺構1と溝状遺構2とを結ぶように設置されて検出された。遺構規模は、検出長540cm、最大幅60cm、検出面からの深さ12cmを測る。埋土は、Ⅲa層に相当する土が堆積していた。

ウ 第Ⅲ期 (第134図)

この時期の遺構は、4棟の掘立柱建物跡と1条の方形区画溝とから構成される。方形区画内に入る掘立柱建物跡は、2間×5間の総柱の建物が1棟と、上屋だけの建物が1棟とからなり、方形区画外にある掘立柱建物跡は、上屋だけの建物が2棟であった。



第134図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図7 (第Ⅲ期遺構群)



第135図 山ノ脇遺跡 中世期 第Ⅲ期遺構群遺構実測図1 (7号掘立柱建物跡)

柱穴計測表

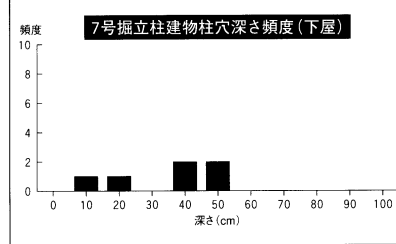
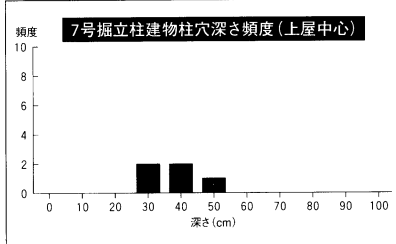
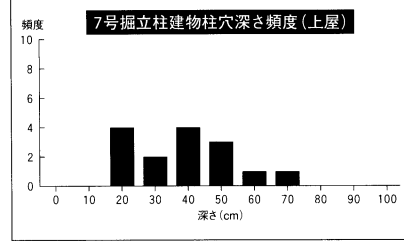
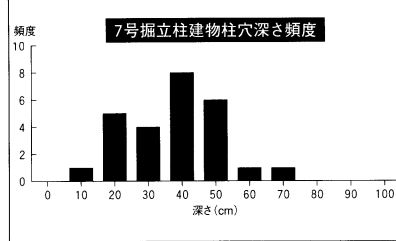
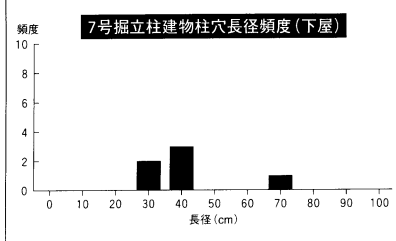
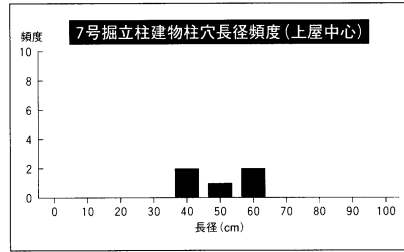
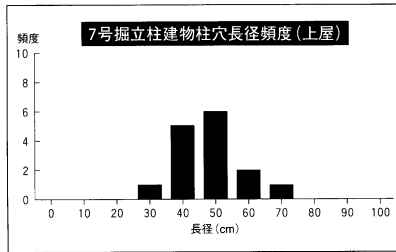
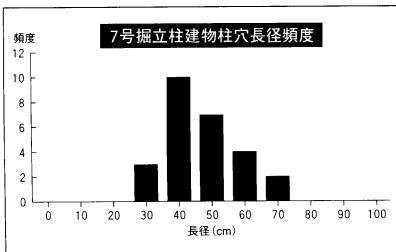
(単位：cm)

	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時 pit番号	
		長径	短径	深さ	長径	短径	深さ		
上屋	1	30	30	40				P 320	
	2	38	34	52				P 340	
	3	42	41	62				P 9 A	
	4	48	47	48				P 336	
	5	34	28	12				P 335 A	
	6	38	28	16				P 334	
	7	46	42	29				P 331	
	8	48	44	40				P 330	
	9	60	38	33				P 329	
	10	38	31	13				P 328	
	11	53	40	30				P 327	
	12	45	38	47				P 326	
	13	43	30	42				P 325 B	
	14	66	56	16				P 325 A	
	15	32	27	40				P 322	
	22	52	42	46				P 342	
	23	51	34	40				P 343	
	24	42	27	30				P 360	
	25	36	28	30				P 350	
	26	39	36	35				P 345	
	庇	16	62	44	18				P 300
		17	31	27	10				P 335 B
		18	23	22	31				P 310
		19	32	28	44				P 314
		20	28	26	43				P 316
	21	32	28	38				P 318	

柱間心距離計測表

(柱間単位：cm)

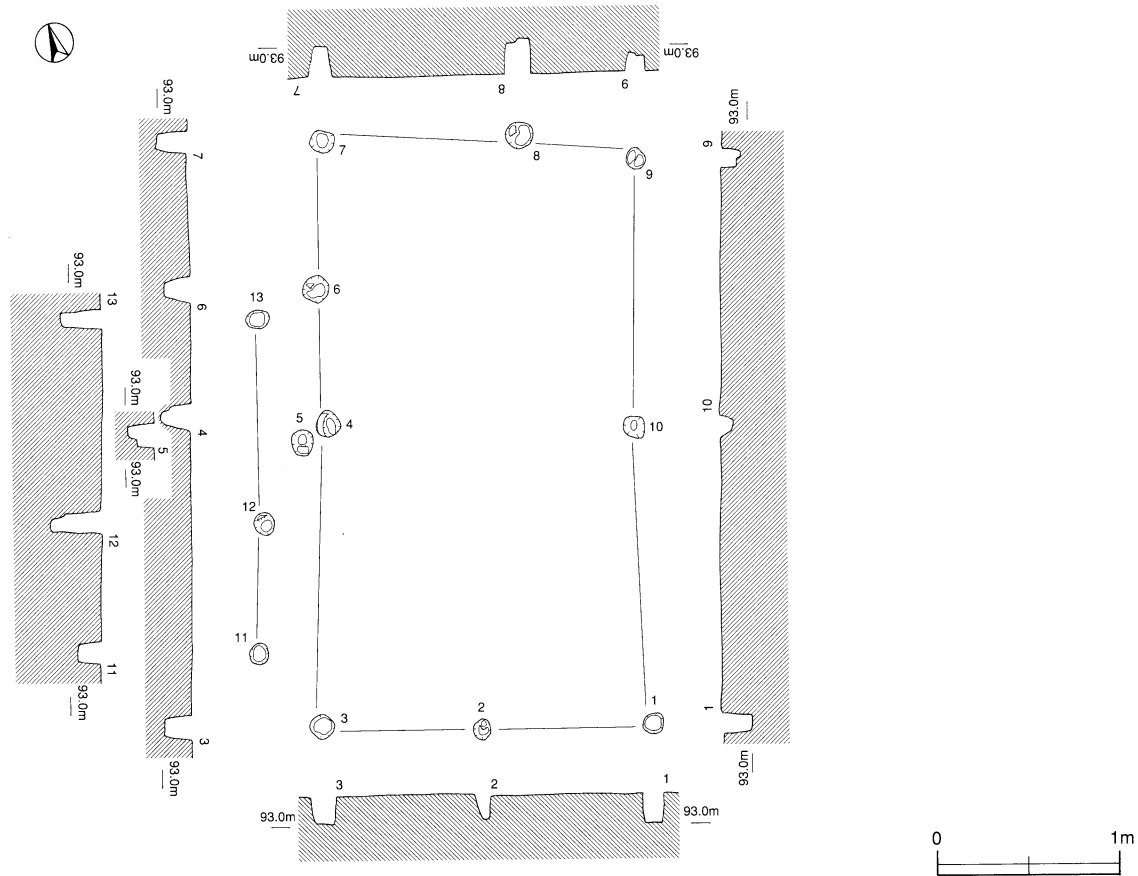
	柱穴番号	柱間			柱穴番号	柱間	
							上屋
2~3	180	17~18	132				
3~4	196	18~19	224				
4~5	176	19~20	184				
5~6	244	20~21	192				
1~6	1000	16~21	1016				
8~9	212						
9~10	176						
10~11	196						
11~12	180						
12~13	192						
8~13	956						
梁間方向	6~7	208					
	7~8	196					
	6~8	404					
	13~14	48					
	14~15	132					
15~1	160						
13~1	340						



7号掘立柱建物跡 (第135図)

方形区画内のB・C-19・20区で検出された掘立柱建物跡で、長軸はN-18°-Eである。建物規模は2間×5間の総柱の上屋で、面積が40.4㎡を測る。上屋での1間間尺の平均値は桁行方向で1.95m、梁間方向で1.86mを測る。また建物東側には約80cmの幅で庇が付いている。柱穴規模の平均値は、上屋では上面での長径が44cm、深さが35cm、上屋中心部では上面での長径が44cm、深さが36cm、庇では上面での長径が35cm、深さが31cmを測る。

総柱の掘立柱建物跡は、10棟のうち当建物跡1棟のみで、この造りの違いが時期の差に起因するのか、用途の違いに起因するのか判断できなかった。ただし、上屋の建物規模は2間×5間という山ノ



第136図 山ノ脇遺跡 中世期 第Ⅲ期遺構群遺構実測図2 (8号掘立柱建物跡)

柱穴計測表

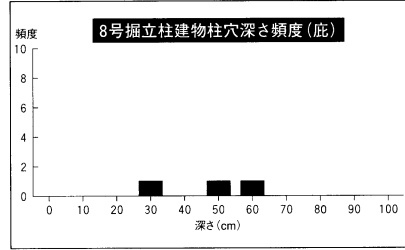
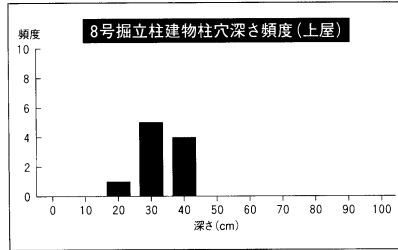
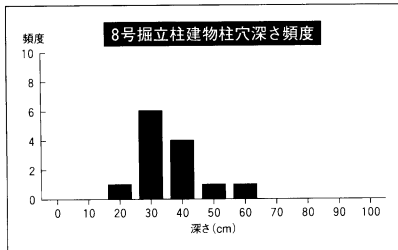
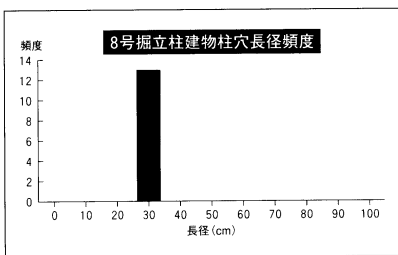
(単位: cm)

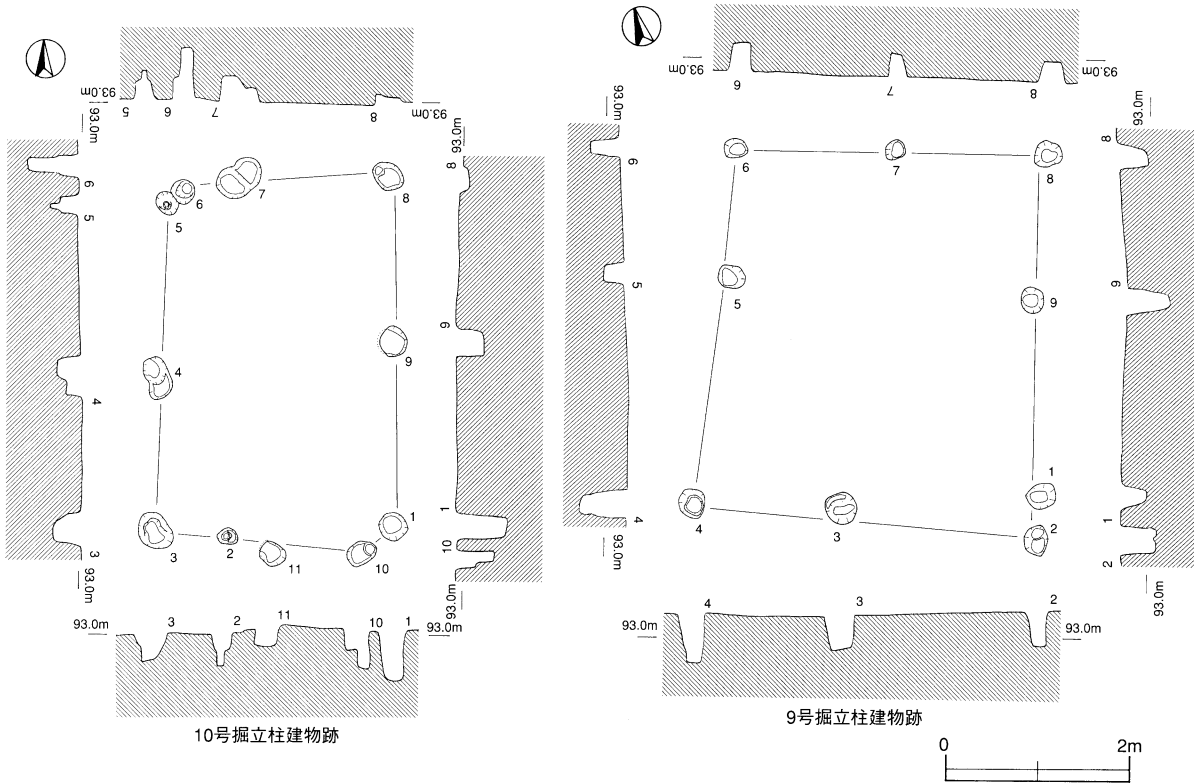
	柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時pit番号
		長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
上屋	1	24	22	32				P 24
	2	23	19	27				P 25
	3	28	27	30				P 20
	4	30	28	34				P 18
	5	28	24	29				P 19
	6	30	30	29				P 17
	7	28	26	34				P 16
	8	30	29	40				P 21
	9	24	22	22				P 22
	10	26	24	16				P 23
門	11	24	21	26				P 28
	12	24	22	56				P 27
	13	26	20	44				P 26

柱間心距離計測表

(柱間単位: cm)

	柱穴番号	柱間	門	桁行方向	柱穴番号	柱間
4~6	148	12~13	224			
6~7	164	11~13	364			
3~7	640					
3~5	312					
5~6	164					
6~7	164					
3~7	640					
9~10	292					
10~1	324					
9~1	616					
1~2	184					
2~3	172					
1~3	356					
7~8	220					
8~9	120					
7~9	340					





第137図 山ノ脇遺跡 中世期 第Ⅲ期遺構群遺構実測図3 (9号掘立柱建物跡および10号掘立柱建物跡)

柱穴計測表

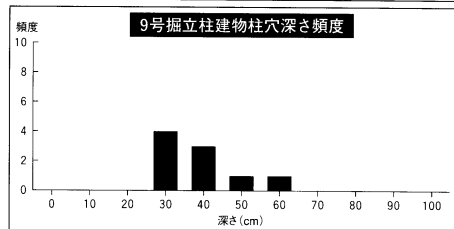
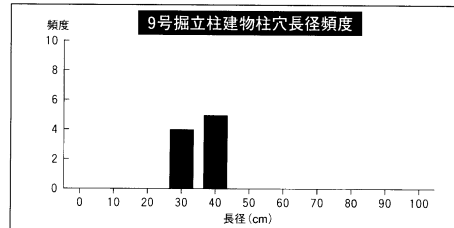
(単位: cm)

柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時 pit番号
	長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
1	32	28	27				P 36
2	33	26	38				P 35
3	36	34	38				P 34
4	32	29	53				P 33
5	30	26	22				P 32
6	26	21	32				P 31
7	22	21	25				P 30
8	32	29	24				P 29
9	29	25	47				P 37

柱間心中心距離計測表

(柱間単位: cm)

	柱穴番号	柱間
桁行方向	4~5	252
	5~6	140
	4~6	392
	8~9	160
	9~1	216
梁間方向	8~2	376
	2~3	212
	3~4	160
	2~4	372
	6~7	172
	7~8	164
	6~8	336



柱穴計測表

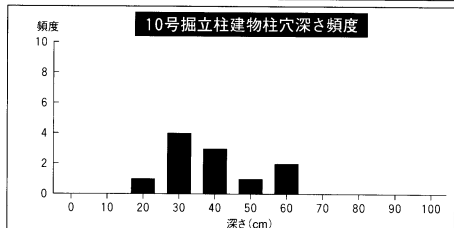
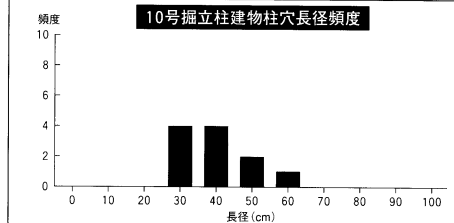
(単位: cm)

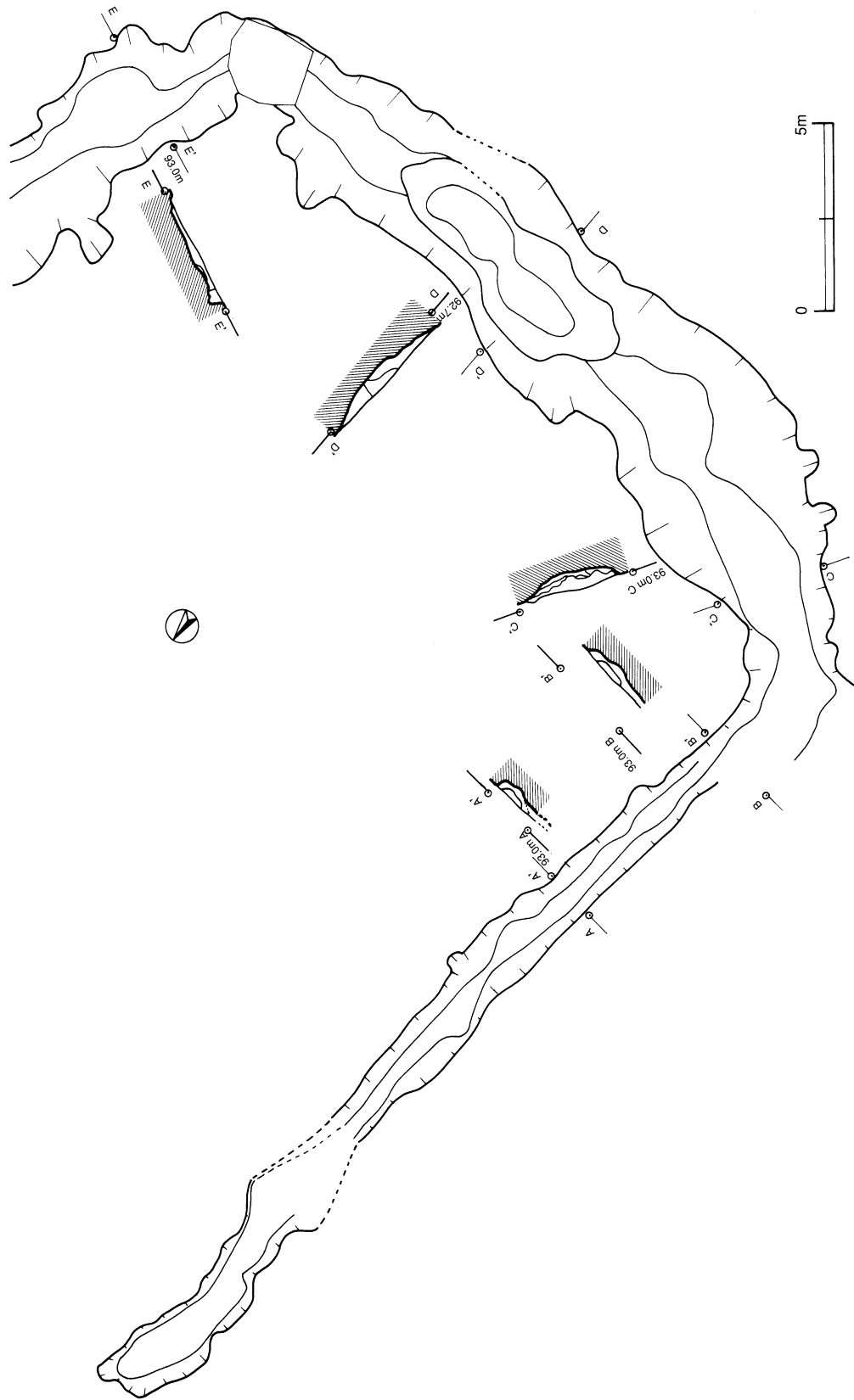
柱穴番号	柱穴痕			柱痕跡			調査時 pit番号
	長径	短径	深さ	長径	短径	深さ	
1	32	30	56				P 482
2	23	18	36				P 481
3	44	34	32				P 480
4	46	29	28				P 479
5	26	22	32				P 10 C
6	27	26	56				P 10 B
7	52	36	28				P 475
8	36	29	12				P 10 A
9	34	29	30				P 483
10	33	24	44				P 485
11	28	24	24				P 484

柱間心中心距離計測表

(柱間単位: cm)

	柱穴番号	柱間
桁行方向	3~4	176
	4~5	184
	3~5	360
	8~9	180
	9~1	200
梁間方向	8~1	380
	1~2	184
	2~3	80
	1~3	264
	5~7	74
	7~8	172
	5~8	246
	6~7	50
	7~8	172
6~8	222	
	10~11	108





第138图 山ノ脇遺跡 中世期 第三期遺構群遺構実測図4 (方形区画溝状遺構)

脇遺跡中世期の主たる建物と共通する間取り構成であることから、当建物跡は、第Ⅲ期遺構群の主要建物に位置付けることが可能と判断した。上屋面積や1間間尺の数値が近似していることから、第Ⅰ期遺構群に属する2号掘立柱建物跡との用途的な類似性が高いと指摘できる。ただし、7号掘立柱建物跡では柱間心距離が個々に大きく異なり、柱が整然とは並んでいない状況が指摘できる。

8号掘立柱建物跡（第136図）

方形区画外のC-16区で検出された掘立柱建物跡。長軸はN-18°-E。建物規模は2間×2間の上屋だけで、上屋面積は22.8㎡。また柱穴規模の平均値は、上面長径が30cm、深さが34cmを測る。また建物西側には、約70cm離れてピット列が検出された。建物の出入り口用の庇と思われる。

9号掘立柱建物跡（第137図）

方形区画外のC-18区で検出された掘立柱建物跡。長軸はN-17°-E。建物規模は2間×2間の上屋だけで、上屋面積は14.6㎡。また柱穴規模の平均値は、上面長径が30cm、深さが34cmを測る。柱穴が重なっている箇所があることから、建て直しが行われたことが想定できる。

10号掘立柱建物跡（第137図）

方形区画内のB-18区で検出された掘立柱建物跡。長軸はN-3°-E。建物規模は2間×2間の上屋だけで、上屋面積は9.5㎡。また柱穴規模の平均値は、上面長径が35cm、深さが34cmを測る。

方形区画溝状遺構（第138図）

山ノ脇遺跡A～C-18～21区Ⅲb層面で検出され、A-18区北側部分が発掘範囲外に延びる溝状遺構である。検出状況での平面形は「コ」字形で、長軸は南北方向、短軸は東西方向を向いている。

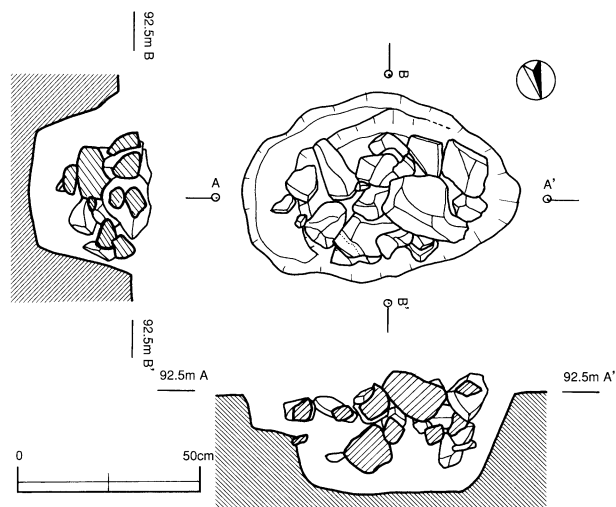
判明した範囲での遺構規模は、長軸の長さが26.6m、短軸の長さが20mを測る。また長軸方向での最大幅は東側で420cm、西側で240cmを測り、検出面からの深さは東側で60cm、西側で36cmを測る。短軸方向での最大幅は南側で600cmを、検出面からの深さは72cmを測る。これらのことから、東側と南側に対して西側は幅・深さが1/2程度の規模となり、南側・東側を重視した遺構と判断できる。

また埋土中にⅡ層相当土の堆積が見られる状況からは、溝状遺構1～5の堆積状況に比べて、時間的により新しい状況を示していると判断できる。また、これらの堆積状況は、この溝状遺構が埋まる過程において、作り直しが行われて使用され続けていたことをも示している。

これらのことから、この溝状遺構の所属時期は、いずれも中世の時期と判断した。

(2) 集石遺構（第139図）

山ノ脇遺跡D-20区Ⅲb層面で検出された。平面形が75cm×50cmを測る楕円形を呈し、検出面からの深さが約30cmある土坑中に、拳大から人頭大の軽石が30個ほど入る遺構であった。軽石は土坑上部を覆うように入土した。多くの軽石は焼けており、炭化粒も検出され、土坑壁面は被熱されているようであった。埋土はⅡ層相当土であったことから、所属時期は中世期と判断した。



第139図 山ノ脇遺跡 中世期 集石遺構実測図

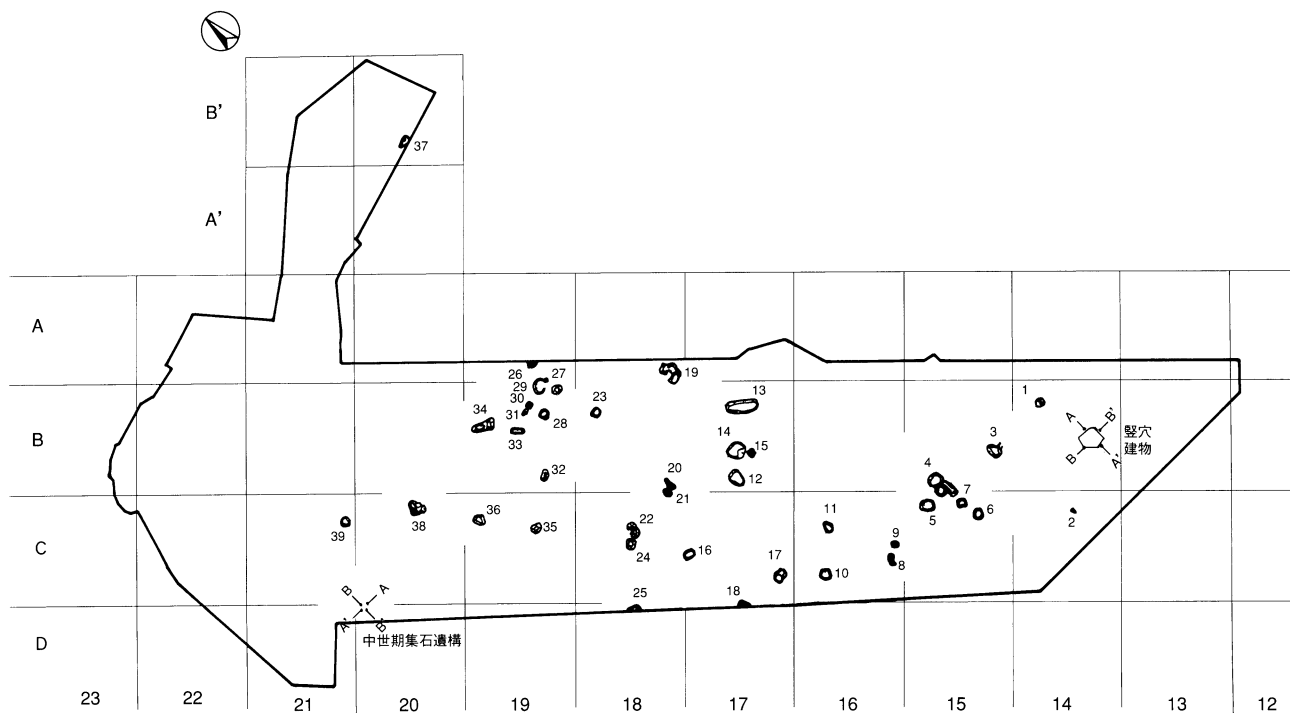
(3) 竪穴建物 (第141図)

山ノ脇遺跡B-14区Ⅲb層面で検出された、平面形が196cm×192cmを測る正方形を呈する遺構である。検出面からの深さは約30cmであった。柱穴と考えられるピットは、壁際に1辺3本ずつ検出された。四隅で検出されたピット(以後、四隅ピットと称する)と、これらのピット間で検出されたピット(以後、中間ピットと称する)とは、大きさや埋土の状況などに差がみられた。

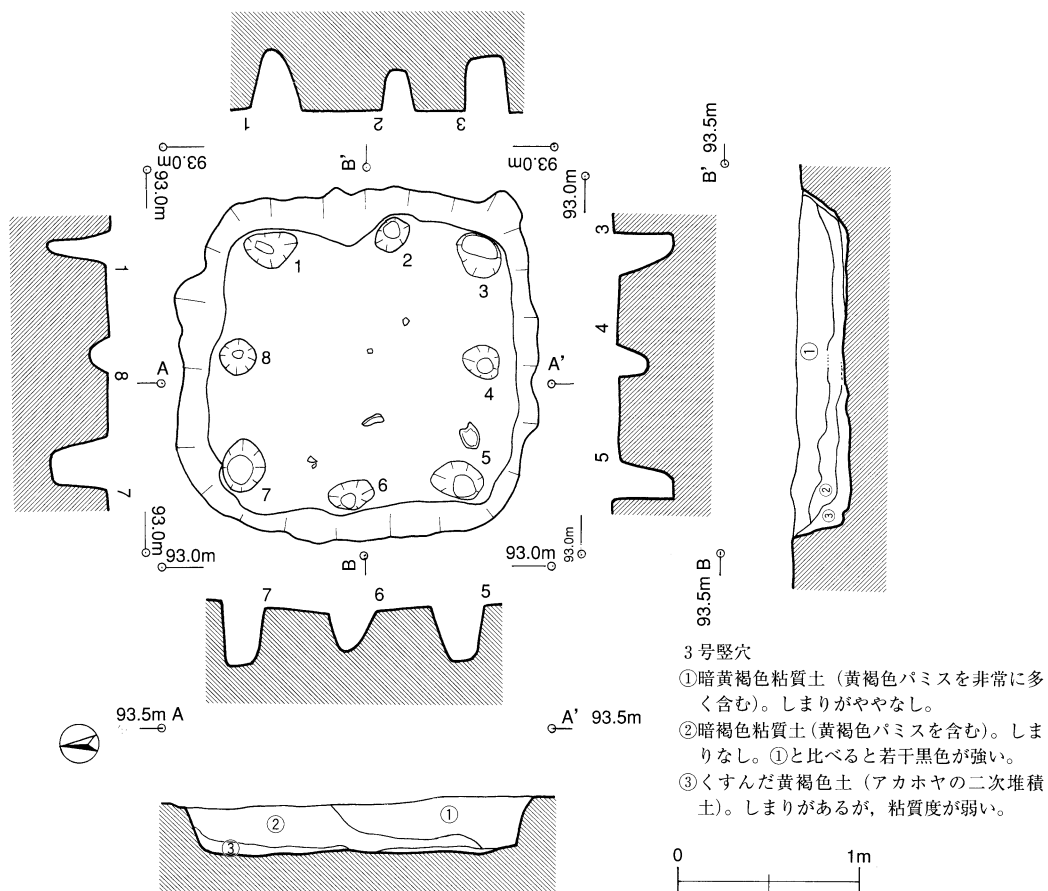
四隅ピットと中間ピットでの上面長径と深さの平均値は計測表のとおりであり、四隅ピットの方が中間ピットより平均値で上面長径値が7cm、深さ値が15cm大きいことが明らかである。またピットの埋土状況において、四隅ピットでは中世期以降の包含層であるⅡ層土に近い粘質土が埋土であるのに対して、中間ピットでは竪穴遺構の壁面を構成するアカホヤ火山灰の二次堆積土が埋土であった。これらの状況から、中間ピットは支柱で、建物廃絶時の初期に流れ込んだ土に埋まったと考えられる一方、四隅ピットは中心柱で、後に流れ込んだ土に埋まったと考えられる。

(4) 土坑 (第142図～第147図)

山ノ脇遺跡では、Ⅲa層からⅢb層にかけて50基の土坑が検出され、このうち39基を資料化した。これらの土坑は、検出面直径は1m前後を測るのが最も多く、検出面からの深さでは30cmを測るのが多かった。検出面直径が最も大きいのは約3mで、最も小さいのは約50cmであった。検出面からの深さでは最も深いのは80cm、最も浅いのは11cmであった。平面形は円形あるいは楕円形を呈し、中には長円形もあった。また多くの土坑では、サツマ火山灰の軽石層を床面として造られ、排水性を必要とする用途が考えられる。埋土状況は、Ⅲb層相当土やⅢa層相当土にアカホヤパミスを含む土がレンズ状に堆積しており、Ⅱ層相当土が堆積している土坑はみられなかった。この埋土状況は掘立柱建物跡の柱穴での状況と類似していることから、土坑の所属時期は、いずれも中世の時期と判断した。



第140図 山ノ脇遺跡 中世期 検出遺構配置図8 (竪穴建物・土坑)

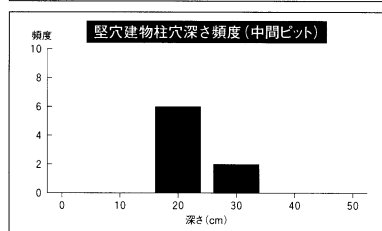
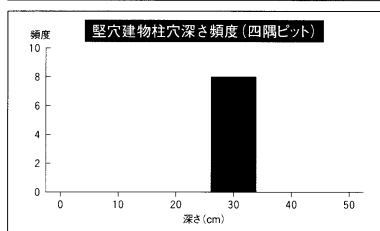
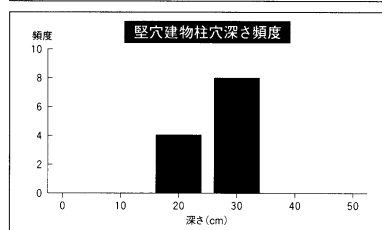
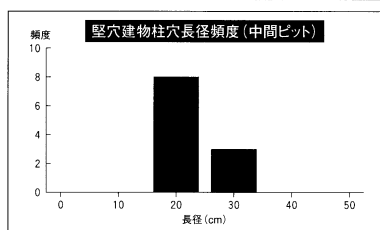
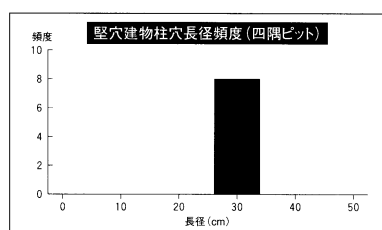
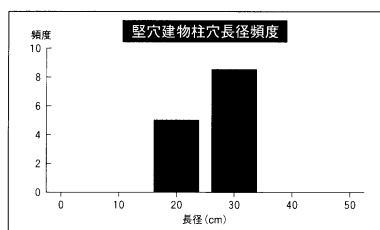


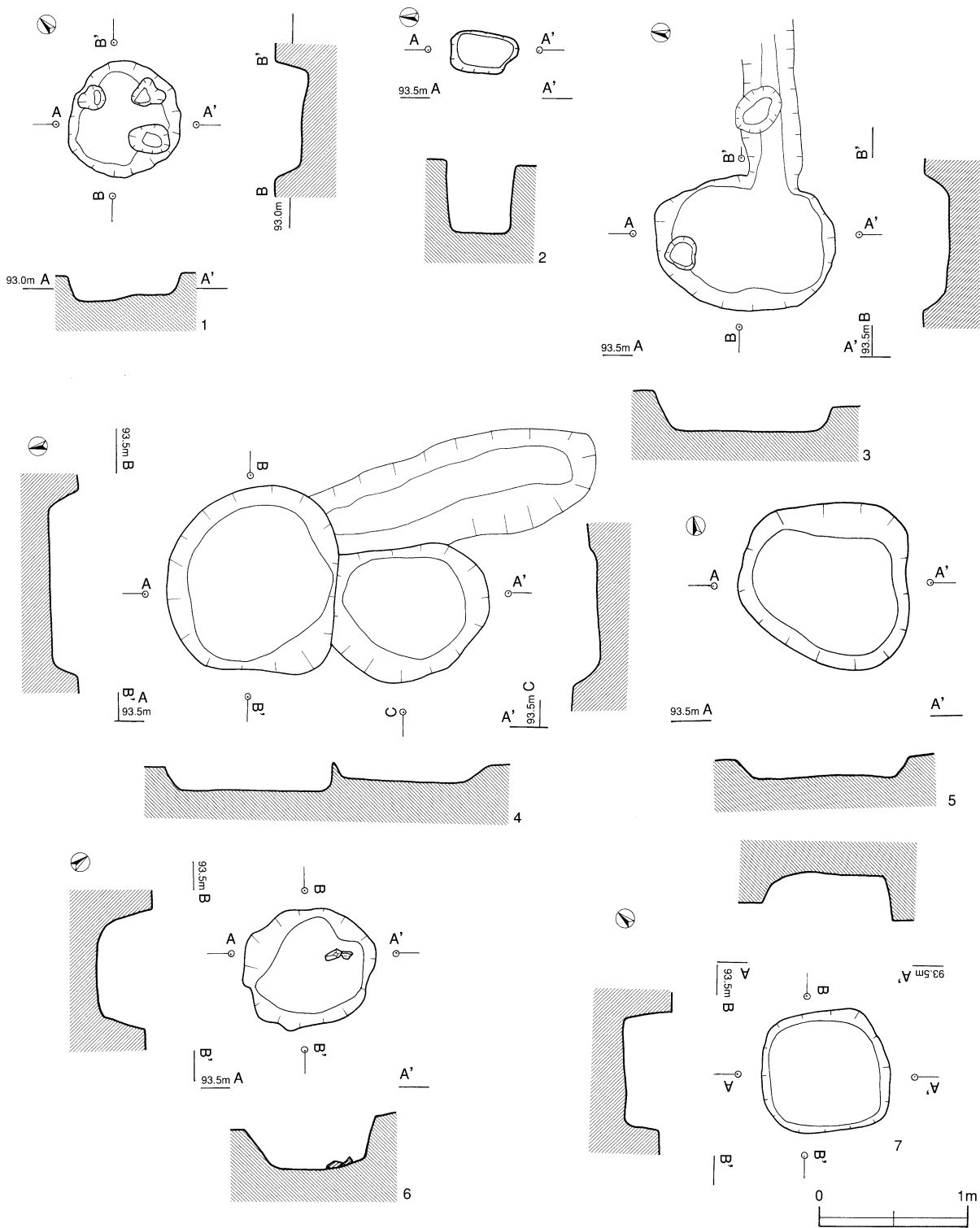
第141図 山ノ脇遺跡 中世期 堅穴建物実測図

全体	長径 (cm)	深さ (cm)
1	29	34
2	20	22.5
3	27	32
4	20	17
5	29	34
6	26	21
7	29	35
8	20	11.5
平均値	25	25.875
最大値	29	35
最小値	20	11.5

四隅ビット	長径 (cm)	深さ (cm)
1	29	34
3	27	32
5	29	34
7	29	35
平均値	28.5	33.75
最大値	29	35
最小値	27	32

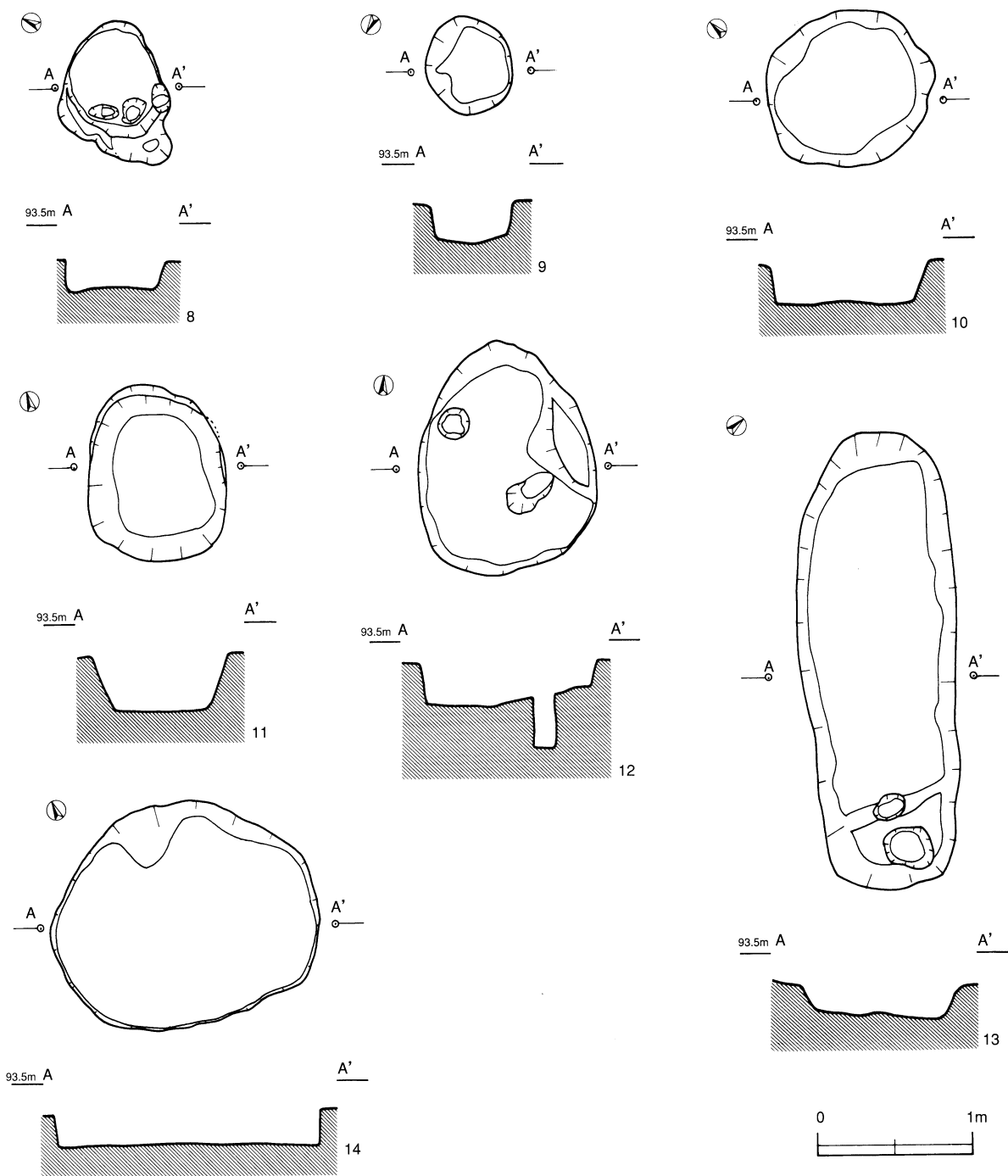
中間ビット	長径 (cm)	深さ (cm)
2	20	22.5
4	20	17
6	26	21
8	20	11.5
平均値	21.5	18
最大値	26	22.5
最小値	20	11.5





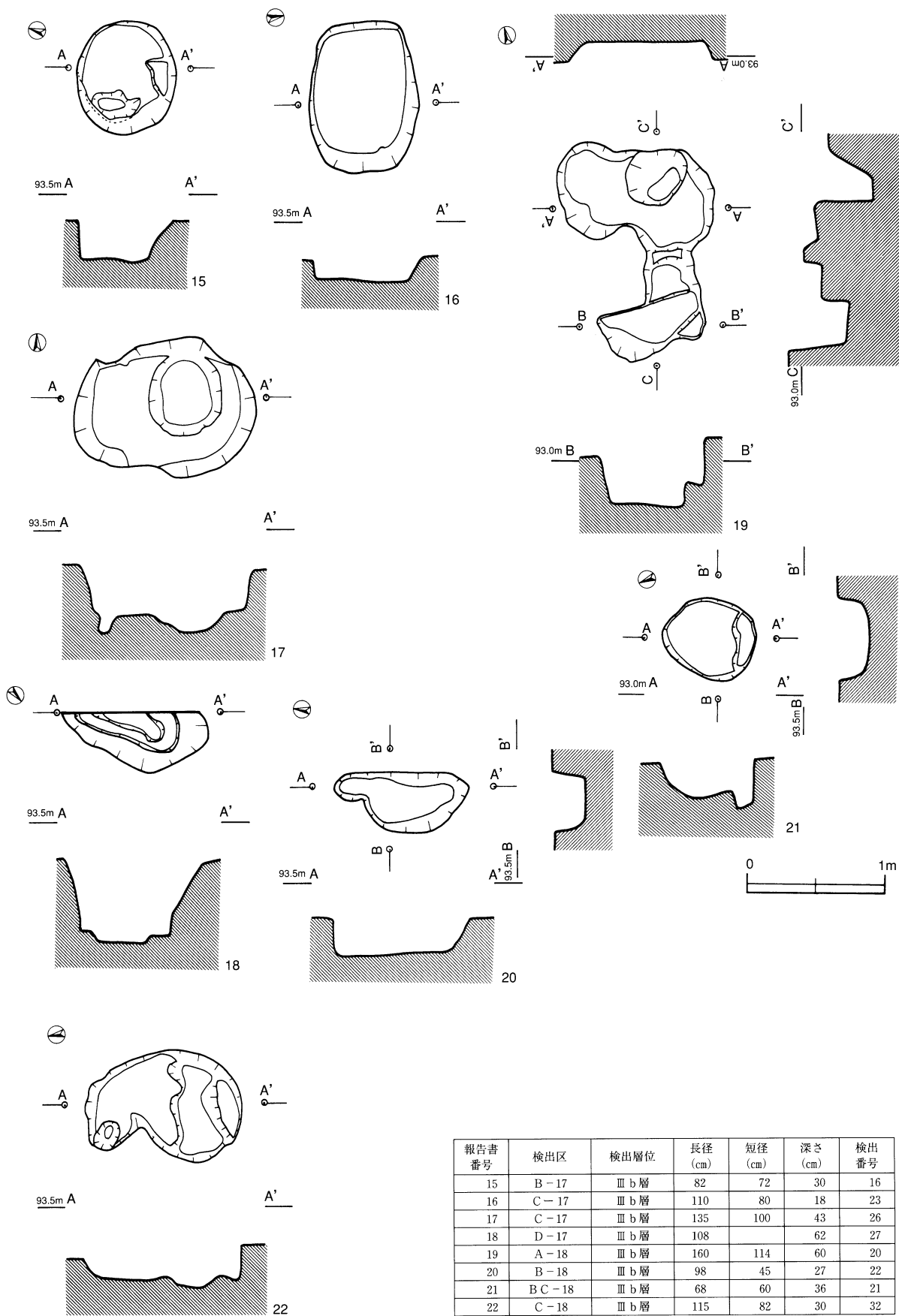
第142図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図1 (1~7)

報告書 番号	検出区	検出 層位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	検出 番号
1	B-14	Ⅱ層	77	76	22	11
2	C-14	Ⅱ層	46	28	48	13
3	B-15	Ⅱ層	122	91	27	10
4	B-15	Ⅱ層	297	161	20	8
5	C-15	Ⅱ層	115	112	14	9
6	C-15	Ⅱ層	90	82	37	6
7	C-15	Ⅱ層	86	83	32	7

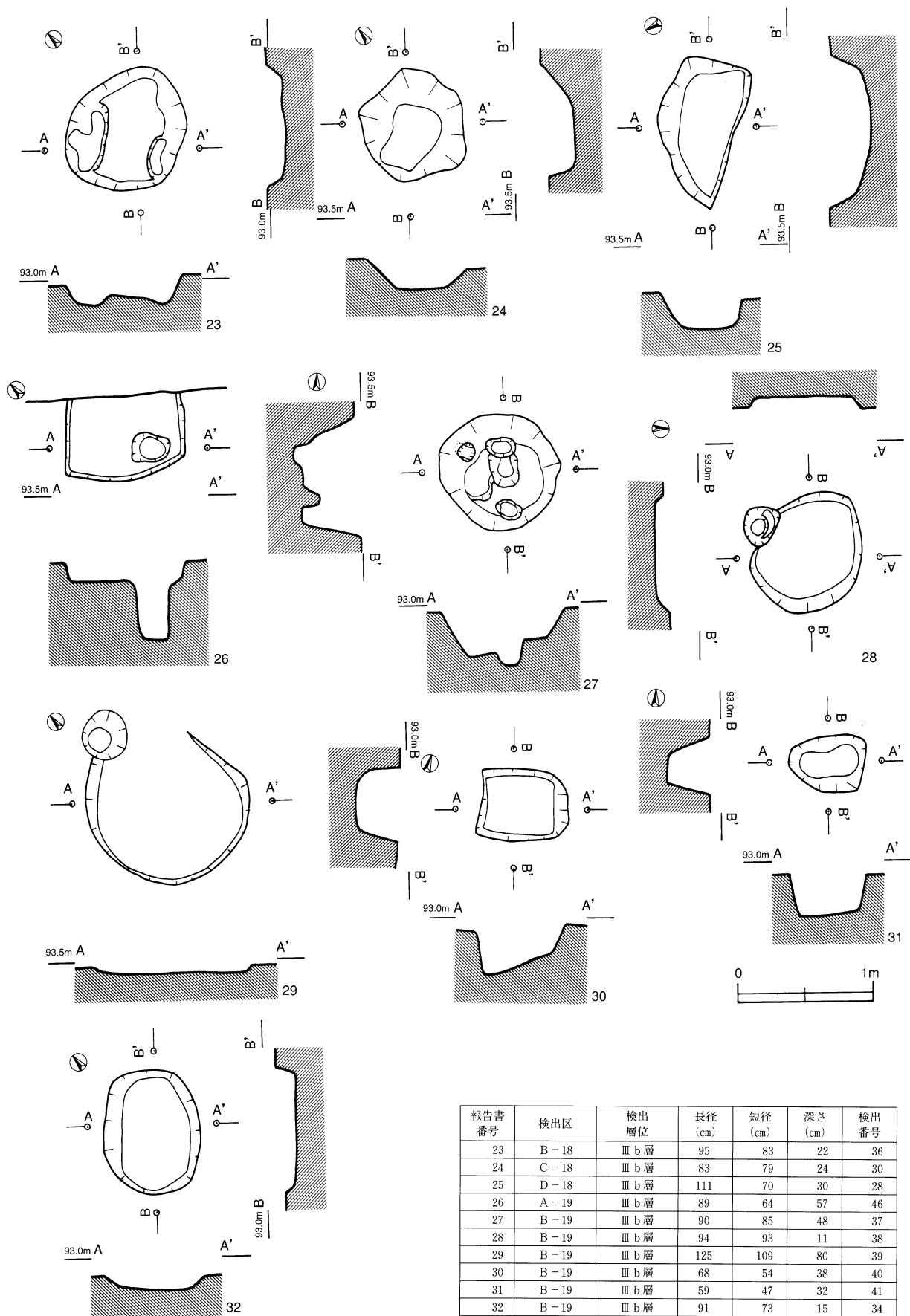


第143図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 2 (8~14)

報告書 番号	検出区	検出層位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	検出 番号
8	C-16	Ⅲ b 層	94	73	21	1
9	C-16	Ⅲ b 層	63	57	26	2
10	C-16	Ⅲ b 層	82	71	28	3
11	C-16	Ⅲ b 層	113	91	37	4
12	B-17	Ⅲ b 層	150	116	28	17
13	B-17	Ⅲ b 層	292	103	22	19
14	B-17	Ⅲ b 層	175	147	23	18

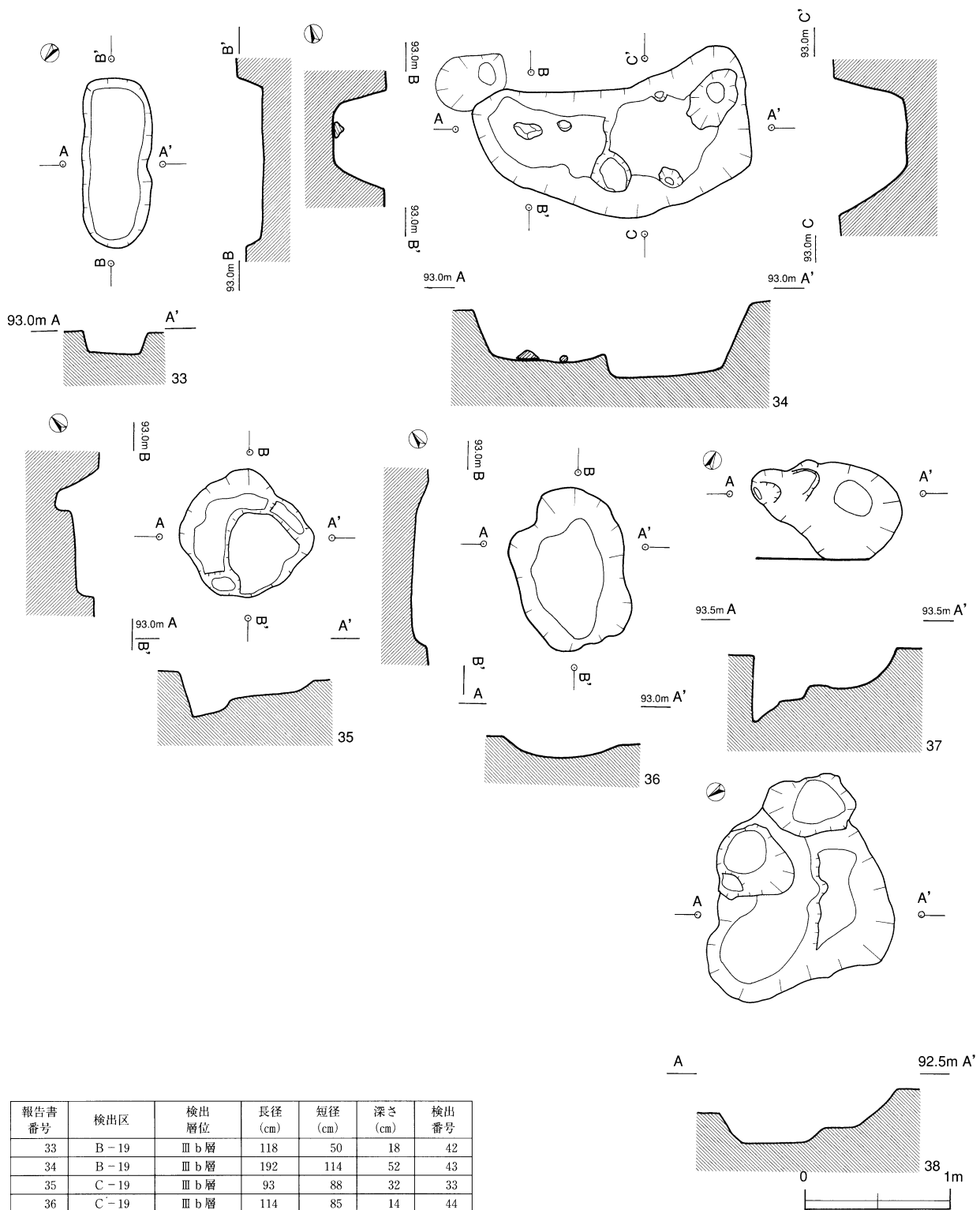


第144図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図3 (15~22)



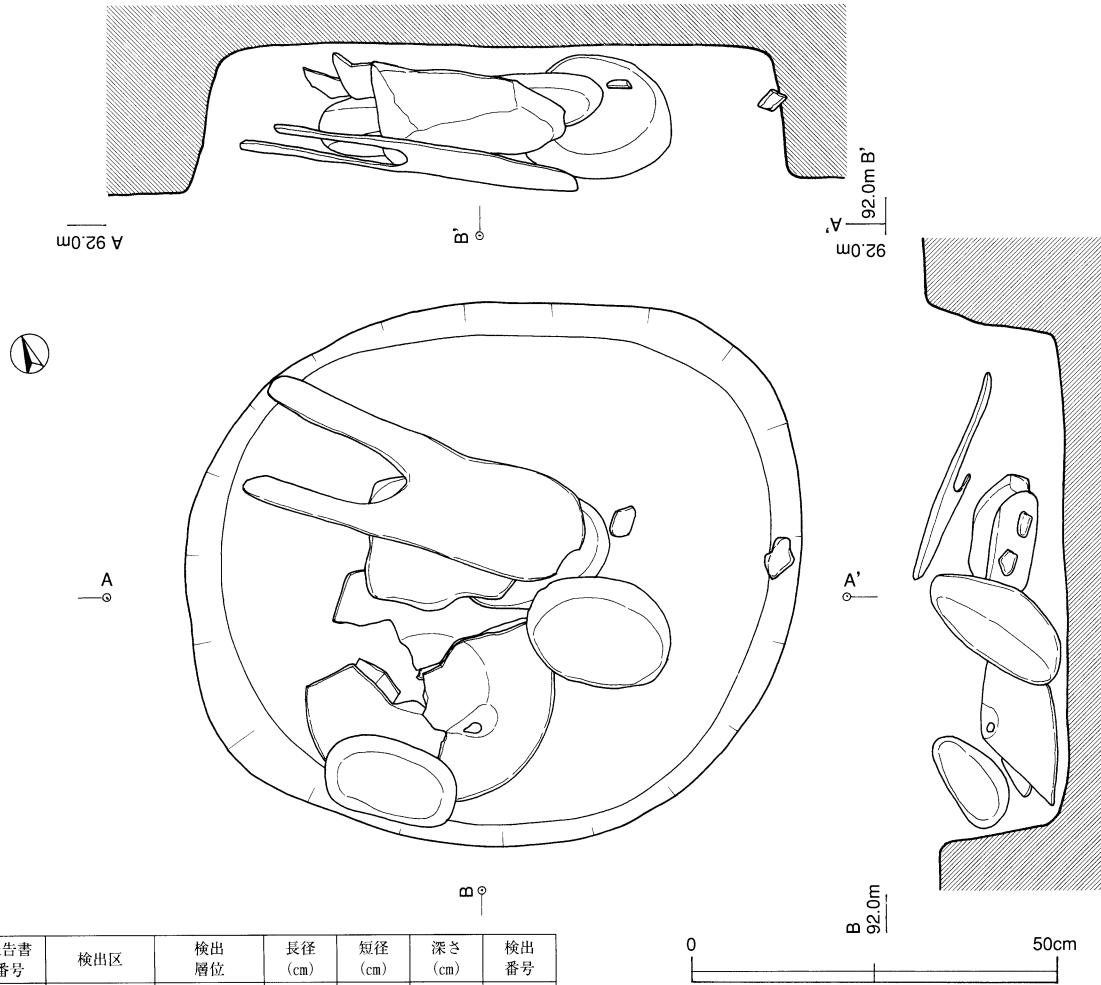
報告書 番号	検出区	検出 層位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	検出 番号
23	B-18	Ⅲ b 層	95	83	22	36
24	C-18	Ⅲ b 層	83	79	24	30
25	D-18	Ⅲ b 層	111	70	30	28
26	A-19	Ⅲ b 層	89	64	57	46
27	B-19	Ⅲ b 層	90	85	48	37
28	B-19	Ⅲ b 層	94	93	11	38
29	B-19	Ⅲ b 層	125	109	80	39
30	B-19	Ⅲ b 層	68	54	38	40
31	B-19	Ⅲ b 層	59	47	32	41
32	B-19	Ⅲ b 層	91	73	15	34

第145図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 4 (23~32)



報告書 番号	検出区	検出 層位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	検出 番号
33	B-19	Ⅲ b層	118	50	18	42
34	B-19	Ⅲ b層	192	114	52	43
35	C-19	Ⅲ b層	93	88	32	33
36	C-19	Ⅲ b層	114	85	14	44
37	B'-20	Ⅱ-Ⅲ a層	105	68	51	53
38	C-20	Ⅲ b層	168	131	37	45

第146図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図5 (33~38)



報告書 番号	検出区	検出 層位	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	検出 番号
39	C-21	Ⅲ b層	85	75	21	50

第147図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑実測図 6 (39)

39号土坑（農具埋納遺構）（第147図）

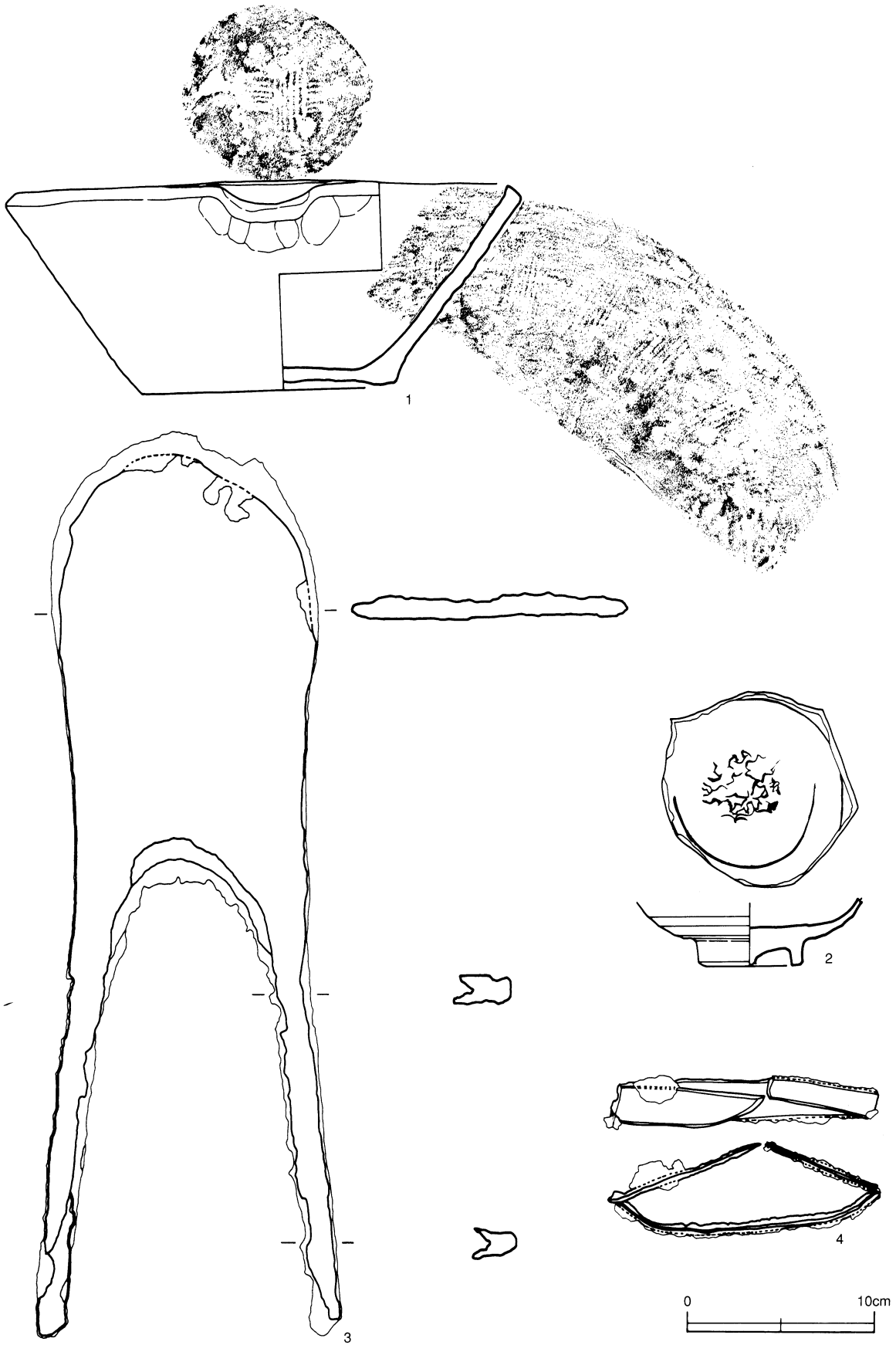
山ノ脇遺跡C-21区で検出された。この土坑は平面形が85cm×75cm、検出面からの深さが約20cmを測る略円形をなし、断面形が略長方形を呈する。埋土は締まりが弱く、よりくすんだ色であった。

土坑内からは、床面に伏せた状態で江南地方産青磁碗があり、その上に古銭が置かれ、それにかぶせる形で土師質土器の播鉢が出土した。その周りを固めるように、直径約20cmの大きさがある軽石の円礫が3個置かれ、その内の1個の上に鉄製の鋏先が置かれた状況で出土した。

これらの遺物は、出土状況からみて埋納されたと考えられ、この遺構を「埋納遺構」と判断した。

出土遺物（第148図）

1は土師質土器の播鉢である。口径27.5cm、底径13.5cm、器高10.7cmを測る。内器面には5～7本を一単位として、また見込み部には6本一単位で十字に交わるように櫛目状の条線が引かれていた。2は江南地方産青磁碗底部片である。見込み部には、牡丹と思われる草花文とそれを取り囲むように圈線が引かれていることから、大宰府編年のⅣ類に属すると判断できる。3は鉄製鋏先である。長さ47.3cm、最大幅14.5cmある。このうち挟り込みが24.9cmあり、差し込みができる構造になっている。先の部分は厚みがある。先端部は丸味をもっている。4は鉄製刀子である。基部と刃部とが折れ曲がって出土した。先端部は片刃である。推定長約30cm、基部端部幅1.2cmを測る。



第148図 山ノ脇遺跡 中世期 検出土坑39出土遺物実測図

2 出土遺物（第153図～第173図）

山ノ脇遺跡で出土した中世期の遺物は、主に供膳具などとして使われる土師器・黒色土器・磁器や、主に貯蔵具・調理具などとして使われる須恵器・瓦質土器・滑石製品であった。遺物の出土分布図（第149図）を観ると、B・C-21区・C-22区を中心とした山ノ脇遺跡の中では凹地のように標高が低くなった中世期の遺構が存在しない区域と、12～14区を中心とした溝状遺構の外側区域とに集中して中世期の遺物が出土していると判断できる。

（1）土師器（第153図～第157図）

山ノ脇遺跡で出土した土師器では、器種は坏と小皿とが出土した。これらの遺物はほとんどが包含層からの出土であり、そのため残存率が非常に低く、口径もしくは底径と器高との比率を出すことは困難であった。土師器総体の出土分布図（第150図）は、明らかに中世期の土師器に属すると判断した破片を全て含めてその分布をドットで示した図である。そのうち、明らかに坏に属するのを抽出した分布図が第151図である。これらの分布図をみると、中世期に属する全遺物の出土傾向と同様な状況を示していることが指摘できる。

坏（第153図～第156図 5～102）

山ノ脇遺跡で出土した土師器坏のうち、98点を資料化した。全て底部の切り離し技法は回転糸切り離しである。そのため底面はやや上げ底となっているのが多い。

1類（第153図 5～21）

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下半は僅かに湾曲しながら外反して立ち上がるタイプの坏（12～14）を標準とする。これらの多くは体部中程で強く屈曲し、体部上半部から口縁部にかけて直線的に外反する形態になる。しかし中には、体部上半部が湾曲しながら外反するタイプ（5）や、体部中程の屈曲が緩やかなタイプ（7・15）もみられる。

2類（第153図22～33）

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下半は緩やかに湾曲しながら外反して立ち上がるタイプの坏（22・24・25）を標準とする。これらの多くは、体部外面が体部中程で緩やかに屈曲し、体部上半部から口縁部にかけて内湾して移行する形態に、また体部内面が体部下端から直線的に口縁部まで立ち上がる形態になる。しかし中には、体部中程の屈曲がほとんどないままに、外反しながら口縁部へ移行するタイプ（30・31）もみられる。

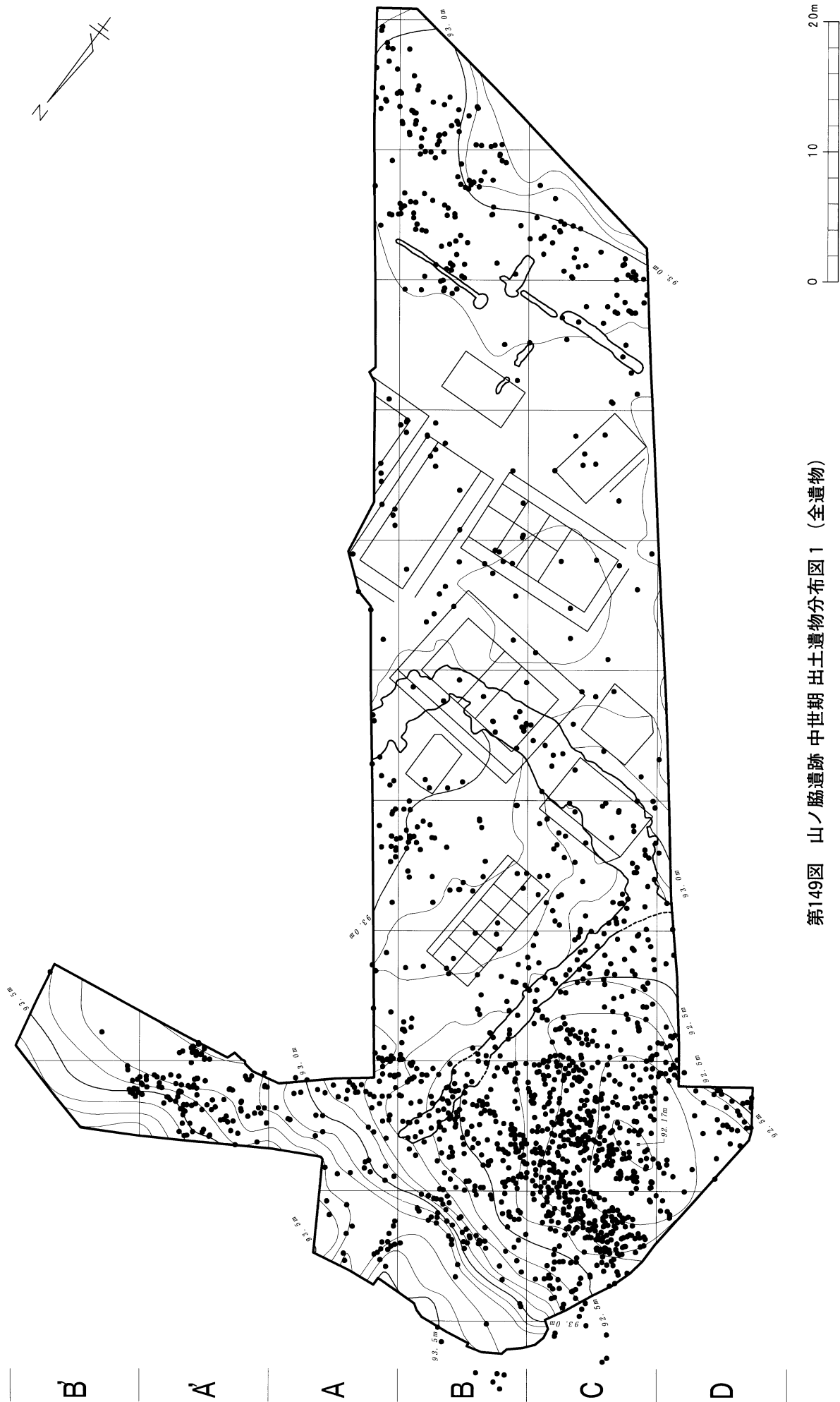
3類（第154図34～48）

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下半部は強く湾曲しながら外反して立ち上がるタイプの坏（37・42）を標準とする。これらの多くは、体部外面が体部中程で緩やかに屈曲し（42・45・46）、体部上半部から口縁部にかけて内湾して移行する（37）形態に、また体部内面が体部下端部から口縁部まで内湾しながら立ち上がる形態になる。しかし中には、体部下端部に近い位置で強く屈曲するタイプ（48）もみられる。

4類（第154図49～57）

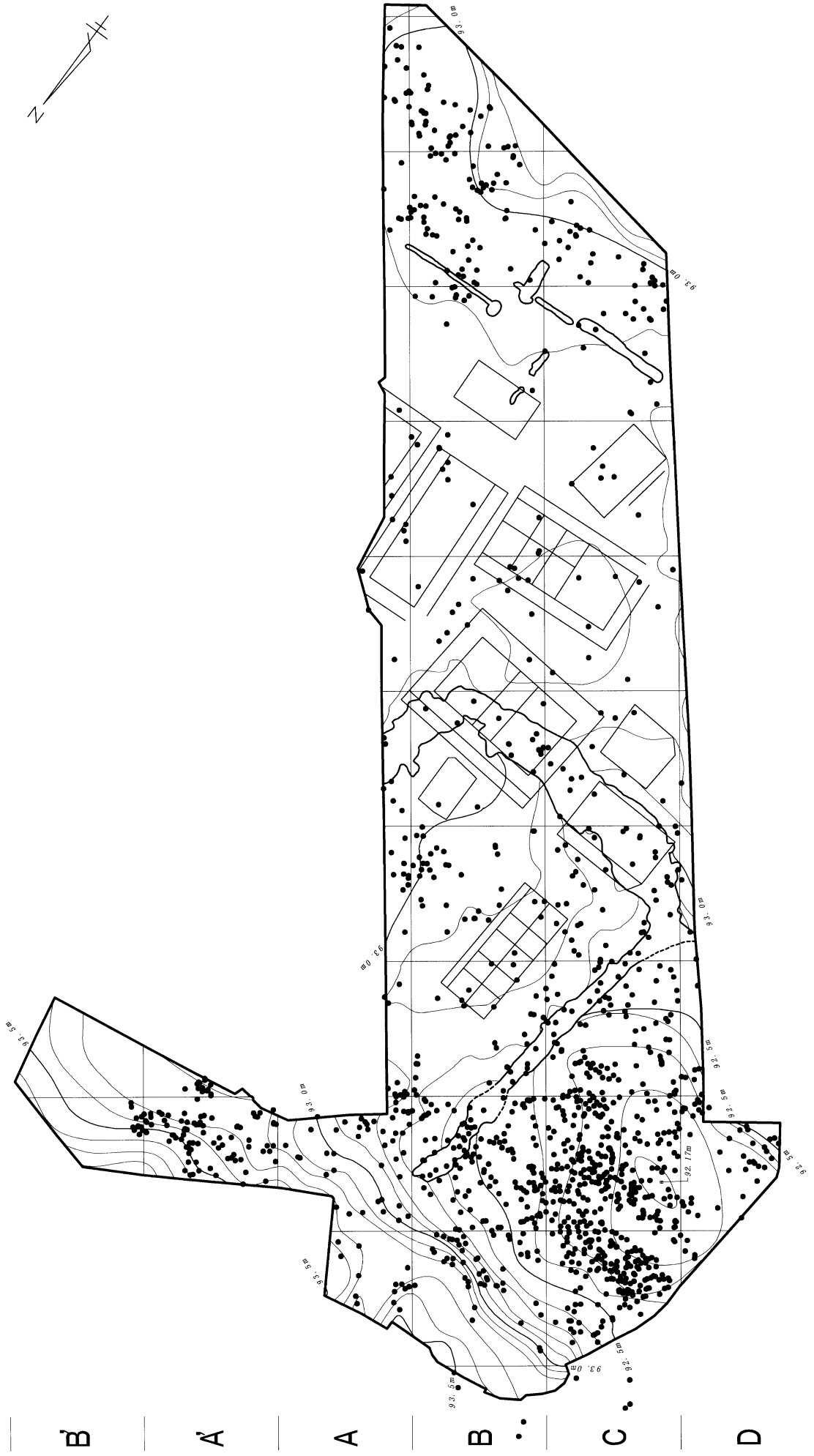
外面形態において底部と体部との境は直角に近い角度で屈曲し、短く立ち上がり、体部下半部は強く内湾しながら体部上半部へ移行するタイプの坏（49・54・56）を標準とする。また体部内面は体部下端部から体部上半部まで内湾しながら立ち上がるタイプ（50・52）である。体部上半部から口縁部

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



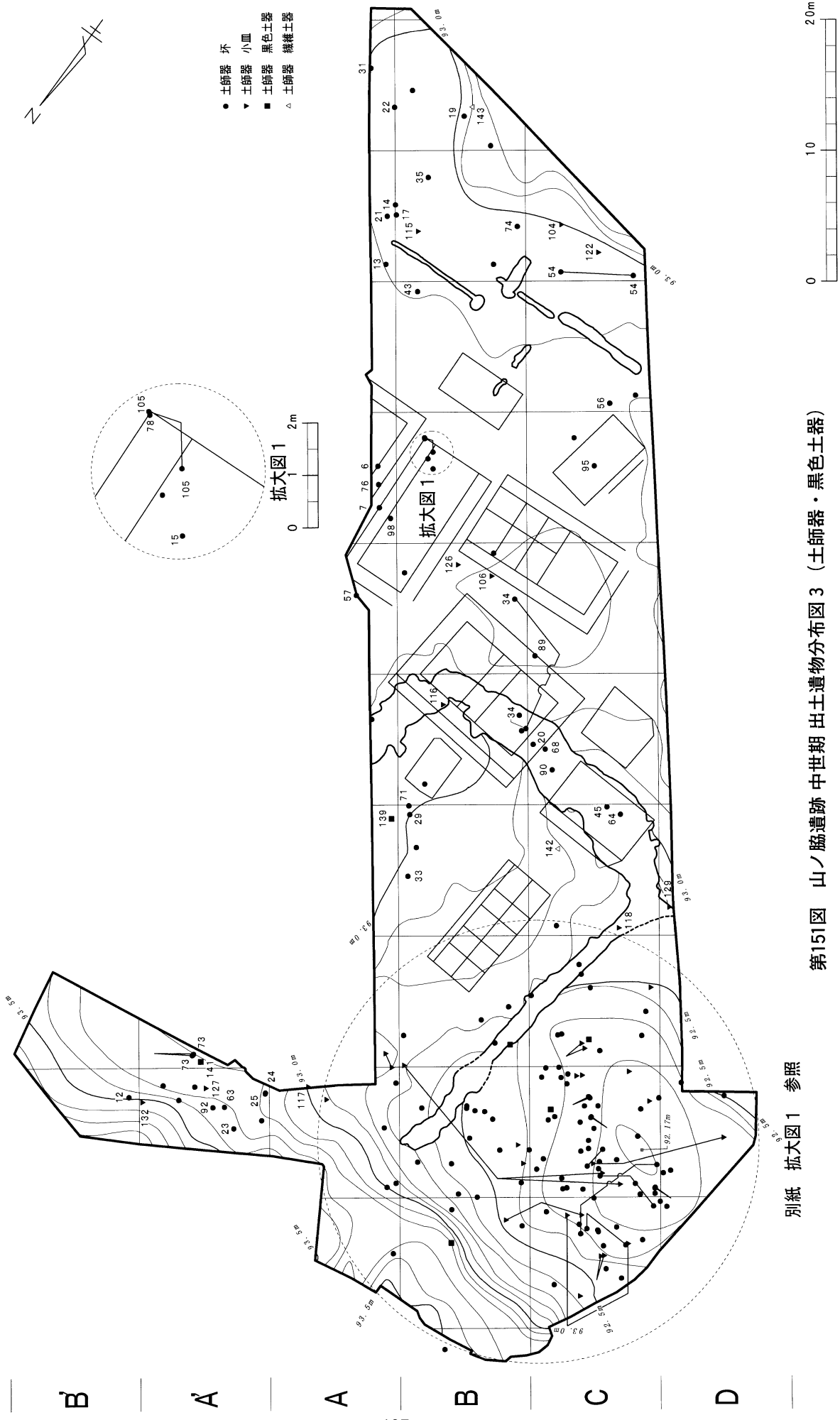
第149図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 1 (全遺物)

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



第150図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 2 (土師器総体)

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12

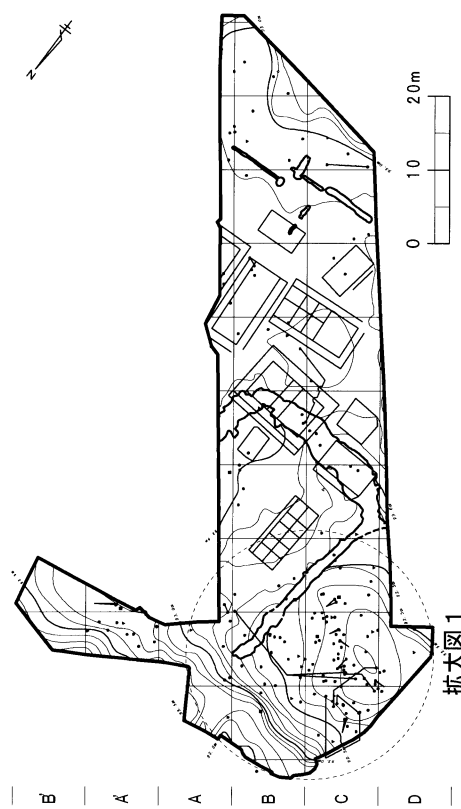


別紙 拡大図1 参照

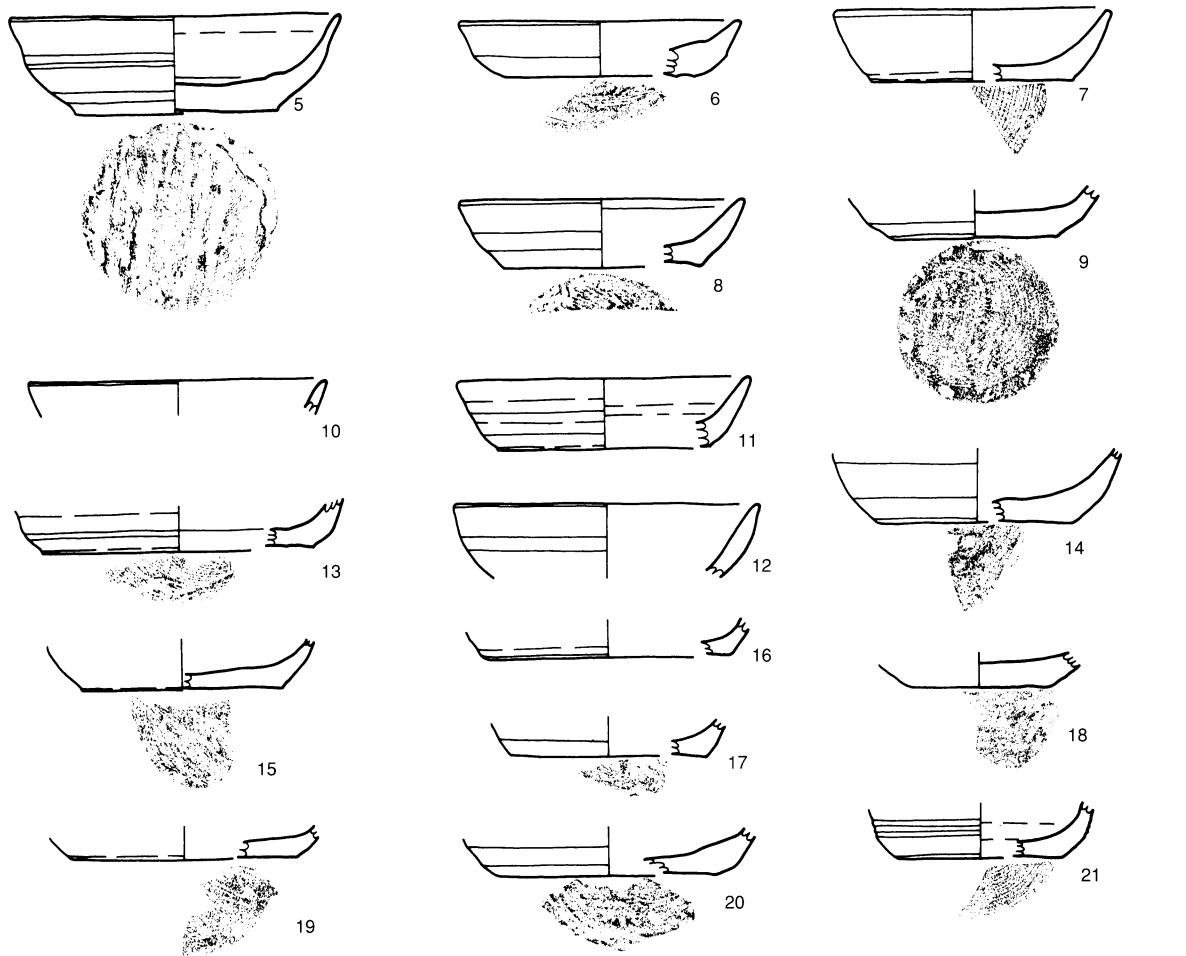
第151図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図3 (土師器・黑色土器)



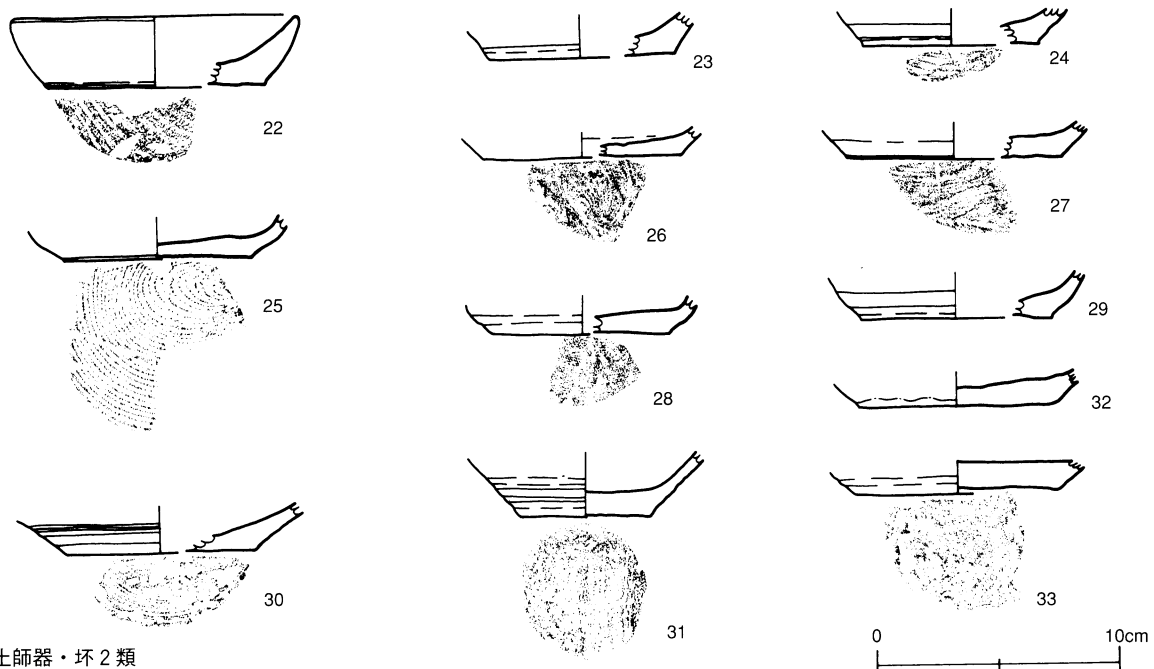
拡大図1
第152図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 3-1 (土師器・黒色土器)



- 土師器 坏
- ▼ 土師器 小皿
- 土師器 黒色土器
- △ 土師器 緑織土器

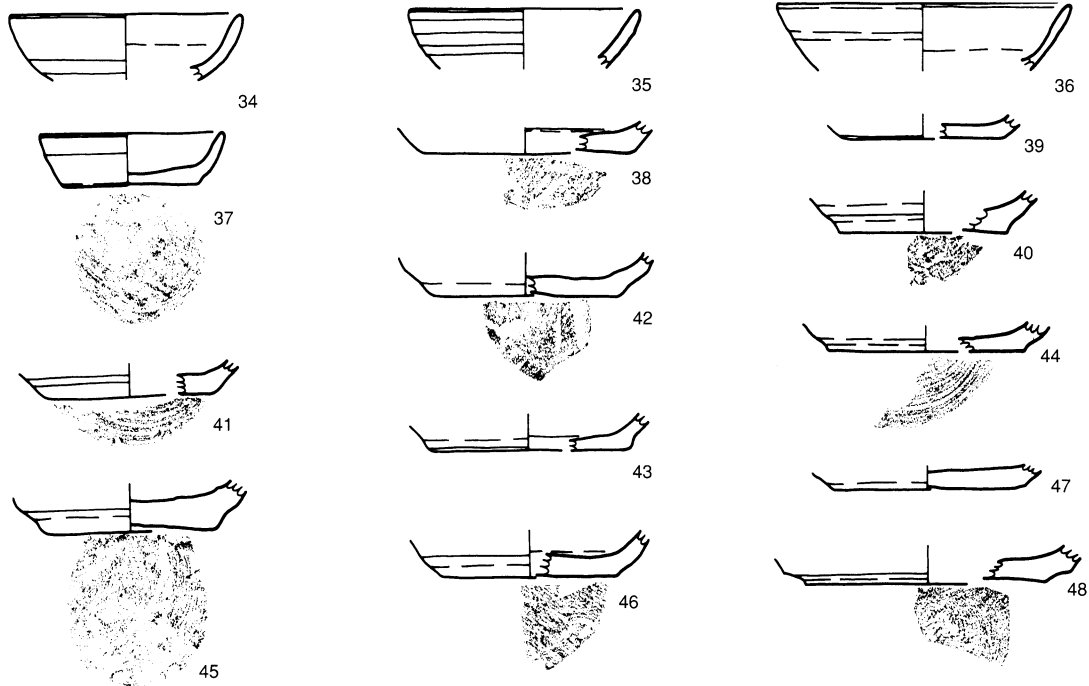


土師器・坏1類

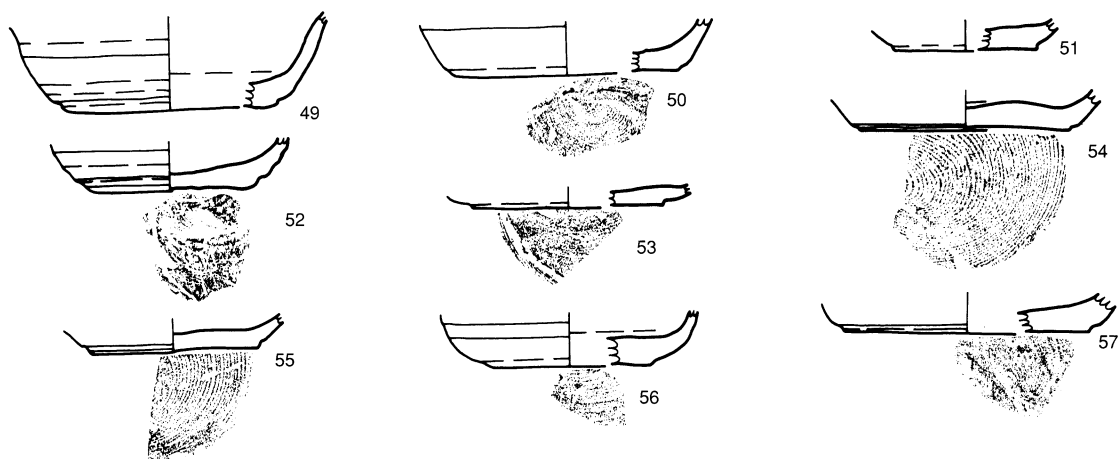


土師器・坏2類

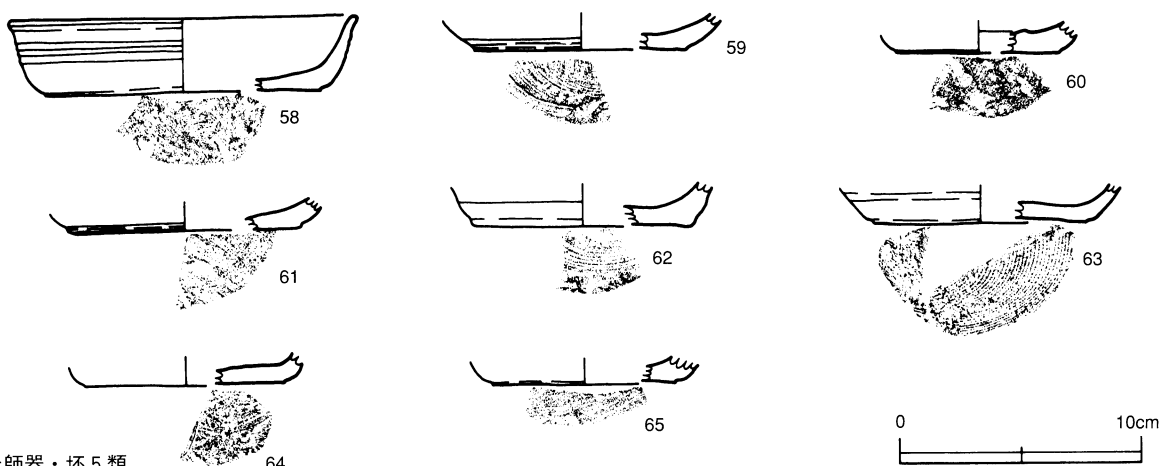
第153図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図1 (土師器・坏1)



土師器・坏3類

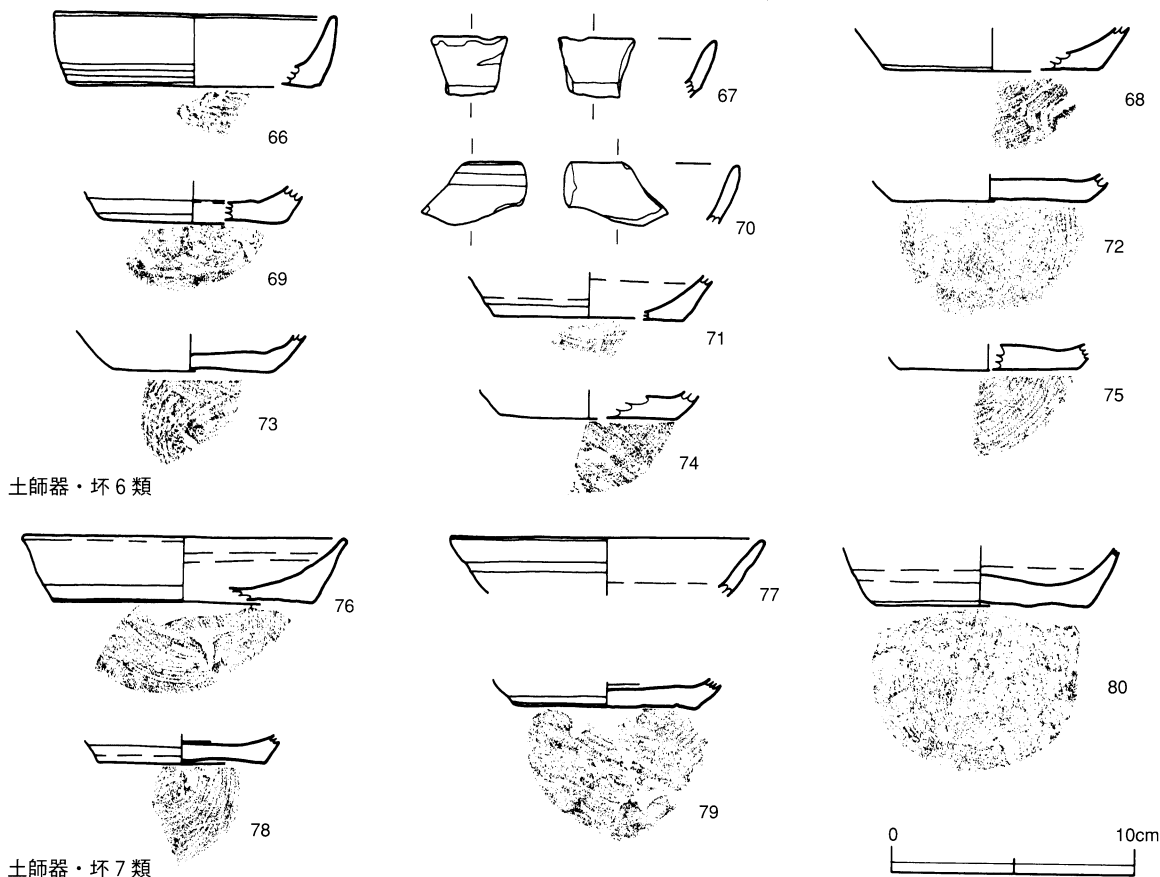


土師器・坏4類



土師器・坏5類

第154図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図2 (土師器・坏2)



第155図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図3 (土師器・坏3)

にかけの体部外面形態を示す資料は本遺跡では発見できなかった。

5類 (第154図58~65)

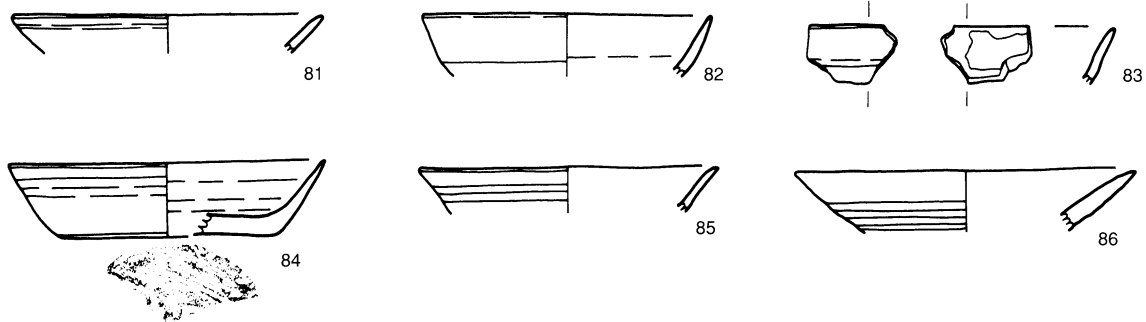
外面形態において底部と体部との境は直角に近い角度で屈曲し、ごく短く立ち上がり、体部下半部は強く内湾しながら体部上半部へ移行するタイプの坏 (59・61・63) を標準とする。体部外面が体部上半部から口縁部にかけて直立して移行し、口縁部は外反する (58) 形態に、また体部内面が体部下端部から口縁部まで内湾しながら立ち上がる形態になる。

6類 (第155図66~75)

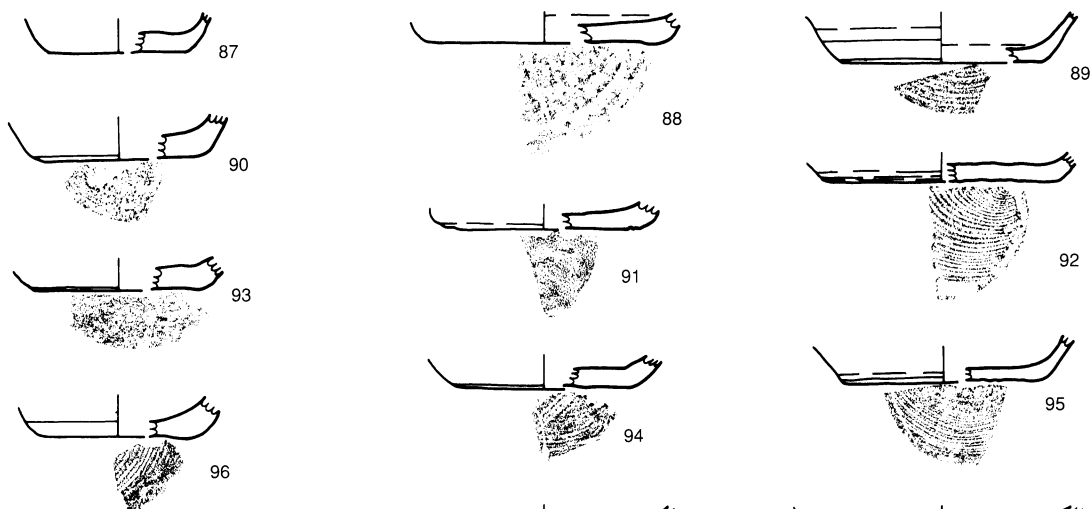
外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下半部は直線的に直立するか、やや外反して立ち上がるタイプの坏 (66) を標準とする。これらの多くは、体部外面が体部中程での屈曲はせずに、体部下半部から口縁部にかけて直立して移行する (66・67)、あるいはやや内湾気味に直立して移行する (70) 形態に、また体部内面が体部下端部から口縁部まで内湾しながら立ち上がる形態になる。

7類 (第155図76~80)

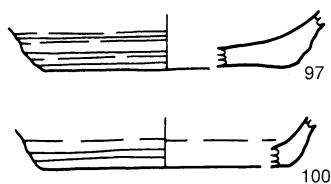
外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下半部は直線的に外反して立ち上がるタイプで、口縁部先端が尖るか、もしくは細くなる坏 (76・77) を標準とする。これらの多くは、体部外面が体部中程での屈曲はせずに、体部下半部から口縁部にかけて直線的に外反しながら移行する (76・80)、あるいはやや湾曲気味に外反して移行する (77) 形態に、また体部内面が体部端部から口縁部まで直線的に移行する (76) か、あるいはやや内湾しながら立ち上がる (79・80) 形態になる。



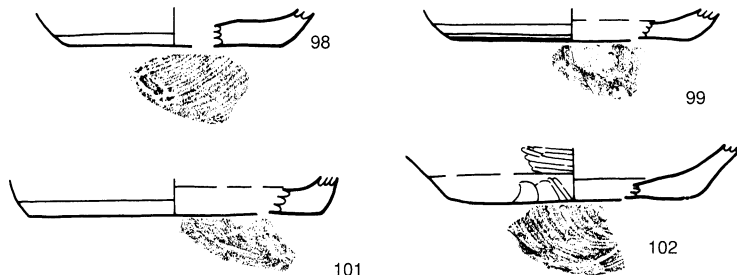
土師器・坏 8 類



土師器・小坏



土師器・大坏



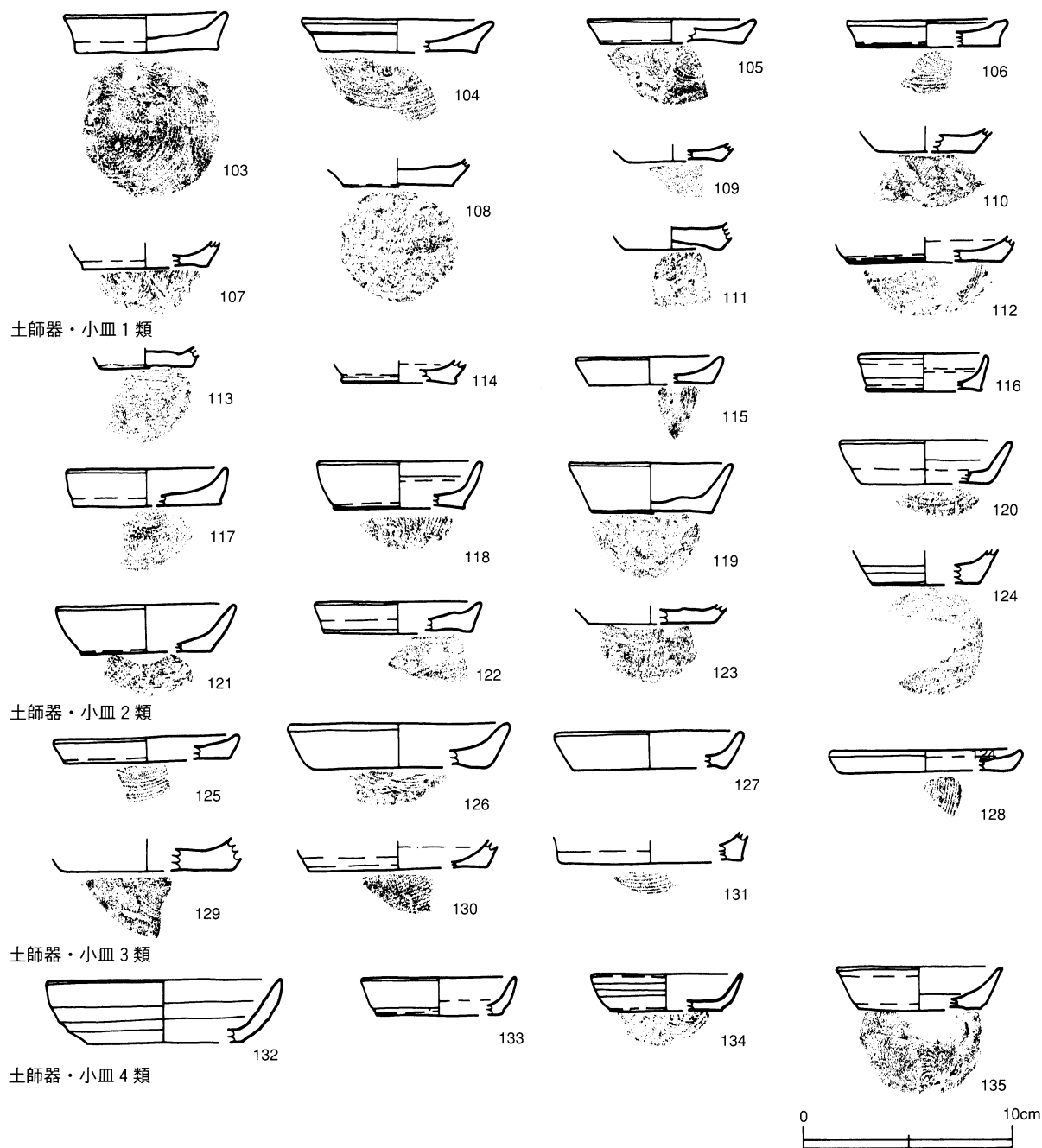
第156図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図 4 (土師器・坏 4)

8 類 (第156図81~86)

外面形態において底部と体部との境は丸味を持つため不明瞭であり、体部下半部は直線的に外反して立ち上がるタイプで、口縁部先端が尖るか、もしくは細くなる坏を標準とする。体部外面は体部上半部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がる (82) か、直線的に外反しながら移行する (84)、あるいはやや湾曲気味に外反して移行する (81・83・85) 形態になる。また体部上半部から口縁部にかけて大きく直線的に外反し、口縁部先端が尖るタイプ (86) もみられる。

小坏 (第156図87~96)

大坏 (第156図97~102)



第157図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図5(土師器・小皿)

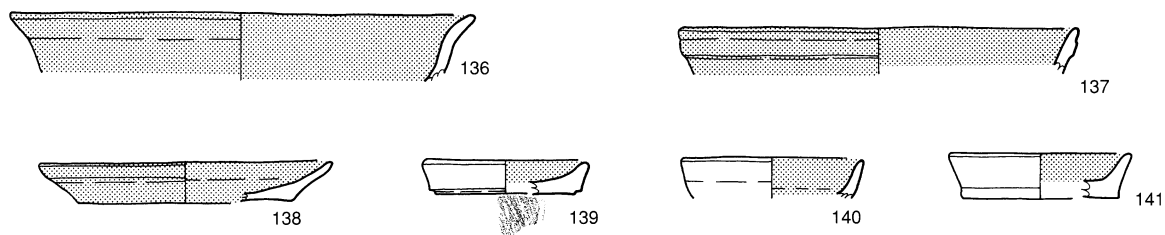
山ノ脇遺跡で出土した土師器小坏のうち10点を，土師器大坏のうち6点を資料化した。

小皿 (第157図103~135)

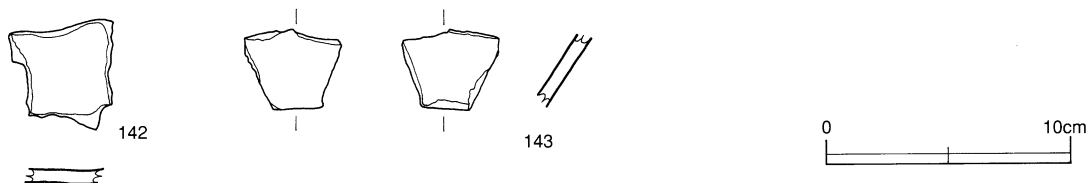
山ノ脇遺跡で出土した土師器小皿のうち，33点を資料化した。

1 類 (第157図103~112)

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し，体部は強く湾曲しながら外反して立ち上がり，口縁部が丸く収まるタイプの小皿 (103・104) を標準とする。



第158図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図6 (黒色土器・坏・小皿)



第159図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図7 (繊維土器)

2類 (第157図113~124)

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部は直線的に直立する (116・117) か、やや外反する (119~121) 形態を標準とする。本類に属する小皿には、器高が低いタイプ (115~117) と、器高が高いタイプ (118~121) との2種類がある。しかし共に口縁部は直線的に直立する (119・120) か、やや内湾気味に直立する (115・118) 形態になり、口縁部が丸く収まる特徴を有する。

3類 (第157図125~131)

外面形態において底部と体部との境は、丸味を持つため不明瞭であり、体部は直線的に外反する (125~128) タイプの小皿を標準とする。これらの多くは底径の大きさに比べ器高が低い特徴がある。

4類 (第157図132~135)

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下端部は湾曲しながら、あるいは直線的に外反して立ち上がるタイプで、口縁部先端が尖るか、もしくは細くなる小皿 (76・77) を標準とする。体部から口縁部にかけては、内湾しながら立ち上がる (132・133) か、あるいは直線的に外反しながら移行する (134・135) 形態になる特徴を有する。

(2) 黒色土器 (第158図136~141)

山ノ脇遺跡で出土した黒色土器では、器種は椀と坏と小皿とが出土した。椀と坏とは内外面共にススを吸着させる黒色土器Bに、小皿は内面だけにススを吸着させる黒色土器Aに属する。

椀 (第158図136・137)

136は体部上端が直線的に移行し口縁部が強く外反する形態になり、137は口縁部が玉縁状に肥厚する形態になる椀である。137は、いわゆる「玉縁口縁」の白磁椀を模した形態であろうか。

坏 (第158図138)

138は外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下端部は強く湾曲して外反し、体部下半部から口縁部にかけて直線的に外反し、口縁部先端が細くなるタイプの坏である。

小皿 (第158図139~141)

139~141は土師器小皿2類に属する。体部はやや内湾気味に直立する (140) か、やや湾曲して外反する (139・141)。口縁部は丸く収まる。器高が低い形態 (139) と器高が高い形態 (141) とがある。

第52表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世土師器(坏)

種別番号	番号	区	層	建物番号	細別	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	外面	内面	調整	その他	外面色	内面	種別	
153	5	B20	II	16	底形	(13.4)	(4)	(3.9)			ハケ→ナナ	ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	387	
	6	A16	II	371	口縁部	(11.4)	(7.7)	(2.25)			ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色～赤褐色	暗茶褐色	317	
	7	A21	b	2701	口縁部	(10.9)	(8.2)				ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	518	
	8	A21	b	2711	口縁部	(11.5)	(8)	(2.7)			石英を多く含む	ハケ→ナナ (一部ハナナ)	ナナ		底：回転糸切り	黒褐色～暗茶褐色	暗茶褐色	400
	9	C21	b	3909	口縁部	(12.2)	6.6				特に石英を多く含む	ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	355
	10	C21	b	3213	口縁部	(12.2)						ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	643
	11	A21	II	1781	口縁部	(12.2)	(8.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	12	C22	b	2906	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	13	C22	b	2906	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	14	C22	b	4107	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	15	C22	b	3020	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	16	B16	P6	619	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	17	C17	II	2567	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	18	C22	b	3095	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	19	C22	b	3095	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	20	C18	II	580	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	21	C21	b	3213	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	22	B14	II	1751	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	23	A21	II	1366	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	24	C21	b	3216	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	25	A21	II	2185	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	26	C21	b	2132	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	27	C21	b	2908	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	28	B20	b	497	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	29	B19	II	78	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	30	A16	II	33	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	31	C22	b	3245	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	32	C22	b	3340	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	33	C20	b	3345	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	34	B17	II	334	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
	35	A21	II	543	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612
36	C21	b	2279	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
37	C21	b	2285	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
38	C21	b	2285	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
39	C21	b	3091	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
40	D21	b	2547	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
41	C20	II	2002	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
42	B21	P6804	3935	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
43	B13	II	1839	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
44	C21	b	3198	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
45	C18	II	579	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
46	D21	b	3032	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
47	C21	b	2316	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
48	C21	b	2316	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
49	B19	P12	3060	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
50	D21	b	2544	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
51	B21	b	2758	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
52	C21	b	3518	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
53	C20	II	635	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
54	C14	II	1564	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
55	C21	b	2085	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
56	A15	II	974	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
57	C22	b	3194	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
58	C22	b	3199	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
59	B18	P7	3199	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
60	B-C21	溝-1	3188	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
61	C22	b	3188	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
62	C19	P2	1382	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
63	A21	II	584	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
64	C19	II	2780	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
65	D21	b	2780	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
66	C22	b	2963	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
67	C22	b	2963	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
68	C18	II	557	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
69	C12	II	2884	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
70	B22	b	2627	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
71	A14	II	76	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
72	C22	b	3018	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
73	A20	II	1416	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
74	C14	II	1593	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
75	B20	P3	369	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
76	C21	b	2969	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
77	C21	b	441	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
78	B16	II	2080	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
79	C21	b	2084	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	
80	B22	b	2700	口縁部	(11.4)	(7.6)					ハケ→ナナ	ハケ→ナナ		底：回転糸切り	暗茶褐色	暗茶褐色	612	

第53表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器（坏）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	調整			色調		実測図 No	
											外面	内面	その他	外面	内面		
156	81	C21	I b	2129	8類	口縁部～体部上半	(12.6)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		赤褐色	赤褐色～暗黄褐色	653	
	82	C21	I b	2549		口縁部～体部下半	(11.8)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色～明橙褐色	茶褐色～暗褐色	384	
		C22	I b	3093													
	83	B21	I b	2124		体部～口縁部						ハケ→ナデ	ナデ		茶褐色～暗茶褐色	赤褐色	555
	84	C21	I b	3268		底部～口縁部	(12.8)	(8.4)	(3)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：飯炊工具による切り離し	明黄褐色	明黄褐色	635
		C21	I b	3339													
		C21	I b	2914	口縁部～体部下半	(12.2)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗褐色～茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	386	
		C21	I b	2915													
	86	C20	II	2050	9類	口縁部～体部	(17.8)				石英を多く含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		橙褐色～暗黄白色	橙褐色～暗黄白色	646
	87	C21	I b	2086		底部～体部	(5.6)				石英を多く含む、赤粒を多く含む	ナデ	ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	明黄褐色	明黄褐色～暗褐色	647
	88	A21	I b	3750		底部～体部下端	(9.4)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄白色	371
	89	C17	II	327		底部～体部下半	(8.2)					ハケ→ナデ	ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	明橙褐色	明黄白色	418
	90	C18	溝内	1930		底部～体部下端	(5.1)					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	黒褐色～明黄白色	明黄白色～橙褐色	541
	91	C21	I b	3558		底部～体部下端	(7)					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	暗褐色	暗橙褐色	531
	92	A'21	II	1380		底部～体部下端	(8.9)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	明橙褐色	明橙褐色	397
	93	C22	I b	2258		底部～体部下端	(6.8)					ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	383
	94	C22	I b	3203		底部～体部	(7.1)					ハケ→ナデ	ナデ	底：回転系切り離し→飯炊器	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～暗赤褐色	417
	95	C11	b II	415		底部～体部下半	(8.2)					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	黒褐色	暗茶褐色	399
	96	C17	P6			底部～体部下半	(6.1)					ハケ→ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	黒褐色	暗褐色	309
	97	C21	I b	3553		底部～体部下半	(9.7)						回転ヘラナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	黒褐色～茶褐色
		C21	I b	3675													
98	A16	II	366	底部～体部下端	8.8						ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	赤褐色	赤褐色～黄白色	404	
99	B22	I b	2674			(9.6)				石英を多く含む	ナデ	ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	茶褐色	茶褐色	651	
100	C17	P6		底部	(10.1)					ハケ→ナデ	ナデ		赤褐色	明黄白色	361		
101	C21	I b	3324	底部～体部下半	(12)					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	黒褐色～暗赤褐色	556		
102	D20	II	2162	底部～体部下半	(9.8)					ミガキ	ナデ	底：回転系切り離し	暗茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色	419		

第54表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器（小皿）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	調整			色調		備考	実測図 No	
											外面	内面	その他	外面	内面			
157	103	C19	P7		1類	口縁部～底部	(7.6)	(1.9)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗褐色～黄白色	暗褐色～黄白色		360	
	104	C14	II	1584		底部～口縁部	(8.9)	(7.5)	(1.5)		ハケ→ナデ	ナデ		橙褐色～明黄白色	暗褐色～暗黄褐色		403	
	105	B16	II	389		底部～口縁部	(7.8)	(6.8)	(1.1)		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	黒褐色～暗黄褐色	明橙褐色～暗黄褐色		627	
	106	B17	II b	1257		底部～口縁部	(7.5)	(6.7)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色		554	
	107	C20	II	2016		底部～体部下半	(5.9)					ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	暗茶褐色	暗橙褐色		628
		C20	II	2025														
	108	C22	I b	2967		底部～体部下半	5.2					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗橙褐色	明橙褐色		365
		C22	I b	2965														
	109	C21	I b	3429		底部～体部	(4.4)					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	赤褐色～黄白色	黄白色		380
	110	C21	I b	2891		底部～体部	(4.6)					ハケ→ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	暗赤褐色	暗赤褐色		547
	111	A16	P1			底部～体部下端	(4.6)					ナデ	ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	赤褐色	赤褐色		348
	112	C21	I b	3341		底部～体部下端	(7.2)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	赤褐色	赤褐色		630
		B20	II	3483														
	113	A	II	1401	底部～体部下端	4.2					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ヘラナデ	暗茶褐色	暗茶褐色		395	
	114	B22	I b	2634	底部～体部下端	(5.2)					ナデ	ナデ	底：回転系切り離し→飯炊器による切り離し	赤褐色	赤褐色		621	
		C22	I b	2997														
	115	B14	II	855	口縁部～底部	(6.8)	(5.8)	(1.3)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色		407	
	116	B18	II	269		底部～口縁部	(5.8)	(5.4)	(1.7)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	黒褐色～赤褐色	赤褐色		652
	117	A'21	II	1406	定形	(7.4)	(6.9)	(1.7)			ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	明橙褐色～黄白色	明橙褐色		412	
	118	C19	溝内	1920	定形	(7.1)	(6)	(2.2)			ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	赤褐色～暗黄褐色	暗橙褐色～暗褐色		406	
	119	C22	I b溝	3609	定形	(7.6)	(5.6)	(2.3)			ナデ	ナデ	底部：ナデ	暗橙褐色	暗橙褐色		519	
	120	C21	I b	3534	底部～口縁部	(8)	(5.8)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	黄褐色	黄褐色～暗茶褐色		545	
		D21	I b	2488														
	121	C21	I b	3228	口縁部～底部	(8.2)	(6.1)	(2.15)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	暗黄褐色～赤褐色	暗黄褐色～赤褐色		617	
	122	C14	II	1574	口縁部～底部	7.8	7	1.3			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色		537	
	123	C21	I b	3550		底部～体部下端	(6)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗黄褐色～赤褐色	暗黄褐色～赤褐色		372
	124	C21	I b	2955	底部～体部下半	5					ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色		626	
		C22	I b	3000														
	125	B16	P3		底部～口縁部	(8.6)	(7.8)	(1.1)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗褐色～暗黄褐色	黄褐色		633	
	126	B17	III b	1256	口縁部～底部	(10.4)	(8.4)				ナデ	ハケ→ナデ		暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～赤褐色		373	
	127	A'21	II	1341	底部～口縁部	(8.7)	(7.2)	(1.75)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：ナデ、見込み：ナデ	黒褐色～赤褐色	暗黄白色～暗茶褐色		650	
	128	B16	P3		口縁部～底部	(8.9)	(8)	(1)			ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色		351	
129	D19	II	1938	底部～体部下端	(8)					ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	赤褐色		416		
130	B20	P4		底部～体部下半	(8.5)					ハケ→ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	赤褐色	赤褐色		349		
131	C19	P7		底部～体部	(8.8)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗黄褐色～赤褐色	暗橙褐色	口縁がわずかに欠損	354		
132	A'21	II	1285	底部～口縁部	(11)	(7.4)	(2.9)			回転ヘラ	回転ヘラ	底：回転系切り離し	暗茶褐色～暗橙褐色	暗橙褐色～暗黄褐色		618		
133	C20	II	1977	底部～口縁部	(7.1)	(6.1)	(1.75)			ハケ→ナデ	ていねいなナデ	底：回転系切り離し→ナデ	橙褐色～黄褐色	黄褐色～茶褐色		654		
134	B21	I b	2177	底部～口縁部	(7.1)	(5.2)	(1.7)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗褐色～暗灰褐色	暗褐色～暗黄褐色		410		
135	A20	II	2	底部～口縁部	(7.6)	(5.7)	(1.95)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	茶褐色	茶褐色		632		
	A20	II	3455															

第55表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器（黒色）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	調整			色調		備考	実測図 No	
												外面	内面	その他	外面	内面			
158	136	C21	I b	2103	椀	-	口縁部～体部					ミガキ	ミガキ		暗褐色～黒褐色	暗褐色		448	
	137	C20	II	2020			口縁部	(15.9)					ミガキ	ミガキ		暗褐色～暗黄褐色	黒褐色～暗黄褐色	口縁に漆状の形を呈する	442
	138	B20	溝	767	坏	-	口縁部～底部	(11.8)	(8.7)	(1.6)		石英を多く含む	ミガキ	ミガキ		暗褐色～灰褐色	灰褐色～暗黄褐色		444
	139	A19	II	70			底部～口縁部	(6.4)	(5.7)	(1.35)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗褐色	暗褐色		437
	140	B22	溝内	4655	小皿	2類	口縁部～体部(下)	(7.2)					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色～赤褐色	黒褐色～暗黄褐色		449
	141	A'20	II	1495			口縁部～底部	7	6.3				ナデ	ハケ→ナデ		黄白色	黒褐色		439

第56表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期特殊繊維土器

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	胎土	調整			色調		実測図 No
								外面	内面	その他	外面	内面	
159	142	B13	II	690	-	底部	砂・繊維を多量に含む	布で覆われ不明	布で覆われ不明	回転系切り離し	暗褐色～暗黄白色	暗茶褐色～暗黄白色	574
	143	B13	II	1691		体部	多量の繊維が表れている	ナデ	ナデ			黒褐色	黒褐色～白灰色

(3) 繊維土器 (第159図142・143)

142と143は、内外面まで繊維が露出するほど、胎土に多量の繊維を含む土師器坏で、同一個体の蓋然性があり「繊維土器」とした。142は回転糸切り離し痕がある上げ底を呈する底部。143は、外面に布目の痕跡がある体部である。

(4) 須恵器 (第161図144～159)

山ノ脇遺跡出土の須恵器には、生産地不明の坏・壺・甕と、主観的雰囲気から東播系須恵器と考えられる鉢とがある。須恵器の出土分布図 (第160図) をみると、20～22区で主に出土している。山ノ脇遺跡からはいずれも断片的な資料が出土しただけであった。

坏 (第161図144・145)

山ノ脇遺跡では須恵器の坏が2点出土した。144は体部～口縁部片。体部中程で強く屈曲し、体部上半部から口縁部は湾曲しながら外反する形態で、土師器1類の器形に酷似する。145は底部～体部下半片。底部には回転糸切り離しの痕跡が残る。外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部下半は僅かに湾曲しながら外反して立ち上がる形態で、土師器1類の器形に酷似する。

甕 (第161図146・149)

146は胎土が精選され、若干暗黄褐色が入る灰白色の色調を呈する口縁部片。口縁部は胴部から直接外反する。口縁端部にはヘラ状工具で1条凹線を施し、その後先端が細い工具でもう1条横位方向に凹線を巡らし、口唇部先端が尖る。149は胎土に砂粒を含み、長胴形を呈する胴部片である。

壺 (第161図147・148・150)

いずれも肩部～胴部上半部片。147・148は内外面共にナデ調整が行われ、特に内面は丁寧なナデ調整である。胎土には細かい白色粒や赤色粒が混じるが、良く精選され、器壁は特に薄く仕上げられている。150は外面調整で異方向の格子目タタキが、内面調整でナデ調整が行われる。

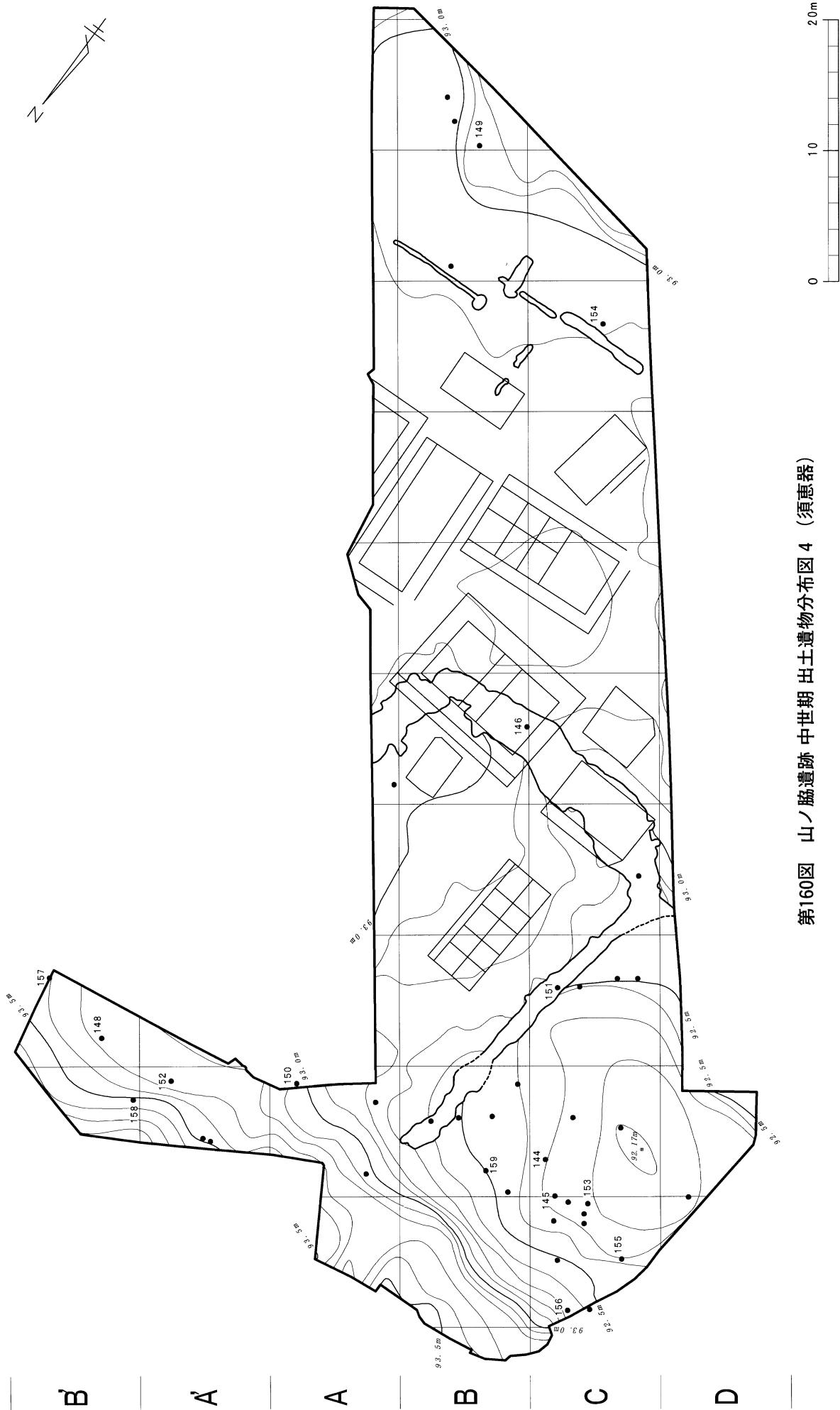
鉢 (第161図151～159)

151は外反が弱い口縁部で、口縁端部が直立し下方へ拡張しない。口縁端部外面はヘラ調整のため窪む。口縁端部外面と口縁部とに自然釉が付着。152・154は若干外反する口縁部で、外面に丸味のある口縁端部が上方へ拡張し、下方へも僅かに発達する。口縁部と口縁端部との内面の境は滑らかで、稜を形成しない。153は緩やかに外反する口縁部で、口縁端部が上下に大きく拡張され「く」字状に近い縁帯を形成する。155・157・158は大きく外反し立ち上がる底部。155には回転糸切り離し痕がある。156は内湾しながら立ち上がる底部。159は大きく外反し立ち上がる底部。おろし目がある。

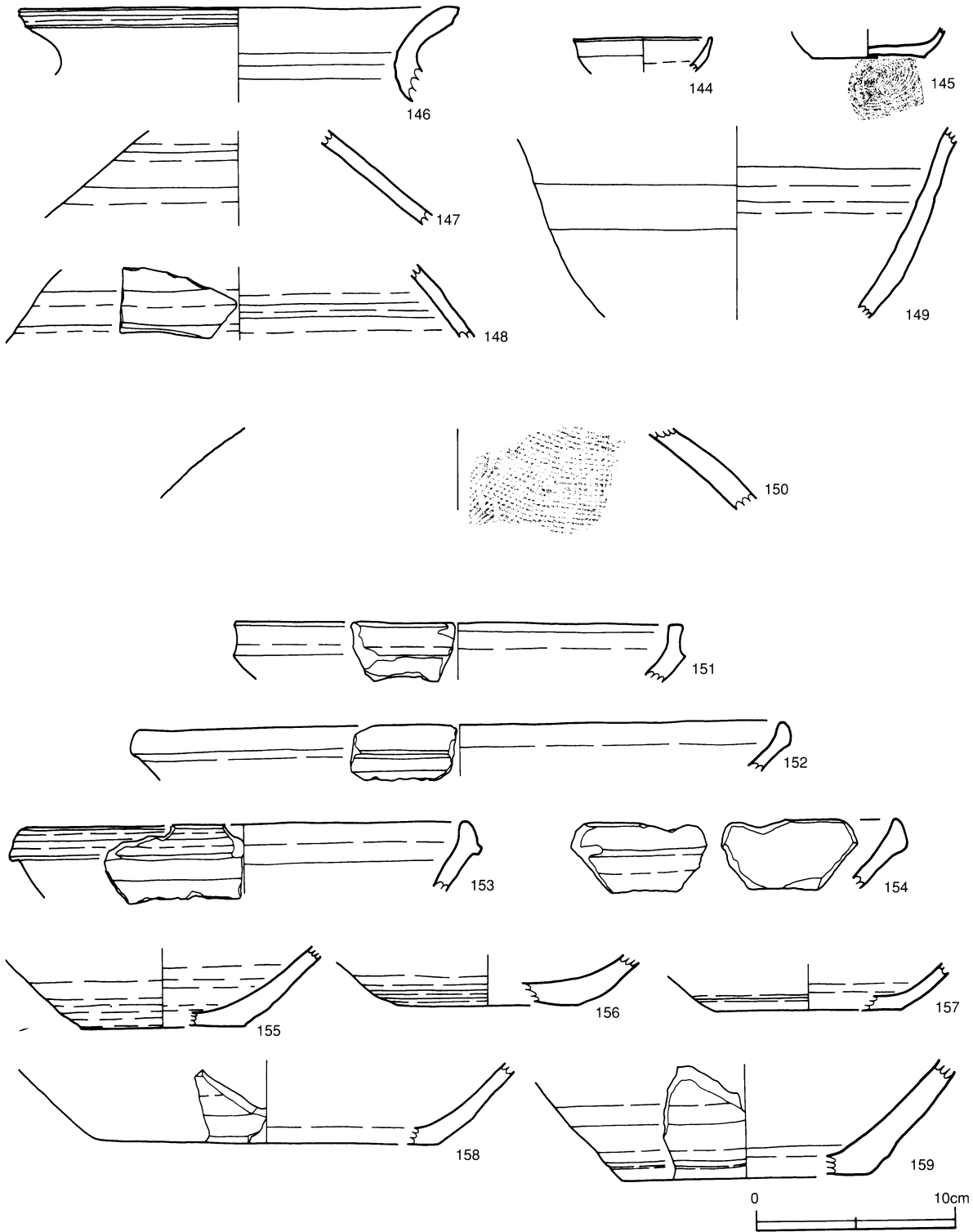
第57表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期須恵器

挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整			色調		備考	実測図 No	
												外面	内面	その他	外面	内面			
161	144	C 21	I b	3168	甕		口縁部～体部	(6.8)				ハケ→ナデ	ナデ		灰白色～暗褐色	暗褐色～暗茶褐色		432	
	145	C 21	I b	2136	甕		底部～体部下半	(5.6)				ナデ	ナデ	底：回転糸切り離し	灰褐色～明黄褐色	灰褐色～明黄褐色		436	
	146	B 18	溝	771	甕		口縁部～頸部	21.8				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		灰褐色～黒褐色	灰白色～暗黄褐色		824	
	147	B 13	Ⅲ a	1696	甕		肩部			19.4		ナデ	ヘラナデ→ナデ		暗茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗黄白色		575	
	148	A' 20	Ⅱ	1279	甕		肩部					ハケ→ナデ	ていねいなナデ		暗灰白色	暗灰白色		564	
	149	B 13	Ⅱ	1644	甕		体部			21.6		礫石を多く含む	ナデ	ヘラナデ→ナデ		暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色		561
	150	A 21	Ⅱ	1407	壺		肩部					細砂粒を多く含む	異方向の平行タタキ	ナデ		灰褐色～暗黄褐色	灰白色～暗黄白色		578
	151	T 4	Ⅲ a	41	鉢		口縁部	(22.4)				細砂粒を多く含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		灰褐色～暗緑褐色	灰褐色～暗緑褐色		655
	152	A' 21	Ⅱ	1332	鉢		口縁部～体部上端	(32)				細砂粒を多く含む	ハケ→ナデ	ハケナデ→ナデ		灰白色～暗黄褐色	灰褐色		472
	153	C 22	I b	3006	鉢		口縁部～体部上半	(21)				砂粒を多く含む	ナデ	回転ヘラナデ		黒褐色～灰褐色	黒褐色～暗茶褐色	内面：口縁肥厚部に自然釉がかかる	471
	154	C 15	Ⅱ	1123	鉢		口縁部～体部上半					細砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ナデ		灰褐色～灰白色	灰白色		825
	155	C 22	I b	3074	鉢		底部～体部下半	(8.2)				砂粒・細砂粒を多く含む	ヘラナデ→ナデ	ていねいなナデ		灰褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～灰褐色		565
	156	C 22	I b	2321	鉢		底部～体部下半	(9)				石英を多く含む	回転ヘラ→ナデ	ていねいなナデ		灰褐色～暗黄褐色	灰褐色		476
	157	A' 22	Ⅱ	1277	鉢		底部～体部下半	(9.2)				砂粒を含む	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ		黒褐色～灰褐色	灰白色		474
	158	A' 2	Ⅱ	1283	鉢		底部～体部下半	(16.2)				細砂粒を含む	ハケ→ナデ	ていねいなナデ		灰褐色～灰白色	灰白色～灰褐色		475
	159	B 21	I b	2364	鉢		底部～体部下半	(12.4)				細砂粒を含む	指頭瓦根→ナデ	ハケ→ナデ		灰白色	灰褐色		461

23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



第160図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 4 (須恵器)



第161図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図8 (須恵器)

(5) 瓦質土器 (第163図～第166図)

山ノ脇遺跡で出土した瓦質土器のうち42点を資料化した。器種は播鉢と鉢とが出土した。出土分布図(第162図)をみると、B・C-21・22区を中心とした方形区画溝状遺構の西側区域と、13～14区を中心とした溝状遺構の外側区域とに集中しており、この状況は中世遺物の出土傾向と同様である。

播鉢 (第163図～第165図160～192)

山ノ脇遺跡で出土した瓦質土器播鉢の形態には次の4種類がある。この分類に従いみていく。

1類は口縁端部外面を丸く肥厚させる形態。口縁屈曲部はまだ形成されない。内面にはハケメ調整の痕跡が残り、その上におろし目が付くことが多い。

2類は口縁部を厚くし、さらにその直下を削り、肥厚を強調する形態。口縁屈曲部を形成するが、形態は丸い。口唇端部は尖る。底部～体部は湾曲しながら外反する。内面はハケメ調整後ナデ調整。

3類は口縁部を厚く、端部形態は隅丸形に仕上げる。口唇端部を窪ますことで突起表現を行う。底部～体部は直線的に開く。

4類は体部から口縁部にかけて直線的に外へ開く形態。口縁端部を角形に仕上げ、器壁は薄い。体部外面にヘラケズリ痕を明瞭に残す。内面は丁寧なナデ調整で、ハケメ調整の痕跡はみられない。

160～172は還元焼成の瓦質土器播鉢である。160～167は口縁部片。大きさには口径が30cm以上ある形態(160・161・170～172)と、口径が20cm前後ある形態(162～169)との2タイプがある。内面には5～7条が1単位となる櫛目状のおろし目が搔き上げられる。163・167は1類に属し、外面には指頭押圧などの成形痕が残る。161・164～166は2類に属する。160・162は4類に属する。168～172は体部片。169は体部下端が丸くなり、体部は外反する。168・170・171は3類に属し、体部は直線的に開き、外面の調整痕がほとんどみられない。172は体部外面にヘラケズリ痕を明瞭に残す。

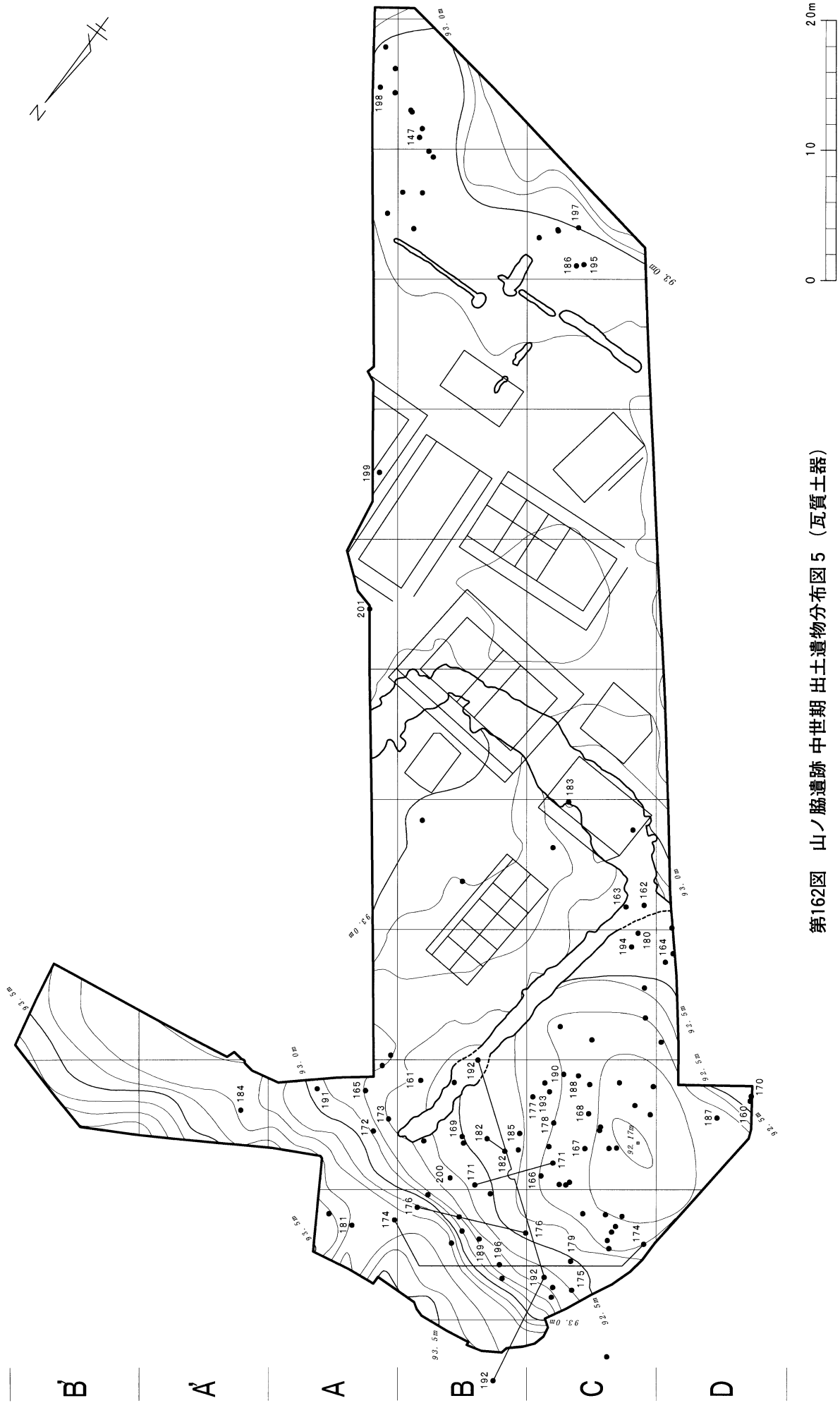
173～183は酸化焼成の瓦質土器播鉢である。173～177は口縁部片。177は1類に属し、調整は極めて粗い。174は2類に属し、体部下半が湾曲し外反する。173・176は3類に属し、内面は丁寧なナデ調整が行われ、ハケメ調整の痕跡はみられない。175は口縁部に三角形の突帯を貼りつけた形態。軽石製石鍋木戸編年3類-cを模したか。178～183は体部片。181～183は2類に属し、体部下半が湾曲して外反する。178は3類に属し、体部が直線的に開く。180は4類に属し、体部下端部までヘラケズリ痕が明瞭に残る。

184～192は還元焼成の瓦質土器播鉢で体部下半部～底部片。186・188は底部から体部下半へ丸味を持ちながら立ち上がる。内面はハケメ調整が残る。184・185・191・192は2類に属し、体部下端が指頭圧痕調整により、湾曲し体部が外反する。内面はハケメ調整後ナデ調整が行われるが、ハケメ調整痕が残る。192には5本1単位の櫛目状のおろし目が施される。187は3類に属し、底部から体部へ直線的に立ち上がる。189・190は平底を呈する底部。見込み部に5本1単位の櫛目を施す。

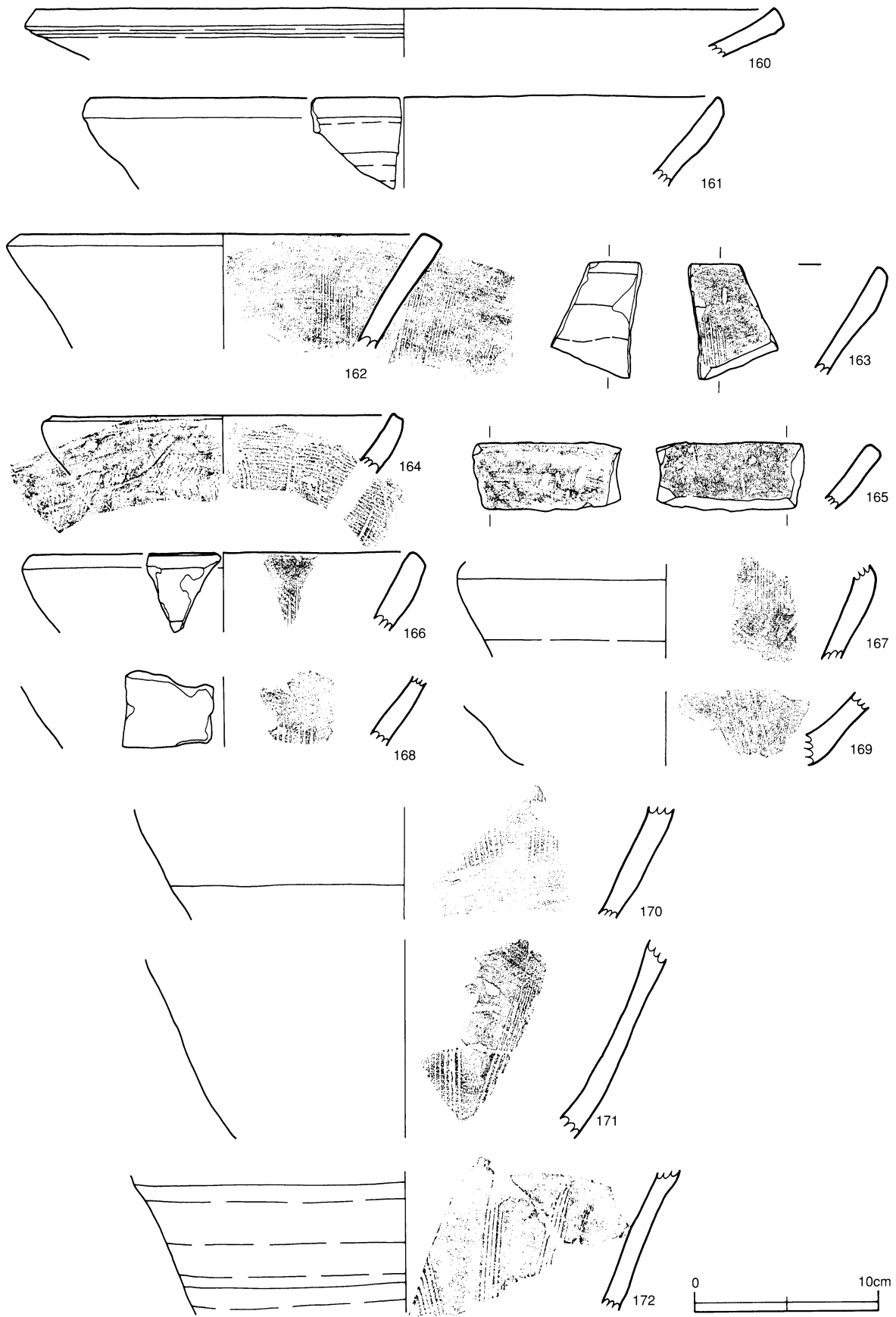
鉢 (第166図193～201)

内面に櫛目状のおろし目を施さず、ハケメ調整を行う鉢形土器である。分類は山ノ脇遺跡播鉢分類に準じる。193～195は2類に属し、内面は斜方向の細かい調整。193は特に口縁端部が薄い。196は3類に属し、口縁部がやや内傾する。内面は横方向の調整。199～201は硬質の瓦質土器。199は底部～体部下半の資料。底部は回転糸切り離し調整が行われ、底部から体部へ丸味をもち、体部は外反。200は3類に属する片口鉢。内面は横方向の調整。201は酸化焼成の硬質瓦質土器。口縁部にかけ内湾する。

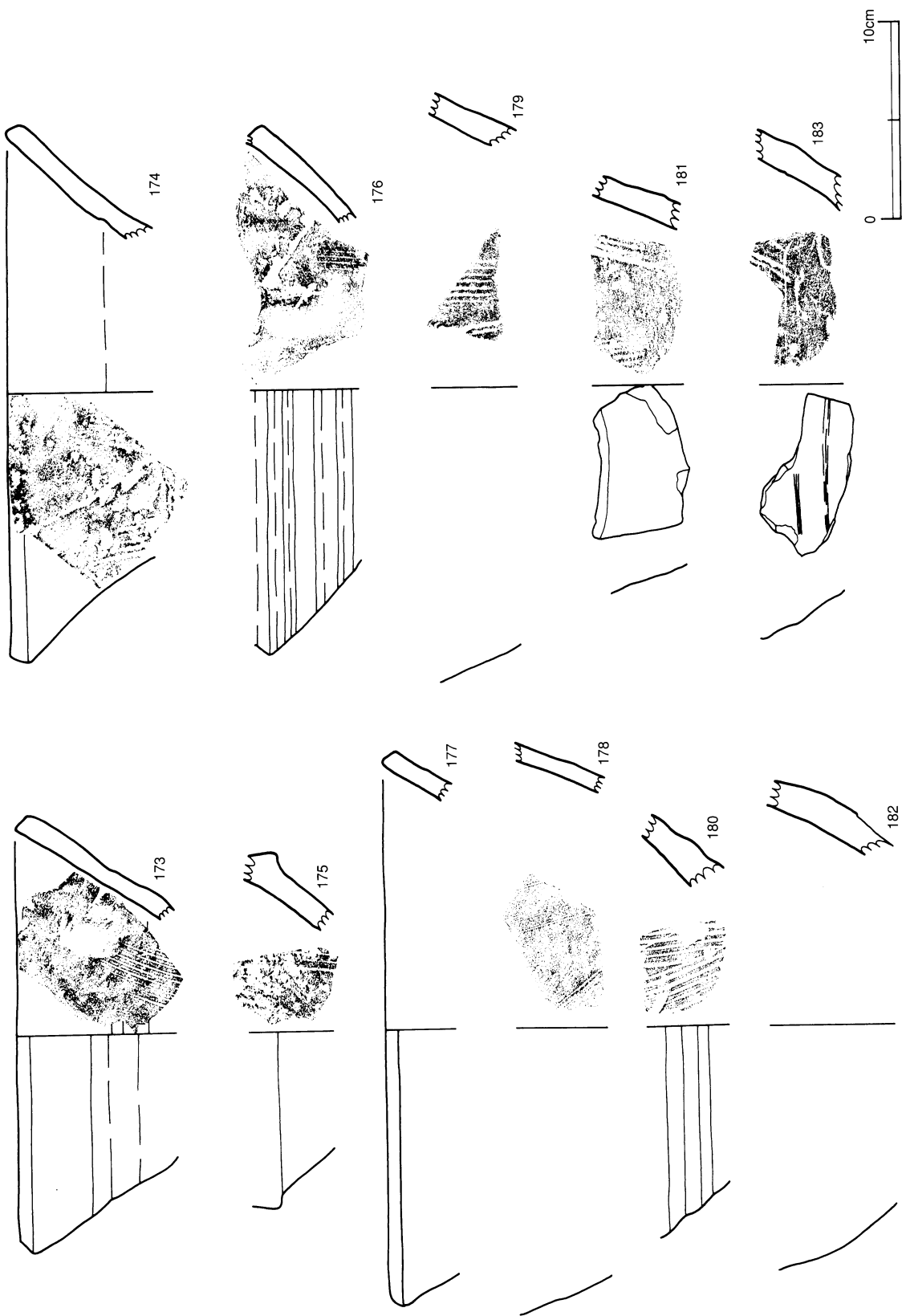
23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12



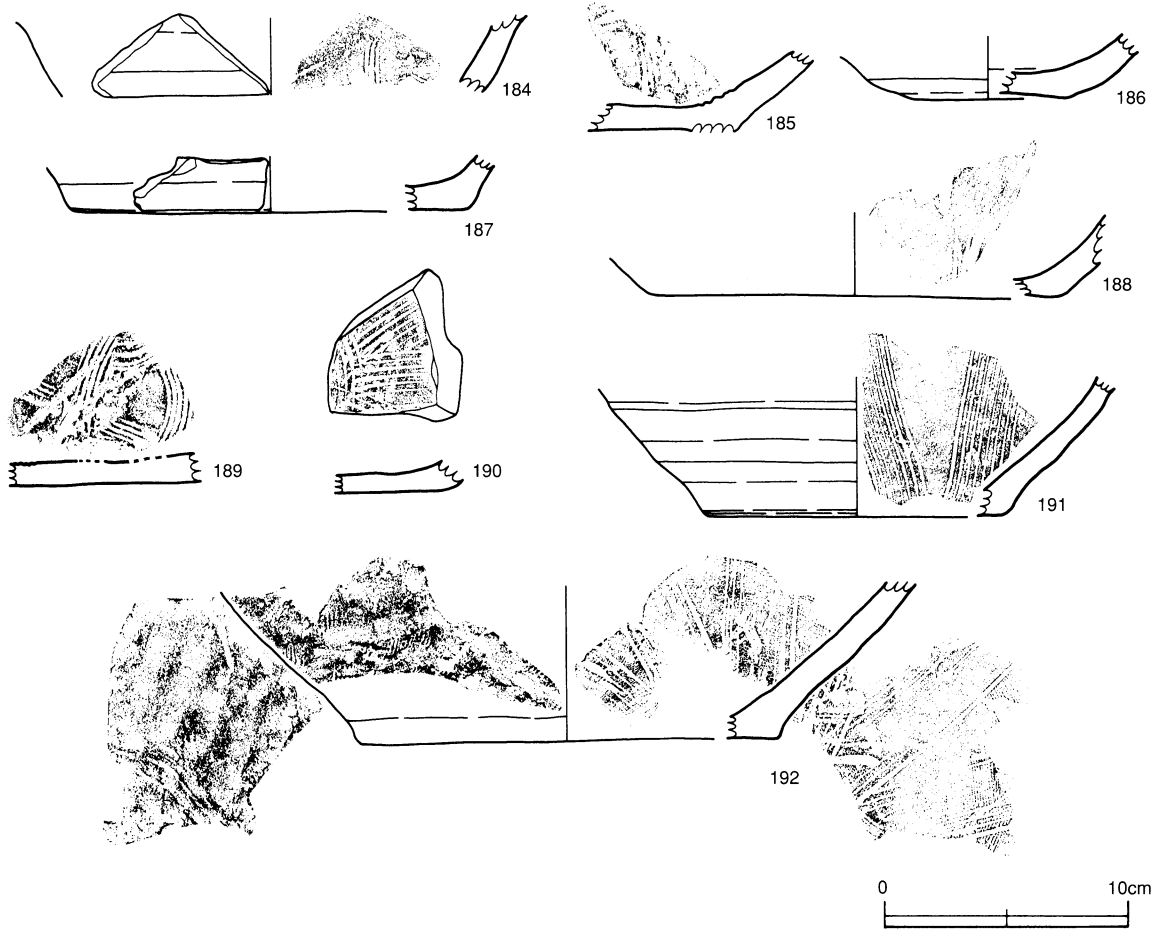
第162図 山ノ脇遺跡 中世期出土遺物分布図5 (瓦質土器)



第163図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図9 (瓦質土器1・播鉢1)



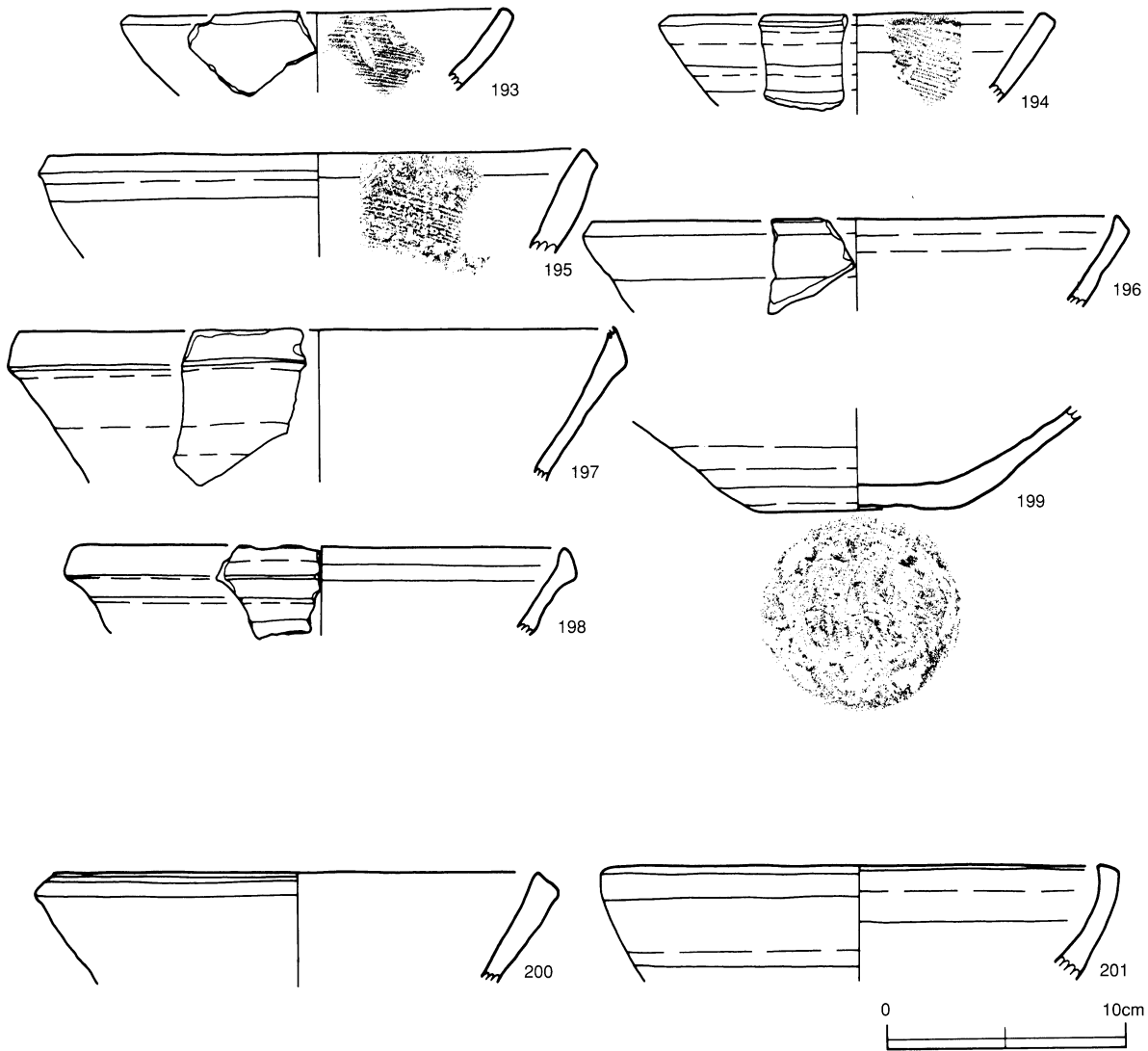
第164図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図10(瓦質土器 2・挿鉢 2)



第165図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図11(瓦質土器3・播鉢3)

第58表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器(播鉢)

挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No	
											外面	内面	外面	内面		
163	160	D21	I b	3812	4類	口縁部~体部	(39.9)			細砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色	暗黄褐色~灰白色	468	
	161	B21	II溝内	4709	2類	口縁部~体部上半	33.8			細砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色~暗黄褐色	灰褐色	470	
	162	C19	溝	618	4類	口縁部~体部	(21.6)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色	灰白色	827	
	163	C19	溝	619	1類	口縁部~体部				細砂粒を多く含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色	灰白色~暗褐色	826	
	164	C20	II	5016	2類	口縁部~体部上半	(18.5)				上:ヨコハケ→ナデ, 下:右上がりハケ→ナデ	ヨコハケナデ→摺いナデ	灰白色~暗黄白色	灰褐色~灰白色	469	
	165	A21	II	5060		口縁部				砂粒を含む	ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色~灰褐色	灰褐色	466	
	166	C21	I b	2134	1類	口縁部~体部上半	(20.5)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色	灰白色~暗黄褐色	559	
	167	C21	I b	3665		口縁部付近~体部		22.5			ハケ→ていねいなナデ	ハケ→ていねいなナデ	灰色	灰色	567	
	168	C21	I b	2913	3類	体部					ハケナデ→ナデ	ケズリ→ナデ	灰褐色	黄白色~灰白色	560	
	169	B21	I b	2359	-	体部下端~底部上端		21.8			指頭圧痕→ていねいなナデ	ハケ→ていねいなナデ	灰褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~黄白色	568	
	170	D21	硬化面	3811	-	体部下半		29.1			指頭圧痕→ナデ	ハケ調整→ナデ	灰褐色~暗黄褐色	黄白色~灰色	562	
	171	B21	I b	2315	3類	体部			28.1			指頭圧痕→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色~暗黄褐色	灰褐色~灰白色	456
	172	C21	I b	3288												
	173	A21	I b	2734	3類	体部上半			29.6		ナデ	ナデ(表面は作業のため ていねいにナデられている)	暗黄白色	灰褐色~暗黄褐色	463	
	164	173	A21	II	2441	3類	口縁部~体部	(20.8)				ハケ→ナデ/指頭圧痕→ナデ	ハケナデ→ナデ	明黄白色	明黄白色	454
		174	C22	I b	3105	2類	口縁部~体部	(25.9)				ナデ	ナデ	橙褐色~暗橙白色	橙褐色~灰褐色	520
A22		ビット内	4327													
175		C22	I b 五把溝	3607	3類	口縁部~体部上半			17.8		ナデ	ハケナデ→ナデ	茶褐色~赤褐色	暗黄褐色~赤褐色	526	
176		C22	I b	2453		体部			26.5	細砂粒を多く含む	指頭圧痕→ナデ	ハケ→ナデ(磨耗のため)	灰褐色~暗黄褐色	黒褐色~灰白色	457	
177		B21	I b	2126	3類	口縁部~体部上半	(27)				ナデ	ナデ	赤褐色~黄白色	灰白色	625	
178		C21	I b	3316		体部						ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色~黄白色	暗褐色~黄白色	572
179		C22	I b	2971	3類	体部			29.5		ハケナデ→ナデ	ナデ	暗褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~暗褐色	570	
180		C20	II	2183	4類	体部下端			21.2	赤色粒を多く含む	指頭圧痕→ナデ	ナデ	暗黄褐色~茶褐色	暗黄褐色~茶褐色	571	
181		A22	I b	3764	2類	体部					ナデ	ナデ	灰褐色~暗橙褐色	灰褐色~暗黄褐色	566	



第166図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図12(瓦質土器 4・鉢)

第59表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器 (搗鉢)

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No	
											外面	内面	外面	内面		
164	182	B21	I b	2149	2類	体部下半			24.5		ナデ	ナデ	黒褐色～黄褐色	赤褐色～黄白色	624	
	B21	I b	2718	体部						細砂粒を多く含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～橙褐色	橙褐色～明黄白色	522	
	183	C19	溝	468	2類	体部			18.5		指頭押圧→ナデ	ナデ	暗黄褐色	灰褐色～暗黄褐色	573	
	A'21	II	1371	底部～体部下半							ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗紫褐色～暗茶褐色	灰白色～暗黄褐色	459	
165	185	B21	I b	3176	3類	底部～体部下半			(18.5)		細砂粒を多く含む	ハケナデ→ナデ	ていねいなナデ	灰白色	灰白色～暗黄褐色	579
	C14	II	1566	底部～体部下端					(21.8)		ナデ	ハケ→ナデ	灰褐色	灰白色	523	
	187	D21	I b	3371	3類	底部～体部下半			(16.4)		細砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	灰褐色～暗黄褐色	563
	C21	I b	3564	底部							ナデ	ナデ	暗黄褐色	灰白色～暗黄褐色	460	
	189	B22	I b	2283	3類	底部(底面)						ナデ	ハケナデ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	明黄褐色	455
	190	C21	I b	3528		底部～体部下半				(12)		指頭圧痕→ナデ	ハケナデ→ていねいなナデ	灰白色	灰白色～暗黄褐色	464
	191	A'21	II	1476	2類	底部～体部下半						細かいハケ→ナデ	細かいハケ目 16/1.2cm	灰白色～暗黄褐色	暗黄褐色～灰白色	458
	C22	I b	2324	底部～体部下半					(17.1)		細砂粒を含む	指頭圧痕→ナデ				
		192	B22	I b	3615	2類	底部～体部下半									
	B21	I b	3744	底部～体部下半												

第60表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器 (鉢)

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No	
										外面	内面	外面	内面		
166	193	C21	I b	2105	2類	口縁部～体部上半	17.7			ナデ	ナデ→細かいハケ目	暗黄白色	暗褐色～明黄白色	462	
	194	C20	II	2186		口縁部～体部	(15.9)			細砂粒を含む	ナデ	木製工具によるハケ目	灰白色～暗黄褐色	灰白色～暗黄褐色	465
	195	C14	II	1568	3類	口縁部～体部上半	(22.8)			ナデ	ハケナデ→ナデ	暗黄褐色～灰褐色	灰褐色	467	
	196	B22	I b	2620		口縁部～体部上半	22.2				ハケナデ→ナデ	ハケ→強いナデ	灰褐色	暗褐色	580
	197	C14	II	1581	3類	口縁部～体部上半	(25.2)				ナデ	ヘラナデ→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄白色	473
	198	A13	II	1767		口縁部～体部上半	(20.6)				ハケ→ナデ	ナデ	灰褐色～灰白色	灰白色	569
	199	A16	II	370	3類	底部～体部			(8.2)		ユビオサエ→ナデ	回転ヘラ→ナデ	灰白色～暗黄褐色	灰白色～暗黄褐色	823
	200	B22	I b	2699		口縁部～体部	20.5				ナデ	ハケナデ調整	暗黄白色	暗褐色～暗黄白色	638
	201	A17	III a	2608	3類	口縁部～体部上半	(20.4)				ナデ	ヘラ状工具→ナデ	黒褐色～暗黄褐色	黒褐色～茶褐色	639
						口縁部～体部上半									

(6) 磁器

山ノ脇遺跡で出土した磁器には青磁と白磁とがあった。青磁は龍泉窯を中心とした中国南部産の磁器で、器種には椀と皿と袋物とがあった。白磁はいわゆる「口禿の白磁」と呼ばれる磁器で、器種には椀と皿とがあった。出土分布図（第167図～第168図）をみると、B・C-20～23区を中心に出土する傾向が認められそうである。

青磁（第169図～第170図）

椀（第169図～第170図207～232）

山ノ脇遺跡で出土した青磁椀のうち、26点を資料化した。207～212は体部から口縁部にかけての資料である。207～211は体部は腰が張らず底部へ移行する。体部外面には鎬蓮弁文が施され、弁の中心線は稜をなす。体部内面は無文である。口縁部器形は、207・210ではやや外反し、208・209・211では直行する。大宰府編年椀Ⅱ-bに属する。212は口縁部がやや内湾する直口縁である。胎土は緻密で灰白色で、釉は翡翠色を呈する。体部内外面ともに無文である。大宰府編年椀Ⅲ-1Aに属する。213～218は底部片である。213・214は高台器形が角高台をなす。内面見込み外周には段を有し、圏線が巡る。体部外面文様では下端まで鎬蓮弁文が施される。釉薬は高台内面まで施釉後掻き取る。大宰府編年椀Ⅱ類に属する。215は高台器形が細く尖り気味になる。見込み部には圏線が施される。見込み部外周には段を有さない。大宰府編年椀Ⅲ類に属するか。216～218は高台器形が角高台をなし、外面端部に面取りが行われる。内面見込み外周には段が設けられない。内面見込み部には草花文が印文される。大宰府編年椀Ⅳ類に属する。219～225は口縁部が外反器形を呈し、体部内外面共に無文である。222～225は体部外面に回転ヘラケズリ痕が観察できるが、219～221では釉が厚く観察できない。大宰府編年椀Ⅲ-1類あるいはⅣ類に、上田編年D-I（222～225）・Ⅱ（219～221）に属する。226～228は口縁部上端外面に雷文帯があり、その直下と体部内面とに刻線が施される。上田編年C類に属する。229・230は篋先による細線の線描蓮弁文が施される。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識していることから、上田編年B-Ⅳ類に属する。従来の編年観によれば、これらの青磁椀は13世紀代から15世紀代の資料である。

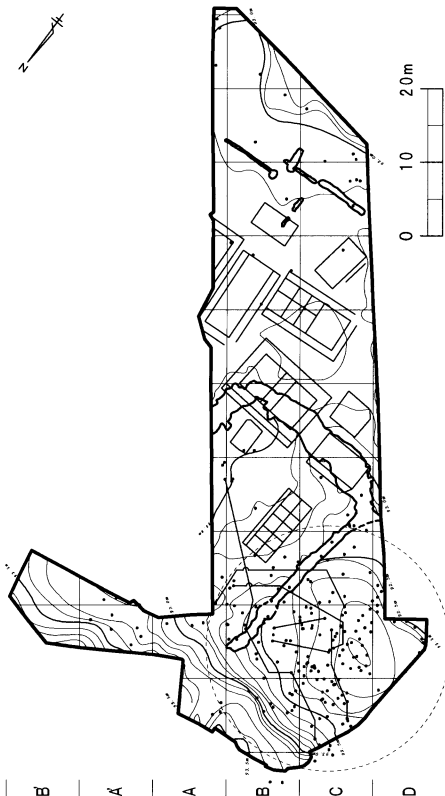
浅形椀・皿（第170図233～236）

233は口縁部器形はやや内湾器形を呈し、端部は丸く収める。腰の張りは弱い。体部・口縁部内外面共に無文である。高台豊付・内部および見込み部は釉が掻き取られている。小椀より器高が低いので本類に分類した。234・235は底部～体部下半片である。高台器形は角高台をなす。外面端部に面取りが行われる。見込み部外周に破談が設けられない。236は高台が細く尖り気味で低い。体部下位で腰が張る。釉は厚く、胎土は暗灰色を呈する。

袋物（第170図237, 238）

水注あるいは壺など具体的な器形が不明な器種を総称した資料である。

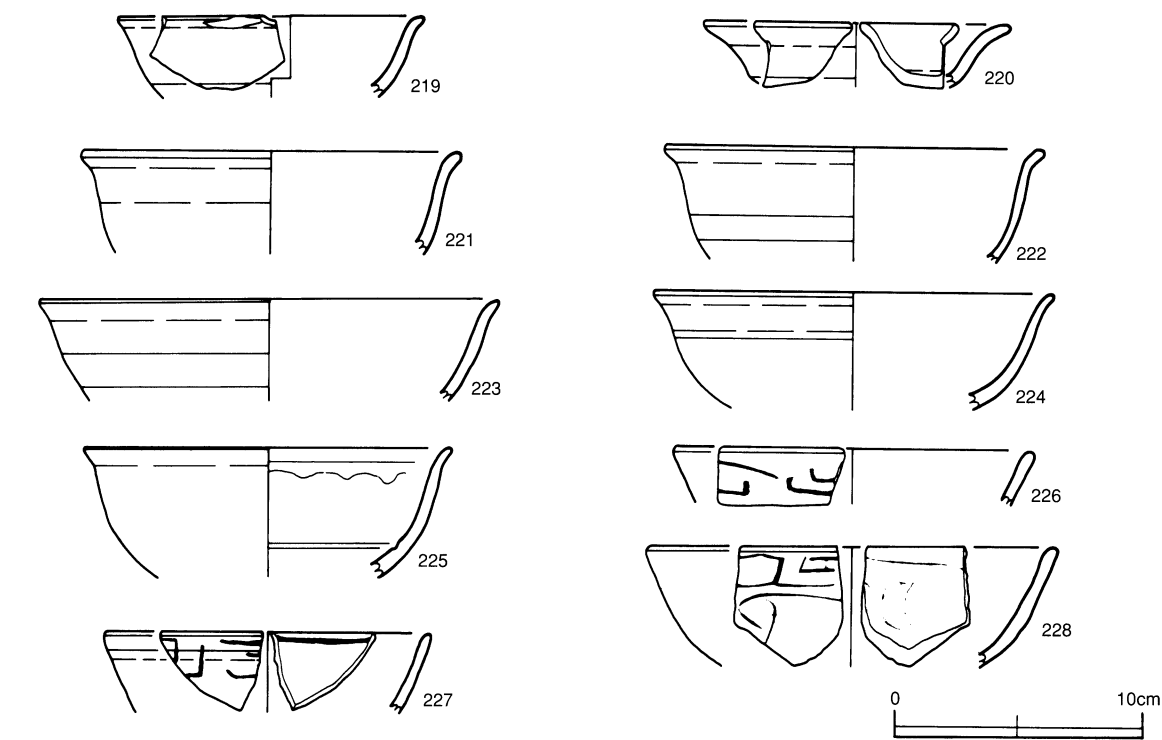
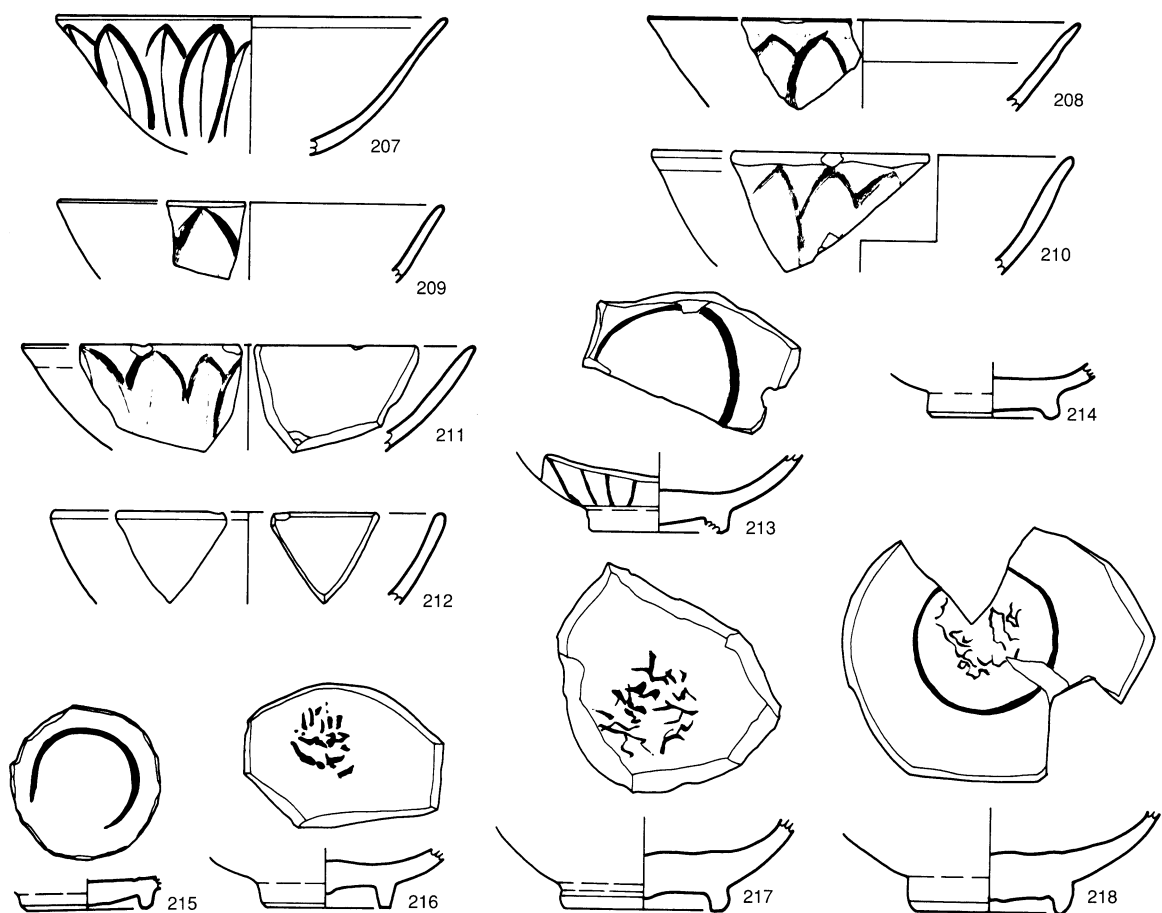
237は高台は小型で角高台をなす、豊付け部分のみ釉を剥ぐ。器形は、体部下位で腰が張り、屈曲部に1か所のみ「足」がつく。内面見込み部は段を有し窪むが、底部から体部への移行は滑らかである。238は頸部から肩部・体部上端にかけての資料である。器形は、頸部から肩部への移行は、外面では滑らかであるが、内面には稜が付く。頸部から体部への移行は、外面には稜が付くが、内面は滑らかである。



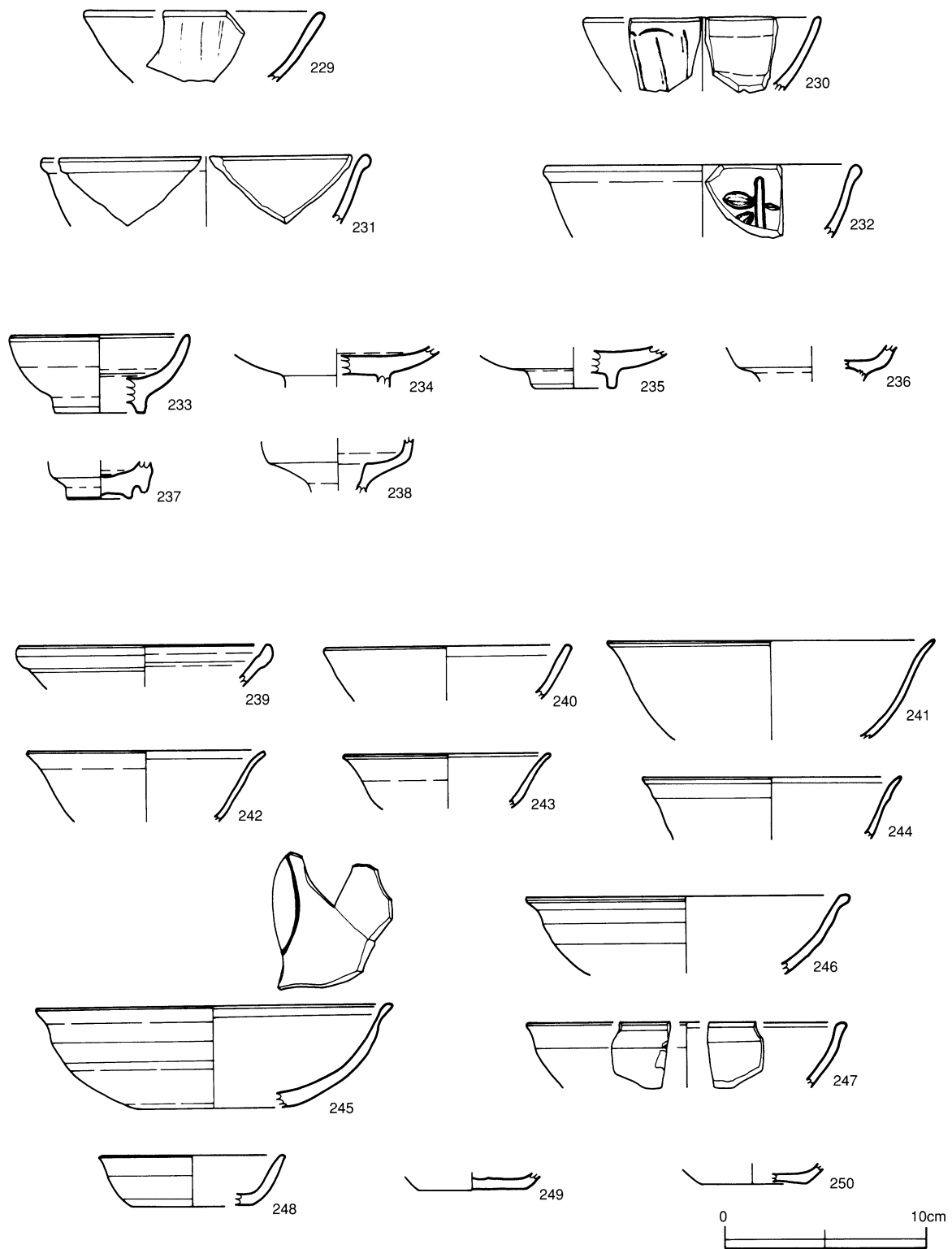
拡大図 1



第168図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物分布図 6-1 (磁器 2)



第169図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図13(磁器・青磁1)



第170図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図14(磁器・青磁2・白磁)

白磁 (第170図)

椀 (第170図239~247)

239は口縁部が大きい玉縁を呈す。大宰府編年椀Ⅳ類に属する。240~244は口縁部が外反し、体部が丸味を帯びる。口縁部の釉を削る「口禿げ」白磁。大宰府編年椀Ⅸ類に属する。241は体部外面下位から施釉がなく、大宰府編年椀Ⅸ-2類に属する。245~247は体部が内湾し、口縁部が外反する。245は見込み外周に段を付け、体部外面下位は施釉されない。大宰府編年椀Ⅺ類に属する。

皿 (第170図248~250)

248は口縁部が僅かに外反し、端部は口禿げ。体部下位は施釉されない。大宰府編年皿Ⅸ-2類に属する。249・250は僅かに上げ底の底部は全面施釉される。大宰府編年皿Ⅸ-1類に属する。

第61表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期青磁 (椀・浅形椀)

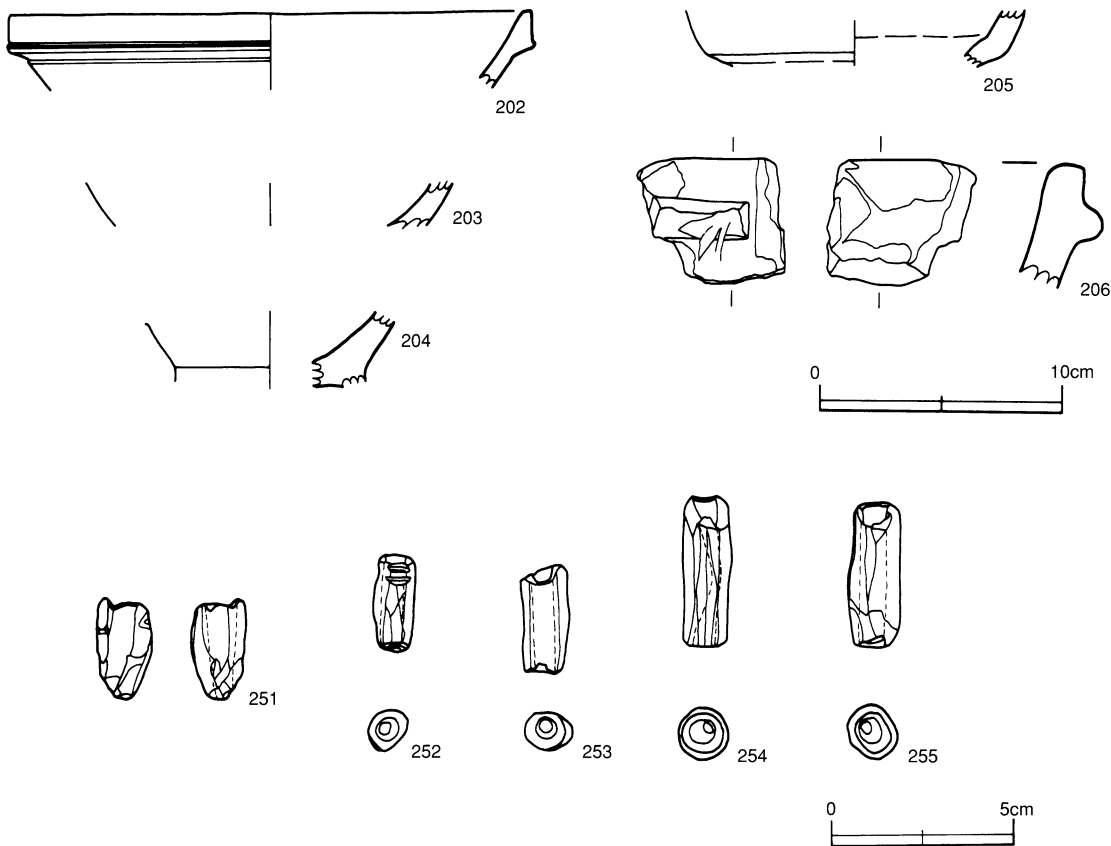
挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	色 調			実測図 No	
									外面	内面	磁胎		
169	207	T 14	Ⅱ	86		口縁部~体部	16		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	709	
	208	T 13	イモ穴			口縁部~体部下半			オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	665	
	209	B 20	P 2			口縁部~体部	15.6		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	678	
	210					口縁部~体部	(17)		灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰白色	602	
	211	C 22	溝内	5574		口縁部~体部	(18.3)		灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰白色	613	
	212	B 20	Ⅱ	22		口縁部~体部	(15.8)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	606	
	213	A 22	上坑内	3767		底部~体部下半		(5.4)	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰色	593	
	214	B 16	Ⅱ	394		底部		(5.4)	緑灰色	緑灰色	灰白色	594	
	215	B 20	I b	3487		底部		5.8	オリーブ灰色	灰オリーブ色	灰黄色	676	
	216	B 19	P 7			底部		(5.3)	オリーブ灰色	明緑灰色	灰白色	674	
	217	B 22	Ⅳ	4739		底部		(6.5)	緑灰色	緑灰色	灰白色	672	
	218	B 21	Ⅱ	2763		底部~体部下半			6	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰色	704
		B 21	I b	2645									
		A 19	Ⅱ	68									
		C 22	I b	2322									
	219	C 21	I b	2875		口縁部~体部	(12.4)		オリーブ灰色	緑灰色	灰黄色	610	
	220	C 21	I b	2089		口縁部~体部	(12.3)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰黄色	601	
	221	C 20	溝内	1915		口縁部~体部	(15.2)		緑灰色	緑灰色	灰色	605	
	222	C 23	溝内	5560		口縁部~体部	(15.4)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰黄色	609	
	223	C 20	Ⅱ	2188		口縁部~体部	(18.5)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰色	611	
	224	B 21	I b	3914		口縁部~体部	(16)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	612	
	225	D 21	Ⅱ	2487		口縁部~体部下半	14.8		灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰白色	699	
	226	C 22	I b	3152		口縁部~体部上半	14.2		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	607	
	227	T 6	表			口縁部~体部	(13.4)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	608	
	228	C 21	I b	2889		口縁部~体部	(16.2)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	603	
	229	C 21	I b	2181		口縁部~体部	(11.6)		オリーブ灰色	灰オリーブ色	灰白色	598	
	170	230	C 22	I b	2613		口縁部~体部			オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰黄色	600
		231	C 22	I b	2255		口縁部~体部	(16)		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	705
232		C 22	I b	3103		口縁部~体部	15.4		オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	604	
233		C 21	I b	3413		完形	(8.75)	(4.5)	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	595	
234		C 22	I b	2248		底部			緑灰色	オリーブ灰色	灰黄色	596	
235		B 21	I b	2376		底部		(4.2)	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	597	
236		B 20	P 14			底部			オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	679	

第62表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期青磁 (袋物)

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	底径 cm	調 整			実測図 No
								外面	内面	磁胎	
170	237	C 20	溝	658		底部	3.2	オリーブ灰色	灰黄色	灰白色	675
	238	B 18	P 4					緑灰色	緑灰色	灰白色	677

第63表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期白磁

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	部位	口径 cm	底径 cm	調 整			色 調				実測図 No
									外面	内面	外面	内面	磁胎	その他		
170	239	B 21	I b	2379	椀	口縁部~体部上端	(12.6)			灰白色	灰白色	灰白色			707	
	240	C 19	Ⅱ	2218		口縁部~体部上半	(12.6)				灰色	灰白色	灰白色	口ハゲ部：にぶい黄色	599	
	241	C 17	P 5			口縁部~体部	16.3	回転ヘラ調整痕が明瞭に残る	回転ヘラ調整痕が明瞭に残る	灰白色	灰白色	灰白色	口ハゲ部：灰黄色	670		
	242	B 18	上坑	13		口縁部~体部	11.9	回転ヘラ調整→ナデ	ていねいなナデ	灰色	灰色	灰白色	口ハゲ部：明黄褐色	667		
	243	B 16	Ⅱ	386		口縁部~体部	10.3	ていねいなナデ	ていねいなナデ	灰白色	灰白色	灰白色	口ハゲ部：にぶい黄色	664		
	244	B 18	Ⅱ	232		口縁部~体部	12.8	回転ヘラ調整→ていねいなナデ	回転ヘラ調整→ていねいなナデ	灰白色	灰白色	灰白色	口ハゲ部：暗黄褐色	666		
	245	C 21	I b	3238		皿	口縁部~底部	(17.9)			灰白色	灰白色	灰白色		834	
		B 20	I a	3735												
	246	P 21	I b	3420		口縁部~体部	(16.4)				灰白色	灰白色	灰白色		708	
	247	B 21	I b	2146		口縁部~体部	15.6				灰白色	灰白色	灰白色		706	
	248	B 20	Ⅲ	18		底部~口縁部		回転ヘラ調整	ていねいなナデ	灰白色	灰白色	灰白色	口ハゲ部：明黄褐色	663		
	249	B 16	Ⅱ	420		底部	(5.4)				灰白色	灰白色	灰黄色		673	
	250	C 22	I b	3115		底部~体部下半	5	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	灰白色		668		



第172図 山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物実測図15(滑石製品・石鍋・石錘)

第64表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期滑石製品

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	脚基部径 cm	最大径	実測図 No
172	202	A' 21	II	1336	石鍋		口縁部～体部	21.25			766
	203	B23	溝	3831	石鍋		体部			15	764
	204	B22	I b	2478	碗		底部～体部下半		(7.8)		767
	205	B21	I b	2341	石鍋		体部下半			13.8	765
	206	C17	P5		石鍋		口縁部～胴部上端				768

第65表 山ノ脇遺跡出土遺物一覧表・中世期滑石製石錘

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	最大長 cm	最大径 cm	内径 cm	重量 g	実測図 No
172	251	C20	溝	768	石錘		2.7	(1.5)	(0.6)	3.72	839
	252	C15	II	402	石錘		2.6	1.1	0.6	4.67	840
	253	C18	溝	571	石錘		2.9	1.3	0.6	5.88	841
	254	B16	II	385	石錘		4.1	1.4	0.7	11.17	842
	255	B18	II	267	石錘		3.9	1.4	0.7	11.33	838

(7) 滑石製品 (第172図202～206, 251～255)

滑石製石鍋 (第172図202～206)

山ノ脇遺跡では5点出土した。206は斜めに立ち上がる口縁部下に削り出しの鏝が巡る。鏝はやや垂下し、その断面形は不等辺台形を呈す。木戸編年Ⅲ類-bに属す。202～204は同一個体か。202は口縁部片。斜めに立ち上がる口縁部の上端に平坦面を作る。その直下には、断面三角形の削り出しの鏝が巡る。鏝の先端部は台形状。204は体部下端部片。底部付近から垂直に立ち上がる体部下端部は、強く屈曲し体部へ直線的に外反する。木戸編年Ⅲ類-e-1に属す。外面スス付着。

滑石製石錘 (第172図251～255)

山ノ脇遺跡では5点出土した。外面は面取り調整され、端部は丸く仕上げる。252・253の端部と252の体部には糸ずれ痕と考えられる切れ目が観察できる。長さが短い形態と長い形態とがある。

第6章 西原遺跡の調査

西原遺跡では、調査の結果、縄文時代、古代および中世の時期に属する遺構・遺物がみつかった。そのうち、縄文時代の遺構では、早期に属する集石遺構や、前期～晩期に属する集石遺構や土坑などが、古代の時期の遺構では焼土や井戸状遺構などが検出された。また中世の時期の遺構では溝状遺構や数多くのピットなどが検出された。

第1節 縄文時代の調査

西原遺跡における縄文時代の調査は、アカホヤ火山灰の軽石層であるⅢc層を挟んで、下層のⅣ層・Ⅴ層から縄文時代早期の時期に属する遺構・遺物が、上層のⅢb層・Ⅲa層から縄文時代前期から晩期にかけての遺構・遺物がみつかった。

1 縄文時代早期の調査

西原遺跡における縄文時代早期の調査は、主にアカホヤ下層のⅣ層・Ⅴ層で行われた。また上層のⅢb層・Ⅲa層からも早期に属する土器が出土した。これらは古代・中世期における遺構掘削に伴い上層に持ち上げられたと考えられ、本遺跡の所産と判断した。

遺構では集石遺構2基が検出され、遺物では土器が出土した。

(1) 検出遺構

縄文時代早期に属する集石遺構が2基検出された。

1号集石遺構

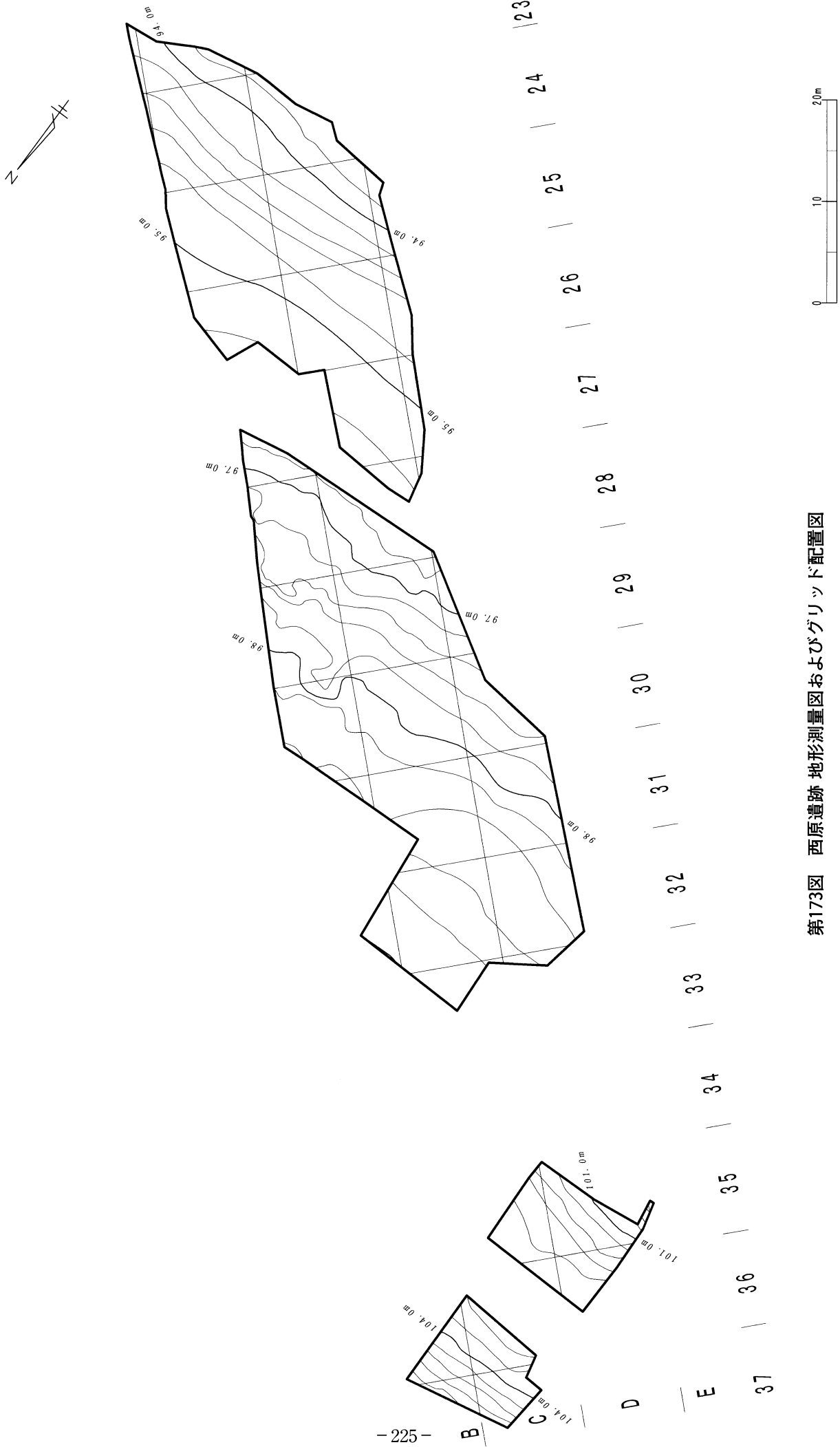
BC-26区Ⅳ層で検出された集石遺構である。145cm×100cmの範囲内に散乱した状態で、17個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大、石材の多くが凝灰岩および軽石で構成されている。礫の多くは赤化あるいは黒化し、熱を受けた様相を示すものの、破碎した礫はあまりみられなかった。範囲内に炭化粒が多くみられた。

2号集石遺構

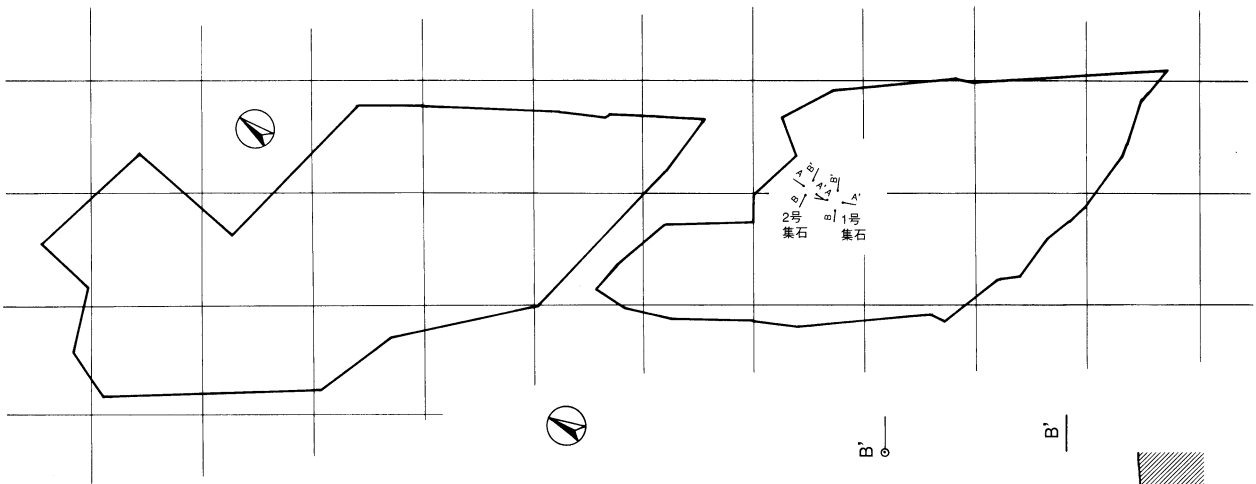
BC-26区Ⅳ層で、1号集石遺構に隣接して検出された集石遺構である。122cm×94cmの範囲内に散乱した状態で、20個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大、石材の多くが凝灰岩および安山岩で構成されている。ほとんどの礫は赤化し、熱を受けた様相を示すものの、破碎した礫はあまりみられなかった。遺構範囲内や周辺には炭化粒がほとんどみられなかったのが、1号集石遺構と異なる特徴である。あるいは、1号集石遺構の構成礫を廃棄した場であったか。

(2) 出土遺物

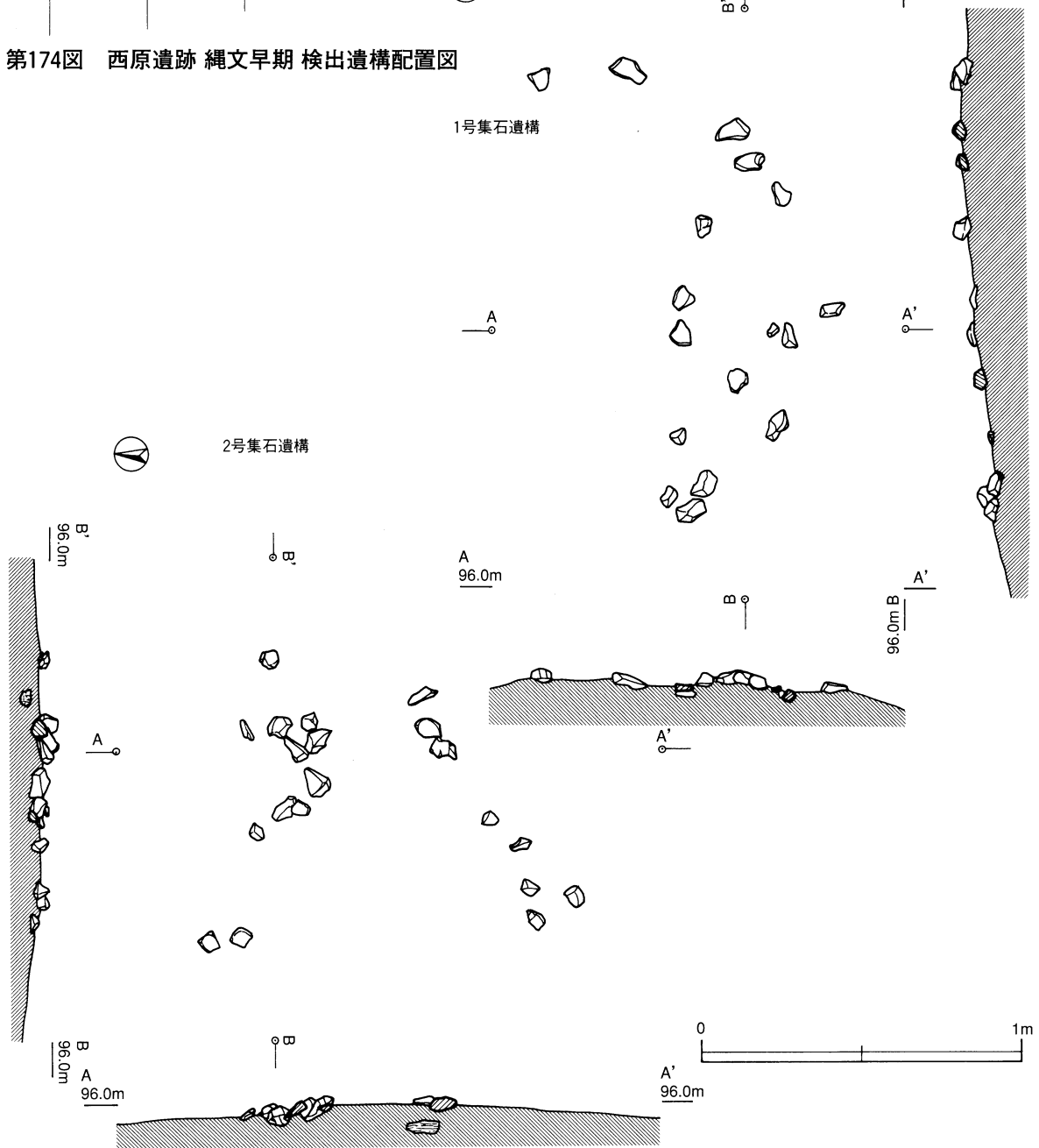
1～4は口径5cm程度に収まる口縁部で、外反気味に直口し、口唇部は丸くおさめる。口唇部及び外面に格子状の押型文を施す。口径とその形状から壺形土器に復元される。5～10は間隔を置いて撚糸文を施文し、その両脇を沈線で縁取りする。空白部分には蛇行した沈線を垂下させる塞ノ神A b式土器である。12・13は、頸部に2本の筋をもつ貝殻腹縁を、斜めから突き刺しながら連点状に巡らす塞ノ神B式土器である。16・17は5本の単位をもつ櫛状の工具で、横線の間には2段の波状文を描く。この様な文様手法は、種子島に標式遺跡のある苦浜式土器にみられるものである。



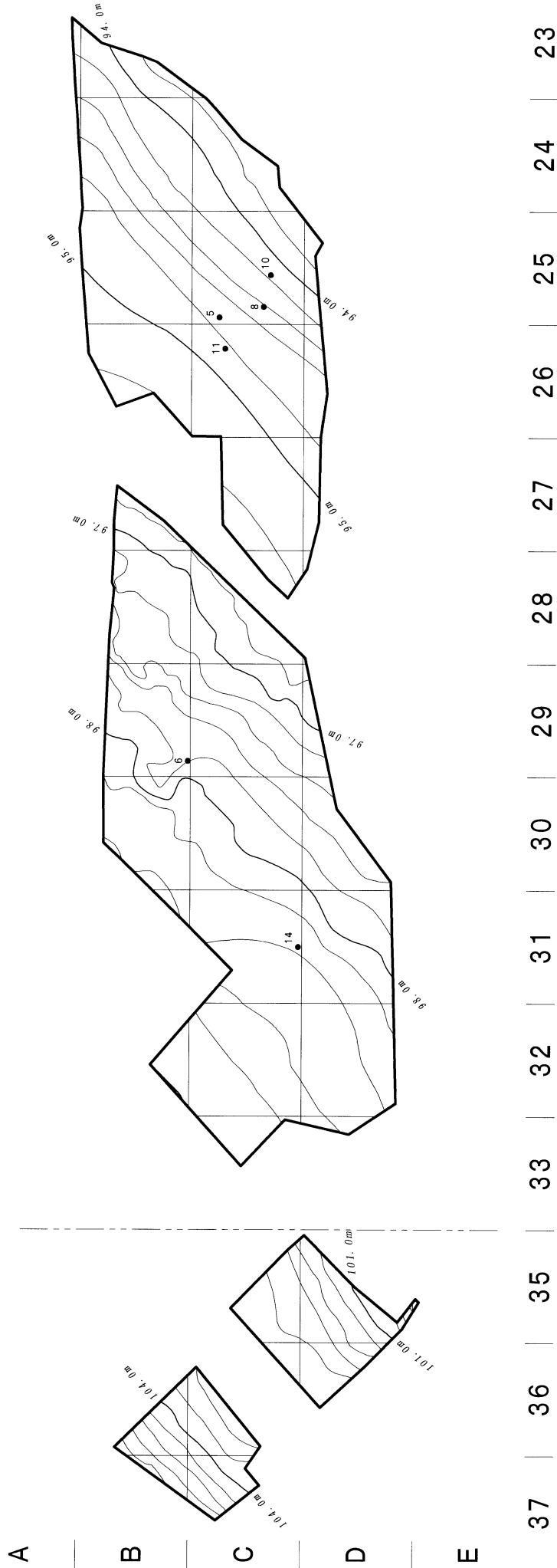
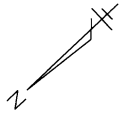
第173図 西原遺跡 地形測量図およびグリッド配置図



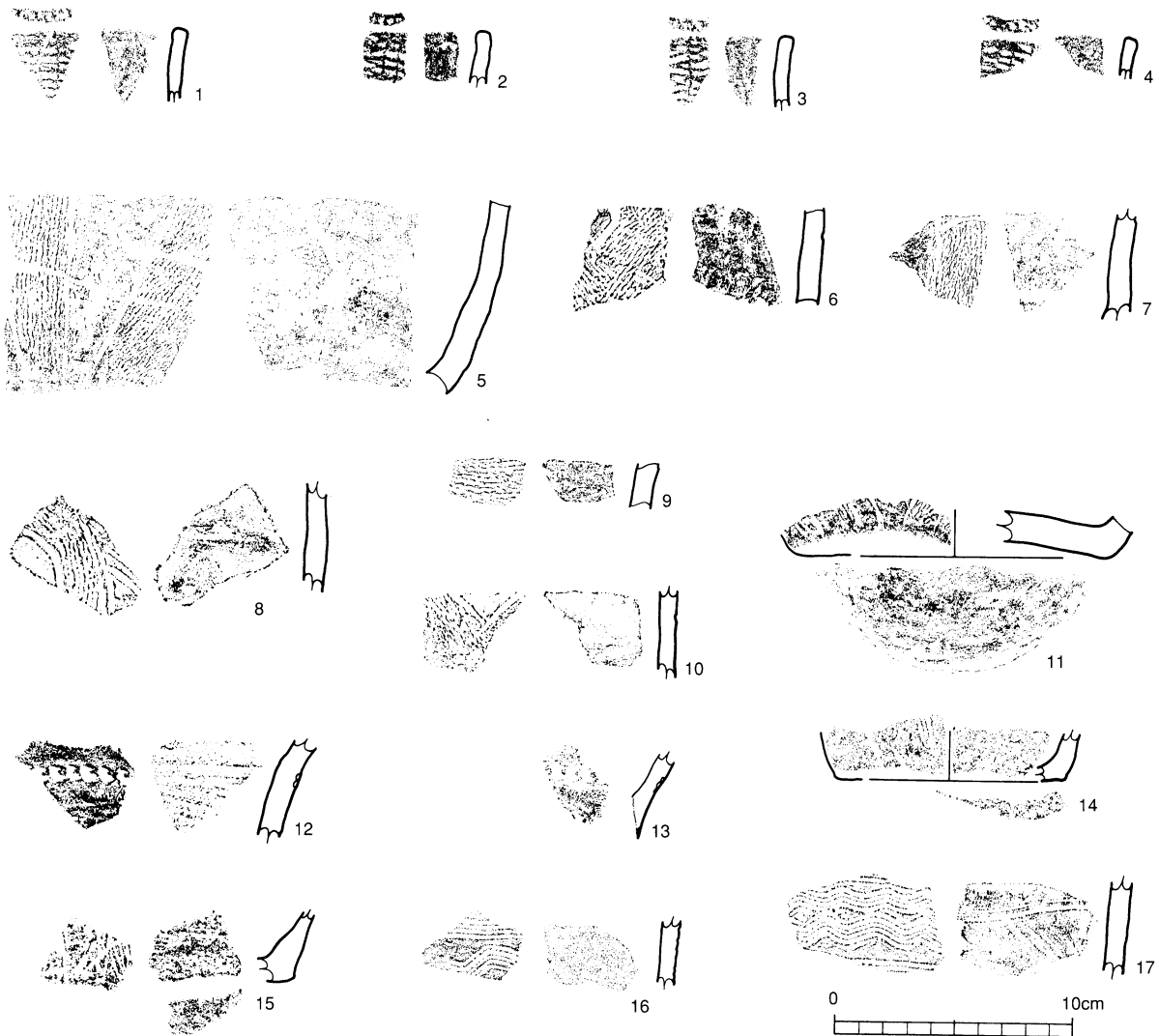
第174図 西原遺跡 縄文早期 検出遺構配置図



第175図 西原遺跡 縄文早期 1号集石遺構・2号集石遺構実測図



第176図 西原遺跡 縄文早期 出土遺物分布図 (土器)



第177図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図1 (早期土器)

第66表 西原遺跡縄文土器観察表

図 番号	遺物 番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色 調		文 様	調 整		取上 番号	備 考
						内	外		内	外		
177	1	B24	Ⅲ a	押型文土器	口縁部	橙色	橙色	原体不明	ナデ	押型文	1047	壺形に近い器形か?
	2	B24	Ⅲ b	押型文土器	口縁部	橙色	橙色	原体不明	ナデ	押型文	1326	壺形に近い器形か?
	3	B24	Ⅲ b	押型文土器	口縁部	橙色	橙色	原体不明	ナデ	押型文	1360	壺形に近い器形か?
	4	B24	Ⅳ	押型文土器	口縁部	橙色	橙色	原体不明	ナデ	押型文	1409	壺形に近い器形か?
	5	C25	Ⅲ a	塞之神A b式土器	底部付近	褐灰色	にぶい褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	982	
	6	B29	Ⅱ	塞之神A b式土器	胴部	灰黄褐色	にぶい褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	95	
	7	B24	Ⅱ	塞之神A b式土器	胴部	黒色	にぶい褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	1110	
	8	C25	Ⅲ a	塞之神A b式土器	胴部	灰黄褐色	にぶい褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	990	
	9	C27	ピット内	塞之神A b式土器	胴部	灰黄褐色	にぶい黄褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	1029	
	10	C25	-	塞之神A b式土器	胴部	灰黄褐色	褐灰色	撚糸文	ナデ	ナデ	1026	
	11	C26	Ⅲ a	塞之神A b式土器	底部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	981	
	12	B23	Ⅲ b	塞之神B式土器	頸部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻刺突	ナデ	ナデ	1443	条痕
	13	B23	Ⅳ	塞之神B式土器	頸部	黒褐色	にぶい黄褐色	貝殻刺突	-	ナデ	1442	
	14	C31	Ⅴ	塞之神式土器	底部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	695	D31IV700
	15	B~D 27~31	表	塞之神式土器	底部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線	ナデ	ナデ	-	
	16	C24	Ⅲ a	苦浜式土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	櫛描波状	ナデ	ナデ	1085	
	17	B24	Ⅱ	苦浜式土器	胴部	褐灰色	にぶい黄褐色	櫛描波状	ナデ	ナデ	1082	

2 縄文時代前期～晩期の調査

西原遺跡における縄文時代前期から晩期にかけての調査は、アカホヤ火山灰軽石層の上層であるⅢb層・Ⅲa層で主に行われ、一部の遺物はⅡ層からも出土した。本遺跡においては、Ⅲa層およびⅡ層が古代期・中世期の包含層ともなっており、遺物は混在して出土している。また本遺跡では、古代期から中世期にかけてピットなどサツマ火山灰層にまで達する掘削が数多く行われていたことが明らかとなった。このような状況から、縄文期に属する遺物が上層から多数出土することになったと考えられる。また遺構床着で出土した遺物はほとんどなく、埋土中から出土した遺物の所属時期は多岐にわたる状況であった。そのため遺構の形態から所属時期の判断を行った。

遺構では集石遺構3基と土坑2基が検出され、遺物では深浦式土器・船元式土器、春日式土器などの前期から中期にかけての遺物や、後期から晩期にかけての遺物が出土した。

(1) 検出遺構

縄文時代前期から晩期にかけての遺構では、集石遺構1基と土坑2基とが検出された。

集石遺構

西原遺跡では、集石遺構がC-29区から1基検出された。

3号集石遺構

C-29区Ⅲb下層上面で検出された集石遺構である。112cm×90cmの範囲内に、集中部が無く散乱した状態で、28個の礫が検出された。掘り込みは確認できなかった。構成礫は、大きさが拳大程度、石材が安山岩および凝灰岩で構成されている。一部の礫は赤化し、熱を受けた様相を示していた。範囲内には2cm大の炭化粒が数点みられた。遺構周辺で晩期土器が集中して出土するという検出状況から縄文晩期の時期に属する遺構と考えられる。

土坑

西原遺跡では、2基の土坑がB-28区から検出された。

1号土坑

B-28区Ⅲ層で検出された土坑である。形状は、上面平面形が144cm×91cm、下面平面形が85cm×24cmを測る略楕円形を呈し、深さは検出面から約90cmあった。長軸の一端には斜め方向に延びる、径15cm深さ40cmを測るピットが検出された。

このような、楕円形あるいは円形の掘り込みの壁際に1つの小穴をもつ土坑は、近年南九州で数多く検出されているようである。この形態を呈する土坑について「地下茎植物を採掘した坑のうち、ヤマノイモを対象としたもの」と、検出された類例や民俗的事例から判断する説がある。(東2000, 竹井)

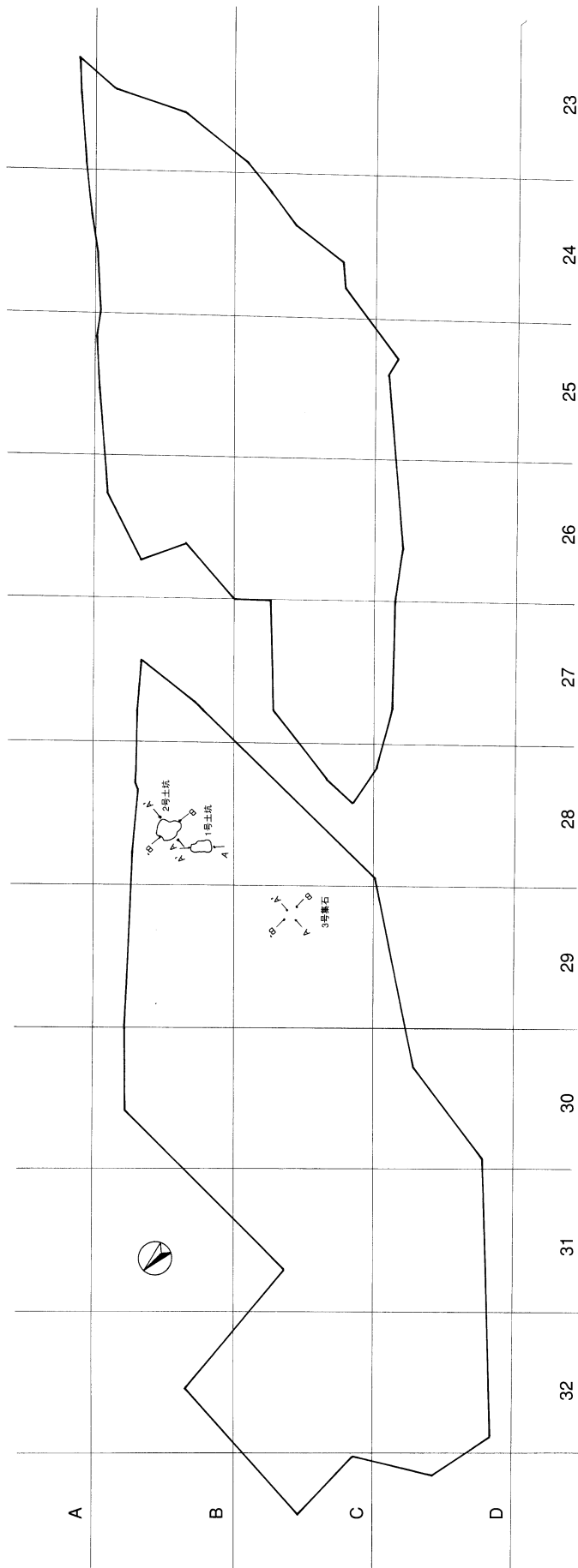
この土坑は、縄文後晩期の時期に属すると考えられる。

2号土坑

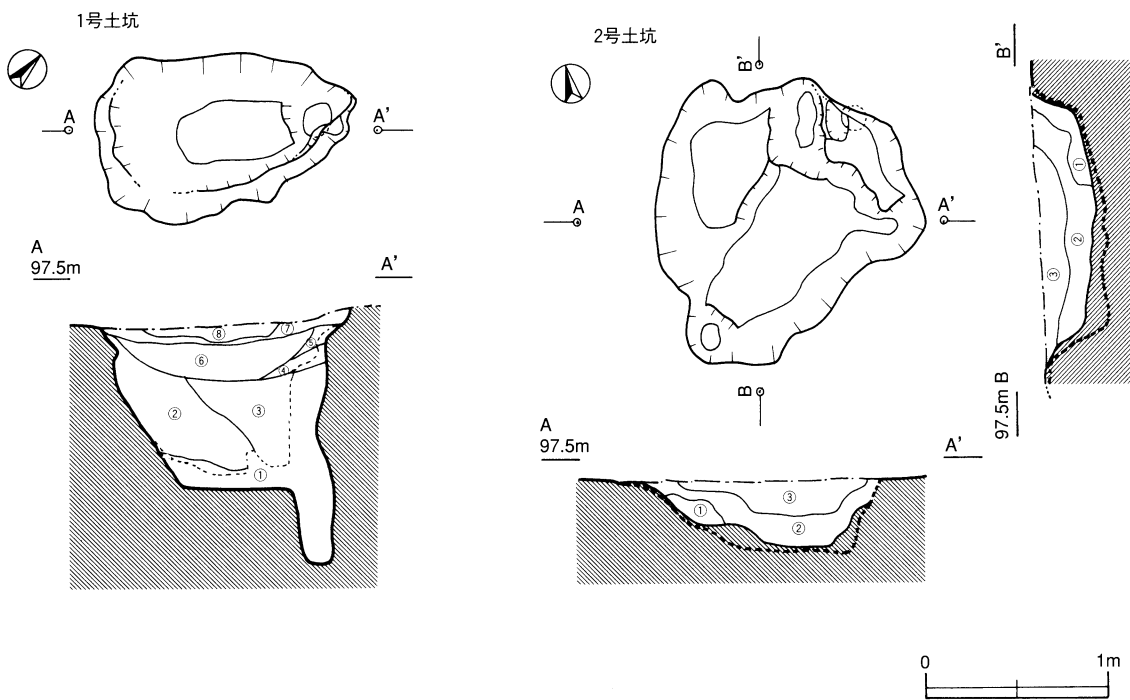
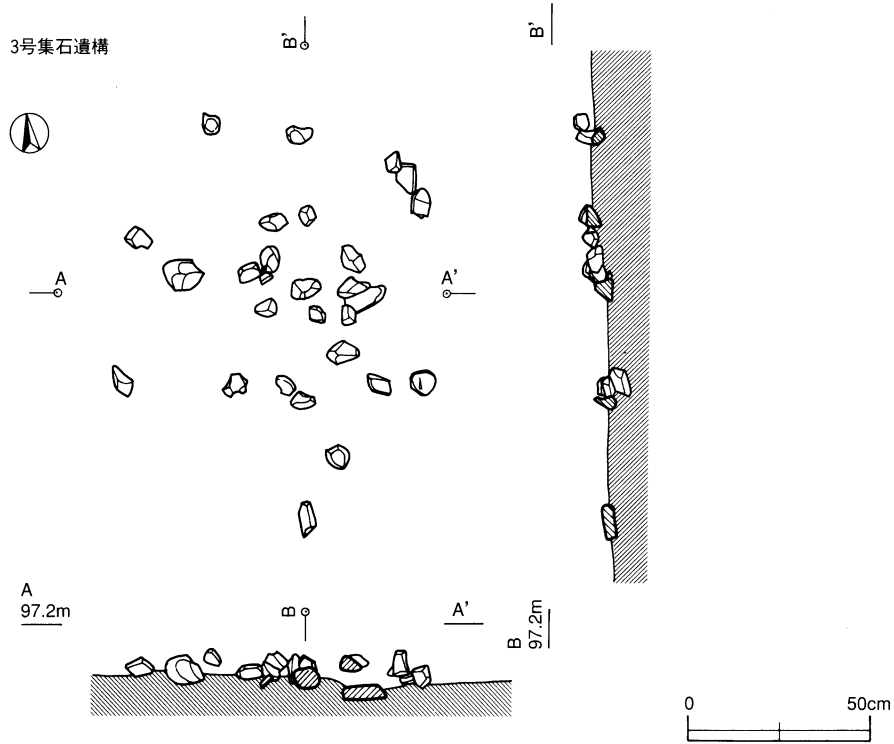
B-28区Ⅲ層で検出された土坑である。形状は、上面平面形が160cm×135cmの不整形、下面平面形が115cm×42cmを測る略楕円形を呈し、深さは検出面から約60cmあった。埋土がレンズ状堆積を呈していることから、土坑であると判断した。用途は不明である。

(2) 出土遺物

ア 土器

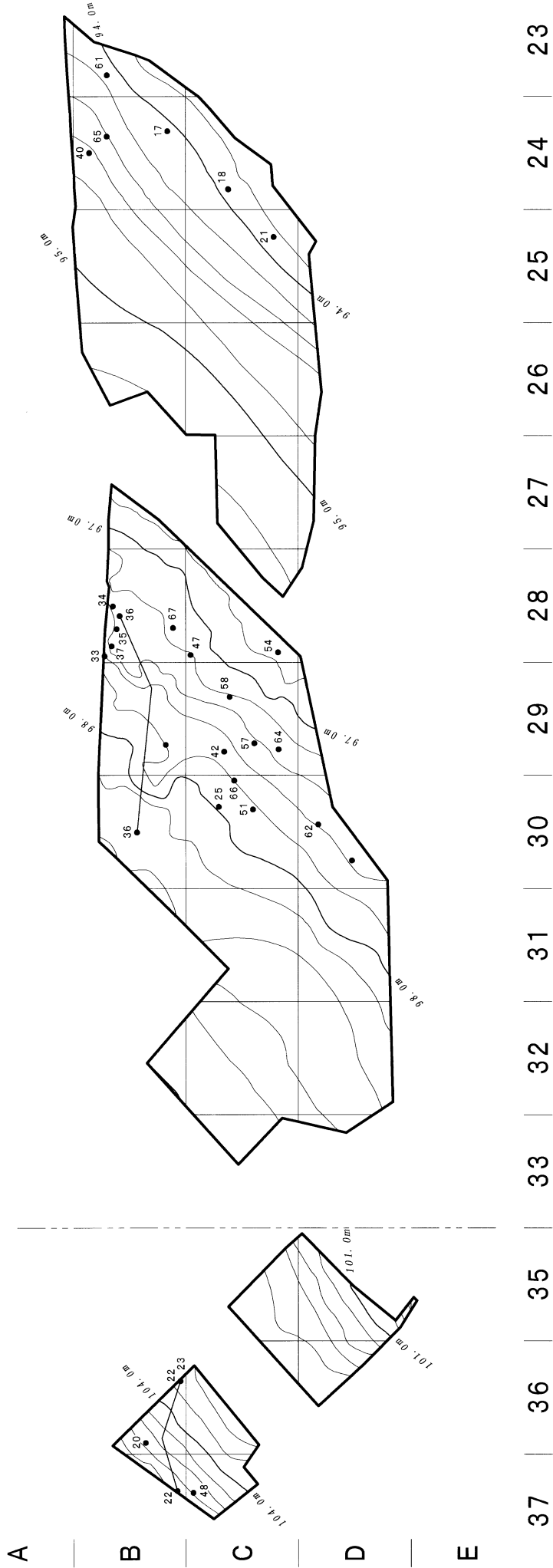
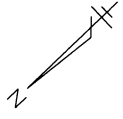


第178図 西原遺跡 縄文前期～晩期 検出遺構配置図



- | | |
|----------------------|---------------------|
| ①暗黄褐色砂質土（灰褐色砂が混じる） | ①暗紫褐色砂質土（黄色軽石を含む） |
| ②灰褐色砂質土 | ②暗黄褐色砂質土（暗褐色土が混じる） |
| ③黒褐色砂質土（暗黄褐色土が混じる） | ③暗褐色砂質土（炭化物が多量に混じる） |
| ④暗褐色砂質土（暗黄褐色土が若干混じる） | |
| ⑤暗黄褐色砂質土（暗褐色土が混じる） | |

第179図 西原遺跡 縄文前期～晩期 検出遺構実測図（3号集石遺構・1号土坑・2号土坑）



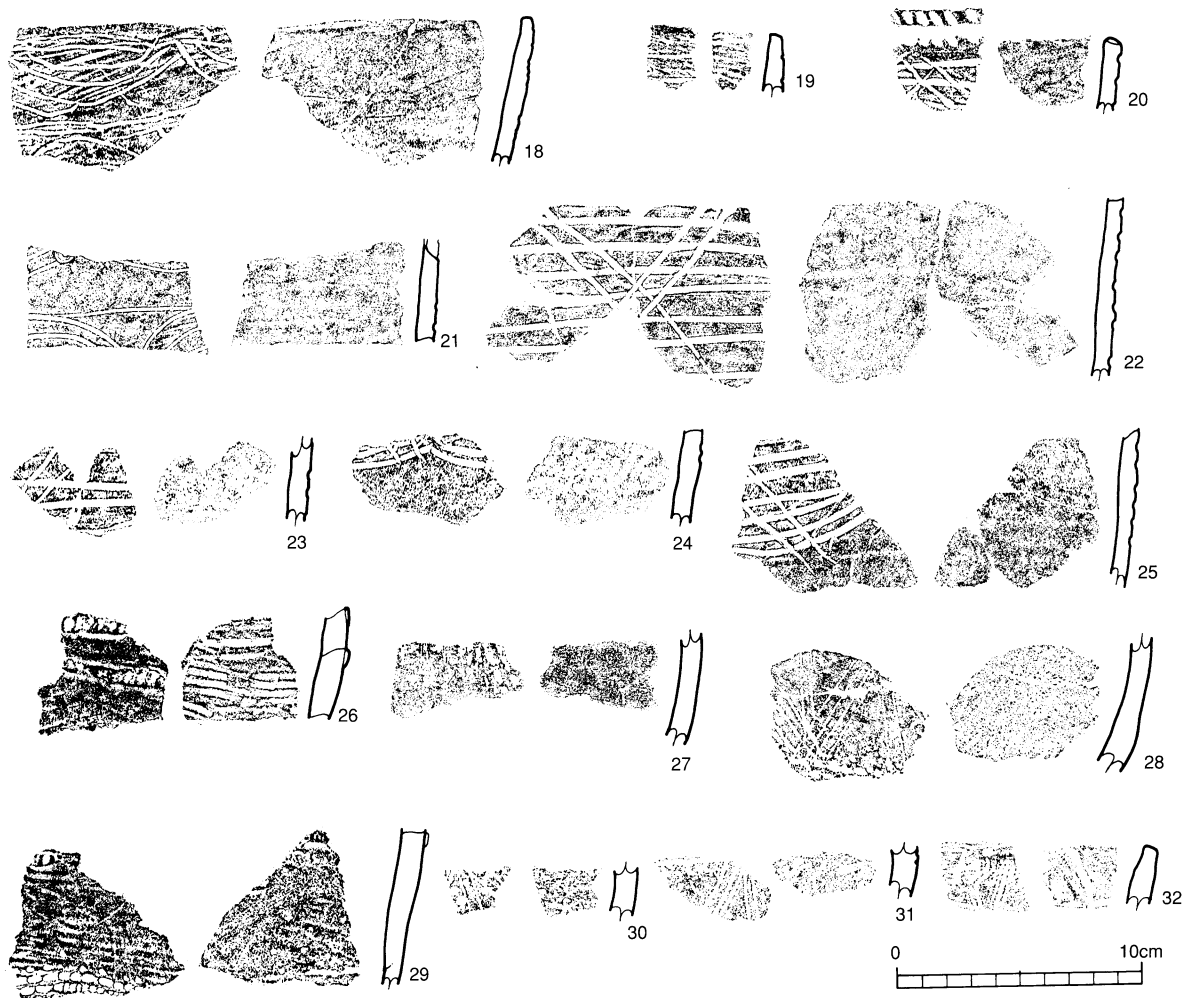
第180図 西原遺跡 縄文前期～晩期 出土遺物分布図 (土器)

縄文時代前期～中期土器

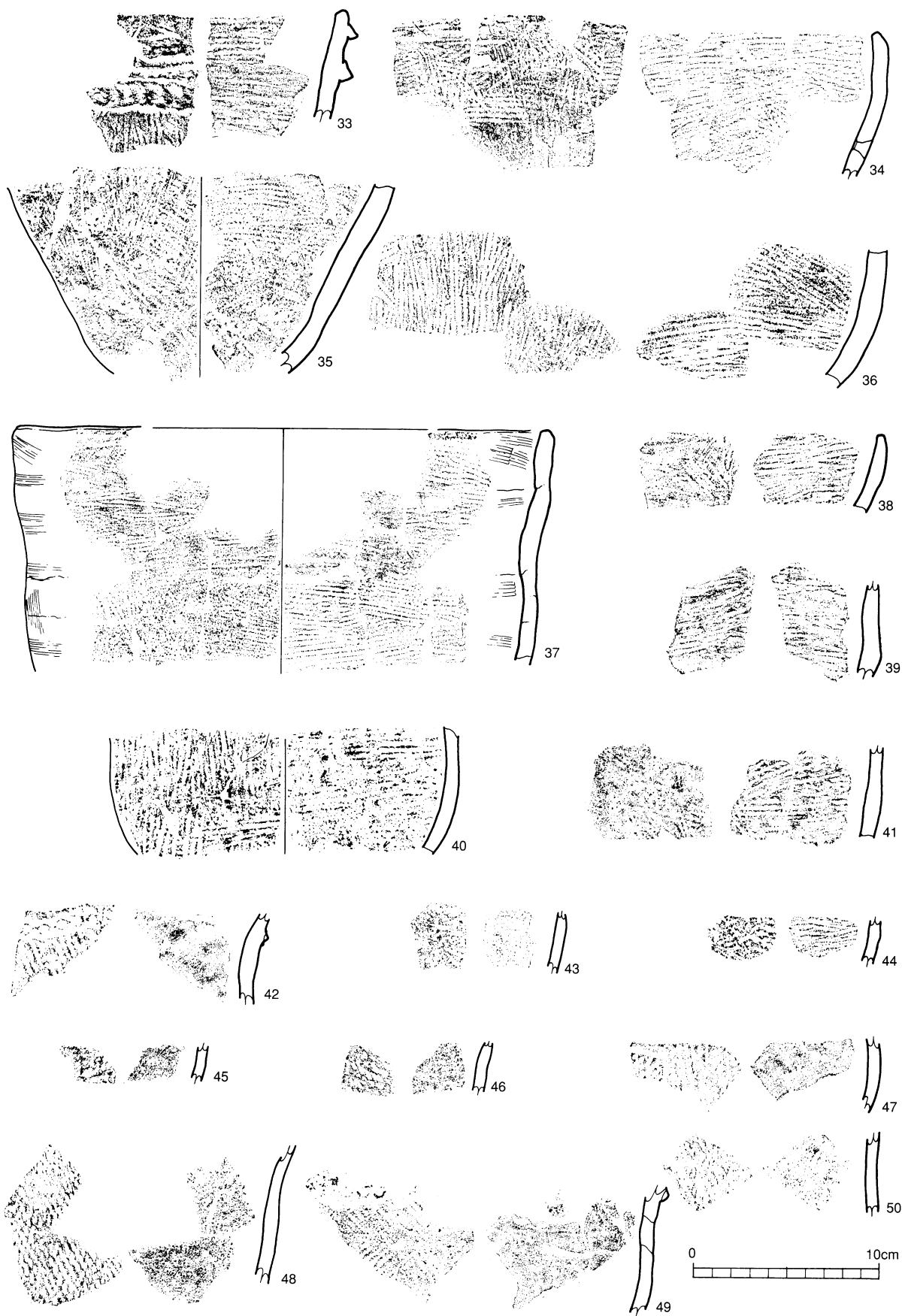
18はゆるく内湾ぎみに立ちあがる口縁部で、先端部を細めながらも平らに面とりする。口唇部には浅い刻みを施す。外面は連弧状の文様を沈線で描いてある。20・22は凹線ぎみの沈線を横方向に巡らせ、2本の沈線で大きく「X」を描く。口唇部は丸くおさめ、同じ施文具で深い刻目を施す。横方向の沈線の最下段は弧状に描き、胴部以下は無文になると想定される。口縁内面には文様を施さない。このような曾畑式土器は、野口・阿多タイプ、あるいはプロト曾畑と呼ばれている。

28は連点と細沈線で文様を構成するものである。連点を横位に巡らせ、その間を縦位に2条、斜位に4条の沈線で「米」の字状に描く。26・29の外面は、貝殻条痕の後丁寧なナデで器面調整を行う。口縁部付近には低い突帯を貼り付け、施文具で刻みを施す。胴部には少なくとも4条の連点文が描かれる。この2種類の土器は深浦式土器の範疇に含まれる。

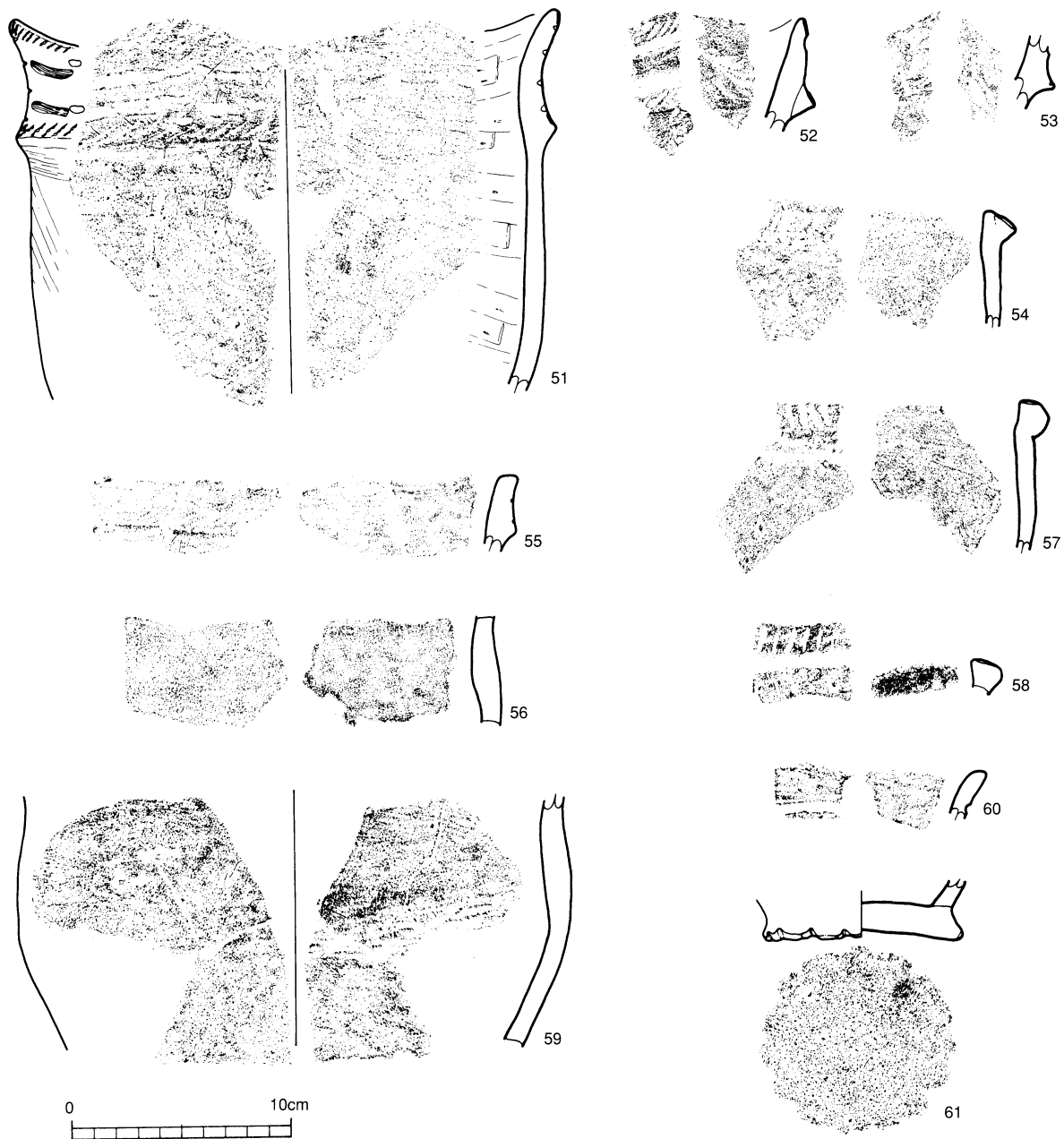
33は、縦方向に貝殻条痕で調整した後、ミミズ腫れ状の突帯を口縁部下に巡らす。34は大きく内湾する口縁部で、先端は細めながらも平らに面取りする。内外面とも貝殻条痕を残すが、外面は縦方向の条痕が間隔をおいて施され、文様効果を意識しているようである。35は尖底に近くなると想定される。この一群は条痕尖底土器と考えられる。



第181図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図1 (前期～中期土器)



第182図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図2 (中期土器)

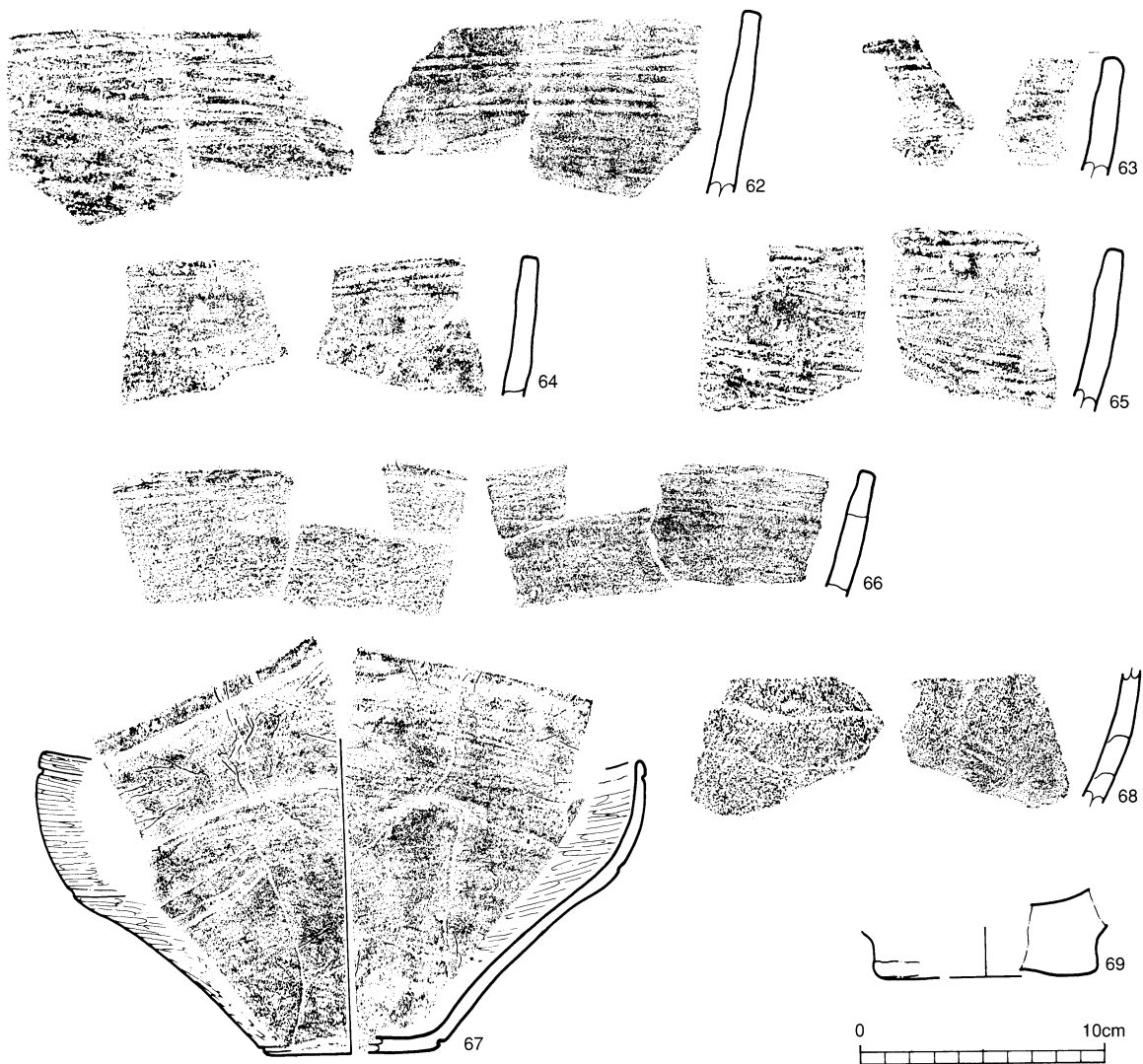


第183図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図3 (後期土器)

42・43・45～50は地文に縄文を施すもので、船元式系土器である。42はLRの単節の縄文を施した後、断面正三角形に近い突帯を貼り付ける。その上に横断面円形をした刺突具で刻目を入れる。48はRLの単節の縄文である。これらは船元式土器の中でも古いタイプに相当するものであり、船元Ⅱ式土器の影響を受けたものであるとおきたい。

縄文時代後期土器

51～53は市来式土器である。口縁部を断面三角形に肥厚させ、文様帯をつくる。4つの頂部をもつ波状口縁であり、口唇部は尖り気味になる。文様帯の上下に貝殻腹縁による刺突を斜位に施す。波頂部には縦方向に4点の刺突を、波底部には3点、その間は2点の刺突を施す。さらに同じ施文具を使い、刺突間を2条の浅い凹線で埋めてある。55・56・59は同一個体と思われ、張りのある胴部から少しくびれてわずかに外反する口縁部へ至る。口唇部は外へ張り出し気味に平らに面取りする。口縁部



第184図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図4 (晩期土器)

は断面三角形に肥厚させ、文様帯とする。肥厚部の下には斜位の貝殻腹縁刺突を、中央部には孤状の刺突が施される。口唇部の一部には貼り付けた部分がみられ、何らかの突起があったと思われる。典型的な市来式土器と異なるが、基本的な部分では一致する。54・57は口唇部に接して太めの粘土紐を貼り付けるものであり、上面にヘラ状工具でキザミが施される。類例は知らないが、後期中葉の土器だと考えられる。61はやや上げ底気味になり、底径は9 cmを測る。底部外側に刻目が施されるのが特徴であり、このような底部は中期後半～後期前半に稀にみられる。

縄文時代晩期土器

62～66・68・69は深鉢形土器である。ほぼ直口する口縁で口唇部は平らに面取りする。67は浅鉢形土器で、内外面とも丁寧に研磨される。直径7.5 cmの底部から外反気味に大きく開きながら肩部に至る。肩部には1条の凹線が巡り、大きく内湾した口縁部となる。口縁部は4つの波頂をもつ波状口縁となる。口唇部は丸くおさめ、口唇部に沿って沈線を入れる。底部にも1条の沈線が巡る。

第67表 西原遺跡縄文土器観察表

図 番号	遺物 番号	出土区	層位遺構	分類	部位	色 調		文 様	調 整		取上 番号	備 考	
						内	外		内	外			
181	18	C24	溝内	曾畑式土器	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	連弧状	ナデ	条痕	1020	1034	
	19	B24	Ⅲ a	曾畑式土器	口縁部	黄灰色	灰黄色	沈線	条痕	条痕	1304		
	20	C30	大溝2	曾畑式土器	口縁部	にぶい褐色	黒褐色	凹線	ナデ	ナデ	3		
	21	C25	Ⅲ b	曾畑式土器	胴部	橙色	にぶい黄橙色	連弧状	ナデ	ナデ	989		
	22	C30	大溝2	曾畑式土器	胴部	橙色	にぶい黄褐色	凹線	ナデ	ナデ	4	20・表	
	23	C30	大溝2	曾畑式土器	胴部	橙色	にぶい黄褐色	凹線	ナデ	ナデ	4		
	24	C30	大溝2	曾畑式土器	胴部	褐色	にぶい黄褐色	凹線	ナデ	ナデ	6		
	25	C30	大溝2	曾畑式土器	胴部	にぶい橙色	にぶい褐色	凹線	ナデ	ナデ	49		
	26	D31	Ⅲ a	深浦式系土器	胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	突帯+刺突	ナデ	貝殻条痕	544		
	27	B37	Ⅱ	深浦式系土器	胴部	褐色	にぶい黄褐色	連点+沈線	ナデ	ナデ	8		
	28	B23	Ⅲ a	深浦式系土器	胴部	灰黄色	浅黄色	連点+沈線	ナデ	ナデ	1251	1280	
	29	D31	Ⅳ	深浦式系土器	胴部	褐色	にぶい褐色	突帯+刺突	ナデ	貝殻条痕	702	押引状連点文	
	30	A23	Ⅲ a	深浦式系土器	胴部	灰白色	浅黄色	沈線	-	ナデ	1250		
	31	B23	Ⅱ	深浦式系土器	胴部	灰白色	浅黄色	連点+沈線	ナデ	ナデ	1129		
32	C24	Ⅲ a	深浦式系土器	口縁部	灰黄褐色	黒褐色	押引状	ナデ	ナデ	1084	B30Ⅲ a 788・898・22		
182	33	B28	Ⅲ a	条痕土器	口縁部	にぶい赤褐色	灰褐色	突帯	貝殻条痕	貝殻条痕	816		
	34	B28	Ⅲ a	条痕土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	823	897・一括、補修孔	
	35	B28	Ⅲ a	条痕土器	胴部~底部付近	明褐色	褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	902	665・803・804・817・875	
	36	B30	Ⅲ a	条痕土器	胴部	褐色	褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	788	B28Ⅲ a 915・898・Ⅲ b 22	
	37	B28	Ⅲ a	条痕土器	胴部	明褐色	にぶい褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	918	819・880・884・P1	
	38	B28	Ⅲ a	条痕土器	胴部	にぶい褐色	にぶい黄褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	919		
	39	B28	Ⅲ a	条痕土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	866		
	40	B24	Ⅲ a	条痕土器	胴部	浅黄色	灰黄色		貝殻条痕	貝殻条痕	1310	1172・1244・1308・B24Ⅱ 1160	
	41	B28	Ⅲ a	条痕土器	胴部	褐色	にぶい褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	892		
	42	C29	Ⅳ下	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	突帯+刺突	ナデ	縄文	738		
	43	C24	Ⅰ b	船元式系土器	胴部	褐色	黒褐色		ナデ	縄文	1427		
	44	C29	Ⅲ a	条痕土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色		貝殻条痕	条痕	659		
	45	C24	溝	船元式系土器	胴部	灰黄褐色	黒褐色		ナデ	縄文	1212		
	46	B C 29	大溝内	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ナデ	縄文	-		
47	C28	Ⅲ a	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色		ナデ	縄文	652	C30大溝Ⅱ 19		
48	C30	大溝2	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	褐色		ナデ	縄文	22	C28Ⅱ 612		
49	C29	Ⅳ下	船元式系土器	胴部	にぶい褐色	黒褐色	突帯+刺突	ナデ	縄文	739	742		
50	B C 29	大溝内	船元式系土器	胴部	にぶい黄褐色	褐色		ナデ	縄文	-			
183	51	C30	Ⅲ b 焼土坑	市来式土器	口縁~胴部	にぶい黄褐色	褐色	凹線+刺突	ケズリ	ナデ	32	8~12・22・30・31・33	
	52	-	表	市来式土器	口縁部	褐色	褐色	凹線+刺突	ナデ	ナデ	-		
	53	-	表	市来式土器	口縁部	にぶい黄褐色	褐色	凹線+刺突	ナデ	ナデ	-		
	54	C D 8	Ⅲ a	後期土器	口縁部	にぶい褐色	にぶい黄褐色		口唇部肥厚	ナデ	ナデ	743	
	55	D29	Ⅲ a	市来式土器	口縁部	褐色	にぶい黄褐色	貝殻刺突	ナデ	ナデ	945	Ⅲ b	
	56	D29	Ⅲ a	市来式土器	頸部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	944		
	57	C29	Ⅲ a	後期土器	口縁部	明褐色	灰褐色	口唇部肥厚	ナデ	ナデ	581		
	58	C29	Ⅲ a	後期土器	口縁部	明赤褐色	にぶい赤褐色	口唇部肥厚	ナデ	ナデ	772		
	59	C29	Ⅲ a	市来式土器	胴部	明黄褐色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	938	939・946	
	60	C36	Ⅲ a	後期土器	口縁部	褐色	にぶい褐色	凹線	ナデ	ナデ	395	指宿式土器か?	
	61	B23	Ⅱ	後期土器	底部	灰黄色	明黄褐色		ナデ	ナデ	1040	底部縁辺刻目	
184	62	D30	Ⅱ	晩期深鉢形土器	口縁部	黒褐色	にぶい黄褐色		条痕	条痕	353	D30Ⅲ a 407	
	63	B23	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	1289		
	64	C29	Ⅱ	晩期深鉢形土器	口縁部	褐色	灰黄褐色		条痕	ナデ	595	表	
	65	B24	Ⅱ	晩期深鉢形土器	口縁部	にぶい黄褐色	灰黄褐色		条痕	条痕	1156		
	66	C30	Ⅲ b	晩期深鉢形土器	口縁部	褐色	にぶい黄褐色		条痕	条痕	719	D30Ⅲ a 550・116	
	67	B28	Ⅲ b	晩期浅鉢形土器	完形品	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線	ミガキ	ミガキ	727	726・728・730・B28Ⅲ a 520 521 B28Ⅱ 872・C20表	
	68	D30	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	胴部	褐色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	556		
	69	B24	Ⅲ a	晩期深鉢形土器	底部	灰黄褐色	にぶい黄褐色		ナデ	ナデ	1219		

イ 石器

石鏃 (70~93)

70~93は基部の挟りを深く入れるタイプである。70~72は両側縁に鋸歯状の剥離をもつものである。76~78は脚部端部をやや平坦におさめる。82~87は基部にそれほど深くない挟りを入れるタイプである。90・91は基部にわずかな凹みをもつタイプである。

石匙 (94・95)

両方ともほぼ正三角形に近い形状で、底辺に直線状の刃部を作る。刃部の剥離は、両側縁よりかなり細かく入念に行っている。ツマミは、刃部のほぼ中央で直交する位置に付けられている。

スクレイパー (96・99)

96は節理面の残る剥片を利用し、周縁から粗い打撃を加えた後、一辺に片方から細かな剥離を行い刃部としている。99は縦長の剥片を利用し、縁辺の先端両側に細かな剥離を加えて尖頭器状の刃部を作り出している。

剥片 (97・98)

97は打点以外の周縁に粗い剥離を加えて刃部状にしている。98は黒曜石のフレイクである。

石核 (100)

表皮を残す小型の礫を使用しており、打面を上面と側面に作り出した後、それぞれの面から剥片を取り出している。

磨製石斧 (101~103)

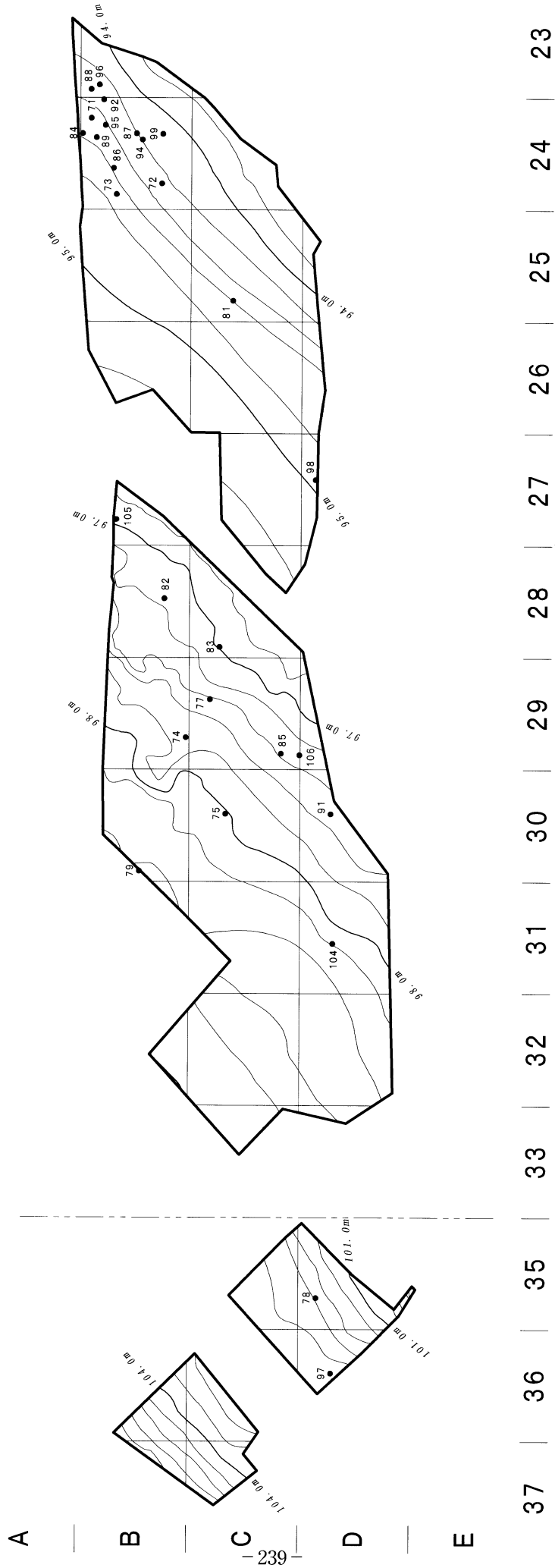
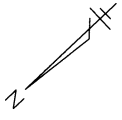
すべて片刃であり、横斧としての使用が考えられる。101は蛇紋岩製で鋭利な片刃の刃部をもつ。刃部の傾斜のない面に使用痕が観察され、こちらの面が対象物と接していたと考えられる。したがって、人の持つ位置からみると刃部右側が欠けていることになり、民具の使用例から右利きの使用者だったことが窺える。102・103は接合して完形品となった。剥離して形を整えた後、全面を研磨して仕上げである。研磨痕ははっきり認められるが、使用痕はみられないことから、あまり使用しないうちに破損してしまったのではないと思われる。

礫器 (104~106)

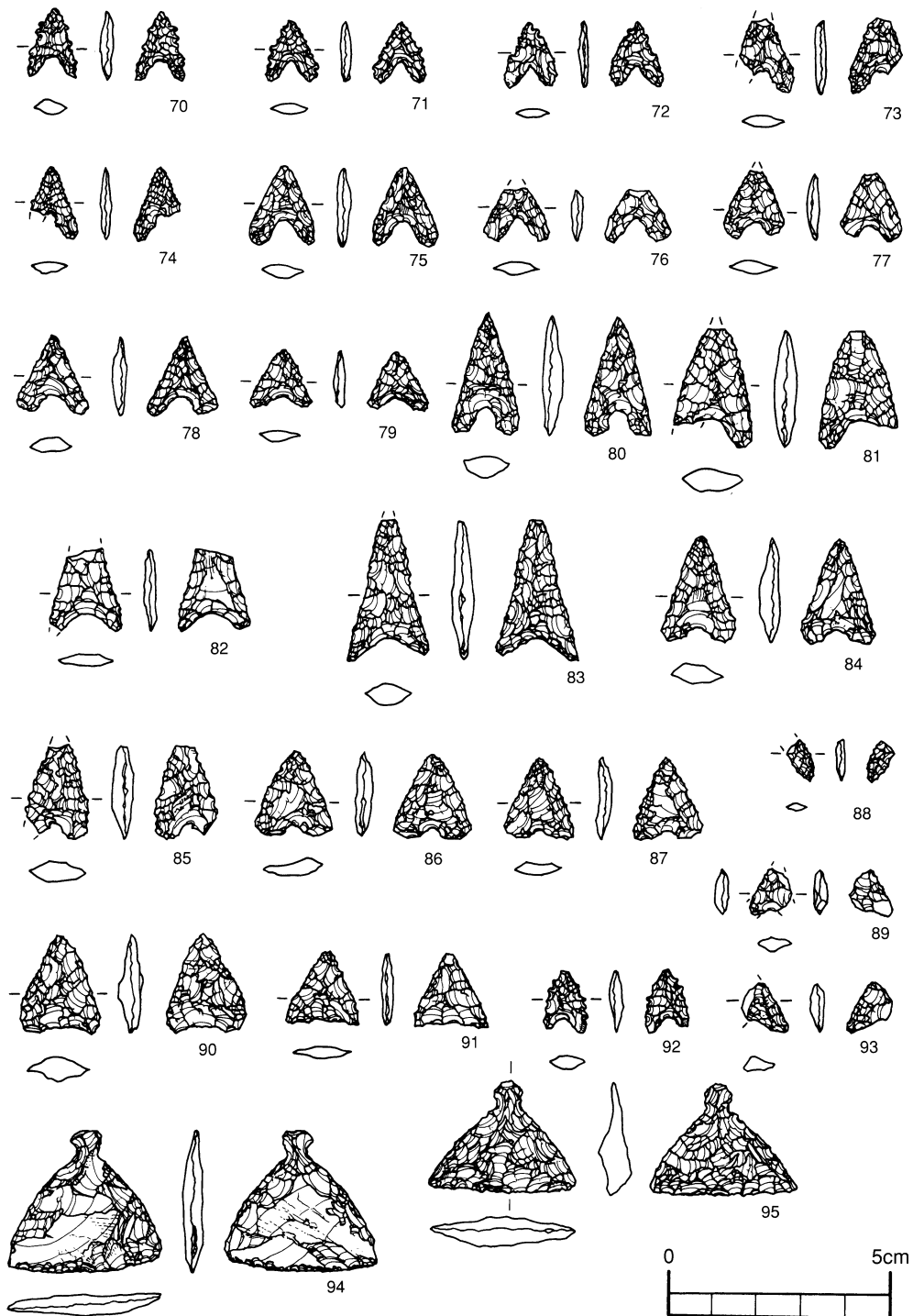
104は、礫の一辺に同一方向から打撃を加えて刃部としている。105は、4分割した程度の礫を利用して剥片を取り出している。106は、礫の一部を利用して剥片の作出を行っている。

第68表 西原遺跡石器観察表

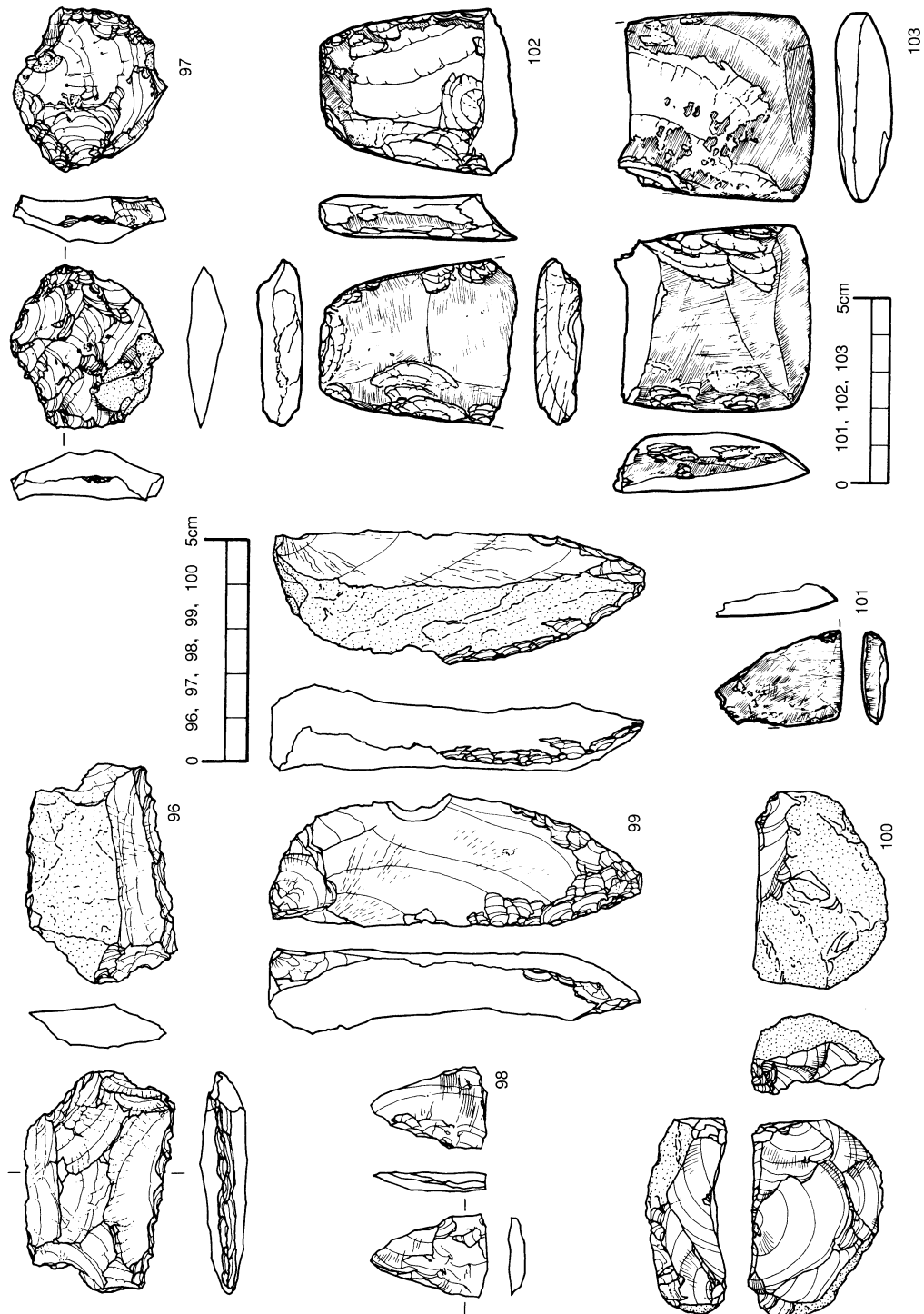
図番号	番号	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	注記番号	備考
186	70	石鏃	C24表	黒曜石	1.515	1.105	0.345	0.30		
	71	石鏃	B24Ⅳ	黒曜石	(1.355)	1.17	0.245	0.25	1367	
	72	石鏃	B24溝	黒曜石	1.44	1.175	0.20	0.23	1200	
	73	石鏃	B24溝	黒曜石	(1.70)	(1.10)	0.27	0.40	1188	
	74	石鏃	B29Ⅲ a	黒曜石	1.655	(1.03)	0.255	0.22	780	
	75	石鏃	C30Ⅲ a	チャート(タン白石)	1.76	1.465	0.33	0.56	38	
	76	石鏃	-	黒曜石	(1.15)	1.465	0.255	0.30		
	77	石鏃	C29Ⅱ	?	(1.52)	1.355	0.28	0.42	317	
	78	石鏃	D35Ⅱ	鉄石英	1.765	(1.595)	0.315	0.53	534	
	79	石鏃	B30Ⅲ b	黒曜石	1.30	1.37	0.28	0.30	790	
	80	石鏃	B29Ⅲ b	黒曜石	2.63	1.49	0.48	1.11		
	81	石鏃	C25Ⅲ b	黒曜石	(2.58)	(1.80)	0.545	1.98	983	
	82	石鏃	B28Ⅲ a	サスカイト?	(1.83)	(1.61)	0.27	0.60	879	
	83	石鏃	2T V	黒曜石	(3.14)	1.845	0.52	1.61	344	
84	石鏃	B24Ⅲ b	チャート	1.79	1.54	0.35	1.41	1407		



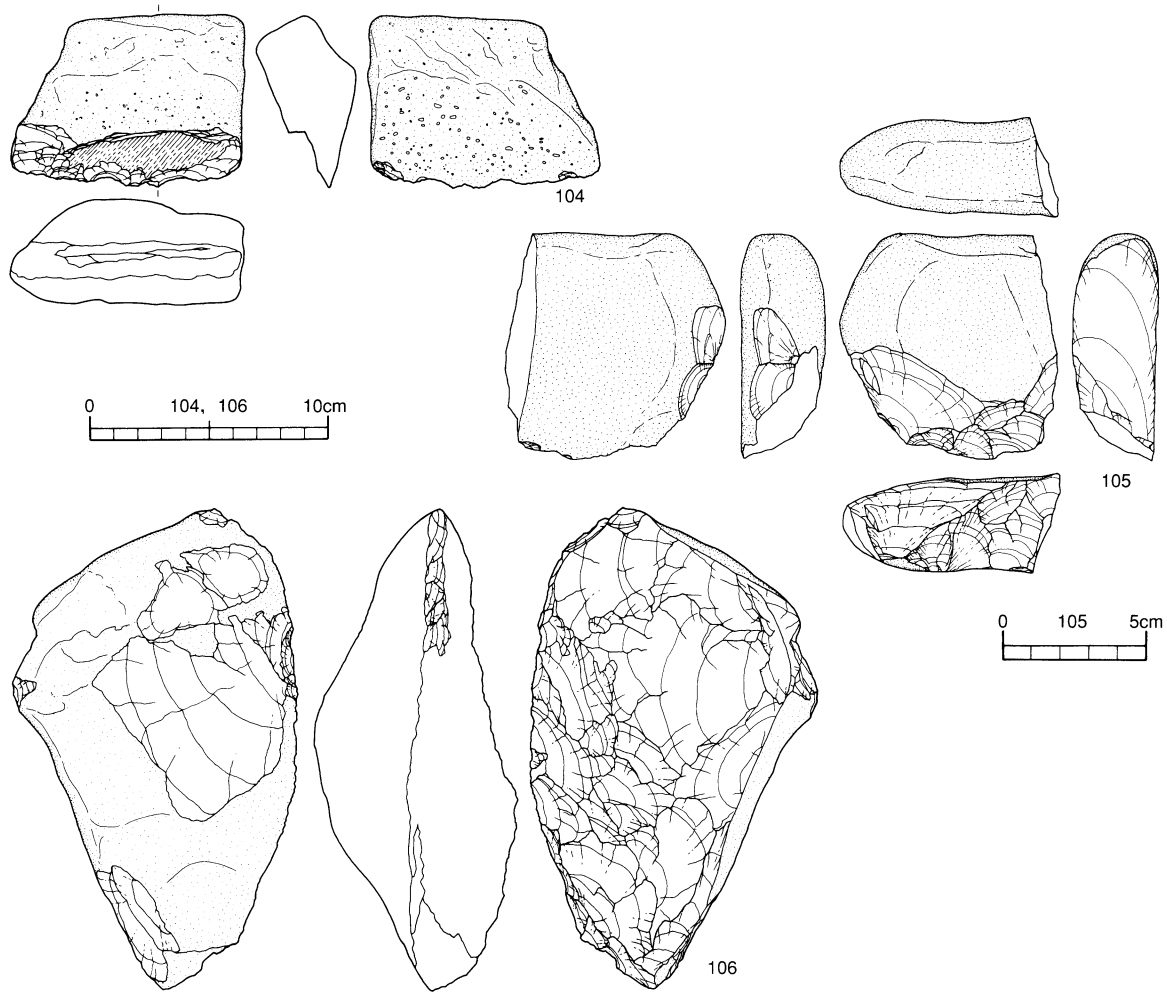
第185図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物分布図 (石器)



第186図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図5 (石器1)



第187図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 6 (石器 2)



第188図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図7 (石器3)

第69表 西原遺跡石器観察表

図番号	番号	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	注記番号	備考
186	85	石鏃	C 29Ⅳ	黒曜石	(2.09)	(1.43)	0.47	1.28	740	
	86	石鏃	B24Ⅲ a	黒曜石	1.88	1.76	0.365	0.92	1168	
	87	石鏃	B24Ⅳ	黒曜石	2.20	1.79	0.55	0.66	1413	
	88	石鏃	B23Ⅲ b	黒曜石	(0.94)	(0.68)	0.18	0.07	1354	
	89	石鏃	B24Ⅲ b	黒曜石	(1.60)	(0.97)	(0.31)	0.22	1358	
	90	石鏃	C23Ⅰ b	チャート	2.375	1.665	0.49	1.48	1417	
	91	石鏃	D30Ⅲ a	黒曜石	(1.61)	1.635	0.28	0.52	408	
	92	石鏃	B23Ⅲ a	黒曜石	1.39	0.97	0.32	0.30	1291	
	93	石鏃	A B23・24Ⅱ	黒曜石	(0.975)	(1.10)	0.325	0.22		
	94	石匙	B24Ⅲ a	玻璃質安山岩?	2.52	3.31	0.73	4.12	1306	
95	石匙	B24Ⅲ a	チャート	3.21	3.50	0.45	3.52	1295		
187	96	スクレイパー	B23Ⅲ a	頁岩	3.40	5.05	1.10	17.27	1285	
	97	剥片	D36Ⅲ a	黒曜石	3.55	3.67	1.10	13.06	540	
	98	剥片	D27Ⅰ下	黒曜石	2.60	1.88	0.42	2.05	951	
	99	スクレイパー	B24Ⅱ	サヌカイト	8.42	3.04	1.80	36.82	1079	
	100	石核	B30 P1	黒曜石(腰岳か?)	(3.95)	4.50	(1.70)	22.76		
	101	磨製石斧	B23Ⅱ	蛇紋岩	3.55	2.50	0.72	6.04		
	102	磨製石斧	B C26Ⅳ	頁岩?	(5.40)	4.50	1.20	40.38	1032	接合
	103	磨製石斧	B C26Ⅳ	頁岩?	(5.35)	5.12	1.58	61.19	1031	接合
188	104	礫器	D31Ⅳ		(7.20)	9.20	4.30	326.92	699	
	105	礫器	B27Ⅲ a	安山岩?	(7.60)	(7.80)	3.30	213.57	837	剥片作出
	106	礫器	C 29Ⅱ	安山岩	(15.00)	(20.25)	(8.05)	1950.00	296	

磨石・敲石類

西原遺跡では磨石・敲石類は合計14点出土した。本報告では礫に磨石としての使用がみられるもの、或いはその側縁部に敲打痕がみられるものを磨石・敲石類と分類した。本類に帰属する石器はその形態によりさらに以下のように分類した。

I類 平面形が楕円形及び棒状を呈し、磨面のみを形成しているもの。

I - a 平面形において楕円形を呈し、球状の礫を使用したもの (108, 110~112)。

いずれも平らで明瞭な磨面を形成している。

I - b 平面形が楕円形を呈し、扁平な礫を使用したもの (107, 109)。

107は溝状の強い擦痕がみられる。

II - c 平面形が棒状を呈している礫を使用したもの (119)。

平らで明瞭な磨面を形成している。擦痕の状況から砥石としての使用の可能性もある。

II類 平面形が円形や楕円形を呈し、磨面と側縁部に敲打痕がみられるもの。

II - a 平面形が円形を呈し、球状の礫を使用したもの (114)。

側縁部の一部にアバタ状の敲打痕がみられる。

II - b 平面形が円形を呈し、扁平の礫を使用したもの (113, 116, 117, 122)。

113は側縁部の一部分にアバタ状の敲打痕がみられる。116, 117は表裏に磨面を持つと共に側縁部の全周に敲打痕がみられる。122は側縁部ほぼ全周に敲打痕がみられる。表裏面は手擦れにより磨滅している。磨面を形成してはいないが側縁部に敲打がみられることから本分類に入れた。

II - c 平面形が楕円形を呈し、球状の礫を使用したもの (115, 118)。

115は側縁部の一部分に弱い敲打痕がみられる。118は表面と側面の2面の磨面とその周囲にアバタ状の敲打痕がみられる。磨面を侵食するように敲打がなされていることから磨石としての使用した後には敲石として使用されたものと考えられる。

叩石類 (120, 121)

西原遺跡では叩石類は2点出土した。本報告では礫の端部に敲打痕がみられるものを叩石類と分類した。120, 121は平面形が楕円形を呈し、球状に近い礫を使用したものであり、いずれも下端部に敲打痕が集中している。120は三角形状を呈し、手擦れ痕が発達している。

石皿類 (123~125)

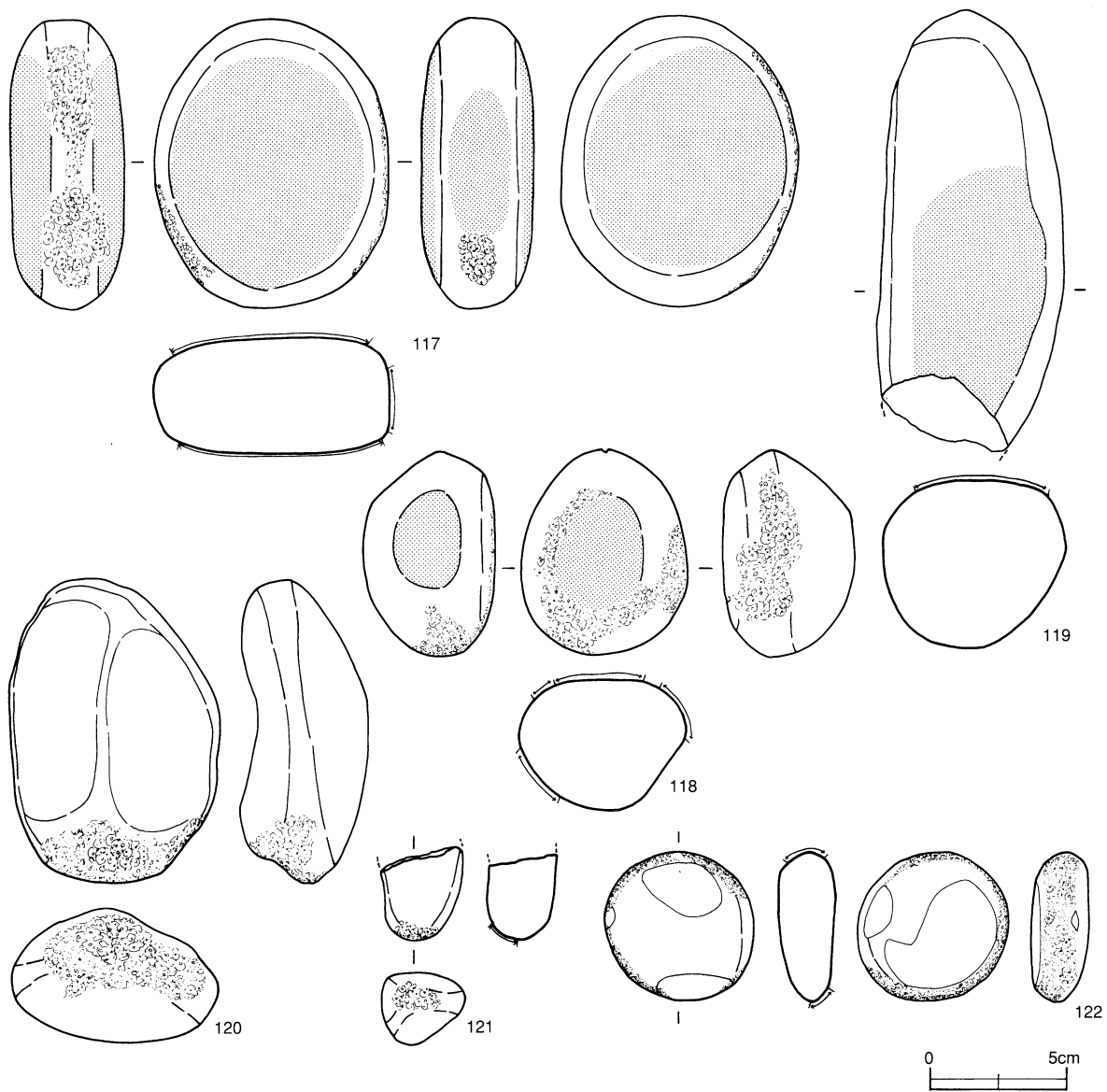
西原遺跡では石皿類は合計3点出土した。本報告では凹みや擦痕がみられるものを石皿類と分類した。いずれも自然礫を整形して使用している。125は凹みがみられないことから台石とも考えられるが、強い擦痕がみられることから石皿と判断した。

砥石類 (126)

西原遺跡では砥石類は1点出土した。本報告では研磨痕がみられるものを砥石類とした。その大きさや形状から携帯用の砥石であると考えられる。側面は平らに整形されている。



第189図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図 8 (石器 4)



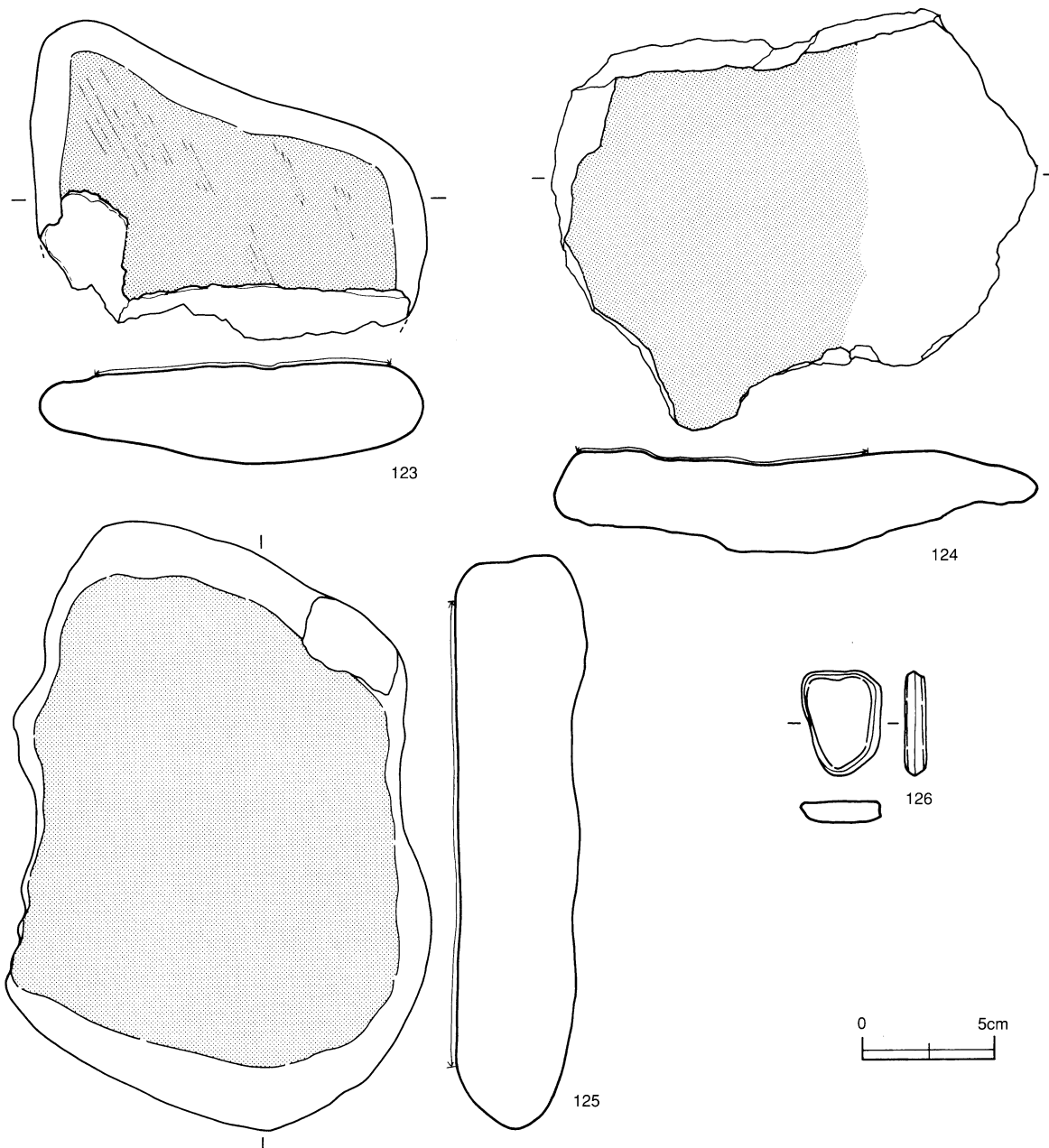
第190図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図9 (石器5)

第70表 西原遺跡出土遺物一覧表・磨石・敲石類

挿入番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測図 No	
189	107	磨石	1696	B24	溝	安山岩	6.3	4.9	3.6	131.7		I類	46	
	108	磨石	1070	B24	Ⅲ a	安山岩	7.15	4.95	3.8	212.9			41	
	109	磨石	表探			安山岩	6.75	7.8	4.1	332.5	半分ほどを欠損		70	
	110	磨石	863	B28	Ⅲ a	安山岩	11.3	5.15	5.5	299.1	半分ほどを欠損		69	
	111	磨石	1377	B24	Ⅲ a	安山岩	10.85	6.1	5	303.4			43	
	112	磨石	1258	B23	Ⅲ a	安山岩	11.8	8.75	5.7	715			42	
	190	113	磨石、敲石		B C 29, 30	溝	安山岩	5.55	5.6	2.4	104		II類	29
		114	磨石、敲石	表探			安山岩	5.1	5.25	4	167.4			28
		115	磨石、敲石	7	B37	II	安山岩	12.2	6.1	5.5	583	半分ほどを欠損		26
		116	磨石、敲石	250	T3	II	安山岩	7.8	6.6	3.6	256.7			25
		117	磨石、敲石	554	D30	Ⅲ a	安山岩	10.6	8.7	4.3	660			35
		118	磨石、敲石	1290	B23	Ⅲ a	安山岩	7.6	6.2	4.9	276.2			24
190	119	棒状磨石	840	B29	Ⅲ a	安山岩	16.1	6.85	6.2	950	4分の1程を欠損	I類	65	
	122	敲石	表探			砂岩	5.5	5.6	2.2	97.3		II類	30	

第71表 西原遺跡出土遺物一覧表・叩石類

挿入番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測図 No
190	120	叩石	1017	C25	溝	安山岩	11.1	7.6	5	455			64
	121	叩石	968	B26	II	安山岩	3.5	3.15	2.7	34.2	大半を欠損		66



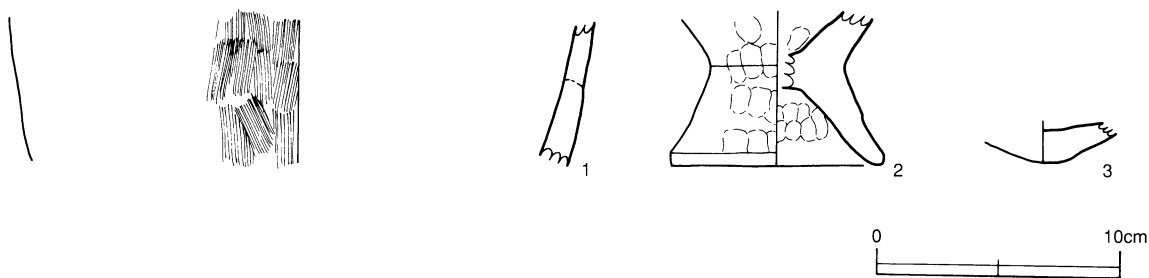
第191図 西原遺跡 縄文時代 出土遺物実測図10(石器6)

第72表 西原遺跡出土遺物一覧表・石皿類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測図 No
191	123	石皿	1370	B24	Ⅲ b	安山岩	12.1	15.1	4.2	786	半分ほどを欠損		87
	124	石皿	1216	B24	Ⅲ a	安山岩	15.9	18.5	3.9	729	一部分を欠損		89
	125	石皿	40	C30	Ⅲ a	安山岩	22.9	16.2	5.1	2900			86

第73表 西原遺跡出土遺物一覧表・砥石類

挿図番号	番号	器種	遺物番号	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	観察所見	分類	実測図 No
191	126	砥石	1204	B24	溝	凝灰岩	4	3.15	0.9	13.4			88



第192図 西原遺跡 古墳時代 出土遺物実測図（成川式土器）

第74表 西原遺跡出土遺物一覧表・古墳時代 成川式土器

挿図 番号	番号	区	層	遺物 番号	細別	部位	底位 cm	最大径 cm	胎 土	調 整		色 調		実測図 No
										外面	内面	外面	内面	
192	1	B24	Ⅲ b	1410		胴部下半		24	石英・長石・角閃石・雲母・砂粒を含む	縦方向のハケ目	ナデ	茶褐色～暗赤褐色	暗褐色	313
	2		表			脚台	(8.6)		細砂粒を多く含む。石英・長石・雲母・輝石	指頭押圧→ナデ	指頭押圧→ナデ	暗黄褐色～茶褐色	茶褐色	814
	3	B28	Ⅲ a	一括		底部			石英・長石・雲母・輝石・砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄褐色～茶褐色	赤褐色	311

第2節 古墳時代の調査

西原遺跡では古墳時代に属する遺物は、縄文時代の遺構・遺物が出土するのと同じⅢ a層・Ⅲ b層から一括して発見された。遺構については遺構内遺物の出土状況や形態などから時期の判別を行った結果、西原遺跡には当該期の遺構は存在しないと判断した。したがってここでは、出土遺物についてのみ述べることにする。

出土遺物（第192図）

西原遺跡出土の古墳時代遺物には、成川式土器の甕形土器と壺形土器とがある。

甕形土器（第192図1～2）

1は胴部下半部片か。外面では1 cm幅に9本のハケメがある工具で縦方向に調整を行う。内面は丁寧なナデ調整を施す。2は外反しながら開く脚で端部は丸く収める。脚部は内外面共には指頭押圧による調整後に軽くナデ調整を行う。甕底部内面の調整は雑である。

壺形土器（第192図3）

3は胴部下端部で一段盛り上がった、いわゆる「乳房状」の底部片で、ごく狭い範囲に平坦面があるのが特徴。

小結

以上の様相から、西原遺跡で出土した土器は、甕形土器の脚台の形態や壺形土器の底部形態などから、成川式土器の中の「中津野タイプ」を主体として、相前後する土器と考えられる。したがって、山ノ脇遺跡出土の成川式土器と、ほぼ同時期の土器と比定できよう。

第3節 古代の調査

西原遺跡では古代期に属する遺構・遺物は、中世期の遺構・遺物と同一の包含層で、一括して発見された。したがって、遺構については遺構内遺物の出土状況などから時期の判別を行った。

その結果、検出遺構配置図（第194図）および出土遺物分布図（第196図）から、古代期における人々の生活の場は、28区から30区にかけての範囲を中心として、丘陵裾部側へ広がっていたと判断できる。

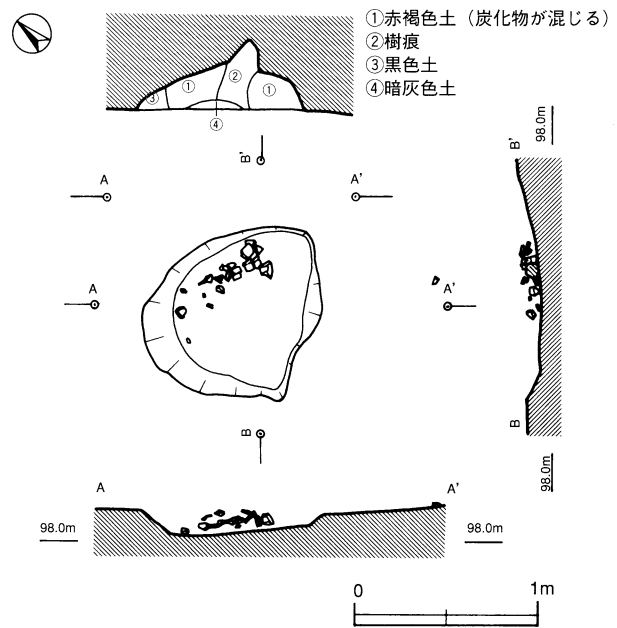
また調査の成果として、遺構では焼土遺構の検出が、遺物では土師器・須恵器などの出土が挙げられる。

1 検出遺構

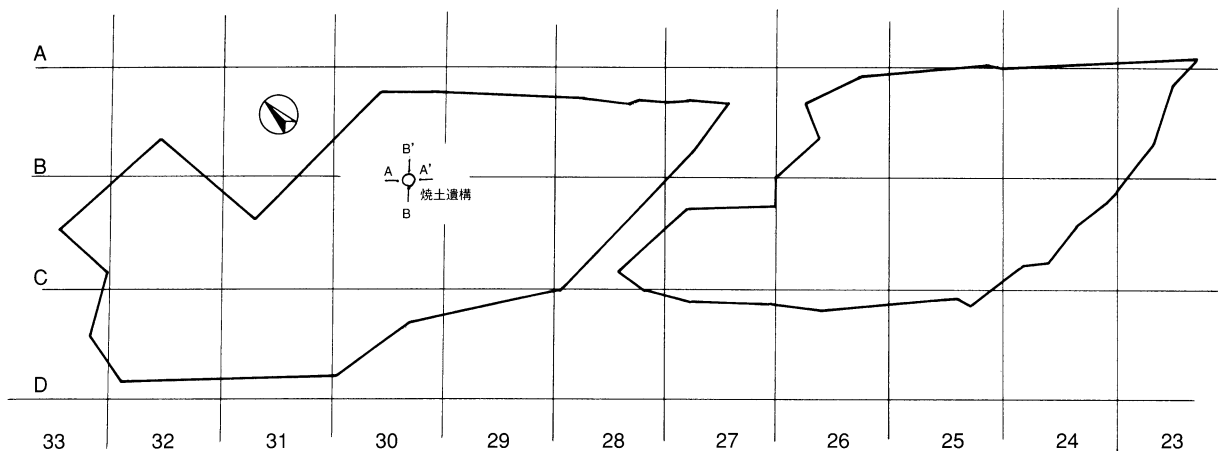
西原遺跡で検出された古代に属する遺構は、焼土遺構1基であった。

(1) 焼土遺構

B・C-30区Ⅲb層において検出された。形状は、平面形が100cm×90cmを測る略円形をなし、深さは検出面から約14cmを測る皿状を呈していた。埋土は炭化粒を含む赤化した砂質土であった。遺構内からは赤化した古代土師器片が細かく割れた状態で多数出土した。これらの状況から、焼成土坑の可能性と、炉跡の可能性とがあり、ここでは焼土遺構と判断した。



第193図 西原遺跡 古代期 焼土遺構実測図



第194図 西原遺跡 古代期 検出遺構配置図

2 出土遺物（第197図～第203図）

西原遺跡で出土した古代期の遺物は、土師器・黒色土器・赤色土器などの供膳具や、土師甕などの煮沸具の他に、須恵器が出土した。また、土師器の中に墨書土器がみつかった。

（1）土師器（第197図～第201図）

西原遺跡で出土した土師器では、器種は坏と椀が出土した。出土分布図（第196図）をみると、B・C・D-29区を中心に出土しており、28区から30区が当該期の主たる生活の場であったと指摘できる。なお、本項における分類基準は、石坂遺跡での土師器分類に準じた。

坏（第197図1～15）

西原遺跡で出土した土師器坏のうち、15点を資料化した。1～3は1類に属する。底部と体部との境が不明瞭で、丸味を呈しながら体部へ移行し、体部は主に直線的に立ち上がる坏である。底部が残存する2・3では若干上げ底となり、底部の厚さが厚い。4～7は2類に属する。底部と体部との境が明瞭となり、体部が直線的に立ち上がる坏である。底部は平底となる（5）のと、若干上げ底となる（4・7）のことがある。8～14は3類に属する。底部の腰が成形され、体部への立ち上がり際に段差がある坏で、体部は若干外反し立ち上がる。底部は平底。15は4類に属する底部から体部への立ち上がり際にある段差の幅が厚くなる坏である。

椀（第197図16～22）

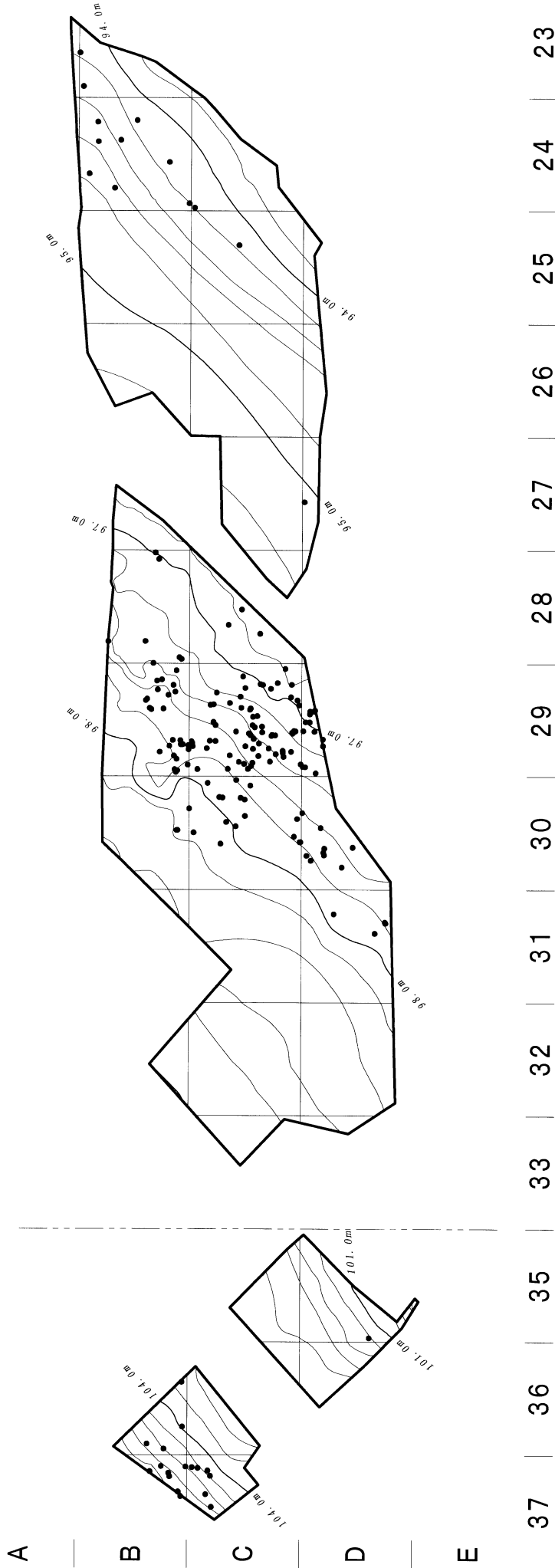
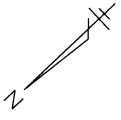
西原遺跡で出土した椀のうち、7点を資料化した。1類、4類、5類に属する土師器は出土しなかった。16～19は2類に属する。高台脚が1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が少々開く（18・19）土師器椀である。高台内部は脚部付近が削られており、中心部との比高差は少ない。20・21は3類に属する。高台脚は1類と比べ器厚が厚く、脚基部の径より脚端部の径が大きく、脚部が開く（20）土師器椀である。2類と比べて3類は体部下半が直線的に立ち上がる（20）。22は6類に属する。高台脚の脚部形態が外反しながらしっかり強く開く土師器椀である。高台脚の高さが、より高くなるのも特徴である。

墨書土器（第197図23～26）

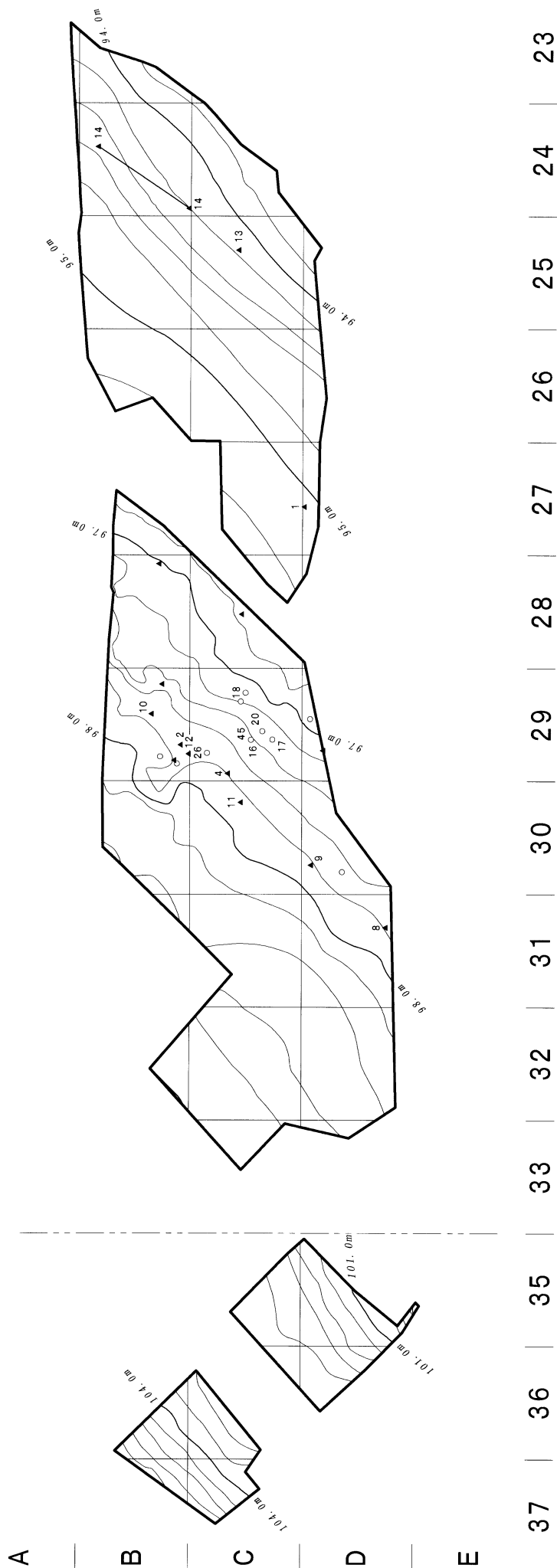
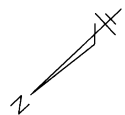
西原遺跡で出土した墨書土器は資料化した4点であった。いずれも文字の半ばで土師器が割れていることもあり、文字は判読できなかった。23・24は5類に分類できる土師器椀である。25は4類に分類できる土師器椀である。

第75表 西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器

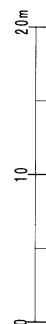
挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基部径 cm	調整			色調		備考	実測図 No	
											外面	内面	その他	外面	内面			
197	1	C30	Ⅲ	961	坏	1類	底部～体部下	7.1			回転ヘラナデ	ナデ		暗黄褐色～橙褐色	橙褐色		295	
	2	T1	Ⅱ	147	坏		底部～体部下	(5.6)			ナデ	ナデ		明黄白色	明黄白色		297	
	3	C23	I b	1421	坏	2類	底部	(5.2)			ナデ	ナデ		暗黄褐色～橙褐色	暗黄褐色		289	
	4	C29	Ⅱ	119	坏		底部～体部下	(6.2)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色～橙褐色	暗黄褐色～暗褐色		290	
	5	D27	V井ji		坏	3類	底部～体部下	5.8			ナデ	ナデ		黄白色～暗黄褐色	黄白色～暗黄褐色		771	
	6		表		坏		底部～体部下	8.4			ナデ	ナデ		暗黄白色	暗黄白色		287	
	7		表		坏	4類	底部～体部下	(7.8)	(6)		ナデ	ハケ→ナデ		明黄白色	明黄白色		293	
	8	D31	Ⅱ	382	坏		底部～体部下	(6.2)			ナデ	ナデ		暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色		294	
	9	D30	Ⅱ	365	坏	5類	底部～体部下	(4.4)			ハケ→ナデ	ナデ		暗褐色～橙褐色	暗褐色～橙褐色		299	
	10	B29	Ⅱ	630	坏		底部～体部下	(3.1)			ハケ→ナデ	ナデ		橙褐色～黄褐色	黄褐色～暗黄褐色		288	
	11	C30	Ⅱ	58	坏	6類	体部	(6.1)			ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ	明黄白色	暗黄褐色		295	
	12	B29	Ⅱ	514	坏		底部～体部下	(3.5)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄白色	暗黄褐色		292	
	13	C30	Ⅱ	987	坏	7類	底部～体部下	(6)			回転ヘラナデ	ナデ		暗橙褐色	暗橙褐色		286	
	14	B24	Ⅲ	9172	坏		底部～体部下	(6)							暗黄褐色～暗橙褐色	橙褐色		285
	15	B24	Ⅲ	1103	坏	8類	底部～体部下	8.6			ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色～暗橙褐色	橙褐色		285	
	16	B24	Ⅲ	1165	坏		底部～体部下	8.6			ナデ	ナデ	底：ナデ	暗黄褐色～暗橙褐色	橙褐色		285	
	17	C30	大溝Ⅱ	34	坏	9類	底部	(5.7)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色～黒褐色	明黄白色		291	
	18	T1	Ⅱ	197	椀		口縁部～体部	13.8			ナデ	ハケ→ナデ			黄白色	黄白色		614
	19	C29	Ⅱ	244	椀	10類	底部	(6.6)			ハケ→ナデ	ナデ		明黄褐色	明黄褐色～橙褐色		306	
	20	C29	Ⅱ	283	椀		底部～体部下	7.2	7.3		ハケ→ナデ	観察不能			暗黄褐色	暗黄褐色		305
	21		表		椀	11類	底部	(6.7)	(6.6)		ハケ→ナデ	ヨコハケ			橙褐色	橙褐色		304
	22	C29	Ⅱ	242	椀		底部～体部下	(6.4)			ハケ→ナデ	ナデ	底：ナデ		橙褐色	暗黄褐色		301
23	B-D27～31	表		椀	12類	底部	(5.5)	(6.8)		ハケ→ナデ	回転ヘラナデ			明黄白色	明黄褐色		303	
24		表		椀		底部	(7)	(6.8)		ナデ	ナデ	底：ナデ		明黄白色	明黄白色		302	



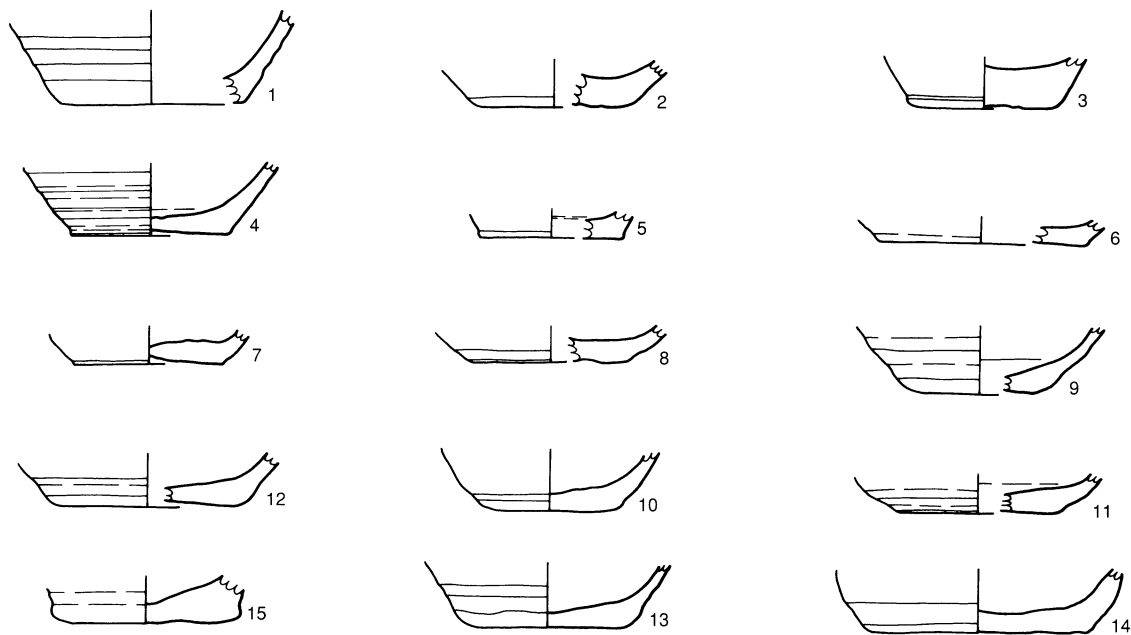
第195図 西原遺跡 古代期 出土遺物分布図 1 (全遺物)



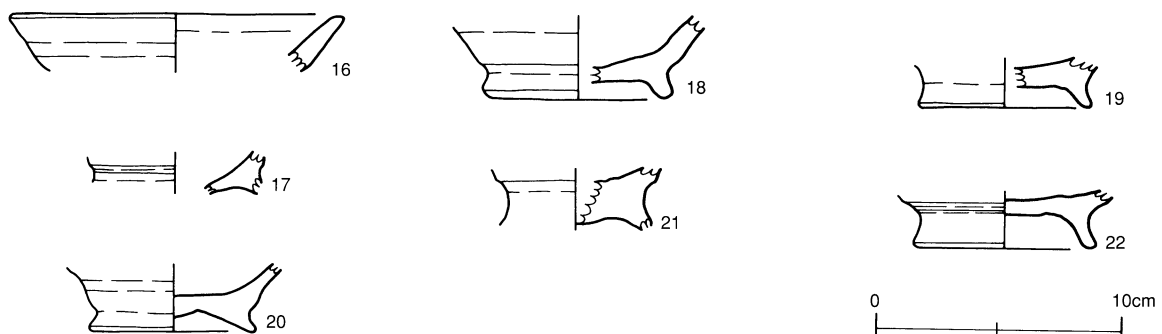
▲ 土師器 坏
○ 土師器 碗



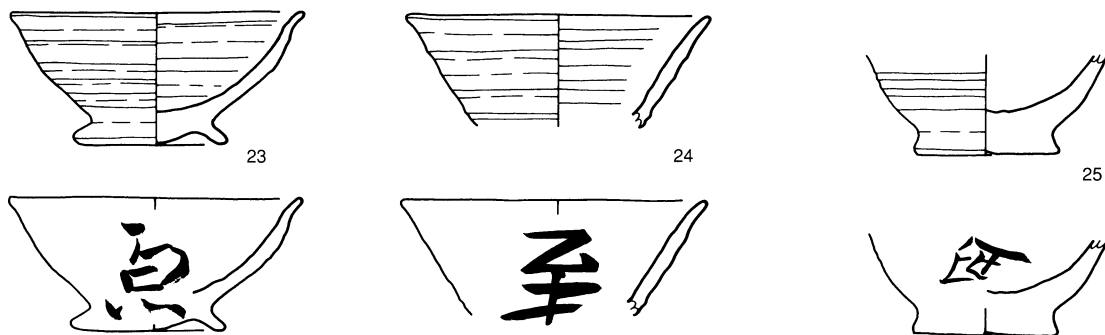
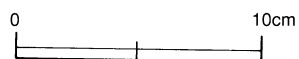
第196图 西原遺跡 古代期 出土遺物分布图 2 (土師器・坏・碗)



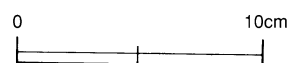
土師器・坏



土師器・碗



墨書土器



第197図 西原遺跡 古代期 出土遺物実測図1 (土師器・坏・碗)

(2) 黒色土器 (第199図27~34)

西原遺跡で出土した黒色土器の器種は椀が主体となるが、坏も僅かながら出土した。出土分布図(第198図)をみると、土師器同様にB・C・D-29区を中心に出土している。

坏 (第199図27)

西原遺跡で出土した坏のうち1点を資料化した。これは2類に属し、底部と体部との境が明瞭となり、体部が直線的に立ち上がる坏である。

椀 (第199図28~34)

西原遺跡で出土した椀のうち、7点を資料化した。

1類・5類に属する黒色土器は出土しなかった。33は2類に属する。体部下半部が内湾しながら立ち上がる特徴をもつ資料である。30~31は3類に属する。高台脚は脚部が開く椀、高台内部は脚部まで丁寧になでられ、脚基部の窪みがみられないのが特徴である。体部下半は直線的に立ち上がる。28・29は2類・3類に属する黒色土器椀口縁部である。口縁部から体部上半部にかけての資料である。ともに外反して開くタイプであった。32は4類に属する。底面が平底あるいは僅かに上げ底となり、脚基部外面をしっかりと意識的に段差をつけるのが特徴である。34は6類に属する。高台脚部の形態が外反しながらしっかりと強く開く椀である。高台脚の高さが高くなる。体部下半は内湾しながら立ち上がっている資料である。

(3) 赤色土器 (第199図35~48)

西原遺跡で出土した赤色土器の器種は椀が主体となるが、坏や鉢も僅かながら出土した。出土分布図(第198図)をみると、土師器同様にC・D-29・30区を中心に出土している。

坏 (第199図35)

西原遺跡で出土した坏のうち1点を資料化した。これは2類に属し、底部と体部との境が明瞭となり、体部が直線的に立ち上がる坏である。

椀 (第199図36~48)

西原遺跡で出土した椀のうち、13点を資料化した。

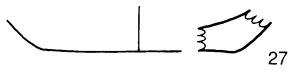
46は1類に属する。高台脚は器厚が薄く、脚基部の径と脚端部の径との差がほとんどなく、僅かに開く椀底部である。36~45は2類・3類に属する体部下半部から口縁部にかけての資料である。体部下半部は内湾しながら立ち上がり、体部上半部は直線的に開く。口縁部が直行する(36・38・39)のと、外反する(37)のとがみられた。47・48は5類に属する。高台脚は器厚が厚く、強く開く椀である。脚部形態には直線的に開く(47)のと、外反しながら開く(48)のとがある。体部下半部から体部上半部にかけて直線的に立ち上がる。

鉢 (第199図49)

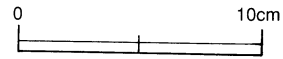
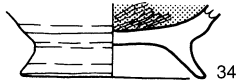
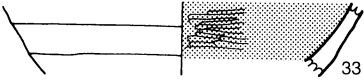
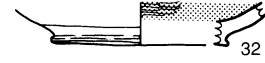
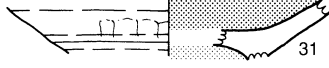
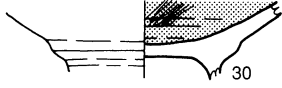
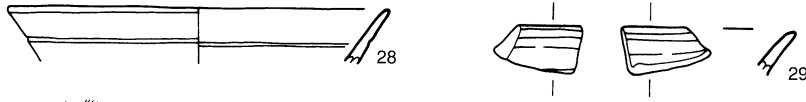
西原遺跡で出土した鉢のうち、1点を資料化した。

第76表 西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器

挿図番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基部径 cm	調整			色調		備考	実測図 No
											外面	内面	その他	外面	内面		
197	23	T2	表		椀	墨書土器	完形	11.9	5.6		ヘラ→ナデ	ハケ→ナデ		橙褐色	明黄白色~橙褐色		284
	24	T3	II	255	椀	墨書土器	口縁~体部	(12.4)			回転ヘラ→ナデ	回転ヘラ→ナデ		暗黄褐色	赤褐色		270
		T3	II	256	椀	墨書土器	底部~体部下半		5.2		ハケ→回転ヘラナデ	回転ヘラナデ		明黄白色~暗黄褐色	明黄白色~茶褐色	充実高台	300
	26	C29	II	508	椀	墨書土器	体部下半				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		明橙褐色	明橙褐色		298



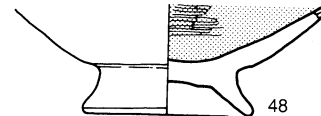
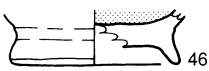
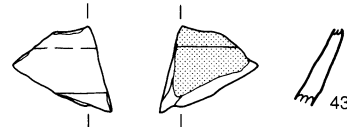
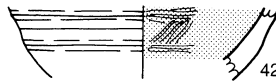
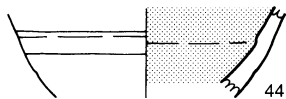
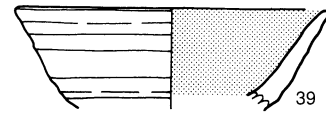
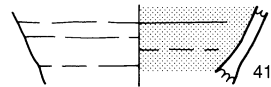
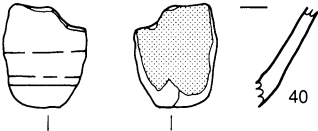
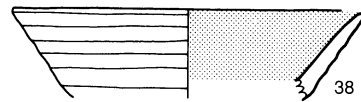
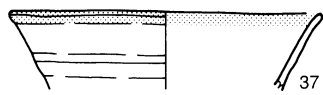
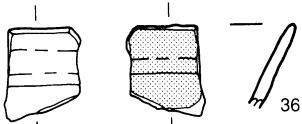
黒色土器・坏



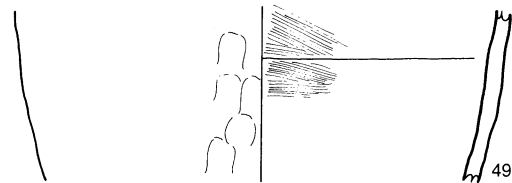
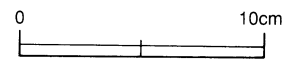
黒色土器・椀



赤色土器・坏



赤色土器・椀



赤色土器・鉢



第199図 西原遺跡 古代期 出土遺物実測図2 (黒色土器・赤色土器)

第77表 西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師器（黒色土器・赤色土器）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	分類	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No
													外面	内面	外面	内面	
199	27	B29	II	331	黒色土器	坏	2類	底部～体部下		(8)			ナデ	ナデ	暗黄褐色	黒褐色	276
	28	B C 29	溝内		黒色土器	碗	2・3類	口縁部～体部	(15.5)				ハケ→ナデ	ミガキ	暗黄褐色	黒褐色	279
	29	B C 29・30	溝1		黒色土器	碗	2・3類	口縁部～体部上半					ハケ→ナデ	ミガキ	黒褐色～暗黄褐色	黒褐色	278
	30	C29	II	481	黒色土器	碗	3類	底部～体部下			(6.3)		ハケ→ナデ	タテミガキ	橙褐色	黒褐色	281
	31	C29	II	269	黒色土器	碗	3類	底部～体部下					指頭圧痕→ナデ	ナデ	暗褐色～暗黄褐色	黒褐色	280
	32	B37	II	6	黒色土器	碗	4類	底部～体部下		(7.2)			ハケ→ナデ	ミガキ	暗黄褐色	黒褐色	283
	33	C37	II	26	黒色土器	碗	2類	体部下					ハケ→ナデ	ミガキ	暗黄褐色～暗黄褐色	黒褐色	277
	34	B C 29	溝内		黒色土器	碗	6類	底部～体部下		(7.4)	(6.4)		ハケ→ナデ	タテミガキ	黄白色	黒褐色	282
	35	T1	II	211	赤色土器	坏	2類	底部～体部下		(6.8)			ナデ	ナデ	暗褐色～暗黄褐色	赤褐色	227
	36	B37	III a	29	赤色土器	碗	2類	口縁部～体部					ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～暗黄褐色	赤褐色	269
	37	B29	II	92	赤色土器	碗	2類	口縁部～体部	12.7				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	赤褐色～暗黄褐色	赤褐色～暗黄褐色	231
	38	C29	II	295	赤色土器	碗	2類	口縁部～体部	(14.2)				ハケ→ヘラナデ	ミガキ	暗黄褐色	赤褐色	272
	39	D30	II	364	赤色土器	碗	2類	口縁部～体部	(12.8)				ハケ→ヘラナデ	ミガキ	暗黄褐色～暗黄褐色	暗赤褐色	273
	40	T1	II	157	赤色土器	碗	2・3類	体部					ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色～赤褐色	615
	41	B37	II	14	赤色土器	碗	2・3類	体部下					ハケ→ナデ	ミガキ	暗黄褐色	暗赤褐色	228
	42	C29	II	483	赤色土器	碗	2・3類	体部下					ハケ→ナデ	ミガキ	黄褐色	赤褐色	271
	43				赤色土器	碗	2・3類	口縁部～体部					ナデ	ミガキ	明黄褐色	赤褐色	584
	44	C37	II	393	赤色土器	碗	2・3類	体部下					ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄白色	茶褐色	274
	45	C29	II	197	赤色土器	碗	2・3類	底部～体部下			(6.3)		ハケ→ナデ	ナデ	暗黄褐色～暗黄褐色	暗黄褐色	307
	46	B37	a	11	赤色土器	碗	1類	底部～体部下		(6.4)			ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～赤褐色	226
	47	T1	II	158	赤色土器	碗	2類	底部～体部下		(8)			ハケ→ナデ	ミガキ	明黄白色	赤褐色	245
	48	B36	II	1	赤色土器	碗	5類	底部～体部上半		6.6	5.6		ハケ→ナデ	ミガキ	暗黄褐色	赤褐色	243

第78表 西原遺跡出土遺物一覧表・土師器（黒色土器・鉢）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	分類	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	脚基径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No
													外面	内面	外面	内面	
199	49	C29	III a	941	黒色土器	鉢	-	胴部				石英・長石・角閃石・砂粒を含む	指頭圧痕→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	黒褐色～暗黄褐色	308

(4) 土師甕 (第201図 50～65)

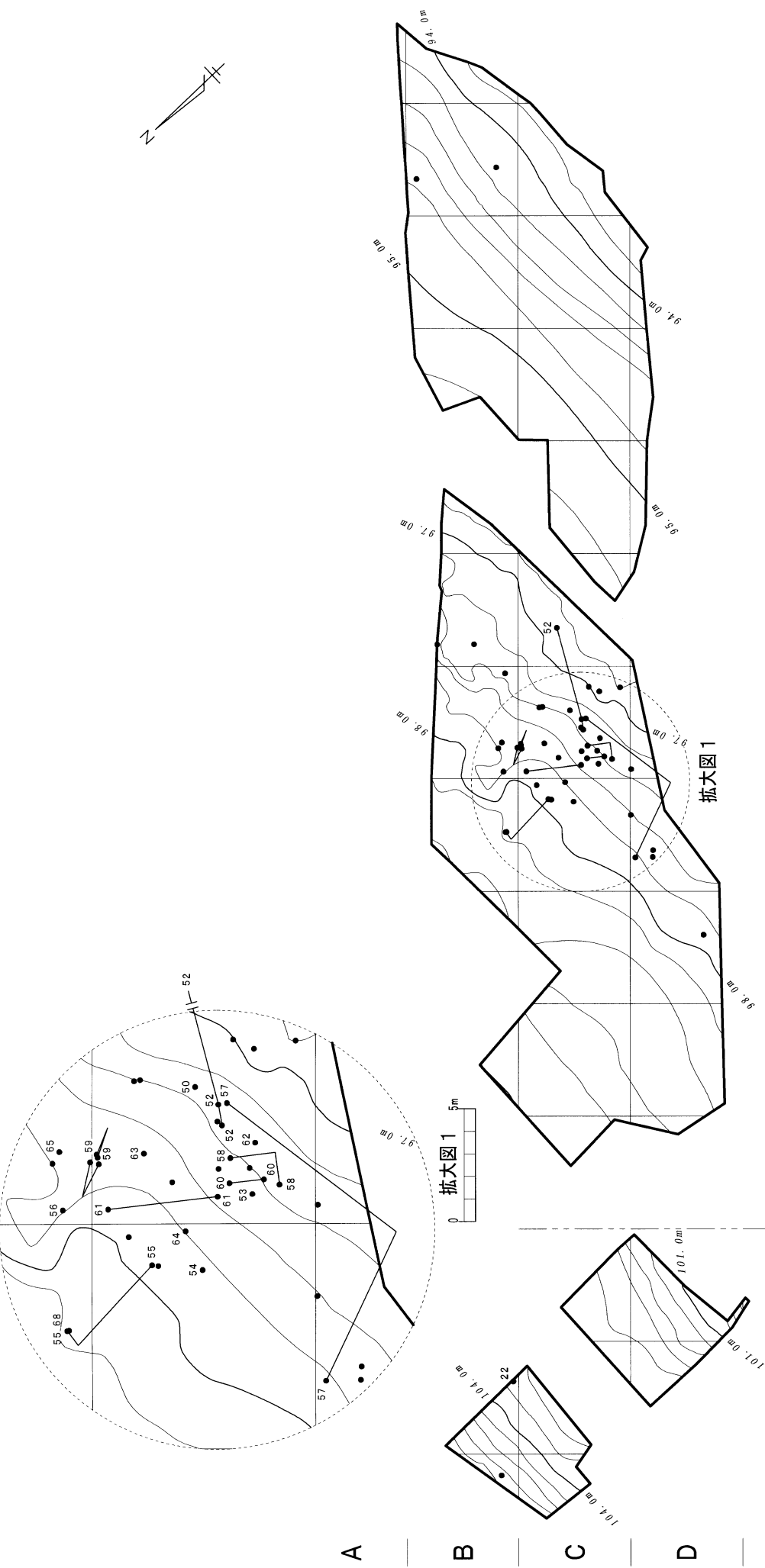
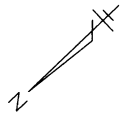
西原遺跡では、古代期の煮沸具として土師甕が多数出土した。出土分布図（第200図）をみると、土師器同様にC・D-29・30区を中心に出土している。出土した土師甕のうち16点を資料化した。

胴部から口縁部の調整法は、胴部内面が縦方向および斜方向のヘラケズリ、口縁部内面が横方向のハケナデ調整、胴部外面が横方向および縦方向のハケナデ調整、胴部上端から口縁部では横方向のハケナデ調整であった。

形態では、口縁部内面と胴部内面との境に明瞭な稜線を作り出すタイプA（50～54）と、明瞭な稜線は作り出さないタイプB（第201図55～62）とがあった。50～54はタイプA第1種に属する。口縁部が「く」の字に外反し、口縁部の長さがある程度ある形態である。55・59～62はタイプB第4種に属する。口縁部が丸く外反し、口縁部の長さがある程度ある形態である。56～58はタイプB第5種に属する。口縁部が僅かに丸く外反し、口縁部の長さが極端に短い形態である。

第79表 西原遺跡出土遺物一覧表・古代期土師甕

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	最大径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No	
										外面	内面	外面	内面		
201	50	C29	II	262	A1	口縁部～胴部上端	27.4			ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ、胴部：ヨコケズリ	暗黄褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	328	
	51	B36	III a	4	A1	口縁部			石英・長石・輝石・雲母・砂粒を含む	ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ、胴部：ケズリ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～茶褐色	322	
	52	C29	II	254	A1	口縁部	(27.2)			ヨコハケ→ナデ	口縁：ヨコハケ→ナデ、胴部：ケズリ	暗黄褐色～茶褐色	茶褐色	321	
	53	C29	III a	154	A1	口縁部～胴部上端	(26.4)			ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ、胴部：ケズリ	暗黄褐色～茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	317	
	54	C30	III a	60	A1	口縁部	(33.9)			ナデ	ハケ→ナデ、胴部：ヘラケズリ	暗黄褐色	暗黄褐色	323	
	55	B30	III a	43	B4	口縁部～胴部上端	(26.1)			ヨコハケ→ナデ	ナデ	橙褐色	橙褐色	319	
	56	B29	II	89	B5	口縁部	(17.6)			ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	黒褐色～暗茶褐色	暗赤褐色	320	
	57	C29	II	252	B5	口縁部	33			ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色～茶褐色	324	
	58	C29	III a	185	B5	口縁部～胴部上端	(31.2)			ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗赤褐色	暗茶褐色	327	
	59	C29	III a	505	B4	口縁部				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	暗黄褐色～茶褐色	326	
	60	C29	II	181	B4	口縁部	(27.3)			石英・長石・雲母・輝石・砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	325
	61	C29	II	100	B4	口縁部～胴部上半	(23.4)			ヨコハケ→ナデ	口縁：ヨコハケ→ナデ、胴部：ヨコケズリ	暗赤褐色	黒褐色～暗茶褐色	310	
	62	T3	II	243	B4	口縁部～胴部上端	(28.6)			ヨコハケ→ナデ	口縁：ヨコハケ→ナゲリ、胴部：ケズリ	暗赤褐色	暗黄褐色～暗茶褐色	318	
	63	C29	II	208		胴部上半		24.6		石英・長石・角閃石・雲母・砂粒を含む	ハケ→ナデ	約6mm印のヘラによるケズリ	茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～茶褐色	315
	64	C30	III a	115		胴部上半				石英・長石・輝石・雲母	ハケ→ナデ	口縁下：ハケ→ナデ、胴部：斜方向へのケズリ	暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色	316
	65	B29	III a	145		胴部				石英・長石・雲母・輝石・角閃石	ハケ→ナデ	タテケズリ	暗黄褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～黒褐色	314

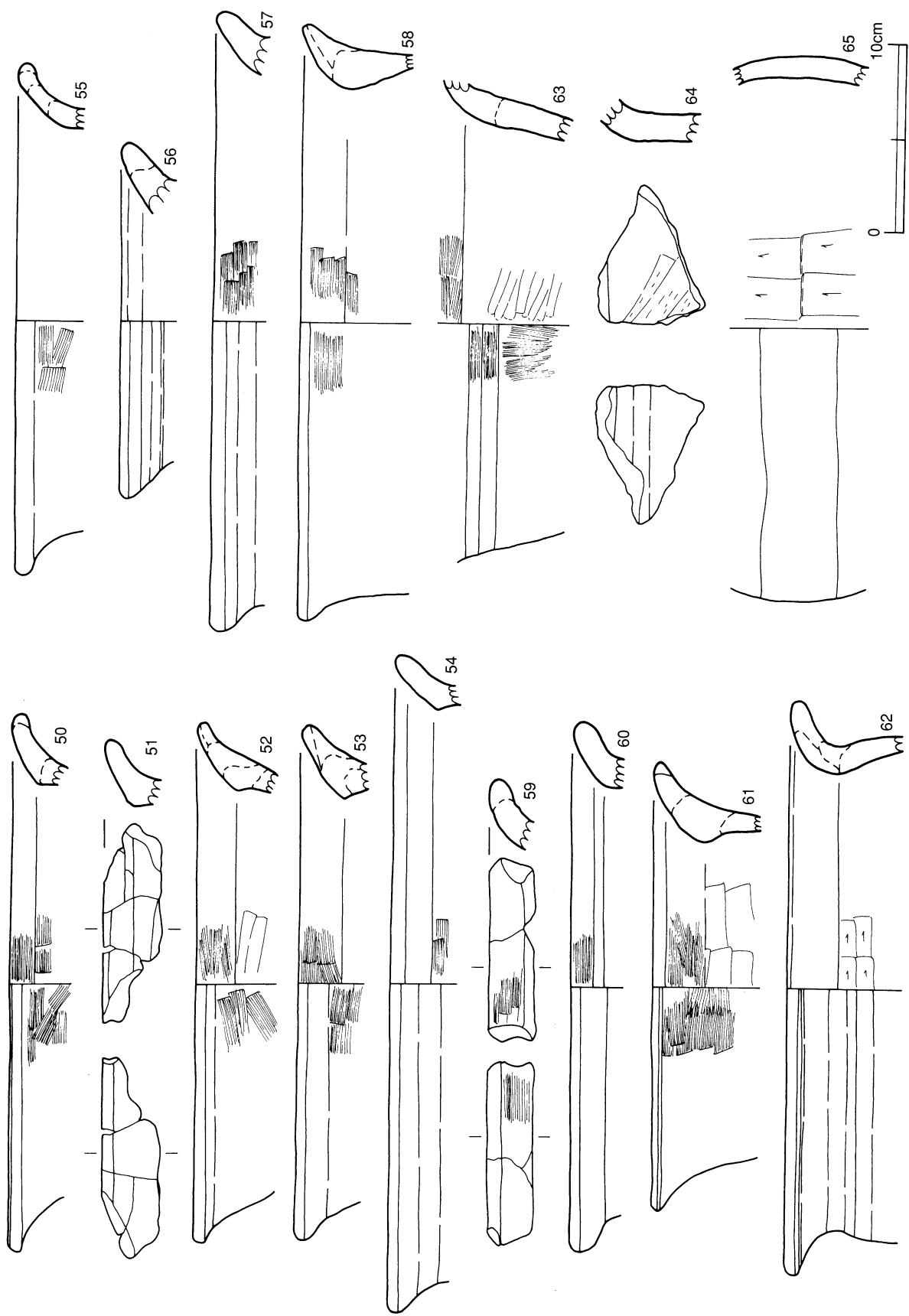


A ————— B ————— C ————— D ————— E

37 | 36 | 35 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23

第200図 西原遺跡 古代期 出土物分布図 4 (土師甕)





第201图 西原遺跡 古代期 出土遺物実測図3 (土師甕)

(5) 須恵器 (第203図66~80)

西原遺跡では、古代期の貯蔵具として須恵器が多数出土した。出土分布図 (第202図) をみるとB-29区を中心に出土する。対して土師器類はC-29区を中心に出土し、中心部に若干変化がある。また、B-29区とD-29区で出土した破片が接合し、遺物が斜面を移動している可能性を示す。

出土した須恵器のうち15点を資料化した。資料化した須恵器は、全て肩部から胴部上半部にかけての甕であり、器形の判断が可能な破片の中には、他の器種は含まれていなかった。

本類に属すると判断した須恵器には3種類ある。

1類 (66)

1類に属するのは66の1点である。66は口縁部下端から肩部片で、内外面とも灰褐色から灰白色を呈し、胎土には細砂流を多く含んでいる。肩部上端では内外面共にナデ調整が、肩部では内外面共にケズリ~ナデ調整が行われている。

2類 (67・68・70・72・73)

いわゆる「赤焼けの須恵器」といわれる1群である。内外面共に明黄褐色ないしは橙褐色を呈し、胎土は精選され細かい。67は頸部下端から肩部片。肩部上端では内外面共にナデ調整が、肩部では外面は横方向の格子目タタキが、内面ではナデ調整が行われている。68・70・72・73は肩部片である。外面では横方向の格子目タタキが、内面では同心円タタキ (オサエ) が行われている。

3類 (69・71・74~80)

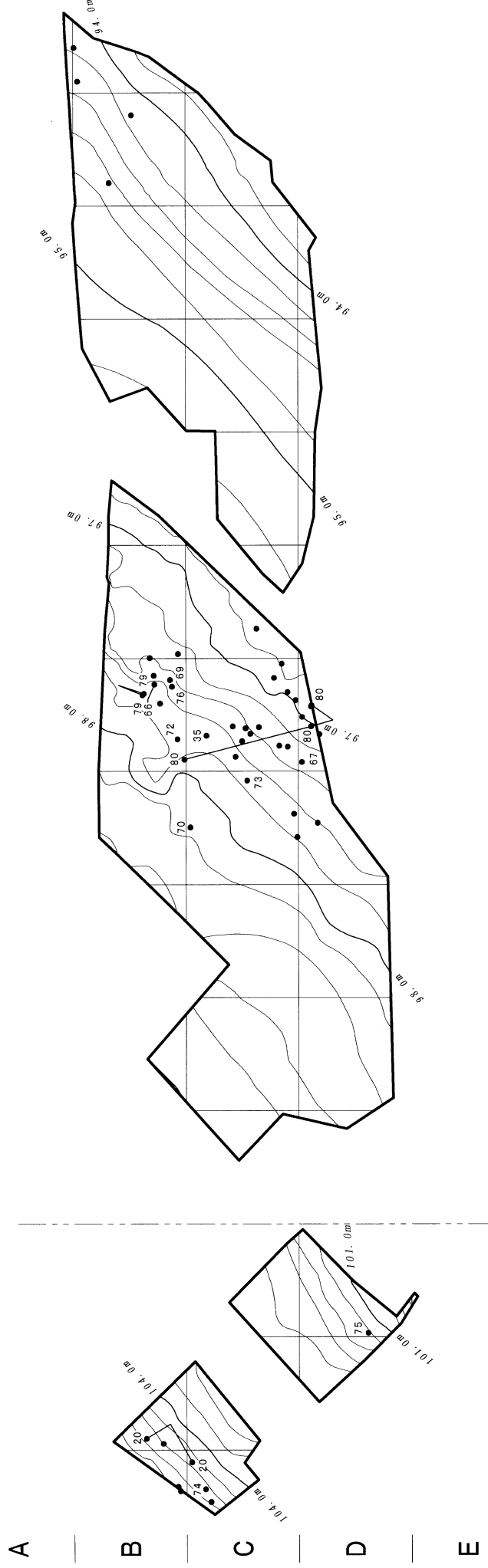
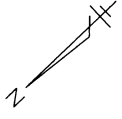
3類に属する須恵器は、外面の色調が暗茶褐色から明黄褐色を、内面の色調が灰褐色から暗紫褐色を呈するのが特徴である。胎土は良く精選され、焼成も非常によい。69・71・74・75は肩部片。外面は横方向の平行タタキが、内面では同心円タタキ (オサエ) が行われている。76~80は肩部。外面では76・78・80が横方向の平行タタキ、77が縦方向の平行タタキ、79が格子目タタキである。これに対して内面では、77が横方向の平行タタキ、78・80では縦方向の平行タタキである。平行タタキでは、1条の幅は概ね5mm~7mm前後を測り、3~4条、つまり2cm~2.5cmが1単位とする工具が使用されている。

74・78・80には表面に自然釉がかかり、黒い光沢を発色させている。

以上の特徴から、1類は菱刈町岡野窯系の、2類・3類は金峰町荒平窯系の須恵器に類似する。

第80表 西原遺跡出土遺物一覧表・古代期須恵器

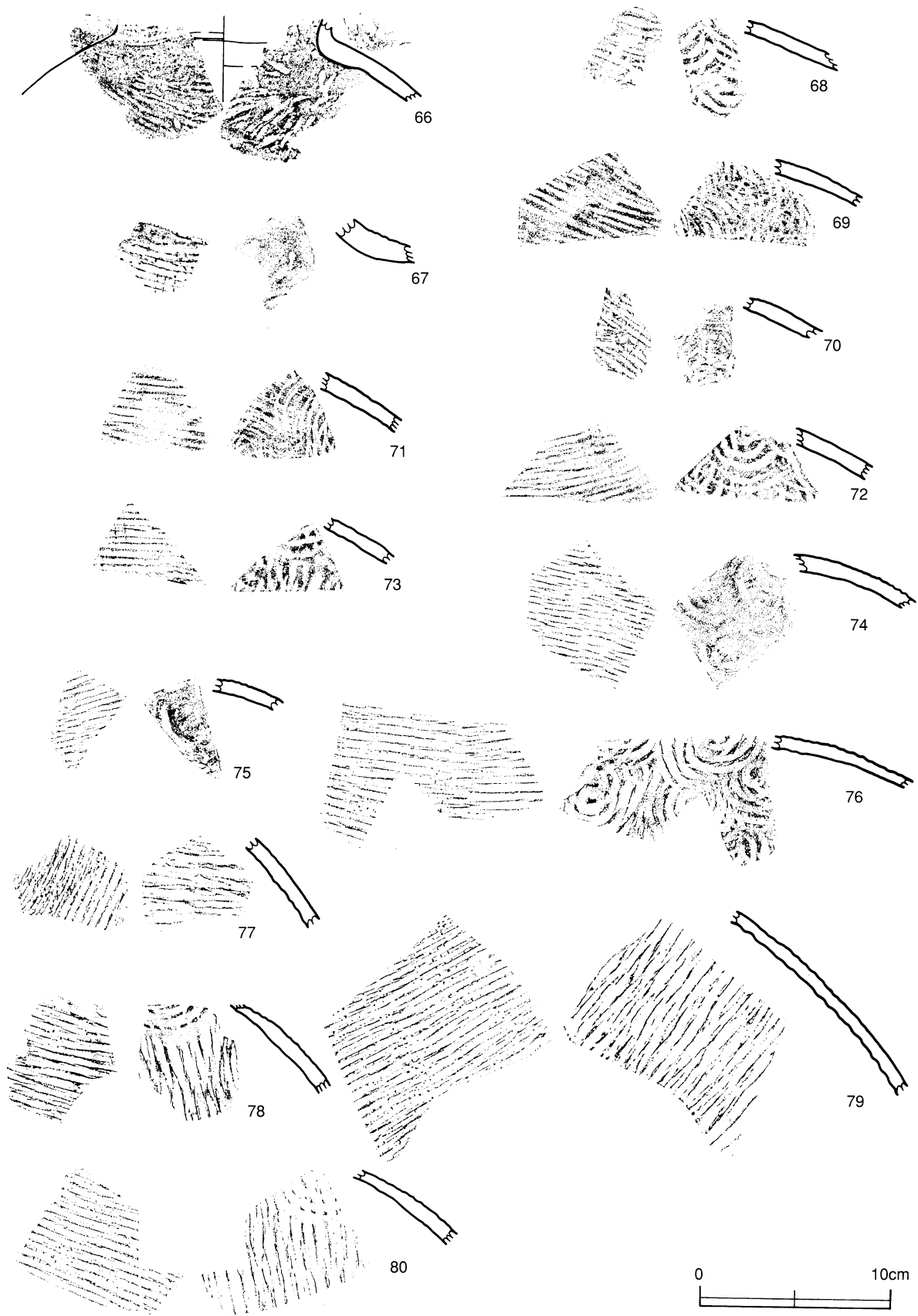
挿図番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	脚基部径 cm	胎土	調整		色調		実測図 No	
									外面	内面	外面	内面		
203	66	B29	II	654	1類	口縁部下端~肩部	(12)	細砂粒を含む	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	灰褐色	灰白色~暗黄褐色	496	
	67	D29	III a	600	2類	頸部下端~肩部			格子目タタキ	ナデ	暗褐色~暗赤褐色	暗黄褐色	749	
	68	C30	大溝II	43		肩部			格子目タタキ	同心円タタキ	暗黄褐色~橙褐色	暗黄褐色	760	
	69	B29	II	615	3類	肩部			平行タタキ	同心円タタキ	暗褐色~暗黄褐色	灰褐色~暗黄褐色	752	
	70	C30	大溝II	40	2類	肩部			格子目タタキ	ケズリ→ナデ	紅褐色	暗黄褐色	761	
	71	B C29	大溝内		3類	肩部			平行タタキ	同心円タタキ	灰褐色~暗黄褐色	灰褐色~暗黄褐色	758	
	72	T1	II	148	2類	肩部			格子目タタキ	同心円タタキ	暗黄褐色~暗赤褐色	暗赤褐色	754	
	73	C30	III a	63		肩部			格子目タタキ	同心円タタキ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色~暗赤褐色	751	
	74	C37	II	392	3類	肩部			平行タタキ	同心円タタキ	黄褐色~暗茶褐色	暗紫褐色	753	
	75	D36	II	539		肩部			平行タタキ	同心円タタキ	黄褐色~暗茶褐色	暗紫褐色	755	
	76	C30	大溝II	7		肩部			平行タタキ	同心円タタキ	暗茶褐色~黄褐色	暗紫褐色	757	
	77	T1	表	616		肩部			平行タタキ (縦方向)	平行タタキオサエ		暗紫褐色	暗褐色	488
	78		溝埋上			肩部~胴部上半			平行タタキ	同心円タタキ→平行タタキ (縦方向)		暗紫褐色~暗茶褐色	暗紫褐色	759
	79	B29	II	626	3類	肩部~胴部上半			細砂粒を含む	格子目タタキ	平行タタキオサエ (斜方向)	暗紫褐色	暗紫褐色~暗黄褐色	756
		B29	II	627										
	B29	II	94											
80	D29	II	425						平行タタキ	同心円タタキ→平行タタキ (縦方向)	暗黄白色~暗茶褐色	暗紫褐色	750	



23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 35 | 36 | 37



第202図 西原遺跡 古代期 出土遺物分布図5 (須恵器)



第203図 西原遺跡 古代期 出土遺物実測図 4 (須恵器)

第4節 中世の調査

西原遺跡では中世期に属する遺構・遺物は、古代期の遺構・遺物と同一の包含層で一括して発見された。そこで、遺構については遺構内遺物の出土状況から時期の判別を行った。

その結果、検出遺構配置図（第204図～第206図）および出土遺物分布図（第210図）から、中世期における人々の生活の場は、主に23・24区を中心に山ノ脇遺跡側に広がる区域と、27区から29区にかけての範囲であったと判断できる。

また調査の成果として、遺構では数多くのピットや、井戸状遺構、溝状遺構が検出された。また遺物では土師器・瓦質土器・須恵器・磁器が出土した。

1 検出遺構

西原遺跡で検出された中世期の遺構は、井戸状遺構1基、溝状遺構1条、多数のピットであった。

(1) 井戸状遺構

D-27区で検出された。この区域ではⅢ層以上が削平され、Ⅳ層面での検出であったが、出土した遺物から中世以降の遺構と判断した。形状は、上面平面形が282cm×280cmの略円形、下面平面形が200cm×160cmを測る略隅丸長方形を呈し、深さは検出面から284cmある。断面形は上部が2段掘りになる筒状を呈する。調査中から多量の水が湧く状況が続き、井戸の役割を果たした遺構と考えられる。

1は井戸状遺構から出土した酸化焼成の瓦質土器の鉢である。底部外周部が丸く、体部下端との境が不明瞭となり、体部下半は内湾しながら外に大きく開く。内面は丁寧なナデ調整を行う。

(2) 溝状遺構

B-29区からC-28区にかけて南北方向に長さ26mにわたり検出された。

また、溝状遺構の東側にはテラス状に一段掘り窪められた箇所がある。このテラス状部分まで含めた最大幅は約5m、溝状遺構部分の最大幅は約2.5mを測る。

さらに、これらの溝状遺構の両脇には溝の肩部に約3mごとに南北方向のピット列が4本掘られていた。さて、土層断面をみると、3～4回掘り直され、幅は狭くなりながらも、使用され続けられたようである。この各の溝状遺構の幅と、ピット列の検出状況とはその位置関係が良く符合する。これらのことからピット列は、溝状遺構を仕切る柵列であった可能性が指摘できる。

(3) ピット（第204図～第206図）

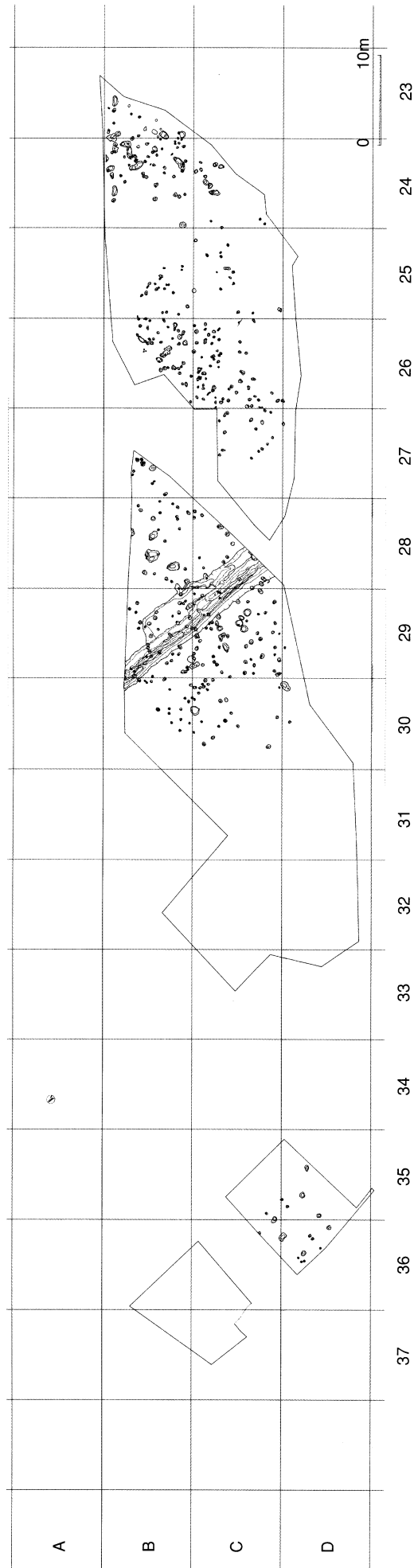
西原遺跡では多数のピットが23区から30区にかけて検出された。これらのピットは、遺物の出土状況と加味して、概ね中世期の遺構と判断した。これらのピットは現地および整理作業時において検討を加えたものの、掘立柱建物跡の柱穴と認定するには至らなかった。また柵列と判断できるほど規則的に並んでいるピット列も確認できなかった。

2 出土遺物

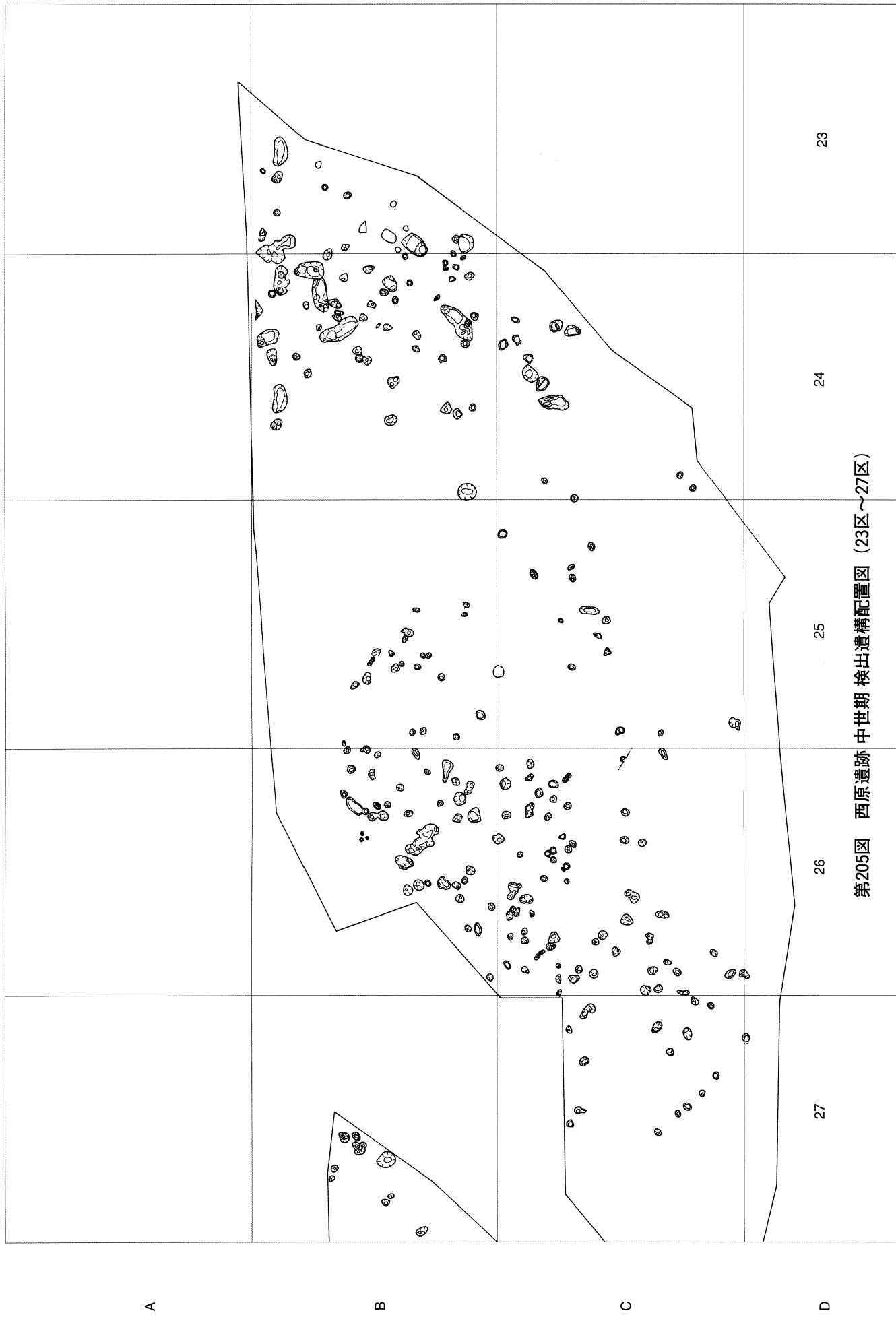
西原遺跡における中世期の遺物は、Ⅲa層やⅣ層から混在して出土したのもあったが、多くはⅡ層を中心にⅠb層や溝状遺構内から出土した。出土分布図（第210図）をみると、23～24区と29～30区とに集中して出土していることが指摘できる。遺物には土師器（坏・小皿）・瓦質土器（風炉・播鉢・鉢）・須恵器（甕）・磁器（青磁碗・青磁坏）等があった。

(1) 土師器（第211図2～33）

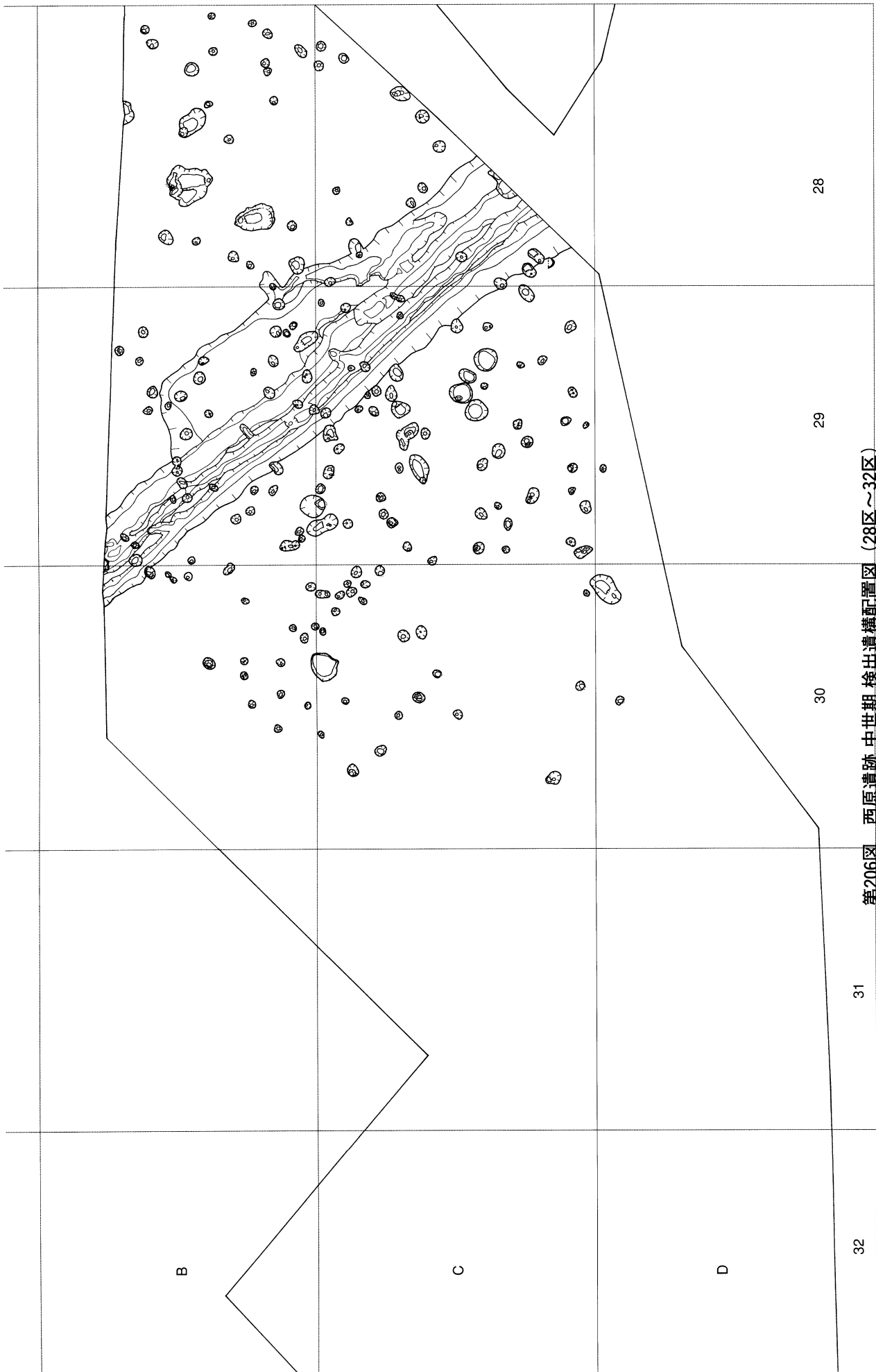
西原遺跡で出土した土師器では、器種は坏と小皿とが出土した。出土分布は中世期遺物の出土傾向



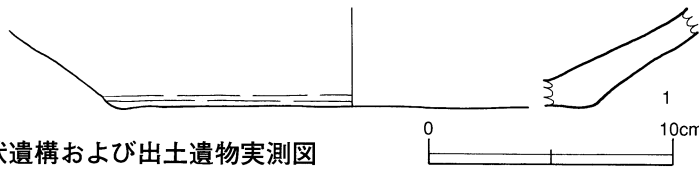
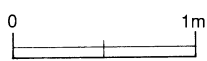
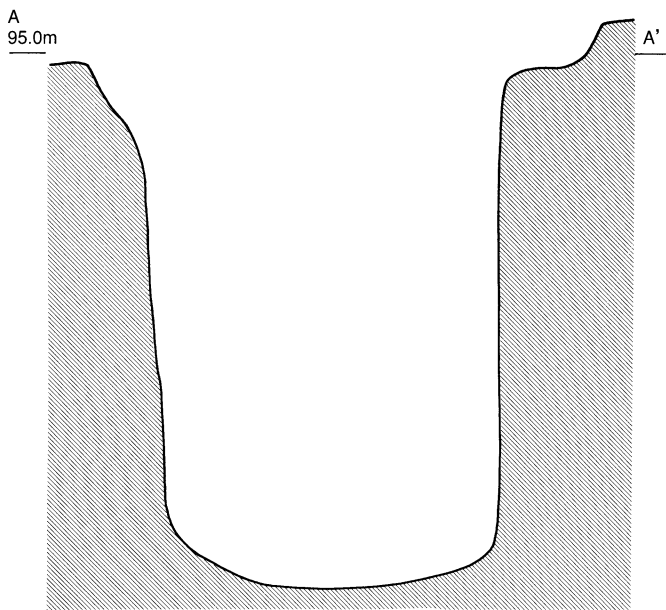
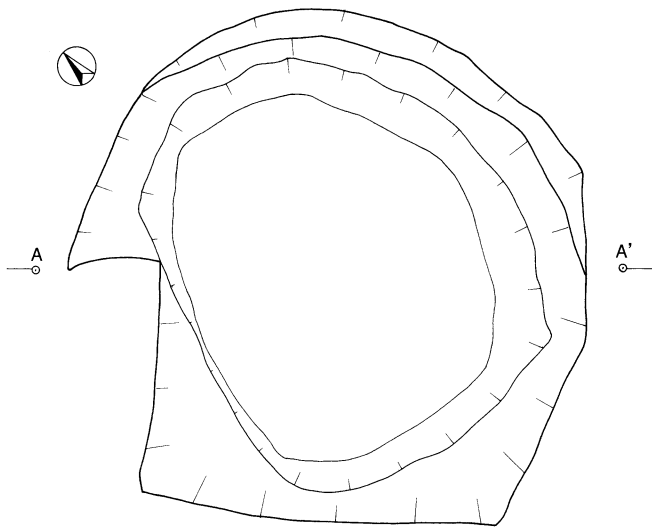
第204図 西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 (全体図)



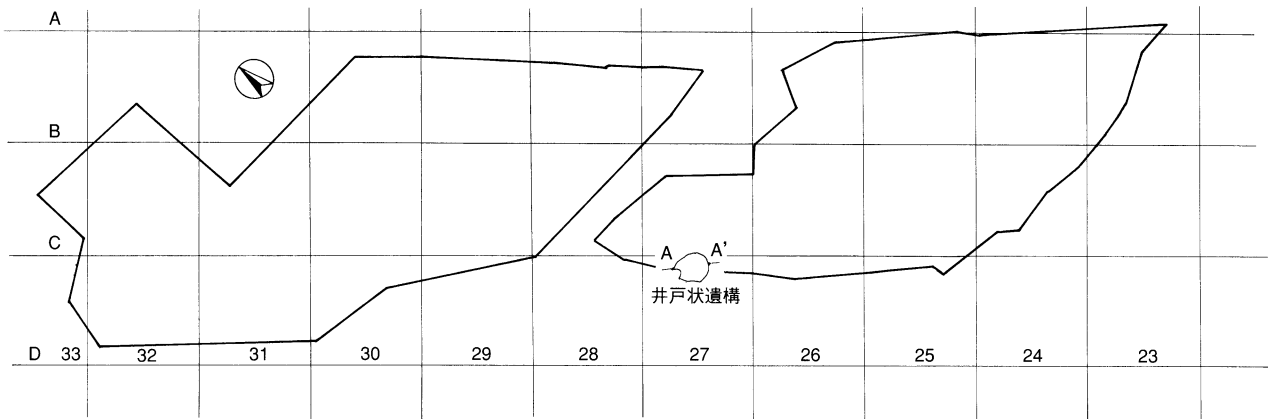
第205図 西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 (23区~27区)



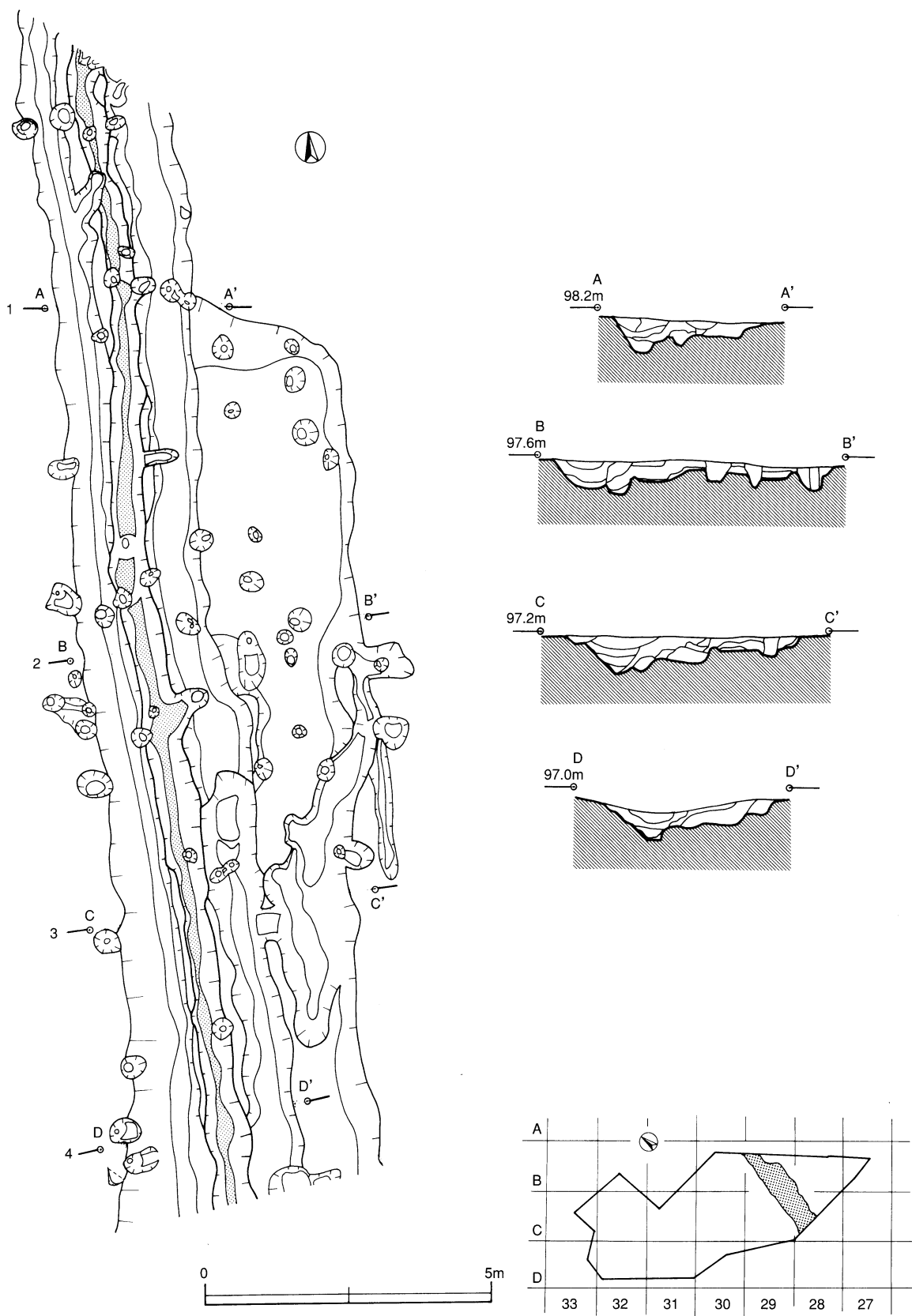
第206図 西原遺跡 中世期 検出遺構配置図 (28区~32区)



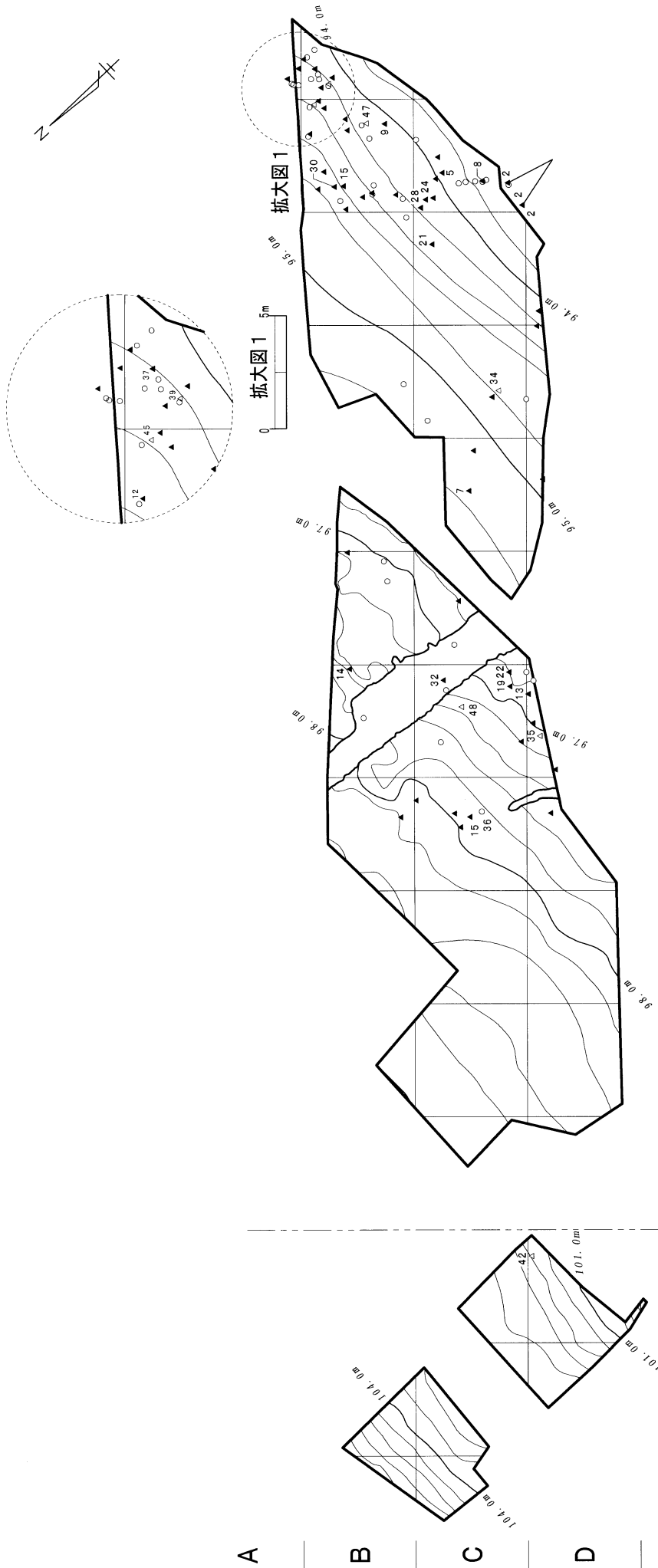
第207図 西原遺跡 中世期 井戸状遺構および出土遺物実測図



第208図 西原遺跡 中世期 検出遺構配置図



第209図 西原遺跡 中世期 溝状遺構実測図



23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 35 | 36 | 37

第210図 西原遺跡 中世期 出土遺物分布図 (土師器・瓦質土器・須惠器・磁器)

と同様な状況を示す。分類は山ノ脇遺跡での分類に準じた。

坏 (第211図 2～21)

1類 山ノ脇遺跡中世土師 1類に準ずる資料はみられなかった。

2類 (第211図 6・7)

6は体部下半が緩やかに湾曲しながら外反し、体部中程で緩やかに屈曲する坏。7は体部中程の屈曲がほとんどないままに、外反しながら口縁部へ移行する坏。共に体部内面が体部下端から直線的に口縁部まで立ち上がる。

3類 (第211図 3・8～11)

3は体部が内湾して口縁部は直立に立ち上がる坏。8～11は体部下半部が強く湾曲しながら外反する坏。体部内面が体部下端部から口縁部まで内湾し立ち上がる。

4類 (第211図12～14)

12～14は外面形態において底部と体部との境は直角に近い角度で屈曲し、短く立ち上がり、体部下半部は強く内湾しながら体部上半部へ移行する坏である。

5類 (第211図15・16)

15・16は外面形態において底部と体部との境は直角に近い角度で屈曲し、ごく短く立ち上がり、体部下半部は強く内湾しながら体部上半部へ移行する坏である。

6類 (第211図17・18・20)

17・18・20は体部下半部が直線的に外反し、体部内面が体部下端部から口縁部まで内湾して立ち上がる坏である。

7類 (第211図 4) 4は体部から口縁部まで直線的に外反する坏である。

8類 (第211図 2・5・19・21)

2は口縁部にかけてやや内湾して立ち上がり、口縁部先端が尖る。5は口縁部にかけて大きく直線的に外反し、口縁部先端が尖る。19・21は外面形態において底部と体部との境は丸味を持つため不明瞭であり、体部下半部は直線的に外反して立ち上がる。

小皿 (第211図22～33)

1類 (第211図22・30)

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部は湾曲しながら外反する。体部内面は下端から口縁部にかけて直線的に移行する。

2類 (第211図23)

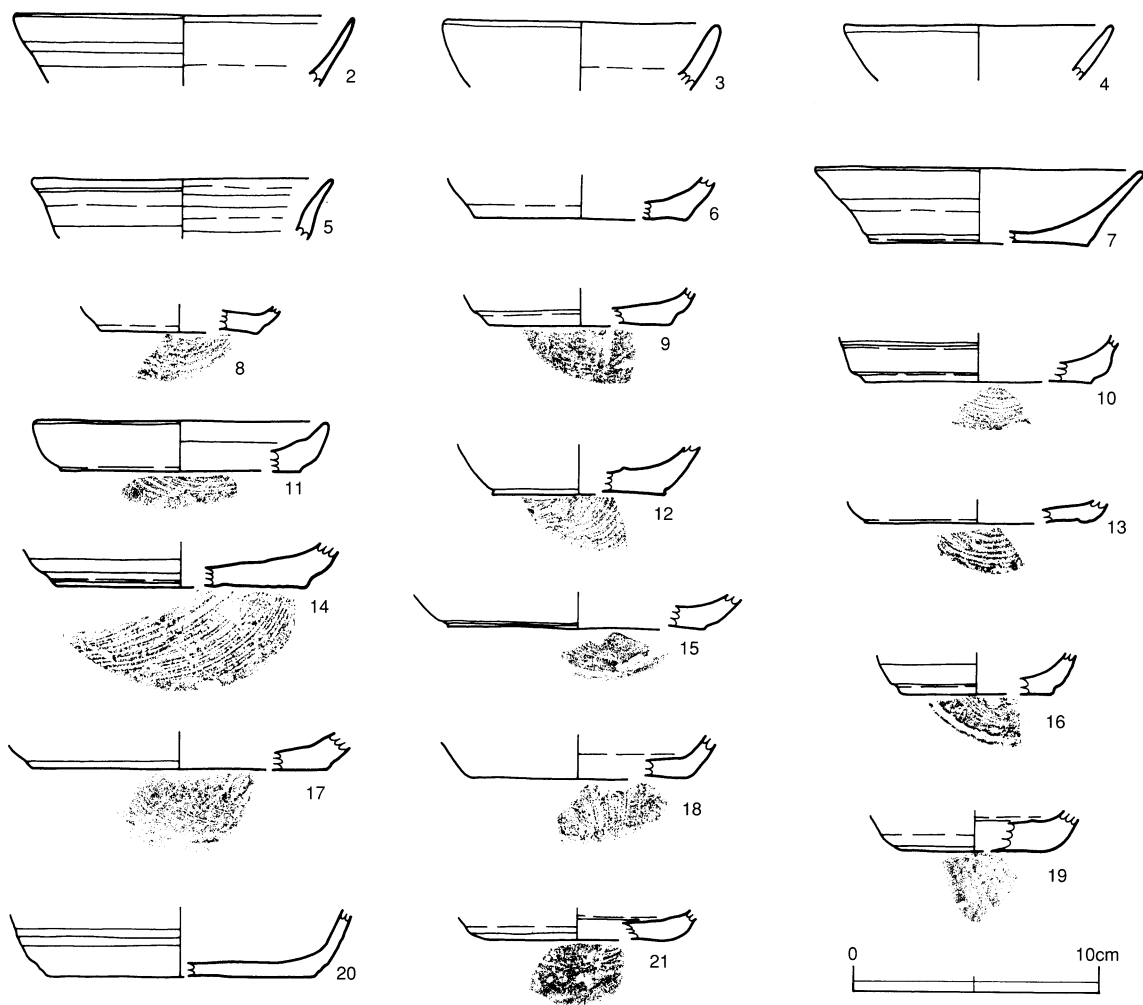
外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲し、体部から口縁部は直線的に直立する。

3類 (第211図24・25)

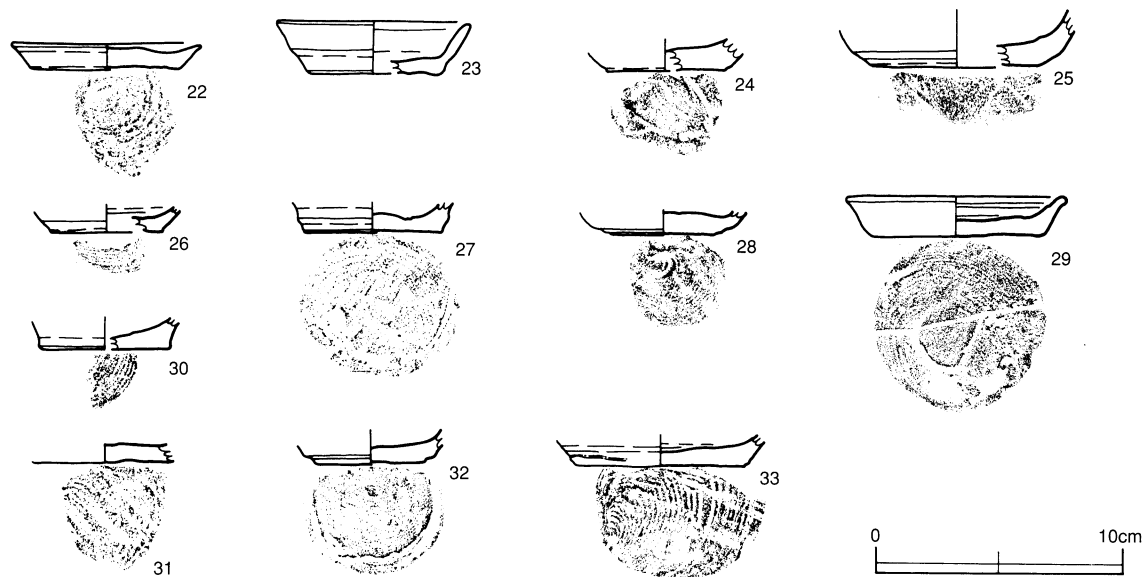
外面形態において底部と体部との境は、丸味を持つため不明瞭であり、体部は直線的に外反する。

4類 (第211図26～29・32・33)

外面形態において底部と体部との境は明瞭に屈曲する。26・27は体部下端部が湾曲しながら立ち上がる形態である。28・32は底部と体部との境は直角に近い角度で屈曲し、ごく短く立ち上がり、体部下半部は強く内湾しながら体部上半部へ移行する形態である。29・33は体部下半部が直線的に外反して立ち上がる形態である。29では口縁部は外反する。



土師器・坏



土師器・小皿

第211図 西原遺跡 中世期 出土遺物実測図1 (土師器・坏・小皿)

(2) 瓦質土器 (第212図～第213図34～46)

風炉 (第212図34・35)

34・35は肩部に突帯が2条巡り、突帯間に雷文のスタンプが巡る。外面調整は丁寧にミガキが施され、内面は口縁部が縦方向のハケナデ調整、体部が斜方向のハケナデ調整が行われる。

鉢 (第212図36・37, 第213図44・45)

36は外面口縁端部に粘土をかぶせ、肥厚部表現を行う。口唇端部にもわずかに粘土をかぶせ、突起の表現を行っている。ただし、後調整を行っていない。焼きが甘い土師質を呈する。37は外面口縁端部を肥厚させ、さらにその直下を削ることで肥厚を強調している。還元焼成は甘い。44は器形が体部から口縁部にかけて直線的に外開きを呈する。口縁端部を角形に仕上げ、器壁は薄い。内面は斜方向のハケナデ調整である。45は平底を呈する底部から直線的に体部へ立ち上がる器形。器壁は薄い。内面はハケナデ調整の後に丁寧なナデ調整が行われている。44・45は還元焼成の瓦質土器である。

擂鉢 (第212図38～43)

38・39・40は口縁部を厚く、端部形態は隅丸形に仕上げている。口唇端部を窪ますことで突起表現を行う。38は4本単位の櫛目を、39は4本単位にして2～3組を1セットの櫛目を、41は5本単位の櫛目を入れる。38・39は還元焼成の、40は酸化焼成の瓦質土器である。42は平底を呈する底部から外湾させて立ち上がる。全体的に器壁はあれている。43は平底を呈する底部から内湾して立ち上がる。ていねいなナデ調整を行う。42は7本単位の櫛目を、43は9本単位の櫛目を施す。共に部分的に還元焼成の痕跡が観察でき、還元焼成の瓦質土器と判断できる。

小型浅鉢 (第213図46)

46は小型浅鉢の底部である。上げ底を呈する底部からやや内湾気味に体部へ立ち上がる。体部外面は横方向のハケナデ調整、体部内面は斜方向のハケナデ調整が行われる。

(3) 須恵器 (第214図47～49)

甕 (第214図47・49)

47は甕の肩部である。外面には斜方向から横方向の平行タタキが、内面には同心円タタキが施される。焼成は非常に堅緻で器壁が薄いことから、中世期に属すると判断した。内面の色調が灰色、胎土が灰白色を呈する。49は甕の底部である。平底を呈する底部から直線的に外に開く器形である。外面はナデ調整が、内面は細かいハケナデ調整が行われる。胎土の色調が黄色がかった乳白色、内面が灰白色を呈する。主観的雰囲気から、樺万丈窯系の中世須恵器であると判断した。

壺 (第214図48)

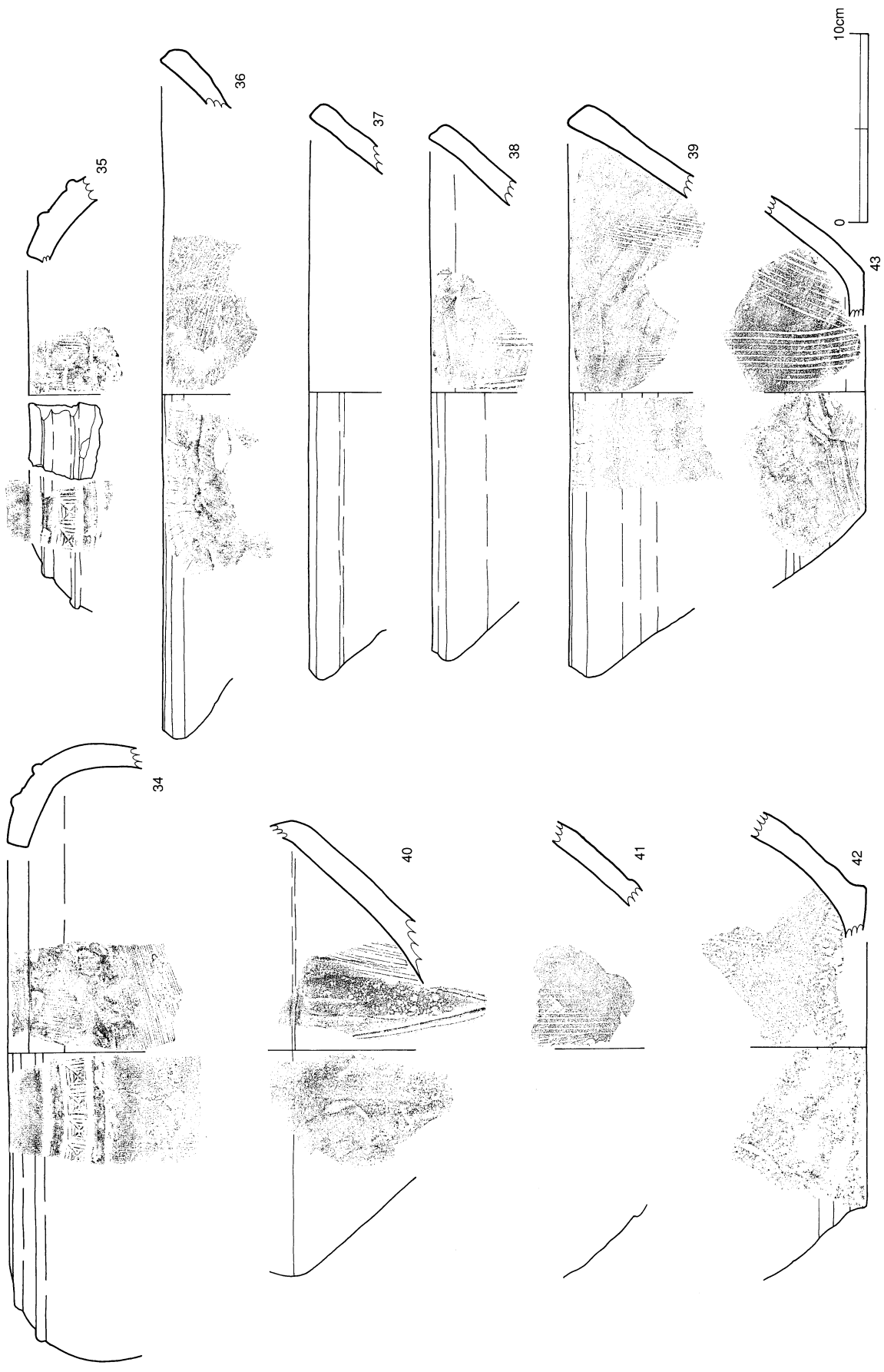
48は壺の胴部か。外面には斜方向の格子目タタキを施した後にナデ調整が行われ、その後横方向の細沈線を伴うハケナデ調整を行う。内面には横方向にヘラケズリを行った後に、斜方向のハケナデ調整が施される。焼成は非常に堅緻で器壁が薄いことから、中世期に属すると判断した。内面と胎土の色調が暗黄褐色、外面が茶褐色から暗黄褐色を呈する。

(4) 磁器 (第215図50～59)

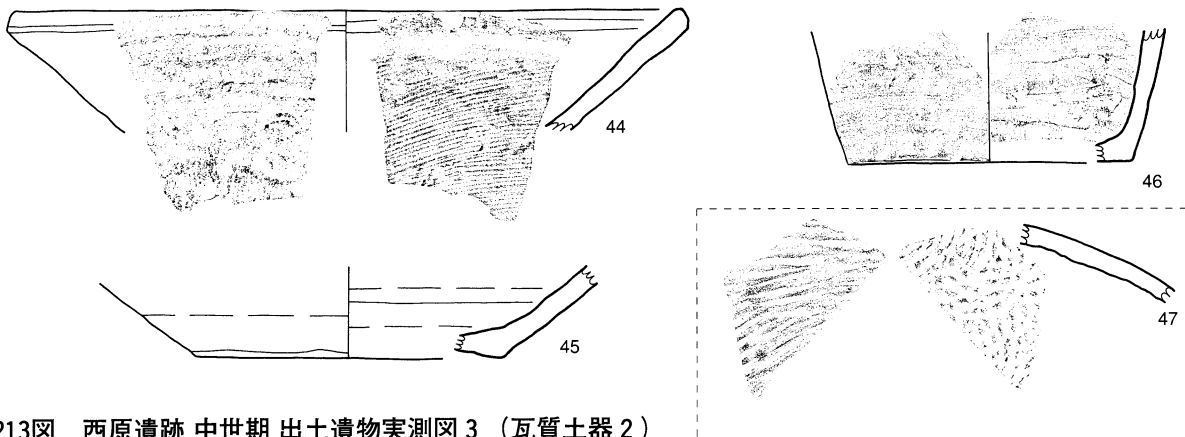
青磁椀 (第215図50～59)

西原遺跡で出土した磁器のうち資料化できた10点のうち、57の坏を除き、全て青磁椀であった。

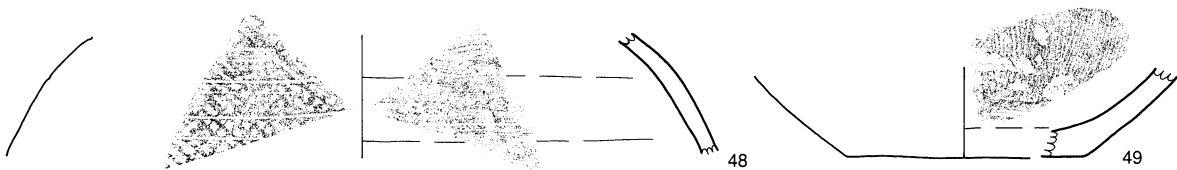
50・51は体部片。胎土は緻密で灰色を、釉は緑色を呈す。体部内面に片彫蓮花文を施す。大宰府編



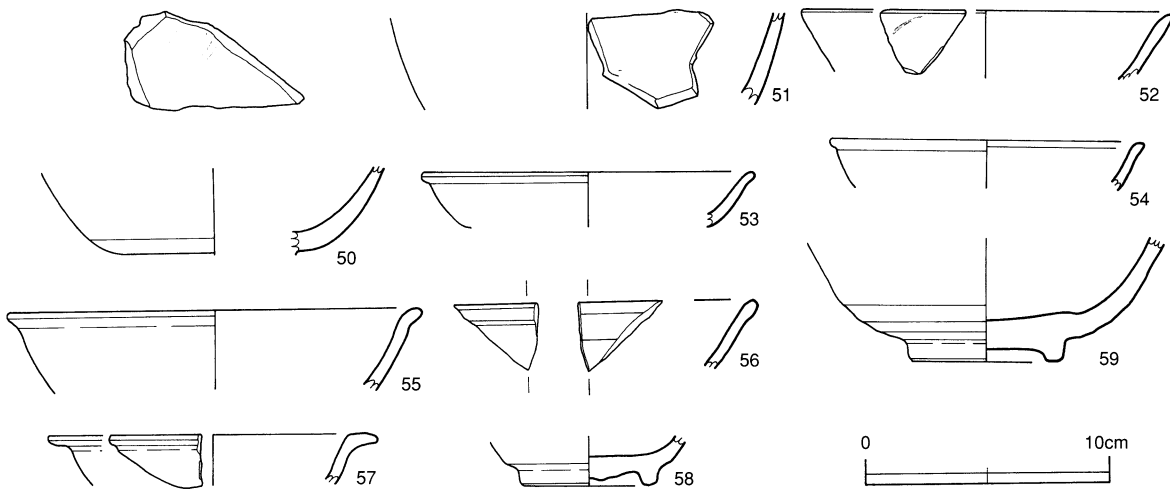
第212図 西原遺跡 中世期 出土遺物実測図 2 (瓦質土器 1)



第213図 西原遺跡 中世期 出土遺物実測図3 (瓦質土器2)



第214図 西原遺跡 中世期 出土遺物実測図4 (須恵器)



第215図 西原遺跡 中世期 出土遺物実測図5 (磁器)

年椀Ⅰ-2類に属する。52は体部外面に弁の中心線が稜をなす，鑄蓮弁文を施す。大宰府編年椀Ⅱ-b類に属する。53・54は口縁端部が外反する。体部内外面共に無文。胎土は灰白色。大宰府編年椀Ⅱ-1aに属する。55は体部が内湾し，口縁部が外反する。体部内外面共無文。大宰府編年椀Ⅳ類に属する。58は低い角高台で，高台内面は凸状を呈し，59は高台外端を面取りする。大宰府編年椀Ⅳ類に属する。

青磁坏 (第215図57)

57は体部が内湾して丸味を持ち，口縁部が外反し上端は平坦面をなす坏である。体部外面に鑄蓮弁文を施す。内面は無文。大宰府編年坏Ⅲ-4a類に属する。

第81表 西原遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器（坏）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整			色調		実測図 No
										外面	内面	その他	外面	内面	
211	2	C24	IV	1038	8類	口縁部～体部	(14)			ハケ→ナデ	ナデ		茶褐色	茶褐色	242
		C24	IV	1039											
	3	C24	I b	1424	3類	口縁部～体部	11			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		赤褐色	赤褐色	275
	4	D27	II 井戸		7類	口縁部～体部上半	(10.8)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		明橙褐色～暗黄褐色	暗黄褐色	772
	5	C24	II	1243	8類	口縁部～体部	12.35			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗茶褐色	暗茶褐色	230
	6	D27	I 井戸		2類	底部～体部下	(8.6)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	底：回転系切り離し	暗茶褐色～赤褐色	黒褐色～暗茶褐色	770
	7	C27	III b	975		底部～口縁部	(13.2)	(8.9)	(3)	回転ヘラナデ→ナデ	ナデ	底：回転系切り離し	赤褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～茶褐色	775
	8	C24	溝内	1022		回転系切り底		(6.4)		ナデ	ナデ		橙褐色	暗黄褐色	234
	9	B24	II	1050	3類	底部～体部下	7.4			ハケ→ナデ	ナデ		暗褐色～暗橙褐色	暗黄褐色～暗橙褐色	237
	10		表			底部～体部	(9.2)			ナデ	ハケ→ていねいなナデ		明橙褐色	明橙褐色	427
	11		表			底部～口縁部	(11.8)	(9.9)		ハケ→ナデ	上：ハケ→ナデ、下：ケズリ		暗黄褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗茶褐色	426
	12	B24	II	1161		底部～体部下	(7.1)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色～赤褐色	赤褐色～黒褐色	221
	13	D29	II	440	4類	底部～体部下	(9.1)			ナデ	ハケ→ナデ		赤褐色	赤褐色	238
	14	B29	II	336		底部～体部下	10.2			ハケ→ナデ	ハケ→ていねいなナデ		暗黄褐色	橙褐色～暗褐色	217
	15	C24	溝	1278	5類	底部～体部下	(10.6)			ナデ	ナデ		黒褐色～赤褐色	黒褐色～赤褐色	240
	16		表			底部～体部	(5.8)			ナデ	ナデ		赤褐色	赤褐色	429
	17	C23	I b	1422	6類	回転系切り底	12			ナデ	ハケ→ナデ		暗茶褐色	橙褐色～赤褐色	220
	18		表			底部～体部	(8.6)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色～暗赤褐色	赤褐色	428
	19	C29	II	289	8類	底部	(5.9)			ナデ	ナデ		暗黄褐色	暗褐色～暗橙褐色	229
	20		トレンナ		6類	底部～体部下	(10.8)			ハケ→ナデ	ナデ	見込み部：ハケ→ナデ	暗黄白色	暗橙褐色	244
	21	C25	III a	985	8類	底部	(7.2)			ハケ→ナデ	ナデ		暗褐色～暗橙褐色	橙褐色	225

第82表 西原遺跡出土遺物一覧表・中世期土師器（小皿）

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	細別	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整			色調		実測図 No
										外面	内面	その他	外面	内面	
211	22	C29	II	661	1類	回転系切り底	(7.9)	(6.1)	(1.01)	ナデ	ナデ		明黄褐色～赤褐色	赤褐色	236
	23		トレンナ		2類	定形	(5.4)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色～橙褐色	橙褐色～暗黄褐色	219
	24	C24	II 溝内	1098	3類	底部～体部下	(4.3)			ハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色	暗赤褐色	232
	25	C24	I b	1425		底部～体部下	(6.7)			ナデ	ハケ→ナデ		赤褐色	赤褐色	222
	26	C24	I b	1433		底部～体部下	(4.5)			ナデ	ハケ→ナデ		暗黄褐色	橙褐色	239
	27		表		4類	底部～体部下	(5.1)			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		赤褐色～暗黄褐色	赤褐色	425
	28	C24	II	1115		底部	4.1			ナデヨコハケ→ナデ	ナデ		暗黄褐色～赤褐色	暗黄褐色	233
	29	B27	P1			定形	9	6.8	1.6	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		紅褐色	紅褐色～暗黄褐色	769
	30	B24	II	1174	1類	回転系切り底	5.2			ナデ	ハケ→ナデ		茶褐色	茶褐色	224
	31	C23	II	1445		回転系切り底	(4.2)			ナデ	ナデ		赤褐色	赤褐色	223
	32	C29	II	280	4類	底部	4.3			ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	見込み部：ヨコハケ	明橙褐色	明橙褐色	235
	33		溝ノ理			回転系切り底	(7)			ナデ	ハケ→ナデ		暗橙褐色	暗橙褐色	218

第83表 西原遺跡出土遺物一覧表・中世期瓦質土器

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整			色調		実測図 No
												外面	内面	その他	外面	内面	
212	34	C26	III a	995	風舟		口縁部～体部	(22.4)			細砂粒を含む	ミガキ	上半：タテハケナデ→ナデ 下半：ヨコハケナデ→ナデ	暗褐色～茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	494	
	35	D29	II	422	風舟		口縁部～体部上半	14.8			細砂粒を含む	ヨコミガキ	タテハケ→ナデ	茶褐色	暗黄褐色～茶褐色	493	
	36	B23	III a	1254	鉢		口縁部～体部上半	(35.2)			石英を多く含む	ナデ	ハケ→ナデ (5本/1.1cm)	暗赤褐色	暗赤褐色	591	
	37		表		鉢		口縁部～体部上半	(29.3)				ナデ	ハケ→ナデ	灰褐色～暗黄褐色	灰褐色～暗黄褐色	586	
	38	B24	溝	1232	すり鉢		口縁部～体部上半	(27.2)				ハケ→ナデ	ナデ	灰褐色～灰白色	灰褐色	585	
	39	C30	大溝 II 35		すり鉢		口縁部～体部	(28.2)				指頭圧痕→ナデ	ヘラナデ・ハケ→ナデ	灰褐色～灰白色	灰白色～暗黄褐色	500	
	40	C23	I b	1416	すり鉢		体部				輝石を多く含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	茶褐色	498	
	41	D35	II	538	すり鉢		体部			24.2		ナデ	ハケナデ→ていねいなナデ	黄褐色	黄褐色	587	
	42	B29	大溝 I 期		すり鉢		底部～体部下	(17)			石英を多く含む					499	
	43	B24	II	1142	すり鉢		底部～体部	(12.6)				ハケナデ→ナデ	ハケ→ナデ	明黄白色	暗褐色～明黄白色	497	
	44	B28	P6		鉢		口縁部～体部上半	(26.6)			砂粒を多く含む	ヨコハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗黄褐色～灰白色	灰褐色	774	
213	45	B24	II	1055	壺		底部～体部下	(12.4)				ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～灰白色	灰白色～暗黄褐色	590	
	46	C29	II	268	鉢		底部～体部下	11.4				ハケ→ナデ	ハケナデ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	灰白色	501	

第84表 西原遺跡出土遺物一覧表・中世期須恵器

挿入番号	番号	区	層	遺物番号	器種	細別	部位	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	胎土	調整			色調		実測図 No
												外面	内面	その他	外面	内面	
214	47	BC29	大溝内		甕		肩部					平行タタキ(縦・斜方向)	同心円タタキ	暗緑褐色	灰褐色	748	
	48	C30	III a	32	壺		胴部				砂粒を含む	格子目タタキ→斜方向条線	タテケズリ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	灰白色～暗黄褐色	495	
	49	B29	大溝 I 期		甕		底部～体部下	(9.6)				タテハケ→ナデ	ナデ	灰白色～暗黄褐色	灰白色	592	

第85表 西原遺跡出土遺物一覧表・中世期磁器

挿入番号	番号	区	層	細別	部位	口径 cm	底径 cm	色調			実測図 No
								外面	内面	磁胎	
215	50	B25	表		体部		(7)	オリブ灰色	オリブ灰色	灰白色	681
	51		表		体部			オリブ灰色	オリブ灰色	灰白色	688
	52		表		口縁部～体部	(14.8)		オリブ灰色	オリブ灰色	灰白色	686
	53		表		口縁部～体部	(13.3)		オリブ灰色	オリブ灰色	灰白色	685
	54	A B23-25	表		口縁部～体部	(12.6)		明緑灰色	明緑灰色	灰白色	684
	55		表		口縁部～体部	(16.6)		灰オリブ色	オリブ灰色	灰黄色	682
	56	B28	P5		口縁部～体部			灰オリブ色	灰オリブ色	灰白色	773
	57		表		口縁部～体部上半	(13.2)		オリブ灰色	オリブ灰色	灰白色	687
	58		表		底部～体部下		(5.4)	オリブ灰色	オリブ灰色	灰黄色	683
	59		表		底部～体部		(6)	オリブ灰色	オリブ灰色	灰白色	680

第7章 石坂遺跡科学的分析の成果

～鹿児島県，石坂遺跡における自然科学分析～

株式会社 古環境研究所

第1節 石坂遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	B-3区, C-1集石①	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	B-3区, C-1集石②	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.3	B-3区, C-1集石③	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.4	B-3区, C-1集石④	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No.
No.1	-31.8	3310±50	交点: cal BC 1600, 1560, 1535 1σ: cal BC 1680~1520 2σ: cal BC 1735~1710, 1690~1450	PE020301
No.2	-25.1	1135±50	交点: cal AD 895, 925, 940 1σ: cal AD 880~980 2σ: cal AD 775~1015	PE020302
No.3	-28.1	1175±50	交点: cal AD 885 1σ: cal AD 780~900, 920~955 2σ: cal AD 695~700, 715~750 cal AD 765~985	PE020303
No.4	-26.4	2675±50	交点: cal BC 825 1σ: cal BC 890~880, 840~800 2σ: cal BC 920~790	PE020304

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

2) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

3) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （68%確率） \cdot 2 σ （95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ \cdot 2 σ 値が表記される場合もある。

3. 考察

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、B-3区のC-1集石から採取された炭化物のNo.1では3,310 \pm 50年BP（1 σ の暦年代でBC 1,680~1,520年）、No.2では1,135 \pm 50年BP（AD 880~980年）、No.3では1,175 \pm 50年BP（AD 780~900, 920~955年）、No.4では2,675 \pm 50年BP（BC 890~880, 840~800年）の年代値が得られた。

文献

Stuiver, M., et, al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40(3).

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p. 1 - 36.

第2節 石坂遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

試料は、C-4区うね状遺構の土層断面から採取されたⅡ層 (黒褐色土) とⅢa層 (褐色土)、C-6区井戸状遺構の埋土 (有機質黒褐色土) から採取されたNo.1~No.6、C-1区の集石1の礫から採取された3点の計11点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。なお、集石1の礫については表面に付着した土壌 (微量) を針で掻き取って分析試料とした。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03), ヨシ属 (ヨシ) は6.31, ススキ属 (ススキ) は1.24, ネザサ節は0.48, ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1, 表2および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，オオムギ族（ムギ類，穎の表皮細胞由来），キビ族型，ヨシ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族A（チガヤ属など），ウシクサ族B（大型），シバ属，Aタイプ（くさび型）

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），ブナ科（アカガシ亜属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科，その他

5. 考察

（1）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる），ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属型（シコクビエが含まれる），モロコシ属型，トウモロコシ属型などがある。このうち，本遺跡の試料からはイネとオオムギ族が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) イネ

イネは，分析を行ったすべての試料から検出された。このうち，C-4区うね状遺構のⅡ層では密度が4,300個/gと比較的高い値である。したがって，同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。同地点のⅢa層では密度が1,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては，稲作が行われていた期間が短かったこと，土層の堆積速度が速かったこと，採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと，および上層や他所からの混入などが考えられる。

C-6区井戸状遺構の埋土（No.1～No.6）では，密度が2,800～3,600個/gと比較的高い値である。同遺構は井戸跡とされていることから，当時は周囲で稲作が行われていたと考えられ，そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

2) オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は，C-6区の井戸状遺構の埋土（No.4）から検出された。ここで検出されたのは，ムギ類（コムギやオオムギ）と見られる形態のものである（杉山・石井,1989）。密度は600個/gと低い値であるが，穎（粃殻）は栽培地に残されることがまれであることから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。同遺構は井戸跡とされていることから，当時は周辺でムギ類が栽培されていたと考えられ，そこから何らかの形で遺構内に植物珪酸体が混入したと推定される。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) C-4区うね状遺構

Ⅲa層では、樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）が10万個/g以上と極めて多量に検出され、ブナ科（シイ属）やクスノキ科なども検出された。イネ科では、ヨシ属、ススキ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。Ⅱ層では、前述のようにイネが多量に検出され、ススキ属型やウシクサ族Aも多く検出された。樹木では、マンサク科（イスノキ属）が多量に検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科なども検出された。

以上のことから、Ⅲa層の堆積当時はイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林に覆われるような状況であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。中世とされるⅡ層の堆積当時は、前述のように稲作が行われていたと考えられ、調査区周辺はススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、花粉分析（第Ⅲ章）では植物珪酸体分析で多産した照葉樹があまり認められないことから、肥料や土壌改良などの目的で他所から照葉樹の葉や灰が持ち込まれた可能性も考えられる。

2) C-6区井戸状遺構

井戸状遺構の埋土では、前述のようにイネが多量に検出され、ススキ属型やウシクサ族Aも多く検出された。樹木では、マンサク科（イスノキ属）が多量に検出され、ブナ科（シイ属）やクスノキ科なども検出された。

以上のことから、井戸状遺構の埋土の堆積当時は、遺構周辺で稲作が行われていたと考えられ、周囲にはススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところや、ヨシ属などが生育する湿地的なところも分布していたと考えられる。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられるが、前述と同様に他所から照葉樹の葉や灰が持ち込まれた可能性も考えられる。

3) C-1区集石1

集石1の礫（No.43, No.45, No.48）に付着した土壌（微量）について分析を行った。その結果、No.43ではヨシ属やブナ科（シイ属）、No.45ではススキ属型などが検出されたが、いずれも少量である。No.48ではススキ属型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）、樹木（その他）なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、No.48ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、礫に付着した土壌の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはススキ属やチガヤ属、ササ類などの草原植生およびシイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

花粉分析によると、9,000～8,800年前には鹿児島市でシイ-カシ林が成立していたと推定されており（岩内ほか,1992）、植物珪酸体分析でも約7,500年前には錦江湾沿岸部や宮崎県南部沿岸部などでシイ属を主体とした照葉樹林が出現していたと考えられている（杉山,1999）。したがって、C-1区集石1の礫に付着した土壌の堆積年代は、縄文時代早期以降である可能性が高いと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、中世とされるC-4区うね状遺構のⅡ層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

中世とされるC-6区井戸状遺構の埋土からはイネが多量に検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、遺構周辺ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

当時の調査区周辺は、ススキ属やチガヤ属などが多く生育する草原的な環境であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

岩内明子・横田修一郎・岩松 暉（1992）鹿児島市沖積層の花粉分析．日本地質学会西日本支部第125回例会講演要旨：1-2

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村，FP直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）-プラント・オパール分析による水田址の探査-．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表1 鹿児島県、石坂遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料 学名	C-6区 (井戸埋土)						C-4区			
		1	2	3	4	5	6	II層	IIIa層		
イネ科											
イネ	Gramineae (Grasses)										
オオムギ族 (穎の表皮細胞)	Oryza sativa (domestic rice)	28	36	33	31	36	36	43	14		
キビ族型	Wheat husk Phytolith				6						
ヨシ属	Panicaceae type	7	7								
ススキ属型	Phragmites (reed)	28	7	7	12	7	15	7	22		
ウシクサ族A	Miscanthus type	198	203	153	172	208	124	192	14		
ウシクサ族B	Andropogoneae A type	21	94	67	80	79	58	99			
シハ属	Andropogoneae B type					7					
Aタイプ (くさび型)	Zoisia	7									
タケ亜科	A type		7	7							
ネザサ節型	Bambusoideae (Bamboo)										
ミヤコザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa										
未分類等	Sasa sect. Miyakozasa		7	7	6		15	14	7		
その他のイネ科	Others	7			12	14	7	28			
表皮毛起源	Others	7	14	7		7	15	28			
棒状珪酸体	Husk hair origin										
未分類等	Rod-shaped	56	72	133	62	50	51	142			
樹木起源	Others	303	478	440	431	452	321	426	58		
ブナ科 (シイ属)	Arboreal										
ブナ科 (アカガシ亜属)	Castanopsis	85	94	80	62	65	124	64	138		
クスノキ科	Quercus subgen. Cyclobalanops				6			7			
マンサク科 (イスノキ属)	Lauraceae	35	72	67	18	65	51	57	101		
アワブキ科	Distylium	614	507	561	394	560	664	370	1145		
その他	Sabiaceae	14	7	13	18	14	15	21	14		
植物珪酸体総数	Others	141	72	40	74	86	124	142	101		
	Total	1552	1681	1615	1385	1651	1619	1670	1616		

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.83	1.07	0.98	0.90	1.06	1.07	1.25	0.43
ヨシ属	Phragmites (reed)	1.78	0.46	0.42	0.78	0.45	0.92	0.45	1.37
ススキ属型	Miscanthus type	2.45	2.52	1.90	2.14	2.58	1.54	2.38	0.18
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa							0.14	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa		0.02	0.02	0.02		0.04	0.04	0.02

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake								
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa							76	
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)								
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	100	100	100	100	100	100	24	100

表2 鹿児島県、石坂遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料 学名	C-1区集石		
		43	45	48
イネ科				
ヨシ属	Gramineae (Grasses)			
ススキ属型	Phragmites (reed)	7		23
ウシクサ族B	Miscanthus type		7	45
タケ亜科	Andropogoneae B type			8
クマザサ属型	Bamusoideae (Bamboo)			
ミヤコザサ節型	Sasa (except Miyakozasa)			8
未分類等	Sasa sect. Miyakozasa			15
その他のイネ科	Others	7		15
表皮毛起源	Others			
棒状珪酸体	Husk hair origin			8
未分類等	Rod-shaped	7	7	15
樹木起源	Others	75	7	38
アナ科 (シイ属)	Arboreal			
その他	Castanopsis	7		8
(海綿骨針)	Others	7		15
植物珪酸体総数	Sponge			8
	Total	112	22	196

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

ヨシ属	Phragmites (reed)	0.47	1.43
ススキ属型	Miscanthus type	0.09	0.56
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)		0.06
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa		0.05

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake		
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)		56
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa		44

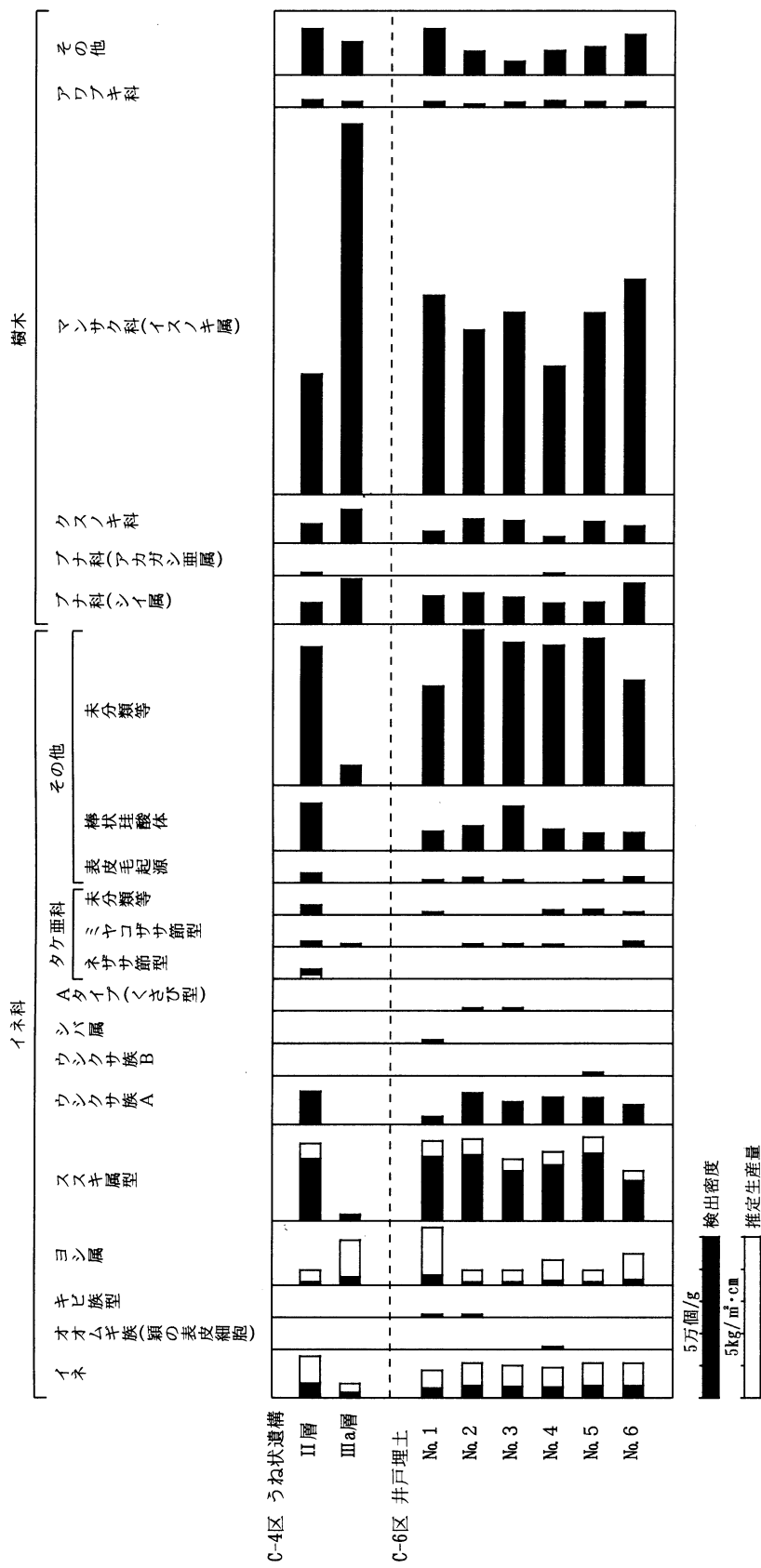
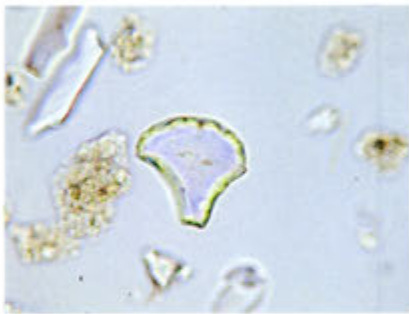
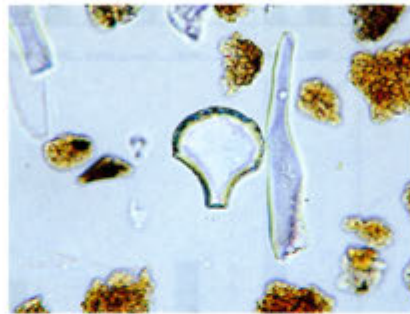


図1 鹿児島県、石坂遺跡における植物珪酸体分析結果



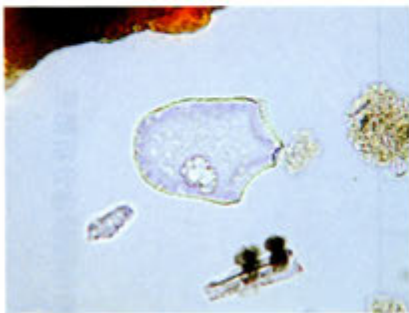
イネ
C-6区 1



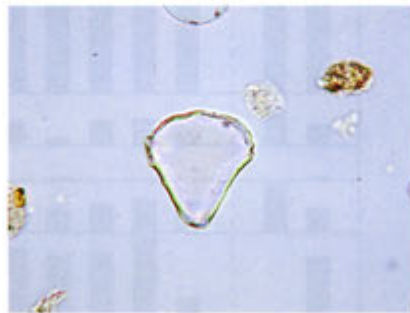
イネ
C-4区 II



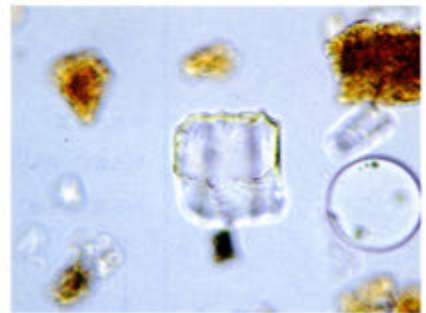
オオムギ族 (穎の表皮細胞)
C-6区 4



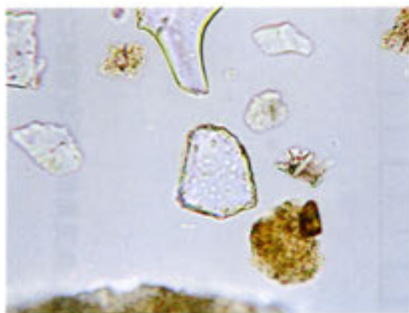
ヨシ属
C-6区 6



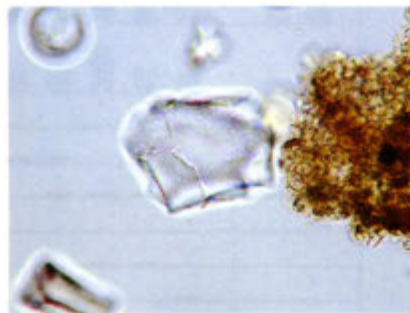
ススキ属型
C-6区 1



ネサザ節型
C-4区 II



ミヤコザサ節型
C-6区 2



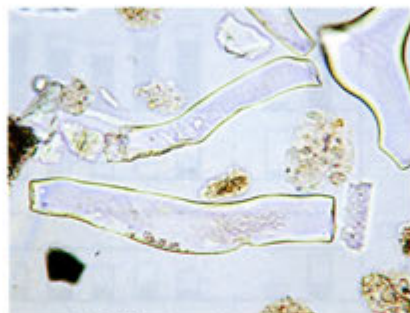
ブナ科 (シイ属)
C-6区 4



クスノキ科
C-6区 2



マンサク科 (イスノキ属)
C-6区 1



マンサク科 (イスノキ属)
C-6区 1



アワブキ科
C-6区 1

植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真

————— 50 μm

第3節 石坂遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、C-4区うね状遺構の土層断面から採取されたⅡ層（黒褐色土）とⅢa層（褐色土）、およびC-6区井戸状遺構の埋土（有機質黒褐色土）から採取されたNo.1～No.6の計8点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974,1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉21、シダ植物孢子2形態の計46である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ、ヤマモモ属、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、グミ属、クサギ属、ニワトコ属-ガマズ

ミ属，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，マルバオモダカ，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，イボクサ，ユリ科，タデ属サナエタデ節，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，カラマツソウ属，アブラナ科，ノアズキ属，ササゲ属，アリノトウグサ属－フサモ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，キツネノマゴ，オミナエシ科，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

1) C－4区うね状遺構

Ⅱ層では，草本花粉の占める割合が非常に高く，ヨモギ属が特徴的に出現する。次にイネ科，タンポポ亜科，キク亜科が多く，アリノトウグサ属－フサモ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，キツネノマゴが伴われる。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属やマツ属複維管束亜属などが低率に出現する。Ⅲa層では，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属，マメ科，イネ科が検出されたが，いずれも少量である。

2) C－6区井戸状遺構

遺構の埋土（No.1～No.6）では，草本花粉の占める割合が非常に高く，ヨモギ属が特徴的に出現する。次にイネ科，カヤツリグサ科，キク亜科，クワ科－イラクサ科，マメ科がやや多く，ガマ属－ミクリ属，マルバオモダカ，アリノトウグサ属－フサモ属，イネ属型が伴われる。樹木花粉では，マツ属複維管束亜属，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属，ブドウ属，クリなどが出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

（１）C－4区うね状遺構

中世とされるⅡ層の堆積当時は，ヨモギ属を主にイネ科，タンポポ亜科，キク亜科などの草本が生育する陽当たりの良い乾燥地の環境であったと推定される。森林植生としては，周辺地域にシイ属－マテバシイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

Ⅲa層では，花粉があまり検出されないことから，植生や環境の詳細な推定は困難である。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

（２）C－6区井戸状遺構

当時の遺構周辺は，ヨモギ属を主にイネ科，キク亜科などの草本が生育する陽当たりの良い乾燥地の環境であったと考えられ，ガマ属－ミクリ属，マルバオモダカ，アリノトウグサ属－フサモ属など

の水生植物が生育する湿地も見られたと推定される。また、少量ながらイネ属型が検出されることから、周辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。森林植生としては、周辺地域にシイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林およびマツ属複維管束亜属などが分布していたと推定される。

文献

中村純（1973）花粉分析. 古今書院, p. 82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純（1974）イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p. 187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p. 21-30.

表1 石坂遺跡における花粉分析結果

分類群		C-4			C-6					
学名	和名	2	3a	1	2	3	4	5	6	
Arboreal pollen	樹木花粉									
Abies	モミ属								1	
Tsuga	ツガ属						1	1		
Pirus subgen. Diploxylon	マツ属複雑維管束亜属	1		12	14	9	20	16	14	
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1						
Myrica	ヤマモモ属								1	
Juglans	クルミ属							1		
Alnus	ハンノキ属								1	
Barula	カバノキ属					1				
Corylus	ハシバミ属							1		
Castanea crenata	クリ	3		3	5	4	4		1	
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	8	1	16	27	10	14	27	13	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属						1	1		
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	2	1	23	19	13	8	10	14	
Celris-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ					1				
Aesculus turbinata	トチノキ			1					1	
Vitis	ブドウ属			2	2	1	2	1	8	
Elaeagnus	グミ属								1	
Clerodendrum	クサギ属				1	1	2	3		
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属								1	
Distylium	イスノキ属					2			1	
Lonicera	スイカズラ属							1	1	
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	ワラ科-イラクサ科	2		7	14	18	1	8	26	
Leguminosae	マメ科		1	4	12	5	14	10	3	
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属								1	
Caldesia parnassifolia	マルバオモダカ						3			
Gramineae	イネ科	40	1	17	32	39	22	22	35	
Oryza type	イネ属型					1		1	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科			52	29	23	29	59	19	
Aneilema keisak	イボクサ			3				1		
Liliaceae	ユリ科				1					
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節			1	1	2		1	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			1	1	3			3	
Caryophyllaceae	ナデシコ科					1				
Tnalictrum	カラマツソウ属			6						
Cruciferae	アブナラ科							1	2	
Dunbaria	ノアズキ属			4	3	2	5	6	5	
Vigna	ササゲ属							1		
Haioragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	1							1	
Hydrocelyloideae	チドメグサ亜科	1			1	1		1		
Apiodeae	セリ亜科	1		3	5		1	1	2	
Justicia procumbens	キツネノマゴ	1								
Valerianaceae	オミナエシ科					1		1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	31		4	6	1	7	3	5	
Asteroidae	キク亜科	6		22	28	28	22	21	23	
Artemisia	ヨモギ属	252		291	330	200	273	277	222	
Fein spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子	19	35	2	8	4	3	10	14	
Trilate type spore	三条溝胞子	13	10	9	10	6	12	13	12	
Arboreal pollen	樹木花粉	14	2	58	68	42	52	62	58	
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	1	11	26	23	15	18	29	
Nonarboreal pollen	草本花粉	333	1	404	437	302	362	396	321	
Total pollen	花粉総数	349	4	473	531	367	429	476	408	
	試料1cm中の花粉密度	1.6	3.6	8.4	6.4	4.7	6.6	5.1	3.9	
		$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	
Unknown pollen	未同定花粉	6	2	5	10	3	8	7	11	
Fein spore	シダ植物胞子	32	45	11	18	10	15	23	26	
Helminth eggs	寄生虫卵									
Ascaris	回虫卵								1	
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	1	
	試料1cm中の寄生虫卵密度	-	-	-	-	-	-	-	1.1	
									$\times 10$	
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

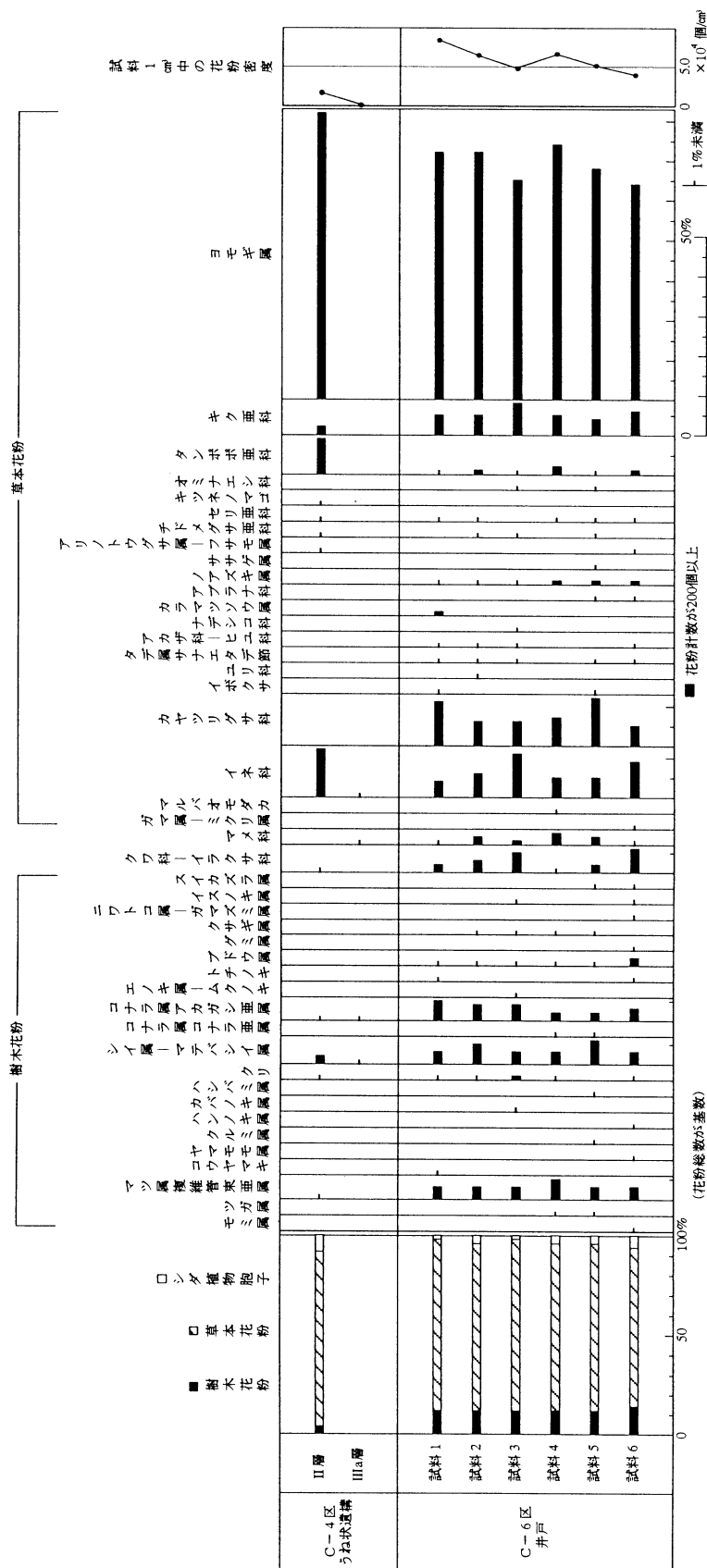
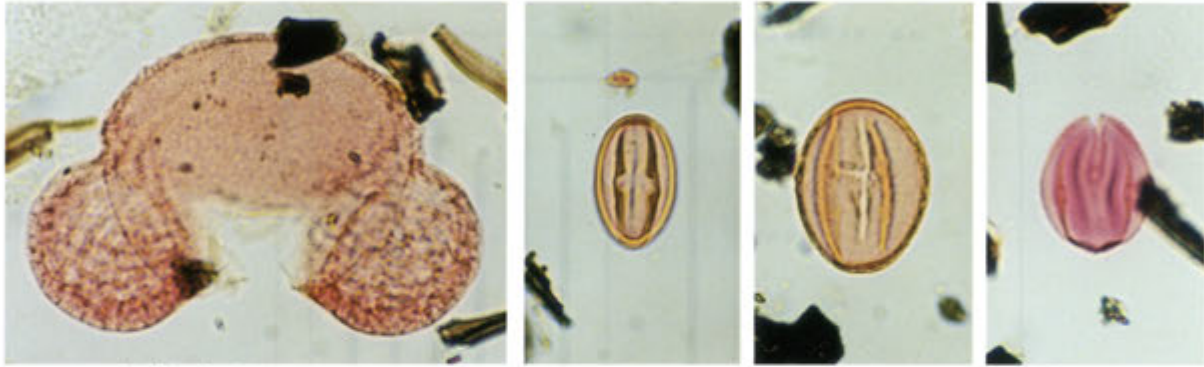


図1 石坂遺跡における花粉ダイアグラム

石坂遺跡の花粉・孢子



1 マツ属複維管束亜属

2 シイ属
-マテバシイ属

3 コナラ属
アカガシ亜属

4 ブドウ属

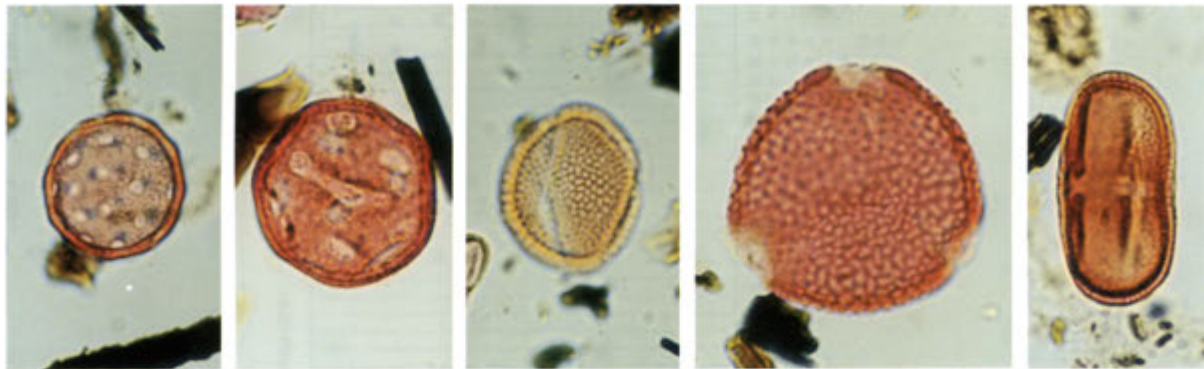


5 クワ科-イラクサ科

6 ガマ属-ミクリ属

7 イネ属型

8 カヤツリグサ科



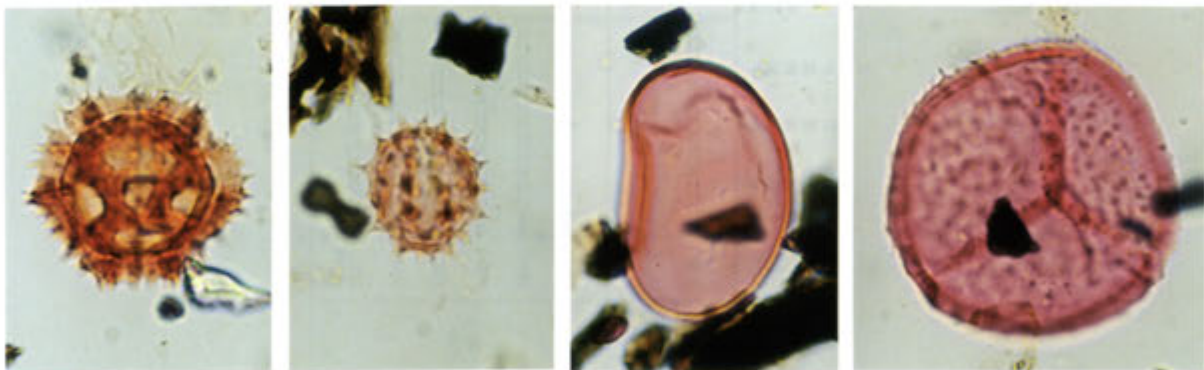
9 アカザ科-ヒユ科

10 ナデシコ科

11 アブラナ科

12 ノアズキ属

13 セリ亜科



14 タンポポ亜科

15 キク亜科

16 シダ植物単条溝孢子

17 シダ植物三条溝孢子

— 10 μm

第4節 石坂遺跡における寄生虫卵分析

1. はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構や人糞施肥の確認が可能であり、寄生虫特有の生活史や感染経路から、摂取された食物の種類やそこに生息していた動物種を推定することも可能である（金原, 1999）。

2. 試料

試料は、C-4区うね状遺構の土層断面から採取されたⅡ層（黒褐色土）とⅢa層（褐色土）、およびC-6区井戸状遺構の埋土（有機質黒褐色土）から採取されたNo.1～No.6の計8点である。

3. 方法

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 脱イオン水を加えて攪拌
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25%フッ化水素酸を加えて30分静置（2～3度混和）
- 5) 遠心分離（1500rpm, 2分間）による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

4. 結果および考察

分析の結果、C-6区井戸状遺構の埋土のNo.6から回虫卵が検出された。密度は低い値であり、その他の試料からは検出されないことから、糞便の施肥などによるものではなく、集落周辺における通常の汚染と考えられる。

寄生虫卵と同様の残存性を示す花粉は比較的多く検出されていることから（第Ⅲ章）、寄生虫卵のみが分解・消失したことは考えにくい。したがって、寄生虫卵については当初からほとんど含まれていなかった可能性が考えられる。

文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，2，同成社，p.151-158.

第8章 ま と め

第1節 縄文時代の様相

1 土器について

山ノ脇遺跡・西原遺跡・石坂遺跡の縄文時代は、一時期に大きな集落があったという様なものではなく、早期・前期・中期・後期・晩期の各時期において、その中の一時期だけ生活の痕跡が見られる。すなわち、早期は後葉の手向山式土器と塞ノ神式・苦浜式土器が出土している。前期は轟B式土器2点と曾畑式土器である。それに、前期末～中期前半にかけての深浦式土器が加わる。中期になると、船元Ⅱ式に対応できる土器や春日式土器が出ている。後期になると、市来式土器と西海岸側の系譜を引くと考えられる土器がある。また晩期には、後半の黒川式土器が出土し、この地での縄文時代の生活を締めくくっている。しかも、一時期の土器が多量に出土することはなく、数個体分である。以上のような点から、この地での縄文時代の生活は、少数の家族で短期間営まれたと考えられる。これはこの場所が、南九州の縄文時代の集落を主に形成する様な台地縁辺部でないことと、地形的にも緩やかな起伏しがなく、限られた台地や谷に囲まれるという様な一集落を作るのに適する完結した空間ではない点が考えられる。その様な立地条件にあって、深浦式土器を主体とする前期末～中期前半には、しばらく暮らした様相が窺える。と言うよりも、深浦式土器～春日式土器を使った人々の生活場所が、台地上よりも低い土地を好んだということが他の遺跡例でも想定できる。深浦式土器の標式遺跡である枕崎市花渡川遺跡をはじめ、金峰町上水流遺跡・鹿児島市大龍遺跡・横川町星塚遺跡・大口市瀬ノ上遺跡など、深浦式土器を主体とする遺跡は、いずれも低い土地に立地している。当時の環境がこの様な場所に生活拠点を置くのに適した状況だったのか、それとも深浦式土器を使う人々がこの様な場所を好んだのか、今後明らかにしたい課題である。深浦式土器の研究については、相美伊久雄氏によって精力的に進められ、研究史をまとめるとともに、日本山式・深浦1式・深浦2式を設定している。本遺跡出土の深浦式土器は、個体数は少ないものの多彩な内容であり、分布状況や層位の違いから、どのタイプとどのタイプが近い関係にあるのか明確にできなかった。資料の提示のみに停まるが、今後の研究に注目したい。

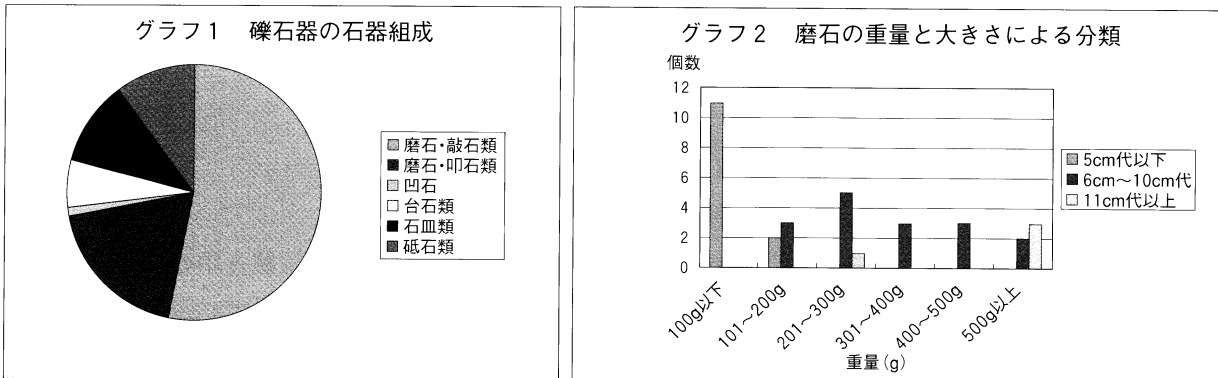
一方本遺跡でもそうであるが、深浦式土器を追いかける時に、必ず縄文施文の土器が見え隠れする。これらの土器は、船元式土器そのものあるいはその影響下にあるもので、中期前半に位置付けられる。この時期の瀬戸内系の土器が、単独で南九州地域までも席卷し、地元の土器は作られていなかったとの考えもあるが、筆者自身はそのような考えには首肯しかねる。第一に、南九州には船元Ⅰ・Ⅱ式を主体とした遺跡が見られない点があげられる。第二に、船元Ⅰ・Ⅱ式土器の出土点数は宮崎地方へ北上するにつれて出土点数が増えていくという地理的勾配が見られること。第三に、船元Ⅰ及びⅡ式土器に併行しそうな地元の土器が、深浦式土器の一部や条痕文尖底土器として存在する可能性があることである。いずれにしても、両者が伴出する類例を増やすことと、両者の共通点・相違点を明らかにすること、それに土器に付着した煤で年代測定を行うことが課題である。

相美伊久雄「深浦式土器の再検討」『人類史研究』12 2000.10 人類史研究会

2 縄文石器（礫石器）について

石坂・山ノ脇・西原遺跡で出土した礫石器のうち資料化した96点について考察を加える。これらの

礫石器は磨石・敲石類、磨石・叩石類、凹石、台石類、石皿類、砥石類に分類できた。その中で最も多く出土したのは磨石・敲石類（グラフ1参照）で、中でも磨石（磨面のみが見られるもの）が大半を占めていた。山ノ脇遺跡ほかで出土した磨石の特徴として、長さ5cm以下で重量100g以下のものが特に多く出土した（グラフ2参照）。この地に住んでいた人々が意識的にこのサイズの礫を磨石として使用した状況が明らかになった。詳しい理由は不明であるが、本遺跡における大きな特徴として挙げられる。



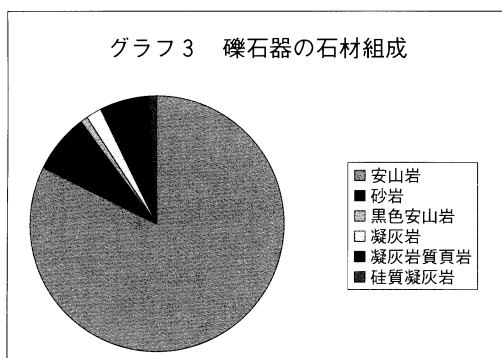
遺跡の性格を明らかにする上で特に注目できる遺物として、山ノ脇遺跡から出土した373のような非常に大型の石皿が挙げられる。これはその大きさや重量から持ち運ぶには適さず、一箇所に固定して使用したと考えられる。このような遺物の出土は山ノ脇遺跡では縄文時代の一時期に定住的な集落が形成されたことを想定させる。

また、3遺跡全てから携帯用と考えられる砥石が出土したことも注目できる。これは狩猟や採集などを行う際にその場で石器を磨くなどしたと考えられることから、この地は縄文時代の一時期には狩猟や採集のキャンプ地であったとも考えられる。これらのことから石坂・山ノ脇・西原遺跡の縄文時代は集落が形成されていた時期と、キャンプ地的な役割を果たしていた時期とあり、時期により異なる性格を持っていたと考えられる。

石材の面から見ると全体としては安山岩が多数を占めており（グラフ3参照）、次いで砂岩、凝灰岩の順番で多く見られる。分類ごとの石材は、磨石・敲石類、磨石・叩石類、凹石、台石類、石皿類では安山岩製が大半を占めており、次いで砂岩製が多く、凝灰岩製は1点だけであった。これに対して、携帯用と判断した砥石は凝灰岩質頁岩製が殆どで、硅質凝灰岩製、凝灰岩製は1点ずつであった。このように、いずれも器種によって非常に偏った石材組成となっている。これは当時の山ノ脇遺跡周辺の人々が器種によって、それぞれ適した石材を選択していたことがわかる。

ところで、石材組成と伊集院町周辺の地質的特徴との関連も注目できる。第2章で述べたように、伊集院町北部の山地や町中心部一帯は輝石安山岩からなり、南西部の山地は砂岩と頁岩の互層からなっている。このように本遺跡の周辺は多量の安山岩や頁岩を供給できる環境にあり、出土した礫石器の石材はこの地質の特徴に見合っている。伊集院町と隣接している東市来町の池之頭遺跡や今里遺跡などの遺跡から出土した礫石器の石材組成は安山岩製、砂岩製が大半でそれに次いで頁岩製であり、本遺跡の石材組成に近似している。

以上のことから伊集院近辺では安山岩、砂岩、頁岩といった遺跡周辺で採れる石材を礫石器には使用している状況が明らかになった。しかし、近辺で採れる石材が適していたのか、それとも近辺で採



れる石材の中から適したものを選択したのか不明であり、石材選択の意図を明らかにすることは縄文時代の山ノ脇周辺の交流範囲や遺跡立地といったものにつながってくる。その意図を明らかにする為には他の地域の石材組成や地質的特徴と比較し、検討していく必要がある。

第2節 古代期の様相

1 概要

山ノ脇遺跡・西原遺跡・石坂遺跡の古代の人々は、神ノ川沿いにある石坂遺跡を中心にした標高90m付近で生活を主に営んでいたようである。これは、住居や倉庫と考えられる竪穴状遺構や掘立柱建物跡などが検出されたことや、供膳具である土師器・黒色土器・赤色土器の坏や椀だけでなく、煮沸具である土師甕や貯蔵具などの土器が出土したことから、この地を主たる生活の拠点としていたと判断できる。ただし器種により地区差がある。つまり、供膳具は石坂遺跡北西側の遺構群が集中する5区から6区で主に出土するのに対して、煮沸具は石坂遺跡南東側の2区から3区で主に出土する状況にある。これは、供膳具と煮沸具とで廃棄方法に差がないと仮定すると、構造物としての調理場所は検出されていないが、日常生活区域とは離れた場所で調理を行っていたと考えられる。

今後の課題としては、当時の遺跡立地の問題であろう。第7章第2節での指摘のように植物珪酸体分析から、古代期における石坂遺跡の一带は照葉樹に覆われる状況の中に、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところであったようである。立地としては川沿いから離れる平坦地である山ノ脇遺跡周辺の方が適地であるように想定されるが、実際にはほとんどこの時期には利用されていない。当時の人々が占地する際の発想としては、井戸がすぐそばにあり水を得やすい土地であることか、もしくは川のそばであることが重要視されたためであろうか。

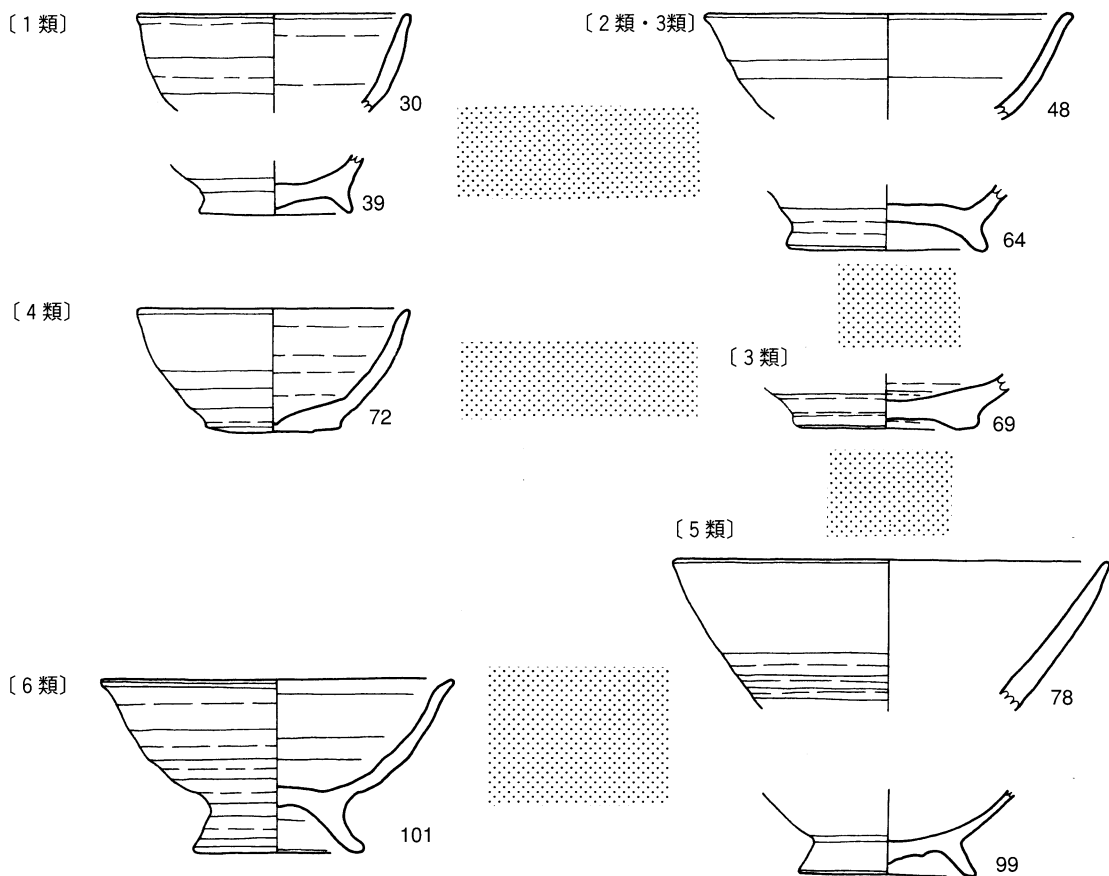
ところで、西原遺跡のうち丘陵地側の29区を中心とする標高98mから97mの区域では、遺構としては焼土遺構しか検出できなかったが、供膳具・煮沸具・貯蔵具などが出土した。土師器・須恵器の分析からは、古代期のある時期に限り、石坂遺跡とほぼ同様の生活が行われていたと判断できる。

2 出土遺物～特に椀形土器～について

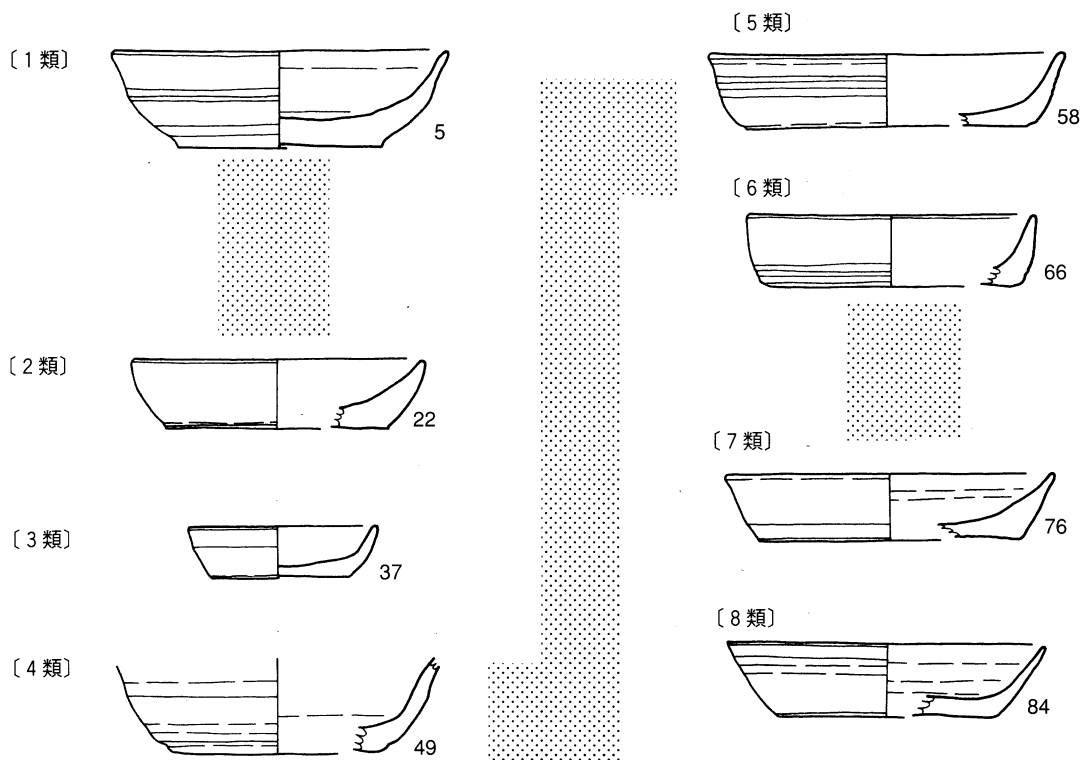
古代期の遺物が主に出土した石坂遺跡・西原遺跡からは、一括資料として時期判定ができる資料が出土せず、また層位的には中世期の遺物と混在していた。そこで最も質量共に良好であった石坂遺跡の包含層から出土した土師器椀で検討を行う。ただし石坂遺跡から出土した遺物は、大半が破片で完形品は皆無に近く、また高台部と口縁・体部とが接合した事例は極めて少ない。さらに細片が多く、残存率が低いため、図化では径を復元する際に少々無理をしたことを明らかにしておく。

石坂遺跡出土の土師器椀は、高台脚や体部・口縁部の形態から6種類に分類。基準は次の通り。

1類は、高台脚の器厚が細く、脚基部の径と脚端部の径との差がほとんどなく、脚が開かないか、僅かに開く。体部は内湾し口縁部は直行する。高台内部は脚部付近が削られ、中心部より窪む。



第216図 石坂遺跡 古代期土師器 椀 編年案



第217図 山ノ脇遺跡 中世期土師器 杯 編年案

2類は、高台脚の器厚が1類と比べ厚く、脚基部より脚端部の径が大きく脚部が少々開く。体部下半は内湾する。高台内部は脚部付近が削られるが、中心部との比高差は少ない。

3類は、高台脚の器厚が1類と比べ厚く、脚基部より脚端部の径が大きく脚部が開く。体部下半は直線的。高台内部が脚部まで丁寧になでられ窪みはない。高台には1類や2類と同様の高さのもの、低いもの、底面中心部と脚基部外面とを僅かに窪まし「見かけの脚部」を作出するものがある。

4類は、底面が平底か僅かに上げ底となり、脚基部外面に意識的な段差つける「見かけの高台」を作出するものや、底面が平底で「充実高台付土師器椀」「円柱状底部椀」の範疇に入るものもある。

5類は、高台脚の器厚が3類と比べ厚く、脚基部より脚端部の径が大きく、脚部が直線的に強く開くのと外反して強く開くのとがある。体部下半から体部上半・口縁部にかけては直線的。口縁部には若干内湾するのと、若干外反するものがある。

6類は、高台脚の器厚が5類と比べ厚く、脚部形態は外反し強く開く。高台脚の高さは1類や2類よりもかなり高い。体部下半は内湾し、体部上半は直線的に口縁部へ移行、口縁部は外反する。

以上の分類上の属性には、1) 高台脚器厚、2) 高台脚形態、3) 高台内部形態、4) 高台脚の高さ、5) 体部形態、6) 口縁部形態、の6種類がある。

現在提唱されている古代期土器の編年では、1) 高台脚器厚は細い形態から、厚い形態へ。2) 高台脚形態は開かない形態から、強い外反形態へ。という型式組列が主に考えられているようである。これに基づくと、分類上での型式組列は、3) 高台内部は脚部付近が削られ窪む形態から、なでられ窪みがない形態および底面が上げ底・平底の形態へ。4) 高台脚の高さは中程度の高さから、低い形態へ、さらに高い形態へ。5) 体部は概ね内湾する形態から、直線的な形態へ（ただし、個体により少々型式的揺れがある）。6) 口縁部形態はそれぞれの類に内湾する形態、直立する形態、外反する形態と、大きな幅があり組列の流れは確認できない。という流れが言えそうである。

したがって分類上からは、1類→2類→3類→4類と、1類→2類→3類→5類→6類との、2つの型式組列が考えられる。なお、現在提唱されている編年案では、これらの土師器は9世紀中頃・後半代から10世紀前半代にかけての資料にあたと判断できる。

第3節 中世期の様相

1 概要

山ノ脇遺跡・西原遺跡・石坂遺跡の中世の人々は、神ノ川沿いから少し丘陵地側に上がった山ノ脇遺跡を中心にした標高93m付近に、出入口とも考えられる溝で囲われた居館や倉庫である掘立柱建物跡群を代々営んでいた。また、用途不明であったが多数の土坑が検出されたのも特徴である。さらに「農具埋納遺構」と命名した、鉄製鋏先と刀子、見込み部分の周囲を打ち欠いた青磁片と瓦質土器の播鉢とが一括して検出された土坑の存在は、中世の祭祀行為を検証するうえで重要である。

この時期、神ノ川沿いにある石坂遺跡では標高90m付近で「はたけ」が作られ、古代期に造られた井戸状遺構もそのまま使われていたようである。中世期の石坂遺跡は、第7章第3節での指摘のように花粉分析からは、遺跡周辺が草木が生育する陽当たりの良い乾燥地の環境になったようである。そのなかで、第7章第2節で指摘があるように植物珪酸体分析から、稲作が行われていた可能性が高く、また井戸状遺構の埋土から検出されたムギ類が栽培されていたと想定できるようである。

また西原遺跡のうちB-29区からC-28区の標高98m～97m付近では、造り直しが行われながら管理され続けた溝状遺構が検出された。残念ながら山ノ脇遺跡部分では、この続きは区域外で調査が出来ず、遺構の性格が、単なる排水施設なのか防御施設を兼ね備えるのかは未解決である。しかしこの管理状況から判断して、居館群を維持管理運営するうえで、必要不可欠であったのは確かなようである。

2 出土遺物について

(1) 遺物出土状況

中世期の出土状況で注目できるのは、掘立柱建物跡群や溝状遺構群などが検出された15区～20区では出土密度が薄く、土坑などまで含み遺構がみられない12区～14区と21区～24区での出土密度の濃い状況が判明したことである。

この状況は、掘立柱建物跡が床張りで建物内への遺物廃棄ができず、その結果B・C・D-20・21・22区にある検出面直径約20m、検出面からの深さ約40cmを測る窪地が形成されたことを示している。山ノ脇遺跡A～D-22区南東側壁面土層断面図（第7図参照）のB-22区部分でみられる層序の乱れから、この窪地が人工的な掘り込みであると判断できる。また、この窪地が形成された時期として、窪地部分から出土した遺物と窪地外から出土した遺物との接合がよくみられる（第151・152図、第167図参照）ことから、第Ⅰ期遺構群構築後ある程度の時間を経た時期を上限とし、方形区画溝状遺構が窪地形成後に構築されていることから第Ⅲ期遺構群構築時を下限にした時間幅に比定できる。そして上に記した接合例は、窪地形成後、近辺に廃棄されていた遺物を片づけた際に、一部取り残された破片があったことに起因しているであろう。

(2) 土師器坯について

当該期の遺物が主に出土した山ノ脇遺跡からは、一括資料として時期判定が出来る資料は出土しなかった。また層位的には古代期の遺物と混在していた。そこで山ノ脇遺跡の包含層出土品で検討を行う。土師器坯は体部・口縁部の形態から8種類に分類した。分類基準は次の通りである。

1類は底部から体部が明瞭に屈曲し、体部下半は僅かに湾曲し外反する坯。体部中程で強く屈曲し、体部上半から口縁は直線的に外反する。

2類は底部から体部が明瞭に屈曲し、体部下半は緩やかに湾曲し外反する坯。体部中程で緩やかに屈曲し、体部上半から口縁は内湾する。内面は体部下端から口縁が直線的になる。

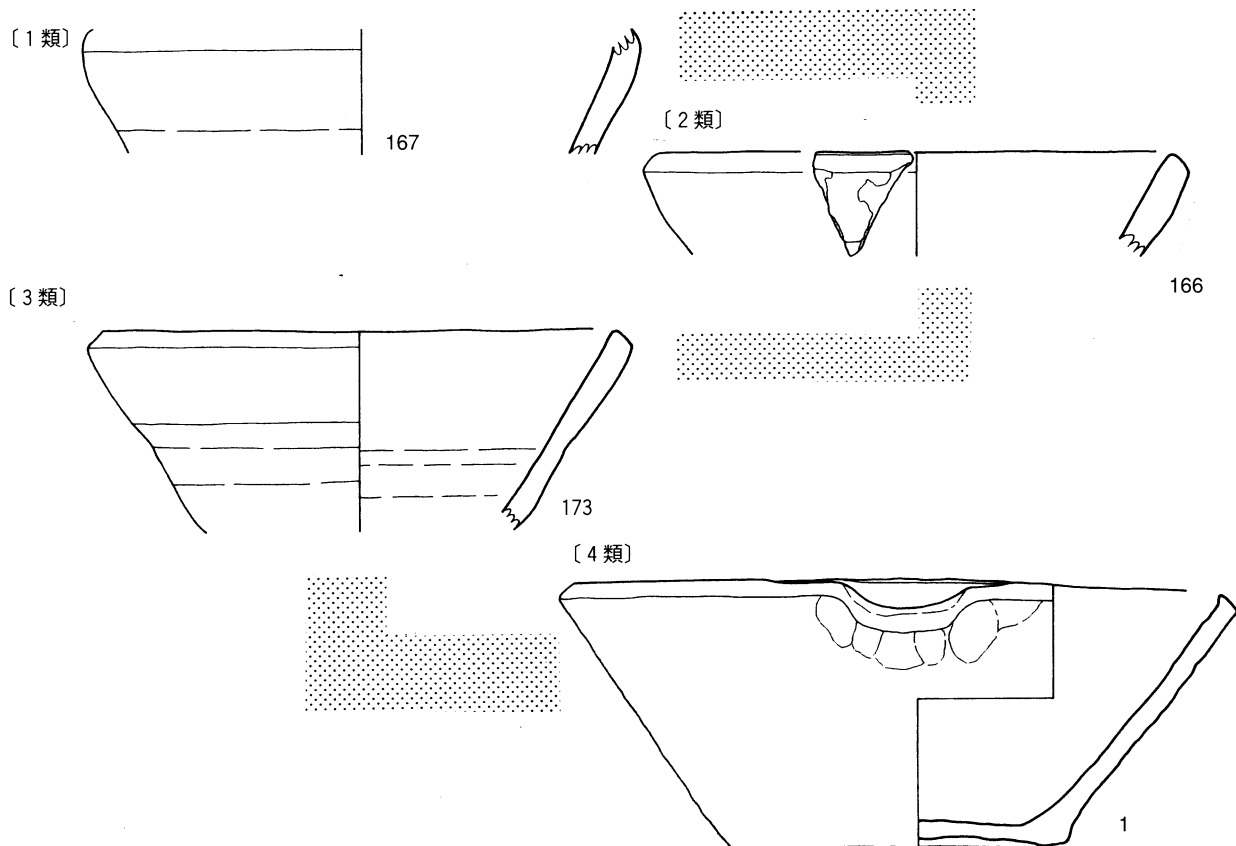
3類は底部から体部が明瞭に屈曲し、体部下半は強く湾曲し外反する坯。体部中程で緩やかに屈曲し、体部上半から口縁は内湾する。内面は体部下端部から口縁が内湾する。

4類は底部から体部がほぼ直角で屈曲し、体部下半は強く内湾する坯。内面は体部下端から体部上半が内湾する。

5類は底部から体部がほぼ直角でごく短く立ち上がり、体部下半は強く内湾する坯。体部は直立し口縁は外反する。内面は体部下端から口縁まで内湾する。

6類は底部から体部が明瞭に屈曲し、体部下半は直線的に直立するか、やや外反する坯。体部中程で屈曲せずに、体部下半から口縁部は直線的か内湾気味に直立する。内面は体部下端から口縁が内湾する。

7類は底部から体部が明瞭に屈曲し、体部下半は直線的に外反し、口縁部先端は尖るか、細くなる



第218図 山ノ脇遺跡 瓦質土器 編年案

坏。体部中程で屈曲せず体部下半から口縁部は直線的か、湾曲し外反する。内面は体部端部から口縁部が直線的になるか、やや内湾する。

8類は、底部と体部との境は丸味を持つため不明瞭、体部下半は直線的に外反する坏。口縁部先端は尖るか細くなる。体部上半から口縁部は、やや内湾するか、直線的に外反するか、やや湾曲気味に外反するか、大きく直線的に外反し口縁部先端が尖るのもある。

以上の分類上の属性には、1) 底部と体部との境の形態、2) 体部下半形態、3) 体部上半から口縁部形態、4) 口縁部形態、5) 体部内面形態、の5種類がある。

現在提唱されている中世期土器の編年では、1) 体部が屈曲する形態から、屈曲しない形態へ。2) 口唇部先端を丸く収める形態から、先端を尖らせる形態へ。という型式組列が主に考えられている。

これに基づく分類上からは、1類→2類・3類・4類→5類・6類→7類・8類という型式組列が考えられる。山ノ脇遺跡出土の磁器の多くは13世紀代～15世紀代のものであることから、土師器の実年代もこの時期と考えたい。類個々の所属時期については今後の検討課題としたい。

(3) 瓦質土器

山ノ脇遺跡・西原遺跡で出土した、還元焼成と酸化焼成の瓦質土器・播鉢は、体部・口縁部の形態で4種類に分類できた。分類基準は、1類は口縁端部外面を丸く肥厚させ、口縁屈曲部は形成しない。2類は口縁部を厚くし、直下を削り、肥厚を強調する。形態が丸い口縁屈曲部を形成し、口唇端部は尖る。底部～体部は湾曲し外反する。3類は口縁部を厚くし、端部形態は隅丸形。口唇端部を窪まし

突起表現を行う。底部～体部は直線的に開く。4類は体部が直線的に外へ開く。口縁端部を角形にし、器壁は薄い。以上の分類上の属性には、1)口縁端部形態、2)口縁肥厚部の形成、3)口唇端部形態、4)体部～口縁部形態の4種類がある。

さて現在の中世陶器における播鉢形土器の編年では、1)口縁端部形態は丸い形態から角形へ。2)口縁肥厚部は形成するものから形成しないものへ。3)口唇端部形態は突起表現を行うものから行わないものへ。4)体部形態は湾曲するものから直線的に開くものへ。という流れが言えそうである。

したがって分類上からは、1類→2類→3類→4類という型式組列が考えられる。なお、山ノ脇遺跡で検出された農具埋納遺構では、4類瓦質土器と大宰府龍泉窯系編年碗Ⅳ類とが相伴しており、14世紀代に比定される。また、大口市新平田遺跡検出の3号方形竪穴建物跡からは3類瓦質土器が白磁皿Ⅸ類と相伴しており、実年代では13世紀後半～14世紀前半に比定されている。

3 掘立柱建物跡について

2-(1)で考察したように、山ノ脇遺跡で出土した遺物は片づけられており、掘立柱建物跡の近辺で出土した遺物が遺構の年代を決定するわけではない。参考として建物跡柱穴近辺で出土した遺物が属する実年代をみることにする。まず、第Ⅰ期遺構群1号掘立柱建物跡から出土した243は大宰府編年白磁碗Ⅸ類に属し、13世紀中頃～14世紀前半の実年代が与えられている。次に、第Ⅱ期遺構群5号掘立柱建物跡から出土した249は大宰府編年白磁皿Ⅸ-1類に属し、13世紀中頃～14世紀前半の実年代が与えられている。6号掘立柱建物跡から出土した214は大宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類に属し、13世紀前後～前半の実年代が与えられている。これらの遺物は伝世も考えられ、所属年代がそのまま建物の年代とはなりえない。また、柱穴内から出土した遺物は様々な時期に属するものが混在して出土しており、掘立柱建物跡の年代を決定する手段とはならない。

以上から山ノ脇遺跡で検出された掘立柱建物跡の帰属年代を決定する、明確な資料は出土していない。中世期の出土遺物の多くは13世紀中頃から15世紀代の遺物であり、掘立柱建物跡の年代もこの範囲内に収まると考えられる。ただし、各期遺構群の帰属時期は今後の検討課題としたい。

【参考文献】

(伊集院町関係)

鹿児島県伊集院町 1976 『伊集院郷土史』

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1983 『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』

鹿児島県地質図編集委員会 1990 『鹿児島県の地質』

日本歴史地名大系 1998 『47 鹿児島県の地名』平凡社

伊集院町誌編さん委員会編 2002 『伊集院町誌』

(縄文時代礫石器関係)

東市来町教育委員会 1991 「仮牧段遺跡」東市来町埋蔵文化財調査報告書(2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001 「竹ノ山A・B遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(29)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 「池之頭遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32)

(古代関係)

- 上村俊雄 1984 「鹿児島県荒平須恵器古窯趾群発見の意義とその問題点について」『古文化談叢』第14集
森 隆 1990・1991 「西日本の黒色土器生産（上）（中）（下）」『考古学研究』第37巻2・3・4号
網田龍生 1994 「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 中世土器研究会
岡本武憲 1994 「13九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
中村和美 1994 「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』X 中世土器研究会
中島恒次郎・城戸康利 1994 「薩摩から来た食器－大宰府条坊跡第89次調査出土資料－」『中近世土器の基礎研究』X 中世土器研究会
中村和美 1997 「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
福山町教育委員会 1994 『中尾立遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書

(中世関係)

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2
都城市教育委員会 1991 「平成 2年度遺跡発掘調査概報 都ノ城跡（主郭部）」『都城市文化財調査報告書』第13集
木戸雅寿 1993 「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 中世土器研究会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
美濃口雅朗 1994 「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 中世土器研究会
森田稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』
中野晴久 1995 「中世陶器 [2] 常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性10－九州・南西諸島－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
大口市教育委員会 1997 「新平田遺跡・辻町B遺跡」大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (20)
小林一元ほか 1997 『木造建築用語辞典』井上書院
太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡 X V－陶磁器分類編－」

写真図版



①遺跡北側風景



②遺跡北側風景



①遺跡東側風景



②遺跡南側風景



①遺跡南東側風景



②調査風景



③調査風景

図版 4



①石坂遺跡B-3区1号集石遺構検出状況



②石坂遺跡B-3区1号集石遺構検出状況



③石坂遺跡C-2区土器底部出土状況



④石坂遺跡B・C-1・2区縄文晩期土器出土状況



⑤石坂遺跡B・C-1土層断面状況



①石坂遺跡C-5区古代期2号竖穴状遺構1完掘状況

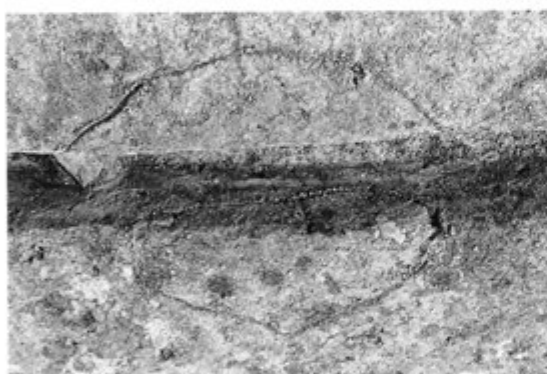


②石坂遺跡B-4区古代期1号竖穴状遺構2完掘状況



③石坂遺跡B-4区古代期1号竖穴状遺構2完掘状況

④石坂遺跡B-5区古代期掘立柱建物跡検出状況



⑤石坂遺跡B-3区Ⅲa層1号炉跡断面状況



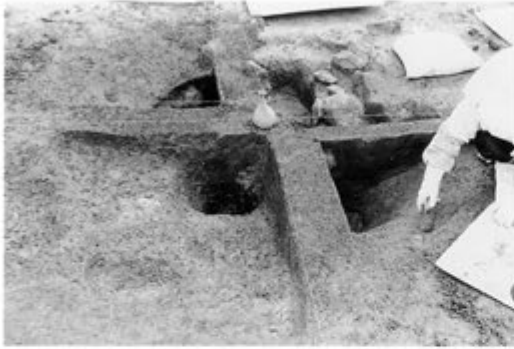
⑥石坂遺跡B-3区Ⅲa層2号炉跡断面状況



①石坂遺跡B-3区Ⅲa層1号・2号炉跡完掘状況



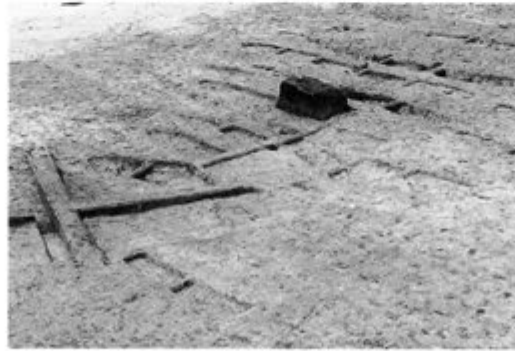
②石坂遺跡C-6区Ⅱ層井戸状遺構内遺物出土状況



①石坂遺跡C-6区Ⅱ層井戸状遺構検出状況



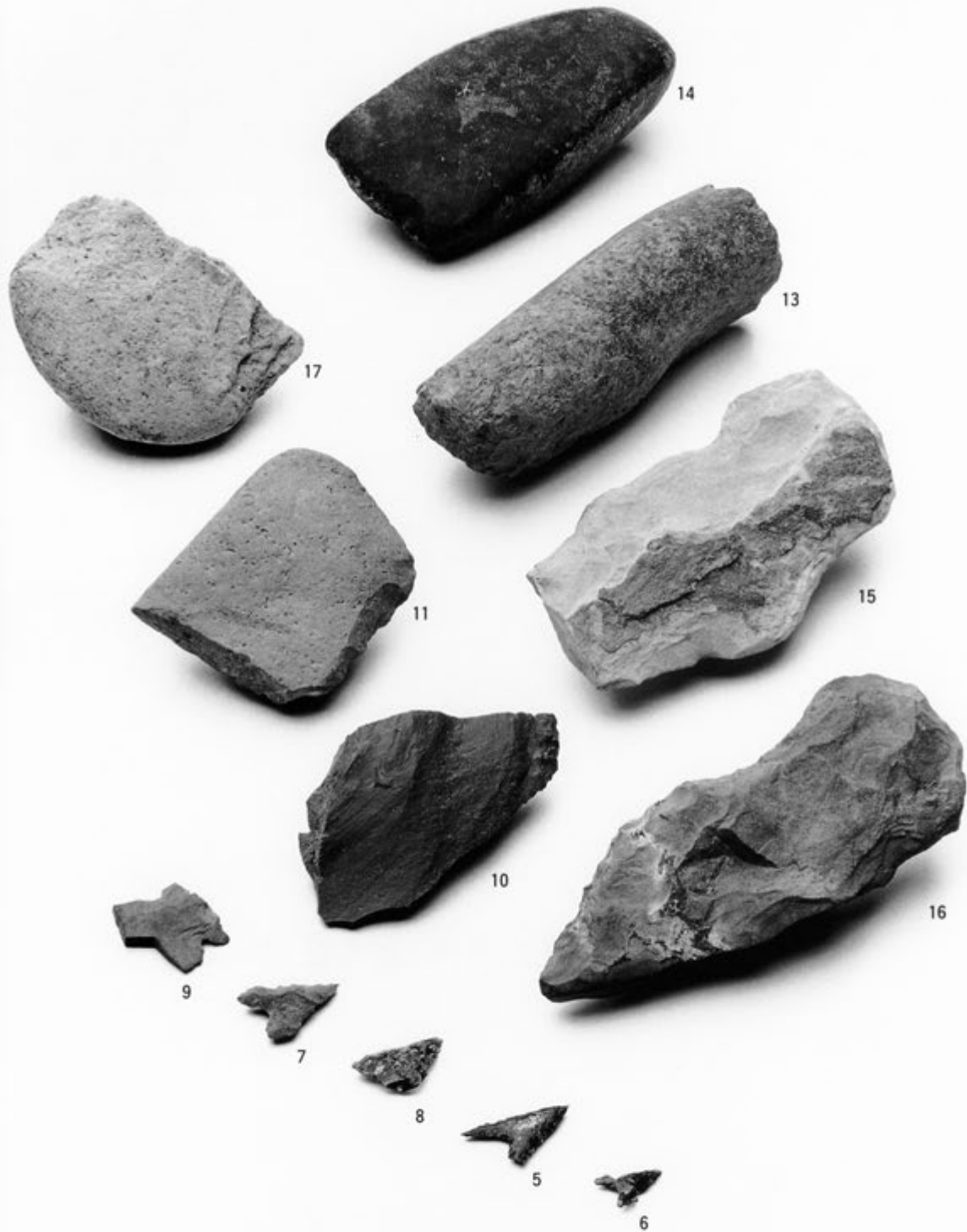
②石坂遺跡C-6区Ⅱ層井戸状遺構内遺物出土状況



③石坂遺跡B・C-4・5区畝間状遺構検出状況



④石坂遺跡B・C-4・5区畝間状遺構断面状況



石坂遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



石坂遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



①石坂遺跡 古代期 出土遺物（土師器・坏・碗）



②石坂遺跡 古代期 出土遺物（赤色土器）



①石坂遺跡 古代期 出土遺物（黑色土器碗・赤色土器鉢）



②石坂遺跡 中世期 出土遺物（須恵器）



③石坂遺跡 中世期 出土遺物（黑色土器）



①山ノ脇遺跡北壁土層断面状況 (A-19・20区)



②山ノ脇遺跡北壁土層断面状況 (A-21区)



①山ノ脇遺跡B-20区2号集石検出状況



②山ノ脇遺跡A-21区5号集石検出状況



③山ノ脇遺跡A・B-19・20区1号竪穴状遺構検出状況



①山ノ脇遺跡Ⅲ a層石鏃出土状況 (A-21区)



②山ノ脇遺跡Ⅲ a層石匙出土状況 (A-21区)



③山ノ脇遺跡Ⅲ a層春日式土器出土状況 (A-21区)



④山ノ脇遺跡Ⅲ a層深浦式土器出土状況 (A-21区)



①山ノ脇遺跡古墳期溝状遺構完掘状況（A～C-14区）



②山ノ脇遺跡古墳期溝状遺構完掘状況（A～C-14区）



③山ノ脇遺跡Ⅲ層成川式土器出土状況1



④山ノ脇遺跡Ⅲ層成川式土器出土状況2



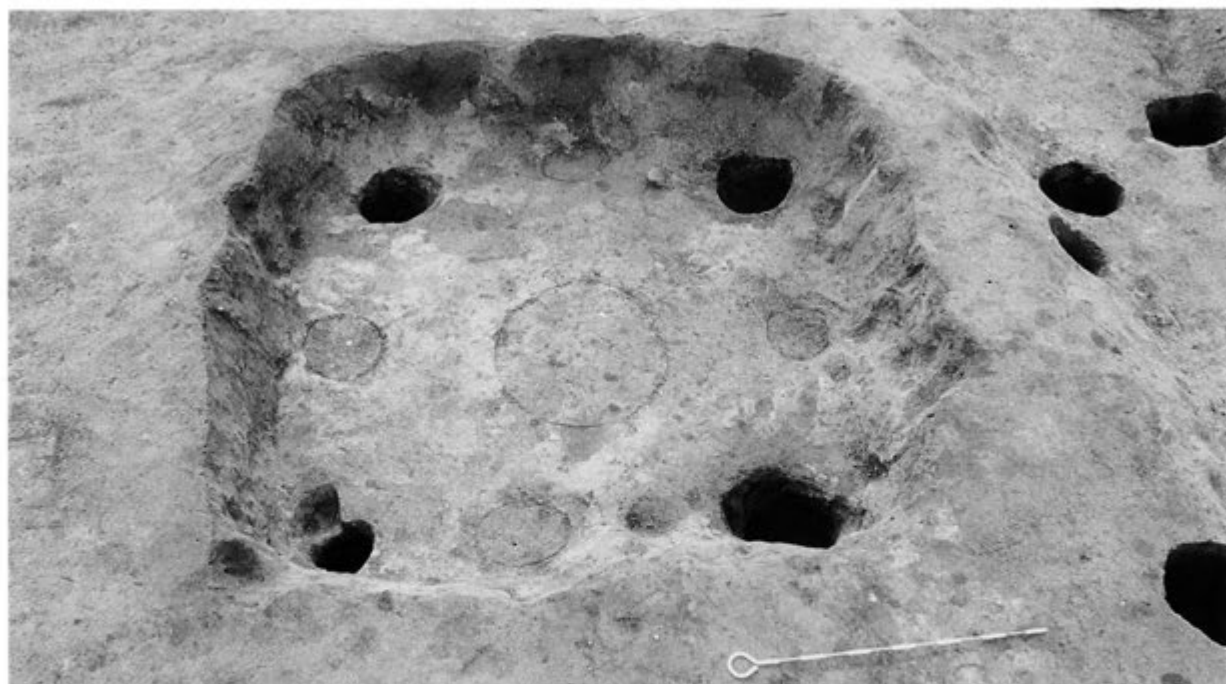
①山ノ脇遺跡D-20区 中世期集石検出状況



②山ノ脇遺跡B-14区3号竪穴状遺構検出状況



③山ノ脇遺跡B-14区3号竪穴状遺構断面状況



④山ノ脇遺跡B-14区3号竪穴状遺構完掘状況



①山ノ脇遺跡掘立柱建物跡群検出状況（A～C-12～14区）



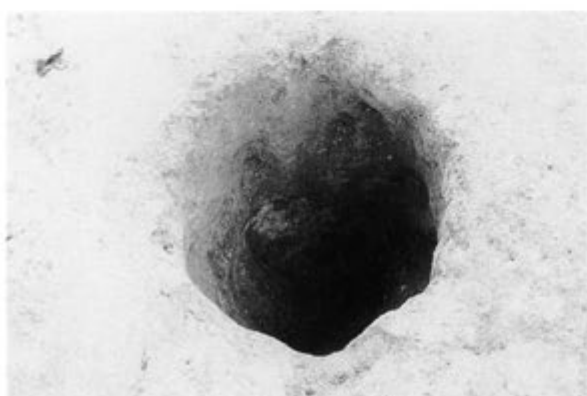
②山ノ脇遺跡掘立柱建物跡群検出状況（A～C-12～14区）



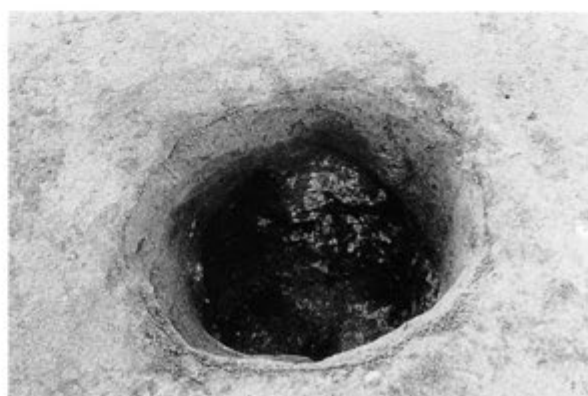
①山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 2)



②山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4)



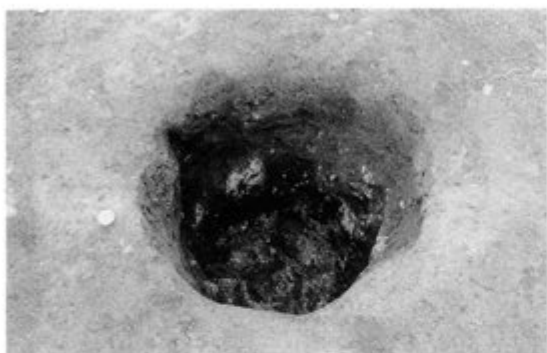
③山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6)



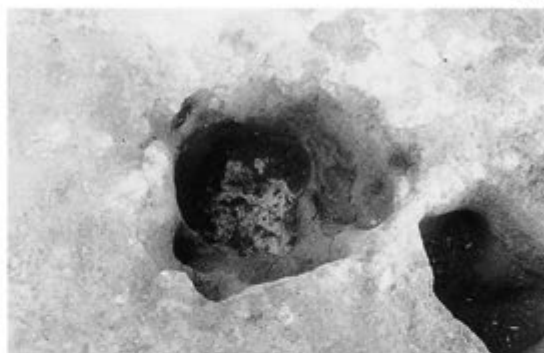
④山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7)



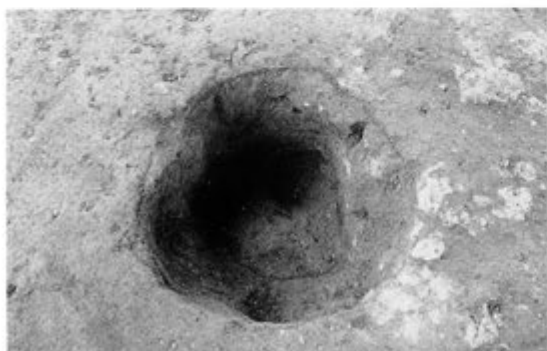
⑤山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 5)



①山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P11)



②山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P14)



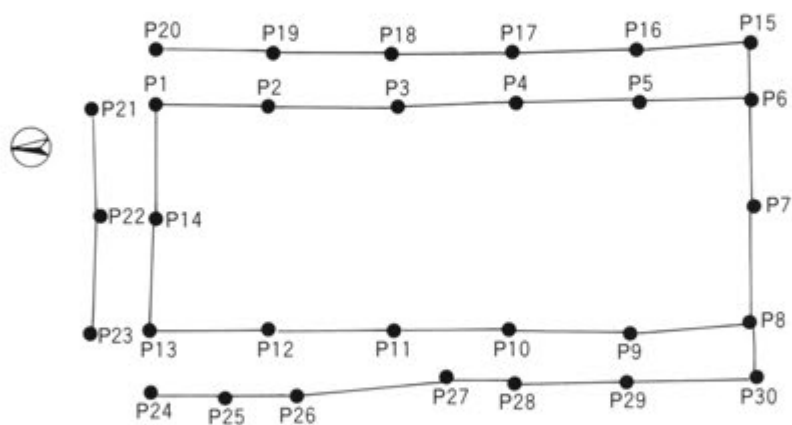
③山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P15)



④山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P19)



⑤山ノ脇遺跡1号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P25)



1号掘立柱建物跡



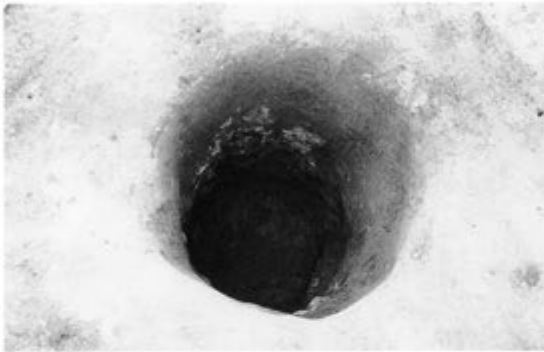
①山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 5)



②山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6)



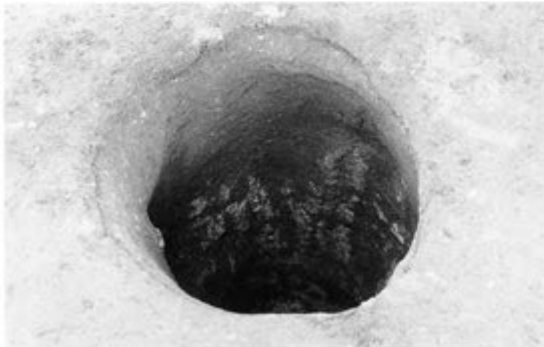
③山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴工具痕検出状況 (P 8)



①山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7)



②山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 10)



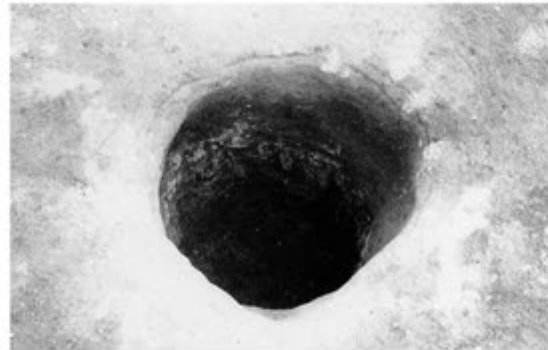
③山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 26)



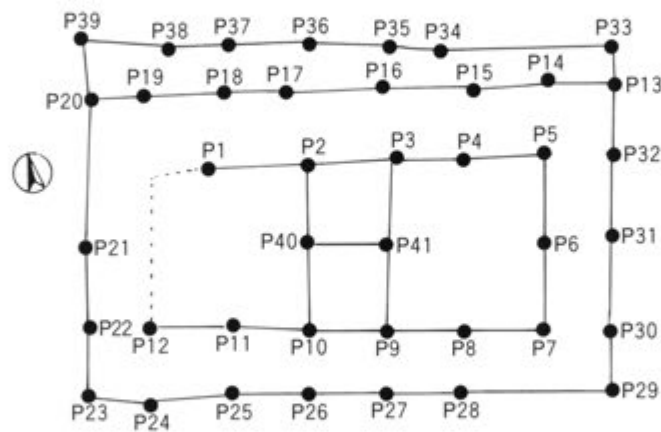
④山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 29)



⑤山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 31)



⑥山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 30)



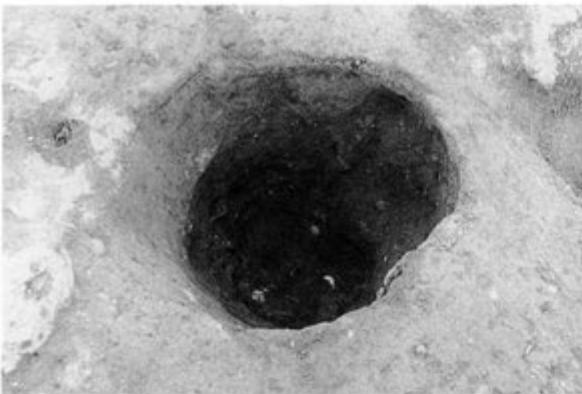
2号掘立柱建物跡



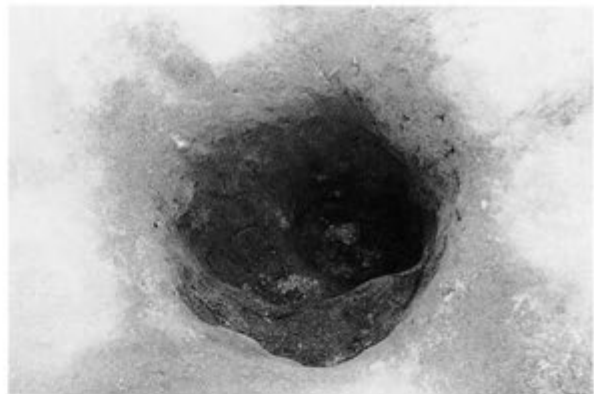
山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴工具痕半裁状況 (P 30)



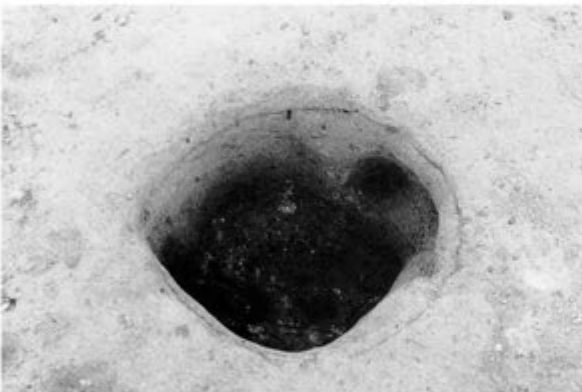
①山ノ脇遺跡 2号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 32)



②山ノ脇遺跡 4号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 1)



③山ノ脇遺跡 4号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 3)



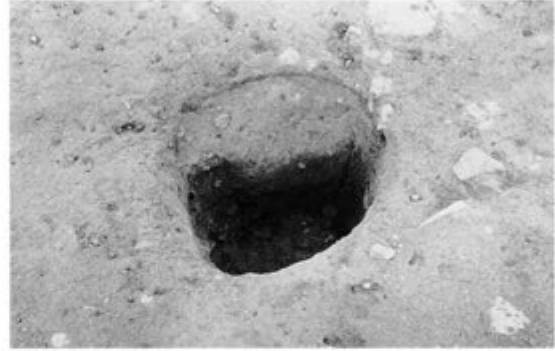
④山ノ脇遺跡 4号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4)



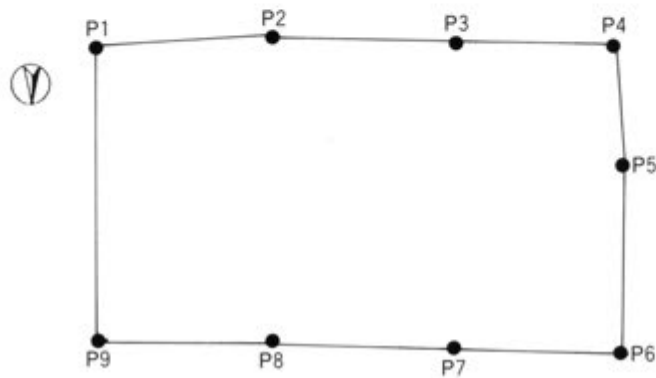
⑤山ノ脇遺跡 4号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6)



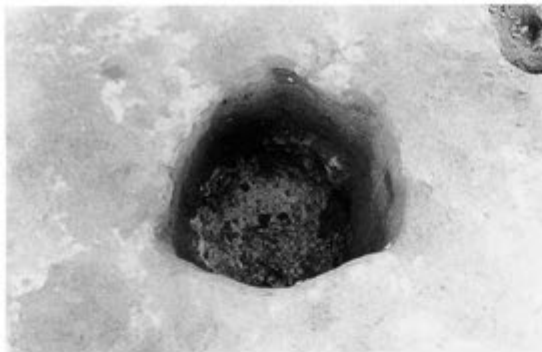
①山ノ脇遺跡 4号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7)



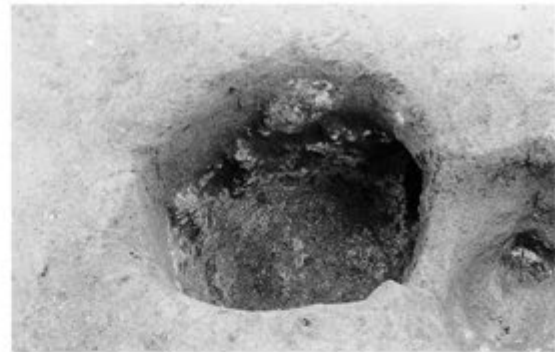
②山ノ脇遺跡 4号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 8)



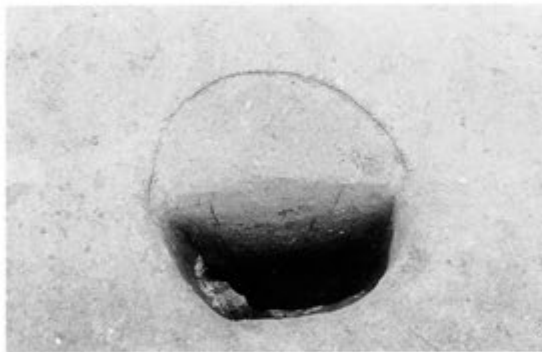
4号掘立柱建物跡



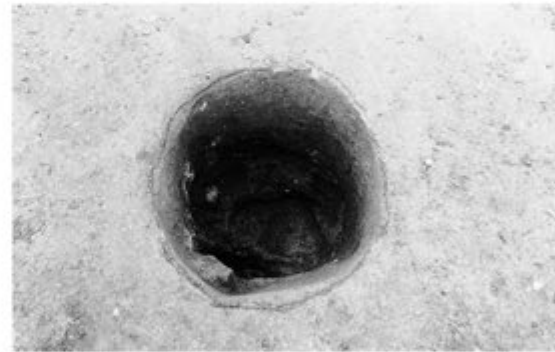
③山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 1)



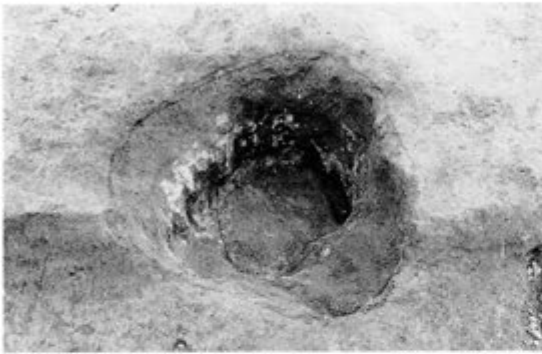
④山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 6)



⑤山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴半截状況 (P 8)



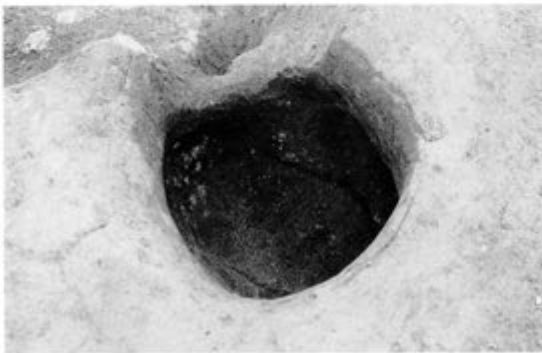
⑥山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 8)



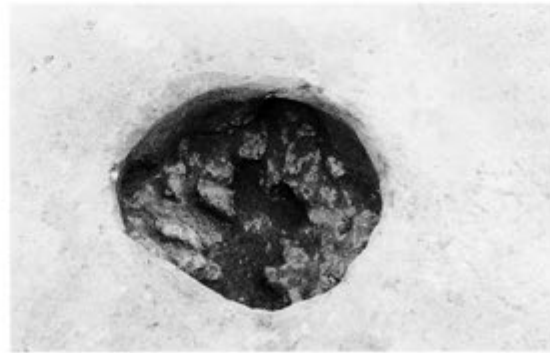
①山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 9)



②山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 10)



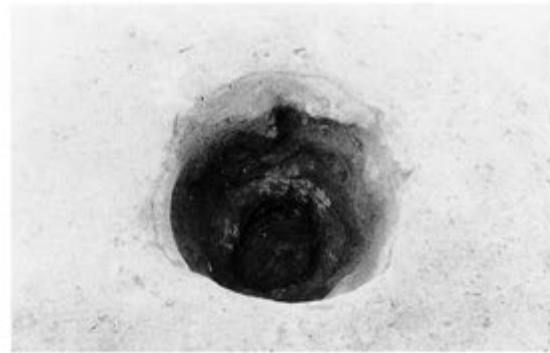
③山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 17)



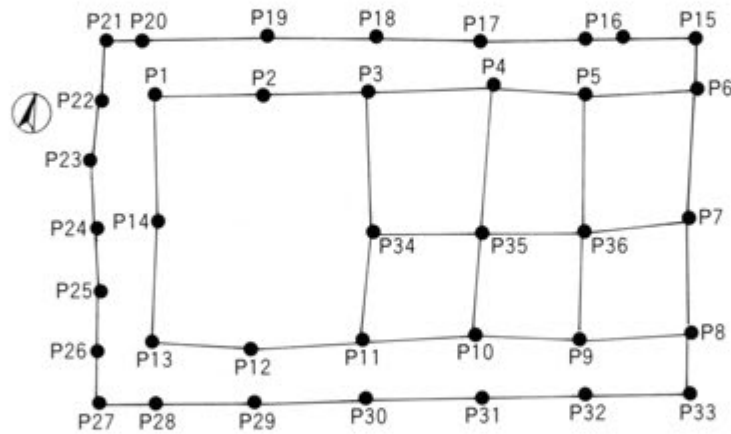
④山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 19)



⑤山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 24)



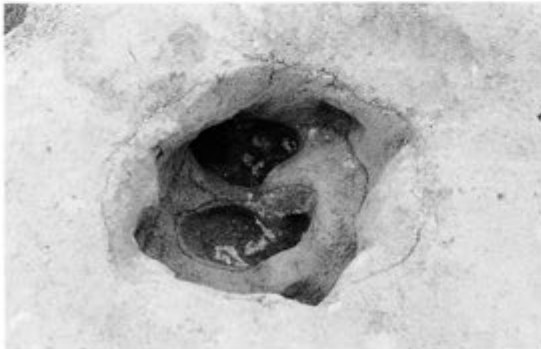
⑥山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 25)



5号掘立柱建物跡



①山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 27)



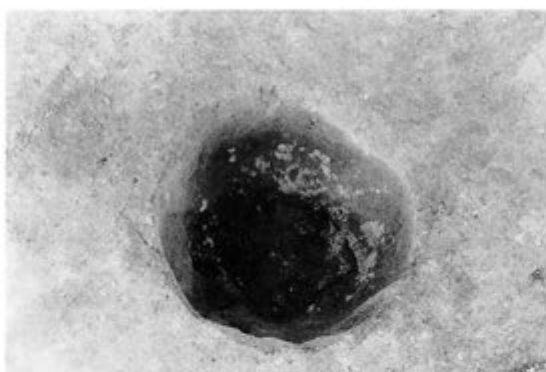
②山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 29)



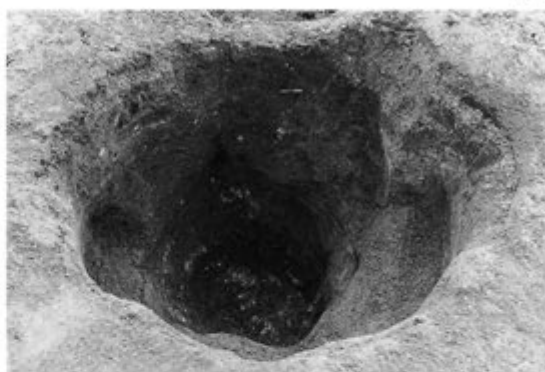
③山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 31)



④山ノ脇遺跡 5号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 34)



①山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4)



②山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7)



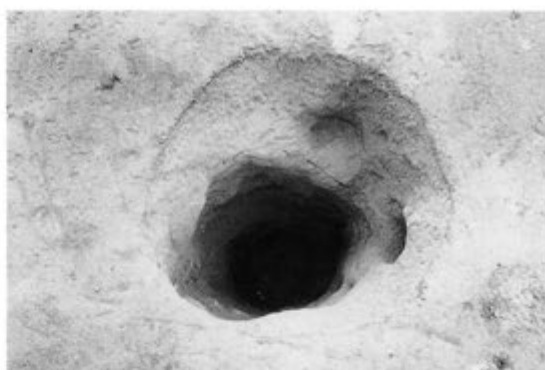
③山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴半掘状況 (P11)



④山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P11)



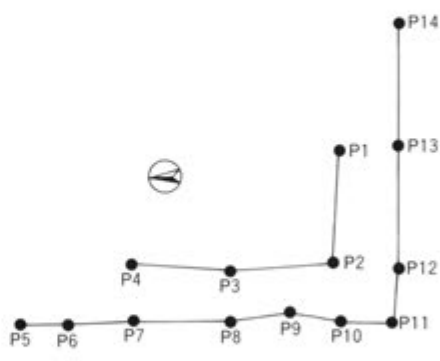
⑤山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P12)



⑥山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P13)



⑦山ノ脇遺跡 6号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P14)



6号掘立柱建物跡



①山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構完掘状況



②山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構1断面状況



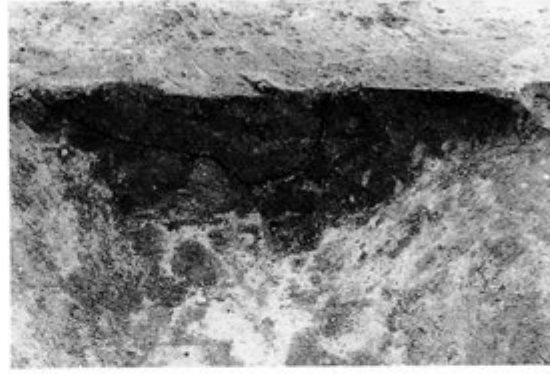
③山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構2断面状況



④山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構2完掘状況



①山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構3完掘状況

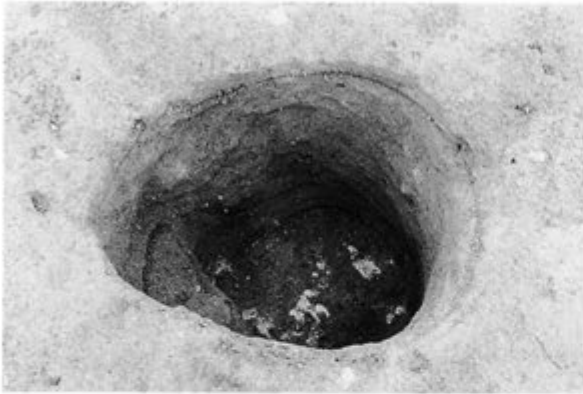


②山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構3断面状況



③山ノ脇遺跡Ⅲ a層検出溝状遺構4完掘状況

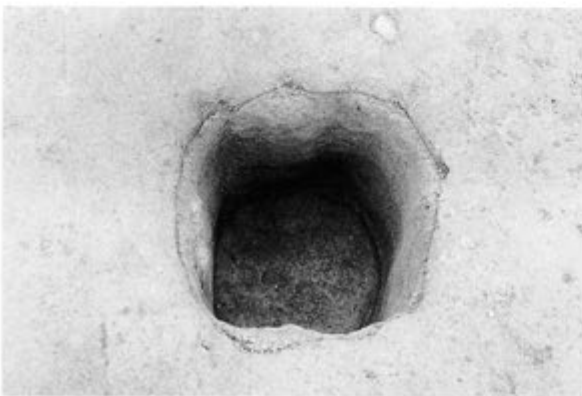
図版30



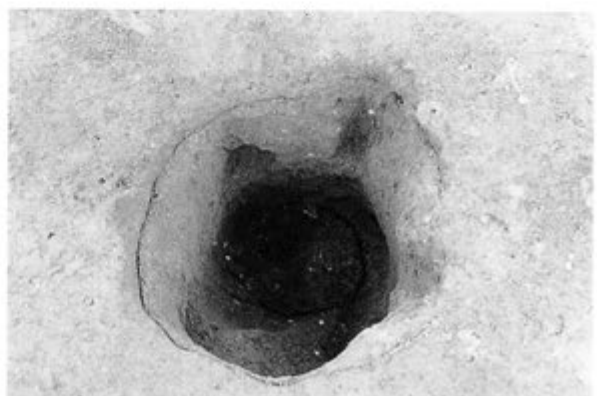
①山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 1)



②山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 2)



③山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 3)



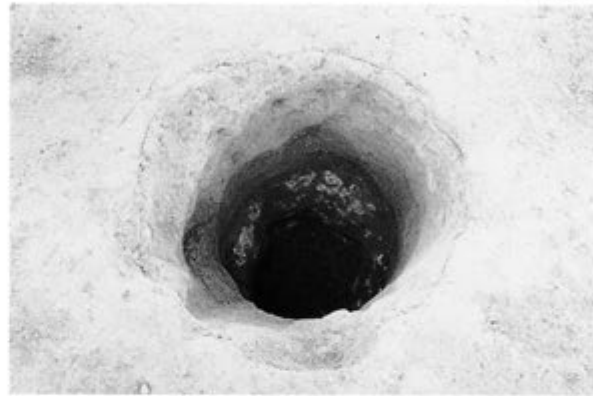
④山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 7)



⑤山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 4)



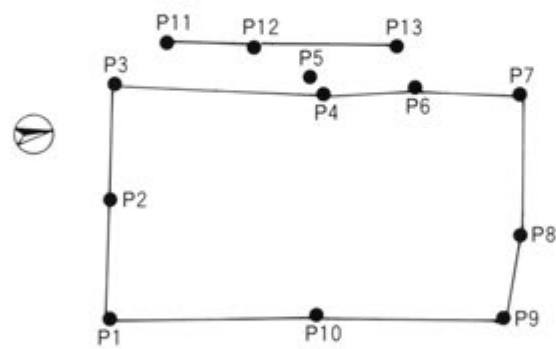
①山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 8)



②山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 12)



③山ノ脇遺跡 8号掘立柱建物跡柱穴完掘状況 (P 5)



8号掘立柱建物跡

図版32



①山ノ脇遺跡方形区画溝完掘状況



②山ノ脇遺跡方形区画溝断面状況



③山ノ脇遺跡方形区画溝内遺物出土状況



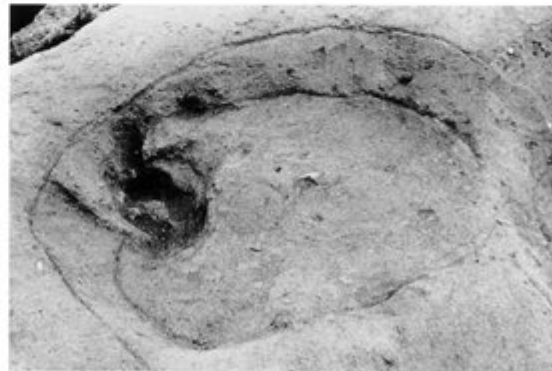
①山ノ脇遺跡検出土坑 1 完掘状況



②山ノ脇遺跡検出土坑 2 完掘状況



③山ノ脇遺跡検出土坑 3 完掘状況



④山ノ脇遺跡検出土坑 4 完掘状況



⑤山ノ脇遺跡検出土坑 5 完掘状況



⑥山ノ脇遺跡検出土坑 6 完掘状況



⑦山ノ脇遺跡検出土坑 7 完掘状況



⑧山ノ脇遺跡検出土坑 8 完掘状況



①山ノ脇遺跡検出土坑9完掘状況



②山ノ脇遺跡検出土坑11断面状況



③山ノ脇遺跡検出土坑12断面状況



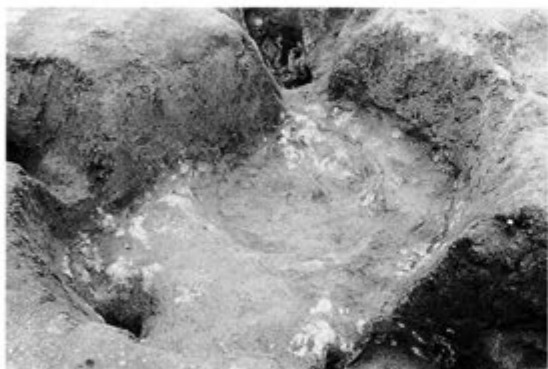
④山ノ脇遺跡検出土坑13断面状況



⑤山ノ脇遺跡検出土坑14断面状況



⑥山ノ脇遺跡検出土坑15半裁状況



⑦山ノ脇遺跡検出土坑17完掘状況



⑧山ノ脇遺跡検出土坑20完掘状況



①山ノ脇遺跡検出土坑18断面状況



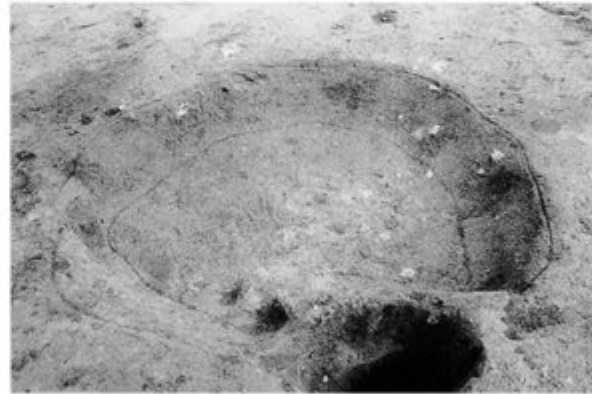
②山ノ脇遺跡検出土坑21断面状況



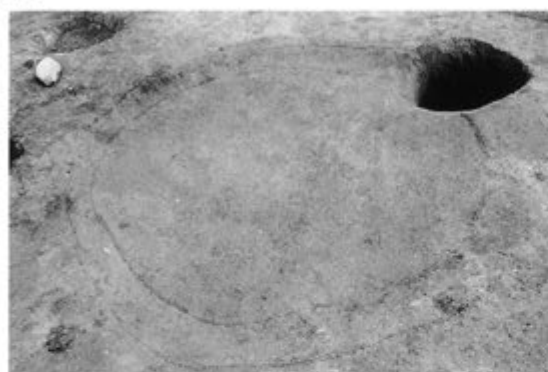
③山ノ脇遺跡検出土坑23完掘状況



④山ノ脇遺跡検出土坑27完掘状況



⑤山ノ脇遺跡検出土坑28完掘状況



①山ノ脇遺跡検出土坑29完掘状況



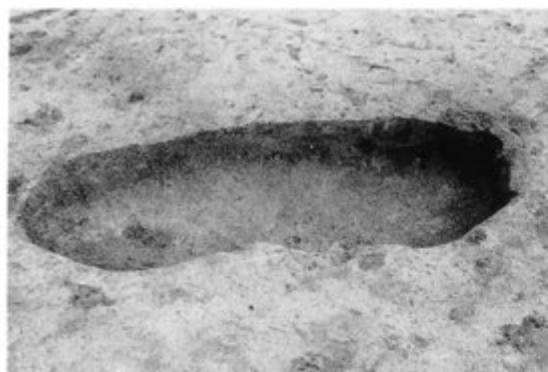
②山ノ脇遺跡検出土坑30完掘状況



③山ノ脇遺跡検出土坑31完掘状況



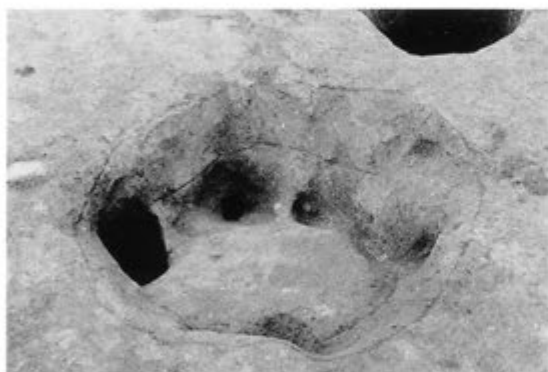
④山ノ脇遺跡検出土坑32完掘状況



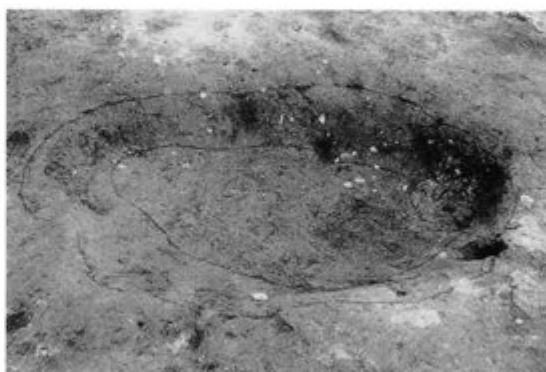
⑤山ノ脇遺跡検出土坑33完掘状況



⑥山ノ脇遺跡検出土坑34完掘状況



⑦山ノ脇遺跡検出土坑35完掘状況



⑧山ノ脇遺跡検出土坑36完掘状況



①山ノ脇遺跡検出土坑38完掘状況



②山ノ脇遺跡検出土坑39検出状況



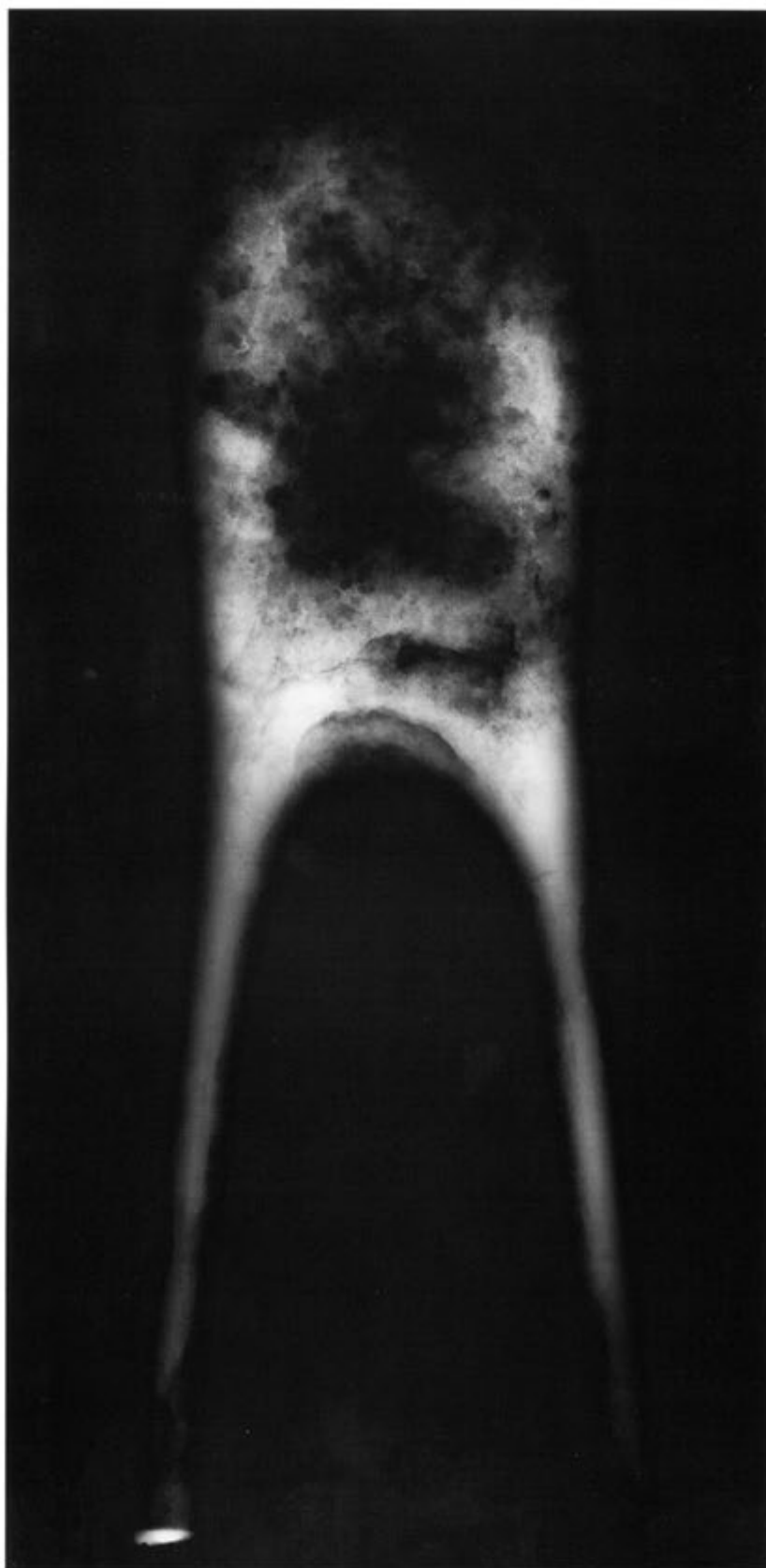
③山ノ脇遺跡検出土坑39半掘状況



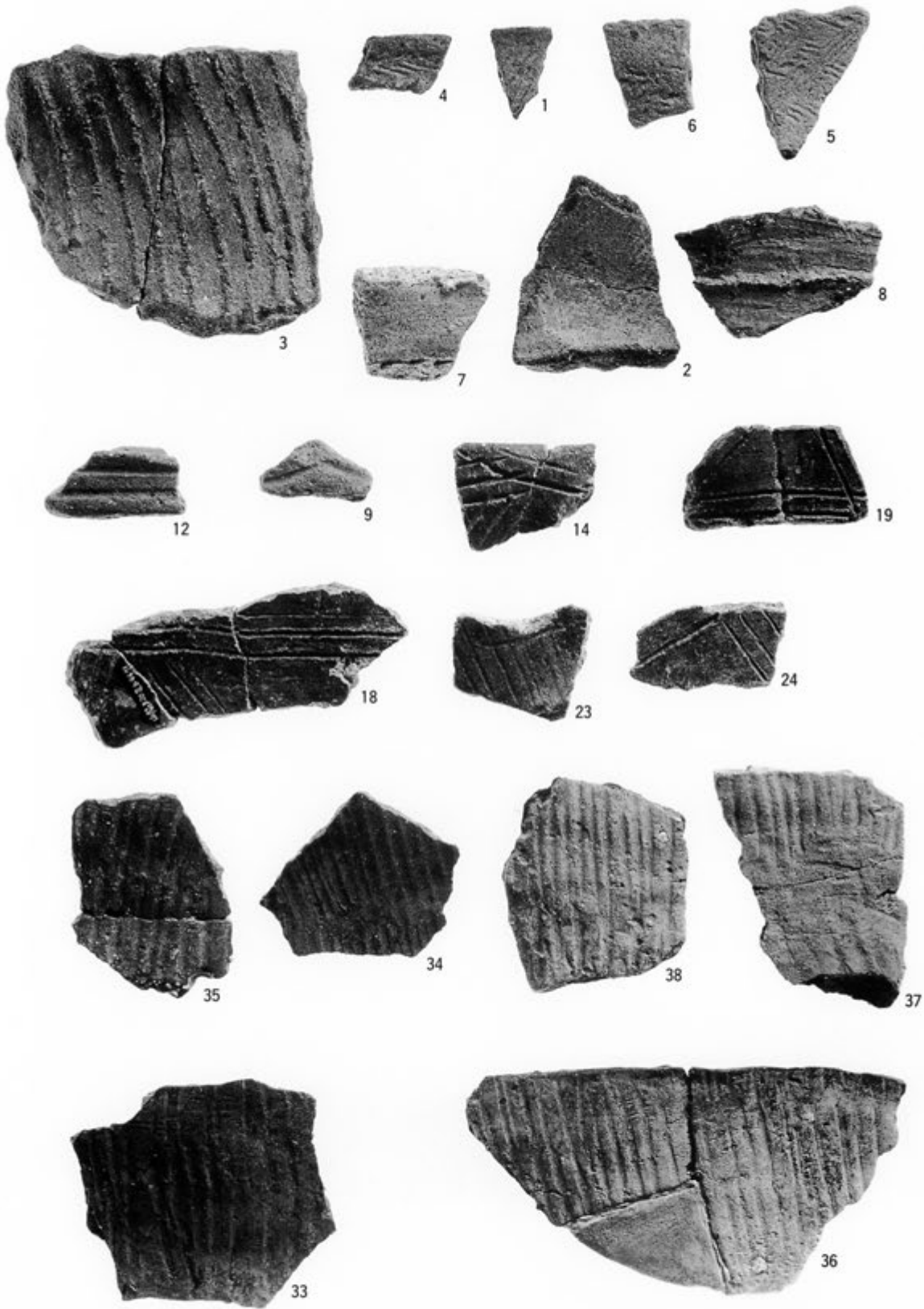
④山ノ脇遺跡検出土坑39完掘状況



⑤山ノ脇遺跡検出土坑39(農具埋納遺構) 完掘状況



山ノ脇遺跡検出土坑39(農具埋納遺構)出土遺物(鋤先)



山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)



外面

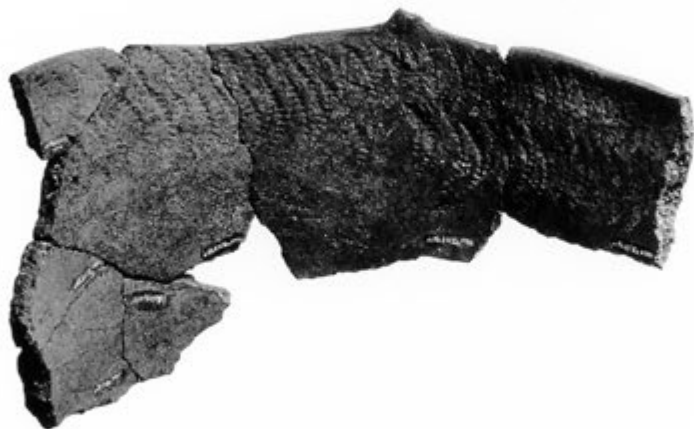


内面

39



外面



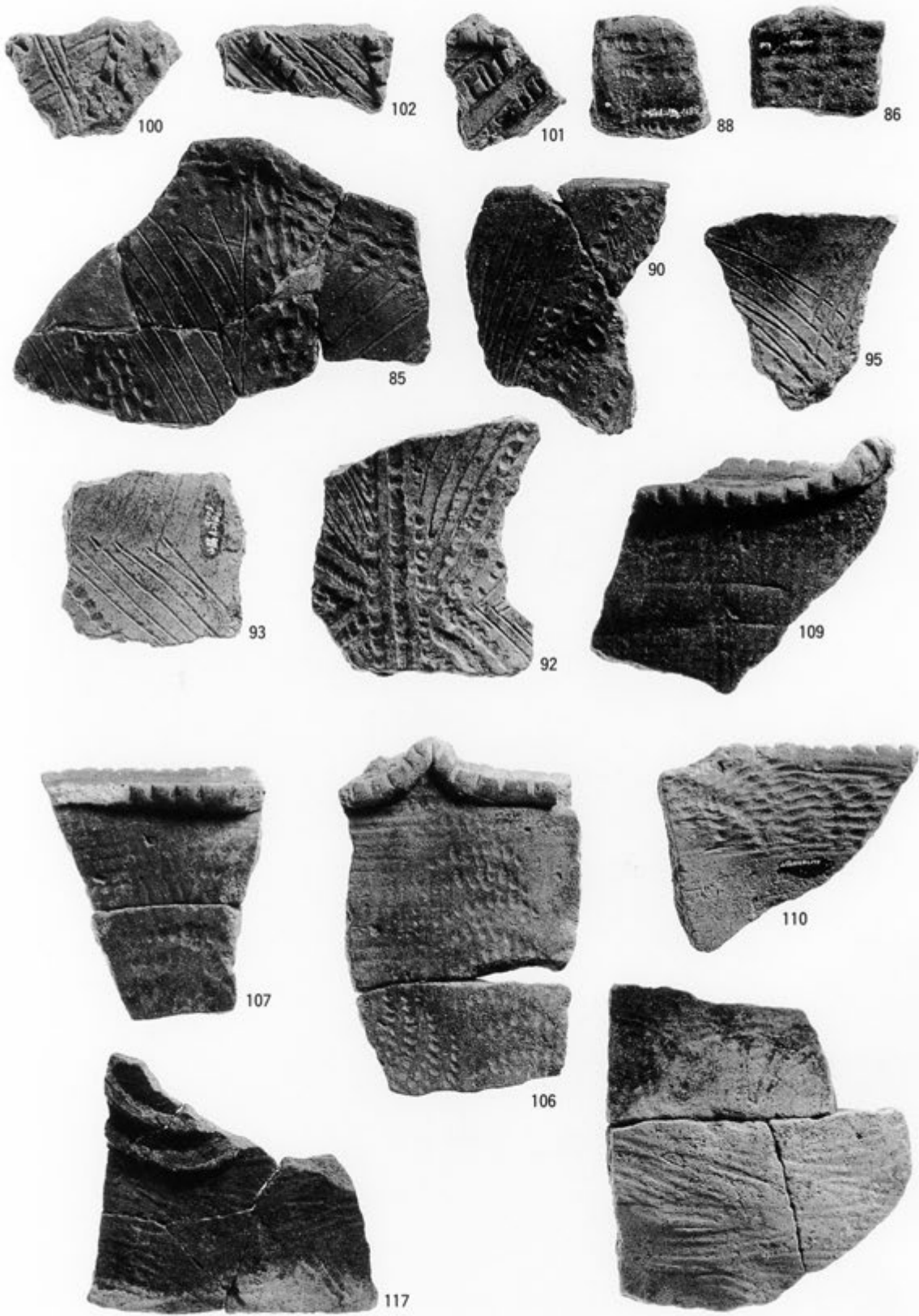
内面

103

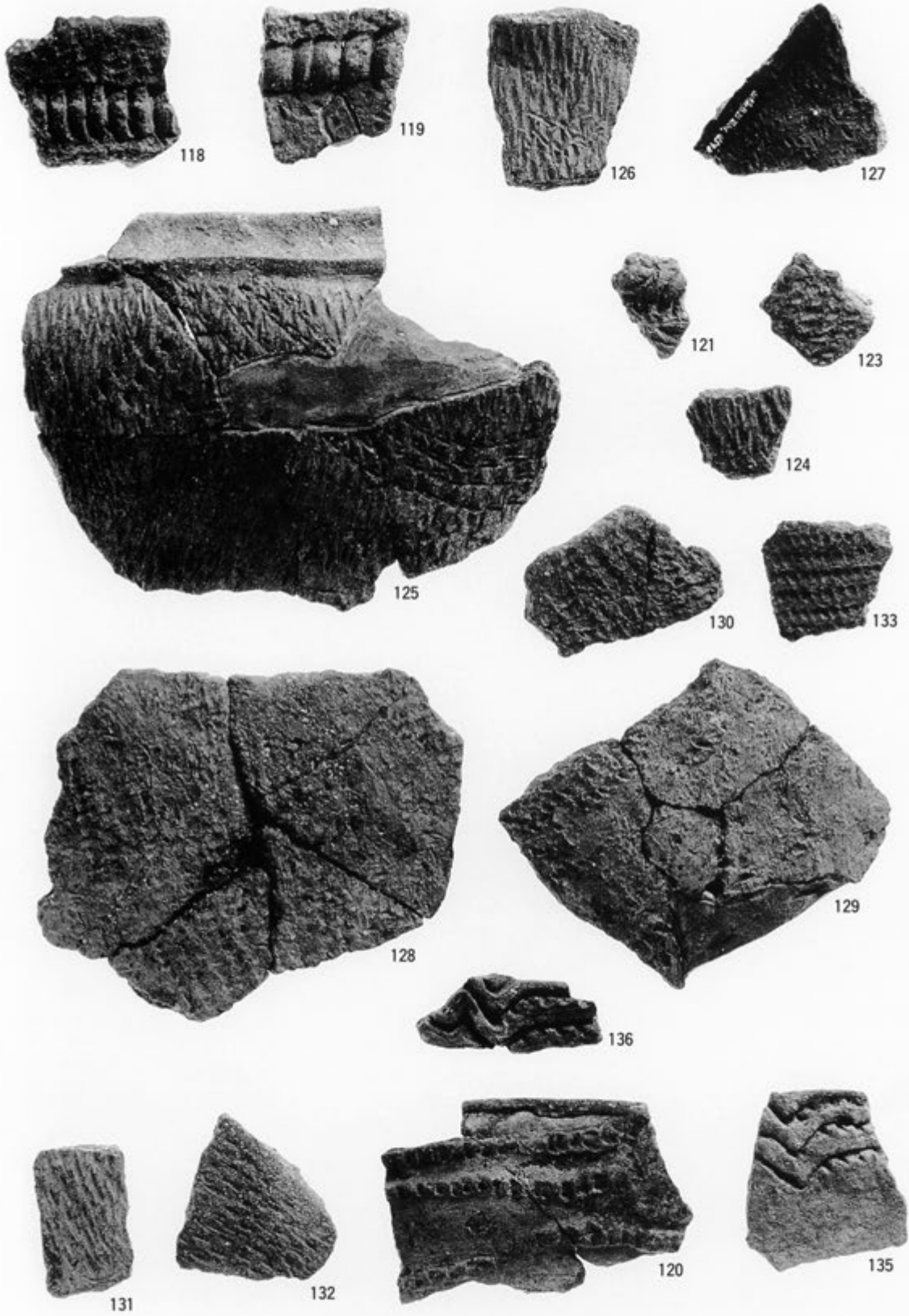
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（土器）



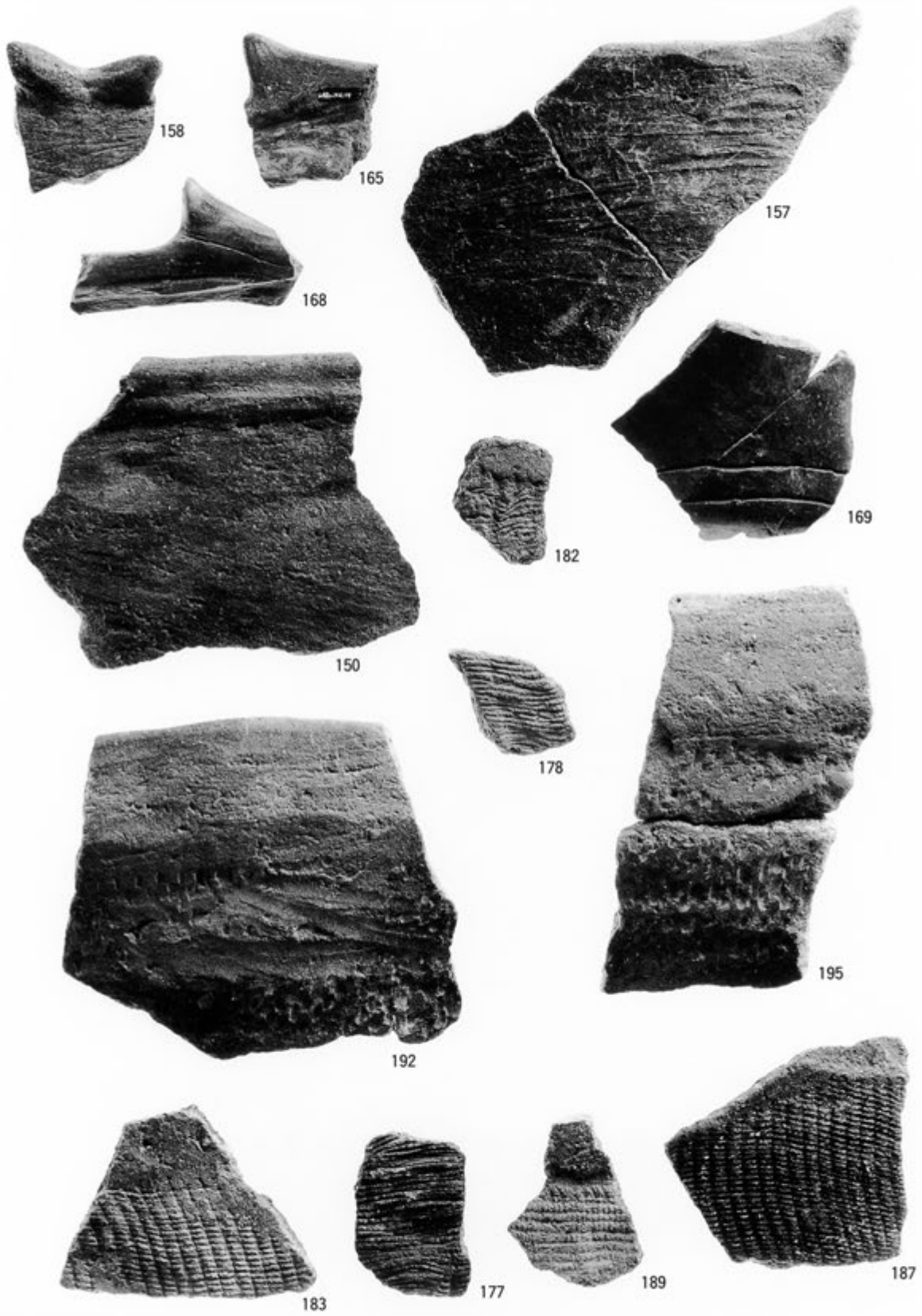
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（土器）



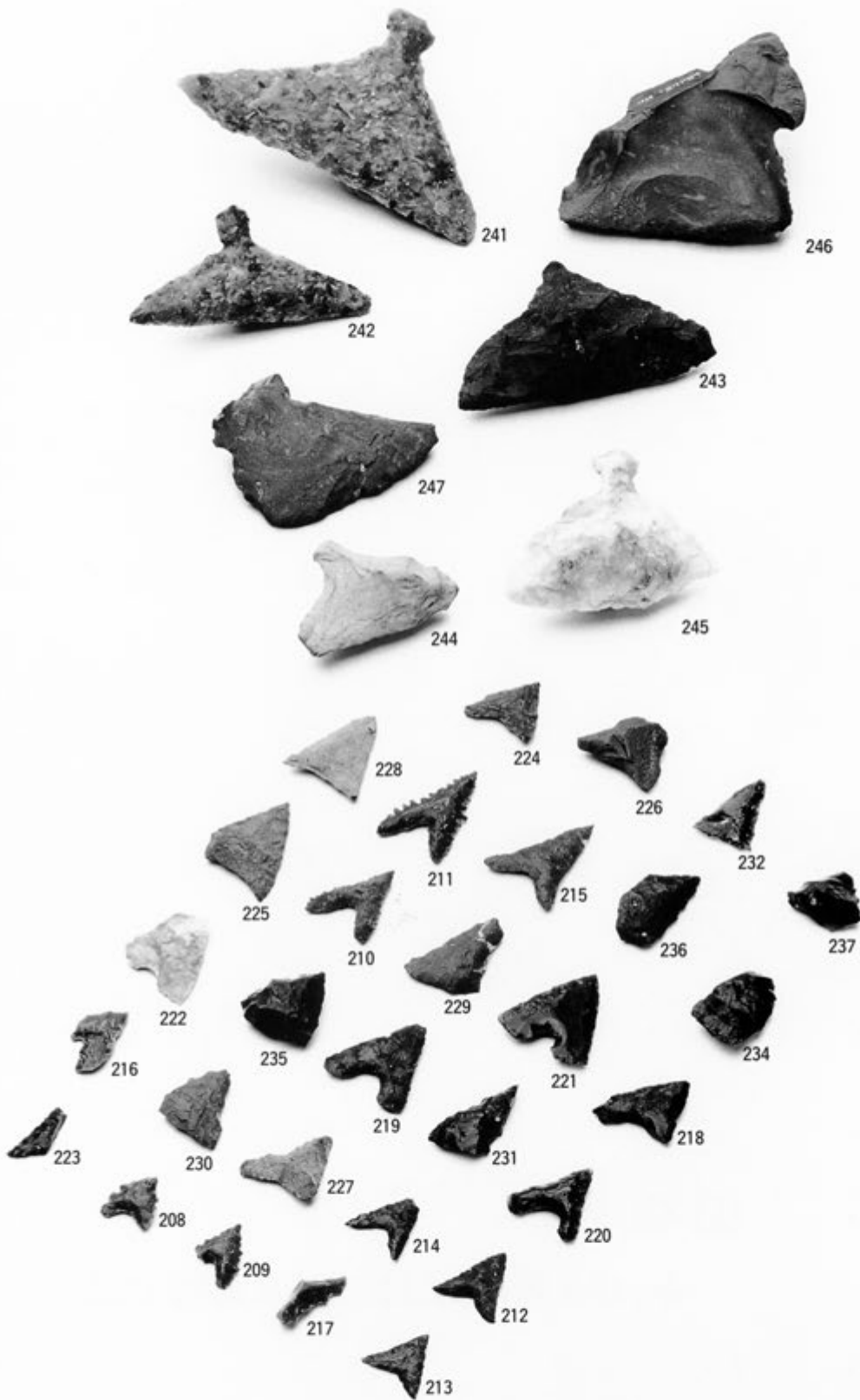
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（土器）



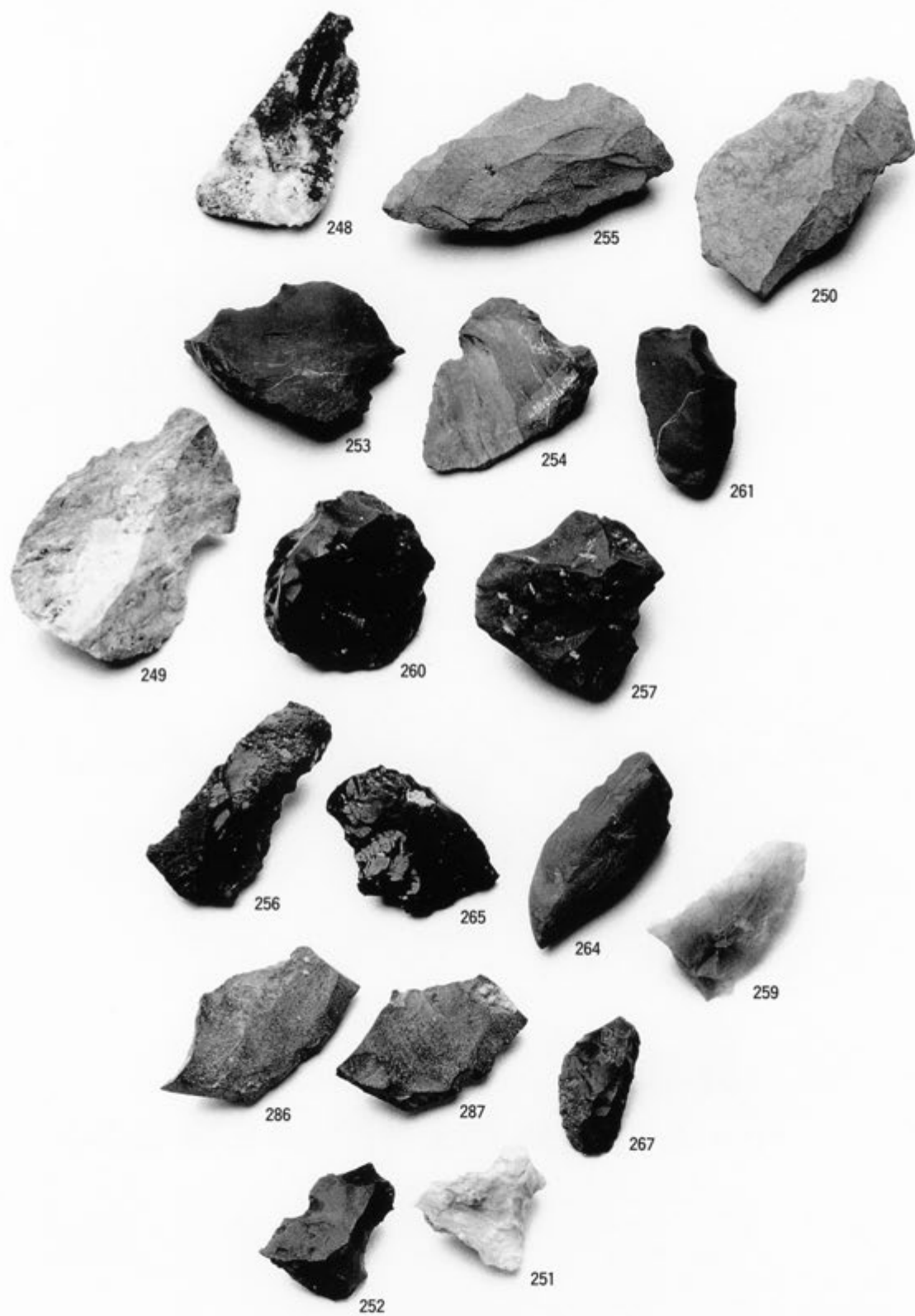
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（土器）



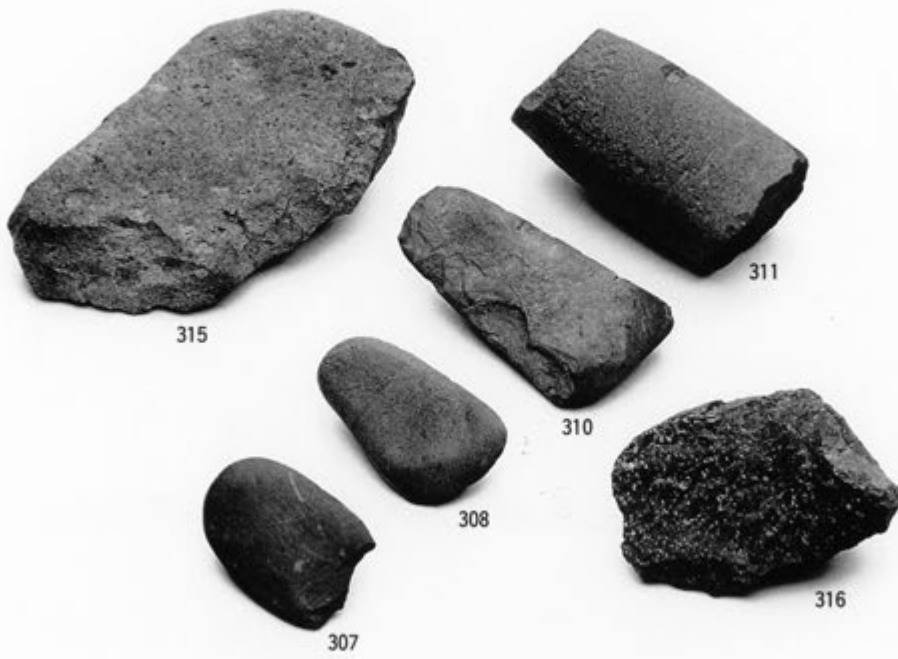
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)



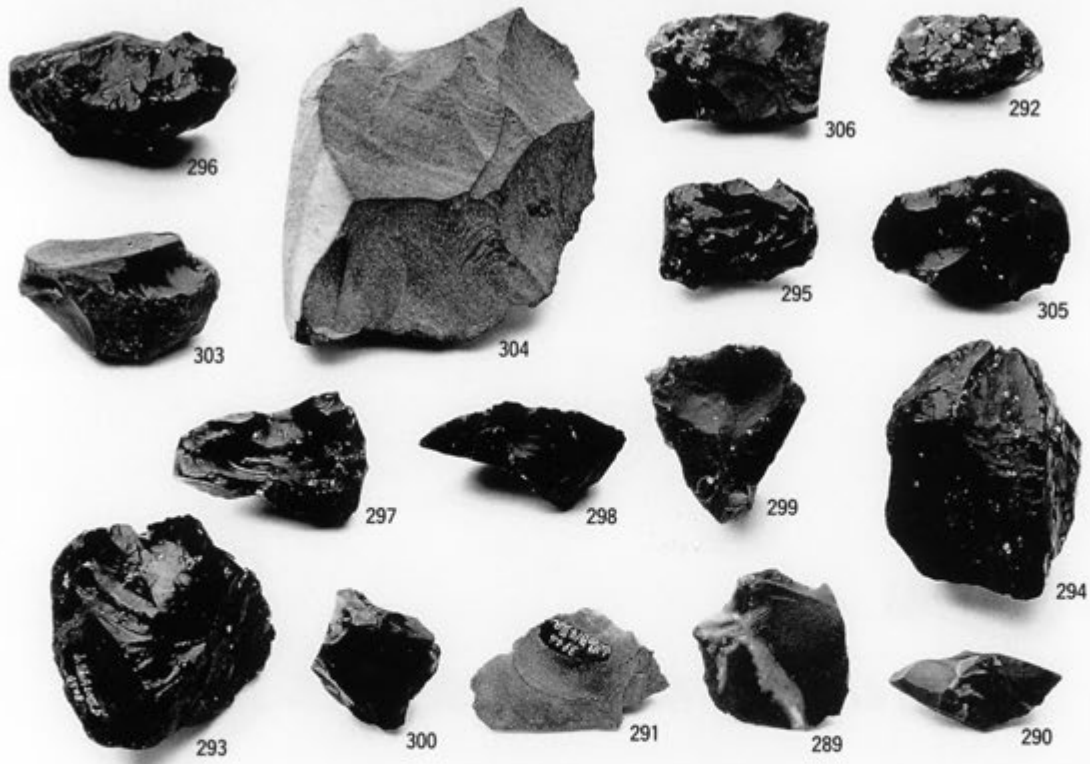
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（石器）



山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



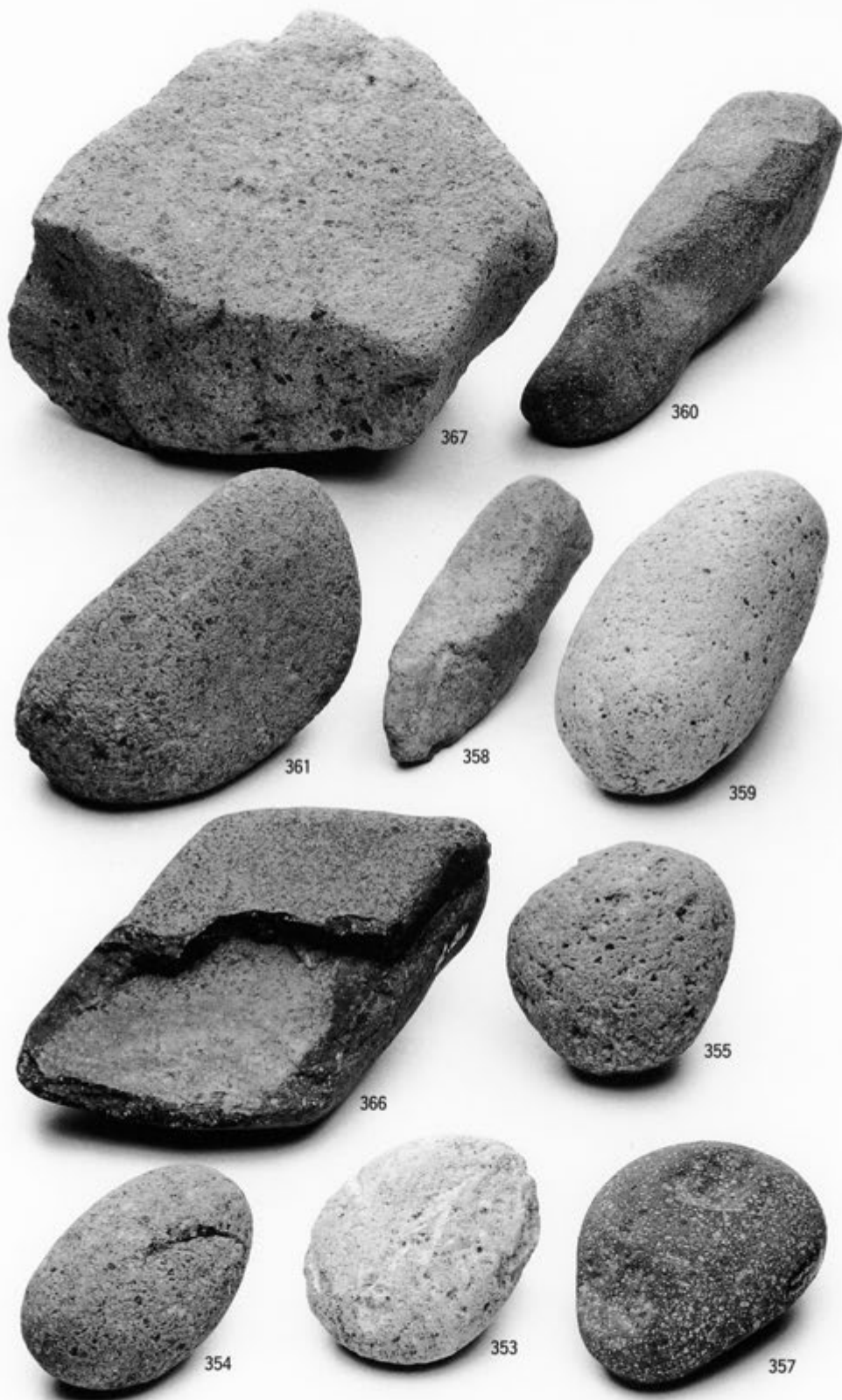
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



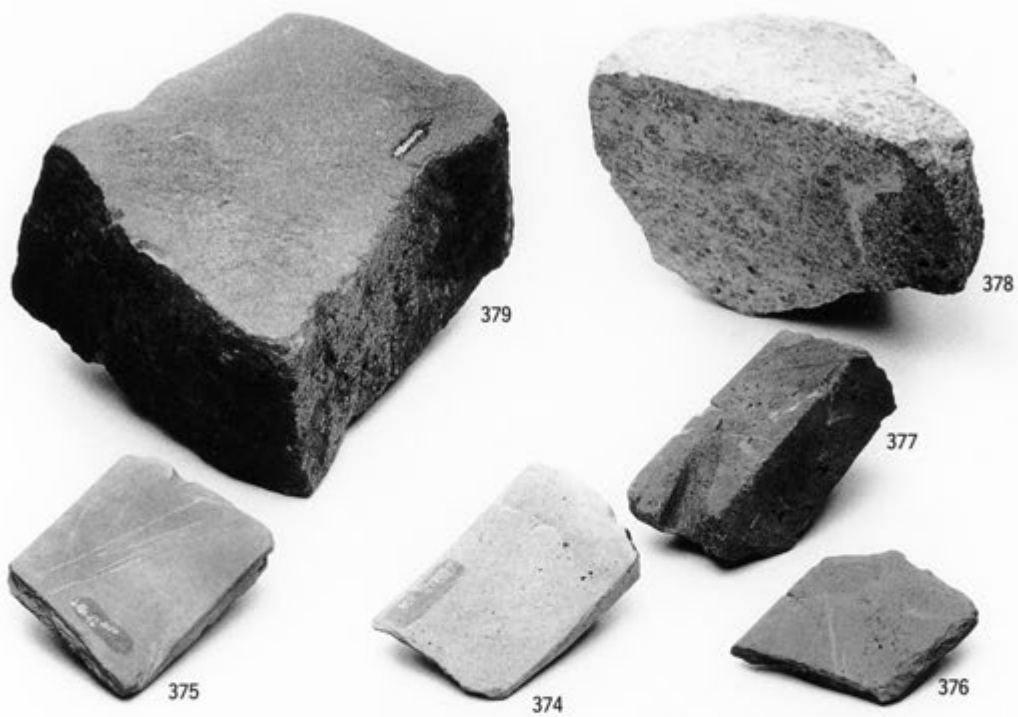
山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（石器）



①山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（石器）



②山ノ脇遺跡 縄文時代 出土遺物（石器）



①山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物 (土師器・杯・小皿)



②山ノ脇遺跡 中世期 出土遺物 (瓦質土器)



①西原遺跡土層断面狀況 (D-31区)



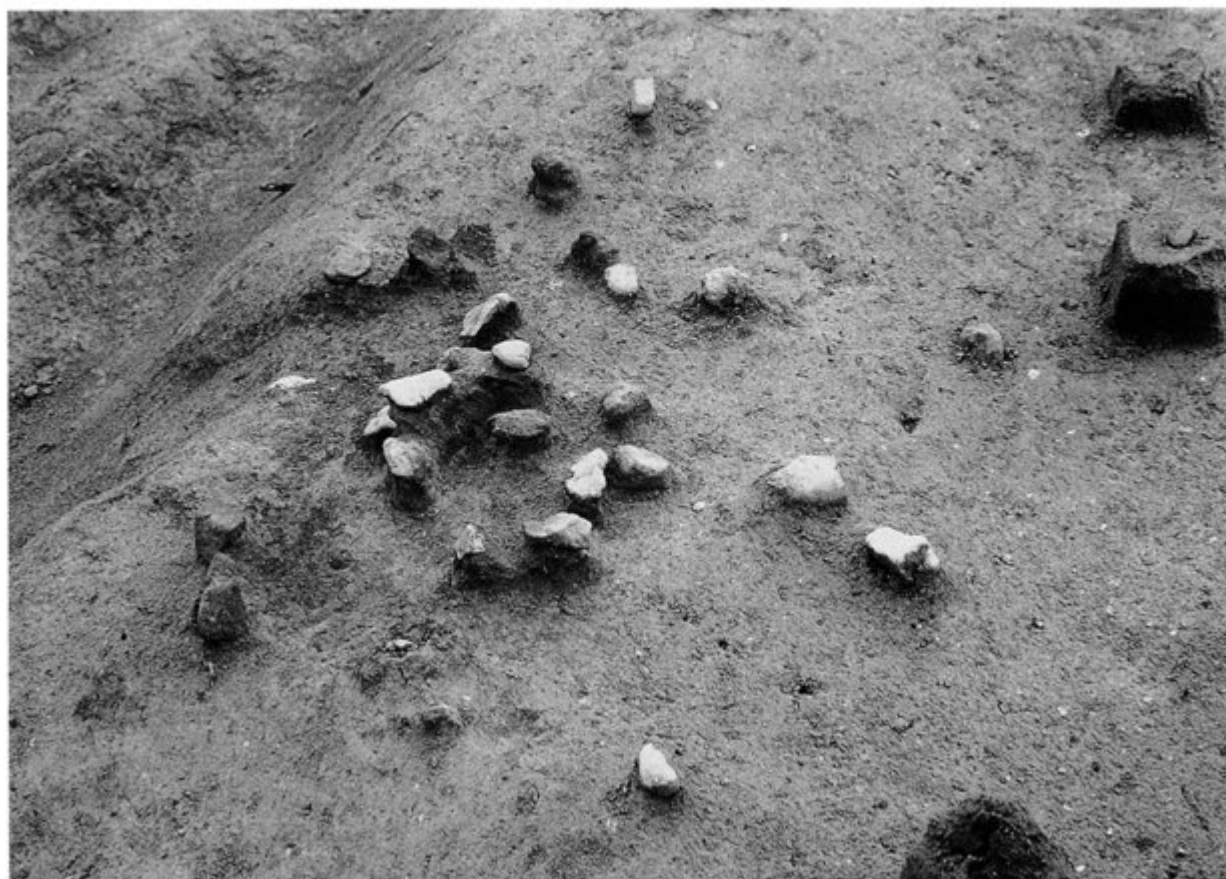
②西原遺跡土層断面狀況 (C·D-36区)



③西原遺跡C·D-26区IV層集石遺構検出狀況



④西原遺跡IV層2号集石検出狀況



①西原遺跡B・C-28・29区Ⅲa層3号集石遺構検出状況



②西原遺跡B・C-26遺物出土状況（磨製石斧）



①西原遺跡C-30区Ⅲb層検出焼土遺構内遺物出土状況



②西原遺跡C-30区Ⅲb層遺構焼土遺検出状況



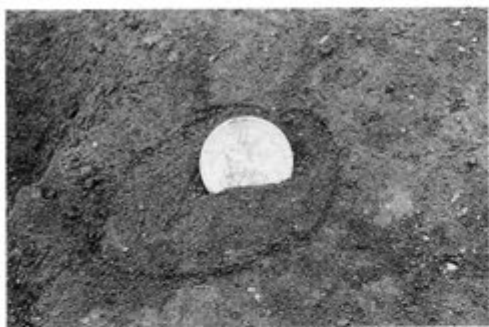
③西原遺跡C-30区Ⅲb層検出焼土遺構内土器出土状況



①西原遺跡検出土坑断面状況



②西原遺跡中世期井戸状遺構検出状況



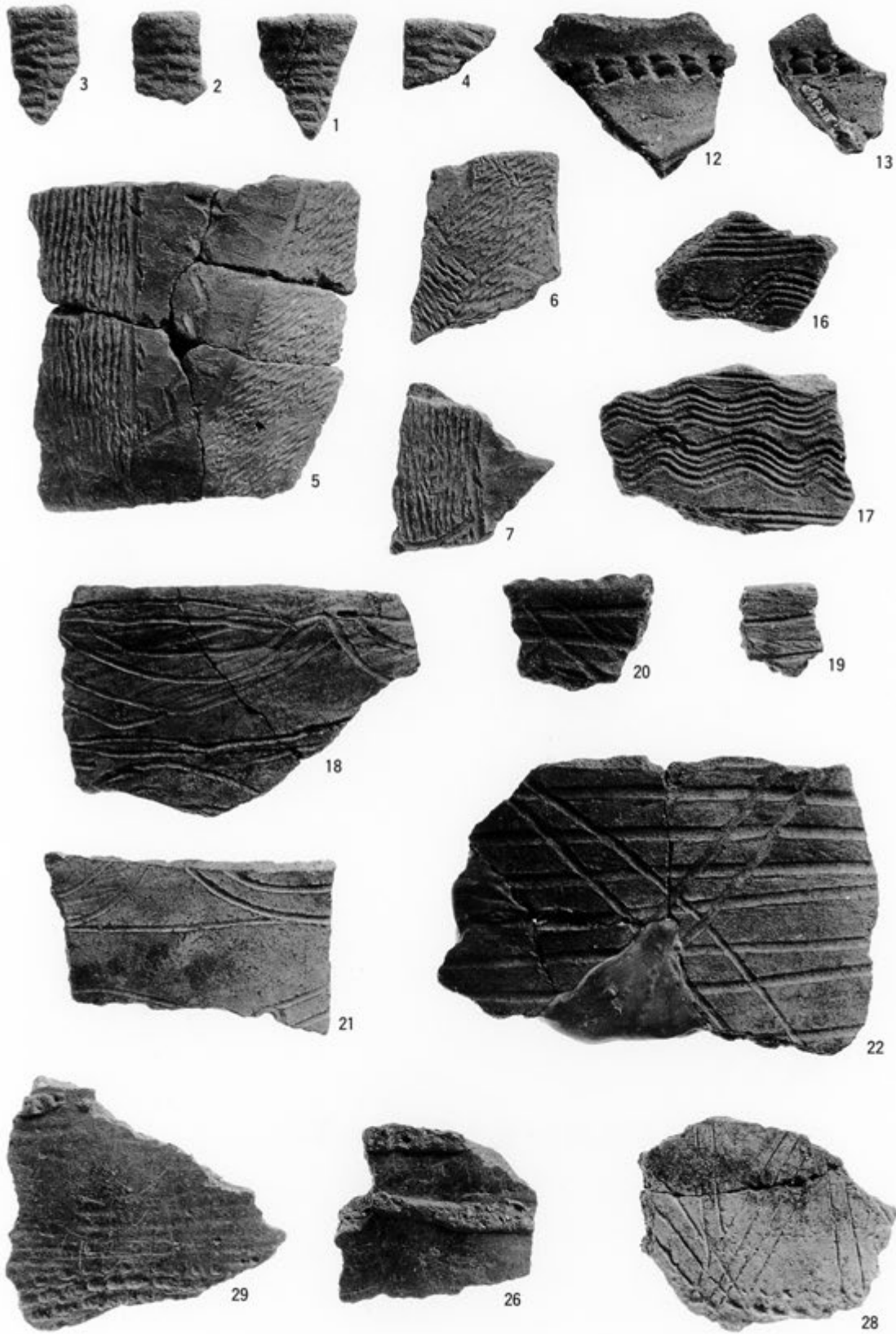
①西原遺跡白磁碗出土土坑検出状況



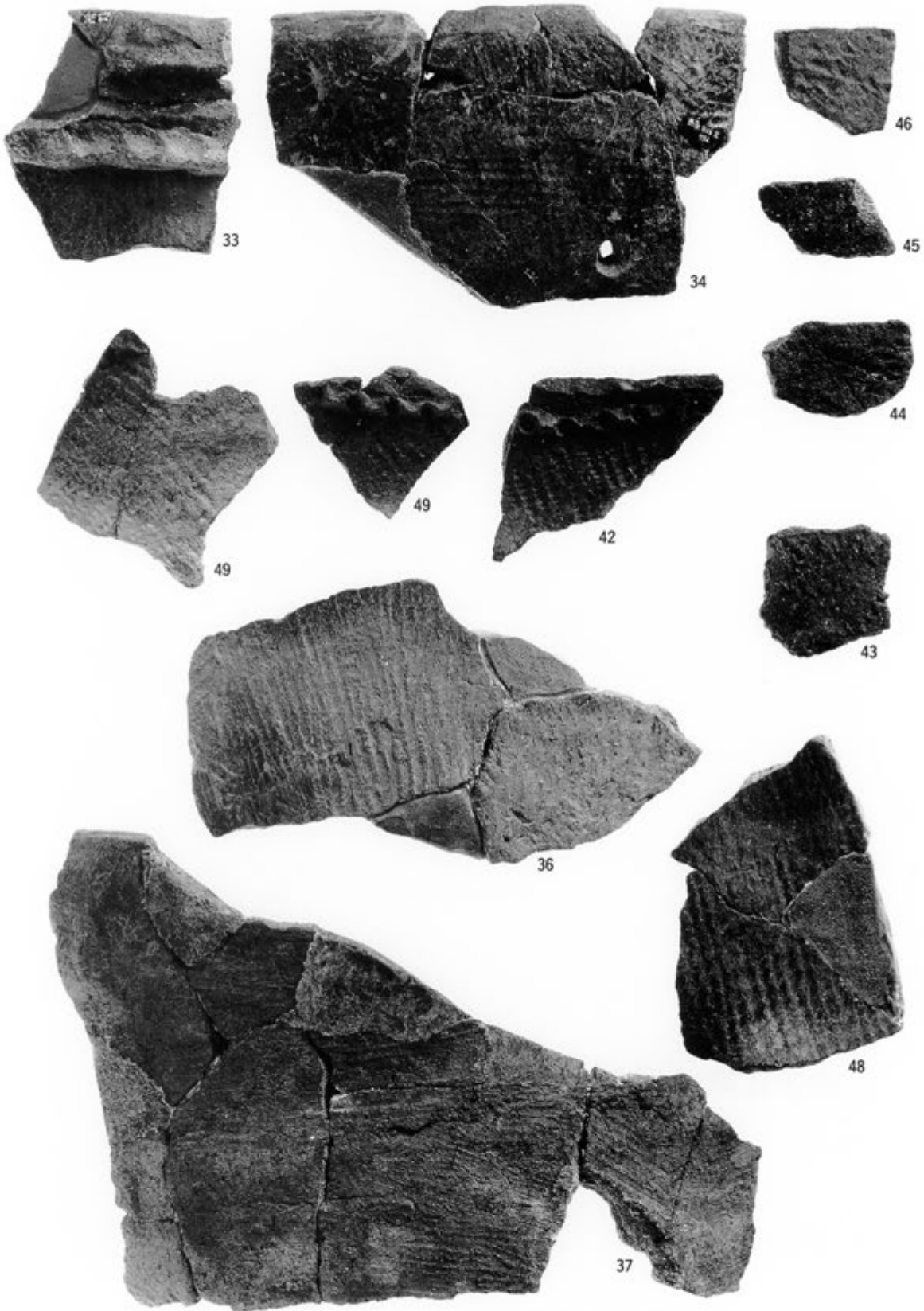
②西原遺跡白磁碗出土土坑断面状況



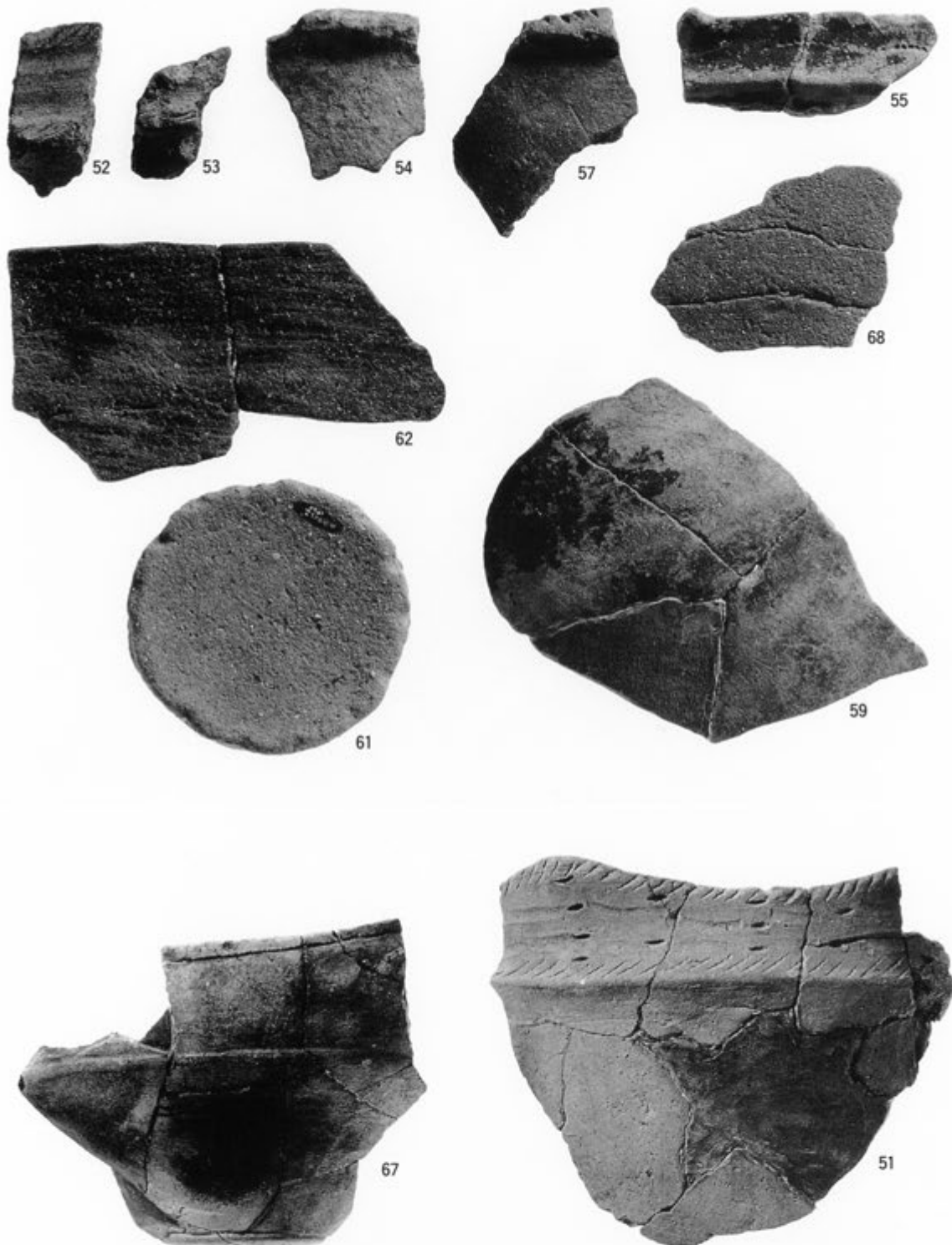
③西原遺跡遺物出土土坑断面状況



西原遺跡 縄文時代 出土遺物（土器）



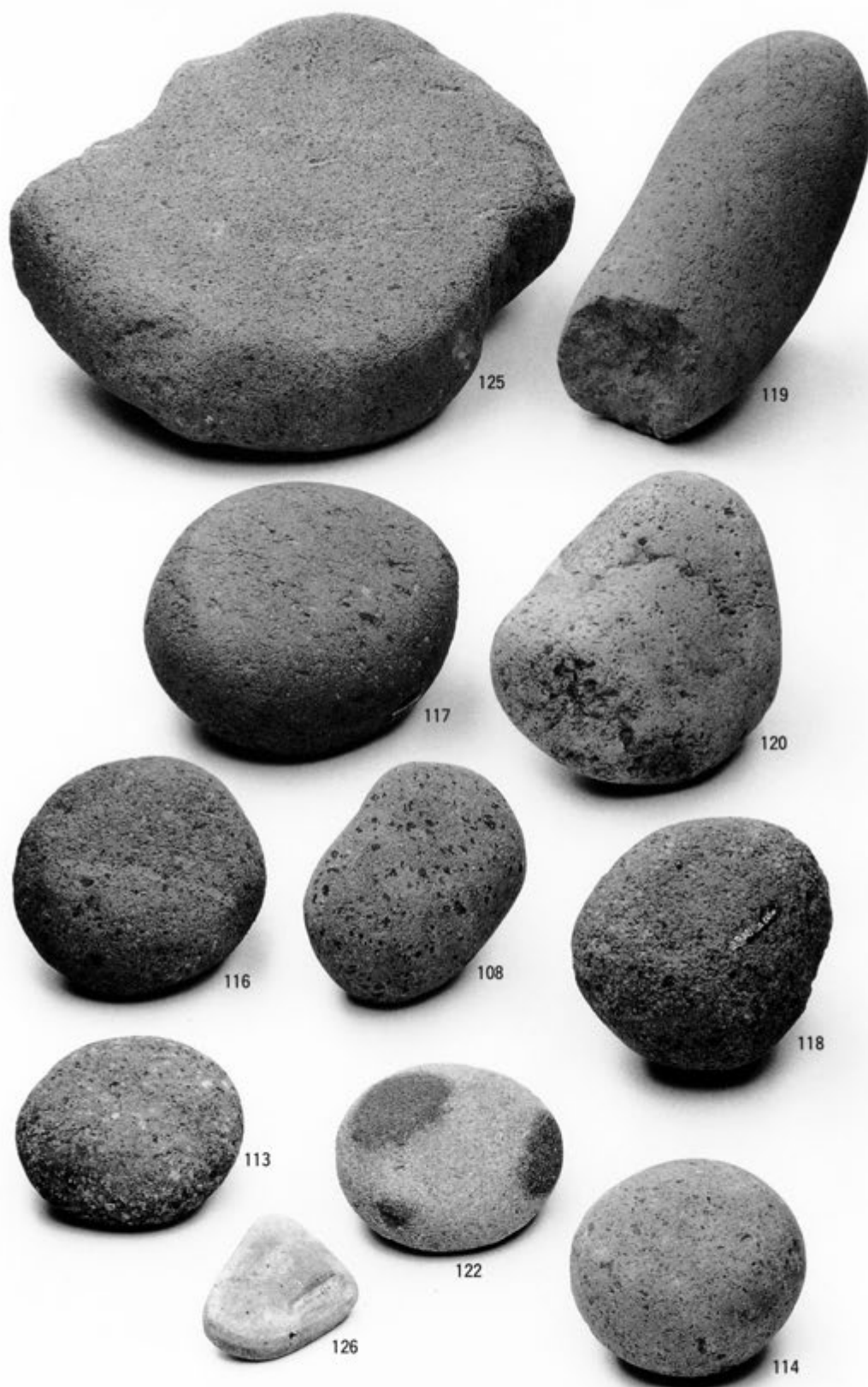
西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (土器)



西原遺跡 縄文時代 出土遺物（土器）



西原遺跡 縄文時代 出土遺物 (石器)



西原遺跡 縄文時代 出土遺物（石器）



①西原遺跡 古代期 出土遺物（土師器・黒色土器・赤色土器）



②西原遺跡 中世期 出土遺物（土師器・坏・小皿・瓦質土器）

あ と が き

どのくらい遺跡の有り様を復元できたでしょうか？今、筆を置くにあたってこの言葉が強く胸を去来する。この遺跡にあっては、自分自身は夏の暑さも、冬の寒さも、現地の息吹に対してほとんど経験を持っていない。頼りは図面と写真だけ。

本来、自分はこのあとがきを書くことが許される立場にいてはいけないのであるが、恐ろしさが先に立つ。どのくらい遺跡の有り様を復元できたでしょうか？

本遺跡群は、キャンプ地の性格が強い期間の長い縄文時代や古墳時代、集落を営む古代期、10棟もの掘立柱建物跡や溝状遺構、土坑や農具が埋納された祭祀遺構など様々な遺構がみつきり、中心地としての様相を示す中世期、と時代に応じて様々な顔をもせた遺跡であることが判明した。

そして、現代。この地は新幹線が開通し、今後どのような変貌を遂げ、新しい顔をもせるようになるのであろうか。

最後になりましたが、現地調査から報告書刊行に至る、各段階で携わった多くの人々の尽力に対して、感謝を申し上げ、今後のご多幸を祈念いたします。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（58）
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡

発行日 平成15年3月24日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1

TEL (0995) 48-5811

印刷所 株式会社朝日印刷

〒890-0055 鹿児島県鹿児島市上荒田町854番地1

TEL (099) 251-2191